
虚な胸中

日淀 四季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚な胸中

【Nコード】

N3394M

【作者名】

日淀 四季

【あらすじ】

感情というのはどういったものだろうか。そういった視点で物語りを作ってみようと思ったのがこの作品です。まあご都合主義に、そりゃねえんじゃね、的な事が多々ありますがご了承ください。持論ですが、欲求とはまた違うものが感情だと思えます。今どんな感情を感じているか、なんて理解できる範囲でしかわかりません。少々無理難題な話題かも知れませんがお付き合いください。

東 ^{アズマ} 東広 ^{トウコウ}は感情が一つ消失している。人間正負に関係なく、感じないと廃れる感情は多々ある。それ以外でも負の感情は感じてしまふと特に不快になる。強く、消えてしまいたくなる願望を持つてしまふ。

だが、感情は理性とはまた違ったストッパーであり、なければ壊れてしまふ。それはリミッターの様なもので東 東広はその壊れた人間の一人である。

選択は二つ。平和で壊れたままにいるか、危険を冒して消失したモノを取り戻すか。取り戻すのなら命を懸けた方がいい。一番の注意点は自らに押し潰されない事だろう。

1st「Prologue」(前書き)

はじめまして、四季です。

今回、この作品が処女作となります。

前々から投稿してみたいとは思ってはいたものの、なかなか踏み出せずにいました。心境の変化と言いますかなんと言っか、やっと決心がついた感じです。

駄文やらなにやら読むのが痛いかもしれませんが、遠慮なく突っ込んでOKです。温かい目、冷たい目どんと来いです。

では出来れば今後ともよろしくお願いします。

1st「Prologue」

自分はどこがおかしいのだろうか
大人は冷めた目、もしくは憐れみを孕んだ目を向けている。

が出ることはなかった。
どんな時でもひとりただ静かに、
なんの感慨も浮かばず澄ました顔
で。

あの日もそうだった。

詳しい日付、時間は分からない。ただ日が落ちて、普通の人は眠りにについている頃だとは分かる。つまり今の、この目の前の事態は普通じゃないということになる。

僕はいつからそこにいただろうか。照明が点いていない部屋でなにもかもが壊れていた。幸せな日常を保つことができずその現実には朽ち果てている。

暗がりに肉塊が二つ並んでいる。よくは見えなかったがその輪郭には見覚えがあった。目が暗闇に慣れてくると、暗闇に浮かぶ凍てつく双眸がこちらに向いているのが分かる。

酷く吐きたくなるぐらいの空間の中で、冷静な自分がいる。どちらかと言えばそっちの方が目の前の現実より驚きを感じた。

「・・・ 死 でも もしな か」

ノイズが走る言葉が鼓膜を揺らす。かろつじて理解できる言葉の欠片を繋ぎ合わせると、これらの肉塊は両親らしい。

いや、だったの方が正確かもしれない。

「 か・・・？ や、ただ疎い ？ ……」

僅かな声の残響。それに続く変則的な息遣い。

いつの間にか双眸は消え、自分の目は焦点を失っていた。

静寂。頭の中も至って静か。

ただひとつの疑問が頭の中を巡り、埋め尽くしている。

「おじさん・・・誰？」

2nd「アズマ トウコウ」(前書き)

こんにちはもしくはこんばんは
四季です。

なにもかもが初めてなので二話目を投稿するのにかなり時間がかかりました。

前日から徹夜してようやくここにたどり着きました。
では本文の方をよろしくお願いします。

八月の半ば。世間一般で言う夏休みが最中からか、午前中だというのに子供の比率が高い。

炎天下の中笑顔でサッカーをし、汗を流すもの。
あまりの暑さにダウンしているもの。

自分の親に何かをせがんでいるもの。
十人十色がひしめき合う公園を一通り見たあと理由も無く歩きだした。

地味な薄手のシャツには汗が筆を走らせ派手な模様をつけている。
柄は今風だが、余計なお世話。ベタベタしていて嫌気がする。

生睡を飲み込み喉を癒す、なんて事はできない。足を止めれば音が耳につく。ジリジリと熱さが音に変化し耳をも襲う。遠くを仰げば逃げ水が視界にモザイクをかける。皮膚、耳、目の感覚器官が麻痺してくる錯覚。

頭を振り放心した心を手繰り寄せ、手元へと戻した。とりあえずこのままだと本当に放心してしまうので、コンビニへ足をのびし始めた。

「ふうー、涼しいー」

コンビニ内部はクーラーで程よく涼しい。外気との温度差もかなりあるのと、先程までの感覚器官の麻痺により体感温度はかなりのものだ。

触れれば軽く痛覚刺激するほど冷えているコーラを手にしてレジに向かった。

会計が終わっても店内の冷涼さが足を引き止めている。暇つぶしにマンガでも立ち読みしようか、と思索した。

しかし目的の場所には見覚えのある麦藁帽子に焦点が注がれた。後ろ向きでいる人物はそれ程ではないが、苦手な部類には入る。

早めに立ち去るかな

暇つぶしを諦め、再び温度差が感覚器官を襲う。今度は逆に熱さが更に強く感じる。

コーラを一口含み、せめてもの気休め。それでも大分熱さへの対策にはなる。

早々と逃げるようにして麦藁帽子の少女から立ち去った。

「アズマ」

少しどころではないがどうやら全体的に遅かったらしい。寧ろコンビニに来たこと事態間違いみたいだ。ともかくませガキに捕まった。

「何用かな………江湮？」

「?………用がなかったら呼び止めちゃいけないの？」

ませガキと言えるだろう今年で10歳の少女。名前は水谷 江湮。歳も歳だし性格も性格なので大分難しい。

相手にしたくはないが、相手にしたいと思う微妙な矛盾と葛藤。妹みたいな存在だから、と思う複雑な心境だと自分に言い聞かせている。

「ねえねえ、アズマ」

「……………何だよ？」

なんか調子狂う。周りから陰口叩かれるし、妙な噂が立つ。ホン
ト複雑。

「デートしない？」

「……………誰と？」

「私と」

「……………」

一時の沈黙。この一瞬の間に馬鹿か？と何回思ったか。で、無言
の否定。口は開かずに立ち去った。

「ちよつとー！！」

何やら喧しい声が響いている。これじゃまるで俺が何かしたみた
いじゃないか。それも少しの間だけで、すぐにジリジリとした熱い
音だけになった。ほんの好奇心で振り返ると、タンクトップ姿のチ
ヤラそうな男三人が江湮の周りを囲むようにしている。

ナンパ？まさかのナンパ？

見る限り江湮は明らかに誘いを拒否っている。そんな中バチリと
視線が交差する。恐怖と助けを懇願する目。

逡巡する脳内。厄介事から逃げる自分、江湮に手を伸ばそうとし
ている自分。俺がやることは

「 ああ……………くそ！」

結局江湮と離れられない。どうにかして欲しいぜトラブルメーカー

！。

「ちょーっとすみませんね。うちの江湮に何か用ですか？」

第三者の介入は予想通りのリアクション。男どもは馬鹿を見るよ
うな目。江湮の思惑通りの行動を買ったが……。なんだその
来ることを信じてる目は。裏切られるなんて微塵も思ってたねえ。

「……………誰よあんた？」

印象は極めて悪い。話の腰を折られたわけだし。

「このませガキの兄的存在。まあ身内らしきものですかね」

あくまで他人行儀。少しでも穏便に済ませようとする為の布石。
一応の確認として江湮にこいつらは知り合いかどうか尋ねてみた。

返事はいいえ。

一人なら俺達と一緒に遊ばないか、と話しかけられたらしい。
予想通りでため息が出てくる。まあしかとできなかった俺も俺だ
けど。

「んで、江湮になんか用すか？」

急激に萎えた為、ふざけ口調の敬語を放つ。

「別にねえ、君が彼女を置いて行っちゃうから、その心の傷を塞い
であげようとしてるんですよ」

真似かどうかは知らないがむこうもかなりふざけた口調だ。そんな口調に男達がげらげらと笑い出す。

「いや、彼女じゃないし、まったく。思い違うな。しかもおいてっ
たわけでもない」

「?.....んじゃさあ、どゆこと?」

「どうあっても俺はこいつから離れらんないし、こいつも離れよう
とはしないからおいてったことにはなんないの。おわかり?」

若干の沈黙。それと若干の羞恥。我ながら変な台詞口にしたもんだ。どうせあのあの事は予想できる。

炎天下の中で、地獄の鬼ごっこが始まるだろうな。そう考えると、少しはナンパ野郎共に感謝。それに免じて見逃そう。

「ほいじゃま、行くか」

「ちよっと待てよ」

江湮の手をとろうとしたところで男達から声がかかった。

普通、はいこれでおしまい、的な雰囲気じゃなかった今?

「.....何でしょう?」

「いやねえ、せつかくの暇つぶしを邪魔されたわけだからね、暇つぶしにその娘くれなない?」

ロリコンかこいつら?

「.....穩便に済ますことは?」

「そーだねえ、これ次第かな」

左手で親指と中指をくっつけて見せる。

この場を丸く治めるものが金。多分今の所持金じゃ丸く治められないな。どう返答しても金は出さなきゃいけない展開になりそうだ。

「ふうー」

心の中だけでため息をつきつつ、江湮を小脇に抱えた。

江湮は驚きも、声すら漏らす事はない。横目で見ると、表情は心なしに楽しそう。楽しんでこの状況を作ってなかるうか。

「で、お金はくれるの？」

「………NO」

「じゃ、その娘くれや！」

どんな人もこの熱さでストレスが溜まっているらしい。気温が高いのに比例して沸点も近くなっているみたいだ。

しかも白鳥堂々の喧嘩。言い訳できないぜ兄さん達。

「うらっ！」

敵意からでも恐怖からでもない、ただ暇つぶしのためだけの暴力。三人とも似通ったモノで負けるなんて微塵も思っていないらしい。

「………」

流石に人目は避けたいので、まずは……ダッシュ！

「………て………こら、逃げてんじゃねえ!!」

いや、逃げてないし、逃げ切れるとも思っていない。寧ろ感謝して欲しい。高校生か大学生か知らないけど、人目についたらやばいだろうが。

そんなことを心中で叫んでも相手に分かる筈もなく、ぼろくそ言われながら近くの空き地へ移動。

軽い息切れ。少女とは言え人ひとり担いで走るのはかなり重労働だった。それでも追いつかれていないから健闘した方だろう。

手を伸ばせば、届くぐらいの高い壁に囲まれた空き地。上るとしたら厳しい。そこに入ってくる三人組の男達。見る限りかなり息切れしている。

んー……今攻撃したら楽勝かな？

そんなことを考えたりするが、なんか卑怯だ。江湮のが移ったかな。暴力に楽しむ事はないけど、この状況には齒が浮く。

「ふうー、ふうー……追いかけてこは……おし……まい……だぜ……兄ちゃん」

しかもこんなんで攻撃するのが正直気の毒に思えてきた。

とりあえず江湮を壁の上に待機させもしもの時、いつでも逃げられるようにする。

僅かな時間もあるし、買ったコーラを口に運ぶ。そうしようとしたが、移動した為シイクされていてパンパン。開けるのが憚れる。

「……おう……そのコーラ……くれないか？」

「……別にいいけど、開けても俺の所為にすんなよ」

手にしていたコーラを放る。今だ冷たさは保ってはいるので飲めればいだろう。飲めればね。

キャップを開けた瞬間コーラが男にかかる。

予想していた通りになったが、コーラが周りの二人にも被害が出るとは思わなかった。よく破裂しなかったものだ。

「てめえ……ぶっ殺す！」

責任転嫁も甚だしい怒りを暴力に転換。この場合だと確信犯の俺が悪いのだろうか。しかし、忠告したし。

上半身砂糖でべたべたになりながらこっちに向かってくる。元から数でこちらが劣勢。かと言って逃げるのも無理。

相手のパンチやらキックを防ぎながら思索する。不器用な為に、受け流すってのはできない。

負けるのは絶対ごめん。その後のことを考えると江湮にまで危害が及ぶ。

なら、しょうがないな

大きく後ろに跳び、壁を背にする。チャンスと言わんばかりに顔に笑みを浮かべ、動作が大振りになる。

チャンスはこちらも同じ。これほど狙いやすいカウンターはない。

意識を深く深く沈め、小さく小さく呟く。常人にはできない欠落した証。

「 dream out (想造 顕現) 」

そう口にした瞬間視界が変化する。スローになり限界以上の速度で世界が回る。

ピンチはチャンス。慢心している男達の目の前から消えたアズマは、背後から加減なしで頭を殴り、強引に意識を沈める。

勝利を信じて放った拳は、捌け口にしようとしていた者を捉えることなかった。代わりに何もかも不明なまま意識が分断した。

3rd「二人の親友と一人の客」（前書き）

どうもです。

今スケジュール押しして執筆しています。実は今大会中で私、家とは別の場所です。

いやーしかし環境が変わると頭もうまく回りません。駄文ばかりです。

それでもない頭振り絞ったのでどうぞ本文を。

3rd 「二人の親友と一人の客」

辺りはまだ明るい。時刻にして五時を廻る頃。日は沈むまでにまだ時間があり、しかしまだ気休めぐらいにしか気温は下がっていない。夜でも暑いのが夏。仕方ないと、言われてもそれで納得できる筈もない。

アズマの意味のない散歩は今だ続いている。改めて、財布の中を減らし、涼を得る。何でかは知らないが二人分。

そうして午前中を跨いで今までさして変わりはなく、下手な散歩好きなお年寄りより歩いている。別に自分の意志だから不満はない。

不満があるのは

「アズマ、右行って、右」

背中に荷物についてだ。

「ねえアズマー、少しは年下の我が儘は聞いてよー！」

自分で言うては訳無い気がする。だいたい年下って自覚してるなら、もうちょい年上に憤みを持って欲しい。

しかし、江湮もまた午前中を跨いで歩き通したが、流石に少女の足には酷なものだった。疲労が溜まり今はアズマの背中の上である。

そうゆう訳だから聞いてやらないこともないが……

「公園行こうよアズマ。ねえーえー」

喧しい。いまずぐ落としたい。疲れたんなら寝てろ。そうすりやすぐベッドの上だ。

「んふふふ」

「……なんだよ？」

「いやー、別にいい」

なんだよその笑い。何か寒くなるような笑いだしはっきり言ってる。うんホラー映画より怖い。

「はあー……もうちょいしたら帰るからな」

「ええー、もう帰るの？」

「別に今すぐ帰ってもいいぞ？」

「ぶうー……意地悪」

江湮の小言は無視して我が儘だけは聞き入れた。江湮が指定した公園へと足を入れる。

午前中にいた公園よりも一回り小さく遊具なんて物はない。あるのは水溜まりぐらい。侵入禁止だがこの時季には蛭がよく集まってくる。

蛭ついでにカップルもよく集まるデートスポットらしい。そんな

情報をアズマは持っている筈もなく、時季的には調度だが、時間的には早く、蛍の影も見えずに幕が閉じた。

うなだれ肩を落としている江湮の横でアズマは視線を一つに定めている。

十数分、数十分経たなければ分からない程に僅かずつ傾いていく日。移動中でも、公園にいても意識を向けている。

何故かは江湮にはわからない。が、聞けばアズマは困惑した顔になる。そんな顔で話されるのは嫌いだから、心の奥でいつか話されるのを期待しながら待っている。

「さてと、帰るか、江湮」

日が地平線に沈む前、一時間程余裕を持ち帰宅の呼びかけをする。江湮を再び背中に乗せ街を歩き抜ける。

一秒毎に家から伸びる影は周囲を包んでゆく。若干歩く速度が速まる。その事に江湮がまた不安に似た感じがのしかかる。ならばいつそ

「ねえアズマ、走って」

走った方がいいかもしれない、と考えていたのだが。

「………何故？疲れるだろ」

「えーっと、なんか急いでそうだし、なら走った方がいいかなって思ってる」

たどたどしくそれらしい理由を並べていく。

アズマ的には走った方がよく楽だが、突発的に走れば江湮に言い訳するのも面倒だし不安も感じさせる。というのも遅い。もう不安は感じていたか。

江湮から許可が出たのは正直意外。配慮だと気付いたのは後の話だが、今はこの申し出にのることにした。

江湮をおぶりながら一度屈伸する。ガクリと背中が揺れ次の瞬間風圧と共に風景が流れていく。

「きゃ・・・あああああああ！！！！」

鼓膜を震わす悲鳴。十人が十人拉致か誘拐かと思わせる程。もう噂になる前に指名手配されそうな勢いがあり心配だ。

しかしそんな心配もありそうにない。

「ハハハハツ・・・！！・・・ハハハハツ！」

悲鳴は歓楽の声へと変わり白い歯がこぼれる。純粹な感情がそのまま出ている。

「ハハハハツ・・・！もっと、もっと！！！！」

江湮が喜んでいるのをいいことに調子に乗り、流れる風景が更に速度を増す。

何かへの道も明らかに加速している。少し走るだけで重労働なのに、もう800メートルは超えている。

「……………あー……………到……………着」
結果として半分死にました。

「……………じゃあ……………な……………江湮……………ま……………たな？」
「……………うん」

江湮の家に到着しさよならをする。ふらふらしながら去っていく
アズマを見送りながら思索する。

「……………よし！……………ただいま、母さんあのね」

何か思い付いたようだ。子供の悪戯は実に微笑ましく白けさせる。

備考だがその後アズマは家にたどり着いたはいいが脱水症状と極
度の疲労、それに軽い熱中症により玄関で暗転した。

暗く、昏く、深紅^{あか}くて、苦しい。

並ぶ二つの肉塊、のたうちまわり弾ける意識。何度も吹き飛び、
意識があるのかないのか、生きてるのか死んでるのか、判らない。

佇むカゲはただ

「泣いてる？」

場景は急速に形を変え、荒波に巻き込まれるように夢は四散した。一瞬で海底に運ばれ、瞬きする間に外へ弾き出される。

「……………うつ……………」

飛び散り、四散した夢のあとには、収束し明確になっていく意識。いつさっきのが夢だと気付いたかは知らない。

纏わり付くイメージや心境からして、夢だと割り切らなければ精神がダウンしてしまう。

覚醒しきれていない体を筋肉痛に悩まされながら無理矢理起こす。

波紋がついていた視界は徐々に明度に慣れていく。一秒毎に、光は安堵を心を満たし、恐怖の余波による汗を流す。

自分の部屋。小さな机と敷かれた布団。友達は「色気がない」と評する程殺風景だ。

時刻は7時と半分過ぎたところ。普段なら適度に空腹感を誘う時間帯。午後は動いたから適度ではない。

欠伸を一つしてからろのろとその場を後にした。階段を降りながら晩飯のレシピを思索していると、リビングの明かりは点いていて、人の気配がする。

頭の中に三人程思い当たる人物が浮かび上がる。まず江湮は除外。俺は玄関で倒れた訳だし筋力的に俺のことは運べない。

もし運べたとしても二階までは流石に無理。そうすると残り二人

のどちらかだろう。

溜息が出てくる。訪ねてくるのが嬉しいのか嬉しくないのか分からないが、まあ複雑な友達心としておく。難しく考えるのは止めて侵入者に会うことにした。

「はっはー、起きましたか癡頭ん」

「・・・カズキか」

日高ヒダカ 一季カズキは何故か俺の癖つ毛のある頭を癡頭と命名した変なやつ。こんなくせつ毛なやつなんてあと100万人はいるだろう。

「一季かってヒロもいるよん」

どうやら侵入者じゃなくて侵入者達みたいだ。

「お礼言ったほうがいいよー。介抱したのヒロだから」

「・・・わかった。で、ヒロは？」

「こつちよ」

後ろから声がかかる。蒼みを軽く帯びた長い髪が印象的な幼なじみの炬カガリ 緋色ヒイロ。

「・・・アズマ、またdream out使った？」

「不可抗力だ」

「・・・江湊ちゃん絡みでしょ」

鋭いな。端的に言えばそうなるけど、少女を暴漢三人から救わない程、人間できてないので。

「フーフー、ロリコーン!!」

「うっせえー一季!」

喧しい。このからかい魔人め。変人もつけるぞ。

「ふー・・・で緋色は何してんだ?」

「ん?料理よ」

まあ見れば分かるわな。俺のエプロン着てるし。

「ろくなもん無かっただろ。最近買い物行ってなかったし」

「まあね。そんなことだろうと思って買い物してきたわ」

「それはありがたいな。それで何作ってんの・・・」

軽い沈黙。出来上がっている料理はない。出来上がっているもの
と言えば・・・

「・・・お好み焼きの・・・種だな・・・てことは」

「作ってと言うことになるわね」

「バイト以外でも作んのかよ!?!」

「だってアズマのおいしいよ。評判いいのだって聞いているわ」

確かに店長から正社員待ちにはなってる。売上がうなぎ登りにな
った、とか言ってたっけ。

「アズマさあー早く食おーぜー。どうせ他に選択肢ないしいーん」
「・・・・・・・・」

痛いところつくな。言われてみればそうだし、もういいかな。こ
うゆづのは嫌いじゃないって思ってる自分がある。

秘密を共有する仲だし、もう無礼講という形で、はじめてしまえばいいかな。

「しょうがないな。んじゃあ、手伝え。一季はホットプレート、緋色は箸とか出してくれ」

「ほいほーい」

「分かったわ」

それぞれの準備にかかり始める。快く引き受けてくれるのは、古くからの友人だからかも知れない。ただ、食べたいだけでもあるかも知れない。

アズマ自身、前者だとは思えない。親がない所謂天涯孤独な身で、記憶に障害と言えるものがある。

記憶は物心ついた時からある。記憶に障害があるのは九歳頃まで出て来る登場人物が全部のつぺら坊だ。

気にせずにいれるのは一季達のおかげと言える。今もなんとなく気分がよく、疲労の姿も失せている。

やはり自覚してしまう。歡喜に満ちていく心情。自然に笑みが洩れていく感覚。

『ピンポーン！』

唐突にチャイムが流れる。心なしか外でエンジン音が空気を揺らしている。

「?・・・誰だろ？」

一季と緋色はもういる。あとは江湮ぐらいだけどこんな時間帯には来ないだろう。

とりあえず出なくちゃな。

「はいよー、今出ますよー」

自分の準備を任して玄関へと急ぐ。疑問と思索は再度押されたドアホンを消失。待たせちゃいけない、と焦りに変わる。

「はい、誰です」

「アズマー！泊まりに」

理不足、当惑、反射的にドアを閉じてしまったが、大丈夫だろうか。

「こらー、アズマー！！」

大丈夫らしい。幻覚ではなかったことに思考が麻痺しそうだ。

「だーれ来たんだ？」

好奇心とからかいまじりで一季と緋色が玄関までやって来た。

どこか後ろめたいアズマの顔を見て一季がにやにやしている。実際、来客者の名前を口にするのが憚れ気味なのが内心複雑。

「………江湮」

アズマの口からその名前を聞いて緋色がピクリと反応したのは見えない。それどころではないからだ。

どうしてか、背中に氷入れられたみたいに痛いのと冷たい。この場合、どうすれば消えるだろうか。

4th「就寝前の悪戯」(前書き)

やーふー・・・四季であります。

口調がめちやくちなのは気にしない方向で。

話しが遅いのか早いのかはわかりませんが四話目です。

かなり苦勞してますが、とりあえず頑張りはしている今日この頃。

今日から夏休みに突入です。話の更新は早くなるかは謎で私次第かな。

まあなるべくはやってみます。

では本文のほうを

4th「就寝前の悪戯」

突然の訪問者にも恙無く、食事は開始された。いや、人数は多い方がいいだろ、と一季が強引に訪問を許した。

途中お好み焼きの具材が若干足りなくて、四苦八苦してたのはアズマだけ。

だが会話が絶えることがなく笑顔に満ちた雰囲気。それだけは言える。

敢えて一言いうなら、アズマと一季は内心、緋色についてひっかかっていたが。

「江湮の母さんと父さんも呼ばなくて良かったのか？」

「んー、ママ達はもう晩御飯食べちゃったし、家に来たのは私が我が儘言っただから。買い物して」

「・・・・・・・・」

この沈黙は緋色のもの。緋色も江湮も材料買って来て、かつどちらもお好み焼きの食材だった。

軽く嫌がらせか、と思ったが、理由は緋色と同じ。おいしいからだそう。今度は裏で話しを合わせてないか、と思った。

「まあでも江湮のおかげで買い置きができたから楽にはなったぞ」
「ホント！？なら明日も来ていい？」
「……………何故？」

突然のそんな切り返しに少し苦笑する。

「だってお好み焼きのもの買ったんだもん。アズマだって一人で食べたくないでしょ？」

「まあ……………そうかな？……………仕方ないな。あ……………なら一季と緋色も来る」

「……………行く」
「暇があつたらねん」

また明日お好み焼きか。

他の三人は知らないがアズマは正直飽きてきた。早くも明日の味付けを思案しながら飯を口に運んでいる。

バイトもあるし夏期課題もやらなきゃだし、なんか普通に高校生やってるのが不思議に感じ、常人でないことが改めて痛感する。

夕食が終わると女性陣は湯舟に浸かりに行く。男性陣は後片付けをしてから順番待ち。と、いつでも大半はアズマしかやらない。

一季はテレビの前に陣取りのほほんとしている。働かざる者、喰うべからず。しかし、働いて飯を喰った後は、何もしない。

「……………一季さあ」
「んー？」

そののほほんとしている背中に声をかける。

「緋色はちゃんと笑ってるかな？」

手元で皿を洗う音だけが漂う。

一季は珍しく難しい顔をして、一つ大袈裟に呼吸をした。

「まーだ歓楽は感じられないかなん」

「・・・そうか」

「でーもー、少なくとも僕らの前では不自然な笑いではないねん」

言ってることがイマイチ不明。整理して思い返すと学校での緋色のイメージは物静か。笑うにしても作り笑いめいている。

俺達の前でも、それは変わりない様に思える。そう思う度、無理をしてないかな、とか思ってしまう。

他人とあまり係わりを持たないのは、巻き込まないため。そう考えると俺と一季は目立ってる方だろう。

「・・・一季」

「今度は何用ん？」

「今日もしかして・・・泊まるのか？」

今度にはやりと笑う。舌を出せばれちゃった、みたいにお茶目な顔をしている。寧ろ開き直ってる。

「・・・緋色もか？」

「・・・夜ばいするなよん」

「するか馬鹿!!!!」

口論を止め後片付けが終わわり一段落つく。エプロンを投げる様に椅子の上に置きリビングを出ようとした。

「アズマー」

「何だよ？」

「・・・風呂覗くなよ」

「帰れ！！」

ドアを思いつ切り閉め足音を響かせながら廊下を歩く。

緋色は風呂で音量が大きいやり取りだけ聴こえたが、それだけでアズマが一季にからかわれたのが分かった。

江湮の背中を流しながら自然と笑みが洩れているのは自覚できていないが。

今度は、と江湮が緋色の背中をながしていると、不意に風呂場の外に人の気配を感じる。

まさかアズマ？ホントに覗きに来たの？

自然表情が変化し妙に動揺した顔になる。

江湮が洗い易い様に、丸めていた背中を伸ばす。鼓動が速まり、生唾を飲み込む。体が理解できない緊張でかたくなる。

「 緋色、江湮」

声がドア越しからかかり、内心だけでドキリとする。

「・・・あっ・・・えっと・・・な、何？」

「アズマ？」

漸く、アズマが来た事に江湮は気づく。顔が真っ赤になる緋色とは対象に、江湮は嬉しそうな顔をしている。

「バスタオルここに置いとくから、上がったら使ってくれ」

「うん・・・分かった・・・わ」

ホツとしたようながっかりした様な。緊張した自分が馬鹿らしく思え、逆にアズマに対して腹が立ちたくなった。

「・・・ねえアズマー」

「・・・何だ江湮？」

帰ろうとしたアズマを江湮が呼び止めた。

緋色が江湮に何か言おうとして振り返ると、いつの間にか江湮がドアの前で喋っている。

「まさかあ、それだけ？」

蠱惑的な声。明らかに誘ってるのは、アズマにも緋色にも伝わる。

「・・・それだけって他に何あるんだよ」

「えーっとねえ・・・わたしと緋色のナイスバディな裸見たくない？」

「ちよっ、ちよっ江湮ちゃん！」

声か風呂場に反響する。対してアズマは沈黙。後ろを向いた姿は、何か欲望と道徳の間で、葛藤してる様に見える。

「ねえアズマー、見たくない？」

無言のアズマに追い打ちをかける小悪魔。少なくとも今の緋色の目にはそう見える。

「あー・・・と、アズマちよつと何か言つてよ」

この状況を何とかしようとして緋色はアズマに助けを求める。アズマを信じてのものである。

「・・・ふ、ふん冗談だろ？」

まるで自分に言い聞かせている様に聞こえる。動揺が声に表れていて、精神的にかなり危険な状態。

駄目だ。信じられそうにない。

「緋色だつて見られたいかも」

瞬間緋色精神的にかなり危険な状態になった。

確かにアズマが帰ろうとしたときがっかりしたけど、見られたいわけじゃなくて、あーもー何考えてんだろ、私

「江湮、お前いい加減に

「じゃーん」

振り返って何か言おうとしたアズマの言葉が切れる。タイミングを謀った様にドアが引かれた。

当然風呂場にいる緋色とアズマの目が合う。焦点は顔ではなく、

その少し下。

世界が停止する。頭が真っ白になる。何も考えられない。いや見とれているのかもしれない。それ程言葉が失われている。

「……き……きゃああああー!!」

風呂場を越え家の外にも響く声。その声に我に返り羞恥で顔が真っ赤になりながら出て行った。

部屋から出ると一季がにやにやしながら拍手している。

「……何だよ？」

「ほら、言った通りん」

「殴っていいか？」

声に怒りが孕んでいる。それは一季にも感じられるが、まるで気にしていない。

「とりあえずおめでとう 感想はいかがん？」

「最悪」

「それは緋色に失礼だよん」

「お前に言っただー!!」

怒声が廊下に響く。先程と比較しても今の方が反響が続いている。

「緋色……綺麗だった？」

「そうだったな。昔に比べて、じゃない違う！」

「本音出てるよん、癖頭」

さっきの光景が頭の中でリピートされ、つい本音が出て来る。実際綺麗なのは否定しない。

「・・・はぁー」

「んふふふふ」

申し訳がない顔とそんな顔を楽しげに見物する顔。

一季は第一者に一番係わるが、気が付くといつも第三者を演じている。危険性が皆無な場所で楽しむ道化だ。

その事を話すと難しい顔して考え込んでしまった。

一季の感性は謎だらけ。

謎だらけなのは自分自身もだが。

自分の部屋に一つ、空き部屋に二つ布団を並べる。

誰とも分らない部屋。女性用の服が多いクローゼット。記憶から引き出されるのはのっぺら坊の家族。母親、父親、姉らしき人と手を繋いでいる自分。これらしきもの。

これでは記憶がない方がよっぽどまだ。全部がかりそめで俺はいつたい何なのだろう。

夜風が、嫌な思い入れを攫ってくれる事を願い、部屋を跨ぎベランダへと足を運ぶ。動いて、弱い自分を頭の隅に追いやろうとしているからかも知れない。

外はネイビーブラックのカーテンが空から全体を覆っている。

家の前には道を照らす蛍光灯。その光が当たらない暗い部分を低回するこれまた昏いモノ。

「・・・ワンダー（さ迷うモノ）」

ぼつりと呟く。

その双眸に映っているのは 現実味が無く妙に獣臭い空虚なモノ。犬形、猫形、ライオン形、牛に鱔に鼠みたいな姿をしてるヤツもいる。

これらはアズマに見え、緋色に見え、一季に見え、江湮には見えない。四人の中で江湮だけ見えないモノ。何かが欠落している者しか見えないモノ。

それを江湮は良く思わない。仲間外れと言っても過言ではない気がする。

「・・・・・・・・ならどうする。話すか、黙るか。どっちも気を遣わせる」

巡り巡ってまた振り出し。結局前進しては後退して、少しも前に進んでいない。

「・・・・・・・・それじゃどうしよう」

今、長考するほど冷静じゃない自分。気づいていても感情に突き動かされ体は止まらない。

ベランダから身を乗り出し落ちていく。裸足のまま地面に着地。痺れが全身を駆け抜けていく。

が、そんなことに意に介さず坦々と門の前へ足を運ぶ。あと一歩

で家の敷地から出るところで止まる。

「……………dream out」

今日、二度目の行使。

体が生まれ変わるかのような感覚は、テンションがハイになる。

歓喜の産声上がり、様々な感じは墓に落ちる。全身の血液が沸騰するみたいだ。

「……………江湮が良く思わないなら……………全部……………全部殺つてしまえばいい」

結論を出すと同時に、コンクリートを破壊するほど地面を蹴り、ワンドーの間を抜ける。

腕に力が入る。指が何かを包む。掌は頭の中のイメージを掴むように。

振り返るワンドーに素手のまま腕を上から下に振る。

血は出ない。ただ液体を入れる入れ物が、壊れたときに中身が流れ出す様に、内容ブツを流して消失した。

手には何の変哲もない剣。不思議なのはいつどこから取り出したか。

初めから持っていたわけではなく、イメージから生み出したモノ。現実味を帯びているが所詮虚像。想像したものを顕現させ創造する。

しかしイメージに綻びが生じれば簡単に夢幻へと還る。リスクも

あり正直割に合わない。

無から有を生み出す禁忌。瞬間的な身体能力の向上。当然ただでは済まない。

フィードバックがあり全身の筋肉は内側からの膨張と外側から圧縮されるような錯覚が襲う。

もう一つは感情の消失。

喜びが生きていく為の要因ならば、それが消えればこの世にいる理由が無くなる。

恐怖が身を守るものなら、それが消えれば限界を平気で超え、引き際を誤り自分を滅ぼす。

それが緋色達の現状。常時リミッターが外れている。

緋色は歓楽。

一季は恐怖。

そしてアズマはまだ分からない。

剣が横に走る。何体目かのライオンらしきワンダーを捉える。歪な音がして剣が途中で折れた。

曖昧なイメージに綻びが生じた所為か、無銘の剣はあるべき所へと還る。

「……ふっ……ぐっ……ふー……ふっ……く……」

ようやく冷静な自分が戻ってきて、今の状態が確認できた。虫の

いいヤツだ。狂って暴れるだけ暴れた後に、事後処理は冷静な自分。小さな噛み傷やら引っ掻き傷が無数に。呼吸は不規則で一步步くのも一苦勞。ましてや未だ有象無象に出てくるワンダー。

本能的な感情の残り滓らしく、感情を発する大元が人間だからそれに惹かれるらしい。

今もアズマの高まる感情が漏洩し集まってきたている。

自我が戻ってきたせいで余計疲労が感じられる。

そんなことをお構い無しに獲物の俺を襲う。かろうじて避けようとするが、上手く動けず傷が増えていく。

痛みが脳にじわじわ響く。こんな状況にした自分を罵倒し、自責と反省を0.5秒で済ます。

考え無しに頭は逃げを選択した。異論はないがそれは大分困難にさせた。

周囲はワンダーに囲まれ、体の反応は遅い。二体、まず飛び掛かってくる。半ばぶつかれる様にして躲し家へと走る。

dream outが行使が無いのとフィードバックによる疲労感により足が纏れながら進む。

「……つつ……う」

筋肉の痛みに地団駄を踏む。その間に横から迫るワンダーへの対処が遅れた。

「ぎっ
」

右腕に昏く虚な牙が食い込んだ。嫌悪と痛み、更に深い憎しみが

全身に廻る。

「ふっ……ぐっ……あああっ！」

反射的に行使したdream outで顕現したナマクラを振り抜く。そのせいで足が止まり逃げ道をワンダーに塞がれた。

舌打ちをし、恐怖に近いものを感じながら、逃げる算段を思索。噛まれた傷口から溢れる痛みがやけに強く残留している。

喧しいから静かにしてほしい、なんて事にはならないこの感情。夜が深まる程に、感覚は鋭さを増していく。

5th「傷付く夜」(前書き)

ばんわー

やーふーです。

テンション上がりまくりです。

なんて状態でもきついことには変わりありません。

予期した通り更新がかなり遅れました。

夏季課外 部活 塾のローテーションで死にそうです。いつそ壊れてしまいたいです。

愚痴垂れても仕方ないのでとりあえず五話目です。

5 t h 「傷付く夜」

夜。時刻は9時を廻る。高い塀がある事と人通りが少ない事が幸いにはなっている。

一人剣を振り回して、血を流しているなど誰かに見られたら通報されかねない。

いや幸いなのは人目だけ。実際のこの状況、最悪死ぬかも知れない。明日の新聞での一面が頭の中を過ぎる。『閑静な住宅地に謎の遺体』みたいな。

「……は……冗談だろ」

何に対してかはわからない。今のこの状況か、死ぬかもしれないと考えた自分にか。

とりあえず逃げる算段を立てようとするが、ズキリと痛む傷口の痛みは波を立てる。手元に届かない思考。波は煽り立ち、邪魔をしている。

一歩前に出てくるワンダー。それに合わせて、自分を中心にしている円が一回り小さくなる。

殺害を楽しむワンダーはいない。もつと言えば感情を持つワンダーはいない。でも、死ねない死刑宣告を、受けたみたいない気分にな

る。冷や汗と脂汗が流れ、心臓が高鳴る。

「……………怖い……………のか？」

足が竦み、軽く蹴られるぐらいで転倒しそうだ。がくがくと、代表的な擬音をつけるとしたら、こうだろう。

息を深く吸い、恐縮し硬直する身体を和らげる。目をつぶる、ほぼ自殺行為な行動。暗闇の中で恐怖はあるが、コイツラを視界に収めるよりはマシ。暗さが与える思考の時。極僅かな時間で選択肢を思索。

時間はない。思考能力が皆無に等しいこいつらは、すぐにでも襲って来るだろう。

生きられる道は

目を開き作戦と覚悟を決める。ワンダー達は既に動に転じている。コンマ一秒。激痛と疲労を歯を食いしばり、奥歯に凝縮する。

「dream out」

一瞬だけでいい。それだけで十分。再び肉体が悲鳴と歓喜の声を上げる。

手には槍。それを構えて家へと走る。眼前のワンダーを槍で弾き、周りからの攻撃は無視をする。血が更に出てくる。痛みは増える。が、強引に押さえ付ける。漏れ出す痛みを体を動かす事で発散。槍を放り助走をつけた勢いのまま

上へ跳んだ。

空を飛ぶワンダーがない事は僥倖。空を支配するワンダーはいない。

しかし、と遅れ様に気がつく。疲れと痛みでろくな力加減ができず、家の二階ぐらいの高さまで跳んでいつてしまった。

「あつ……これは、やばっ！」

そんなことを跳んでから気がついたわけなんだが、はつきり自分でも間抜け。このままだと地面に叩きつけられるパターンで……

「あわわわわ」

降下が始まり視界が自分家の庭いっぱいまで広がっていく。

諦めか恐怖が一週して開き直ったのか、背筋の寒気が感じなくなつた。

死ぬかもとか、走馬灯が見えそう思ってもみたり

「がっ……ぐっ……げっ」

考え事している間に派手に着地。一、三回転がった後停止した。

受け身もへつたくれもない。あちこちぶつけ、明日には痣だらけで痛い。傷も深いものは一つぐらいだが無数の傷がその一つを倍増させている。

背中も打ったせいか呼吸が少ししづらい。不平はいくらでもある。

痛いし、苦しいし、暑いし割に合わないし。今、頭の中で愚痴れるだけ愚痴ろう。

生きてるのだから。

「生きてる」

漸く、それだけ口にするだけで十分実感できた。自分は生きている。さほど重大な生死を冒険したわけじゃないがいいだろう。

実際死ぬかと思ったし。馬鹿なこととして自分で種を蒔いたものだから。その事を噛み締めた後、体を起こした。芝生は赤黒く染まっている。

見つかったら流石に警察沙汰になりそうだ。後ろめたい心情から洗浄する事にする。水道まで酔っ払いのような覚束ない足取りで向かう。視界にも霽らしきものがかかっている歩きづらい。

やっとの一苦労で、血痕を洗い落とす頃には、霽は大分消えている。血は流したほうだと思いが妙に意識がはつきりしてる。また訳のわからないものが作用してるっぽい。

自分の体を不気味に思いながら、玄関の前で立ち止まる。ドアノブに手を掛けた所で迷う。

「………さて………どうやって入ろう………かな」

二階から外出したから玄関の鍵が開いてる筈もない。試しにドアを引いても開かない。

ドアホンを押すと面倒なことになるし、出たところから入るのは
難しそうだ。ほとんど満身創痍だし。

玄関からの侵入は無理。諦めてドアホンを押すのは、最終手段。
ならベランダで考える、と見上げるとやけに高い。

よくここから飛び下りたな、とアズマは思う。

「ばんこんは」

「……………は？」

ベランダの下で腐っていると、思ってもみなかった人物から声
がかかった。視線の先にはドアに寄り掛かっている形で一季がいる。

時間が経過しても、アズマの姿が見えないから、一季達も不思議
には思っただろう。何分経ったかは知らないけど。

「……………」

「……………」

沈黙。なんか一季はアイスをしやくしやく喰ってる。ってそのア
イス俺のだ、この野郎（怒）。

「この、か」

「いつからいたの？って顔してんねん」

途中で言葉を切られか後は続がなく、一季は沈黙が疑問ととっ
たらしい。疲労で動作が遅かったただけだけ。

「……………まあ」

「いつからは最初からだよん。なんか馬鹿やってんなー、って思っ

「たん」

とりあえずアイスの件は、目の前の人物の自問自答により頭の隅へ。そして更に疑問の種が蒔かれた為、保留となる。

「・・・助けようとは？」

「思わないねん」

「心配とかは」

「?・・・何それ、どこの言語ん」

心底不思議そうな顔でこちらを見ている。自分が場違いな台詞を言ったみたいだ。いや、そんな筈はない。ホントは一季がおかしいんだよな、うん。

「・・・まあいいや・・・緋色は？」

「『招福』の割引券十枚、だって」

『招福』はアズマのバイト先で、緋色が江湮を言いくるめてくれたのは、面倒事を増やさずに済んでよかった。その報酬として割引券十枚は妥当・・・かな。

「それにしてもその怪我大丈夫かを？」

一転して心配へと変わる。本当に心配しているかは不明。そもそもあんな発言して、いきなり手の平を返すからなんかありそうだ。

疑惑を感じてからは厭なほうにしかイメージしない。こいつは賤す、からかう、馬鹿にするしかないし。この状況でそんな事は多分ないと思うから、別に大丈夫だろう、多分、恐らく、やっぱりどうだろ。

「・・・まあ・・・大丈夫・・・だろうな。すぐ治るさ」

点でわけの解らない台詞だが一季と緋色には通じる話。傷口を押さえていた手を離し、一季に見えるようにする。

出血点からの血は、既に止まっており、傷口が目に見える様に塞がっていく。真皮が覆い、皮膚が形成される。

「うわっ・・・摩訶不思議ん」

ありえねえ、こいつ人間かん？、とか心の声まで口にして、不思議だと言っている。

同時にどこかきらきらした顔をしているからあまりいい気分ではない。見世物じゃないんだしだんだん腹が立ってきた。

自分がこんな超速自己治癒能力（仮）を持っているなんて不気味。自分の記憶と同じで虚だ。それに俺より一季の方が驚いている。

好奇心旺盛で冷静なのに、どこかぶっ飛んでるもんだから、手綱を引かないと駄目な奴。自分の欲を満たすために周りが見えなくなるタイプだ。周りが見えなくなるのは俺もかな。

「んっ・・・疲れた。寝る」

「ん、頑張ってきてねん」

何を頑張るかは深く考えなかった。寝るという事だけを考え、睡魔に襲われているのもあるからだ。

家に入ってからもう少し友の助言を聞いておけば良かったと後悔する。

「……………」
「……………」

またも沈黙。ことうゆう空気は、多分一生息苦しく思うだろう。目の前には明らかに怒っている様に見える緋色。いや、訂正。確実に怒ってる。

「……………ただいま」

「……………ほかに言う事はないかしら？」

「……………すみませんでした」

「何について？」

「……………暴走してワンダーに突っ込んだ事について」

なら話しは早いわね、と言って、有無を言わずリビングへと連行。

玄関で笑う一季には正直、イラツときた。あとでアイスの件も含めて、ぶっ飛ばしてやる。

それから三十分程、一季の冷やかしも混じりながらの静かな説教となった。

様々な小言や命の大切さを知れなど、親が子供に言う台詞が並んだ。一季とは違う一言一言全てが俺を心配しての言葉。なんか感謝したいね。こんな友人俺にはもったいないかも。

十一時頃ようやく全員が就寝。江湮は既に夢の世界へと旅立っている。

アズマにとって長い一日だった様に、この少女もかなり濃厚な一日だったと思う。夢の中でもまだ楽しみは続いているみたいだ。

あまり見つめていると、起こしそうだし、誤解されて、また小言をきく羽目になる。

最後に、少女が健やかな夢を見ている。だから、せめて今日ぐらいは、夢を見ない、健やかな眠りにつきたい。

虚 空虚 虚空 虚偽

何も感じない 何も見えない

ただこんなモノしか見えない。

ただこんなモノしか感じられない。

道行く人はみんなのっぺら坊。虚で顔なんてない。

ワンダー。みんなワンダーだ。

自分も家族もみんなワンダーだ。

やめろ

やめるやめる

やめるやめるやめる

俺はどつちだ？

ワンダーなのか？ヒトか？

これは夢なのか？現実か？

夢でも夢じゃなくても どうにかしてくれ

「……………夢」

安堵感が心をゆっくりと満たしていく。夢を見ない事は、叶えてくれないのに、夢から簡単に醒めて欲しいのは、叶えてくれるらしい。

汗で湿っぽく火照った体を起こし、洗面所へ向かった。一季を踏まないようとゆうよりは、起こさないように慎重に跨いでいく。

まだ家の中は暗く夜明け前なのがわかる。決まってワンダーを目にした日は服が汗で重くなるのは辛い。

水で顔を流したあと濡れた顔のまま鏡を見る。夢の一部が頭の中でリピートされ、何故か怖くなる。振り切る為に、自分の顔を見つめる。ちゃんと自分は、人で色がある。虚じゃない。ワンダーじゃない。

「今夜は寝れるかな」

顔を盥^{しか}め台所で牛乳を飲み部屋に戻る。気持ちを落ち着かせ、ま

た願う。

揺らいでは恐怖に怯え臆病になる。現実は大丈夫で、夢に怯えるなど、不眠症になりそうだ。

自分が怖い。

自分は何者で親は誰か。この家には家族がいた形跡はあって思い出さない。

考えれば考える程泥沼化していく。底無し沼の様に文字通り底がない。

いつそ忘れたいが、記憶なんて連想するもので思い出す。ワンダ―を見たらどうしようもなく心が渴いてしまう。今のところ我慢はできても解消することはできない。

胸に充満する負の感情を抱えたまま横になった。夢が再来しそうになる度に、目を開ける。

・・・今夜は寝れるだろうか。

次に目を開けたら朝だと到底信じられず、しかし、睡魔には抗えず、夢の世界へと旅立った。

6th「気まぐれな今日この頃」(前書き)

読んでも人も読んでない人も、朝でも昼でも夜でもこんにちは。
やっと課外が終わりました。
執筆するのによつちやく集中できそうです。

6th「気まぐれな今日」の頃

『招福』でのバイトはそんなに辛いものではない。週四日で日給六千円。腕があるのと、店長とフレンドリーになれば、給料日の気分でプラスされる。

「こんにちはー」

「おう、東君。お客さん待ってるよ」

店長の名前は上松（うえまつ） 招来（まねき）さん。愛称はねこさん。人当たりの良さそうな顔にダンディな髭。敢えて猫で例えるならペルシャ猫といったところ。独身。

「いやー、東君が来てから評判いいねえ。お昼にも東君の食べに来る人がいるから大したもんだよ」

「誉め過ぎですよ。趣味の延長みたいなもんですから」

着替えを終わって店内へと戻ると、確かに四つ程あるテーブルは、三つ程埋まっている。

「趣味で人気者なら最高だよ。おじさんなんて人気者になったのは、理科の実験で髪の毛に火引火させたぐらいだねえ」

「おじさんなんて歳じゃないでしょ。それに学校じゃ地味なほうですよ」

これは本当のことである。なるべくだが行動は消極的。ぱつと見目立ちはしない方。なのだが一季に付き合わされてそんな事など木っ端微塵にされるが。

「そういえば東君はご飯食べたの？」

「・・・いいえ、まだですね」

「ご飯を食べなかったのはわざと。ここに来れば賄いを作るだろうし、何より昼飯代が浮く。目の前でせっかく飯を作るが、食べられないのが難点だが。」

「いらっしやいませー」

また一組と店内に足を入れる。

時刻は適度にお腹を膨らませた者と、空かせた者が半々で分かれるくらい。

もう一時間程で昼休みをとるだろう。ついでに、ではなく殆どメインのタダ飯が食える。しかし、意識すると長いから、作る方に専念しよう。

「いらっしや・・・いませ」「愛想がなくなってないねん、癖頭。

緋色と江湮も来てんよん」

「こんにちはー」

「アズマ、来たよー！」

少し誤算だった気がする。こいつらも後者に入ってたらしい。ただどうゆう偶然で、三人が都合よくこの時間帯に集まったのかは、

あとで聞こう。

「……ご注文はなんでしょうか」「んーとねん……ぶたもちもんじゃと招福スペシャル、あとは……桜エビと海老の海鮮焼きそばで」

他の二人もオーダーに不満はないらしく口を挟まない。それをアイコンタクトで確認してから準備に取り掛かる。

昼飯を用意しなかったのは間違いかな。余計に時間が長くなった気がする。

台所で愚痴ってみたりもする。しかし、向こうに聞こえそうなので心の中にだけ、留めておく。

準備を始めてから二十分。キャベツを千切りしていると、話し声が調理場まで響く。微かに、耳にさす程度だった声が、確実に耳に届くまで、ボリュームを上げる。

声からして一季達っぽい。

何だろう、という好奇心に似たものは、準備してから、という一種の使命感みたいなものに沈む。

……少し雑になった。

好奇心によりキャベツが不規則に切れている。アズマの心の顕われということ、余程話の内容が気になるみたいだ。

ともかく、もんじゃ二つと焼きそばをのせたお盆を持ち、好奇心の元へと急ぐ。

「お待たせしました」

速攻でやってきたのに若干遅かった。話し声は一気にトーンダウン。てか話し相手ねこさんかよ。仕事しろよ上松。

でも多分一季達とねこさんの世間話だろうし俺には関係

「そうゆう訳だから東君、それ食べたら一季君達と海行きな」

なくなかった。なんかあらゆる過程を飛ばしていきなり結論に入ってる。

「……え、何故？」

そうゆう訳だからってどうゆう訳。疑問符が頭の中を埋め尽くしている。

例えるならいきなり銃持たされて戦争に行つてこい、みたいな感じだろう。大袈裟で体験したことの無い心境だから理解できないが。あと戦争行けと海行けじゃ全然違うし。

「これから一季君達海行くらしいんだからさ。男女二人つつなんてダブルデートかあ、いいねえ」

「いや、なんすかそれ。それにバイトは……」

「店長命令だ。仕事を雑にしてる奴は頭冷やして、青春を楽しんできなさい、少年」

ばっちり見抜かれてるし、いつの間にか俺が海に行く事が決定事項になっているし、無茶苦茶だな。

「アズマ、行かないの？」

俺の答えを不安げに待つ少女。多分行かない、と答えれば江湮は多分ではなく絶対行かない、と答えるだろう。

せつかくの夏休みに練った計画を潰すわけにはいかないな。何よりこのあと蒸し暑い中火元でバイトするより、青空の下、緋色達と海で遊ぶほうが何倍もいい。

半ば腑に落ちないところがあるが、もう頭の中には海でいっぱいだ。

「……ふうー……ではお言葉に甘えさせていただきます」

江湮の顔に笑顔という名の花が咲く。そんなに悪い気はしない。寧ろ夏休みなんだからこんな日もいいだろう。

「あ、東君飯代は払ってね」

抜目ないしそれはないよ、ねこさん。

定期的にエンジンが音を立てている。カーブを曲がる度に、大袈裟に江湮が車内を転がっていく。

暇になるかと思われた車中では、存外話しが盛り上がった。

緋色達の水着から話が始まり、アズマのが無いのに気付く。そこから辺は一季が考慮して用意周到に俺のを準備していた。どうやって持ってきたのかを聞くと、犯罪者になつたらしい。

罪状は家宅侵入罪。あとは重なる罪状など云々かんぬん言つてたが、一回聞いただけでは覚えられないものばかり。冷蔵庫の中身を少々拝借した窃盗罪には、罰としてパンチの刑を執行。

そんなことをしている間に潮の香が鼻を刺激する。海。まごうことなきコバルトブルーの世界。

来ちゃったよ、おい。やっぱり断りゃよかったかな

内心少し後悔する。

でも行かなかつたら行かなかつたで後悔していたと思うし微妙だ。

「んじゃあ・・・私達は着替えて来るから。アズマは場所取りを頼むわ」

「へーい」

去り際に一季が声も出さずにこちらに嘲笑を投げている。そのおかげでだんだんこの計画も一季の陰謀ではないかと疑惑が膨らむ。

ビーチパラソルを砂浜に突き刺し、新しい日陰の下で首謀者への文句を並べていく。

熱い。限りなく熱い。熱いの一言に限る。並べた文句は夏の熱さ

で溶解してしまう。

雲一つない空は万人が思う様に爽快だが、陽射しを遮るものがないのは正直きつい。ようやく見つけた雲を目で追いかけながら時間の経過を待つ。

出来て間もない日陰の下はまだ熱気を帯びている。座り込んでいるより、立っている方が楽そうだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ〜ち〜」

いくら不平を呟いても、新参者の影は、未だ保つ砂の熱さを受ける。それは弱まる事を知らない。一季が来たのは、それが弱まったぐらい。

「お待たへ」

「・・・・・・・・遅くね」

「楽しみを待つから楽しみと言うのだよん」

「楽しみ？」

「じゃ〜ん、お楽しみ登場〜」

遅れて出てきたのは、緋色と江湮。言葉から察するに楽しみというのは水着姿らしい。

ガキじゃあるまいしと言いたいが、つついそちらの方に目が行くのは不可抗力だと思いたい。

江湮は白が主体でフリルのついた比較的ノーマルな水着。緋色は赤みがかったお腹が大胆に開いた水着。

目の前で何かを期待している様な目をしている江湮。何に期待しているかに、考えが至るまで数秒要した。

「ああ……似合ってるよ」

なんかのせられてるし、言わされてる気がする。でも喜んでるし悪い気はしない。実際似合っただ。嘘偽りはない。

「……………ええっと……………よお」

江湮を褒めたあと、入れ代わりで緋色と目が合う。先日のあの一件以降、ぎくしゃくが続いている。

何か会話できるきっかけがアズマ的には欲しいところ。とりあえず機嫌を回復させる為、先程と同じ言葉を口にした。

「あ……………緋色も似合ってるな」

「……………ありがと」

好印象。心なしか照れている。ぎこちない気もするがまあ、いいだろう。お世辞じゃないし実際似合っている。スタイルもいいし、素直に言えば綺麗。

「さてと、俺も着替えて来るかな」

荷物番から解放され、漸く着替えにかかる。今だ気乗りはしないが、着替えないのは場に合わないだろう。

「アズマ、ちょい待ってん」

「ん？」

健康男子とは一季みたいな奴の事を言うのか。適度に日焼けした肌は流石、運動部だ。俺みたいなもやし肌とは違う。

「……………何用？」

呼び止めた意図が掴めないのどこちから口を開く。一季の目はどこかおかしい。と、言うよりさっき江湮がしてた目に似ている。

ということは

「水着……………似合って
「ない！」

全力で全否定。思わずイラッとしたのは生理的なものということにしておく。

ほんの少し前まで頭上にあった雲は、もう見えなくなっている。

さてと、楽しもうか。

7th「水嫌い 誰が好き」(前書き)

ああー、この二話は海が話題でしたけどわたしも海行きたいです。

でもできればプールの方が行きたいです。

7th 「水嫌い 誰が好き」

波が寄せてくる度に後退する。

ノリで来ただけだがなんか退けない・・・気がするだけだ。

必ずしも海に入らなければいけないとは限らない。

寧ろ好都合だ。この機会に水に慣れ・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どん」

逡巡やら葛藤に苦悩している自分が阿呆らしい。

背中を押され、体が前へと傾いて・・・着水。

瞬間背中を駆け抜けたものは水より冷たかった。

「おおおおわあああ!!!」

こんな反射神経が俺のどこにあったんだろう。

叫び終わる前に、プッシュしたバカ野郎の後ろに回り込み海に投

げ捨てた。

「ぶはっ・・・ひどいなん、癡頭」

「砂に埋めるぞ?」

一瞬で心底疲弊しきった顔に変わる。

もはや隠せるものでもないし周知の事実だ。去年もこんな感じだった気もするし。

「・・・まだ水嫌いは治ってないのね」

優しい声だがどこか呆れ具合も混在している様な声。

なんかそんな声でそんなこと言われると、俺が臆病者みたいだ。

「アズマってまだカナズチなの？」

江湮に言われるのはどこか屈辱だ。小学生だからというわけではなく。断じて違う。

実際江湮はからかい半分だったが、今のアズマには本気で馬鹿にされてる様に感じる。

いや、もうされてる気がするのではなく、全部自分を笑い者にしている風に聴こえる。

「ふん、人間誰だって怖いもんがあるんだよ」

言いたい放題、やられたい放題されてる方は反撃したく思うもの。ただ言葉や行動はちゃんと選択しないとあとが怖い。

「緋色は雷が怖いし、江湮はお化けが怖いだろ。一季は・・・えつと・・・」

「ほづ、僕は何が怖いと」

うん怖い。めっさ怖い。何がどう怖いかって、一季が一季じゃないなくて、なんかもう例えようもないくらいこの世のものではない気がする。

殺技だね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・黙れ・・・バカズキ」

本当はここで貶せるだけ貶して、文句を言えるだけ言いたいが、酸素を求める身体がそうさせてくれない。

海に来てから早一時間。これ程濃密で、心身ともに極限まで疲弊させる出来事はもうないだろう。

というかそう願いたい。

「帰りたい。物凄く帰りたい」

休憩できて、安寧な場所。それをクリアする条件が自分の家だった。

声に出してまで帰りたい。それが今のアズマの本心。しかし帰らしてもらえないのが現実。

「帰っちゃ駄目だからねアズマ」

この通り帰してはもらえない。

思えば主犯は江湮なのかもしれない。

この考えに至ったときにプレーバックする。

朝、招福で会ってから今までを。

アズマが渋ったり、顔を顰めたりする度に最初に声をかけてくるのは江湮だった。

単純に子供心のせいにしたがどうやら違ったらしい。

今回の第一者は江湮。それに入れ知恵をしたのが一季。

一季がアズマを海へ誘えば、当然アズマは裏があると疑う。

江湮だと一季と比較してだがかなり警戒心は薄れる。

一季の予想通りとして自分は第三者になり、第二者に干渉してくる。

結果として、一季の快樂やらを満たすカタチにはなった。

「江湮・・・一季になんか言われたか？」

「えっ？いや・・・何もないよ。うん」

白々しく焦る。隠す義理はないと思うが、とりあえず裏はとれた。

とつちめるのはあとにして今は少しでも水に慣れておこう。

もちろん楽しめれば楽しんでおこう。

t h i n k i n g

日陰の下から水嫌いを眺める二人。

日高 一季と炬 緋色。

二人は特別な仲というわけではないし、見方を変えれば秘密を共有する仲。

そんな二人はある一人のことについて考えている。

東 東広という人物について。

一季から見ればアズマは感情表現が豊か。
とても感情が一つ欠落しているとは思えない。

それは緋色も感じている。

「アズマってわけ分かんないだよねん」

「それは昔からじゃないの？」

日陰の下雑談を始める。

一季の目下の好奇心の種がアズマ。

先日の件で家に泊まることにはなつたが、『紙』は無かった。
それを見る限りではまだ、普通の人だ。だがそこが謎。

紙の出所は不明。ゲームの説明書みたいな紙切れしかない。

誰が置いたか、何もかも不明。気付いたらあつたぐらい。

そして唯一分かることが、自分の感情が一つ欠落したら送られる
こと。

『finder（欠落を捜す者）』はその紙にサインして飲み込
むことで、誰か正体不明なモノと契約する。

それによりdream outを行使するために必要なラインが
通る。

ラインは靈感を得る様なもので見えないモノが見えるようになる。
ワンダーと幽霊が同じだとは言えないけど、似て非なるモノとい
うやつだろう。

とにかくアズマは、そうゆうことなしでdream outを行
使している。

ラインあり、謎ありまくり、感情の欠落なし。

なんかfinderって言えない気がする。

「……緋色はfinderになったこと、後悔してる？」

「……finderになってもならなくても後悔してたわ」

「……ふーん」

べつに一季はなってもならなくても後悔はしないだろう。

いつも後腐れが残るくらいは覚悟している。

結局、どの分かれ道にも後悔は転がっているものだ。

寧ろ一季は知らない世界に胸を躍らせるタイプだ。

そんなことだから自分で進んでfinderになっただんじやないかな、って自分でも思う。

人生はスリルと好奇心がピースとなっていて、完成図なんてものはない。

なんにでも貪欲で好奇心に飢えている

スリルが希薄になった今は、好奇心しか動かすものはないが。

「あー……暇だなーん。アズマ茶化そうかなん」

「やめたら。今度は心肺停止するかも」

「むう……殺すのは流石にまずいかなん」

冗談だが、一季だと冗談では済まさない気がするがしてやまない。間違つて殺しました、では目も当てられない。

「緋色はー、アズマのことどう思ってるのん？」

急な話題の展開。

一季的には軽くからかいが陰を見せる程度に話している。
動揺していれば面白いのだが

「友達として？それとも一人の男として？」

動揺なし。おくびにも出さなければタイムロスもなし。

「……んーと……もちろん男としてねん」

「それは一季が私のことを好きだって暗示してるの？」

「そうだとしたらどうする？」

「新しい恋を見つけて」

自分に似合わない言葉を遣ったせいか、若干照れ臭そうに見える。

「結局アズマのことは？」

「好きよ」

骨抜きされた気がする。そんなこと面と向かれて言われたらなんも言えない。

「……ふーん……。まあ江湮と三角関係だけど頑張ってるねーん」

「気に障る言い方ね」

「まあね、自負してるよ。あとさっきの言葉、アズマに直接言えるようにねん」

「……言われなくても」

最後の言葉は自信なさ気だったが意思は十分伝わった。

今、アズマと一緒にいる江湮に嫉妬らしきものが感じたから。

とりあえず、アズマと紙については目下調査中、っと。

一季が一通り考えをまとめ、腰を上げる。

流石に二度もあるとそれなりに警戒している。

近づく前にこちらに気付いた。

「・・・なんだよ？」

「いや、相変わらずいい体つきしてるなってね」

「・・・びみよ」

心底厭そうに顔を歪める。

日頃の行いってやつだね。今日はいじくれなくなった。

悲しい様な淋しい様な。変な微妙さがある。

何となく笑いたくてハハッ、っと笑って海へとダイブする。

飛び込んだ拍子に脳裏を掠める疑問。

なあアズマ。・・・お前って何者なんだ？

7th「水嫌い 誰が好き」(後書き)

今までの執筆の中で、最短で更新できたと思います。

また不規則に更新すると思いますがよろしくお願いします。

8th「予想の範囲外」(前書き)

こんばんはです。

最近花火大会に行ってきました。

祭りの雰囲気とかなんか好きです。

8th「予想の範囲外」

いそいそと明らかに周りの人達より早くパラソルを畳む。
午後が始まってから数えて五時間が経過。

この時季ならあと一時間と三十分、日が沈むまでの余裕がある。
行きにかかった時間が大体四十分。
帰りもそのぐらいかかるだろうという仮定を立てての行動。

反論は一人いたが多数決により却下。
その一人は江湮なのだが、仕方なく後日埋め合わせになった。

「ねえ、やっぱり帰っちゃうの？」

駄々をこねる様に却下された案を口にする。
その言葉は掛値なしに三人を痛感させる。

こつこつととき、finderだということを思ま思ましく思うの
は罪だろうか。

本当なら時間が許す限り遊んでいたい、そうはできない。

仕方ない、の言葉で自分を宥めるのは限界が近づいている。

「・・・済まないね。また遊べるからねん、アズマが」

「俺なの!？」

話の矢先が急カーブしてアズマに刺さる。
一方的な展開で冗談に近いが、江湮はそれでもオーケーらしい。
また遊べるなら。

帰りのバスに乗り、今日一日を反芻する。
長い様で短く感じる時間の流れ。

せめて帰りも楽しく締め括りたく思う。

「アズマって毎日筋トレしてんの？」

そんなことを考えていたのが一季だった。
湿っぽいのはたしかに誰だって嫌なものだ。

その意思を汲み取ったわけではないが、アズマが話しを繋げる。

「まあ・・・そんぐらいはな」

「帰宅部のくせにその体つき。うーむ陸部に欲しいねん」

「時給800円ならいいぞ」

「その切り返しが憎い」

大袈裟に一季は笑うが場を和ませるには、ミートしたらしい。
江湮が小さな笑顔の花を咲かせる。

しかし実際、アズマは守銭奴ではなくバイトでもしなきゃ生きて
いけない。

顔の知らない親の遺産だけでは、生活がきつい。

親類が誰一人としていないアズマは、当然仕送りなどもない。家

があるだけまだましな方だ。
なんて、楽観的でいるのだからなんかぶっとんでんじゃないかと、
一季は思う。

そうゆうわけで危機感が欠落してるんじゃないかと思案中。

もうじき帰路までの道のりが半分を過ぎ、時間もだいたい半分が
経過する。

体も時間の経過につれて疲れが溢れていく。
流石に瞼が軽く重みが出てきた。

そうして目安としてた建物の角を曲がる。

視界の端に映る車両。

アズマの目にやけに鮮明に映る、運転手の顔。知らない顔が明後
日の方を向いている。

コンマ一秒、頭の中でサイレンが警報を鳴らす。
休憩している脳をコンマゼロ一秒で再起。

不意にガクンと震え、派手な音が目をつんざく。
乗客がなだれ込むように座席から転げ落ちた。

反射的に隣にいた江湮を抱き寄せたので、大事は至らなかった。
江湮には。

「ふうー、大丈夫かん？」

「私はとりあえず」

「私も」

「………たんこぶできた」

「いやー、よかったー」

ぞんざいな扱いだ。ギャグだろうが今は、のってる場合じゃない。不安と恐怖に慌ただしくなった乗客は、窓の外を眺めている。その人達の口から出て来た言葉は予想通り交通事故だった。

窓の外は確かにバスに突っ込んだ車が横転し、交通の弁の乱れが拡がる。

後ろの方で聞こえる急ブレーキの音はその拡がりを示している。

「……まずくね、これ？」

誰かが早々に口に出す。あくまで問い掛けだったが、バス車内を混乱させる興奮剤へと変化する。

黒煙を吐き出す車には既に焦点が集まっており、「逃げる！」という声が乗客を動かす。

人数自体があまり多くはないため外に出るのは困難ではなかった。

それでも声が上がる。複数の人は黒煙を吐き出す車を指差している。

どうやらまだ車内に人がいるらしく、変形したドアが開かないらしい。

「げえー……どうしようかなん」

一瞬一瞬の脳裏を掠めたのはdream outの行使による救出。

人目が多く目立つから却下。
一つ二つ思索して横を見る。

アズマに協力して貰おうとしたのだが

「……………ん〜？」

肝心のアズマが消失して江湮の姿しかない。

溜め息をアズマがどうしたか、を考えてから吐く。

あらかた予想がついて諦めた。

「アズマ!？」

緋色が叫ぶ様に名を呼ぶ。

ヒステリックな声。他人のために、突っ込む野郎はお人よしか馬鹿か。

「あのお人よし馬鹿!」

緋色の評価はどっちも。冷静さなんて皆無な状況だが、緋色の評価は適当かも。

あれやと考えている一季を置いて、アズマは車のドアに手を掛ける。

なんとさえばいいか、変形したドアは短い悲鳴を上げ、簡単に抵抗を止めた。

周りの人は若干の動揺。畏怖する様に、何かを見る様な目。

だがそれは人命を救出したことで、ある程度薄れていた。

「こりゃあ・・・帰れるかなん」

結果としてアズマの怪力はそれ程危惧されてはいない。
それはもう気にしない方向で。

新たな問題として、時間内に家に着けるかだ。

遠くの方で警報らしき音が聴こえる。
おそらく通行止めにはなるだろう。

「緋色・・・間に合うかね？」

「・・・微妙ね」

緋色の答えに同感し、家までの最短ルートの模索を開始する。

野次馬達が散らばって行く。

件の騒ぎは終結を迎え、それぞれに歩を進めていく。

幕が閉じるまで時間にして三時間。

現在の時間は午後八時。日が沈むには十分すぎる。

「はい、すみません。今日は家で預かります。では」

電話の相手は江湮の母親。交通事故により遅れる旨を話している。

「まあ、馬鹿やった言い訳だよねん」

「うるせっ」

電話を切った瞬間に皮肉がとぶ。

「さて、一年D組2番のアズマ君。何か言いたいことはありますか
ね？」

電灯の下、更に皮肉がとぶ。

「……早く家に帰りてえ」

江湮と疲労感をおぶりながら、返事をする。

疲労感の80%くらいは自分のせい。

「僕も早く帰りたいねん。疲れたし」

「……すみませんでした」

「江湮もお疲れで寝ちゃったし、ワンダーに囲まれるし、誰か不幸
の星の下に生まれてるのかなん」

「すみませんでしたっ！」

「馬鹿、江湮ちゃんが起きるでしょ」

「すみません」

事態は進展せず、立ち往生のまま時間が過ぎていく。

「……しかしこいつらもめげないな」

ぞろぞろとワンダーが姿をあらわしていく。

疲労感やら睡魔やら苛立ちから集まっているのか。

睡魔は欲望かもしれないが、とりあえず何かに惹かれているのは確かだ。

光があると霧散して存在できないが、電灯の下だと無駄に時間が経過しているだけだ。

いつそ走ろうか、と以前とつた行動を脳裏に再生させる。

「・・・走っちゃおう？」

緋色が口に出したのはそんな言葉だった。

一番手っ取り早く意見が同一なら決を執ってもいいだろう。

「・・・マジーン？」

「大マジよ」

一季も多分同じ考えなくせに反論すんな。わざとらしい。

このまま馬鹿みたいに突っ立ってるより、遥かにマジだろ。

あとは人目だがそれらを避ける道のりを選択すれば大丈夫だろう。

「んじゃ、行くわよ」

ストレッチをして心身の状態のスイッチを替える。

そんな、プリシヨットみたいな動作はアズマにはないが、目を閉

じて平常に保つ。

「dream out」

一季が先行する形で駆ける。アズマは荷物があるのでその後ろを。最後尾に緋色がつく。

「前に・・・三匹。・・・右曲がるよん！」

何故か楽しそうに聞こえるのは気のせいだろうか。

そんなことも考えるのは若干困難。

以前もだったが改めて重労働に感じる。

今回は江湮を起こさない様にしなければいけないし、精神的にも気を遣う。

でもなんか江湮を他人に任せるのは癪に障る。

もうこんな状況じゃどうもできないけど。

「アズマ、ちょっと遅れてるわよ！」

「あいよー！」

やはり考え事していると維持が難しい。

それ以前に体力的にも問題が発生してきた。結構ヤバめ。

「・・・ふうー、はー・・・ふー」

息切れが背中まで響く。

もう周りにも伝わってるだろう。

ほら、一季が俺に並走している。

「ん・・・一季?」

「ちょっとストップ。すぐ片付けるからねん」

そう言っつて安全な場所へ押していく。

休憩させる程思いやりがあるとは思えないが、今のうちに休憩に甘えよう。

前方に五体程、姿を見せている。

今は疲労感一色だからやはり、これに惹かれてるらしい。

「よっ・・・と」

ビーチパラソルをくるくると回し、その様は棒状の物を扱う様にも見える。

「ひい、ふう、みい、よっといっ・・・ね。面白くないなん」

つまらなそうに、最悪死ぬような立場で笑う。

どこか違和感を感じるそれは、何故かこわい。

「しゅいーんっつ」

的確に向かってきたワンダーの頭を、パラソルの先端部分で沈める。

反転して躲し、柄で急所を衝く。

振るった勢いのまま三体目を砕き消失させ、四体目の頭を先端で穿つ。

その間に飛び掛かるワンダーに対してパラソルを開いて防ぐ。
そして

「おしまいっとなん」

目隠しになったパラソルの横合いから、ナイフが深く刺さる。

時間にして五分も満たなかったが、十分体を休めた。
あとは無事に帰宅するだけだ。

「ん・じゃ・あ、帰りますか……んーとー？……」
「おっおー、やば」

一季が何かに焦点を合わせる。
不吉なモノを見る様な目だが、口調は軽いままだ。

「……一季？」
「んー……緋色には顔見えるん、あれ？」

アズマ達を越えて更に後ろ。不吉なモノは、やはり嫌な感情を込
み上げさせる。

電灯、光の元でも霧散せず形を保つ不吉の象徴。

「イーター（感情を食したモノ）！」

誰が言ったか解らない。いや、もう聞こえないし聞きたくない。

体が心が本能が名前を聞くのさえ嫌悪している。

8th「予想の範囲外」(後書き)

駆け足に進めた様な気もしますが、今回はこのままでいきます。
次回はもうちょい時間をかけようかなとは思っています。

9th「世界を呪いたくなると言った」(前書き)

ポイント下さい。

くれくれで申し訳ありませんがとりあえずできれば。

9th「世界を呪いたくなると言った」

あれは何て言っただろうか。

イーター。不吉の象徴。

他、自己解釈に過ぎないが、あれは虚無。

虚なんてレベルじゃない。嫌悪感が、吐き気がワンダーの比にならない。

憎悪と親近感。憎く、親しく感じるのは何故だろうか。

あれは、あの顔は・・・

「んー・・・アズマ？家着いたの？」

一番タイミングが悪い状況で目を覚ましたと思う。

寝起きにラインもない江湮にはこの状況が解らない。

それに今、どんなにアズマに呼びかけをしても聞こえない。

いや、無意識に会話を避けているのかもしれない。

今何か話すとせつかくの憎悪が薄れてしまう気がするからだ。

「アズマー、さっさと退くぞ。その方が身の為だよん」

一步、ヒトの形をした不吉が近付く。

「また秘密のこと?」

「・・・そうよ。ごめんね、いつも詮索しないでありがとね」

「謝罪か感謝か解らないけどそうゆう約そ・・・えっ、アズ・・・マ?」

アズマの背中から滑り落ちる江湮。というよりはアズマが自ら降りた様に見えた。

「・・・アズマ。どう・・・か・・・し・・・」

それ以上言葉が繋がらない。アズマの表情が憎悪で歪んでいる。初めて見るアズマの、負の感情に捕われた顔。

再度あちらが距離を縮める。アズマもまた距離を縮める。

「・・・はっ、待ったアズ」

「dream out!!!」

「マ」

制止させようとしたが止まらない。躊躇いが引き起こした結果がこれ。

一人とヒトリは、緋色の声が合図だったかの様に一気に距離を縮める。

「ガアアアアアッ!!!」

アズマの手には槍。どれほど技量があるかは知らないが、見るか

らに拙い槍術。

突きなんて力が伝わらず、速度が激減している。

それに相手はなんかおかしい。実体があるのに、槍は素通りして煙の様だ。

そのくせこちらの血がかなり飛び散っている。

こんなの勝ち目がない。向こうにアドバンテージがあり過ぎだ。

「アズマ戻れ！死ぬぞ！！おい癖頭聞こえてんのか！！！」

文節が増える毎に声量も大きくなる。

その言葉に過敏に反応する少女。眠気が一気に覚める。

「

腕が大きく上がる。

今のアズマは簡単に処刑されてしまう。

あいつの腕が断頭台に見えて他ならない。

あと何秒？いつ振り下ろす？その前にアズマを・・・

「・・・っ・・・一季！行く」

すりと横を通り過ぎる影。小さく幼い麦藁帽子を被った子。

「・・・え？」

反射的に伸びる手。掴もうとした手は、空を掴む。

更に手を伸ばす。届かない距離ではないのに、少女は何故か遠い。

「
」
断頭台が落ちる。江湮が駆ける。緋色と一季が追いかける。

血が飛び散る。理性が戻る。視界を染めていく紅。

「
．．．．．何．．．これ．．．血？」

痛みはない。重みがある。体の上に乗る少女の重さが。

「
あ．．．．．ああ」

逆上せた頭が冷静になり、逆に露点を過ぎ思考を凍結させる。

憎悪で満たされていた頭は、真っ白になり何かが瓦解して崩壊する。

「
ああああああっっ！！」

そして憎悪は声になり断末魔へと変貌。

紅に染まった視界は黒になり、最後に意識までもを黒に塗り潰した。

純白で清潔感があるとは言い難いが、医療機具がそれなりにある。
一概に病院とは言えるだろう。かろうじて。

「おいつすよーん」

一季が訪れた病室にアズマは寝ている。

一季は私、緋色に話し掛けたが私は返事をしない。

「・・・ほい、オレンジジュース。飲んどけよ」

無言のまま受け取り、フタは開けない。

正直疲れた。余計な動きはしたくないのが本心。

ただアズマの傍で見守り、アズマが起きるのを待ちたい。

「江湊もまだ目覚めてない。・・・詳細はアズマが起きたときに、
だつてよん」

「・・・ なよね」

「うん？」

「私って嫌な女よね？」

「・・・」

狭い部屋で、声が空気を振動させて伝わる。

聞こえなかったわけではない。聞き間違いも気のせいだ。

あまりにも緋色が自分のことを解っている。

「・・・嫌な女・・・ね。・・・ならこのまま江湊が起きないのがお望み？」

「・・・そう思っちゃうわ。私だつてアズマの隣にいたいもの」

「・・・泣け。泣いて寝ろよ。本当は江湊が昏睡状態になっ

て、かなしいんだろ？」

「そんなこと・・・ない」

語尾が掠れる。涙が頬を伝い、我慢していたものが決壊する。

一度流れた涙をきっかけにして我慢を止めた。

響く。狭い部屋を震わせる程に募ったかなしみ。

アズマと江渥に対してのかなしみ。

「・・・うつ、ひつく・・・うつ」

「・・・あとは寝るよなん。疲れてちゃ看病もできないだろうし」

「うん・・・そう・・・するわ」

アズマの寝ているベッドに寄り掛かり、緋色は目を閉じた。

余韻がまだ残る空間に寝息が二つになる。

一季はまた部屋をでて、一人になる。

一人になったのは思考をまとめるため。

あの状態、あのイーターをまた脳裏に浮かばせる。

「ああああああっ！！」

その叫び声を最後にアズマは力無く倒れる。

気を失ったのがここからでも理解できた。

「・・・一季！」

「わかってるよ」

緋色はダツシユでアズマと江湮を担ぎ離れる。

一季はナイフを構え、三人を庇う様な形で無謀な行動を行う。

ある程度距離を保つが、こちらの攻撃が通らない以上どうしようもない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無謀な行動をとってから何分経ったか。

動かず、ただ本当に突っ立っているだけだ。

唐突に動いたかと思えば、頭を抱え藻掻いている。

緊張を張り詰めさせたままで、そのせいか気付いたときには消えていた。

「・・・・・・・・消えた？」

下ろした腕には軽い痺れと汗。ナイフを仕舞い不気味さを払拭させる。

「・・・・・・・・緋色、アズマと江湮は？」

「えっ・・・とかなりまずいわ。アズマは精神的ショックだけど、江湮ちゃんは傷が深いわ」

「んじゃ急いで病院に行くぞ。緋色はアズマを頼む」

「わかったわ」

一先ず今のことは頭の隅に追いやり病院へと急行。

そうして約二日が経過。

小康状態になり、落ち着きは出てきたが進展はない。

どれだけ考えても謎は謎のまま。とりあえず好奇心の種が蒔かれたことには、嬉しく思おう。

「……何用ですかねん、東雲センセイ？」

「いんや、運動不足だから歩いてんの」

東雲 トウマ。世間一般、俗に言う闇医者。元ファインダーらしい。
い。

詳細不明で好奇心もそそらない奴。

「あと会話不足だから話し相手になれ」

「……話題一。アズマの状態は？」

「精神的ショックがデカイ。今のままじゃべつに問題はない。早ければもうすぐ目覚めるだろ」

若干心の荷が降りる。胡散臭いが腕は確かだ。胡散臭いが。

「話題二。江湮について」

「黙秘権を行使する。そのことについてはアズマがいなきゃ駄目だ」

「……リョーカイしましたよん」

余程深刻らしい。アズマが関係していることは確かで、それにあのイーターについても。

「……話題三。ファインダーになってなんか思いましたか
ん？」

「……なんだ、藪から棒にいきなり？」

「質問を質問で返すのはタブーですね。理由はただの興味本位ですかねん」

一季が敬語だとなんか不気味だ、とアズマは口にするだろう。本人は疚しいことなど（今は）考えてないが、日頃の行いなのかどこか警戒をしてしまう。

このセンセイ、東雲 トウマは敏感にそれに勘づいてはいる。

「・・・まあいい。ファインダーになってどう思ったか、ね。・・・うーんとな・・・世界を呪いたくなった・・・かな」
「・・・なにそれ？僕と同じじゃないですか」
「黙れ。万人が思うことだ」

万人が思うことだとか言うけど、ファインダーって全世界の総人口の1%いるかな。

疑問に思うところは変わったが、とりあえず話はこれで終了。

今度は話し相手が去っていきまた一人になる。

一人はあまり好きではないが、少しセンチになった。

トウマのせいにして見切りをつけ、病室に戻ることにする。

いつ、どこで話したかは忘れたが、二人に聞いたことがある。

自分こと東 東広は二人とは大分違う。

緋色に何度か言われ、その度に作り笑いでごまかされる。

一季にも指摘されたことが多く、その度に変な顔をさせる。

興味本位で二人に聞いてみた。

緋色はファインダーになってどう思ったか。

一季はファインダーになってどう思ったか。

緋色は顔を顰めながら忌ま忌ましげに答えた。

一季は笑いながらいつもの口調で答えた。

「……………うっ……………」

「アズマ?……………起きたの」

久しぶりに見る感じがする緋色の顔。

視界の端に一季の顔も見える。

緋色の目元に涙が溜まっていて起床して即行で動揺してしまっ。

「……………」

「……………アズマ、どうか……………した?」

動揺から一転、夢の続きを思い出す。

そう緋色と一季が言った台詞は

「あ……………確かに世界を呪いたくなるな」

以前緋色と一季が答え、トウマが言った台詞。

唐突に言われた言葉に理解できなかった緋色。

先に気付いたのは一季で続く緋色が逆に動揺する。

「まさか・・・感情・・・消えたの？」

「どうもな・・・かなしくないんだ」

その告知は波をうつて響く。少女の昏睡状態が引き起こした始まり。

9th「世界を呪いたくなると言った」(後書き)

この話は練習合間の昼休みに投稿でした。

かなり疲れて半分寝ながら執筆した気もします。
てなわけで訂正などありますのでご了承ください。

10th「後悔が終わり始動し始める夜」(前書き)

やっつっつと二桁突入です。

楽しんでいる人達やとりあえず見ている人達に感謝です。

閲覧履歴を見て読んでる人がいるんだ、と思うと嬉しいような恥ずかしいような感じでいっぱいです。

10th「後悔が終わり始動し始める夜」

人工心肺をつけられた少女を見つめる。
自分の罪の結果がこれ。

脳裏に浮かぶのは少女との記憶。思い出す度に溢れるのは虚さ。
かなしい現実、とても言うのか。
かなしみが無いこの胸中はどうすればいい。
涙を流せないままに募っていく空虚な感覚。

「目え覚めたか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・お蔭さまで」

視線は固定させたままで愛想のない返事をする。

トウマが呆れた様に息を吐き顎を掻く音が聞こえる。

アズマの隣に立ち、身長差を気にせず聞こえさせる様に話を始める。

「患者、水谷 江湮は正直に言うと言目覚まさない」

高いところから発せられる声は、やけに鮮明に鼓膜を刺激する。
それは怒りを呼ぶ要因になり、無意識に拳に力を入れさせる。

「原因は、一昨日の八時二十分頃遭遇したイーターによる裂傷。アズマを庇う様にしてできた傷」

「……黙れ」

「その際に煙状化したヤツの体が体内に侵入。意識の覚醒を妨害するかの様に混濁して」

「黙れ！！」

血管が浮き出るほど拳を握り、殺気を帯びた目をトウマの目に合わせる。

その目に臆することなく真顔で受け流す。

暴力はこわい。しかし周りが見えない暴力は、足を引っ掛けるだけで簡単に冷める。

顔に振るってくる拳を体を傾けて躲し、足を払う。

地面にされたくもない抱擁をされ、アズマはしたくもない頭突きをした。

トウマは倒れた背中にも更に言葉をかける。

「俺に対して怒んのはお門違いだ。せめて自分の行ったことに見切りをつけて、前に進め。できなかつたら後悔に圧死させられてろ」

その後に「ああー運動した」と言っ歩いていった。

足音が止みまた言葉がかけられる。

「そつだ、あと追伸。紙にさっさと欠落したもん書いて飲み込め。できるだけ早くお姫様を起こしてやれよ、王子様」

癩に障る皮肉を言って、アズマが言い返す暇もなく姿を消した。

王子様はお姫様を眠りから解放する。そんなもの今できたらどれだけいいか。

これから何日を江湮は寝て過ごすか。

俺は二日で江湮は？日。

贖罪は己。代償を払うならいくらでも払う。

筋書き通り王子様がお姫様を眠りから解放できるなら。

「どーもん」

入れ代わり様に一季が現れる。手を差し出してきたのは、意外だった。

初めて友人らしいことをされた気もする。

とりあえず好意に甘え、体を起こした。

ありがと、と小さく言い、ガラスの向こうに焦点を合わせる。

その姿に一季はトウマみたいに息を吐く。

後悔がアズマのことを本当に、圧死させそうだ。

「……………アズマ」

「……………なに」

自虐しているアズマに一季が声をかける。

声をかけたはいいが、言葉が繋がられない。

とりあえず意識は向けられたけどどうしようかなん。

「一季」

「おおふ!？」

まさか向こうから話し掛けられるとは思わなかった。
素っ頓狂な返事したのが恥ずしい。

本当に恥ずしい。辱められた。恥辱されました。

「俺さ……自分で蒔いた種だから……江湮のこと助けるから」

「……その心は？」

「今からアイツを捜して消失させるか」

「おっと、やつちったん」

殴るのは呼んだあとにしようとしたが、自分を抑えられなかった。

反省、反省。三秒目を瞑って今度から自重しましょう。

目を開けるとまだ地面に抱擁されたままにいる。

「どこ当たった？感触的に頬だと思っただけどん」

立ち上がったのを確認して、罪悪感が皆無な口調で話す。

「……つうく……いきなりなんだよ!？」

話を無視して殴られたところからリスタートする。

理不尽で済まないが謝罪はしない。

阿呆発言にうんざりしたから。

「あー・・・うん。その自殺フラグ立てんのやめ。イタいから」

「ふざけんなよ。俺は早く江湮を助けたいんだよ!」

「その言い方だと僕が江湮のこと微塵も心配してないみたいだな」

再度殴りたくなっただが、理性に歯止めを掛けて我慢する。

「・・・・・・・・・・うつ・・・・・・・・」

怒りが籠る双眸は、言葉を詰まらせる。

死まで連想できるほど、冷たく朱い視線。

蛇に睨まれた蛙ではないが、動けない。

「聞き分けるよ、アズマ。もう一度一人でやるなんて口にしたら、あと百発ぐらい殴ってやる」

冗談に聞こえないのは、真剣な顔だからじゃない。

いつもみたいに軽い口調じゃないからでもない。

純粹にこわい。怒りからの恐怖じゃない。

恐怖が顕現して体を包んでいる錯覚がする。

ありのままのこわさ。あのイーターとはまた違う。

「家族を助けたいのはアズマだけじゃないんだよん。緋色だっとな」

少し落ち着きを取り戻して、言葉を噛み締める。

殴られた頬を摩ると痛みではなく、有り難みを感じる。

「・・・・・・・・・・家族・・・・・・・・か」

大袈裟だが暖かい響き。
今まで気づかなかった身近な暖かさ。

「うーん、大袈裟かも知んないけどね。十年以上の付き合いだから僕はそう思うよん」

十年以上。一季と緋色に出会ってからそんなに経つらしい。
アズマにはその半分ぐらいしか解らないが、家族には違いない。

「そう……だな」

「頼れよ。家族なんだから」

饒舌でお節介。ムカつく奴で頼れる奴。
嬉しいよ、こいつが家族（親友）で。

「んじゃ、玄関で待ってるからなん」

「ああ」

すつきりした。喉のつつかえが取れ、胸の燻りが晴れた。

江湮の方に振り向き、後ろめたい顔ではなく、前を向いた顔。

「またな江湮。起きるまで見舞い来るからな」

ガラス越しで話し掛け、聞こえる筈もない言葉を掛ける。
まだ足りないのか、誓いじみたことを立て踵を返す。

もどかしいものだがこれでいい。
届かなくて。聞こえなくてもいい。
面と向かって言えないからこれで。

玄関に出ると二人しかいない。

一季とトウマ。緋色は？、と聞くと後ろ、と返答。
アズマを追いかける形で緋色が出てきた。

「……………オセワニナリマシタ」

「むりくりだな。それより最後に一つか二つお話」

全員が集まったところで話を始める。

この男は変なところで茶々入れるな。

「あのイーターは十中八九アズマのだ。しかしアズマが死んだところで消失はしない」

「ふーん。……………根拠はん？」

「嬢ちゃんと一季の話によるとアズマもソイツに切られてたらしいな」

嬢ちゃんなんて似合わない言葉遣うなあ。

なんて思いながら話に耳を傾ける。

「ならアズマも昏睡する筈だがない。イーターが意識してやったのかもしれない」

「イーターに意識なんてあるの？」

「ある、というよりは出てくるかな。感情との定着が長くなると種が芽吹く様に、自我が出てくる」

「ふーん、昔から dream out が行使できたアズマは、定着が長いとん」

「そうだ。更によく言うとそうゆうヤツは剥がすのが難しい。手強いから心するよつに」

「ゴチユウコクアリガトウゴザイマス」

また片言で話したが今度は無視。
ノリが悪いな、と一季が耳元で囁く。

「見舞いに来いよ」

「言われなくても」

最後まで憎まれ口で終了。振り返りもせず三人で去る。

天気も時間帯も、胸に残る重苦しさを表してはくれない。
退院日和なんて誰も言わない。

話しはしたがあの日のことについては触れない。
アズマはかなしくないが重い気分になる。

そのまま当たり障りもない会話を続け、帰路で別れた。

緋色達の後ろ姿が視界から消えると、全力で疾走した。
短い家までの道のりを走り、乱暴に鍵を開ける。

二日振りの家に感慨するわけもなく、階段を忙しげに上がり自分の部屋へと入る。

はたして、予想通りに、北半球じゃ季節外れのサンタが机の上にプレゼントをしている。

息を整えないままに椅子に座り、書かれた説明を読む。

「感情ノ欠落ヲシタモノへ」

？・欠落シタモノヲ捜ス意思ガアルナラ虚ニナツタ感情ヲ下ニ書ク

ヨウニ

- 2・書イタラコノ紙を飲ミ込ムヨウニ
- 3・飲ミ込ムダラ dream outノ行使ガ可能。ソノコトニツ
イテハ貴方ノ知性ト本能ニ任セル
- 4・ウンダートイーターニ八十分ゴ注意ヲ
- 5・期限ハ一日。決メルノハ貴方自身
- 6・最後ニファインダーニ幸運ヲ

人類ヲ愛スルヒトより』

あまりに阿呆らしく馬鹿らしい。

愚痴は心の中だけに留め、ペンをはしらせる。

書き込む感情は”悲哀”。

それを小さく丸め、口へとほつり込む。

多少抵抗があるかと想像したが、入れた瞬間紙は原型を崩す。

同時に体中を駆ける異物に嫌悪した。

体の中に虫がいる錯覚がして吐き気がする。

嗚咽を堪え、呻き声は体を掻きむしって耐えた。

太陽が若干傾く頃に嫌悪感は治まりを見せた。

汗が粒をつくり、その一つが落ちる。

呼吸を荒げ、小さな笑みを浮かべ小さく呟く。

「遊び（悪戯）の始まりだ」

八月十九日。この日がファインダーとしての誕生日となった。

アズマと一季から別れた緋色は、帰路でアズマの言葉を思い出す。病院で聞こえる筈もない少女への誓い。

「お前に眠り姫は似合わない。必ず俺達が起こすからな・・・か」
口に出してちよつとクサイ台詞だわ、なんて思ってみたりする。
寝ても覚めてもアズマの頭の中に居座る江湮に、若干の嫉妬。

それにしても自分の好意に気づかないのは、百歩譲って解るが江湮のに気づかないのは少し異常だと思う。

あれだけアタックして全滅なのは、江湮の年齢もあるかも知れないが、やはりおかしい。

鈍感で片付けられるだろうか。

しかし欠落したのはかなしみだから解らない。

やはり鈍感なのか。

「あつ・・・ととと、ただいまー」

考え事は距離感を少々狂わせた。

後ろに数歩バックして家へと帰る。

今日から他人の為に更に、忙しさに追われる日々が始まる。

一人は自分の感情は二の次に少女を助ける為。

一人は自分の好奇心と欲望を満たす為。

最後の一人は純粹にたのしさを思い出す為。

三者三様、夜へそれぞれ理由を持って足を運ぶ。

10th「後悔が終わり始動し始める夜」(後書き)

これで一応区切りをつけたいと思います。

次回から形的には第二部ということをやっっっっつと動きに入ると思います。

では今後ともよろしくお願いします。

11th「作戦決行」(前書き)

一応今日でうちの高校は夏休みが終わりを告げます。

課題なんてまだ山ほど残ってます。

執筆している最中ではないのですが気分転換で。

11th「作戦決行」

「夏休みが終了宣告されるまであと五日。

八月の終わりは残暑が厳しい。

地球温暖化か？、と疑う人はいるが夏が熱い事実は変わらない。
毎年何度低いとか高いとか言っても、熱いものは熱い。

それで熱さを感じない工夫を凝らしたりもする。

涼を感じる仕方は人それぞれだが、今のアズマの目の前の状況は
冷汗と激しい喉の渇きが混ざっている。

ただ何も言えず、寧ろ自分は何も言うべきではない。

向こうもそれは同じ。言い散らしても現状がどうなる訳ではない。

「……すみ……ません」

こんな言葉しか言えない自分に腹が立つ。

さつきから謝罪の言葉しか言えないのは、真実が話せないから。

『江湮は交通事故で頭を強打した。その際助けようとしたアズマ
も』という嘘っぱち。

あの裂傷については黙秘。

本当の事を話したところで、なんて考えるのも馬鹿らしい。

ストレスと不安でノイローゼになってしまうだろう。

出された麦茶の氷が溶けてなくなる。

そんな頃によくやく重い口をゆっくり開く。

「責任……責任を感じるな、って言っても無理な話ですね。

……お見舞い来て下さい。……江湊も多分喜ぶ」

「……はい」

いつそ罵ってくれた方がよかったかもしれない。

ここは江湊の夫妻の有り難さを感じるころだろう。

若干痩けた顔を見て、そう感じえなかった。

「では……」

さようなら、ありがとう、どちらも違う気がして言えなかった。

去り際に精一杯虚勢を見せつける。

「よく……勇気を出して来てくれたね」

勇気じゃない。ただ逃げてただけ。こわいから。

こんな優しい虚勢を見せられても泣けやしない。

泣き方を忘れた自分には、泣きたいなど感じはしない。

嬉し泣きやら悔し泣きがあるにしても、かなしみは涙を一番誘う。

俳優がわざと泣くのも、何かかなしい記憶を脳裏に再生しているからだと思う。

それが無いにしても、泣く事などまずない。

雲量はぱつと見て9。天氣的に言えば曇り。複数人がいれば、晴れか曇りか半々で分かれるだろうか。

些細な事でくだらない事。そんな事を考えるのも、心に重荷があるからか。

いつの間にか足は、あの闇医者のところを運んでいる。

あくまで用があるのはそこに入院中の少女だが。

当然看板なんて立てられてないが、病院というよりは診療所の方が合ってる。

違いは解る筈もないけど。

「……………コン……………ニチハ」

何処か抵抗感があるが、とりあえず社交的には振る舞う。

「ん……………一人か？」

いつも三人だから一人だと不自然なのか、不思議そうな顔をしている。

確かにそうで否定できないが、都合が合わないのが人付き合いだ。多分、絶対、果たしてそうだな。

「……………江湮は？」

「奥の部屋で王子様を待ってる。突き当たりを左」

そう言って引っ込む。どうやら患者を相手にしてるらしいが、またどっかの道の人だろう。

偏見をしまい込み、言われた通りの部屋へと入る。
開放的でここでの一等部屋と言える。

その部屋で眠る少女は重苦しい機器が外され、点滴のみ付けられている。

それでも胸中の燻りが晴れる訳ではない。

それにしてもよくこんな信用ゼロなところに、江湮を入院させている。

江湮の両親が納得した理由が聞いてみたいところだ。

「……………江湮……………元気……………か？」

Q・意識がない人は声が聞こえるのか？

A・それは多分ない

それでも何故か話してみたく思う。

植物人間になった人に音楽を聴かせ、意識の回復を図るらしい。
江湮はかなり勝手が異なるが、やって損はないだろう。

「江湮には振り回されてばっかだったな……………今回もだけど……………喜んで振り回されてやるよ」

江湮がいるじゃいるで調子が狂う。いないじゃないでさびしい。
結局江湮がいる方が自分らしくていい。

「……………調子狂うけどな……………江湮がいた方が……………」

目を閉じている江湮の髪に触れる。確かにそこにいない。

江湮の体は暖かくちゃんと生きてる証がある。

「『方が』なんだよ？」

「なななななっ!?!」

突然現れたトウマから逃げる。何故かは解らないがなんとなく。本能的というか反射的というか。

「なんだ〜？ 疚しい事でもしてたのかエロガキ」

「してない！ してない！ 冗談言っな」

「うるさいぞ。静かにしないと去勢するぞ、本気で」

一季といいトウマといい、捻くれた奴が多い。

まともなのは緋色ぐらいだ。

「……はあ……じゃあな江湮。サヨナラ先生」

「もう帰るのか？ 話す相手になれよ」

「用事があるので」

「なんだ？ 嬢ちゃんじゃない女の子とデートか？」

「帰る!?!」

ハハハ、とからかいながら笑うトウマの横を過ぎる。

用事があるのは事実だが、デートは事実じゃない。

仕舞いには怒るぞ、トウマの野郎。

「どうだ、元気でたか？」

「………は？」

「うん、まあまあだな。しけた顔してっとな心配されるぞ」

病院を出たあと暫く物思いに耽る。

一季やトウマが何故からかうか。

「元気付ける為かただ単に楽しんでるだけか。」

「いやありえん。前者は絶対に！」

一季とトウマの笑い顔が脳裏に浮かんで否定する。

さっきのトウマの言動で一万歩ぐらい譲って肯定してやるが、どうも腑に落ちない。

泥沼化して鬱になりそうだ。

用事がある喫茶店へと入り、人を捜す。

店内はアンティークな飾り付けが多く、中世的な感じを漂わせる。

「……………いた」

奥で手を振ってアピールしている。

敢えて奥の席にしたのは周りを気にしてなのか。

とりあえず席に着く。

「……………一季は？」

「まだ来てないわ」

「ふーん……………」

注文を受けに来た店員に、ミルフィューユとオレンジジュースを頼む。

「薄情ね。一季は待たないの？」

「一季はこつゆうとこ好きじゃないんだよ……………多分コンビニのアイスでも食べてる」

「……………ふーん」

それじゃあ、と言って遠慮なしに、パフェを注文する。

そうして注文を受けた店員と入れ替わる様に一季が来た。

「やーひー」

「「どうも」」

言った通り一季は、レジ袋にアイスが入っている。
どちらかと言えば、一季の方が薄情だ。

「さて……………今日から始動する訳なんだよねん」

いそいそとアイスを取り出し、ニヤリと笑う。

こいつは楽しそうだな。俺はどうとも言えないけど。

「そうね。まあ事前の打ち合わせみたいなものね」

「成る程。この喫茶店が非常人の作戦会議の場所ってねん」

「……………とりあえずどうすんだ？」

喧しい例え方をするので正直うるさい。

話も先に進まないの口を挟む。

「……………まあまず能率を高める為にグループ分けね。そうね……………」

「一季は一人で大丈夫そうね」

「僕は一人が嫌いです。それに……………私情が入ってなかるうね？」

「ないわよ」

途中声が小さくなりアズマを蚊帳の外にする。

時々こうゆう事があるので二人は好き合ってるのかと思う。

話題が自分だとは微塵も考えたことはない。

「んじゃ、次は集合時間ね。いつも私は深夜から二時までだったけど」

「そんなもんでいいんじゃないん」

よしオツケー、と言って簡単に了解する。

「……一季はいつも何時頃巡回してんだ？」

「んーんー、暇時に」

何ともアバウトな答えだ。

アバウト過ぎて緋色が呆けている。

とか言う俺は別にこうゆう奴だと見切りをつける。

人生楽しまなきや損、って考えだからかもしれない。

無関心な点が多い。

俺もかなしみを取り戻す為に巡回する訳ではないし。

緋色にしてみれば信じられない話みたいだ。

純粹に欠落したものを取り戻したい奴だからかな。

「……場所はそのつど変えるけど、今回は駅前を半径一キロで」

「……いいけど……捜してるヤツが遠くに行くことはないのか？」

「ないわ。一応感情を食べたイーターは体を求めるわ。つまり私達ね。体は感情を求め、感情は体を求める。お互い磁石みたいに引き合うし反発するわ。でも反発する方が多いわね」

「ふーん……」

例えとしては理解しやすい。そのぐらい解れば十分だ。

「んじゃこの街の外には出ないと」

「断定はできないけど、その考えでいいと思うわ」

アズマはミルフィーユ、緋色はパフエをお腹に入れる。
一季が緋色に「よるとふ」と意味不明発言をして混乱。

解読に数秒。理解した緋色が言い争いを勃発させる。
逆から読んだら「太るよ」ね。つまらない謎掛けだ。

そうして打ち合わせは終了。約束の時間まで、余裕はあり過ぎず
なさ過ぎず。

各々は夜に備え時間を使う。 高ぶる気持ちを抑え、家で震える。

こわい訳ではなく寧ろ武者震いに近い。
そう自分に言い聞かせている。
都合十時間。飯も喉を通らない状態で過ごす。

それでも曲げられない信念が一つ。
江湮を救うまでは死なないこと。

アラームが長い待機の時間を行動に変える。

深呼吸をして夜の街へと踏み出す。
震えは止まった。腹は括った。

アツくツメたい夜への住人となる。

11th「作戦決行」(後書き)

夏休みが終わるのが、悲しいのか嬉しいのかはイマイチ微妙です。

むう、複雑な心境よのう

12th「巡回 遭遇」(前書き)

脱力です。

大会中と大会後に執筆です。

鞭打って動かした頭は、身体以上に疲労困憊です。

12th「巡回 遭遇」

夜の駅前の顔は初めて見た。いや、深夜の街自体何もかも初めてだ。

夜でも眠らず、昼とは違う活気に包まれている。

そんな光景に呆気にとられつつ、待ち合わせへと到着。

ふと見れば、緋色が一人の男性に絡まれている。

「ねえ、嬢ちゃん一人？どっか遊びに行かない？」

ナンパは誰でも同じなのか。質問を独り言みたいに連発している。緋色はただ真顔で無視。

こちらにはまだ気付いてないようだが、かなり機嫌が悪そうだ。

長年の付き合いの賜物で分かるが、それに気付かない男性があわれに思う。

「……あー……ウチノ緋色に何力用デスカ？」

とりあえず横から口を挟んでみる。

乗り気ではないのでやる気のない口調。

しかし会話しないと先へは進まない現状。

それでも緋色は若干ホツとしたような顔をする。
些細な変化に気付いたのも賜物だろう。

男は何か捨て台詞を言うと、あまり多くない人混みへと混じっていった。

「はぁ・・・今度から違う場所に集まる」

緋色のぼやきから話しが開始。

いきなりナンパの襲来によりやる気がた落ち。
愚痴られる自分は適当に生返事をする。

それにしても、不思議には思わないのだろうか。

身長はそれなり。べつに髪も派手に染めてる訳でもない。服装もいたって普通。

ピアスもなし。深夜の住人としては役不足じゃないか。

高校生みたいだから、声をかけるのか。それとも引っ掛けやすそうだから、声をかけるのか謎だ。

「ひょうHEY！イマヒマかい」

またあわれな人が、と溜息を内心でつき、声の主を覗く。

「・・・何してんの？」

「いやいやん、人間観察」

あわれな人は最後の待ち人だった。

この口ぶりからすると、緋色が来る前からいて、尚且つ全て見ていただろう。いや、そうに違いない。断言できる。

「ひとさまの緋色に手え出すな、か。二人ともいつからそんな関係ん？」

「いや、そこまで言っていないし。一季の頭の中ってブレキないの？」

アズマの言葉と緋色のパンチが飛ぶが、簡単に避ける。

緋色もキャラ変わってるから、かなり鬱憤が溜まってるのか。

「さ〜とつとね〜ん、戯れるのはやめますか」

戯れな原因をつくった奴が何を言う。

緋色は戦意を喪失していて、もう手は出さないだろう。

人を掻き分け人通りが少ない場所へと移動。

そして巡回の手筈を確認。

月が顔を見せる今日は、ザコがあまりいないので楽だ。本命も見つけやすい。

「じゃあ、一季は西側。私達は東側ね」

「はいよん。では一時間後に」

楽しいのかスキップしながら、人混みに消えていく。

「・・・楽しそだな」

「そうね」

そう生返事をして、アズマ達も人混みに消える。
巡回するのは、人が少なく、光源があるところ。

本当は人混みの中の方が、犇めき合う感情があっつていいのだが、
人前では行使できない。

それに人は明るい方へ向かう。結果としてあまり旨味がない。

「こら、暴走しない」

アズマの頭をコツリと叩く。

目の先にはワンダーが屯している。

実際には暴走しかけなのだが、放っておくと本当に暴走しそうだ。
手綱役としての緋色。一季なら背中を押して面白がるだろうか。
多分制止しない。思いたくないけど多分。

「さて、アズマ。本命は何だっけ？」

「……江湮に怪我させたイーター」

本来の目的を再確認させ、ビルの上に移動。

些か非常識な登り方だが気にしない。

ビルの間を跳び、路地裏を確認していく。

あのイーターかどうかは感覚で解ると思う。

アズマ自身も感じただろうが、あの嫌悪感と比較できない。

それでも果たして見付かるやら。

「・・・・・・・・・・くわーあー疲れたー」

再集合まで残り僅か。大した収穫もなく、巡回初心者のアズマにはきついものがあつた。

深夜のビルの屋上で、大の字で横になる高校生なんていないだろう。

「見つからないな」

「当然よ。見付かる訳ないじゃない」

「は？」

爆弾発言だ。聞いてないぞそんなこと。

「質問です。出席番号10番、炬 緋色さん」

「何ですか？出席番号2番、東 東広君」

ノリがよろしい事で。そっくりそのまま、おうむ返しだ。

「・・・・・・・・・・で、何？」

「おうええつとー・・・さっきの発言マジ？」

「ホントよ。自分のイーター見付けるなんて、ロシア全土を使って鬼ごっこする様なものよ」

「・・・・・・・・・・ここロシア？」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・鬼ごっこ？」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・ぶぶっ」

可愛い例えだ。ファインダーとイーターとの鬼ごっこね。おもし
ーあー！ーぎみゃー！ー！！

「げほっ・・・痛い」

「集合場所に戻るわよ」

顔面と喉がハンパなく痛い。急所ばかり狙われた。
目とか鼻とか口とか喉とか、じんじんする。

羞恥に触れると暴力が飛んでくる。

長年一緒でも不明な事実がある。当然の事だかな。

解散した場所に戻っていく。その間、緋色は口を利いてくれない
と思ったがよく話す。

先程の例えの細かい説明。

こんなロシアに比べると小さな街も、何度も歩き回っていれば、
ロシア全土を隅々まで行けるぐらいにはなると弁解。

その必死さが何故か笑ってしまう。

からかうつもりはないが、その度に緋色が向きになる。

思えばあの一件から緋色はあまり元気が無かった。

トウマの受け売りではないが、元気は出せただろうか。

そうして到着。一季は先に到着していたようだが信じられない。
疑う点は手に持つてるレジ袋。サンドイッチを口にしてリラックス。
ス。

収穫ゼロなら殴るぞ。

「……………収穫はあったの？」

「んー……………とりあえずほいん」

差し出される袋。中身は飲食物なのだが、一季にしては気が利いている。

収穫ゼロでも殴るのはよしておこう。

「あつ奢りじゃないからねん。割り勘で」

次いでレシートを渡され徴収を始める。

渋りながらお金三百円を払う。

「で、何かいた？」

「いたよん」

「へ……………マジ!？」

疑問を口にしたのはアズマ。二人がかりで収穫無しだから信じられない。

「でもあのイーターじゃないねん。僕は顔見えなかったから緋色がアズマのかなん」

そう言つて「dream out」と呟く。

想造したのはビニール袋製の蝙蝠。

「行け」

主の言葉に従い、蝙蝠は飛んでいく。

別にdream outで想造できるのはものだけではない。
可能なら生き物も出来るが、それなりに細部まで知識が必要。

さっきのは無機物の生物とでも言うだろうか。
できない俺は理解するのは無理。

「おっと、いた………まだ近いかなん」

感じているのは蝙蝠特有のもの。

超音波で感じている。一季がどの範囲まで理解しているかは知らないが、物体の位置情報は解るらしい。

「路地裏……他にザコが複数。……さてどうするん？」

現状を理解できるのは一季しかない。
考えれば安全な場所を見付けられる。
上から覗いて、確認できればいいだろう。

「そのイーターって上から確認できる？」

「まあビルの谷間だから大丈夫かなっ……っ」

体を唐突に抱き抱え震わせる。

息が乱れ、一季らしくないと言えばそうだが、そうは言ってもらえない。

「どうした一季!？」

「っ……ばれたっばいなん。多分来るよん」

ちょうどそのとき、虚な影が視界の端に映る。

雷が落ちたかと思った。轟音の範囲は広く、人がクレーターに目を向ける。

見える人は最低三人。多分誰もが、開口一番こう言うだろう。

「……デブ」

アズマと緋色がハモリ、一季が笑う。

イーターの姿形はそのファインダーと同じ。

顔は見えないが明らかにあれは違う。

「あれ姿形からして全く違うじゃん。俺も緋色もあんな体形してないしー！」

「いやあ、僕が口にした『太るよ』を緋色が体現したのかとねん」

今度は緋色のパンチが当たった。

顔面にきれいにストレートが当たる。

おちよくるのも程々にしましょう、一季君。

「とりあえずどうする、あれ？」

あのクレーターの発生により、人が集まる。

あんなゲテモノに近づくなんて、事情を知らない人は不幸だ。

「んーと……こうするかなん」

腰に隠しているナイフではなく想造する。

「あちよーん」

間の抜けた声だが、ナイフがデブに刺さる。かと思われたが、太い腕で弾き跳んできた。

「わおっ！」

かなり素早い。

一季は体を捻って躲し、また一つ地面にクレーターができる。

「……これは目立つな」

「そうね。……逃げましょう」

人混みを通り抜け、ビルの屋上へと駆け登る。

一季はまた挑発気味にナイフを投げつける。

普通の人には見えないイーターが、どう影響を及ぼすかは知らないがマズイ気もする。

「大丈夫かな」

追いかけてくるイーターを背にぼつりと呟く。

心配3。緋色達がいる安心感が5。こわいのが1。何故か過ぎる江湮の顔に、複雑な心境があるのが1。

今の胸中の割合がこれ。

晴れに雷は鳴り響き、ときに雨を降らせるかもしれない。降水確率は30%。真つ赤な雨が局地的に降る。

12th「巡回」遭遇「後書き」

こんにちはーっ!!--!!

はい、空元気してもこれが限界です。
次回もどうもよろしくねです。(。(。(。／

13th「襲」(前書き)

神様は悪戯をするのか？

するとしたらそれは人ではなく、同じ神様にする。
人間に悪戯をするのはいつも人間だ。

雷が鳴り、三人は跳んで逃げる。

あのイーターの狙いは依然として一季らしい。
一季はしつこく追いかけて回されうんざりしている様に見える。

余裕があるかは解らないが、狙いにならない自分は手持ち無沙汰。
だからという訳ではないが質問。

「一季、あのイーターが屋上をぶち破る事はないのか？」
「んー・・・ないなん」

軽い口調。まだ余裕はありそうだ。

「なんでだ？」
「あー・・・建物とか箱とか壁に囲まれてるやつはなん、一種の結界みたいなもんかなん。で、結界は中身を護ろうとする。特別、あんなのみたいからは強く護ろうとするなん」

一季が指差すのはイーターで、つまりその類のもの。

「それで、穴は空かないし、入ってもこない。誘い込んだりするの
はべつだけど、おいそれとは入れないかなー」

「ふーん」

だいたい理解したところで、一季は話に補足を加える。

「あと人にも働く。泥棒とか侵入するけど、鍵があるところが隙間と考えるといいなん」

つまり壁は目に見える結界で、鍵の付いているところは結界の隙間。

隙間は結界（壁）に穴を空けるよりは容易く、隙間（鍵）が空いていれば、そこから侵入できる。

建物に穴が空かない理由は解ったが、それでも常識の範囲外だ。

「質問はおしまいかな〜……………ふあ〜わわわ」

飽きたのか、それとも眠いのか知らない。が、話が終わって、また追いかけてっことが続いていると思うと、欠伸の一つもしたくなる。

「つまらなそうだな」

「んー、アズマは疲れてる様に見えるかなん」

「……………?……………?……………?」

そんなことはない。自覚もなければ、息切れもない。

どこをどう見ればそう見えるのか不思議で、疑問符が頭を埋める。

「……………まさか自覚ないの?」

「緋色?」

蚊帳の外だった緋色まで、アズマに並走する。

「ちょっと次のビルで休憩。いいわね、一季？」

「おーけーん」

ビルに降り立つやいなや、一季は腰のナイフを手にし、雷と相対する。

緋色は強引にアズマを隅に追いやる。

「いきなりなん．．．．．だっ!？」

手の支えがなくなった瞬間、緋色の背が急激に高くなる。いや、アズマ視点が低くなったただけだ。

「あ．．．．．れ．．．．．？」

「やっぱりね．．．．．一季、五分ぐらい任せた！」

「やれやれ」

ナイフと拳が風を切る音しか聴こえなくなる。どちらも凄みを感じ、背筋に鳥肌が立つ。

「はい、これの中で息をして」

渡されたのは変哲のない袋。疑問は更に増すばかりだ。

「．．．．．何でこれを？」

「．．．．．アズマ、今、自分の呼吸の音聴ける？」

「またも解らない。とりあえず言われた通りに、呼吸の音を確認してみる。」

呼吸はしてる。動いたから多少テンポは速いだろうと予想はしていた。

「……………あ……………」

テンポは速かった。いや、速過ぎた。
気付いてからの自覚は早く、苦しい。

吸って吐くではなく、明らかに吸う方が多い。

「過呼吸ね。ランナーズハイとも言っわね」

一季がよく見かける、と言っただけかな。
喘息みたいに喘いでて、辛そうだとか。
今の俺の状態がそうか。

「酸素のとりすぎだから、二酸化炭素を吸わせる為に袋の中で呼吸して。すぐ楽になると思うわ」

膨らんでは萎む袋。声は出さずに、右手でOKのサインを送る。

「……………イーターとの遭遇でアドレナリンが発生。それによる神経の麻痺。プラス例の治療能力」

顔を俯かせ、小声で喋り始める。
しかしよく聞き取りにくい。

「……………江湮ちゃんのこと助けるのはいいけど……………心配……………させないで」

苦しさは消えた。違うものでまた苦しく感じる。

こんな自分の身を案じる人。周りを見れば三人しかいない。それでも贅沢だ。一人一人が眩し過ぎる。

「五分」

「細かいわね・・・」

律儀に時計を見ながら言う。ただ怠けただけか、何にしても飽きた様に見える。

「さて、向こうもインターバルみたいだなん」

腰を叩きながら、向こうを見据える。

目がないのに視線を感じるのは気味が悪い。

「さて・・・倒した方がいいのかなん？」

「とりあえずそうしないと、どこまでもついてきそつね」

意識が固まったところで、アズマ達も腰を上げる。

「・・・もう大丈夫なの？」

「まあまあかな。それに早く家に帰りたい」

三人ともそれは同じ。これからイーターを倒して、更に巡回なんて死ぬ。

現実的ではなく、肉体的、精神的で。

「よっし・・・ヨイー・・・ゴッ!!--」

一季の合図で広い屋上を駆ける。
緋色に後方支援を任せ、二人が突っ込む。

「ふっ……！」

槍を叩きつけるにしても、アズマの技量はまだ拙い。
実践が最大の訓練だが、それはある程度できる人の事だ。

槍は簡単に躲かれ、懐に侵入される。が、横合いから飛び出す矢
が攻撃を阻む。

イーターが拳を振り上げてから飛んだ緋色の矢だったのに、それ
を難無く避ける。

見た目に似合わない素早い動きに、軽いフットワーク。
フットワークのリズムは法則的。

ポーズからして型にハマったもの。思い浮かんだのは一つ。

「……ボクシングか？」

「……らしいなん」

一季にもそう見えるらしい。多分緋色にも。

そうなるとこいつのファインダーは、ボクサーとなる。
こんな体型じゃ、どの級にも入れないだろう。

「……何か言ってるなん」

深夜。揺らめく夜の空気。音はなく、それ自体が音と言ってもい

い程の静寂。

それに混在する、獣のような息遣い。

発信源はアイツ。辛うじて聴こえる声、と言っていていいか解らないモノ。

「才腹スイタ才腹スイタ才腹スイタ食ベタイ食ベタイ食ワセロ」

欲望と入り混じる感情の声。しかしコイツの言う食ベタイが、何を指しているのか解らない。

純粹に食べ物なのか、それとも感情なのか。

どちらにしる食わせる気はない。

「……コイツが欠落したのって食欲？」

「それじゃ欲求だなん。……多分満腹感が欠落してるかなん」
「ふーん」

減量に負けた、心の弱いボクサー。

その過程で満腹感を忘れたという訳か。

「食ワセロ!!!」

しかし喋ってるって事は自我があるという事。

倒すのはかなり困難。時間の無駄とも言える。

標的は緋色へと変わり、高く跳んではまた雷を落とす。

「くっ」

派手なのは音だけだが、くらったらずい。

「てめえ!!!!」

着地ざま、後ろからの突き。当たる、と思った。しかし、槍は空を突く。

反転。イーターは視界から消え、後ろに悪寒。力は前に傾き、次の動作に動けない。

振り向くと、拳が迫るのを見た。衝撃。体は独楽の様に飛び、空を仰ぐ。

高さ20メートルからのスカイダイビング。こわくはない。空しか見えないから。

ただ痛いだけ。背骨が砕けた錯覚がして痛い。浮遊感が全身を包む。同時に落下していく感じも。

長かった。どれだけ落ちればいいのかと思った。

そして、落下は終わりを告げる。

鈍痛が体全体を襲う。頭がぐらぐらして、痛いのも感じない。

「ぐっ……げぼっ、おえっ」

受け身もへったくれもない。ビルの高さが低いことが幸いしたが、不幸は続く。

雷が追ってきた。霞む視界に虚なシルエットが見える。

場所はどこだ？何か支えにできるものは。

手に当たる確かな固体。それに体を預け、立ち上がる。

預けたものは電灯。もうビル街を抜けつつあるが、そんな事アズマは知らない。

焦点の合わない目で、イーターを睨む。

「……げほっ……くそ、動け……よ」

産まれたばかりの赤ん坊の様に足が覚束ない。

シルエットが迫る。一秒毎に焦り、恐怖が背中を這いずり回る。

「来るな……く、来るな。まだ……まだ江湮を助けてない……来るな……死にたく……ない」

最早声は出てない。半端に残る意識が生にしがみついで、本心を語らせる。

何分経ったか。まだ意識はある。

目に見える恐怖は続いている。

緋色は？一季は？どこにいる？

「あ……」

体が倒れる。もう気力の限界。意識は保てるけど体はギブアップした。

「……だ、大丈夫？アズマ？」

柔らかいものに抱き抱えられたら、次は涙声が聞こえる。

緋色……か？

安堵し、ようやく体の力も抜く。
体を包む緋色の温もりと安心感。
まだ俺は生きてる。

「イーターはファインダーに似る。あのイーターのファインダーはカウンター専門だった訳ねん」

一季の説明を受け、思い返す。

どんな攻撃も必ずアイツは後手だった。

最初の一季のナイフから最後の俺の槍まで全部。

だから今も攻撃はしてこない。

「さて、帰るかなん。とりあえずアズマを早く、横にさせないとなん」

「分かったわ」

「ここからだと緋色の家が近いから緋色の家ねん」

「分かった……わ……って私の家？」

「よし！レッツゴー」

緋色の疑問は無視。さっさと行って、アズマを寝かせなきゃねん。

夜はもう終わり、明け方までの時間は少し長くなる。

13th「襲」(後書き)

えーと、まだ話は続きます。

アズマを寝かしておしまいではありません。

時間の経過が遅いのは悩みますが、これが四季クオリティというところで(笑)

14th 「消失」 (前書き)

ありふれたものに価値はあるのか？
逆に希少なものに価値はあるのか？

ありふれたものは希少なものに憧れ、希少なものはありふれたものに憧れる。

どちらも何か足りないと感じるだろう。

14th「消失」

「・・・窓から家に入るなんて、どこの泥棒かなん？」
「うるさいわね。いいからアズマのこと寝かして」

時間的に言えば未明程。しかし夜帰りで男連れというのは、言い訳できない状況である。

過去巡回の為、遅くに帰る事はあったが今の状況は初だ。

「んじゃ、俺も帰るかねん」
「うん、じゃあね」

そう言っって意味深気に笑う。

明かりが点いてない部屋。ぼやけて見える筈なのに、何故かはつきり見える。

「・・・何よ？」
「襲われんなよん」
「なっ・・・!？」

一層にやけ、窓から部屋を出ていく。
何か言い返してやるう、と思ったが、その姿は既に消えていた。

「・・・・・・・・何よそれ・・・・」

暗い部屋に微かに響く。アズマはもう夢の世界にいて、やり取りは聞こえていない。

もちろんそれでいい。間接的に知られたら、目も合わせられない気がする。

「・・・・・・・・寝よ」

聞こえる寝息に促されて、眠りに誘われる。

独占されているベッドの脇に布団を置き、横になる。

「・・・・・・・・眠れるかな」

意識してしまうのは仕方ない。時間をかければ、あっという間に朝だ。

軽く願望も混ざっているが、直にそうなるだろう。

静かに目を瞑り、深く息をする。

落ち着かせる為と、早く眠る為。

高鳴る心臓を暗闇で落ち着かせ、意識が途切れるまでの長い時間を、ゆっくり待つ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
・・・・・・・・寝れない

すぐに朝になる、という願望は打ち砕かれ、目が冴えていく。体を起こし、アズマの寝顔をじっと見つめる。数秒見つめた後、頭を小突いてみる。

何十分か前に言われた一季の言葉。

襲われんなよん、と言われたが、アズマが起きる気配はない。

寧ろ私が襲っちゃおうかな

その考えに至った時に、思いつ切り自分の頬を抓った。

顔は真っ赤に紅潮。抓ったせいじゃなく、自分が思った事に対して、羞恥を感じる。

「はああああつ・・・~~~~っ何考えてんだろ」

お年頃の少女という訳だが、これでは死んでしまう。大袈裟だが比喻ではない。好きとはそうゆうものなのだ。

しかし困ったわ。これでは寝れないわね。

少しアズマと距離をおくため、部屋を出ていく。

頭を冷やしたいのもあるが、こんなに意識していると、改めて痛感してしまう。

眠る家を右往左往し、じっくり深呼吸。

麦茶を口に含み、部屋へと戻る。

意識しない。触れない。もし起きてても無視する。

「よし」

何とも幼稚な意気込みだが、恋は短く、童心に帰るといふもの。大人っぽさがとれた、高校生も輝かしいものだ。

マイペース、マイペース。平常心、平常心……

呪文の様に、心中で何度も唱える。

逆に言ってしまうえば、意識しないように考える時点で、意識してしまっている。

つまりもう前提からして間違いだ。

部屋に入るなり、無意識の内に焦点は傾く。

少しだけ、と思っても、その少しがマイペースも平常心も全て瓦解させる。

「……………アズマ!？」

瞬きするくらい短い時間だった。

ちらっと、一瞬見ただけだが、それでもアズマの異常に気づいた。

目は瞑ったまま、何かになされる様に、顔が苦悶の表情を浮かべている。

アズマの持病とも言っていていいし、繰り返される悪夢とも言っていない。

悪夢の元凶を見て魔される。いつもの事だが、そんなこと緋色は知らない。

思い当たるのはイーターとの戦闘でできた怪我。
それしか、アズマの異常の原因を自分に説明できなかった。

「アズマ！？ねえアズマ、どうしたの！？」

当然パニックに陥る。泣く手前、助けを呼ぶ寸前、大声はもう出
した。

普段の緋色とは思えない光景。その普段の姿を知っている人なら、
皆驚くだろう。

必死で肩を揺すり、涙目になりながら、アズマの意識を浮上させ
ようとする。

涙を堪えながら、何度も名前を、東 東広という名を呼び続ける。

しかしそれももう尽きた。涙を溜めに溜めた瞳から、一筋の粒が
落ちる。

アズマの顔にそれが落ちて、次に胸に顔を押し付け手でバシバシ
叩く。

頭が真っ白になっているので、加減なんて言葉は知らない。

部屋に何度も人を叩く音が反響し、形容し難い感情が胸中に募る。

「……………ぐっ……………うっ」

「……………アズマ」

叩き始めてからようやく反応が返ってくる。

胸を叩くのを止め、引き起こした意識を確かなものにする為、顔
をゆっくりと撫でていく。

「アズマ」

何度呼んだかわからない名。呼んだ数が、心配していた度合いと
言える。

不意に、それこそ勢いよくアズマの瞼が開く。
目を覚ませば自分の名前を、疑問を含ませながら呼ぶと思った。
しかしそれは間違いだ。

「アアアアアアアアアア！！！」

いきなり緋色の首を掴み、ベットに押し倒す。
響きとしては、ピンクな表現ではあるが、現実とは違う。

純粋な殺意と恐怖。夢の残滓が脳裏を漂い、悪夢から抜け出して
も目に映るものが全て虚。

その為、緋色も夢の登場人物にしか見えていない。

息を荒げ、緋色の首筋を掴んだままだが、体は退けている。

力はあまりかかっておらず、声も出せる。

小さくそっと、はつきりと聞こえる様に名前を呼ぶ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・アズマ」

体をビクリとさせ、手にかかる力が若干緩くなる。

アズマは子供だった。悪い夢に怯える様な幼い子供。
首を掴む手も震え、目も恐怖に澱んでいる。

孤独に怯える子供から恐怖を取り払うのは、誰かがいると認識さ

せる事。

力の抜けた手を除けて、体を起こす。

「・・・・・・・・アズマ」

もう一度呼ぶ。今度は、恐怖を感じなかったようだ。体の震えが止まり、視線が重なる。

それを確認してアズマの体を抱いた。

顔を胸の前に持つていき、柔らかく抱きしめる。

それで完全に安堵したようだ。

静かな寝息がまた空気を振動させる。

安らかに、今までのが嘘だったかの様に。

「ふう・・・・・・・・」

ようやく一息吐くが、今思うと体温が二、三度上昇しかねない出来事だった。

赤面し、今後まともに話しができないくらい。

幸いなのが今、睡魔に襲われているという事。

また違う時に思い返せば、変わらないのだが、その時はその時で。

さて、と呟き自分の布団に戻ろうとするが、アズマの手が緋色の体を掴んで離さない。

とりあえず欠伸を一つ。何となく面倒になったのか、体勢を崩し眠りへと引き込まれていく。

朝になったらこの重大さに気づくだろうが、家族にも多大なる影

響を及ぼすだろう。

その話は翌朝になったら、また語られる。

こうして二人は夜明けを迎える。

lightning's disappearance” 雷の消失”

三人のファインダーから別れた後も雷は跳び続ける。

しかし今度は追う方ではなく、追われる方。

鬼ごっここの鬼と逃げる役が反対になった。

何故逃げるのか？

そんなの自分でも知らない。元々思考する機能なんて、備えられていない。

「コ……才腹スイタ」

いきなり現れたファインダーは、問答無用で右肘から下を落とすた。

更に雷は速度を上げ、不協和音となり明け方の近い街に響く。

それに追走する影。暗いのと、そいつは異様に素早いので、小さな影にしか見えない。

追跡者は笑う。どこまでも追いかけて、いつまでも笑う。

「食・・・ワ・・・食ワセロ」

また月光に煌めき、刃が牙を剥く。

月をバツクにした一撃は、雷の左腕を綺麗に落とす。

「くくくく・・・」

落ちた虚な左の肘から下を一瞥し、更に不気味な笑みが酷くなる。

得も言われぬ快感が追跡者の全身を流れる。

笑い声を殺し、楽しみ的一片まで最後にとっておく。

「ヒヤハ・・・」

声は伝わる。耳などないイーターに確かに伝わる。

「才腹スイ・・・イ」

その声はイーターに何かを芽生えさせる。

空腹感しかないこの胸中。あの目を見る度、視線を感じる度、声を聞く度、切られる度に新たなモノを芽生えさせる。

もちろん全て錯覚でしかないが、『モノ』は違かった。錯覚ではない事実が、どんどん成長していく。

「右二の腕・・・左肩・・・左膝・・・右太股」

ギアを上げたのか、一気に体のパーツは無くなっていく。それに合わせて、『モノ』も成長しもう芽が出てきた。

「コ・・・コ・・・ワ・・・イ」

はつきりと感じる新たなモノ。空腹以外の感情。

それは『キョウフ』だった。

「コワイ・・・才腹スイタコワイコワイコワイコワイ」

その言葉を聞いて、影は満足した様に、先程とは違う笑みを浮かべる。

不気味さは二割程増しているが。

「何で恐怖が芽生えたか解るか、なあそのイーター？」

イーターに言葉を理解する機能はない。

それはよつぽどの自我があるモノだけだ。

それでも影は話しを続ける。

「理由は簡単。それは俺が恐怖の権化とも言つ存在だからさ」

説明は終わり、最後に残った首が落とされる。

「くくくつ……ハハハハツハ、ヒィーアツハー！！！！」

楽しみの一片一片は、全て揃い一気に昇華する。

絶頂を越え、一周しテンション200%を突破する。

闇夜の哄笑は、大気をほんの少しだけ揺らし、誰もが迎える朝に消えていった。

14th「消失」(後書き)

どーもです。

テスト期間中です(笑)

まあ追試を受けなければいい、という考えだからテストもへっちゃらだーい

筆者は壊れているので悪しからず

15th 「断続的な曇り」 (前書き)

言葉は自分と他人を縛り解く。

殺すも生かすも自分次第。

どう受け取るかも自分次第。

15th「断続的な曇り」

気まずい状況なんてものは、いくらでもある。

あの件で江湮の家に訪れた時もそうだし、一季に何か言った時もあった。

十七年生きていれば、他にも数え切れない程ある。

今のこの状況もあるが、好きで作る人はいない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙は二つ。アズマと緋色のものである。

原因としては、やはり四日前の事だろうか。

某市内の某公園。密談、という言葉とは無縁の場所だが、密談の最中。

進行役の緋色は、無言のまま。全然捗りやしない。

ああ、お腹空いてきたなん

一季は捗らない密談にブランコに乗って、空を仰ぎ、空腹を気長に待つ。

アズマとしては、何かしら助言とか、この気まずい雰囲気을打破

してくれるものを、一季に求めている。

緋色の顔を窺ったり何か切っ掛けを模索する。
その度に視線が重なり、どうしようもなくなる。

確かに緋色の不機嫌の原因は俺だけど、でもな女子の腕に抱かれ
てて、一緒に寝てたんだ。

昨日の夜何あったか知らないし、緋色は何もない、って言うし、
勢いで一線を越えたかも解らないんだよ。

何も無いなら何で、起きたら緋色と目が合って、きっかり三十秒
何も言わなかったんだよ。

俺だって思春期の男の子なんだよ。お年頃なんだよ。
男の子の生理をどうかしてくれよ、バカヤロー。

一人悩み藻掻いて、自分に愚痴っている。

その様を緋色は見物していたが、内心的にはアズマと同じ。

自分一人だけなら、悩み藻掻いて、それに穴を掘って入っていた
だろう。

悩み事は二人とも同じ。話せば和解して、万事解決。
話せないのは、何かが歯止めを掛けているから。

よく解らない何か。それを知ろうとするのは、結局は話さないと
解らない。

二人の似た様な動きを、一季はブランコから眺めている。
不器用だなん、と思いつながら移動。

集合場所と時間を一季好みに決め、密談はこれにて終了。

帰り道での会話はゼロ。アズマも緋色もどちらも話しをせず、一
季にも何も言わなかった。

噛み合わなくなり始めた歯車二つ。
直ぐに噛み合うだろうが、今夜中には片が付くだろう。

足はあまり乗り気ではない。そのせいか集合場所に着くまでに、かなり時間がかかっている。

やはり緋色の事が原因として、浮上してくる。

「……………ああ……………どうしようか」

別段どうしようもこうしようもない。

どうせ緋色と二人になる機会があるんだ。

あの晩何が起こったのか、しっかり話して、お互いすっきりすればいい。

前向きに考えた事により、足は巡回に向き始めた。

今回は前回より、十キロ程離れた場所。

『ディープレス』という和洋レストランの前で待ち合わせ。

駅前よりは人通りが少なく、立ち並ぶビルも少ない。

「……………ん？」

先客はいない。時間にルーズな緋色がまだ来てないらしい。

場所を間違えたかな、と不安が頭を過ぎったが、見渡すと緋色が視界に入る。

「……よっ、よお」

軽く片手をあげる呼ぶと、向こうも手をあげる。昼に会った時とは、あまりぎくしゃくはしていない。

「……また一季遅れてんな」

「……そうね」

自然に話せてはないにせよ、とりあえず会話は出来ているから良しとするか。

「……」

「……」

駄目だな。会話も数秒間だけだったし。何より続きやしない。

何を話そうか模索していると、最初の目的に行き着いた。

気まずい空気の理由を聞こうとしてたんだっけ。

「「あのさ」」

なんだろうっね。このシンクロ感。こうゆう時ばっかなんて呪いたくなるよ。

切り出そうとした言葉は、緋色とのナイスシンクロで、見事に引っ込む。

某水泳の選手じゃないけど、場面的に掠りもしないけど、何も言えねえ。

「……………な、何？」

「……………緋色も……………何だよ？」

どぎまぎして、目も合わせられなくて、ふりだしに戻るだ。

結局、昼に会った時と変わらん。

「先……………いいかしら？」

「ん？……………いや俺が先に言う」

強引に説き伏せ、と言ってもただ先に言う、と梃子でも退かなかっただけだが。

「んじゃあ聞くけどな」

「……………うん」

「四日前の、あのイーターにやられた後……………俺、緋色に何か……………した？」

一瞬、緋色の顔が翳る。触れてはいけないタブー。

傷付くのは相手。相手を傷付けたくない、という顔。

「……………驚かないでね」

「そこまでへビーなのか」

こつゆつ台詞は重大な事を、強調させる気がする。
逆効果なんじゃないかな。

「……………アズマに襲われたの」

「……………はっ？」
「二度も言わせない」

頭を小突かれ、申し訳なさそうな表情に変わる。

言われた言葉を脳裏で再生。オソワレタは襲われただよな。
俺って獣、畜生に成り下がったのか。

「えっと……大丈夫……じゃないわね」

「いや。緋色の方が大丈夫なのかよ？」

「別に押し倒されただけで、ちよっと痛かったけど、なんともなかつたわ」

「責任とります！！！」

アッパーカットくらった後、鳩尾を抉って、倒れたところをマウ
ントポジションして、顔面に連続パンチをされた気分だ。
驚き通り越して、罪悪感でノックアウトされてる。

「俺もう生きてけない」

アズマが想像している事と、緋色が実際にやられた事は、どちら
も同じ。

責任を感じる点も同じだろう。

実際、深く傷付くのはこれから話す事。

「なーにやってんだよん？」

タイミングが悪いかどうかは知らないが、漸くの集合。
いつものように、レジ袋を片手に提げている。

「罪悪感による死への逃避」

「……………さ、巡回開始しよん」

無視して、さっさと巡回の開始を促す。

軽くいじけなくなっただが、いじけても相手にされなさそうだからやめ。

予定通り、アズマと緋色、一季で別々になり、月が隠れた街を回る。

緋色と気まづくはなくなったが、今度は目を合わせられない。誤解が晴れると新たな誤解で曇る。

結局、思い違いなだけだが、縊りが戻ったのは良しとしよう。

「あと何分ぐらい？」

「えーっと、あと……十五分つてとこかしらね」

ザコを相手にしながら、路地裏を覗いていく。

数えて九つ目。収穫はない。

淡いライトがビルの屋上を照らしている。

一段落を終え、心身を休ませる。

軽く深呼吸をしてアズマは空を仰ぐ。

仄暗い空。星が見えず、僅かに月の居場所が見える。

「……………アズマ？」

「ん？」

視線を下へと戻し、生返事をする。

ただし緋色の方には向かない。

遠くを眺め、目を合わせない様になっている。

不自然、と言うよりは明白あかひびに目を背けている。

その行動が緋色の癢かゆに障る。

「なんで向こう向いてるの？」

「……………ただなんとなく。気分……………かな」

また適当な返事をして、手元に視線を移す。

面と向かって、緋色に申し訳ない、なんて言えない。

「アズマ！」

自分の名前が呼ばれると共に、首を45度捻られる。

当然目の前には緋色の顔。目を背ける暇もなく、緋色の目に視線が吸い込まれ動かせない。

「あ……………うつ……………あ……………」

「……………何で……………無視するの？」

決定打だった。視線は固定され、ピクリとも動かない。

退く事は出来ないし、かと言って体は動いてもくれない。

「私に何か言えない事でもあるの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・いや」

「なら・・・・・・・・どうして？」

訴えかける瞳。縋りが戻ったが、まだ開いている微妙な距離。

今閉じなければ、今後これからも開き続けたままな気がしてしま
う。

「・・・・・・・・襲われた、って言ったよな。・・・・・・・・なんか、

それで責任感じるとさ・・・・・・・・目え合わせづらくて」

「・・・・・・・・そう。・・・・・・・・でも首を軽く絞められただけよ。これ
以上悩み抜く事はないわ」

「・・・・・・・・ん？」

なんか自分が考えてた事とは違う。

はてな？、と頭を抱え、数秒の時間を要し思い切って聞いてみた。

「・・・・・・・・襲われたってさあ・・・・・・・・こう卑猥な事じゃあないよ
・・・・・・・・な？」

きょとんとした顔。何言ってるの？、みたいな。

どちらにしても、否定すれば片方を認める事になる。

自分が想像していた事が間違いでも、緋色を襲った事実は変わり
ない。

「・・・・・・・・アズマって・・・・意外と破廉恥ね。襲われたって、
そんな事考えてたなんて」

予想通りの言葉だが、新たな罪悪感が自身を潰す。

なんかだんだん、自分が信じられなくなる。

自身の記憶に恐怖し、無意識の内に体は他人を襲う。

やっと、自分を、自分の事を大切に思ってくれる人に気づいたのに。

「……………なあ……………どうすればいいかな」

力ない問い掛け。微妙に浮きかけていた空気は、底辺まで沈む。

頭の中は混沌で漆黑。唯一浮かぶ考えは、『死』だけ。

「……………私達はアズマの手綱役って言ったわよね」

何も考えられない。ただ緋色の声が聴覚を刺激する。

「アズマが暴走したって、死のうとしたって、今みたいにネガティブになっても、私達がアズマを抑えるの」

言葉に力が入る。こんな、暴走して、死のうとして、ネガティブでもまだ思ってくれている。

「だから全部受け止めるから、何だって突っ掛かってきてよね」

こうゆう時に泣けない自分が恨めしいな。

かなしくてでなく痛くてでなく、嬉しくて。

ならせめて行動で、言葉で示そう。

感謝しきれない程感謝してる。

「ありがとな、緋色」

曲げた腰を伸ばし、緋色に抱きつく。

自分でも解らないまま。無意識の内にという事で片付ける。

ただ緋色は顔を真っ赤にして、呆然としていて理解不能な様子。

お互いにまた顔を合わせた時には再度、最初に戻ってしまった気がする。

何も言えなくて、視線を逸らして浮っついていてる。

そんな空気を破る携帯の着信音。

空気が空気だった為、心臓が飛び出しかける。

電話の相手は一季。集合が遅いから催促させる為の電話か。とりあえず出てみる。

「もっしも」

『ちよつと助けてくんないかなん』

言葉を遮り、危機に陥っている声で話す。

「一季？」

『つと、場所は空見てねん』

言い終わるより早く、光が夜空に浮かぶ。

次いで電話が切れ、焦燥感が込み上げる。

「……緋色！」

無言で首を縦に振り、ビルを跳ぶ。

光の余韻はまだあり、逆にそれが起爆剤へと変化する。

今だに曇る空は今後の何を案じているのだろうか。

15th「断続的な曇り」(後書き)

最近思った事を前書きに書いています。
でも後で読み返すと激烈似合いません。
ネタも直ぐに切れますし。

16th「傷付けない覚悟」(前書き)

痛みなんてものは、結局被害者にしか解らない。

周りの人はいつだって、それらを眺めては、助けようと思わない。
笑いのネタにしかしない。

もし自分達に降り懸かってきたら、助けを願うから滑稽だ。
笑うしか出来ない。

16th「傷付けない覚悟」

宵闇を照らしていた光源の残像。

強烈に脳裏に焼き付いているそれは、胸騒ぎの象徴でしかない。

焼き付いていたそれが若干薄れる頃、耳に障る金属音が響く。

音の方向に影は三つ。二つは一つを追い詰め、一つは二つから遠退く。

恐らくは単体なのが一季だろう。

いち早く自分達に気づいた一つが無防備のままこちらに向かう。

数で言えば3対2。流石に不利と思ったか、向こうは間を空ける。

「……一季……知り合い？」

「何でそう思のかなん」

「人に恨まれそうな事はつかやって」

肩パンされました。地味に痛いってなんか、下手に痛いより酷な気がする。

急いで来たのに余裕ありそうだから、焦って損した。
肩パン喰らったし。

「なるほどね。さっきの行動は救難信号って訳かよ、ガアキ」
「仲間呼んだ」

さっきいたビルより暗く淡い光。

そんな中から最初に聞こえた声は女のもの。推定身長170。闇の所為かそれ以上に大きく見える。

短い台詞の人は小柄でサイズの合わない服を着ている。どちらかと言えば男の子だろうか。

「・・・・・・・・・・さて、一息ついたところでん・・・・・・・・何者かなん？」

在り来りだがそれが今知りたい事だ。

若干状況が飲み込めないアズマにとっては、何者より、何故襲うのか、の方が気になる。

「はっ、ガキ。そんな事聞いてどうすんだい？口説いてるのか」

「オロロロロロロロロ・・・・・・ゴメーンチェンジで。想像しただけで悍ましいなん」

明らかに神経を逆撫でしてる。そんな挑発になんか相手から変なもの感じるよ。

「この・・・ガキ」

「なんすかオバハン」

表現するなら青筋が入るかな。

細部まで詳しく見えないが、声だけなら震えているのが解る。多分怒りで。

「・・・・・・・・・・ぶっ・・・・・・・・殺す」

訂正。間違いなく怒りで。

名前も知らない女性は、高く跳び一気に距離を詰める。

しかし話し合いもなしにいきなりの戦闘勃発。

流れに任せているとは言え、遣る瀬無いのがアズマの本音。殴る度胸はあっても、人と命のやり取りをする度胸はない。

「ちっ……」

こんな状況に舌打ちして、できるだけの対応を予想。落下予想地点では、一季がナイフを構えている。

着地は思いの外派手。鼓膜を破る程の金属音。耳を押さえたくなる。

「ふふーん、こんなもんですか？」

それでも一季は動じない。余裕で再度挑発をかける。

軽い煽りが、理性の沸点を越えさせる。

歯ぎしりし、奥歯が割れかねない程に力を込めている。

「……このガキ！」

何度ガキと口にしたか解らないが、その言葉や見解は間違いだ。ガキと評するのは少々外れている。力的にも、年齢的にも。

「……くっ……そお！」

苛々しげに罵倒。余程カンに障るらしい。
逆手に持った二つのナイフを苛立ちに任せて振るっている。

二人はだんだんと離れ、というよりは一季がわざと誘導している
様に思える。

「・・・むー」

こちらは二人、向こうは一人。

相方の女性とは違い、こちらは、物静かで話し合う余地はありそ
うだ。

「あー・・・こんばん・・・は」

「こんばんは」

友好的と言うか、警戒心がないと言うか、とりあえず話せるのは
いい。

「えっと・・・名前は？」

「ファル。あなた、名前？」

「ああ・・・東 東広」

断続的に会話が続き、アズ、アズと繰り返している。

話しをして悪い印象はない。争いたくもないし、このまま丸く治
まればいい。

「なあファル、何で争ってたんだ？」

「・・・命令。そう、だから、アズ、殺す。dream out」

「はっ？」

手が出ない袖が殺気もなしに振るわれる。
顔面。頭を掠り紅い線が入る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・つっ」

右のこめかみから額まで斬られた感覚。
斬られた箇所が熱く、紅が視界を派手にする。

「アズマ!？」

突然の出来事。争いなど微塵も予想していなかった。
油断としか言えない。もともと向こうは殺す気みただ。

「・・・・・・・・やるしかない・・・みたいだな」

覚悟はまだ出来ていない。それでもやるしかない。そう自分に言
い聞かせる。

死ぬ訳にはいかないから。

「最後の話。争わない事は出来ないのか？」

「出来ない」

「・・・・・・・・・・緋色、援護頼む」

タオルで傷口を巻き、想造した槍を構える。

右目の視界は皆無。じくじくと痛みはするが、気にしない。

強く槍を握りしめ、ファルの目を見つめる。

綺麗で澄んだ瞳。暗がりでもそれが解る程に綺麗だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ぶっ!」

息を吐き出し、空気を切り裂きながら横に振るう。それをアズマの額に線を入れた左腕で防ぐ。鈍い金属音。袖の下に隠れているそれはやはり剣だ。

衝撃を逃がしきれず、体が飛び着地点に三本、矢が追い撃ちをかける。

「 やっ 」

左膝、右肩、下腹部に刺さると思われたそれらは、剣で払われる。夜目がきくのか、動態視力がいいのか、正確に矢を払ったのは凄さを感じる。

「 強いイメージ。剣もたない 」

怪しく黒光りする剣と言うよりは刀だった。

よく見れば刃零れしており、攻めるのに躊躇いを見せる。

決心がぶれたままなら、イメージもぶれ、想造したものは脆い。ぶれもせず、何もないなら本心は固まったらしい。

勝利も敗北もせず殺さない覚悟。

殺したりでもすれば、一生引きずるだろう。

そうなれば、dream outはブレブレで殺した感触が払拭しない限り、行使出来なくなる。間違いなく言える。

殺さない加減。それがいつまでばれないかはファル次第。だから長引くと不利になる。早めに終わらせるのが無難だ。

緋色が牽制しながら、左側ばかりを狙う。
武器を破壊すれば、殺さずに出来る。

武器が消失するイコール、イメージが保てない訳だ。
つまり頭のイメージに綻びが生じる。
限界に到達したサインとも言える。

「くっ」

と、一口に言っても簡単ではない。
2対1でも実質的には向こうが上。

手負いで動く度に、傷口の温度が上がっていく。
血も大分出ている。これ以上は動きもイメージも、保つのが難し
さを増す。

「……………しまっ」

躲された槍の横から、素早く黒刀が閃く。
傷を抑えていたタオルが飛び、出血量がどっと増える。

鮮血が顔半分を覆い隠す。かろうじてシルエットが見えるだけで、
他は何も見えない。

「ちいっ！」

紅い視界に映る刀を見て、反射的に右に跳ぶ。
コンマ一秒で、刃が風を切る音が過ぎる。

心臓が更に体外へ血を流出させる。

九死に一生を得たではないが、あんな事があと二、三回続けば血死になる。

追撃に対して構えたが、矢がファルとアズマの距離を空ける。

時間が出来たのは有り難いが、もうやばい。

槍はぶれ始め、足もふらつく。

ファルはまだ健在で緋色もまだ。

俺が足を引つ張つてると思うと情けなくなる。

気合い入れる、俺。

ふらつく足を強引に押さえ付け、双眸を細く鋭くさせる。ぶれ始めた槍を正し、深く構える。

「大丈夫、アズマ？」

「なんとも言えない」

押さえ付けているのは、寧ろ恐怖かもしれない。

死ぬかもしれない恐怖。殺してしまうかもしれない恐怖。複雑さ

が、入り乱れ、それでも心は生にしがみつく。

何よりこわいのが、このままアズマが死んで、江湮が一生眠り続けるのがこわい。

自分の為にしがみつくのではなく、他人の為に生にしがみつく。

酷く歪で捻れている。その思い、江湮を助ける事を遂げたなら何を感ずるか。

他人の為に生きる事が、アズマの破綻した生き方なのかも知れない。

はつきり言つて偽善者だ。

「……………まだやる？おとなしく捕まる？」

「……………難しいな」

タオルが飛んだおかげで、視界が全開になる。

依然として視界に紅が絡み付くが、さっきよりはマシ。

プラマイゼロだな。

「……………緋色　をしてくれ。次が……………最後……………かも

な」

「……………仕方ないわね。……………死なないわよね」

「当然」

アズマと緋色が一直線に並ぶ。その延長線上にファルがいる。

陣形としてはかなり変なものだ。

「……………これで終わらせよう」

槍は隠す様に後ろに構え走る。ファルの脳裏に過ぎったのは突き。

槍の必殺の極致。

軌道は点で一瞬。避けるのは無理と判断。

素早く横への移動を開始。まだ槍の距離はリーチには届いていな

い。

「……………残念」

アズマの姿勢が不意に低くなる。途端、頭の中で危険信号が鳴り響く。

その向こう、アズマの体で隠れていた緋色が、間髪入れずに矢を放つ。

一秒あったかどうか。一步間違えたら、アズマの致命傷だろう。

「くっ」

咄嗟の事で硬直した体に、矢が飛来してくる。

寸前で黒刀で払うがバランスが崩れ、次の動作には入れない。

「・・・終わりだ」

目の前で響く声。矢を追う視界の端に、槍を振りかぶる姿を見る。

バランスを崩した体に、ではなく線の軌道は黒刀へ。

一撃で刃零れさせた、槍は黒刀を叩き折る。

鈍い音は敗北の音。強制的にイメージに罅が入り、黒刀が霧散する。

頭に衝撃が走り、体に力が入らない。黒刀が砕けた事実を受け入れない思考が、頭の中でショートしたみたいだ。

体は動くが、命令を出す頭が働かない。

深呼吸をして、息を吐き出す。無傷の敗北とは、なんか変な気分だ。

とりあえずファルは目を閉じて眠る事にした。短いだろうが、せめて戻って来るまでは。

16th「傷付けない覚悟」(後書き)

なんか今、さ迷ってる気がします。見ていたドラマの最終回が終わって、感動したのか落ち込んでるのか。
むなしい事には変わりありませんね。

17775「ドリーマー」(夢想する者)「(前書き)

『星』って漢字は日と生きるって書くけど、人はよく星に例えられ
な。

星の数程いる人間みたいに。そしたら、人が星なら誰と生きてる
のかな？

17th「ドリーマー（夢想する者）」

ファルが眠りについてから十分くらいたったか。気は引けたが、
想造したロープでファルの体を軽く縛る。

その間も寝たままだから、太い神経してるな、と感心させられる。

「一季は大丈夫・・・よね？」

「大丈夫だろ。あいつなら殺しても死なないよ」

いや、殺したら死ぬか。でもそう簡単には死なないだろうな。

老衰で永眠するのが理想なのだん、と豪語してたからな。

それに、からかいっ子は長生きするのが世の定説だ。

それはおいといて、ファルについて思いを巡らす。

命令だから殺す、と言っていた。なんの為に殺すのか、誰が命令
しているのか。答えに辿り着く筈もない事を自問している。

何故自問しているのかは、青臭いが正義感と言っやつだろうか。

純粹そうなファルを唆してる奴を見つけたいのか。

どちらにしる、溢れてくる感情は怒りだ。

こんな新米ファインダーが首を突っ込む事ではない。それでも知
りたい。

どうせ巡回すれば、ファルみたいな奴らと出会っだろう。

道なりの途中にある、妨害みたいなものだ。危ない目には遭うだろうが、いちいち気にしてたらそれこそ遠回りだ。

淡く暗いビルのライト。それが照らしているのもまた、暗い暗雲な気分。

争う相手に人が加わる事実は、思いの外精神に酷だ。今回は、こうして殺さずに済んだが、殺すしかない、殺してしまう現実に遭遇するだろう。

思わず体が恐怖に震えた。鮮血が辺り一面を満たし、返り血で化粧された自分。

その姿もまた震えている。

「ふい〜、たでーま」

よっこらせ、と心底疲れた表情を見せる。

脳裏を埋め尽くしていた、イメージは保留。とりあえずは胸の内にししまい込む。

一季の肩に担がれている人、つまりファルの相方。

殺してはなさそうで、こちらも寝ている。

一季が殺していないのが、胸中で安堵を齎す。

「こりゃまた、酷くやられてんねん」

指差された額の傷。例の回復力のお陰で血は止まったが、傷口は蚯蚓脹れの様に腫れが残っている。

「殺しちゃ・・・いないんだなん・・・寝とるし」

「ファルは勝手に寝た。肝が据わってるよ」

「・・・誰だん、ファルつて？」

「あの子の名前。結構聞けば返してくれるよ」

「ふほーん」

関心なさ気に返事をして、肩の人を下ろす。ロープで念入りに巻かれていて、一季のドS心が顕れている。

一息はついたのだがこうなると、後はファルが起きてくれないと話が進まない。

「・・・緋色、ファルの事起こしてくれない？」

「い・や・よ」

「むー・・・とりあえず起きるまで待つか」

さてさてと携帯を開きディスプレイを覗く。

電子時計が指す時刻は、三時を廻って丁度三十分。

通りで瞼が重い訳だ。しかし寝るなら、ビルの屋上じゃなくて自分の家の布団の上で寝たい。

「ふあゝわわわわ・・・こっちの方起こすかん？」

眠たい声を辺りに散蒔きながら、ぐるぐる巻きの女性を指差す。

名前が不明なままなので、さて、何て呼べばいいだろうか。

お前？女？お嬢さん？駄目だな。特に最後のなんて、トウマと同レベルだ。

「おーい、起きろよなん。おーきーろ、おーい」

早く帰りたいのか、率先して動く時は強引だ。

それにしても、馬乗りでビンタしてるなんて、何か危ないイメー

ジがある。これ以上は突っ込みたくない。

「……うつ……な……に？」

「起きろ！」

それ以上は気の毒だ。止めましょう、一季君。暴走しかけだし、目がいっちゃんいそいだよ。

「……何だクソガキ」

「そんな態度とんなよん。……頼みはファルを起こしてくれよん」

「ちっ、なんだよ、ファルもやられたのかよ」

一季が指を差した向きにはファルが寝ている。しかも待遇はあっちの方がいいときたもんだ。文句は喧嘩を買った人に言うように。

「早く帰りたいから早めによろしくねん」

「……おい、ファル！」

簡単で何の捻りもない呼び掛け。それで起きるのかな、と疑問に感じたが、唐突に起きるから驚いた。

俺じゃ絶対起きないな。

「おはよう」

「おはようじゃねえよ」

身動きのとれない相方に代わって、ファルは足を動かして近寄る。手を胸に縛っているだけだから、足は意外に自由。

悪くに言えばいつでも反撃が可能。その事に一季はかなり警戒し

ているが、アズマは皆無。

ファルの横で欠伸をかいている。やはりカバだ。鈍感・オブ・癡頭カバだ。

「で、何か聞きたいのかガキ共」

「何、聞く？」

強気なのは相変わらず。一季が気に食わない顔をして、顰めているがここは抑えて欲しい。

「……んじやなん、最初に聞いた質問だけど……あなたらにもん？」

「……そうだね……ドリーマー（夢想する者）とだけ言っておこう」

「ドリーマー（夢想する者）」

聞き慣れない言葉だ。そんな受容し難いものだから、頭の中に浮かんで直ぐに消えた。

「それってファインダーとは違うのか？」

「あんな逃げた奴らと一緒にすんな!!」

「ファインダー、違う」

酷い言われようだ。しかし逃げたのだろうか。あの時の強い感情の奔流は最早虚。

思い出すにしても空虚な思いと、虚さが漂うだけだ。

欠落の罪は逃げなのか、その答えは霞がかり見いだせない。

「……次の質問。誰から命令されてんだ？」

「教えるかボオケ」

「秘密」

「……アズマ、拷問かけてよろしいですかん？」
「笑いながら言うな、こわいから。それに意味ないと思う」

意地でも言わないだろうな、多分。一季だってそれぐらいわかるだろうに。

その他の質問も全て黙秘。徒に質問して徒に時間が過ぎていく。それでも聞くのは、本心としては命令を出してるリーダー的な奴を、知りたいからだろう。

他人を善意で助けたいのは、偽善者と言われても仕方ない。

「お話はおしまいだね。……情報の流出は御法度なのが命令」

「?……?……?……?」

三人共顔を見合わせ、それぞれ疑問の色を浮かべる。空気を伝わってきた言葉は何かを連想させた。

「じゃあな、ファル。ガキ共」

音もなくロープが解け、手を口に突っ込む。

咄嗟の事だった。手が出なかった。理解出来ない事が目の前にある。

いきなり

「ぐ……がっげぼっ……」

吐血して倒れて……それで何が起こったんだろ。

「……………自殺……………」

一季が冷静に、ああ死んじゃった、みたいに感慨もなく言う。そうか、自殺したのか。痙攣も起こらない体に、深紅の化粧が施されている。何処か綺麗で何処か怒りが込み上げてくる。

「……………なんでだ……………なんでだよ！
！！」

ようやく『死』を受け入れた頭は、大声で怒鳴る事を選んだ。本能的というか、こうゆう時は怒鳴りでもしないと、正気を保っていられなかった。

「……………もう死んでるわ」

緋色が言わなくても、誰もがそれを思う。光を失い瞬きしない目。先程想像していた事が、悪い方向に考えた現実が今ここにある。

どれだけその組織に服従して、何もかも命令通りに動くのか。機械的でそんなの生きてるとは言えない。

「テトラドオキシン」

「なっ？」

出し抜けに後ろから声が響く。その姿は自由で、しかし襲う素振りも見せず綺麗な瞳のままだ。

「テト……………何だって？」

「テトラドオキシン。河豚の毒だよん」

質問に答えたのは一季。淡々としていて、警戒が孕んでいる。ただファルを信用できないみたいだ。

「・・・河豚の毒って確か・・・」

「超強力。でも死ぬまで時間はもつとある筈だよん」

何か仇敵に相對している様な鋭い双眸を、ファルに向ける。その双眸にこわさを覚えたか、綺麗な瞳が若干細くなる。

「何作ってた・・・その組織・・・こんな毒作るなんて」

ただ機械的に首を横に振るだけ。友好的に話すだけまだ、人間味があるか。

それにしてもどうするか。事態は終わりに近付いていて、下手にここにいると危険な感じもする。

それもあるがこれからファルはどうするのか。アズマの内心に引っ掛かっているのは、解決しないとれそうにない。

ファルも自殺するなら、今度は止める気である。

「・・・ファルは・・・これからどうするんだ？」

過ぎりはしたが、まさかしないだろ、と緋色と一季が思っていた言葉。

アズマの事だからお節介を焼くに違いない。

腹の中で貶す言葉を二人は飲み込んで、ファルの答えを待つ。しかし杞憂だったと言えばそうだが、反射的に止めようとする衝動に駆られた。

先程の焼き直し。ファルも口の中に手を突っ込んでいる。アズマは既に止めようとして、しかしファルに手を突き出され止まった。

地団駄を踏んで取り乱すアズマ。涎と一緒に出てきた指が、掴んでいたのは歯。恐らくは入れ歯だろう。

数秒固まったアズマだが、特にファルに変化はなし。吐血もなければ、白目を剥く事もない。

「これ、毒」

取り出した歯を足で踏み潰すと、黒いやけに粘り気のある液体が見えた。

自決の方法を自分で潰したと言うことは、ファルは死ぬ気はないらしい。

その後でさっきの質問に改めて、口を動かす。

「わからない」

「……………そ……………そうか」

それなら、と口にしたかったが、後ろから威圧的なものを感じたから止めた。

ならせめて別の言葉をかける。

「……………好きなところに行けよ、気ままに……………ファルの行きたいところ」

かける言葉はこれだけ。その言葉を飲み込んで、わかった、と返事をした。

半ば逃げる様だが、一季が帰る事を促す。あまりここにいると、あの死体について追及されるかも知れないから、らしい。

確かにアズマや緋色の精神状態にも悪く、承諾し、この場を後にする。

「……………じゃあな、ファル」

去り際、手を振ると、ファルも振り返し、口を開けた。また、と笑いながらそう言った。

アズマ達が去った後もファルは動かない。どこに行くか、それを数分思案して相方に駆け寄る。

「ありがとう、リータ」

涙を一粒落として、目の前で手を合わせる。祈る様に、感謝を伝えるかの様に。

最後に冷たくなった手を、自分の手と重ね、名残惜しげに歩き始めていった。

17th「ドリーマー」(夢想する者)「(後書き)

テトラドオキシソ『別名河豚毒』

河豚の卵巣肝、臓に含まれている猛毒。食後、分解されることなく体内に吸収されて中毒症状を呈する。

致死量は、体重50キロの人は？ / 2000000 / 1 / 20000
で死ぬ。

筆者はさっぱりです。参考までに載せときました。

参考資料「世界大百科事典」

18th「口にしてなくても災いとか影はさすのか」(前書き)

物事を押し付けるのは簡単。何もなくていい。残るとしたら、若
干の後悔だけ。
難しいのは受け入れる事。せめて、分割ぐらいはしよう。

18th「口にしてなくても災いとか影はさすのか」

「お〜っえ〜お・・・一日寝ちったよ」

日が登る頃に帰宅して、日が沈む頃に起床。なんとアンバランスで、中二病臭い一日だろうか。

帰ってから約半日、それこそ赤ん坊の様に寝た。惰眠を貪れるのは今日一日まで。

有効に使えたと言えば使えただろう。

「汗臭いな。それに・・・腹減った」

都合二食抜いて、最低限の運動で過ごしたが、それでも体は栄養を求め。

異臭を放っているのは、例の夢で流した汗と血の臭い。風呂に入れる、と言っているようだが、我ながら我が儘な体だ。

欠伸をかきながら風呂を洗い、次に米を研ぐ。

そうして次第に明確になる意識が思案するのは、ドリーマーとファルの行方。

ついで脳裏に張り付く深紅の景色。名前の知らないファルの相方の死に姿。

米を研いでいた手は止まり、空気音だけ耳に障る。

ピチャッ、と水が弾け、少しだけ我にかえり、断ち切る様にして手を動かす。

何かをしていた方が気が紛れていい。やっぱり人が加わるだけで頭の中がややこしくなる。

脳内の皺が平均よりちょい多い奴には、少々重過ぎる悩み事だ。

「よつと・・・あと風呂は」 『ピンポーン』

間の抜けた音が声を遮断する。若干古い記憶がフラッシュバックするが、ありえない事に頭を振る。

まだひきづってるな

感傷をしまい込み、玄関のドアを開ける。本心で期待していたのは、元気のいい少女。今だ醒めない夢を見ている少女を。

「・・・・・・・・・・こん、ばんわ」

「・・・・・・・・・・こんばんは・・・・・・・・ん~~~~?」

口は災いの元、とか噂をすれば影、とか言うけど口にしてない事も引っ掛かるのか。

知りたい事が向こうから来客したのは嬉しいが、何か複雑。

「・・・・・・・・・・何故?」

「好きなところ、来た」

「・・・・・・・・・・さいですか」

目を擦っても消えないファルは、まごうことなく本物。ファルの頭を撫でたり、自分の頬を抓ってみたり、無駄に確認したりも。

「あー・・・とりあえずあがるか？」

首を縦に振って家へとあがる客人。どうしてこう、俺の周りの人は、唐突にして家に乱入するのが好きなかね。

冷蔵庫から適当なものを取り出し並べる。ホント適当なものしかなく、単純な野菜炒めぐらいしかできない。

「ファルは飯喰うか？」

返事したのはファルの腹の虫。余程空腹そうに思える。となると、少しばかりもの足りないかな。惣菜とみそ汁もつけておこう。

「・・・ファルって朝食と昼食喰ったか？」

「ない」

お腹を抑えながらそう言う。空腹越して軽い腹痛なのかな。その割にはひょこひょこして、足をばたつかせている。焦点をどこに合わせているのか、上の空だ。

純粹と言うか無垢と言うか、子供らしさがある。

「おまちどおさま」

テーブルに皿を並べていき席に着く。焦点が目の前のものに注がれる。心なしか目が輝いて、感心している様にも見える。

「いただきます」

「・・・いただきます、ます」

見様見真似でアズマと同じ事をする。何か変な感じがして、歯痒

いと言うか微妙。悪い気はしない。

「おいしい」

「・・・ありがとう」

率直な感想は気分を昂揚させる。一人の食事では出来ない事。他人がいるから楽しさが生まれる。

決して器用とは言えないが、そんな箸使いで綺麗に完食。空腹で上の空だった瞳は、最初に会った時と同じ目をしている。

「ありがとう、ございました」

「いいさ、別に。乱入されるのは慣れてる」

久しぶりにこの家に会話がある。緋色達も最近は来ていなかったから、誰かがいる喜びを改めて感じる。

「さてと・・・俺は風呂に入るけど、ファルはどうする」

「アズ、一緒、入る」

「そうになると・・・着替えあるか？」

返答はいいえ。仕方なくアズマの昔の服を貸す事にした。大体は整理してるから、苦労せず服を引っ張り出す。

家の中を整理するのは、何かを見つけたいから。家族のアルバムや日記を、家族がいた痕跡を見つけたいから。

いつもそれは徒労に終わる。唯一分かったのは家族構成ぐらい。女物の衣服が、サイズの小さな物からある。姉か妹か、どちらかいたみたいだ。

兄か弟がいるかは不明。多分、男物の衣服が、一人分ぐらいしか

ないからいい。

無駄だと思っけていても捜すのは、本心で誰かを求めているからかも知れない。

「先、トイレ」

「あいよ。そこにあるから」

指定された所に行くのを見送り、服を脱ぐ。

軽くシャワーを浴びてから、ゆっくり右足から入る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふう〜」

熱さによる肌の痺れ。それがなくなると、温もりが全身を抱擁。

水での浮遊感ほ心地好く、シャワーだけで済ませる一季の感覚が解らない。

不意に脱衣所で音が聞こえる。人がいるのを影が教えている。恐

らく、と言つよりファルだ。服を脱いで風呂のドアを開放。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ここにきて、一つ考え直さなければいけない事がある。突然だが、そうしないと、いけない。

じゃないと、風呂にゆっくり浸かる事もできなさそうだ。

まず、ファルは女の子だった。サイズの合わない服の所為で、誤認していた訳だが、ばっちり女としての胸の膨らみがある。

こうゆう時に心拍数があがるのなら、慌てている証拠か。アズマの場合、心臓が停止しかけた。驚きのあまり、電気ショックが体を駆け巡つた様に錯覚。

気まずくて、風呂の所為もあるが、顔が熱い。
そんなアズマの困惑を他所に、湯舟に浸かるうとする。

「っ、ちょっと待てーい!!!」

反響して何度もエコーする。ファルは驚き、その驚きが突然の大
声ではなく、止めようとするアズマの行動に驚いている。

「どうか、した？」

「いやいやいやいや待て待て待て待て！どうかしたじゃな
くてこれはないだろ」

別にベタ過ぎる展開にはない。ファルに言っているのだが、聞
く耳を持っていない。更に風呂に入ろうとする。

「だから待てって」

「なんで？」

「なんでじゃなくて、えーと・・・男と女で一緒に風呂入っちゃ駄
目な気がする」

ファルは何を言ってるの、みたいな顔で疑問一色。何故か困惑さ
れているのに、逆に困惑さしてる気がしてきた。

「気にしない」

「俺は気にするの。こうゆうのはその・・・好きな人とやるものな
のか？」

自分で言ってる事がこんがらがってくる。今、どっちが正しくて、
どっちがどうかは場に任せた方が得策。そうゆう訳で更に訳が解ら
なくなる。

「私、アズ、好き。これで、いい？」

「え……あ……う？」

人生初の告白は、風呂で終わった。しかもロクに理解できずに。一季がいたら腹抱えて、笑いながら拍手するだろう。

放心状態のアズマの上ののっかる様にして、風呂に入る。

アズマの手を自分の手と重ね、リラックスしている。調度、胸におさまっているので、ファルのベストポジションと言える。

「アズ」

「ちよっと待て。今整理してる」

もう壊れた。見事に精神が瓦解して、再構築している最中。何がどうで、どれがどうなっているのか。混乱していて、思考能力が皆無な今は、到底無理。

「アズ、アズ、アズ？」

「あーうーん………やっぱし夢じゃない」

飛んでいた意識が戻ると、この状況に改めて混乱する。体を後退させようとするが、挟まれて動けない。

それにファルが不思議がって、体を寄せてくる。

「う………」

理性に罅が入る。頭の中でアラームが最大ボリュームでなり響き、最終防衛ライン持ちません、なんて言ってる。

更に近づき、あろう事か唇を重ね様としている。いくら鈍感でも、ダイレクトな動作をすれば気付く。つまりキスしようとしているのだが、それは受け入れ難い。

嫌な訳ではなく、よく解らないが受け入れてはいけない気がする。

そうは思っても下がれもしないし、どうしようかと言えば、どうしようもできない。

八方塞がりとは言うが、塞がりそうなのはアズマの口。そうこうしている内に、互いの吐息の生暖かさを感じる所まで来ている。

漂白される脳内。真っ白で何も考えられなくて、いっそ逆上せて気絶でもしてくれればいい。

迫る唇は、そのままもう一つの唇に触れる事はなかった。体ごとアズマにもたれ、事切れた様に動かなくなる。

「……?……ファル!?おい!……逆上せたか?」

逆上せたいのはアズマの方なのに、ファルが先に逆上せる。ぼやきたいが、ファルを抱き抱え、リビングへ。体は確かに女性として柔らかいもので、再確認した気がする。

扇風機をオンにし、団扇で扇ぐ。流石に目のやり場に困り、タオルを被せたはいいが逆効果だ。ファルの体型が強調されて、もう叫びたい。

「あー……死にそう」

緋色の時は早とちりで事を終えたが、この状況はマズい。非常にマズい。思春期の男子には刺激が強すぎる。

裸のままだから冷水を被り、気持ちを落ち着かせる。染み渡る冷たさを感じない。体の火照りが、冷水を温水に変えている様な錯覚。くしゃみを一つして、鳥肌が立ったところで水を止める。寒気が急に押し寄せ、鼻水を啜りながらようやく服を着る。

しかしどうも落ち着かない。事を難しい方向に考え過ぎている。シンプルでなんて事もいかない。アズマの初心さが複雑にしている。詰まるところはそうだが、はい、そうかでは整理できない。

結論の出る事のない疑問に頭を抱え、リビングでは既に、目を覚ました少女がいる。

その姿もやはり一糸纏わぬ格好。恥じらいもしないから、目を合わせられない。

「迷惑、すみません」

「・・・謝罪はいいから。先に服着てくれ」

椅子の上に掛けた服を指差すと、言われた通りに服を着る。男子だと思っていたから、下着まで男物だが、躊躇いがない。

格好や性別は、気にしないらしい。それらが頭痛の種に変わりはないが。

「眠い」

そうですか。確かに良い子は寝る時間ですね。俺は起きたばかりだから眠くない。

ファルは袖を掴み離れようとはしない。目を擦りながら、アズマの目を覗いている。

「一緒、寝て？」

だと思った。明らかに懇願の目だったし。もう開き直る。添い寝でもなんでもしてやるよ。

自室でファルを待たせ、奥の部屋で積まれている布団にダイブ。強がりにはしたが、自分でも諦める程の虚勢。

ここで燻つても、心配してファルもこっちに来るだろう。時間をかけたって変わりはない。

重い腰を上げ、布団一式を担ぎ上げる。埃っぽさのない布団。それが空虚さを感じさせるのは言うまでもない。

視界の半分が埋まっついていて歩きづらい。本心で行きたくないのかも知れない。だが心配させたくもない。

この葛藤の方向は江湮に酷似している。無視したいが無視できない。煙たいが、離れて欲しくない。

でもファルは江湮じゃない。だから江湮と同等に触れるのは、ファルへの侮辱。失礼極まりない。

悩みと布団を抱えながら、部屋に入ると悩みの種がダイブしてきた。

先程アズマがした行動だが、対象が布団ではなく人なので被害者は痛い。

「つう〜・・・な、なんだ？」

「、」

「ん？」

「リータ、いない」

リータ。その名前を掠れながら、悲しみを混在させる。アズマが理解できるのはその名前だけ。ファルの相方だった人の。

理解できないのは悲しみ。どれだけ涙を流しても、泣き崩れても、同情はできない。

受け止めて、悲しみを許容できるまで泣かせる事しか。

何も言わず、ファルの体を包む。淋しがり屋で純真。真っ白で、少しだけ青に染まった白。

眠れない夜を二人は跨ぎ、未明頃に視界は完全に黒になった。

18th「口にしても災いとか影はさすのか」(後書き)

疲れます。更に疲れるでしょう。

今月に諸事情により更新が遅れるかも知れません。

多分、数日したらぶらりと戻ってくると思います。

19th「平和の種 争いの種」(前書き)

話を聞いて真っ先に思うのが疑問だ。常に猜疑心を持ちながら、
生きている。

19th「平和の種 争いの種」

寝息に包まれた朝。静寂で忙しい朝。思いの外目は覚めているが、足の感覚はない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

白い髪の少女は実に平和的象徴。いるだけで空気が和む。その少女をそつと撫でたあと、音を最低限に抑え、部屋を出る。

麻痺した足には困難ではあったが、逆に上手く足を上げられないから引きずる程度の音しか出してない。

地に足がついていない錯覚と、一種の浮遊感の中、米を炊き、目玉焼きとみそ汁を作る。朝は米だろう、やっぱり、日本人として。

二人分の朝食を並べ、一人で食べる。足音もファルが起きてくる心配もない。

朝食を食べ終わり、着替えて、歯を磨いてもそれはない。

荷物を取りに行く兼様子見として自室に戻ったが、今だ安らかな熟睡。平和な夢の世界を旅している。

拍子抜けと言つか、起きているのを期待した訳ではないが、安らかな眠りは、安らかに起きないといけないだろう。起こすのは気が引ける。

目的を済ませ、一階に降りれば程々な時間帯。出れるのならなるべく早い方がいいが、その前にやるべき事がある。

湯気が出ない程度に冷めた朝食にラップをし、書き置きを一つ。学校からの連絡ばりの薄っぺらい文章。

「……………さて」

流石に家を出ないと、先生から不信を喰らう。脳裏を過ぎる一つの言葉。言っておいても損はない。

「……………行つてきます」

小さな声。微々たる反響と短すぎる余韻。ただ一人の為に放った言葉だから別にいいだろう。

その微々たる反響も短すぎる余韻も、完璧に、空気の雑音に掻き消されたあと、ようやく少女は目覚める。

ぼやけた思考と視界をフル回転させ、添い寝していた少年を求める。

当然いない。学生は学業に励む為に、登校している。そんな事を知っている訳もなく、家内搜索を開始。その様は親がない事に、不安になる子供の様にも見える。

二階を捜し終え、一階のリビングへと降りる。ファルの目に留まり気を引いたものは朝食。ついで置き手紙。

一先ず空腹を満たし、のほほんとした後に手紙に目を通す。内容は朝食についてやら、他いくつか。

暫く耽った後に、着替えもせず家を出る。無用心極まりない外出目的地は少女にしかわからない。

堅苦しい挨拶は子守唄。催眠術でもかけてる様で、眠くなる。流石に立ちながらにして寝たら、特技だろうな。

始業式は恙無く終了が告げられ、各々のクラスへと戻っていく。それぞれ気怠さと束縛からの解放に、一息ついた様な顔をしている。が、これから授業が二時限あると思うと、やはり顔は気怠く変化する。

アズマはと言うと、友人のちょっとかいにいちいち対応しながら、少女について思いを巡らせている。

流石にもう起きただろう、と思い朝飯は食べたかな、と様々に巡りは変化。授業も耳に入らず、と言っても授業聞いている人いるかな、って言う程閑散としている。

ぼーっとしてると時間が長く感じる。先程からちらちら時計を見ている所為もあるが。

あと30分。・・・あと25分まだ5分しか経ってない。だんだん苛立ちを覚え始め、シャーペンを持つ手に力を込める。手を伝わり、聴こえる悲鳴。

力を緩め、机に突っ伏す。周りを見れば授業放棄している者も多い。今更注意もしないだろう。

脳裏に夢らしきものが浮かんで、時計を見る。あと10分。流石に本格的に夢を見ると、注目的になりかねない。

黒板の文字をテキストに書き殴り、時間を稼ぐ。無論、内容など頭に入ったら奇跡だ。

苦痛を感じる授業がようやく終わった。実際に苦痛を感じたら問題だが、変に力んでいたため、微妙に痛い。

手足を伸ばし、次いで席を立つ。何故、と聞かれれば返答に困る。座りっぱなしも体には苦痛だろうし。

「どーん、がっしゃーん」

どんなカーアクションのシーンだ。そんなシーン流れた時点で三流映画として拍手喝采だよ。そして、そうやってぶつかんなよ、三流ドライバー。

「………何用？」

「お悩み解決隊だよん」

「九州地方の方言？」

「何かお悩みのようですねん、解決させよん」

「いや、いらない」

停止の声を聞かない暴走ドライバー。もう、わざとだよこれ。故意の悪戯ってイジメだよな。

癖のある髪にくしゃ、と触り何かを掴んでいく。ゴミか埃か、それでも昨日風呂に入ったから、余計にゴミが目立つのか。

「がーがー白髪、がー白髪、若白髪」

今度は三流シンガーか。お喋り機関銃、少し黙れ。それに若白髪は将来、お金持ちになるんだよ。まあ、今も高校生の財布には少々入りきらない紙があるけど。

「長い若白髪。・・・ん？・・・長・・・い」

血の気が引く音が聞こえた。ファルについてはまだ一季に話していない。家にいる、なんて話したらヤバ気。

捨て犬を拾って返せ、と言われるのと同じかな。ファルを動物扱にするのはやっちゃいけない。

「どうしたの？」

追い打ち気味に緋色が乱入。往来のと真ん中で会話なんて、邪魔だし目立つ。

緋色が加われば更に目立つだろうな。

「・・・長い髪の毛。どうしたの、これ？」

「・・・俺も知らん」

あくまで黙秘。話すのは好ましくないと判断。幸いな事にあの日は見通しが悪く、帽子も被ってたから気づきはしないだろう。

「わーお、何かハプニング発生かなん」

首に腕を回し、背に乗りながら指を差す。確かに、いつもと違う雰囲気の人集り。おかげで白い髪からハプニングに意識が変わって助かった。

あまり興味は湧かないが、野次馬根性丸出しの一季は背中を押す。とりあえず手頃な女子生徒Aに話し掛ける。

声を掛けると若干驚いた様子。なにしろ男子が男子を背負っての登場だし、おかしな構図だ。

改めて何があったか聞くと、小さな来客者が来たらしい。捜している人がここにいるとの事。しかし、見ようにも人の壁が視界を遮り、前にも行かせない。

休み時間も終わりに近い。アズマは諦め、教室へと踵を返す。それについて来る一季と緋色。周りの生徒も帰り始めている。

歩く足音に一つテンポの速い足音が後ろから。明らかに走っている。別に小学生じゃあるまいし窘めたりする奴はいない。誰かの名前を呼びながらでもしない限り。

「ア~~~~ズ~~~~!」

「~~~~ズ~~~~!」

何と言うシンクロ感。ピタリと揃っていて、コンマ一秒のズレもない。驚いた部分はそのではないが、二人は先程の話題が再生され、一人は思考が停止する。

「白くて・・・長い・・・髪」

「げぼはあ!」

柔道なら綺麗に朽木倒しが決まっただろうな。後頭部打ち付けたし、背中痛くて呼吸が苦しいし。

「アズ、いた」

どうやら、離れても離れられないのも江湮と似てるらしい。それ

はそうとして、注目的がアズマに移る。否応なしに生徒は集まり、既に人海の中心に引きずり込まれている。

二人は啞然とし、一人はもう諦めモード。必死で元の場所へ返さないように、言葉の模索を開始。勝ち望みは一季相手じゃ薄いかな。

閑話休題、詳細はピリオドの後に。屋上でカフェと洒落込む事で、話は引き延ばし。

それはそれでいいが、臨時生徒の授業参加により、授業になりやしない。特別措置と本人の希望により、アズマの隣に席はあるが、クラス全員の視線がいたい。一つ目の授業より更に時間が長く感じて、居心地が悪かった。

「アズマってやっぱりどうかしてるわ！」

屋上のカフェとは言っても、アズマへの説教である。一季は死ねばいいのに、みたいな目だ。ある程度、暴言の説教のせセットは予想してたが、空気イスと正座どっちがいい？なんて聞かれるとは思わなかった。

正座を選択したが、どちらにしるきつい。かれこれ30分はこうしているが、朝よりなまじ意識がある分痛い。

ちなみにファルは売店で買った弁当を、食べずに持っている。俺と一緒に食べたいとのこと。

「……………ずいぶんと好かれてるわね」

ファルが女の子だって言うのは周知の事実。サイズの合っている服で、出るところは出てるし、顔立ちからして女だ。暗闇ってホントこわいね。

「んー……人望の良さだろ」

「友達少ないでしょ」

「緋色と一季のことだよ」

本心なのだが、この状況を逃れる為の言葉として聞き流された。もっと違う状況なら、感動的だろうに。

それから更に10分経過して、ようやく説教は終了。もう膝が笑っていて、がに股でしか歩けない。

「んじゃ飯にすつかねん」

イジメかな。まともに座れないから立ち食いしかできないし。

学校に生徒はもう数える程にしかない。密談をするにはいい時間帯だが、ファルを警戒しているのか、ファルがファインダーじゃないからか、なかなか巡回の話は切り出さない。

そもそも、ファインダーとドリーマーは違うとか言ってたけど何がどう違うのか。疑問は急速に膨らんでは萎む。

昼ご飯を食べ終わっても、もやもやした疑問は形を成さない。麻痺が治った足を伸ばし、形を成している疑問を取り出してみる事にした。

「ファルってさ、どうして俺がここにいるって分かったんだ？」

突拍子な質問に、若干の間。脳裏で再生し、質問の答えを提示する。

「これ」

出されたのは紙。今朝アズマがファル宛ての置き手紙。さて、これをどうしたらここに辿り着くのか。

「dream out」

続いて出てきたのはボード。よく韓国の国旗に描かれてるあれだ。なんか白と黒の魂が歪に混じってはいるが、水と油みたいに歪に分かれている。

「チェイスボード（白と黒の追走劇）」

「……………はーん、サーチ（見ること）か」

さーち、サーチ、search、はて聞かないな。疑問の色を顔に浮かべると御丁寧に一季が補足。

「前教えたよなん。想造する為に必要な基本要素」

「えーと…………イメージ（想うこと）、メイク（創ること）、ノン（識ること）、キープ（保つこと）だけ」

つまらなそうに、悔しそうに当たり、と言う。どうせハズレたら罵るだけ罵るんだろ。残念だがお断りだよ。

「サーチは応用みたいなん。複合型と言ってもいいかなん」

一季は冷めた声で話を続ける。

「巴紋、両儀とも言うかなん。白が男、陽性、正を表し、黒が女、陰性、負を表す。・・・なかなか理に適ってるなん」

矛盾があつたり、具体的な形と能力がないと、うまく想造できない。例えば剣なら、両刃か片刃か、長さはどのくらいか、何から何まで切れるのかを頭の中で組み立てなければいけない。言い換えれば、限界を自分で決めてしまう残酷なものだ。

「で、こんなもんでアズマに執着してるなんてなん。・・・よつぱど僕らの事を殺したいのか？」

ファルに対する一季の対応は厳しい。警戒のレベルが高すぎる。軽く殺気すら視線に込められている。

「お前のいた組織は何やってんだ？」

首を横に振る。

「どこにあるかは？」

再度首を横に振る。

「ファインダーを生け捕りにする目的は？」

最早首を振らない。

「・・・とりあえず様子見た。お前らのお仲間らしき人が来

たら、追い出してやる」

「一季」

「……………アズマの為でもあるんだからなん。少しは可能性と
言うのも考えるよなん」

否定したい言葉が喉に詰まる。ファルのいた組織とは無関係に家
に来たんだ。なら、無関係なら、こっちに損はないなら、その組織
について話してもいいだろう。

なんで、話してくれない？

なんか抱えてるのか？

急激に成長する猜疑の芽。花が咲き、枯れるのはいつか。それが
争いの種だったのかは少女の育て方次第。

19th「平和の種 争いの種」(後書き)

結局、性懲りもなしに戻ってきました。授業中でも話を育てているのは、もう病気ですかね(笑)

20th「転がる石」(前書き)

時間は一秒でも過ぎてしまえば過去、未だ来ていないなら一秒先でも未来。二つは密接で綿密な関係。未来は過去の産物。そうして未来は+にも-にもなるが、過去に囚われ過ぎるから大半は-だ。過去に無い事をするのは、未来への布石と言ったところか。

20th「転がる石」

微妙だ。巡回も集合もせず、もう半月が過ぎた。微妙。微妙過ぎる。このファルとの距離感も。

「……………ん~~~~」

依然としてアズマの後を座敷童の様にについて来てはいる。前よりは微妙に距離を空けていて、前よりは馴染んでいる。

相変わらず孤独が嫌で学校まで足を運んでいる。意外に年齢はタメな訳で、そこにも驚きだが、ファルは軒並み頭がいい。勉強出来過ぎ。ファル目立ち過ぎ。俺の周りに人居過ぎ、である。流石に文系の類は駄目だが。

周りに人が集まるに反比例して、緋色と一季の口数がだんだんと減っていく。普段の屋上での食事はなしに。登校も下校もファルしか話し相手がいない。招福にも来なくなった。

学校ですれ違っても、目が合っても、ぶつかっても、声かけても会話はゼロ。なんだか微妙な感じがして、しょうがなくなる。

そんな状態のまま、残暑が終わり、秋分が秋を告げた。暦の上では秋である。あくまで暦上は。肌には張り付く熱さはまだ続く。今だ半袖半ズボンを着用しているのは異常だろうか。

「熱い」

今はちゃんと女物の衣服である。スカートをはらひらせながら、愚痴を零す。いつにも増して、今日は熱い。明日は冷え込むそうだが、目先の方が問題に上がる。

「こんにちは」

「おう！来たかい。妹さんもどうもねい」

江戸っ子の様な話し方で二人を招く。初めて二人で来た時に、どこをどう見て兄妹に見えたのだろうか。それで定着したから、無理に矯正はしないけど。

「注文、何？」

片言の御注文。お客さんは心が広いものです。まあ大体の事は助詞がなくても、伝わるかな。そうじゃなかったら、違っつて言うし。

「東君、最近緋色ちゃんと一季君が見えないけど、どうかしたんかい？」

お好み焼きを作る手が止まる。香ばしい音をいくらか流して沈黙。

「……いや、知らないです」

「……そっか」

何か探る様な沈黙だ。この性格な為か嘘は嫌う。他人の嘘は自分の以上に嫌う。今、緋色達について知らなくはないが、よくは知らない。微妙だ。

「最近ついだけで、東君・・・疲れてない」
「・・・・・・・・・・ないです」

これは嘘。正直精神的にはかなり疲労が累積している。緋色達とも話してないから調子は狂う。いつも通り、がないのは虚しい。

だからと言って、それを顔に出して周りに散蒔くのは厳禁。自身の悩みは、自分で片付ける。他人にあまり同情されたくもない。

「では、さよならー。お疲れ様でしたー」

「おう！お疲れい。またねい」

学校終了の4時から始めたとして、およそ三時間の労働。流石に日が出ているなんて事はない。

疲労感がワンダーを誘う。日照時間が減れば、それだけ夜が長くなる。面倒と捉える人もいれば、好機と捉える人もいる。時と場合によるだろう。

蛍光灯を經由しながら、家路を辿る。邪魔モノ極まりない。避けながらだと時間もかかる。出歩く人もちらほらいるし、dream outは身体強化のみで抑える。

何人目かの人とすれ違う。不自然に、蛍光灯の下で通り過ぎるのを待つ。一步近づく程に、頭の奥が微量な警鐘を鳴らす。少し過敏だ。ワンダーでもなければイーターでもない。気にしない様にして、目は男性を追う。

ぴしつとしたスーツを着た形のいい、如何にも会社員って感じ。目の前を横切る。足音に混じり、何かを

「　　っ！」

反射的にファルを抱き抱え、何かを避ける。二転三転し、元会社員を見る。今はもう加害者にしか見えない。

手には明らかに、殺傷能力のあるもの。見るだけで皮膚が嫌悪感を起こすデザインをしたナイフ。人に刺せば、痛みが数倍にもなりそうな、突起がついている。

「外れたか」

「……………なっ？」

残念そうに呟く。声が軽い割には堅い口調。その所為かやけに言葉がはつきり聞こえる。

「……………誰だ？」

あらかた予想はできている。先程口にした言葉。どんな時でも明確に聞こえるその言葉。聴き間違いではない。dream out と聞こえた。

「ドリーマー……………」

微妙を越えて最悪だ。

a t o n c e

「はあ……………」

「うるさいなん」

男女二人、自転車を押しながら口を開く。部活動に営めば、必然的にこうなる。いつも、と言っても一ヶ月も前はこれにもう一人いた。最初に溜息を漏らした内容は、この一人について。

「やっぱり意地張り過ぎだと思う?」

「極めてねん」

肯定する方も意地を張っている。意地を張る原因としてはファルだが、ファル一人だけを原因にするのはやり過ぎ。結果として飛び火がアズマにかかっている。どんなに他人がアズマの事を思っても、アズマは他人を一番に思う。だからファルを庇うし、余計ややこしい。

ここ一ヶ月はこの会話から始まる。いい加減一季は飽き飽きして、でも助言はしない。片方が話し掛ければ解けるこの人間関係、それを知ってて言わない。

何故かと言えばちよつとした企みだ。

一季のポケットから流行りのアイドルの曲が流れる。携帯のディスプレイに表示された文字は癡頭。

「もしも・・・」

「無理承知で頼むけど・・・」

「うん、無理だよん」

「ドリーマーだ!」

「だから無理。こつちもだからねん」

半ば強引に通話終了。荷物を置き、蛍光灯の下を見据える。明らかに空気が違う。膨張して、大気が変化しているとも言えはいい

か。緋色も既に神経を尖らせ、軽く屈伸。

人影は二つ。体格からして男性が二人。どうやら目的は僕らし
い。内心で網に掛かったか、と呟く。

さっきの理由はこれ。なまじ複数人していると、面倒なのが来るか、
数で押すかが考えられたから。二人ならまあ結果としてこうなっ
たかなん。

遠くで紡がれる言葉。戦闘は免れないか。さっさと片付けないと
アズマが心配だ。まだファルが味方とは決まっていな

い。呟き、想造するナイフ。虚像にして実像。二律背反の物体。いつ
もより線がぶれているのは癖頭のせいでしょう。

angle come back again

連続的な金属音。場所が変わり変わりに、人が空を見上げる。人
影が過ぎ去った後に。結局辿り着いたのは、何処かの寂れた公園。
空き地だと、敵がこいつだけじゃなくなるからやめ。

「ふー・・・なかなか・・・しぶとい」

軽く深呼吸をし、ナイフに付着した血を掃う。傷は無し。着衣が
若干裂けた程度。

対してこっちは、と比較するまでもない。頭や喉に傷がないのは、
やはり生け捕りだろう。足を狙い、腹にパンチをするのも。

一撃一撃で意識が飛びそうになる。なんとか踏ん張れるのは、フ
アルがいるからか。それとも意地か。

……恐怖……だろうな。生け捕りにされたら、何されるか解ったもんじゃない。かと言って勝てるか。元々戦闘経験なんて皆無。今までやってこれたのも緋色達のおかげ。

「強情な。さつさと気絶しろ」

特異な形状のナイフが閃く。瞬間的に強張る体。躲せる程にしか込められていないと言つのに、だからこそ意識はナイフに注がれる向いていると

「がっ！……げほ」

もう片方の手が腹を穿つ。何度目だろうか。殴られる度に意識が霞むから知らない。手に持つ槍も線がぶれる。それでも実像はまだ線を結んでいる。結んでいるなら当たる。

「ぐっ……アアアアアアアア！！！」

途切れかける頭からの信号を、声を張り上げ強引に繋げる。相手は避けようとしめない。だろうな。当たりなんかしない。

頭が急停止の命令を下し、槍は止まる。これも何度目か。目測を誤った訳じゃない。腕が何かしら異常をきたした訳でもない。矛先にはファルがいるから。

反撃の度にこれだから、もうファルもそうゆう奴だって理解できる。割り切れる。でも……なら何で攻撃してこない。何故そんな思い詰めた顔をしてる。

何に葛藤しているのか。俺に手出ししない事を考慮すると、俺の事で葛藤してるのか。ならまだ信じれる立場でいれる。何から何まで希望的観測だが、根拠は今いらぬ。

「……………いくつか聞くけど」

「……………なんだ？」

「お前じゃない、ファルだ。……ファルは望んでそこにいるのか？」

男から笑みが消える。生意気に思え。俺だってお前は嫌いだ。そのやり取りの間に消え入りそうな声で答える。

「僕、ドリーマー、望んでる」

「そうじゃない。……ファル個人として……だ」

押し黙るファルに対して、嘲笑が男から漏れる。サドスティックで甲高い笑い声。頭の中で怪鳥野郎に格下げ。その怪鳥野郎が甲高い声のまま言い放つ。

「ドリーマーに意志はない。ましてや存在も、思考も、感情も。機械なんだよ！俺もそうだがなあーハハハハハハ！！」

「黙れよ、怪鳥野郎」

「な……………に」

他人に対しての質問も自分で言うから、カチンとくる。ファルに質問してんだから邪魔すんなよ。

「……………喋りたいなら質問。……ドリーマーは寂しいって言うか？」

「あるはずないだろ」

「……………次。……ドリーマーは礼を言うか？」

「……………ない」

「……………最後……………ドリーマーは涙を流すのか？」

「愚問だ」

「・・・・・・・・・・なら・・・・ファルは俺の家族だな」

アズマの視線に合わせ、ファルの顔を見る。怪鳥野郎にも驚愕の二文字が浮き出た。確かにファルは泣いている。にやりと笑いたくなる。やっぱりファルは家族だ。

「ファル、もう一度聞く！ドリーマーとしてじゃなく、ファルとして俺といたいか！！！」

「戯れ事だ！」

動きに動揺がある。ナイフにもそれが顕れて、線が二重だ。まずナイフ。刃と刃で弾き、続く拳を反転して後ろに回る。回り様に柄で頭を叩く。やはりすつきりしないと駄目だ。動けるものも動けない。

「・・・・・・・・・・くっ」

見下す立場が逆転。それだけ驚愕な出来事らしい。自分の中でありえない事があったのだ。驚かないのは無理な話。

さて、これでようやく対等。戦闘経験は向こうが上だが、盾がいなくなつて更に動転。こっちは悩みが消え、想造物に乱れはない。傷は痛むがなんて事はない。槍を軽く回し、深呼吸。相手が冷静さを取り戻す前に、ケリをつけた方がよさそうだ。

「・・・・・・・・・・終わらせよう」

誰もいない公園。明日には一つの話題ができる。公共物破損の容疑とかも掛かるだろう。長い間を置いて、再び動き出す。思うより

も長い夜になりそうだ。

20th「転がる石」(後書き)

編集できません。いえ、時間がないのではなく、やり方が解らないのです。ここおかしい、とか思っても「承下さい。だってできないんだもん。」(開き直す方もどうかと思わないで下さい)

21st「長いエピソード」(前書き)

ふと、周りを見ると違和感。そう感じるのは間違いではない。気のせいではない。そこに転がるのは、気づかない日常。捜せば見つかる一瞬だけの非日常。立ち止まるのもたまにはいいかも知れない。

21st「長いエピローグ」

暗がりには火花が散り、花を咲かせる。明瞭な金属が弾き、弾かれる音。これだけ派手だと誰か来そうな気もするが、それはないと思う。何の為に選択した公園か。元々人目を避けて場所を選んだのだ。それにこの時間帯に訪れる事なんて皆無だ。

軌道が一つ流れ、粉碎されるベンチ。湾曲する歪な雲梯。ナイフではこうはいかない。この場での槍が出来る技。身で薙ぎ払い、柄で胴を牽制する。様々な点で優劣はあるが、ほぼ対等。なら、リーチがある槍が有利。加えて相手の攻撃は単調。軌道が判りやすい。

「……………ふっ！」

躲し様に柄が脛を捉え、バランスが崩す。悶絶し、もたつく間に構え直し、石突きで穿つ。が、ハズレ。やはり突きはまだ未熟だ。必死に躲した相手には汗の粒が見える。苦悶の表情に、乱れたスーツ。体のいいサラリーマンから、最早疲れたサラリーマン的な印象。ハゲは流石にないけど。

それにしても余裕こいてる気がする。勝ちがあっても負けがない事を確信しているのか、自惚れか。どちらを認めても、調子にノッている。

「くそ……………くそくそくそくそ！」

かなりの激昂状態。想造物を通して、精神が乱れているのがよく判る。荒れに荒れて、ナイフの形状は更に歪で、切れそうな感じはない。

今まで自分は泥を付けた事、虚仮にした事はあっても、された事はない。命令には忠実でそれ以外では、他人を心身ともに限界まで擦り減らし、人間性を破壊する。恐怖を刻み込み、へつらいさせ、自分が上にいる事を示す。

その分、自分の上にいる人物を敏感に、本能的に理解するが、それは組織の中だけの話。今回も本来なら、アズマに負ける筈もないいつも通りであるなら。予想外の出来事で動揺し、新米ファインダーに泥を付けられ、激情に身を任せている。

「ガアアアアアアアア！」

しゃがみ込んでいる状態から、途中動作無しにナイフが流れる。やっぱり余裕をこいてるヒマはない。更に攻撃の軌道が単調にはなるが、その分ナイフは速く閃く。

得物を持つ手が、後ろに引かれる。勢いよく突き出す前兆。以前トウマにやられた事がフラッシュバック。怒りに任せたからよくは覚えていないが、屈辱的に体は記憶している。とりあえず記憶通りに相手の動作に構える。読み通り、勢いよく突き出されたナイフ。槍を盾にし、だが不器用に受け流す。しかし、勢いはまだ前に。足が真下で泳いでいる。その足を払う様にケリを一つ。力はてんでかかってないが、面白い様に相手の体が地面に抱擁される。泥を付けたまま、振り返る苛立ちの色を見せる顔に

「・・・とっ」

野球なら外角低めを綺麗に流し打ち。鈍重な音が痛いぐらいに空

気を揺らす。歯が数本飛んだらうが、そんな痛みを感じる前に脳震盪で意識は底に沈着。さして問題が無ければ、数分すれば目を覚ます。

「~~~~っ・・・ふう」

手から重さが消える。槍は大気に消え、筋肉は膨張と収縮を止め平常に。万力から解放された様な感じがして清々しい。切り傷も時間と共に癒えていく。逆に癒えないのは他人を傷付けた事実。殺しはしてないが、弱い心に深く刻まれる。気分が良くなる事はない。

「アズーー!!」

抱き着き、というかそれももう攻撃だ。久しく喰らっていなかったから、それに腹は痛い。だが、江涇に似ていて、懐かしくも感じるこの感覚。感じ間違いではない暖かさ。離れてほしいが手の届く距離に居てほしい。ファルだと飛び込んでこないと寂しい。そう寂しい。ファルも、多分俺も。微妙に開いた俺とファルの間には何かあった。いや、溜まっていた。ダムに降った雨が溜まる様に、どうとも言えぬ俺とファルが作り出した雨雲が、そこに雨を降らせ溜まっていた。

随分と許容量の少ないダムだったが、第三者を切っ掛けに綺麗にぶち壊してしまった。第三者さまさまである。

「・・・・・・帰るか」

白い髪に強調されて見える白い肌。暫く振りに見たその顔。今気づいたが、白に混ざる小さな泣き黒子。何故見えなかったのか。本心で目を背けていたのだからか。解釈の仕方はどうとも取れる。取るに足らない事だ、と思ってもいい。が、そうゆうのを、個性を発

見するのが関わり。見つければ関わっている証拠。

ファルに手を引つ張られ体を起こす。手は若干冷たい。気温の所為か、そうゆう体質か、寂しさかは知らない。寒いなら家に帰ればいい。寂しいなら側にいてやる。ようやく歩き出し、家路に足を運ぶ。

「もっしもうし定時連絡デス。・・・相方はただいまノビとります、指示をどうぞ、オーバー？」

心拍数は多少増量したが、驚きはしなかった。疲れたからだ。ここからまた、もう一戦をやる気力はない。搾り出せばあるか。諦め気味にゆっくりと振り向く。トンガリが一つ頭のとっぺんにあり、例えるなら鬼かユニコーンとも言つか、どこかふざけた髪型。黒髪と金髪が見事に半々だ。トンガリを中心に分かれている。どこまでふざけているのか。

携帯で連絡をとりながら、こちらに視線を傾け警戒気味な様子。恐らく電話の相手がリーダー的人物だろう。ここで電話を取り上げれば、組織について知るチャンスではあるが、今の状態を考慮するとピンチでもある。援軍なんて来たら詰み。出方を窺い呼吸を深く、疲労を吐き出す。

「とりあえず情報の流出は避けると？・・・了解デス。ファルの方は？・・・メンドイデス、王子様もいマスノデ。・・・解リマシタ。では」

通話を終了し、くしゃみを三つ。あまり乗り気には見えない表情。

「どうもこんばんはデス。まあそんなに構えないでクダサイ」

トンガリの頂点を弄りながら、左手を宙に漂わせる。

「dream out」

想造したものはマントだろうか。漆黒で滑らか。淡く蛍光灯の光を反射している。風にはためく漆黒のマント。

「争う気はないデス。用があるのは二つだけ、いや三つになるかもデスネ」

言いながらマントの両端を持ち、ピンと整え相方の喉元に整えた部分を当てる。傍目だが窒息させる程力は加えてる様には見えない。

「どうあってもこの組織って、原則二人以上で組をつくりマス。何故だか解りマスか？」

むりくり馴れない言葉を使っている印象。デス、マスが妙に半音上がっている。

「……一つは勝率を上げる為デス。まあそれは貴方には意味ないデスネ。もう一つは……」

目が細まる。何か苛立ちを思い出している様で、酷く口元が吊り上がり歪だ。

「私わたくしこの人嫌いなんデスネ。デカイ顔してマスシ。いらつきマス。ホントムカつきマス。……この人より下にいるから仕方ないんデスけど」

愚痴り始め更に顔が歪になる。よっほど嫌いなんだろうな。同情

はしないけど、あいつは俺も嫌い。多分大半の人から嫌われるタイプだ。

「まあ、マイカさんから許可貰いマシタ。この後帰っても癩癩起こして、私に飛び火するのは御免デス」

近いしい他人からの、例えば学校ならクラスメイト。会社なら同僚。側にいる奴からの圧力は何を生むか。そいつが自分の目の前で、自分の手の平の上にといたらどうするだろう。

「さっきの話の続きデス。何故二人以上かのもう一つの理由は・・・

唐突に理解した。あのマントでどうやってかは知らない。でも何をしようとしているかは解る。暴力は暴力を生む負の連鎖。堆積した鬱憤は停滞した分、一気に噴き出す。

「情報処理」

これ程血つて吹き出るものだったろうか。リータの死に姿が脳裏に飛来。あの時は血が体内にほとんど残留した感じだ。逆流した血は、少し出ただけ。さほど多くはなかった。

体が痙攣を起こし、血が文字通り噴水の様に吹き出している。返り血は浴びていない。漆黒のマントが全部防いで、だがマントは漆黒から深紅に変色。滴り落ちた血が妙にグロイ。

「さてデス。ドリーマーに意思はないデス。存在も思考も感情もないデス。これは半分事実デス。私にもラテラにも、文字通り全部半分しかありマセン。本気で喜べないデスし、本気で寂しかったりしマセン。あ、誤解しない様にデスけど存在はゼロデス。戸籍などあ

りマセン。

ファルはそうだったと言えはいいでシヨウカ。意思と感情が表に強くでていマス。これはちょっと驚きデス。報告してみたら、連れて来い、だそうデス」

長々にして淡々とあそこの人物、ラテラとか呼ばれた奴に言われたがその通りだ。まるで機械的。欠伸が出る。

「……………で、どうシマス？……………そうデスネエ、ファルを寄越しまスなら、貴方は見逃してあげマシヨウ」

「……………」

心身共に悲鳴を上げ、摩擦を起こしている今。抵抗して死か、ファルを引き渡して生、だろうか。こわいと思う感情が漏れ出す。ちらちら脳裏に映る自分の血化粧。考え事に気分も沈む。

「……………無視デスカ。無視はキライデス」

「……………dream……………out」

それでも強い否定の表示。押し潰されそうでも、体を引きずっていても、ファルは渡さない。もう家族なのだから。手に顕れる槍は強い意思を示す様に、ブレーつない。再来した死に姿を無理矢理押し込め、目を見張る。

否定の意を顕したアズマに、ファルは胸を撫で下ろした。生じたのは迷い。疑いでもあるが、一瞬でもそう感じた自分に叱責。アズマは他人を犠牲にしてまで生き続ける程強くはない。

とりあえず意思は固めた。無謀とか蛮勇とか、そうゆう言葉を言われてもいい。そんなもんクソ喰らえだ。計算や経験で割り切れな

いものもある。ケツの青いガキが言えるもんでもないけど。守りた
いものは守る。じゃないと後悔するのは自分。絶望を感じるのは切
り離されたもの。

動きはまだない。プロローグは遠く、しかしエピソードもまだ遠
い。一話完結のアニメならオープニング後のCMが終わった辺り、
と言ったところか。

21st「長いエピソード」(後書き)

大分更新が遅れました。ちよくちよく書いてはいたのですが、行事とテストに時間を取られました。近日中にもまた遅くなるかも知れません。読んでいる方はすみませんね。

22nd「誰かがいると見栄を張りたくなる」(前書き)

風に舞い上がり、踊る木葉は何故か不思議だ。ヒラヒラとしていて、いつかは落ちると思ってもなかなか落ちてこない。木葉は風を掴み、俯瞰している。まだ風を掴みきれない仲間を。

22nd「誰かがいると見栄を張りたくなる」

充滿する死の臭い。血が空气中に溶け、鼻を叩く。その中ではためくマントの音を聴きながら、精神を擦り減らす。

くるりくるりとマントと共に道化も舞う。どんなに喘ぎ手を伸ばしても、道化に触れる事はない。くるりくるりとまた手から逃れる。マントは何の為なのか。視界を遮り、自分の姿を隠すため。私の姿は見えても捉えられはしない。

「……もう大人しくファルを渡しマセンか？勝ち目ゼロデス。諦めマ……」

声を遮り槍が空気を切る。話の途中で邪魔されて気分はあまりよくない。バサリとアズマの目の前で音を立てる。視界はほぼ皆無。心も竦み、踏鞴を踏む。視界が晴れたと思えば、側頭部にマントの感触と共に鈍い痛み。蹴り飛ばされ二回転して止まる。

「……まだ立ちマスカ」

確かに気づけばまた立ち上がり槍を構えている。もう辛いし痛いし倒れたら楽そうだ。それでも自分を繋ぎ止める存在がいる。穴に落ちない様に、落ちそうな時に支えてくれる命綱様な。その存在が寸前の所で引つ張る。

「……ふっ……うっ」

肺に溜まる疲労と痛み。呼吸する度に、それを深く感じる。脇腹はジクジクし、側頭部はズキズキと。さっきと違い対等なものなど何一つない。逃げた方がいいのか、という提案は却下。およそ逃げられはしない。

「ほらほらどうします。このままだと死にマスヨ」

相方を殺した様に両端を持ち、挑発的に、後ろにピタリとついているファルに見せる様に牽制する。

「……ちっ」

苛立ちを覚えるその行動に舌打ちし、前に出る。少女は邪魔にならない、何があっても対応できる距離を保つ。

「……懲りないデスネ」

マントを前方に投げ、アズマを包み込もうと広がる。槍で払いのけ、しかし相手の姿はいない。後ろを見てもファルがその姿を探している。

「なっ……」

疑問と恐怖。目に見えない事が一番動揺を与える。いつ来るか判らな……

「……えっ？」

飛び散る鮮血。

何処から？自分の右腕から。

誰の？自分の。

深くはない。まだ腕はついている。落ちてはない。でも血は溢れる。その事実を理解して感じる痛み。

「　　っ……」

熱い。切られた所が、アツい。歯を食いしばり、が、声は上げない。上げればイメージがブレ、槍は消える。消したら駄目だ。想造できなくなる。イメージが瓦解したら、組み直すのに時間がかかる。ヤバい、意識が……

「マート、駄目。アズ、傷つけたら。これ以上、やる、僕、闘う」

視界の端に映る、自分を庇う少女。情けないしカッコ悪いな、俺。少ししゃんとしろよ。せめて今日が終わるまで。

「だからデス。交換条件は話しマシタネ。ファルが来るなら見逃します。手は引きマシヨウ」

二度目の悪魔の手引。さっきと違う状況は、ファルの心を引き付ける。ファルは闘いたくない。組織内でお互いの情報は黙秘だが、それ以外は自由。マートとは何度か顔を合わせ、面識もある。親しいという訳ではないが、クラスメートみたいなもの。顔は覚える。

「私だってファルとは闘いたくないデス。でも命令は絶対デス。ファルも解るデシヨウ」

命令は絶対。何度も頭の中でそれは反響する。命令かアズか。命令に従えばアズは助かり、アズをとればアズは十中八九無残に死ぬ。一二に賭けるのは博打。外せば大きなものを失う。

「……ぼ……つ……戻……」

「馬鹿……行くなよ」

脂汗が額に滲みながらファルの肩を掴む。大分効いた。まだ痛いし、痛みは引かないしホント厄介。

「気絶しないんデスネ。丈夫な体をお持ちデス」

「うっさい。……ファルはもう家族なんだよ。渡してたまるか」

「でも、アズ、死んじや」

「死なない。俺が死ぬと目が覚めない奴もいるから」

ファルは江湮を知らない。知らせてないし、この話は正直疑問を誘う。今度見舞いに行くからその時に話そうか。

「……しぶといデス。めんどくさくなりマシタ。どうデス、貴方も組織に入りマセンカ？ magari なりにもラテラを倒したのデスから」

ラテラ？あの相方に殺された奴の名前か。

「……ヤダよ」

「？……ファルと一緒にいたいんじゃないんデスカ？ならここで抵抗して最悪の結果を招くよりよくないデスカ？」

そうだよ。一緒にいたいさ。でも組織内ではなく、日常の中で、家で一緒にいたい。それに最悪の結果はファルを渡す事だ。勘違い

すんな。

「・・・答えは同じだ。ファルは渡さない」

ファルを後ろに引かせ、槍を鼻先に向ける。徹底抗戦。梃子でも動かない。

「・・・・・・・・・・では殺しましヨウ」

その言葉に前に出ようとする、少女を止める。

「言っただろ、死なないって。それにこのままじゃ、格好悪い」

強引に手を出さない様に説き伏せて、相對する。ファルが闘おうとしてもさせない。さっき震えてたし、リータの事がトラウマになっているのだろう。それに同じ境遇の人物だ。手を出すのも引けるというものだ。

「やっぱりデス。だからめんどいって言ったデス」

「知らないな、そんなこと」

「ハイハイ、そうデスカッ！」

マントが翻ると同時に槍を振るう。しかしマントに包まれるだけで、他に手応えはない。

「ちっ！」

また消えた。いや隠れたのか。どちらにしる見えない。それに捜すにもマントが邪魔だ。視界を掠る相手の姿。下にいると思ったらマント越しに拳が鈍痛を運ぶ。胃液が逆流し、消化管を溶かす。口

まで戻るが強引に飲み込む。出ようとすると、戻ろうとするものが混雑し、苦しい。意識が朦朧となり、反撃には移れない。追撃を予想し、弱々しく体に入力構える。

「……？……」

追撃はない。相手は反撃を予想したのか、後ろに後退。そんなことしなくてもいいだろう。あの状態ならもう二、三発殴れた。それで気絶は流石に意地でもしないが、わざわざ時間を延ばす様な真似めんどくさくしてるのは自分じゃないか。

「……ふっ！」

攻められているのは自分。少しこつちから攻めてみる事にした。右上から左下、跳ね返り様に顔面を狙う。共にマントを翻し、バサリと撫でる感触だけ。しかしマントは切れない。傷くらいつきそうだが、ただ漆黒に吸い込まれているだけだ。突きでもしたら穴ぐらい空くだろうか。

右腕が使えないでも支えるだけで突く。慣れない左手と支えるだけの右手。更に速度は激減。当然マントに阻まれ、速度も勢いもゼロ。ついでに脇腹に蹴りが入る。無駄ではないけど、体力も減る。とりあえず確認したのは穴は空かない。どうあっても、ファルの時みたいにブレイクする事は不可。宙に浮いてる紙を切るのも難しいし、ましてや布（と言うのは語弊があるが）、それでも難しい。さて、どうするか。

「……ん」

何か精神的にぐらつかせるものはないだろうか。あのマントについてはどうだか。あれだけはためかせて邪魔じゃないだろうか。実

際攻撃の時にいつもマント越した。それともその行為に何か意味があるのか。めんどい、と言いながら早めに勝負を決めない。あのマントで切り付けければ簡単だろう。生け捕りだから、殺さない様にしていいのか。謎だ。

目を細め、焦点をマートの後ろに転がっているラテラに合わせる。視界にちらちら映るマントが癩に障る。別に見ても今更どうともないが、死人に口なし。何も喋りはしない。鮮血は今だグロい。自分の右腕から溢れる鮮血はというと、特におかしな所はない。見比べても共に鮮や・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

おかしい。首をかつ切られたら血は出てくる。それはそうだが、普通頸動脈を切られて数分経てば、血は鮮やかな赤ではなく体内で老廃物を含んだどす黒い血になる筈。まだ赤だということは、静脈から血は流れていない事になる。

「・・・・・・・・・・あ？」

変化は急激。血はどす黒いと思っていたら、あの鮮血はどこかへ失せ黒になっている。見間違いない。あの変化、というよりは自分がそう認識したら、その認識通りに合わせた感じだ。なんかだんだんとカラクリが浮き出てきた。

「なあ〜によそ見してるんデスカ？」

わつと、まずい。カラクリを見破るのが先決だが、そんな事しながらだと隙だらけ、穴だらけだ。やはりマント越しにくる攻撃を槍で防ぐ。そしてやはりそれも単発。追撃をしてこない。

今更になって判るが、俺とラテラの間挟まれる様にマートがい

る。それ以上近づかれと困るのか、単発の攻撃で距離を空けたり、そうやってマントをはためかせているのは意識を自分に向ける為の布石か。今の目配せで見ているものは気づかれた、と思う。それなら、揺さ振りをかければ動揺する筈。

さて、方針は固めたもののどうやって近づくか。ラテラに近づかせたくないなら、何らかの形で妨害する。それはそれで動揺の種類になる。何にしてもあとはもう突っ込んで、状況に任せよう。

「ふうっ……どりゃ！」

大袈裟に声を張り上げ、目的は自分への攻撃だ、と思わせたらしい。ラテラが目的だ、と思つてたらドンマイ。そこら辺は考慮せず、足に力を込め加速。槍突き出す格好、所謂突進。どんなのも力押しのごり押しの方が、一番合理的かも知れない。

分岐点に迫る。仮定が果たして当たるかどうか。射程まで10メートルを切った。不安なのか何かよく解らない感情が、左胸の奥を締め付ける。翻るマントの音がし、手から離れる。「来た」と内心で叫び、更に高鳴る鼓動。マントが覆いかぶさる手前、勢いはそのままに槍を地面に突き刺す。ハイから一瞬でロウへ急ブレーキがかかる。石突きが腹に減り込み貫かれるかと思つた。そうして不器用に、棒高跳びの要領でマントの頭上を越える。マントが目隠しになつた様で、それこそ消えた、と思つただろう。呆氣にとられた様がよく見える。

ふわりとした浮遊感の後には重力に引かれて落ちる、羽を失つた鳥の様な感覚。地面に着地する手前、マントがようやくこちらを視認。それこそ空から落ちてきた様に思えただろう。

槍が上から落ちる。ついでに人も。唐突な事に反射的に避けた。足に痺れを残したまま槍を引き抜き、更に追い打ちを。引き抜き様の勢いで、槍で空気を切る。当たりはしなかったものの結果はほぼ最高。バランスを崩し、また立て直すタイムラグは長い。加速した

人と、バランスを崩した人。どちらが速いかは歴然。

「まっ、この・・・」

焦燥が色づけされた声。下手な敬語もない。追いかけてくる音は聴こえても、追いついてくる気配はゼロ。マントが風に煽られる音が虚しい。横に転がっているラテラを跨いで、180度反転。地面に手を着き、マートを睨む。苛立ちの顔、乱れた呼吸。地面を蹴り、動揺の種は見事な花を咲かす。

「・・・ははっ」

静かな笑い。最初から仮定を立ててた。あまり驚きはしない。首筋に指を当てると指を一定の速さで跳ね返す確かな鼓動。生きてる。ちゃんと、血の海の中で生きてるシユールな状況。血の海が事実じゃないければ全てまやかし。夢幻だな。

「生きてる・・・な」

改めて視点を戻すと脱力しきったた姿をしている。動揺している事を示すブレたマント。漆黒は色をなくし半透明で向こう側にファルが見える。これからどうしたものか。この転がっているラテラを連れて帰ってもらえるというのは希望的観測。

もっじき幼い子供は眠る時間。体も栄養を求めている。アニメの後はご飯を食べて、風呂に入り、ぐっすり寝るのは子供の特権。これ以上はいざこざが起きて欲しくないな。

22nd「誰かがいると見栄を張りたくなる」(後書き)

最近睡眠時間が激減しました。11月11日に発売されたゲームをやっています。で、寝たのは3時間ぐらいですかね。睡眠時間だけは受験生並ですね(一応、私は受験生ではないです)

23rd「初体験」(前書き)

見上げて、電線も家も建前も、木の枝すら見えなくて、雲だけしかない空が好き。

23rd 「初体験」

まずAによってBという結果ができた事にしよう。それを見ていた人は、AによってBになったと頭の中で理解する。これが意外と曲者。

具体例を挙げてみよう。ここに造形は同じだが実際に切れる剣と映画で使う様な紅い水飛沫が舞うだけの切れない剣があるとする。まず普通に切れる剣で相手を切る。当然痛みを感じる。これは切られて血が出て実際に痛いと感じるから。このイメージを植え付け、もう片方の切れない剣で切り付ける。紅い水飛沫が舞うただけが、本人は激しく痛みを感じる。まやかしにすぎない錯覚だが。

冒頭に戻ると、AをしたからBになる。この話だとAが切られたで、Bが痛い事。プラスで切れない剣で切られたをAとして、それでどう思うかをCとする。本人はAによりその過程で血が出てBと感じる。Aとはと言うと同じくBと感じる。Aの効果は違うにしろ結果は同じ。前提としてイメージを植え付けなくてはいけないが、BだからAされたと錯覚している。マートはこれを利用していい。

最初に見せた血飛沫擬き。全て想造の産物だが、相手にあれば危険だ、と恐怖を植え付ける。実際それ程殺傷能力はない。補足して説明すると、相手の想像通りに変化するだけ。だから血が少ないと思えば少ないし、多いと思えば多い。血は紅いと思えばそうなり、どす黒くなる筈だと思えばあなつた。蹴られてこれくらいだ、と思

えばそうなる。マント越しに攻撃していたのはこの為。傷つけるのが目的だが、対象が肉体ではなく精神。精神を瓦解させ、想造物を破壊する。マントにとって相方がいるのは、勝率を上げる為ではない。自分の能力を植える苗床でしかない。

単発だけの攻撃や浅い傷をつけたり、植え付けたイメージの様にマントで切る事を多用しなかったのは、先程も言ったが、殺傷能力は皆無。あまりにやり過ぎるとダメージの割にケロツとしている自分を不思議がる。程よく精神を擦り減らし、相手を破壊するのだがアズマみたいにタフだと結果、ばれてしまった。

今まで狩ってきたファインダーは皆気づく前に崩壊を迎えた。それが自分の中の慢心に結び付く。今回も何度か攻撃すれば、精神を擦り減らし廃人となるだろう、と括っていた。最終的に看破されてしまう。このショックは自分の中では大きかった。ばれるとは思わなかった自分の能力。自信となっていた能力。それが崩されるのは一瞬だった。

「形勢逆転だ……ラテラを連れて帰れ」

敢えて優位な事を示すアズマ。一旦切った後の言葉は、自分自身の希望。予想外の二連戦。今はまだ、筋肉が攣ったり脱力するのを行ったり来たりしているが、明日になれば多分動けない。学校あるし、最悪休むかも。いや、たまにはいいだろうか。

意識を戻すとマントは依然ブレたままだが、頭をぐらぐらさせている。仰ぎながらぐらぐら……ぐらぐら……ぐらぐら。ケーキ屋の前にあるベロを出した人形のように。急に頭が止まり、だが顔は上を向いたままだ。

「……ラテラとかマートとかファルとか……」

そのまま上に喋りかける。

「名前なんて意味ないデス。名前を貰った時が生まれた時デス。いきなり、突拍子もなく意識が目覚めて、今日からお前は何かだ、デス」

遠くに見えるファル。半透明のマント越しで暗く見えるのか、それとも思い当たる節があるから暗いのか。思いたくはないが後者だろう。良くは見えないが俯く顔に、何か思い当たる節があると書いてある。

「死んでもどうせいない人物デス。……でもこの命……こんな命でも生きてマス。生きてるなら……」

半透明のマントが漆黒を取り戻す。鋼の教えと言うべきか、その組織の上手文句ではないだろうか。言いくるめられて、組織のいい手足。頭からの電気信号がこない限り動かない手足。そう考えるとラテラの方が人間的だな。

上を仰いでいた首が回り、言葉の続きを口にする。

「自分の命を懸ける、デス」

内心、最早溜息も出ない。どこかで避けられないものだと自覚はしていた。本心はそう警戒していて、警鐘をずっと鳴らしていた。だからもう若干諦め。希望は受け入れてもらえない。

「……では……フィックス（定めること）」

深呼吸の後、静寂に眩く。周りの「静寂」という音に掻き消され、
そうなくらい小さく。それでも確かに届き鼓膜を叩いた。

「触れたのなら暗転。続いて映るモノは虚構と虚像」

声量はそのまま。依然掻き消されそうだが、実際声量はだんだん
と上がっている。そう聴こえないのは、危険性を訴える警鐘が頭
中で最大限に鳴り響いているから。何が危険かは解らない。それ
も頭は必死だ。

「道化は灰燼となり、貴方を包み、貴方を惑わす・・・」

体を強張らせる声。世界が遠くなる錯覚。地に足はしつかりと着
いているのに、今にも倒れそうで、同時に浮遊感がある。あと数秒
したらそれもなくなる。これが終わると共に。

「・・・プライソナーファントム（夢幻の虜）」

終わりを告げる最後の言葉。やっと自我が手元に戻る。同時にマ
ートの手から消えるマント。全部が一遍に消えるのではなく、端か
ら砂になって風に乗る様に消えていった感じだ。そして風は、最初
からこの状況を造ったかの様にこちら向きだ。

「っ・・・！！?・・・」

視界がぐらつく。万華鏡の中みたいだ。何もかも、目に映るもの
全てが二重三重にも見え、急に乱視になった、とかそうゆうレベル
じゃない。あるうことが背景が黒い。地面はそのままだが、蛍光灯
の明るさは皆無だ。

「……………うつ……………ぶえっ！」

耐え切れず嘔吐。胃の中は既に綺麗に消化され、胃液しか出ない。もう何が何だかさっぱりだ。そう意識すると余計に混乱し、その心情を槍を通して外に顕れる。

「……………だ、大丈夫……………デスカ……………すぐ……………はあ……………すぐ終わりデスヨ、壊れてしまえば……………まず……………怖いモノ……………」

いつの間にかいたか、それと怖いモノ。何だそれ？それにあれは……………マート……………なのだろうか。アイツが喋っているのか、それともマートが離れた所で喋っているのか。

どっちでもいいが、あれは……………何だ？

会い（殺し）たかった相手だ。よく知ってる。

今、この状況で会うなんて最悪。何かに惹かれたか。

好都合。一秒でも早く、血が沸騰する程滾る。

まやかした。あいつの得意技。ありえる筈がない。

だから意識を保ちながら、狂いながら……………

「コロシタイ」

背反し、共存する感情。嫌悪は恐怖を連れて来るが、歓喜が余計にプラスされている。

「・・・はあ・・・怖いデスカ？」

何を見てそう言っているのか判らないな。なにしろ恐怖と歓喜が交錯している。体が震えているのは自覚しているが、恐怖に震えているのか、歓喜に震えているのか判断しかねる。

「ふう・・・。。。。。。慣れない・・・デス、いつも・・・」

徒手空拳のまま俯いて話す。思考を麻痺させ、視界だけは鮮明。何か覚悟があった気がしたがいいや。自分に素直になろう。早くこのキモチワルイ（ココチイイ）世界から出よう。

「私の姿どう見え・・・」

初速は穏やかに、話に夢中で対応が遅れた。それともいきなりはこないと高を括っていたのか、槍が左肩を貫通する。金属が骨に弾かれる音が響く。貫通した、と言っても骨の上の肉を落としただけ。

「ぐう・・・っ・・・アアー・・・っ！！！」

激痛の音色。アズマの目には虚なカゲの一部分、煙が掃われたかのように晴れた。口を開けているから何かされる前に攻めてしまおう。今回は実体がちゃんとあるみたいだから逃がしはしない。

煙の体を蹴り槍を引き抜く。後ろに円を描きながら回し、そのまま顎を打ち上げる。体はあまり上がらない。バランスを崩しながら後退。また口を開けるが、聴こえていない振り。口は動かしたくない。

「貴方にとっての恐怖の象徴が見えてるんじゃないデスカ？どうし

て足が竦まないのデスカ？」

答えはない。変わりに槍がとぶ。動揺と激痛。黒い空と現実味のある地面が揺らぐ。今にも空は落ち、地は沈降してしまいそうだ。

「っ………弾ける！」

指差された左腕が言葉通り、弾け肘から下が地に落ちる。痛み、それはなかった。腕が失くなった、だから何だろう。頭さえ残っていればいい。最後は噛み殺す。

小休止の後、気にせず槍を右手だけで振るい追い詰める。止まっただかな、と思っていたが淡い希望。そんなモノでは止まりはしない。

「何故デス！？何故止まらないデス！」

マートが見せているのは幻。マントに触れた所、物、何でもジャックし相手が想像した通りになる。先程のマントを見えない程、粉微塵にし風に乗せアズマの全身に張り付けている。あとは言葉による作用。「弾ける」という身体的な言葉。「怖い」という感覚的な言葉。それらの言葉通り流れていく。指差された左腕が弾け、怖いモノは実際に出てきた。すぐ下に憎悪をくつつけて。

アズマにこの能力を睨けた事自体間違いだ。精神の瓦解なんて毎晩ある。虚で、何もなくて、嫌悪と殺意に満ちた夢。今更こんなモノが何だというんだ。こんなモノでは壊れはしない。

心のどこかで、あのイーターに恐怖を抱いていた事は事実。あの惨状、江湮を昏睡させたヤツが頭から離れた事はない。元々、夜の巡回はアイツを殺す為。恐怖の下には負の感情、混沌として整理できない殺意と憎悪の塊。アイツの姿に見えるマートは不幸だ。体は吹き出る感情の傀儡。理性の入り込む余地はない。覚悟を思い出す

事もない。寧ろ殺す事を良しとし、快樂も便乗。幻想に伴う痛みがないなら、マートになす術はない。

「ぎっ……っはぁ……」

槍が脇腹の肉を抉る。気休め程度にアズマに幻想を見せているが、ないよりはマシ。行使を止めてもいいが、今のもジャックしていたお陰で逸れた。しかし行使を始めてから躊躇いが無い。集中力の燃費も最悪。躲す方に回してはられない。

背景は蛍光灯の光が戻り始め、二重、三重の实体は一つになりつつある。もうリミットだ。それはもう自覚している。自分を捉える槍が正確さを増している。頭を掃うのを躲し、トンガリが飛ぶ。勢いよく屈んだ所に膝蹴り。歪な音がして鼻は折れただろう。

鼻血が出て目も当てられない。踏鞴を踏んでいる暇はなく、突きが出される。鼻を抑えながら必死で横に避けるが、当たらないのいいのにタツクルをかます。避けたすぐ後な為、体は宙に浮き背中から地面に叩きつけられる。

「ひゅっ……はぁ……」

肺の中の空気が押し出され、呼吸がままならない。視界に映る、アズマの飛び上がる姿。刃を下にし、狙うは顔面。体を強引に捻り、何とか顔はさすも右耳はもっていかれた。完璧にトドメをさすつもりか、マウントポジションをし再度高く槍を掲げる。

「あぁ……終わりデスカ」

体から力を抜き、抵抗はしない。そんなに生に縋ろうとは思っていない。静かに、ゆっくり落ちる槍。走馬灯が流れ、短い人生が頭を過ぎる。一番の思い出は何だろうか。消えかかる意識の中、それ

を探す。

(今日からお前の名前はマートだ。頼むぞ)

一番最初に聴いた言葉で、最も古い記憶。名前を貰ったのが嬉しかったのか、その時にしか聴けない言葉が印象的だったのか、ただ何となく眩しかった。初めて見た世界は輝いていて、その世界でその人と一緒にいたのが喜びだったのか。

「これが・・・一番の記憶・・・デスカ」

眼前の槍を前に呟く。五秒は永かったのだと、気がついたこの瞬間。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？」

ぼやけた頭で理解できる風景。何の事はない。人通りが少ない普通の公園の景色だ。蛍光灯が強く光り輝き、夜は完全に訪れた事を示す。記憶を辿り、あの何か変な事を口にしていた所まで遡る。

「あれは・・・何だったかな？」

そこで漸く、自分が何かに跨がっている事に気づく。マートの肩間を見事に貫いた自分の槍。それを持つ自分の手。

いや違う。他人の腕だ。そうに違いない。知らない。こんな腕、俺は知らない。血まみれの腕なんて知る筈ない。

自分の肩から伸びる腕。ちゃんとその血まみれの腕にくっついて
いる。認めたくはない。都合の悪い現実
は頭が弾いてくれるが、目はシビアだ。目が己の罪を見る、とそれから焦点を外してくれない。

「マートの幻だ。・・・大方そうゆう幻を見せて、精神の破壊を狙ってんだろ」

自分の感覚器官は正直だ。今のところ、
現実を訴えているのは、視覚と触覚と嗅覚だ。聴覚と味覚は関係ない、とばかりに何も感じない。五感の内、三つが自分を責めている。多数決で決まった事実に、頭は渋々受け入れていく。一秒毎に、手が震えを増していく。

嘘だ

現実だ

幻だ

現実だ

認めない、なんて事は無理。罪に押し潰されてる。もうこれはま
ごう事なき・・・

「現実・・・か」

後頭部を走る衝撃。事実を受け入れたからじゃない。殴られたんだ。
冷静な頭は、冷静にそう判断する。誰だか確認して、地面を擦りながら振り向くと、白い髪の少女を抱えた男だ。顔面が腫れた痛々しい奴だ。

「……………起きたんだ」

もう一撃、首にグーパンチを喰らい、視界はテレビの電源を落とした様に、余韻を残して消えた。

23rd「初体験」(後書き)

えーっと、話の冒頭の事なんです但实际上にありません。例としては、熱いストーブに手を置いて火傷した人が、熱くなっていないストーブに手を置いた時に、同様に火傷したという事例が少数だけあります。

24th「あと・・・」(前書き)

たまにはいない神様にも祈りたくなる。困難な状況だからこそ尚更、ありえもしない事を願ってしまう。

ねえ、どこにもいない神様。ここから、どうか出して下さい。

笑い声が聴こえる。嘲る様な笑い。自分の生を喜ぶ様な嬉々とした笑い。何にしても不協和音だ。聴きたくない。耳に障り、鼓膜を強打する。気が狂いそうだ。

ふと思う。誰の気が狂いそうになるのか。これは誰の視点なのか。周りを見渡しても、笑い声の主はいない。

「事実デスヨ・・・貴方は人を殺しまシタ」

いつの間にか視点はマートの上に跨がっている状態。槍が眉間を貫いたままの。肌の色は青白く血の気がない。目は虚空を見詰めているとゆうのに、口だけは動いている。また笑う誰か。いや、自分だ。笑い声の主は自分だ。笑いながら、自分の意思とは関係なく腕が動く。もう自分の意思ではない。操られているとしか思えない。

その腕が槍を引き抜き、またマートの顔に突き立てる。自分は笑う。マートも笑う。顔を潰され、口も喉も刺されて、声帯を破壊されても尚笑う。槍が顔を貫通する度、肉が厭な音を立てる。それでもまだ笑う。

・・・やめろ

急激に視界が遠ざかり、自分の姿、自分のやっっている全体像が見える。

視界から女性が消える。命令を承ったらしい男が部屋を出て少し後に、何やらいろいろ持ってきた。

「あんパン、ジャムパン、メロンパン……残飯、フライパン、どっぱん、ざっぱん、さて何食べる〜っ？何でもかんでもありますよ」

敢えてツツコムべきか、途中喰えないものもあつたし、最後のは擬音語だ。結局喰えるの最初の三つだけだ。残飯は選ぶ奴はいない。

「………白米」

今が何時だかは知らない。気分的に朝だから、米派な自分は米が食べたい。選択肢からないから不機嫌になるか、とか頭を過ぎる。しかし……

「オツケー白米、超うまい。今から喰うにはお時間かかる、金かかる。待つのは今から一時間」

快く引き受ける。しかも一時間かかるのか。選択ミスったかもしれない。

「さてさてそちらのお嬢さん、何をお望みご注文」

顔の方向は自分のすぐ横。他に捕まった人がいるのだろうか。

「あ……緋色？」

不機嫌極まりない顔だな。多分気づかなかつた自分が悪いんだろ。うな。素直に謝っておくべきか。そう思ったが違う言葉を口にした。

「よかった、助かってたんだな」

「・・・よくないわ。状況は最悪ではないけど、最悪の一手前ね」

不機嫌な顔ではなかった。この状況をどうしようか、という策を必死に考え思い詰めた顔だ。そう、今はただ縛られているだけだが、今後どうなるか。想像する限りでは最悪。悪い方にしか浮かばない。

「・・・そういえば一季は？」

「知らないわ。一緒だったけど、分断されちゃって行方知れずよ。・・・あ、わたしも同じで、お供はいつもののでお願いします」

安心していいのだろうか。一季はここにはいないから捕まっていないらしい。でも一季ならどうするか。単身向かって来るとは思わない。何か算段をたてるだろうが、俺達がどこにいるか判るのか。最悪来ないかも。だから最悪の一手前か。一季が捕まったらもう手立てはない。来なくても結果は最悪か。

「三日、とか言ってたけどマジで三日寝てたの？」

「マジよ。私の次にアズマで、担ぎ込まれた時、意識なかったから卒倒ものだったわ。その後も目が覚めなかったから、夜も眠れなかったわ」

成る程。筋肉痛は時間が解決したか。さっきは半信半疑だったから、それ程深く思わなかったが、改めて考えると驚きだ。

「ふんふーん、飛べ飛べ行け行け銀河の果てまで、ギャラクマン
」 今だ！必殺デストロイビーム」

子供向けの特撮アニメか。しかしデストロイビームはない。そん

な何をデストロイするのか。敵をデストロイするのか。ちょっと子供向きにはきつくはないかな。

緋色は緋色でもう寝てる。慣れたらしい。俺が三日寝てたって言っただから、緋色もずっとこの状態か。風呂も入ってないのだろうか。しかし慣れって怖いな。三日続けばこんなもの・・・なのか。

アズマは寝れずこの男のBGMを聴きながら、一時間を部屋を見て過ごした。灰色の壁紙にどこかの入室。台所らしく、調理器具がある。どうやらビルらしい。どこに建てられているかは不明。窓からは景色が見えない。車の通る音は聴こえる。引つ切り無しに聴こえるから往來の激しい場所。今のところ情報はそんなものか。

「はい上出来出来立て、うまい白米。ご飯のお友達は何人欲しい？」

調子狂う。屈託とかなしだな。初対面で少しも遠慮がないし。

「・・・そのままでもいいです。・・・えっと・・・」

「おうおう、言えばたしかにしていない。シヨックな紹介、俺のお名前ナキ。今に帰るって書いて今帰。知ってる判る、これ確か沖縄の地名」

「東 東広・・・です」

「とうとうとうとう、オッケートウトウ。はいはいこれこれトウの分。そしてあつちらこちらはお嬢さん」

トウトウなんて個人的だな。しかしトウトウか。ついに何とかしましたみたいな感じだ。そこは別にいいけどどうやって喰うんだこれ。

目の前には湯気の出ている白米。三日間、何も食べてないからそれは食欲をそそる。しかし手は動かせない。拷問だ。こんな状態ではぼつりとあっても喰えなかつたら、それはただの虐めだ。

「はいはい、ほらほらはいあーん」

まさかの赤ん坊プレイか。この歳になって、他人の手で喰わせてもらうのか。何か屈辱。しかし背に腹は替えられない。若干抵抗し、重く口を開ける。緋色もこんな風にしてもらったのだろうか。シュール過ぎて些か吹きそうになる。

米を口に入れ、咀嚼している間に緋色の前に立つ今帰。俺と同じ様に米を持っていく。それを目で追っていると、寒気を感じたので頭を前に戻す。

視線が痛い。殺気立ってる。見たら死にそう。もう口の中に米はない。でも口は動かしている。さて、どうしたものか。知ったか振りして、振り向いてみるかな。

「………何か付いてるか？」

表向きは視線が気になったので振り向いてみました、という訳だが視界が暗くなる。

「女性はデリバリーデリケート、覗き見厳禁現金お支払い、見たら最後にお見舞いキックのクラスのみんなが見舞い来る」

つまり食事中のデリケートな女性の顔を見るのは御法度。見たら最後、死んで地獄に堕ちますよ、って警告らしい。周りくどい。何ならいつそカーテンとかで仕切ってほしい。

それにクラスね。三日休んだら流石に学校も不思議がる。電話とか自宅訪問とかしてる筈。緋色にしても親が警察とかに電話してるだろ。目撃証言もあると思う。見つかるのは時間が解決すると思う。

物思いに耽りながら食事は終了。今帰は暫くここにいらしく、

椅子に座りまた歌を歌い始めた。折角いるし、質問でもしてみようか。

「……………俺達って何か意味があつてここにいるんですよね？」
「そうそうそうだよ」

何故か、までは言わないが嫌な展開になるだろうな。いつそうなるか判らないが、そこは策を練らないとどうにもならない。

「最初にいた女の人の名前って何ですか？」

「えいえっ、まじまじ好みはまさかのマイカさん？」

「違いますよ」

「冗談だんじよう、今まさに壇上はクライマックス。それで、マイカさんね。命名本命名前は仁野じんの 参香まいか香りが参るで参香、オツケー？」

「オツケー……………です」

気さくだ。絡み易い印象だけど、何か裏を感じる。直感的なものだが、感覚で言えば誰とは連想できないがいい感じはしない。いい様に見せる為にその顔を振り撒いてる感覚。

もう一度見渡して、心中にいる人物を言葉にする。

「……………あの……………ファルはどこにいますか？」

「ん……………？ ……ああ、あのこの女の子、今今今いまんどこ、どこかへ旅立つ子羊ちゃん」

「……………どうゆう意味……………ですか？」

笑い顔が変わる。いや、今までもずっと笑っていたが違う。今のこの人の笑い顔は、口元は笑っているが目は蔑む目だ。こちらの真剣さを鼻で笑う、他人の努力とかを踏み潰す時に浮かべる笑みだ。

直感は間違いでなかった。

「夢の世界か・・・一生見る夢の世界か」

体に力が入る。今にも取っ掛かっていくぐらい。それを鼻で笑う。芋虫みたいに這い蹲うこの姿を。ゆっくり立ち上がり、這い蹲うアズマの髪を掴み持ち上げる。

「・・・・・・・・大事かい・・・ファルは」

歯を噛み締め、目は血走る。その目が気に喰わないのか、壁に体を叩きつけ、声は出さずに嘲笑う。緋色はパニクリ、どうしようか首を左右に揺らしている。

「そうか、大事か。・・・そっちのお嬢さんはどうかな？例えば・・・トウトウの目の前で犯したら、どんな顔をする」

「この・・・野郎ー！！」

全身をバネにして襲い掛かる。我慢の限界だ。溢れ出す感情を吐き出さないと、どうにかなってしまいそうだ。しかし最初の飛び掛かりだけ、攻撃できたものの簡単に押さえ付けられた。息を荒くし、こいつに一発何か喰らわせないと気が済まない程、全身が渴望している。

「ぐっ・・・」

身動きできないまま、無造作に腹を蹴られ悶絶。声を飲み込み、外には出さない。更に蹴られる。それでも声は出さない。出せば苦悶の表情まで表に出る。こいつは他人の苦しむ顔や怒りに歪む顔とかが好きだろう。こいつの快楽を満たす何て御免だね。

「……っ、はぁ……うっ……う」

食べた物が逆流しそうだ。痛みはなんて事ない訳ではないが、構ってはいられない。顔半分を床につけ、不細工に睨む。今帰の顔はこちらには向いていない。

「あぁ……あぁ……あ」

俺だと無理と判断したか、緋色に視線を向けている。どこまで、こいつは。

「……緋色、気にすんな。どうせ……殺されはしない。殺すんだったら生け捕りにしない。……だから大丈夫……さ」

説得力がないのは気にしない。とりあえず挑発して、意識をこちらに向ければベスト。何発でも蹴れ。タフだぞ、こっちは。

襟を掴み思い浮かべるなら不良に捕まった、運の悪い貧弱な少年だろうか。しかしそんな貧弱ではない。反撃するぞ。

「……フィック……」

脳裏に蘇る言葉。しかし、蘇るのは言葉だけ。先日起こった事は舞台には出ない。主役は危険を知らせる警鐘のワルツ。

「うるさいぞ、今帰。仕事ができん」

言いかけた言葉をしまい込み、その場にアズマを投げ捨てる。出てきた人物は参香だ。仲裁した訳ではないが、アズマ的には助かった。精神的に安堵したのは緋色だ。見る限りかなり張り詰めた顔だ。

「そちらの客人も刺激しないでもらいたい。事によっては選択を早める事になりかねない」

「………選択つてのは？」

「それはその時になつたら教えてやるさ。今はその時ではないんだ。………さて、人選ミスだつたらうか……今帰、仕事戻れ」
「はいはいへー」

去り際、一瞬だけ見せた今帰の顔はゾクリとするものがあつた。何はともあれ落ち着けた。それに持ち上げられたお陰で、窓の外がちらつとだが見えた。車の往来が激しい訳なのは納得。ここは駅の近くらしい。流石にどこ駅かは知らないが、人ひとり運ぶのは結構な労力だ。個人の車ならまだしも、公共の乗用車だと目立つ。気を失つた場所からはそんなに離れてはいないだろう。

「………うわっ!?!?………ひい………ろ?」

思索していて、心ここに非ずだつたアズマに緋色がタツクル。涙を堪える様な声を出しながら。

「馬鹿っ!………何………やってんのよ」

顔は見えない。恐らく泣いてはいないだろうが、これ以上何言つても、何しても、何も言わなくても、何もしなくても泣くだろうな。結果的に泣くならせめて一言。

「スマン………」

謝っておこう。ベストな選択ではないかもしれないけど、泣かせたし、心配かけたし。何よりこうゆう時は手が動かせればよかつた。

「・・・・・・・・まっ・・・・・・・・たく・・・・・・・・馬鹿」
「・・・・・・・・・・・・・・・・スマン」

声を殺して、泣いてるかは判らない。判らない振り。指摘しないし、茶化しもしない。他人の、アズマの為の涙。黙って受け止めないでどうする。

最悪を迎えるまであと・・・・・・・・。足音を立てながら近づく。それまでは押し寄せる焦燥と抱く一縷の望みを。

24th「あと・・・」(後書き)

テストが終わって、モンハンをプレイする毎日です。やっと解放されたよ、晴れ晴れだ。と感じていても、どこかすつきりしません。何か、大事な事でも、自分とは接点のない事でも終わるといふ事は時々切なく感じます。

25th「詠」（前書き）

雲は変わる。 見ている人に合わせて、姿も、形も。 思った通りに
変化する。 私は、その雲の様に与える痛みも威力も、相手に合わせ
る。

静まり返る部屋。緋色の押し殺していた声は、聴こえない。が、
どうにも二人とも動けずそのままにいる。窓の外は既に暗く、夜を
知らせる。それでも車の往来は途切れるところを知らない。緋色も
未だ胸の上で俯いている。退こうとする気配もない。いい加減疲れ、
軽い痺れが両腕を包んでいる。

「……………緋色」

「……………何」

どうやら寝てはいなかった。起きてはいたけど、話を切り出すに
は困難。とりあえず呼んではみたものの、話題がない。その為、話
が繋がらない。

「……………さっきの事……………について？」

沈黙をしているアズマに、緋色が話を添える。しかし、さっきの
事、と言われても馬鹿やったしか話の覚えがない。

「……………フィックスについて」

「……………あ……………うん、それでいいや」

他に話題があるの、みたいな雰囲気だったが、それ以上踏み込み

はしなかった。実際アズマにはどこかこの話題を回避したい部分がある。理由はない。ただ何となく。本能、と言ってもいい。

「まず、フィックスについて何か解る？」

「ヤバいもの、俺が知らないもの、おおよそ切り札っぽいもの」
「そんなものでいいわ」

俯いていた顔を上げ、アズマの顔を見る。泣いた跡はない。結局泣いてはいなかったみたいだが、押さえ込む涙はどんな涙か。皆目見当もつかないのは、どこか切ない。

「で、フィックスってというのは許しを貰う事に近いわね」

「……誰から」

「そうね……抑止力……かしら」

「人じゃないのな」

「……気にしないで」

抑止力……ね。邪魔モノでもいい。dream outを行使する度体験するモノ。頭痛が起きるし、筋肉は張り裂けそうになるか、押し潰されそうになるかだ。ともかくいいヤツじゃない。

世界は異分子を嫌う。だからdream outで想造された産物を消しにかかる。規模が大きければ大きい程尚更。

「抑止力を関所だとするわ。無断で通ろうとすると、ペナルティが掛かり先へ行く程重くなる」

関税みたいなモノだろうか。ちよつと違うかな。通る（行使）のはあくまで自分だから、お金払えばいいならした方がマシかも。

「その規制を和らげるにはどうするか。無断じゃなくて許可を貰え

ばいい。フィックスは偽りの許可証だと思っただいいわ」
「……………ニセモノって…………どうゆうこと？」

内心に引っ掛かりがある。あまり踏み込みたくないのはこの所為。知っている筈なのに何故か聞いている。

知っている？何で知らないのに知ってるって思うんだ？自分自身に何か隠している気がして、苛立ってくる。

「……………」

「……………どうかした？」

「いや……………何でもない……………話……………続けてくれ」

突発的に起きた心情の変化。荒波は一瞬で収まったが、余韻が残留。気分は悪くなったが、話への好奇心が勝る。

「……………続けるけど、モノに例えなかったら、言葉巧みな嘘ね。引っ掛かり易いの、抑止力って」

「……………邪魔モノで尻軽じゃ話しにならないな」

若干ユーモアが混じるが、こんな場所で、と改めて状況を再確認すると笑えるものも笑えない。

「話が逸れたわね。とりあえずdream outをして、世界はこれを抑止する。詰まるところフィックスは、世界にこれから〇〇しますって宣言する……………のかしら？」

「……………質問されても困る」

「説明するの難しいのよね」

困った顔。今までの説明がちゃんと伝わったか不安げな顔。どうやらいろいろややこしいみたいだ。

「……まあ、だいたい解ったよ」「……. ホントに？自信ないわ」

解った、と言ってもダメな方に結び付けるから、どう言えばいいか判らない。どうすればいいかな。

「……. んじゃあ、緋色のを実際に聴かせてくれよ」

「そ・れ・は・い・や」

「……. . . 何故？」

「……. . . まじまじ聴かれるのは……. . . その恥ずかしいから」

「……. は？」

首を傾げる。緋色はまた俯き、顔を沈める。

「……. フィックスって『詠^{うた}』なの」

まだ判らない。もう少し補足する様に促す。

「削るところは削って、省略はできるだけ。効率よく、短く簡潔にまとめて造るのよ。その在り方が詠唱みたいなの。だから『詠』」

「……. 中二っぽいな」

「だから恥ずかしいのよ。身内なら尚更でしょ」

言われてみればそうだが、だからあの時の違和感はあるか。フィックスとか言っても『詠』に聴こえたのか。

あの時って何だっけ？

また記憶の荒波。波の高さが30mオーバーに巻き込まれ、それ

は一回きりで嘘みたいに収まる。大きく身震いし、頭を振るう。記憶として自覚する寸前で止まるよくないモノ。無意識に押し込めているが、確実に得にはならない。

「……………ふう……………結局本モノを聴かないと解んないな」

「……………アズマだつて詠をやつてるわよ」

……………今、何と仰いました？俺はそんな創作活動はしてませんよ。強いて言えば料理だけど、知らない間に鼻歌してるのか。言葉ないから違くな。

「……………何それ？何か詠でも歌つてるの、俺？」

「dream out、よ」

「……………あれも詠なのか」

目から鱗だな。あれも詠だ、なんて。

「何も言わずに想像なんて、出来ないでしょ？dream out つて口にして、許可を貰つてるの」

思い返せば確かにない。考えもしなかった。そもそもそれが普通だと思つてたし、最初に言うのは集中力を高める儀式かなとか。

「突き詰めると本モノなんてないわ。造れないわね、100%。dream outは別だけど、フィックスはどんなに矛盾を無くしても、小さなモノなら負担は軽くでしょうけど、それでも想像物。異分子に変わりはないわ。抑止力がかかる」

「……………」

難しいな。まず文体を思考するにしても、手本がない。闇程深く

て先が見えない訳ではない。ただ濃霧で見えない。手探りでどこまでやれるだろうか。文系は苦手だ。

「他に補足はある？」

「……ない。ただ、さっきの、今帰のあれは苛立ちからかな？」

話を始める前、この話を始める事になった出来事。さっきと言うのは少し範囲外。時間で言った方が適當。

今帰の歪と言える性格。俺は少しの間対面しただけだが、緋色も感じたらしい。目に光がある奴は徹底的に髑るタイプ。

緋色は苦い顔をして、何かを舐め取られる様な悪寒を思い出している。今にして思えば見られていたのは緋色だ。辱められた気がして、気分は最悪。恥ずかしい気持ちもある。

「苛立ちかしら。ただ何となく行使しようとしてたわ。dream

outもしてないから、脅しだと思うわ」

「フィックスってdream outしながらじゃないと無理なのか？」

「そうよ。フィックスはdream outしながらじゃないと出来ないわ。フィックスがソフトで、dream outが電源ボタン。私達自身が本体ってところかしら」

ソフトって事は、種類毎に能力が変わると考えていいのか。实例を知らないが、今帰は今帰でそうゆう能力。緋色は緋色で違うのかそれを言うとは返答は、はい。性格、行動パターン、言動、願望、それと文体を形成する才能。その他諸々を含め、十人十色に変化する。何にしてもあれは今帰の苛立ちから。目にある光を消そうとしたが、言葉の暴力でも身体的暴力でも、消えない光が気に喰わなかつ

たのдарう。

話も区切りを迎え、また静寂が部屋を包む。改めて状況を確認すると、両腕はもう痺れて、もはや感覚がない感じ。それに体勢的にもなんかヤバい……かも知れない。

「緋色……ちょっと退いてくれない？」

「……意地悪」

「？……何？……何か言ったか？それより腕が痛い」

「……寒いからもう少しこうさせてくれないかしら？」

だんだんと寒さが押し寄せてくるこの時季。社会の現実には比べればまだ、寒いとは言えない。現実が極寒なら、今の時季はただの寒いだ。しかし、そろそろ暖房機器が恋しい。まだ堪えられるぐらいだが、寒がりの人には寒く感じるだろう。

「……」

「駄目かしら？」

どうせ身動きするにも、ロープでぐるぐる巻きで動きづらい。億劫だし。仕方なしにそのままにいる事に。

そう言えば、こうして長く話したのは半月振り。僅か半月でも毎日会話していたのだから、久しく思うのは当然。そんな事言う機会もないが、親友なんてそんなもんだ。気まずいものも話せば解決。いざこざなんてあってないようなものだ。

「飯だ」

ドアが開き、光が闇を分断する。そうして澱みなく、電源を点け、

テーブルの上に物を置く。瞳孔が急な明暗の差についていけず、視界にモザイクがかかる。顔の輪郭はぼやけて見えない。

だが、今帰ではなさそうだ。参香って奴がこのトップなら、その命令を無視はしないだろう。それはともかく、果たして誰なのか。声には・・・像がある。聴いた事はあるのだが、そこまでしか浮かばない。

部屋の明度に合わさっていく瞳孔。焦点は徐々に、上にある顔へ。心音は高鳴り始め、その音を聴く緋色は不安が胸中で渦巻く。

「ラ・・・・・・・・テ・・・・ラ・・・・？」

一文字一文字、慎重に、自信なさ気に口にする。記憶の糸は複雑に絡まっていて、漸く解けたのがこの名前。初対面の時みたいなスーツ姿ではなく、シャツにパーカーを羽織ったラフな格好。しかし、顔に貼られた湿布が痛々しい。その痛々しさの原因は自分。罪の証か、記憶の隅から何かを引っ張り出す。何故か不快だ。

支度を終えた手が止まり、こちらを俯き見る。折角用意してもらったが食欲はない。確かに空腹だが、腹に居座る不快感で満腹。細かく言うと、喉が飯を通してくれそうにない。

「・・・・・・・・無様だな、ファインダー」

「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・何か言ったらどうだ」

何か言えるなら言いたいさ。ファルの事とか、今後どうなるのか、それと・・・・・・・・。

「・・・・・・・・アズマ、誰？」

「……………うつ……………あ……………うつ」

話せないものだから口は動いているだけ。そこから声は出ない。声が出るなら、いや、出せても喋らない。それはヤバいから。だからこれは一種の防衛本能。

思い出してしまう

……………何を？

この手で何をしたかを

……………どんな風に？

槍でこう、上手に貫いた

……………誰を？

さあ、誰だったかな

もし両腕が動けば何をどの様にどうしたかを、具体的に体現してしまう。そこまで鮮明に体は記憶していて、頭は何もかもを記憶してはいない。

「……………アズマ、大丈夫……………？」

明らかにかしいのは見てとれる。それをいいことにラテラの言動は拍車がかかる。

「苦しんでるな。まさか後悔してるのか？その手で何をしたかを」

当たり。だからそれ以上言うな。言ったら全てを、一歩手前まで踏み止まっている奔流が、猛り狂う。

「その手で……………」

……………言うな……………

「……マートを……」

「……それ以上何も……」

「……殺した」

「……あ」

堤防は決壊。比較できない程、巨大な波は何度も何度も、頭の中をのた打ちまわり掻き乱す。

フラッシュバックする景色。高速で脳裏に映しだされ、尚且つ低速で全てを見せる。最初から最後まで、カットなしで、余すところなく。

呼吸が早い。動悸が色濃く表に出て、焦点は合わない。風邪をひいた様に頭痛と吐き気。寒く暗い混沌の淵。押し潰される体。罪悪感が連ねる激痛。

「……囚われたか……」

何て言った。音まで霞んで聞こえない。不敵に笑う口元を最後に、浅く意識が残ったまま闇を迎えた。

25th「詠」(後書き)

冬休みって気がしません。何故に入ってまで、学校に行かなきゃならんのか。愚痴に付き合ってもらいありがとうございます。

26th「エスケープ」(前書き)

何だつて、理由などなしに、恍惚としたモノは心を奪う。そして心を奪われた者はそれを目指したがる。無理でも、不可能でも、目指したがる。一瞬できる、と思えばおしまい。風船の様に膨らみ、最後に割れる。派手に・・・

26th「エスケープ」

ああ……鼻に障る血の匂い。傍らで匂いの元が二つ倒れている。なのに、月の光は恍惚とする程綺麗に、深紅の水溜まりに反射して目を奪う。自分はそれに映る月を眺め笑う。

場違いな笑み。それを他人が見たらどう思うか。どこか壊れている、としか思わないだろう。

「……欠落しているのか？」

実際不気味がる人がいた。この惨状をつくった様な人物は言う。

でも何をそんなに悲しそうなのか。望んでこうした訳じゃないのか。反射する月の光に一瞬、姿が顕わになる。闇に混じる黒い服。小脇に抱えられた少女。それらが誰なのかは、少しも考えてなかった。

また夢か……。でも前よりは鮮明に細部まで見えた。顔は虚じやなかったし、男は泣きながら少女を抱えていた。夢を見た後の最悪さは変わらないが、とりあえずいつまでも暗いと最悪さが続く。色のある現実が恋しい。

目に映るのは白い屋根。いや、照明がただ自分を照らしているだけだ。それが強すぎて白く見えるに過ぎない。

ならここはどこか。眼前の照明は凡そ、一般家庭ではお目にかかれない程巨大。あるとすれば、病院の手術室か、物好きな大富豪の家か。ふと、感覚器官を刺激する物に気づく。鼻を突く匂いは酒っぽい。となると病院か、もしくはそれ関連で間違いないだろう。

中心にいるのは自分。手首と足首には固定する為の、革バンド。恐らく患者は自分。今からどんな手術を受けるのやら。指と首だけ動かせるが、最悪な状況の確認だけしてみる。

騒がしく動く人。白衣に白い手袋に、ともかくひたすら白い。その中の一人がこちらに振り向き、何か嬉しそうな目になる。

「参りましたよ参香さん！、お目覚め覚め覚め起きました、トウトウ」

やっぱり最悪。二度と会いたくはなかった。マスクとかで顔を隠しているが口調で誰だか解る。顔が見えないのは若干、微妙に嬉しいが、会いたくないものは会いたくない。結果寧ろマイナス。

「お目覚めか、客人。迷惑をかけてくれるな」

ワインレッドのジャケットを着た、参る人。自分が拘束されている手術台の上に腰掛け、威厳のある貫く視線を向ける。

話は尤もで言い返せない。迷惑はファルを匿う事から始まり、人殺しの過程を経て今に至る。もう認めないもクソもない。自分は人殺しをして、その罪を背負っている。本当ならその罪から逃れたい気持ちがある。認めたくないのか、目を背けているだけか。弱い、

臆病な自分の逃げ。

「・・・・・・・・・・さて、客人・・・・・・・・悪い話と最悪な話、どっちから聞くか・・・・・・・・決める」

葛藤もない。悪い話と最悪。選択としてはどちらも限りなく悪い。

「・・・・・・・・・・考える時間・・・・・・・・」

反響する高音。漂う火薬の匂い。瞬きできない。動く暇も、呼吸も止まり、頬を伝う一筋の紅だけが動く。左手にある凶器。抜き打ち0.3秒。それだけあれば相手は止まる。それだけで、相手は銃で撃たれた事も知らずに地面に抱擁される。

「・・・・・・・・返答は」

「・・・・・・・・・・悪い話からで」

そう答えると、銃をジャケットの下にしまい込む。成る程ね。懐の不自然な膨らみは、その手の人に解る膨らみだったらしい。ここに来てから、新しい事を知ってばかりだ。

「悪い話は・・・・・・・・まず客人から否応を聞かないといけないな。・・・・・・・・客人・・・・・・・・この組織に入る気はあるか？」

一時空白。元からこの組織にあまりいい印象はない。怒りから始まって、今は恨んでばかり。邪魔すんなって感じ。だから当然・・

「ない」

「なら話は悪いままだな。・・・・・・・・おい、準備だ」

一言で周りの人達は、動き出し何かをする為に取り掛かる。何かっていうのは、大体想像できる。手術だろうな。どんな手術かは知らないが。

「希望は悪い話からだったな。悪い話は客人に手術を施す」

やっぱりね。思った通りだ。

「術式はロボットミー手術。客人、分かるか」

日常生活では聞かない。一季の偏った知識なら知ってそうだが、そうゆう話もなかった為、返答はいいえ。

「ナチスドイツ時代や、アフリカ人の人身売買時代に行われてた手術さ」

頭は至って冷静。話の先を予想する限りヤバそうなのはたしか。だが、危機を訴えている本能に対して、逃げる手段を模索しない頭は諦めか、ここに用があるのか。誰かの助けを求めている様にも思える。

「この手術は電気ショックを体全身にかけ、アイスピックを眼に突き刺す。そうして神経を引っ張り出すんだ。その後、頭を開き、前頭葉を切除する。そうすると自我が消失する。うちは最低限残すかな」

感想はなし。ともかく、やっと頭が逃げよう、と危機を感じ始めたからさっさと逃げたい。だが逃げる訳にはいかない。やる事がある。まず、緋色とファルの居場所を聞かないと。

「・・・手術を受ける前に質問」

「許す」

「ここはどこ？」

「客人がいたビルと同じだよ。信じ難いだろうが」

確かに信じられないな。ビルの全体像を見てないからどうとも言えないけど、許容量を大幅に越えてる風に思える。

「・・・緋色は・・・どこにいる」

「緋色は客人が最初にいた部屋で心配しているさ」

「・・・無事なのか？」

「・・・まあ・・・客人の相手をした後に同じ手術をするかな」

「・・・っ・・・」

演じるのは怒りそうな自分。策を模索させているのを感じつかれてはいけない。同じ建物内にいるならまだ探せる。どの道を行けばいいか知らないが、黙ってたら駄目だ。

「・・・ファルは？」

「お気に入りだな、客人」

「何でも答えてくれんじやないのか」

「尖るなよ。・・・ファルは今寝てる。再度手術を行い、今度は自我も残さず、前頭葉を切り取る」

「・・・どこにいる」

「その待合室さ」

指差すのはすぐそこにある扉。場所は確認できた。あとは、どうやって出し抜くかだ。・・・行使するしかないかな、これは。

「社員は絶賛人手不足でな。さつき神経を引つ張り出すつて言ったが、引つ張り出すのはdream outを行使する為の神経さ。最低限自我を残していると不安でな、いつ反乱を起こすか判らん。だから神経を引き抜き行使させない。そしてその神経を他人に埋め込む。それでドリーマーの完成だ」

話を聞きながら行動を決定。また筋肉痛に悩ませられるだろうが、四の五の言ってはられない。

「・・・最悪の話の方はな・・・」

頭に輪郭と能力、細部を浮かばせる。

「何をやるうとしているか知らないが・・・」

葛藤する心境を突いて押す。口にする言葉は・・・

「dream・・・」

「行使はさせないよ」

一言を遮る左手。ジャケットの内から取り出したのは何かのスイツチ。

「うっ・・・」

押された瞬間、耳を貫く高音。鼓膜を破壊しかねないの大音量。激流。それは形作っていたイメージを殲滅していく。生き残りはない。

「・・・超音波。どうだイメージが瓦解しただろ。想造物は想像の時点だと破壊しやすい」

イメージが保てない。神経に直接入り込む音波。作り上げようとすれば壊される。想像しても破壊。幻想は頭の中だけに留まり、表に出ることはない。

「・・・・・・・・つ・・・・・・・・」

「無駄だよ。猛獣を保定する用のベルトだ。生身じゃまず無理、諦める」

腕力での力付くは無理。力を入れるが音波の所為で集中力は更に激減。視界も揺らいできた。これはホントに、無理かも知れない。

「オペチーム、始めるぞ。あとは頼んだ」

頭に突き刺す音は流れたまま、参香は手術台から腰を上げる。一歩遠ざかる毎に、一歩近づく足音。手術を知らせる最悪の音。

「ぐっ・・・・・・・・がぁ・・・」

近づく程、恐怖が身を焦がし血管が腕に浮き立つ。恐怖は手術前のちやちな緊張からではない。助けなければいけない人が、頭に燻っているから。

緋色の困惑した顔。寝たまま江渚。それに重なるファル。全部、似合わない。見たくもない。だからまだ諦めきれない自分がいる。

奥歯を噛み締め、腕には力を、頭には策を、目には光がまだ灯っている。その目に映るものは、更に自分を焦らせる。息が切れ、それを見て笑う今帰。準備を放棄し、近づいてわざと視線を合わせる。

「無駄な努力だよ、トウトウ。俺はそうゆう奴見ると・・・笑えるねえ」

視線が合わさるとよく分かる。口元は笑っているが、目は笑っていない。自我が最低限残しているとは言ったが、結局は笑えない。自我は感情の抑制にも繋がる。些細な事で、怒ったり、泣いたり、感情をぶつける。テキストに笑おうとすると作り笑いしかできない。だから、口元しか笑みを浮かべていない。

ファルはこんな笑い方はしていない。大袈裟ではない、微笑むといった方が正しい。それでも笑うのは本心の顔。薄っぺらい、こんな不細工で不格好な笑いではない。

思い出すファルの顔。吹っ切れた。何だってやってみないと解らない。無理だと思っただらできない。限界を、底を、自分で決める残酷な能力なら、限界以上でも、底上げでも何でもすればいい。

音を掻き消して、目を閉じ、深呼吸を一つ。五感をシャットアウト。邪魔な要素、ないし削れる意識を深く沈め、イメージを構成するのみに集中を注ぐ。

dream outは基本が大事。一つ一つを忠実に、ドミノを創る様に、慎重に、迅速に、頭の中に浮かべる。一つのピースが崩れれば、道連れに全て崩壊。

イメージするのは自分の肉体。思い浮かべる全体像。筋肉から腱、骨までクリアに映し出す。

メイクするのは肉体の上限。口元は風船を持ち上げる程度から、ハイは猛獣をも抑えるベルトを轆き千切るまで。

ノウンは肉体の隅々まで。骨密度から、筋肉繊維、今の肉体の熟

せる範囲を全部。

キープは言葉を口にしてから。今までのを、崩さず維持できるか。精神と肉体との勝負。

全てを思い浮かべても繋がらない線。線を遮るそれを消すが、中々消えない。どれだけ意識がそれだけに向いていても、神経に突き刺さる音。無視する事ができない。

もう少し

誰かの為の生への執着

・・・繋がってくれ

胸中で助けたい人がいる

・・・消えやがれ

緋色もファルも江湮も全て

「アアアアアアアアッ!!」

音が・・・

「dream・・・」

・・・消えた

「out!!!」

静かな音を立てて千切れる枷。勢いあり過ぎて、床に転がってしまったが些細な事だ。沈めていた五感を急浮上させる。

耳にはざわつく周りの雑踏と声。目には暗闇。どうやら消えたのは音だけじゃないらしい。光源が光を発しなくなり、封鎖的な空間は尚更暗い。これは好機としか言えない。幸い目は瞑っていた為、暗闇に慣れている。

参香が指差していた扉。キープが難しい、良質なdream out。これだけやればフィードバックも計り知れない。しかし後を考える暇はない。秒速50mで床を蹴り、扉の内へと転がってゆく。

「……………うわ」

言葉通り待合室、というよりは霊安室みたいだ。柵みたいな所に無作法に並んでいる人達。そう多くはないが、全部手術待ちだとしてたらぞつとしない。

「……………いた」

横たわる白い髪の少女。手前から順に番号が振られていて、それは一から三十まで。これが手術する順番ならファルは二番目と振られている。因みに一番の柵には誰もいない。話の下りでいくと緋色。急ぎ足でファルを抱え、すぐさま次は緋色を捜しに行く。

「……………いたぞ！」

突如差し込む光。数本の光の束がアズマを捉える。

「マズ……………！」

焦る気持ちで揺らぐ像。周りを見渡し、次の扉まで走る。派手に蹴破り、暗い廊下。壁際だというのに窓も何もなく、壁ばかり。この場所は地下に造られているのだろうか。

ともかく自分達がいた部屋は窓があった。ここが地下ならまず上に、階段を登らないと。

交差する思考。行く道、行く道、どこを通っても不安。本当に合っているかは知らない。それを考えると、想像がブレ上手く行使できない。だから不安にならない方がいい。

「……階段……」

上に行くのと下に行くの。更に地下があるみたいだが、今目指すのは上。わざわざ下に行く事はない。

階段を登り、一つ上の階へ。今だ暗闇なこの建物。改めて考えると、都合よくブレイカーが落ちる訳もなく、誰かが落としたと考えるのが普通。一季だろうか。それしか考えられないが。

「……ん……?」

ファルを抱き上げたまま、頭の危険信号が何かを知らせる。ドリマーかただの捜索隊か。内心、ざわりと心境が蠢く。

……駄目だ、闘えない

逃げの判断を下し、右折。しようとしたが、何かが頬を掠める。暗闇に混じる虚なモノ。本能の欠片。嫌悪感が全身を包み、氷が背中を滑走。

「……ワンダー……」

暗闇に紛れているが、間違いはしない。しかし、建物の中にいるのは思いもしなかった。誘い込んだみたいだが、いつの間にかは不

明。ともかく、コイツらなら遠慮なしに相手ができる。

ファルを背中に抱え直し、左手で支える。右手しか使えない分、力も加えにくい。なら、いつもより短めで振り易い方がいい。

そうして想像される、一尺程しかない槍。弾くぐらいしかできそうにないが、それで十分。優先順位は倒す事じゃない。準備ができたら即突っ込む。躊躇はしてられない。

「……………」

騒々しさにUターンしてきた参香。ブレーカーが落ちた時点で、ある程度、どんな状況であるかは予想がついている。

客人が逃走した事はこの慌ただしさで、逃げたな、とは思った。緋色やファルの居場所を教えたのは少し後悔。親切過ぎた。待合室が開かれているのを見ると、もうファルはいないみたいだ。

「……………今帰、客人はどこにいるか分かるか？」

「いえいえ、どうも何が何でも分かりません。暗闇宵闇お悩み中、さっぱりです」

「……………それじゃ、班を三つぐらい搜索に向かわせる。それに加われ。ワンダーと交戦してるだろうし、殺される前になるべく早く捜せよ」

了解し、光源を片手に捜しに行く。

「・・・・・・・・・・さて、客人の目当てのものを押さえておくか」

非常用の明度の強い光源を手にながら考える。緋色を捕獲した人物の話だと、もう一人いたらしい。圧倒的だが、返り討ちせず逃げた、との事。その後、こっそり付けてきたのか。そうゆう話はなく、尾行はなかった。しかし、その仲間が侵入し、ブレーカーを落とした可能性もなくてはならない。

「・・・・・・・・それとも・・・・・・・・」

前者の可能性より更に低い。ありえないと断定していい。だが、やはり、ありえないだろう。が、頭の隅にはおいておく。予想通りな時に驚かない様に。

「・・・・・・・・・・ふうー」

どうも手持ち無沙汰だと思ったら、煙草を吸っていない。未成年には悪いと、最近自重していたからか、頭の回転が若干悪い。

右ポケからハイライトを取り出し、火を着ける。吸って、吐かれる煙で揺らめく視界。僅かな鼻先の光源。煙草を吸う脱力感。それから全部を無下にしながら部屋を目指す。無下にしないのは、頭の隅にある、ある程度当たりを決めた人物のみ。これがハズレなら、驚いた顔が見れるだろう。

26th「エスケープ」（後書き）

ナハハハハハ・・・強がっても「遅め」の今年初投稿です。明けましておめでとうございます、は遅いですね。

作中のロボットミー手術ですが、副作用があります。てんかん発作、人格変化、無気力、抑制の欠如、衝動性などの重大かつ不可逆的な副作用などなど。

いろいろと手術方があるみたいで、電気ショックを体にかけて、眼にアイスピック刺し神経を引っ張り出したり、他には眼窩から脳へ針をとおし、ロボットミー手術を施す様です。そうすれば、自我を失って言うことをなんでも聞く。

ロボットミーは、人の知性を司る脳の前頭葉の部分を切り離す脳外科手術でした（今は行われていません）。激しい気性の人も、この手術を受けると穏やかな性格に変わりましたが、それは前頭葉の手術によって「知性（人間性）」が失われたからに過ない様です。

初めにしては少し暗いでしたね。物語も今暗闇だし、遅れていますし。マイペース、マイペース、ハハハハハ？

27th「END」(前書き)

親しみは時に、嫌悪に変わり殺意に変わる。親しみ易いのは、罪
ではなく毒に近いかもしれない。

少女は部屋で一人。一人、孤独に待ち、孤独に少年の身を案じる。劇的な別れ。あんな明らかに苦しんでいる姿を見たら、心配するな、言われても無理な話だ。だから、出された夕食にも手をつけていない。そんな無神経ではないし、一人の夕食は食欲が消え失せる。

「……………うう……………」

落ち着けず、動きに転じたいが、しかし、それには胸中の整理がいる。平静ではいられなく、集中力は皆無。行使はできない。

あれから五時間。当然眠れない。原因は、大半があれだが、その他の一つは、せめてもの考慮か、弱く淡い光が部屋を照らしている事。お節介極まりない。いっそ真っ暗ならもう少し気持ちの整理ができた。眠気も暗闇に混じり、誘えただろう。

「……………」

煩わしく頭上を照らす光。それを意味もなく眺めている。だからか。その明かりが不意に、消えても驚きはしなかった。

「……………ん？」

騒々しい声に、やっと事態が飲み込める。「何も見えねえ!」「

ライトどこやった？」「誰か私の脚触った！」など、どうやら、急に暗闇になって周りが見えずパニックになっているらしい。声の発生源は多い。残業している人と考えていいか、泊まり込みの人と考えるといいか、家なんて物はないと考えていいか。

暗闇と慌ただしい声を取られ、背後の物音が耳を擦り抜けた。口を塞ぐ手。これで抵抗する手段は消失。誘拐犯さながらに、手早く担がれる。抵抗力はゼロで、部屋には壁越しに聴こえる音しかなかった。その後、目当てのものを押さえようとした女性が舌打ちをしたが、少女は知らない。

ヤミを弾き、光から逃げる。意識のない少女は、少年の背中に護られ、彼が護る度に体力は大幅に削れる。ゴールの見えない長距離走を短距離走並の速さで走る。それは無謀としか言えない。

もう少し冷静なら、いや、冷静だからこそ、この手段を選択。前はワンダー。後ろはこの社員。光源があれば、いくらかマシなのだが、その光源を持っている人物は後ろの人達。奪うにも待ち伏せか、ウターンしての奇襲か。

まず待ち伏せは、ワンダーを捌きながらは待てない。奇襲を仕掛けるにも相手の人数と力量も不明。勝率なんて話してんで考える方がおかしい。何を根拠にその考えに至ったか、短絡思考を抹消したくなる。

そしてなにより時間も無い。アズマが逃走したのは明白。緋色を人質にして引つ張り出すかも知れない。それに、長期戦を見越して先に緋色が手術されるかも知れない。

いくつもの「かも知れない」は、不安に変わり、イメージを破壊する要素になる。このままでいいのか、緋色は助けられるのか、右でいいのか、真っ直ぐでいいのか。不安は不安を引き寄せ、焦燥はワンダーを引き寄せる。

一抹どころか、十抹程もある不安。それでも上に向かって走ることがない。

「ゼエハツ・・・フウ・・・ハツ・・・階段・・・」

上か下か別れる階段。地上を目指すしかないから、迷わず上。そうして階段を上る途中、脇腹が締め付けられる。足は一步踏み出すのに抵抗をみせ始め、視界はぼやける。

「・・・・・・・・ふっ・・・」

短い槍でワンダーを弾く。鈍くなる反応。力が抜ける下半身。連続して飛び込んでくるヤツにタイミングがズレる。

「・・・・・・・・ぐっ、あっ・・・」

虚な実体が、体を落とす。八割方上った階段を一気にゼロへ。背中をクツションにすれば、プラマイゼロ。だったが、背中を気遣ったのが本能的ミス。ファルを庇うのに仰向けのまま地面を蹴った為、更に階下へ。

「・・・・・・・・いつ・・・てえ」

素早く現状を確認。鼻を滑る感触。流血は鼻と口から。両膝は打ち付けたらどうか、痺れが定着。他は擦り傷ばかり。痛みは少ない。立てるなら早く立とう。痛覚が麻痺してるなら丁度いい。後先は

考えてられない。全部終わったらすぐ治る。だから今は無茶して、ツケを払ってもいい。無事生きて帰れるなら。

片足を庇いながら壁に寄り掛かる。片足を庇っても、笑っているのは両膝。一步毎に崩れそうになる。

「……くそ」

立ち止まる余裕はない、と叱咤してしかし体は動いてくれない。空気を読まない虚無ドモ。耳に障る息遣いは嫌になる。しつこい事限りない。負の感情はいつもだが、殺意さえ芽生える。

突破しようにも、槍はさつき階段から落ちた時手から離れた。一度イメージを消失させ、再構築するには時間がない。一秒も待ってはくれない。

挟み打ちで、後ろは壁。鼠一匹抜け出せない、ケモノの軍勢。模索した時間は0.2秒。何も考えつかない。舞うは真紅の飛沫。大きな、大きな水溜まりができる。

通路を照らすいくつもの光。闇の中に混じるケモノを、道標にして逃げた者を追う。右に曲がり、真っ直ぐ進み、階段を下に下りる。

「……おー……おっ……」

光に反射する朱。何かあった事を告げている。不吉の前触れ。血の量はさしてないが、限界が見える。通路を点々と標付け、光はそれを追う。ワンダーの溜まり。それらは照らされた瞬間、場所を明け渡し、紅の溜まりを曝け出す。

「……あーあ……ただいま角煮を確認、マイペースな俺らは参香さんに殺されお怒られそ」

無論揶揄である。血で煮詰められた角煮はなく、当然の様に食後で肉片らしい肉片はない。殺されはされないが、怒号が飛ぶのは確実。ただ……

「……」

「……どうかしましたか？」

「メルシーな晩飯が、お魚魚の骨が踵にかかる喉引つ掛かる」

理解できない同僚を余所に、踵かかとを返し、方針を話し合う為別れた二つの班を呼ぶ。その間、テキトーに一人参香への連絡を任せる。暗に、細やかな生贄である。

「……さあてえと……」

血溜まりは、狭い通路に臭いを発し充満させていく。貪欲なワンダーは光の外を囲んでいる。おこぼれでも欲しいのだろうか。闇の中に見える数は多数。もし猛獣なら三秒も持たずに骨も残さず喰わ

れてしまう。血も綺麗に舐め取るから便利といえば便利だ。掃除も
らくらく。

光源は音を立て、別隊が来るまでは音という音はそれしかない。
他は通気孔がたまに音を立てるぐらい。立地が古い所為もあり、猫
やら鼠やらがよくいる。音源がそれらしかないと喧しい。静寂さが
逆にうるさい。

「……参香さんもまさかも来ましたか」

「……何だその顔」

どうやら生贄はお気に召さなかったらしい。不機嫌ではないにし
る、別件で不機嫌みたいだ。見た目、若干の後悔と何かが関与して
いるのではないかという懸念。

「どうやらそつちも……間に合わなかったみたいだな」

「こつちそつちそちらも？」

「……ふう……緋色も消えてた」

吐き出した煙を見つめる。何か考え事をしている時は煙草を口に
銜える。基本吸いはしないのだが、こういう時だけヘビースモーカ
ーに化ける。苛つきを抑える所為もあるが、吸い過ぎにはかわりな
い。

「まず……捜しに行く為に、部屋に戻るか」

充滿していく様々な感情。狭い通路にはそれ程多く溜まってはく
れない。罅割れれば……どうなるだろうか。積もり積もっていく
煩わしさ。掃除はお腹を空かせたモノに、人捜しは人がしよう。

「・・・電力はまだ復活しないのか？」

「あと30分程だそうです」

「・・・それまでは手探りか」

部屋に戻るなり、光を頼りに落とし物を探す。具体的には髪の毛でも、服の繊維でもいい。しかし、部屋に入れる人数は限られている。あまり多いと効率が悪い。少人数だから大分時間がかかりそうだ。

「見付かったか？」

「・・・えーと・・・はい・・・これはどうですかね？」

差し出される髪の毛。それをサーチが使える奴にまわす。紡がれる言葉。顕れるそれに、髪の毛を乗せる。そうして、掠れそうな小さな光が指し示すのは・・・

「・・・私・・・？」

結果に口を抑える今帰。聴こえる笑いに睨む参香。事実だから、いや、そうだからこそ苦笑せざる得ない雰囲気だ。だからここは八つ当たりだとしても、落とした自分ではなく、見つけた奴に鬱憤を晴らす。

「・・・緋色の髪の毛の色は軽く蒼みがかっている。そして私の髪の色は何に見える？記憶が正しければ黒だが」

「参香さん、リムジン無理です、その話。まいまいま真っ暗です。細かな選別区別はできません」

子供っぽい八つ当たりを窘められ、僅かに呻く。どうやら椅子に座って傍観する立場にはいられなくなった模様。仕方無しに腰を上

げ、見つけた奴と入れ替わり探す。更に積もる苛立ち。僅かに和み、晴れる周りの人。ここのブレンなのだが、その人物が自ら働いている。親しみ易いを通り過ぎて不安になる。

「……おっ……やっとか」

そうして電力が無事復旧した為、30分程経過したと解る。文明の力は気分をも変えてくれる。一番喜んでいられる様に見えるのは当然参香だ。しかし、おかげで部屋の中は煙い。

「……しっかし……ないな」

部屋は粗方探索した。髪の毛一本（目的の人物ではない物）しかない。これはもうないと判断していいだろう。

「なかなかなかなかですね。ジャマイカ参香さん、何かにな嬢さんの没収シユート、してないですか？」

「そんなものあつたら最初から……」

途中で言葉を濁す参香。ついで、目を逸らしたのが決め手か。今帰が急に老けた顔を始める。グルコサミン不足で関節痛いですが、とでも言いたげな顔。

「……夜も遅いし、全員夜食にするか」

「声……震えてますよ」

無視をして、自分の机へと向かう。ここで、机の中から搜索に繋がる物が出たなら、最早笑えない。今帰はもうそれを予想して、準備を始めている。

「・・・・・・・・カップラーメンでも・・・・・・・・」

「はい、緋色所有物ですね。それじゃよろしく」

引いた棚を開き、中身を確認。素早く閉める前に今帰の手がそれを遮る。机に詰められた、学びの友。一冊、教科書を取り出し、それには『炬 緋色』と名前がバツチリ。

「マラカスカすかす行きますか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

返答なし。それ以上は、無言で事が進む。

事態が終了に傾き、足音が数を増す。気分は上向き。夜が長いのはこちらもだし向こうもだ。やっと解放されるのだから、嬉しくない筈はない。

掠れる光に沿い、参香を先頭にどこを目指すか。ルートはいくつ

もの角を曲がり階段を一つか二つ程下っていく。下手に上に向かわず敢えて下。考え方としては少々捻くれている。

「・・・・・・・・動いている・・・」

光は絶えず、低速ではあるが傾きを変えている。目標は今も動いているらしく、しかし足音はないし、音は静寂だけ。この階で間違いはなさそうだが・・・。あとは追いつめるだけだが、示す先が地面と平行じゃないところが引つ掛かる。

周囲に目を配りながら、光は斜めを指す。つまり、上な訳だが、この一階上という事はない。何故に間を指し示すのか。

「・・・・・・・・ますます捻くれてる」

階と階の間で停滞している。その間で人がいれるスペースは一つしかない。

「通気孔の中を隈なく探せ！」

命令の聲が飛ぶ。瞬間、通気孔から音が、明らかに人が動く音。そして、視界を、蛍光灯よりも強烈な光が目を刺す。予めの準備らしく手際がよい。見つかる事は想定内だった訳か。

「・・・・・・・・ちっ・・・」

浮ついた気分が、今の閃光で地に足を着ける。左手で目を隠し、右手で銃を抜く。光の中で動く影は逆に居場所を知らせている。無色透明な世界で振り下ろされる腕。体を捻り躲し、発砲ではタイムロスと判断。銃身で頭を狙うも空振り。

右腕を素早く返し、バツクした相手の足を撃つ。刹那に遅く、肉

を貫く音はせず、地面が削れ弾ける。視界の回復はゼロ。しかし、手を拱いているのは割に合わない。空いた距離を即座に詰める。

「dream out!」

時速100kmの砲弾。肘が突き出され、胸へと吸い込まれる。若干漏れる呻き声。手応えはあったが、後ろに跳ばれ軽減されたようだ。派手に吹き飛ばされても平気で立ち上がり、埃を払っている。

「流石にこれじゃ貴女は止められないか」

「完璧に殺す気だったじゃないか。恩を仇で返すとはこの事だな」

「確かに恩はありますよ。でも・・・人のもんには手を出されたら、我慢できない性なんで」

「なら私のものに手を出したお前は どうする・・・」

焼き付いた光が晴れ、視界に居座る人物。驚きはしない。予想していた通りだ。

「・・・トウマ・・・」

懐かしが目立つ声。こんな状況でもなかったら、お茶でも飲んでいそうな。そんな感じの柔らかな声。しかし、残念ながらもてなしの品は命の奪い合いだろうか。

27th「END」(後書き)

はい、記憶にあるかは判りませんが、どの物語にも登場しそいな、オッサンぽいけどオッサンじゃないキャラが再登場です。何か知ってそうな謎キャラでもいいですね。いいとこどりするにはキャラ不足でしょうかね。

28th「発見」(前書き)

「心」が「青い」のが「情け」なら、どんな状況でも青いままです
いたい。それが自分の為にならなくても。

狭い通路。見つからない為に、とは言え埃っぽく、猫やら鼠やらで叫びそうになる。体裁と今現在のみを考えたら通りたくない。が、生きる為だとしたら気にしてられない。

「……アズマは大丈夫だと思います？」

「……まあ……ま……大丈夫だろ」

その間が心配の要因になる。下ではワンダー達が闊歩している。暗闇の中のそれは、さしずめ、死神のペットの放し飼いか、死のサファリパークだ。アズマの安否しか、頭を占めているものはない。

「……おっ、電力復旧完了か……」

下は明るくても、通気孔の中は暗いまま。さして、変わりはない。しかし、まだ、アズマが逃走中なら望みは出てくる。何とかやり過ごしている事を信じて、合流を願おう。

「……向こうにサーチ使う人、いますか？」

少し余裕を持ち始めた心境。自分達が見つかる可能性もある。荷物は全部没収された。鞆も何もかも。こちらに繋がる素材はありふれている。

「・・・没収したのは参香だろ？ワインレッドのジャケット着た、いかにもスケバンみたいな人なら、あと少しぐらいは見つかからない」
「・・・そうですけど、なんで解るんですか？」
「ドジっ娘なんだよ、参香さんは」

そう話すトウマの声は特別な思いが含まれている。顔は見えないが、多分、笑った顔をしているだろう。この話と一緒に何か、思い出しているのか。思い出しているという事は、何かここについて知っているという事だ。

「・・・トウマ先生は何か・・・」
「しっ・・・どうやら思ったより早く見つかったみたいだ」

足音はまだ遠い。きかれたくないから、早めに言葉を抑えた様に思える。しかし、やはり思った通りなのだろう。

足音の数は多い。迷いなくこちらに、音はだんだんと大きくなる。早く見つかったとは言ったが、抜け出してから一時間以上経過しているから、ホントに間が抜けているみたいだ。

「とりあえず、会えるよう頑張れ。こっちは押さえとくから」
「・・・わかりました」

何ともアバウト。行き当たりばつたり的に、偶然鉢合っのを期待しようだ。そうなのだが、このまま閉じ籠るよりは、行き当たりばつたりの方がいい。部屋にいた時に痛い程それは感じた。

「・・・気休めで地図は渡しとく」
「ありがとうございます・・・死なないてくださいね」

一瞬驚いた顔をして振り向く。すぐにいつもの、やる気のなさげな顔に戻ったが、口元は笑っている。

「・・・バアカ・・・」

せつかく道を空けたんだから早く行けよ、と急かされる。信じてもらえるのは嬉しい。でも、たまに心配するのは反則。浮ついてしまっから。

角を曲がる後姿が見えなくなり、ポケットからメスと閃光弾を取り出す。天井裏に繋がるジョイントを外し、聴こえる足音。もう、そこまで来ている。声も近い。心中で数えるカウント。迷いない足音が止まる。そこから三秒、大声と共に閃光弾を投げる。それらと同時に飛び出し、内心で呟く。

・・・・・・ホント・・・バカだ・・・

塞がるのは無数の傷。止まらないのは悪いイメージ。早くしなければいけないのに、体は動いてくれない。焦る気持ちも萎えて使いものにならない。ワンダーの群れに、力付くで突破したのは、仕方ないとは言えやり過ぎた。

部屋の片隅。安全なのかは知らないが、適当に飛び込んだ部屋には誰も来ない。寧ろ僥倖だが、物置だろうか。扇風機や、ストーブ、夏と冬の必需品が乱雑している。

少し休憩のつもりで、床に座り、脱力した瞬間、指一本動かせな

い。支えにしていた物は、大木ではなく蜘蛛の糸。少しでも体重をかければ切れてしまう。

どれくらい時間が経過したかは、億劫で考えようとしもない。それより頭を占めるのは、目の前の少女だ。ファルも少なからず怪我をした。小さいが、血はまだうつすらと流れている。それを見る度に、怪我の治りが早い自分に吐き気がする。胃の逆流を抑える程、体力はない。抵抗もなしに、手頃な箱の中に吐き出される。

吐瀉物に含まれる疲労。その疲労を吐き出しても、外に出る事がなく疲労は溜まる。建物内でのサバイバル。無人島での生活より辛いだらう。人が相手よりケモノの方が（比較してだが）いい。

目を閉じ、それでも眠る事はしない。度重なる疲労がそれを許さず、眠つたら意識の覚醒までに時間がかかりすぎる。それに夢を見るのは嫌だ。きつと、今まで以上に深く、鮮明に、黒という虚さが際立つだらう。今は呼吸を整え、再始動できるまで待つ。悪いイメージは残留したままだが。

焦る気持ちは、腕を掻き毟る痛みで抑える。横にいる少女は依然、意識を沈めたまま。時たま寝返りや、口を仕切に動かしているのはホツとする。こっちは大丈夫。ちゃんと生きてる。でも向こうは今も生きているのか。自分が逃げ出した事で状況が悪化してないか。そうならたらずで意味がない。

「……なら……ここでこうしてはられない」

気難しい体の様態は無視し、腰を上げる。膝は曲がり、頭は重い。腕は上がらず、いざ立ったはいいいものの、歩けない。立つだけに貯金を使い果たした。次、ドアに辿り着くまでに数十分かかるだらう。

壁に背中から纏れ、ドアを見つめる。見るのは近いけど行くには遠いドア。ずっと見つめていると吸い込まれそうな錯覚は、寧ろそれがいい。近づいてくれるなら手間が省ける。しかし、そんな事はある筈もない。淡くもない、渋い希望。誰かが後押ししてくれれば、勢いで行けそうだ。

そうして、やっと一歩。全身の筋肉が悲鳴をあげて、バランスが崩れながらの一歩。いっそもうヤケになってしまおうか。後にも先にも痛いのだし、燻っていても不安なだけだ。帰る為の布石ならドンと来いだ。

そうして、一歩毎に膝が抜け、乱雑している機具を蹴飛ばしながら進む。が、やり過ぎた。ドアの手前に着く頃にはもう、肩で息をしている。膝に手をつくると尚更痛い。

未練がましく振り向き、ファルを見る。白い髪の少女と少しのお別れ。扉に手をかけ、あと一人を助けに部屋を出る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「うわおっ！・・・・・・・・びっくりくりくり」

踏み出した機会はよかったかもしれない。でも、流石に予想外。休憩なんてないに等しかったし、これから一戦交えるのは、結果的に後押ししてくれたからいいのか。意識が今帰の姿に向き始め、とりあえず後退。短いお別れをよくは思わない。

今帰の手元から、こちらを指し示す矢印。地面に平行なそれの上に乗っているのは、朱い何か。液体の様に見えるそれは、アズマの血。そうと解れば、自分の事をサーチの素材としては最適。行使を止め、手から矢印が消える。こちらに意識が向いたと見ていい。

口元しか笑っていない顔は、イラツと来る。いい後押しになった。痛みなんか蚊程もない。役に立つ事もあるもんだ。

悠々と一步踏み出す今帰に、手元のダンボールを投げつける。当然、難無く弾くだろう。でも、投げつけたのは、さっきの不幸なやつ。弾いた瞬間、吐瀉物が体に降り懸かる。

「げっ……うわ、汚ね……」

手段か、これに対してかは知らない。手段でいえば確かに汚い。生きる為なら汚いも糞もない。それを汚いと言えば、生きる事が汚いと言える。

怯んだ今帰に、両腕を組んでタックルをかまし、部屋の外に追出す。足場も悪いし、ファルを巻き添えにはできない。今帰の場合、平気で人質にするだろうし。

懸念は正解。dream outの長時間行使でロクに動けないと今帰は判断。適当に蹴ったあと、ファルを未練がましく見せながら、意識を削ぎ落とす予定。だった訳だが、アズマの奇襲により予定は変更。動けるなら、消す事にしよう。

壁にぶつかり、そこで停止。アズマの肩を掴み、横に投げる。大きく間が空き、向かい合う立場になる。アズマの動きはスムーズ。とても先程までグロッキーになっていたとは思えない。

対峙するのは二人。今帰は被った吐瀉物を厭そうに、丹念に、ポケットティッシュで落とすのに専念している。その間に周りを見渡すが誰もいない。人影もないし、気配もない。この事はアズマは知らない。

大部分は参香のサポートとして向こうに。今帰のこれは単独行動で、他に人は来ない。どうしてか、と聞かれれば、楽しみを一人占めしたいのは当たり前な事だ。弟に隠し持つケーキの様なもの。申し訳ないと思うが、その気持ちにケーキの甘さを引き立てる。

大体は拭き終えたが、服に点々とアートしている。洗濯するしかない落ちそうにないそれを諦め、お返しとばかりに吐瀉物を拭いたティッシュを投げつける。無論、自分のだとしても厭なものだ。当然避ける。

焦点がティッシュの方に向いてる隙に、空いた間を詰め、拳を振り上げる。右上段のフック。避けた後でも十分躲せる速さ。アズマの横を擦り抜ける拳。同時に脇腹に鈍痛。今帰の膝。不格好に突き出されたそれ。流石に体勢的に力が入らない様で、痛みは少ない。

一瞬怯むのを見て追撃。左のボディブロー。これはフェイントか。横に避ければ、また違う手が飛ぶかも知れない。

頭を過ぎる先程の攻防。印象付けるには強烈。自分はいつガス欠になるか解らない。このまま持久戦では不利。攻撃もなるべくは喰らわない方がいい。dream outの行使も考え、決めるなら数分。5分持てばどうだろうか。

「……ぐっ……」

重い一撃。ボディブローが防御する腕ごと体に響く。決断は素早く。思考している暇はない。

「……dream out!」

浮いた足が地に着いた瞬間、差し引きをゼロにする。タイムラグなし。体勢を立て直す暇もない。今帰は殴ったままで停止している。

「……速す……」

言葉は紡がせない。口を動かす前に、顔面に蹴りを一つ。力が流れる方向に対立して、右フック。喧嘩などあまりした事はないが、

それでも十分な威力な筈。

「……っ……」

当たり所が悪いのは頂けない。拳の速さに比例して威力も大きい
が、反作用も大きい。握れなくなる程痛めた訳ではないが、多用し
たくはない。

「……あろろろろろろろ？……からから軽いねトウト
ウ。つてていつて口切った」

十分だと思っただのは過大評価。思い違いだし、自分の物差しで測
り間違えた。唇を切つて、血は出ているが、それ以外ダメージが見
られない。まったくではないが、ほぼ皆無と言つていい。大ダメー
ジは相手に見れば、百分の一程でしかない。

「……ほんじゃま次はこっちの……ずっと俺のターン、
ふー！！」

ふざけているかそうじゃないかはおいといて、左のローキックが
狭い通路に綺麗に孤を描く。遠心力が全てのとって思わず避けたが、
自分の髪を風が揺らす。ありえない威力。当たったら死を連想さ
せる程の存在感。そして、それは単発な訳がない。

しなる死の存在。左右から首を風ぎに、上から頭を潰しに、下か
ら足を掃う。間髪なく飛び交い、左右の足は隙をなくす。手を出そ
うものなら、簡単に弾かれ地に伏せるのが目に見えている。そうで
なくても状況は芳しくない。

「……っ……」

頭を掠り、髪の毛が数本抜ける。それらを一瞥する暇もなく足を掃いにくる。こう狭いと横に動くにはきつい。縦も同じ。このまま肉弾戦のみでは限界がある。引きずって、時間が長引いて敗北するなら、何とか打開した方がいい。時間も限られている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・お？」

右から首を刈りにきた脚が、金属製の物音がして止まる。かなり力を入れたが、折れはしない。想造した槍は曲がる事なく受け止めている。

「だっはー、抵抗停止の槍現在出現」

危機を感じた今帰に対して、アズマは揺らいでいる。本音は使いたくないし、今、頭の中をフラッシュバックしている映像がある。ラテラの焦点の合わない目から始まり、次いで血の臭い。鮮明に焼き付き過ぎている。体まで震えてきた。

遠くなる視界と思考。魚眼レンズを覗いた様に遠近感がおかしく、今帰の姿が遠い。焦点が合わない。呼吸が速い。これはヤバイ。

唇を噛み切り、痛覚が意識を叩く。何とか元の遠近感に戻るが、依然殺人のイメージは止まらない。その自分に言い聞かせる。殺すのは二度と御免。こんな罪は一つで十分。だから殺してはいけない。

他人に言う様な気がする。自分を窘めているのに、そんな事言える立場じゃない、と言いつつ他人がいる。だが、資格はある。殺したからこそ、まだやるか、止めるかを選べる。勿論、後者を選択する。

「・・・おっおっ!?!?・・・コロコロ転がる殺しはしたくないと。やさぐれて優しいねえ、トウトウ」

指摘された事にドキリとする。何を見てそう判断したのか。読心術に長けているかは知らない。他人の表情をよく見るから判るのだろうか。

いや・・・違う。見ているのは槍だ。視線の先にあるのは、想造した槍。そして、それは槍とは言えない。刃は付いていなく、これではただの棒でしかない。

原因はアズマ自身にあり、これはアズマは知らない。今帰は知っている。マートはアズマに殺され、アズマはそれを引きずっている。殺しは初めて。初めてはいつも後ろめたいもので記憶に深く残るもの。それが、反道徳的なら尚更。殺人という許されない行為。鮮明に印象付かない訳がない。

想造物は心情の変化で堅くもなるし、脆くもなる。感情を写し出す鏡と言ってもいい。そしてアズマの心境は非殺人。一つの不安を消すにはどうするか。意識してはないが、鏡は全てを写す。結果、不安要素を無くすには、殺してしまう可能性があるものを消す事。それが一番高いのが刃。あとは力加減でどうとでもできる。

今帰は笑う。自分を殺す気がないなら、恐れる事はない。想造物を見るだけで、こちらが優位に立っている。牙と爪がもがれた猛獣。必殺の一撃は皆無。

「・・・しっ!」

若干、放心状態なアズマに足を掃う蹴り。慌てて槍擬きで防ぐが、どこかぎこちない。動揺する自分には好都合、と言いつつ聞かせ、防ぐだけで軋む蹴りを受け止める。

dream outを行使しないでこの威力。使われたら詰み。

形勢は一気に傾く。受けるだけでは打開はできない。反撃しないと徒に好機を逃すだけ。せつかく、リーチのある武器だ。今帰の足よりは長い。

左からのハイキック。続いて、足を降ろさず頭を尻ぎに来る。間一髪で躲し、腕に力を込める。しゃがんだところから、横に薙ぎ払う形で頭を狙う。が、背中を反らし難無く躲される。バランスは崩した。また、背を伸ばして、足を出すには時間がかかると判断。槍を返し、上から、調度剣道で面を取る様な形で振るう。

「……………えっ……………」

危険信号を鳴らす直感。0.1秒で恐怖を感じる本能。ありえない攻撃が思い浮かび、体は硬直する。瞬間、左側から来る大きな衝撃。今までとは比にならない威力。スローモーションに流れていき、痛覚は尚更神経を貫く。

「……………ぐがっ……………ぎあ、げほ……………」

壁に衝突し、力は体が吸収し、内部にまで浸透。骨は折れただらうか。全身が痛みを発し、どこが折れたか解らないが、全身がフニヤフニヤしている。視界も万華鏡の様に焦点が揺らぐ。

「知ってるこれ、ムエタイ得体の知れない攻撃にお困り？」

何も聞こえないし、何も考えられない。ぼやけた視界だけが、まだ意識がある事を伝えている。何か無性に暖かくて、五感はやけに冷たい。

「無駄な逃亡だったね、トウトウ」

仰向けの状態を何かを覗く。冷たい視界の中で何か降ってくるのだけが見えた。

28th「発見」(後書き)

ムエタイはタイの国技で、立ち技世界最強とまで言われて、今回はスウエー(イナバ〇ワーを想像していただけると早いです)から体をしならせ、返す勢いそのまま蹴る技です。同じくらしい体重の相手なら、ガードした腕を折る程の威力があるそうです。

29th「火種となる灯」(前書き)

Q・神様がいるなら、何でみんなを平等にしないの？

A・そんな事すると、「平等」「なんて言葉ができないから。それに、おもしろくなくなる。

29th 「火種となる灯」

降ってくる死の宣告。避けよう、なんて思えないぐらい果てた。自分は疲れた、自分は頑張った、後悔はない、とは絶対に言えない。寧ろ後悔に関してはあり過ぎるくらいだ。

緋色は助けられなかったし、ファルもまたここに逆戻り。マートを殺した罪も償えていない。江湮もずっと寝たままか、と思うと、それでも動いてくれない。さながら俎板の鯉。包丁の一振りで絶命してしまう。

仮に生きていたとしても、それは手術を施された後。こうゆう事も考えられなくなるのだろうか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？・・・・」

命を刈り取る一撃はこない。走馬灯にしてもサービスし過ぎ。どれだけ視界が冷たくとも、ゼロじゃないならぼんやりとは見えるもの。その視界の中に今帰はいない。

何がどうなったのか。また記憶が吹っ飛んで、その間に何かやったのか。それはそれで、違う最悪。罪はもう背負いたくない。

とにもかくにも、体を動かそうと試みるが、浮遊感が全身を包んだままだ。調度ガス欠で、部屋にいた時より状態は酷い。呼吸がしづらいのは背中を打ったから。咳は出っ放しだが、それも聞こえない

い。冷たい五感は、益々感覚を遠ざけていく。睡眠に入る寸前の様に、気を抜けば消えてしまいそうだ。

矛盾と葛藤が入り乱れていく胸中。諦めきれないのに、力を抜き疲労の海に浸かる事を望む自分。動きたいがこれ以上どうしろ、と諭す自分。どちらが本心で、何をどうしたいのか答は出ない。それはもやもやとした煙の様に。手に取るうとしても逃げていく。

「……………終わって……………いいのか……………」

本当に疲れた。声に出すと意思は脆く、心は諦めに侵食されていく。本当に呆気ない結末。今帰の言う通り何もかも無駄で、全てが徒労で幕を下ろす。

全身に入っていた力は解けていく。目を閉じて脱力すると、しかし手を開くと冷たい五感に何かに触れる。声まで聴こえる。「まだ、駄目。しっかり」と片言の会話。聴いた事のある声。それは心の中に何かを焚き付ける火種となる。

右手に掴まれている想造した槍。それはブレて消えかけたが、消失するのを止め、手に確かな硬さを知らせる。

ほんの一部分しかなかった小さな感情。それは、暗闇の中で光る弱々しい灯でしかない。近くから見ればそう。けれど、見ている場所が遠ければ遠い程、その灯は強く、大きく見える。小さな光は手元に置いておくのではなく、遠くに向けて見せるものだ。この小さくて、弱い灯でも、遠くに向ければ誰かの希望になるのか。

力の入らない手で、消えかけの槍を握り締める。これは意地の悪い証拠。胸の奥のどこかで、諦めきれない自分がいるらしい。消え

ない想造物がそれを体現している。堅い意思はこつもしぶとい。なら、体もそれに応えなければならぬ。

「……………ぎ……………ああああ……………っ！」

声とは非常に便利。自分を悟らせる事ができれば、こつとして自分に葛を入れる事もできる。苦しい時に声を出すのは無駄だと思っていたが、あながち嘘でもない。

跳ね上がる体。筋肉は矛盾に堪えながら、頭からの命令に従う。動かすのは至難の技。それは瑣末事として、疲労感と共に全て排除ないし邪魔になる要素は押し込める。

膝を曲げず、体は出来損ないのロボットの様に振り返る。視界にあるのは、今帰の自分を見る姿と、こちらを振り向きながらも今帰と相対する……………

「……………なんて馬鹿だ……………」

自分に向けて言った言葉。決して自分を庇ってくれている人物にはない。その人物は嬉しそうに笑うが、アズマは複雑な心境ではない。

「アズ、よかった」

それはこつちの台詞。理不尽に寝ていると、江湮とダブってしまったから心配の度合いは大きい。まあ、でも本当によかった。

外に向けて放つ弱い灯は、ここにきて大きく燃え上がる。俺のはファルののに連鎖されて燃え上がった訳だが、次は緋色か一季に燃え移ればいい。一季はいるかわからないし、緋色は本当にどうなって

いるかわからない。今はそれで手一杯。あー・・・・・・・・と世界が斜めだ。

視界が冷えていくのを、葛をいれて暖める。それでもダメージは残留したままだ。特定できないが、ともかく全身が痛い。最悪、骨でも折れてるかも知れない。先に心が折れかけたが、諦め一色でもないのに諦めるのは、骨が折れるより苦痛に違いない。

「・・・・なかなかトウトウ図太いしぶとい超メンドイ。二対一だしやっぱり痛いしメンドイ」

状況的には、俺ががのびてる間にファルが起きて、成る程、あの影はファルだったのか。そして、今帰の後ろをとったが、腕を斬っただけと。完全に不意を突かれた様で血は思いの外流れている。

血を見るだけで吐きそうになるのは、ヤバイ。よっぽどのトラウマだ。PTSDかもしれない。我に帰れば呼吸は浅くて早い。意識まで遠くなる。

「・・・・・・アズ、大丈夫・・・」

「大丈夫だ。・・・それよりファルは大丈夫なのか？」

返答が早いと信用はゼロ。必死で隠そうとしているのがバレバレ。だけど敢えては触れない。隠しているのだから、それを詮索するのは無粋というもの。そうして「大丈夫」とだけ答える。

「そうか。・・・なら、今帰と戦う事は？」

一瞬俯いて「大丈夫」と、消え入りそうに答える。そうゆう表情を見せるのもNG。ラテラやマートの時も怖がっていた目だった。恐怖にも種類があるし、ファルの恐怖がどれに当て嵌まるのかは知

らない。自分の恐怖は臆病の部類に入る。仕方ないで、突き動かされる弱い覚悟。そのくせ何もできない。

「・・・怖いかな？」

今度は首を横に振る。誰でも解る嘘。でも優しい嘘。葛藤しながらも、同僚に刃を向ける。それでも、刃にブレはなく、ちゃんと覚悟は決まっているようだ。自分とは違う。

守るなら相手を傷つけ、助けたいなら迷いを捨て、失いたくないなら殺す。自分は全てが甘い。守りたいけど傷つけない。助けたいけど迷いは捨てられない。失いたくないけど殺しはしない。これではただの我が儘だ。

そんな正義感を振り回し、アズマは地に落ちる自分を想像する。守りたいものも守れない人殺し。手を真っ赤に染めながら、更に他人を危める自我のない自分。

何度目の葛藤かは知らない。一生悩むだろうし、答何かもありはしない。どうすればいいかもわからない。葛藤に質問しても堂々巡り。もつと混乱する。

迷いながら、未だ覚悟のない槍を構える。全身は悲鳴を上げ、押さえ込めない感情は動作と思考の邪魔をする。心拍数は静かで、胸中は忙しい。

二人横に並んで立つと、通路はより狭い。だが力強く見える。一人より二人の方が隙はない。それは万全な状態の話だが。

アズマのダメージは大きく、今も葛藤中。行使のフィードバックでスムーズに体は動かせない。実質ファルだけが健在。一対一と言っても過言ではない。

それでも今帰が来ないのは、懸念しているから。アズマはしぶとい。二、三発まともに蹴りが入ったとしても、倒れないだろう。既にグロッキーな状態は見取れるが、まともじゃなくても一発入れる度に、ファルが応対するのは面倒だ。

「・・・もうかないかな・・・行使したやうかな」

その言葉に危機を感じえすにはいられない。咄嗟の事に体は動くが、その口を押さえるには遅すぎる。

「・・・dream・・・out」

霧困気が張り詰める。こちらの手札はあまりにも貧弱。切り札はもう見せてあるし、向こうの切り札は今きつたばかり。状況は果てしなく悪い。

口にして、また口元しか笑わない笑みを浮かべる。それが見えたのは一瞬。倒れる様な体重移動。前のめりに走り、間合いまで詰める。

暴風というのはどうゆう風に、枝を折るのか。どんなにしなる事ができる枝でも、一方向に曲がった後、その逆に曲げられると簡単に折れてしまう。

今帰の蹴りはその暴風と化している。一度過ぎた脚が、タイムラグなしでまた戻る。速さも威力もそのまま。そして・・・

「・・・つっ・・・」

鎌鼬らしきものが発生するのか、髪を撫でるだけだった風は皮膚

を裂く程にまで鋭い。防ぐには手に持つ槍で受け止めるしかないが、受け止める度に槍はその形をどんどん歪に変えていく。これ以上曲がれば、想像している形と、顕現している形が食い違い、消失してしまう。

反撃するにもタイミングを誤ればどうなるか。今度は確実に意識が消える。待ったもなしに、闇へと直行。助ける人もいない。

「……がつ……！」

振るわれた蹴りは、体ではなく槍を持つ手に入る。骨が鳴り、手には力が入らなくなる。槍を落とし、虚しい音が廊下に響く。落ちたものを拾う余裕はなく、徒手空拳の自分に暴風の一吹きが吹かれる。

「……痛いな……ファル」

死ぬ、と思つた瞬間割つて入つたファル。黒刀を盾に暴風を止めるが、黒い刃に罅の入る音が聴こえる。今帰の脚からは朱い線が数本。刃に罅を入れる代わりに、肉を少し切られた。骨で刃は止まり、それ以上深く入る事もない。

元々、刃は引かねば切れない。ただ押し当てただけでは、切れる事はない。それだけだと押し潰している事になる。

切られた脚を下ろし、もう片方の脚を蹴り上げる。さっきはまともを受け止めたから、罅が入ったが今度は違う。受け流し、躲し皮膚が切れるが、相手も脚は少なからず切れている。

それを黙って見ている訳もない。想造していた槍を消し、直ぐさまイメージを再構築。手元にまた覚悟のない槍を持ち、ファルの横合いから今帰に突き出す。

「……ちつ……」

初めて漏らす舌打ち。大きく後退し距離をおく。脚は血だらけ。そしてファルも。結果だけ見ればファルの方がダメージは大きい。得物は罅割れ、あと何合か打ち合えば折れてしまう。

「……しようがないけど小学生。子供っぽいから痛い超絶勘弁」

今帰に得物はない。ないと思っていたが、それは間違いだった。見る間に輪郭が浮かび、脚に踵わる刃。出すなら最初から出してほしい。そっちの方が驚きもしない。後から出されると希望が削がれる。

今度は一気に間を詰めずゆっくりと歩いて近づく。どこか嫌らしくてしょうがない。一気に来た方が気が楽だった。この間、ずっと気を張り詰めておかなければならない。そしていつ突発的に動くかもわからない。

呼吸をする瞬間か、瞬きする間にか、逃げ出す瞬間か。加速するイメージで緊張は張り詰めたままだ。

「……ファル……大丈夫か？」 「多分。アズは？」

「それなり」

当たり障りのない会話は、少しだけ緊張を解してくれる。心は少しだけ楽になったが、体はそうはいかない。複雑な動きはできないし、力を入れるだけで筋肉は攣りそうになる。限界に一番近いのは、言うまでもなくアズマだ。

間合いに入る少し後ろ。今帰は何のつもりか歩を止める。ここで攻撃しても、簡単に見切られる。それはこちらもそう。という事は何かやりたい事でもある様だ。

「・・・トウトウにファル。捕まる気はないか？」

いつものラップ混じりのふざけた口調ではない。今度のは本気という事らしい。しかもこれ以降は、下手すると殺してしまうよ、との含みもある。そう考えると、今まで手を抜いていたとも考えられる。本当に嫌らしい。

ファルはこちらの顔を覗き、アズマの判断に任せるといふ顔だ。

「アズ、ここいるなら、私もいる」なんては言つて欲しくない。ここに行きたいならリータが死んだ時、ファルも一緒に死んでいた。どこに行こうか、と思つて俺ん家には来ない。少なくともファルはここにはいたくない筈だ。なら答える言葉は、今後どうあつても一つしかない。

「ない」

答はその言葉を言った瞬間、刃が閃く。配置的にファルが前にいたから、ファルがその一撃を防ぐ訳だが・・・

「・・・え・・・」

刃のついた脚は、先程と比べて遅くなっている。その為、受け流すのはさつきより簡単だと思つていた。しかし、黒刀は砕け虚空へと消える。

次いで宙に舞うのが、ファルの右腕。フィードバックして棒立ちのファルに避けられる筈もない。後ろに倒れる体をアズマは客観的

に見ていた分、冷静に受け止める。連続して次の脚が跳ね上がる前に、今度はこちらが距離をおく。

「フアル、大丈夫か！」

三度目の現状確認。一つ、二つ前の心配とは比にならない声の荒げ方。そして、疑問形ではない。大丈夫な訳ないのに、何故そう聞くのかわからない。「大丈夫」と、その口から何か聞きたいだけなのかも知れない、きつと。

「……大丈夫……夫」

「……」

違った。「大丈夫」って言われても不安なだけだ。当然と言えば当然なのだが、さつき思った事はどう説明すればいい。そう……「大丈夫」じゃなくて、頼って欲しかった。一言、何か、頼られる言葉が。

「……まだ……腕切られただけだから……死なない……よな？」

「……」

上着を脱ぎ、血に濡れる右腕を縛る。脇から切られた所までを強く。止血法は保健の授業程度だが、こんな所で役に立つとは思わなかった。少し痛そうに顔を歪め、それが無理をしている様に見える。休ませる様に、壁によつ掛からせる。

人はそんなに簡単には死なない。いや、殺意の高低で人は死ぬ。殺す気がなければ、簡単に線を越えるし、殺す気があれば、敏感に人は察知し抵抗する。そして、他人の死の気配も敏感に感じてしま

う。

連想してしまう。腕がとれるなんて論外。早くケリを着け、医者に見せなくてはならない。シヨック死の心配はなさそうだが、失血死の心配がある。

足音が聴こえる。ゆっくり、堂々と闊歩している足音。落ちた右腕で止まり、それをわざわざ拾い見せびらかす。神経に障るその仕草。ナメているのか、煽っているのか。どちらにしる、沸々と腹の中で何かが煮え滾る音がする。

「・・・あーあ、おまひ粽にやつちまったな」

頭からの伝令が来ない右腕。指は黒刀を持つていた形から、全て下を向く形になる。酷く機械的に見えて、精巧な義手にしか見えな。なのに振り向くとファルの腕はない。

また背ける。理解しがたい現実から目を。誰も傷つかなければいい。誰も死ななければいい。そんな事は望める事もなく、理想とは掛け離れていく。

あの時、進むか退くかを決めた筈だ。退けば、江湮は助けられないが、殺人の罪を背負う事はなかった。進んだ先が殺人という罪悪感。死にそんな人を助ける事ができない無力感。悲しくないが、虚無と怒り以外何も感じない。

ファルが死ぬ？

駄目だ、そんな事。

なら、どうする？生かす為に傷つけたり殺す？

駄目だ、そんな事。

答が出ない。ファルは助けたい。でも、今帰はどうしようもない。振り切る事も無理だし、どうあっても殺すしか生かす方法がない。

「んーん・・・いい顔。絶望・・・してるかな、トウトウ」

気分が昂揚しているのか、あろう事が右腕の指をもいでいる。それはもう精巧には見えない。血が滴り、肉と肉が離れる音がする。

筆の数は全部で五本。小指は振り、爪を剥ぎ、その下のピンク色の肉を壁に擦り着ける。人差し指は骨を剥き出しにし、壁に叩きつけている。中指は壁に爪を何度も往復させ、摩擦で肉が焦げる臭いがする。薬指から出る血を絵の具代わりにし、朱色で色をつける。最後に小指を手の平で押し潰し、ミンチになったそれを壁に散蒔きアートは完成。

醜悪でグロテスクな絵。世界一嫌悪して、吐き気がするクソツタシな・・・怒り以外の感想を残さない絵。

弾ける。液体だった怒りが揮発し、周りのものも含めて蒸発して密室を膨張させていく。弾ける。密室は限界を越え、溜まりに溜まったものが一気に弾ける。

29th「火種となる灯」（後書き）

あー・・・ショックです。明々後日のテストの所為でゲームがでない。2月10日に出たばっかのやつが。その何かは自分で調べてください。あー・・・アンニユイです。

30th「撃鉄」(前書き)

私は何モノでもないし、定義に当て嵌めれば特別どうということもない。何にでもなれるし、どうとも言える。

でも、私は何になれる訳もないし、何になるつもりも思わない。当て嵌めるなら無色透明とでも名乗ろう。

絶望に溺れる。

喜びに陶醉する。

罪悪感に押し潰される。

怒りに駆られる。

恐怖に抱かれる。

悲しみに打ちのめされる。

安堵に包まれる。

表現は幾つかあれど、感情に作用される事はいくらでもある。「カッとなってやった」なんて、怒りに駆られた代表的な例だ。腹の居所が悪かったり、様々な観点から見れば、また違ってくるが。

感情が一つ欠落すると、他の感情に対しても敏感になってしまう。生きる上で最も重要な要素であるし、なかったら生きているなんて言えない。

しかし、感情なんてものは自分の理解できる範囲でしか、感じら

れない。今自分がどうゆう感情で、その感情を言葉にするのは酷く重労働。けれど、敏感な分、人よりそれを深く理解できる。敏感な分、感情に囚われ易いという難点があるが。

拘束されている気もするが、体は最高に動いてくれる。今なら空も飛べる気がするし、何もできない気がする。

互いに背反し、気分も何かと鬨ぎ合っている。理性と感情は拮抗して、だいたいで感情が押さえられてしまう。しかし今回はワンサイドゲームで、いつも理性で押さえ付けられている感情は、いとも容易く理性を瓦解させる。

本能のままに体を動かす事は、トリップした様に得も言われぬ快感を引き連れる。その時は酷く曖昧。せつかくの快感も、記憶が朧なら快感も半減。

だが、今、快感という感情が入り込む事はない。

筋肉が軋む。心音は高鳴り、その鼓動は速度を増していく。視界の色は朱。血に濡れた様な朱。「そうか、頭に血が上っているのか」と思うと、朱は益々深みを増す。

何も考えられないし、何も見えない。募るは怒り。それを色に例えるとしたらやっぱり朱だろう。だから視界は朱い。だから目に見

える物全てが憤怒の塊。怒りを引き起こす引き金でしかない。

引き金の数は無数。動くものがなくなるか、意識が戻るかしない限り、撃鉄を落とし続ける。

「……ばいやー……囚われてるっばい」

まずは初撃。ノーモーションから地を蹴り、振りかぶって一撃。重心の低い走りは、まるで獣だ。歩幅は狭く、目移りはしない。何があっても本能的に、反射的に、体は動かせる様に。

頭上から迫る槍を器用に受け止め、逸らしてもう片方の脚を、体を反転させ踵を打ち込む。それより速く、アズマは壁を疾走して攻撃から離脱する。

「マジで消す気殺す気ヤバ気な気配」

アズマの想造した槍には必殺の矛が付いている。怒りから派生される殺意。どうあっても殺したいらしく、表面積の広い、所謂、十文字鏃と呼ばれる類のもの。中心の刃の根元から、更に左右に刃が付いている。

余裕をこく暇も消えてきた。殺さずに、っていうのはかなり危ない橋を渡りそうだ。まず、いい加減邪魔なこれでも投げつけよう。

指のない、掌しか付いていないファルの右腕。関節が歪に曲がりながら飛んでいく。それを先程まで凄く頓着していたというのに、槍の先端で弾き一瞥もしない。これでどうにかしよう、とは思っていないが、とりあえず囚われているのは確定。面倒な事項を再確認する。

走る勢いそのままに槍を突き出し、服だけを切り裂く。受け止めるにしても、片足で受け止められる程、柔な力ではないだろう。ブレーキもかけられないし、何より今は容赦がない。

怒りによる殺意剥き出しの奴が慈悲をかけるとは思えない。選択を誤れば、デッドエンド。死への片道切符を貰う事になる。

心臓、鳩尾、喉、口、頭をランダムに狙う突き。喰らったら死ぬる急所。幅の広い槍に気を配りながら、殺す為の布石にも気をつける。

刃だけではなく、振り回し柄で牽制。離れた所を急所ではなく、腹に振る。動きを鈍らせ、死を突き付けようと、撃鉄は落ち続ける。

金属がぶつかり、火花が散る。反響する音に、金属音とコンクリートを砕く音が重なる。それらの一つ一つが、引き金を引く音。薬莖をリボルバーに収め、引き金を引き、トリガーが弾を撃ち出す。弾は自分自身。引き金は怒り。殺意がそれを後押しする。

左右から三度、縦から二度、壁や天井を擦りながら力任せに風呂敷粉塵が上がり、果てしない攻防が煙を巻き上げる。

無造作に振るわれるが、確実に今帰とこのだけを狙い続ける。壁はコンクリートが剥がれ、床は抉られ灰色が見える。天井の蛍光灯は何個か破損。それでも刃が刃零れする事はない。

縦に振り抜き、床にぶつかる。地面に弾かれ、その力の向きに合わせて今帰を撃つ。避けた直後。そこから避けるのは少し時間が足りない。

「……けえ……ナメんなよっ……と」

ほぼ真下から来るそれを受け止め、直ぐさま脚を乗せ押さえ付ける。いくら刃があるといつても、槍なら柄の部分の方が断然長い。安全な部分を踏み付け、振らせない。先っぽの方だ。どんなに力があっても動かす事は皆無。

得物は使えない。加えてアズマに冷静な判断もない。こうして追い詰められた状況でも瞳の朱は消えず、今帰への殺意に燃えている。愚か、としか言えない。

流石に殺すと殺されてしまうので、讓歩して足の平で鳩尾を蹴り抜く。手加減なしでも死にはしないだろう、多分、しぶといし。ただ、起き上がれはしない様にすればいい。

十数メートル吹き飛び、地に伏せる。暫くの静寂。粉塵は漸く積もり始める。

「……さてと……ハラハラ腹八分目かな。……ファルとトウトウ疲労に拾って帰るか」

まずはファルの方が近い。後方にいるファルが、生きている事を望みながら一步踏み出す。しかし、歩は一步で止まる。足に引っ掛かるものを感じたからだ。

「……邪魔まじや」

妙に凸凹する、と思ったら槍を踏んだままだった。未練がましく、頭れたまま消失しない。歩行の邪魔をしたそれを、思いつ切り蹴飛ばす。反響する音。イメージされたのが金属だから余計に煩い。耳障りだ。

「ぽっぽろぽろ……光に潜む正義の闇……仮初めの光を滅ぼ

せよ、ジャスティスダーク……」

上がり過ぎたテンションを発散させる様に、歌を唄う。イントロから入り気分は昂揚。とても満足し、あとの仕事は何もない。ゆっくり歩き、熱唱して、とても心地好い。

「テントロトロティントロトントロタラタラントラタン……」

空薬莢を全て捨て去り、詰まった火薬を綺麗に拭い去る。体内に残る熱気も、陶醉する自分を、名残惜しく全て昇華させる。もしもこの時に動作不良を起こせば困る。次の為に、自決の為に、そして最後に……

「タラトラタ……ん？」

数える程しかなかった弾で、確実に止めを刺す為に。

積もりきらない粉塵が、全てを台なしにして巻き上がる。理由は二つ。一つは少年が駆け抜けたから。もう一つは青年が吹き飛んだから。

疑問を感じるより早く、原因を見返す。まず囚われているのだから、怒り以外の感情はない。動けなくするには、手足ぐらい切り取らなければ。あと間違った。アズマはしぶといのではなく、しぶと過ぎる。ターミネーター並。

「……おー痛っ……」

脳が揺れている。見事に撃ち抜かれた。体重全部が乗った、右ストリート。顎外れた。歯折れた。やる気萎えた。でも向こうはまだ

テンションマックス。依然焦点は的に定められたままだ。

痛みで顔が歪む事もないし、疲れた様子もない。歯を食い縛っているだけで、目は真顔。感情が辛うじて伝わる所が、そこだけだから余計萎える。

槍を蹴った時点で気付くべきだった。想造物は心の鏡。それがまだ顕現しているなら意識もある訳だ。

「・・・おいおい・・・槍掴むな・・・ヤバいの過ぎて寒気立つ、っわお！」

助走をつけ、飛び上がり、槍を突き刺す。防衛本能に拍車がかかり、ふらつく四肢で避ける。膝の抜ける足で早々と立ち、後ろに後退る。

「・・・いてえな」

薄いシャツの下に見える黒紫の肌。腫れは物凄く、空気に触れるだけで痛むそれ。手加減なしの蹴りでそうなったのだが、普通なら痛みで蹲る程の怪我だ。見ているこっちが痛々しいし。

「・・・俺ゲロゲロもう逃げる。くんな、どっか行け」

今帰は限界。だからさっさと帰りたいのだが、非戦闘の言葉が聞こえる筈もない。呆然と槍を構え、的を撃ち抜く。

「この・・・逃走」

といっても、ぐらつく頭からの信号ではまともに走れない。dr

eam out も行使していない生身の状態。行使したいのは山々だが、普通なら一日、持って数時間の行使が限界だというのに、アズマがあんなにできるのは不思議というか不気味。ともかく逃げる。

「・・・あつたらつたこれだ、うおっ！」

内ポケに仕舞っていた物を取り出しながら、収まらない撃鉄を躲す。これでどうにかなって欲しい、と懇願を含ませ自分とアズマの間に投げ捨てる。

生き物にとって、光や音は情報を得る為のものだ。だからこそ、発達した目と耳のお陰で高い知能を持っている。順序は定かではないが、何にしても弱点に変わりにない。

足止めぐらいにしかならないだろうが、五感の一つを消せば逃げるチャンスは増える。

閃光弾による光で確かに足は止まったが、更に手がつけられなくなった。本能で動くのだから正に獣だ。右往左往に走りまくり、壁にぶつかり、いない的に槍を振り続ける。

「ハゲる捌け口にされるのはパス。他を当たれ、トウトウ」

漸く回復したアズマの視界には、誰もいない。残るのは己を囚える怒りだけ。行き場のないそれは体内に溜まり、発散されずに周囲を破壊していく。ただ、この獣に次に会う人には「運がなかった」とだけ言っておこう。

対峙するのは二人。他、数人は参香の一声で下がった。一对一を始めてどれくらい経ったか。階下から伝わる地響きに気づいたのは、適度な疲労を気愈く思い始めた頃だった。

「・・・何か感じないか？」

「・・・トウマもか。下で何が起こっているかは知りたいが・・・
まずはお前を消しておこう」

「・・・根に持つな、ニンジンさん」

「そのあだ名も消してやる」

特有の金属音と同時に火薬の臭いが漂う。長い廊下を往来しながら、銃弾を防ぐ。

果たしていくら弾を使ったか。数など最早意味を成さないが、それ程の数で攻めても未だ地に伏せないトウマに苛立つ。

「・・・トカレフなんて、よくもまあ、そんなぼんぼんと撃てるもんだ。しかも両手」

「お前こそ、色無しは依然のままか」

「努力はしたが、どうも真っ白なんだな」

軽快に話しをしても、銃口から音が止む事はない。だが、弾はトウマに届く手前で歪な音を立てて落ちる。誰がどう見ても、トウマの前に何かがある様にしか見えない。そしてその何かも見えない。

「・・・通らないな。まったく、ライフル弾でも貫けなかったら、ロケランじゃないと駄目か」

「ライフルの弾とトカレフの弾は違うけど」

「大して変わらん」

確かにどちらも車のドアぐらいなら、紙みたいに突き破れる。ラ
イフルじゃない拳銃のトカレフは、反動がハンパじゃない。玄人で
も射程は十メートル程が限度。

それをこの人は何の苦もなく使う、二丁も。身体強化をしてると
思うけど、銃を想造しないで使う人だから、最低限しか行使してな
いだろう。

「・・・最近運動不足で、なかなか厳しい」

「まだ二十代の癖に情けない」

「それを解消する奴らを取られたからな」

「客人と緋色の事か。妙に肩入れしているな。客人の方はあくまで
予想だが、死んだかもしれないぞ？」

「あいつらはそう簡単に死なないさ」

一瞬だけ微笑み、弾を防ぐ壁から見えないモノを投擲する。

「小癩だな」

参香の目には何が映っているのか。見えないモノが見えるかは知
らないが、普通なら事の顛末が起こった後で判るものだ。

「腐っても医者癖にメスを投げるとは、お前ホントに医者か？」

「闇医者兼工セ医者で。それよりニンジンさん、形まで判るのか。
ありえねえ」

正直自信がなくなる。見えない様に（無意識の内にそうなるのだ
が）しているのにも関わらず、見切られてばかり。流石、とだけ感
想を述べておこう。

「ただいまいまいかさん」

「解りづらいぞ、今帰」

援軍か、と思ったが違そうだ。もう満身創痍だし、やけに疲れている。一人だけだし。それに一度下げたのだ、再度呼ぶ訳もない。

「で、何をしてたんだ。単独行動にはそれなりに理由がある筈だが」
「・・・トウトウとやり合ってた」

「ほう、客人の奴、まだ生きてたか。しぶといな」

「図太いしぶと過ぎ」

耳は話しに傾けているが、目は切らない。トウマを見据えたまま、銃を構えている。少しでも目を切れれば、どうなるかを予想した上での行動。全てが範囲内。

「で、この地響きは客人の仕業か？」

「囚われてしまったので。見境なしの坂道続く」

「成る程。・・・トウマ」

一挙一動を見ていた参香の目が、トウマの双眸だけに注がれる。それだけで二人の間で意思が伝わる。同時に構えた腕を下ろし、今までの張り詰めた空気を換気する。

「客人はお前のものだ。ここが壊れる前にどうにかしろ」

「人使いが荒い」

愚痴を叩きながらも、拳動に澱みはない。参香の横を抜けていく。今帰は警戒して仕方がないが、参香は銃を既にホルスターに仕舞っている。そして何事もなく、静寂が降りる。

「今帰、いつまで呆けてる。行くぞ」

頭を小突かれ、警戒を解く。未だ判らないあの状況。考えても、答は出ない。ただ、あの時何かしていたら、消えてたのは自分の命だとは、容易に想像できた。

部屋は繋がりに、残骸だけが虚しく残る。少年は撃鉄を落とし続けるが、動くものも、モノもない。捌け口は見つからない。己を削り、精神を摩耗させ、捌け口を探す。

ミツケタ

30th「撃鉄」(後書き)

嗚呼、話の進行が遅い。リアルタイムではバレンタインが過ぎたというのに、物語はまだ秋に入ったかなってぐらい。来年、書き続けていくなら、バレンタインネタがやりたい。

ほのぼのなのに時事ネタがないなんて、カオスな話まっしぐらになっちゃおう。何とかせねば。

31st「今日の運勢」(前書き)

月を見上げ、何を見る。自分の姿が見える。いつも思う。月は鏡。
透き通る綺麗で恍惚な、全てを映す鏡。

31st「今日の運勢」

今日、私は運が良かったのだろうか、不運だろうか。それは、見解によって変わるだろう。

その階は、部屋という部屋が全て形を失っていた。床は獣でもいたのだろうか。抉れていて、所々が歪き変形している。

見通しは最高だが、騒音は酷い。大掛かりなりフォームと説明すれば、何と無くだが理解できる。しかし、そんな事がある筈もない。倒壊していない壁に寄り掛かる、白い髪の少女。右腕がない事と意識がない事には驚いたが、呼吸はしているのはほっとした。不規則で、顔は歪んでいるが生きてはいる。

少女の周りは怖い程手付かずだ。彼女を中心に半径5メートルより外に出ると、暴風の傷跡が凄い。意識的にやったかは知らないが、もしそうなら、まだ望みはある。音からして、暴風は停滞中でこの階にいるようだ。

幸か不幸か、ここに彼がいる事自体は幸運だが、この惨状を見ると会うのに抵抗がある。だけでも、「ヤバそうだわ」なんては言ってもらえない。竦む自分は黙殺して、安全ラインから外に出る。

音のする方に通路を一つ曲がれば、目的の人物はすぐにいた。自分に背を向けて、しかし、やっぱり抵抗があり過ぎる。彼はその視

界に何を映し、何を思っているのだろうか。声を張り上げ、力任せに槍を振り回している。

その姿は、いい印象を与える訳もない。狂気に駆られ、周りに当たるが発散できない。率直に言くと、今は手に負えない。見境なしに動くものは標的となる。

他に誰もいない。私と彼だけ。意識不明の少女もいるが、動くものは私だけ。

彼は振り向く。

そして当然、標的となるのも私だけ。

怒りの形相は、表情を変えてはくれない。

金縛りに掛かったのだろうか。頬を一筋、大粒の冷や汗が、一粒だけ流れる。その落ちた汗が、影を縛ったのか。体は動こうとしない。

「……………ア……………ア……………」

誰が零した声か。恐怖のあまりに漏らした私の声、という訳ではない。体は動かないが、感覚という感覚ははつきりしている。私ではないから、必然的にアズマが零した事になる。

それは歓喜の声か、苦しみに堪える声か。前者でない事を祈っても、他の要素でも変わらない。結局運がなかったのだろうか。

「アアアアアアアアアア！！」

低い声。獣の様な唸る声。本能のままに動いているのだ。感情に

素直になつてしまえば、やはり猛獣だろう。

動けない自分。迫る彼の姿。槍を持つ手が引かれ、跳ねる。そうして……

「……待つて、アズマ」

逃げた。

金縛りは背後に跳んだ所で解けた。動けるのだが、しかし、どうしよう。追いかけた方がいい。それはそうだけど、ファルも連れていくべきかしら。一人にはしておけないし、そんな事で迷つてる間に見失つてしまう。

「……えつと……dream out」

出した答は一緒に連れていく。アズマが見えなくなる前に、素早くファルを抱え後を追う。幸い、道なき道を強引に走って、砕けた石やら雑貨やらに足を取られながらで遅い。

とはいっても、迷つた分のロスタイムで、直ぐには追いつけない。だが、見失わない程度の距離は詰められそうだ。

背中に重りに乗せながら、階段を駆け上がる。どこに向かっているかは疑問には思わない。アズマはただ逃げているだけ。その証拠に目的もなく走り、同じ所を何度も過ぎていく。

角を右へ曲がり、次を左に。また左に曲がり、今度も左。正方形な部屋を縦に二つ横に三つずつ並んでいて、部屋と部屋の間通路がある。追いつめる事はできないが、窮鼠猫を噛むにはならなくてよかった。何だつて、追いつめられた時が一番怖い。

上に行く階段を素通りし、次の道を左へ。直ぐさま次を右に。しかし、先程から曲がる度に壁が削れる。手に持つ槍の表面積が広い事が首を締めている。

緋色にとっては嬉しい誤算。重りの所為で厳しいかと思つた追走劇は、角を曲がる程に差が縮まる。近づくのは容易い。だが、問題はその後だ。

・・・どうやって止めたらいいだろう。

手を掴む？

アズマは私だと知らない。不安を与えるだけだ

我に帰るまで追いかける？

いつまたこの人が来るかわからない。時間はないし、そうなたらもう止められない。

いつそ攻撃してみる？

それこそどう転ぶか不明。逆上してファルまで巻き込みかねない。

声をかけてみる？

聞こえる筈はない。「待つて、アズマ」と言って聞くだろうか。

囚われの感情に下手に手出しはできない。でも外側からの変化がなければ、我に帰る事もない。しかし当たって砕ける、はどうにも葛藤してしまう。

やるなら四つ目。やるだけやってみればいい。この中では一番危険が少ない。でも一番効果は期待できない。とりあえずやろう。

「・・・ふう・・・アズマ・・・ちょっと、待つて！」

反応なし。振り返りもしない。ピクリともしない。大声出したから体力減少。期待が薄かったただけ徒労とは感じないが、少しは反応を見せて欲しい。

早々と手の内が限られてくるこの状況。角を曲がり、また差が縮まる。「近づき過ぎかな」と思い減速。アズマとの距離は約10メートル程。その前後数メートルを歩き来している。

アズマの拳動を見逃さない為のこの距離。急ブレーキをかけて、襲ってくるかも知れない懸念。突然左右に曲がっても、対応できる様に、見逃す事はできない。

右に曲がり、真っ直ぐ進み、右に曲がる。下りの階段に差し掛かり、下へと降りる。上って降りて、何がしたいのかさっぱり予想がつかない。

たださ迷っているだけなら、時間を徒に浪費しているに過ぎない。アズマ自身の方が危険だ。肉体の強化はそれだけで危険が伴う。自分のできない事をやるのだ。限度を越えての行使はダメージが大きくなるのは当然。

緋色が早く止める事は、アズマの自爆を防ぐ事にも繋がる。止める方法を模索しながら、階段を駆け降り、見晴らしのいい、リフト中のフロアへと辿り着く。

「……………?…………アズマ?」

いない。確かにこの部屋に来た筈なのに。まさか、間違ったという訳はない。

少年の姿を捜そうとして、耳に瓦礫を踏む音が入る。危険を必要以上に感じる体。反射で動き、自分がいた場所に槍が突かれる。

鈍く、ゆっくり、槍を支えにして前を向く。まだ顔は強張っている。腰は曲がり、視界に入る見るからに痛々しい痣。そこに手を当て、掻き毟る。少しずつだが、怒りから解放されているのか。でも、まだ理性は戻らない。

槍を引き抜き、脱力。構えはしないが、確実に向きはこちら。どうやら本格的に標的をこちらに合わせてきたようだ。

さ迷っていた理由が少し、憶測だがわかった気がする。行き場のない怒りを、発散させる為に壁を破壊し、暴れていたのか。上の階に行ったのは、捌け口を捜す為。私の事は視界に入っていたが、あの時固まってたから、襲わなかったのだと思う。逃げてはなかったのか。そうしてまた、元の階に戻り動く標的を見つけた。

思い返せば、追いかけている間は振り向きもしなかった。後ろに目が付いている訳もないし、私は眼中に入っていなかったらしい。

こちらを向いている顔は冷や汗を促す。生唾を飲み込み、喉がなる。動いたらどうなるか。想像できる自分が嫌になる。

今度は動けないのではなく、意図して動かない。視線は切らず、上から下へ。策は考えたが、こうなってしまうとは意味がない。せいぜい隙を見つけるぐらいしかない。

背中の少女は起きない。起きても状況はよくなる。なら寝たままの方がいい。自分がどう行動するかで、最悪三人死ぬ。親しい人を殺した罪悪感でアズマは死ぬでしょう、なんて今日の運勢はみたいには言えない。しかし、有り得そうだから余計思いたくない。

地面に吸い込まれる異様な感覚。動いたら最後だというのに、圧力に負け、飲み込まれる体は意思とは別に傾く。

動いた。動いてしまった。動いてしまったからにはしょうがない。

体勢が傾くと同時に、アズマが槍を引き抜くと同時に、体は後ろへ跳ぶ。背中の中の重りを下ろし、自分はアズマを引き寄せる様に動く。他の視線を集める優雅な蝶か、蜘蛛の糸に引っ掛かる哀れな蝶かは知らない。何にしても、無残に落ちてしまっそうだ。

運よく、微動だにしないファルには目もくれない。そして運悪く、標的をこちら一つに合わせてきた。まず第一関門はクリアとしておこう。

関門なんて二までしかない。あとはひたすら、自分が死なない様にする。アズマの正気を取り戻すこと。

一対一の近距離戦で、矢を弓に番える暇は皆無。想造するのは矢だけ。羽のない、鏃のみの矢。左右の手に一本ずつ、手首のスナップをきかせ投擲していく。

親友に攻撃するなんて本当に心苦しいが、他に手段はない。言い訳はしたくない。仕方なくもない。割り切って、助ける事だけを考える。手綱役になると決めたのだ。ブレーキを踏んでやらなければ。そう、繋げるのは助ける為。それを前提にして、三人共死なせやしないし、死なない。

大分横に開け、瓦礫や散開する物をなしにすれば、開放的ではある。

横へ大きくスライドし、視界から消える。様々な物を踏み抜き、

どこにいるかを教える。反応して振り向く。横に振られる槍を屈んで躲す。長い髪はついていけず、槍に持っていかれる。

バク転し、着地して投擲。狙うのは足。アキレス腱でも切れれば、止められる筈。望みは他にもあるが、一人では無理な話だ。

一度に二本では、矢と矢の間に隙間があり過ぎる。間を抜けながら、距離を詰めてくる。投げずに突き出し、牽制してもやはり拙い。

「……くっ……ア、アズマ……」

小さな声。縋る様に懇願する様に声をかける。しかし、構わず槍は過ぎていき、髪は飛び、皮膚は裂けていく。

死ねない。死ぬ訳にはいかない。

その明確な意思だけが、親友に刃を向ける。更に投擲。二本じゃ足りない。コントロールが低下するが、本数を増やす。指と指の間に挟み、計四本。狙った所にはあまりいかない。

躲し、もしくは弾き、矢を掻い潜る。野性的な直感で避けるアズマには当たらない。

このままでは罅が開かない。この数じゃ足りない。射るならもつと数が必要。止めるなら些細な事は考えない。死なないと思えるのも信頼だ。

微妙なブレは大きく、下に集まる矢は、上にも飛んでいく。右手で四本、縦に、続く左手で四本、避ける道を塞ぐ。

弾ききれない矢は刺さり、朱い線がいくつもできる。しかしまだ、変化はない。傷口を押さえ、痛みに反応はするが、囚われた感情を解放するまでにはいかない。

「オ……オオオオオオオオオ！」

避けるのは無理と判断らしい。最低限な部分は守り、標的に突っ込む。顔以外はお構いなし。体に吸い込まれる矢は気にもしない。

その姿に胸が痛い。死なないと信じていた心に亀裂が入る。「死ぬかも知れない」という言葉が脳裏を埋める。

一瞬だけ立つ荒波。それが堤防を崩す。不安が流れ込み、浸透していく罪悪感が体を締め付ける。

大丈夫、アズマは死なないと信じてる。

血もあんなに流れて、連続しての戦闘。もう限界だ。

大丈夫、アズマは死なないと信じてる。

駄目だ。これ以上怪我をしたら死んでしまう。

大丈夫……じゃない、駄目だ。駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ。

「………駄目、できない」

信じる事ができなかった。死なない様にはできない。傷つくだけで、心は受け止められない。強がっても、嫌いな言い訳をしても、やはり折れた。

今日は厄日。親友を傷つけた最悪な日。助けると誓ったのにあっさり撤回し、これでもう二人消えてしまう。最悪な日、ホント。

「あっ………」

脱力した所為か、足が物に取られる。体は傾き、槍の一撃は横を過ぎる。

幸運か悪運か。何だっていい。もう終わり。ほんの数秒生き延びただけ。集中力は途切れたし、罪悪感で体は動かない。仰ぐ無表情なアズマは、私にのしかかり今にも槍を振り下ろしそうだ。

これで怒りの捌け口になればいい。私を殺して、アズマが生き続ける程強くないとは思うが、もう一人の手綱役に任せよう。

振り下ろされる槍。しかし、ゆっくり、赤信号前の車の様に、速度を落としていく。走馬灯とかでスローに見える訳ではない。視界は良好。鼻先で止まる。原因は不明。

我に帰ったのだろうか。いや、表情は無表情。やっぱりそれはない。では何で？。

足を退け、私から離れていく。アズマの顔は遠くを見ている。殺すには値しないのか、本能で止めたのか。どちらとも違う。

視線の先を追うとそこには人影がある。トウマ・・・ではなさそうだ。

「わお癖頭、まさか友人をレイプですかん。いい趣味してるん」

そこにいたのは一季だった。耳を疑いたくなる。そしてさっきの答は、私よりもより怒りを発散できる人物を見つけたから。私では役不足。悔しくはあるが、運よく来た一季のおかげで助かった。

「・・・お久しうって言うほど長くはないけど、そんだけ長くはかんじたかなん、緋色」

確かに長く、濃密な数日だった。それはそれで、今までどこにいたのか。聞きたい所ではあるが、無事でよかった。トウマ先生と一緒に潜入したのかしら。

状況は理解しているらしく、手には既にナイフが握られている。

「……さて……癖頭、仕方ないから捌け口になってやるよん」

再会に感慨する暇もなく、片方は止める為に、もう片方は出所のない感情を発散させる為に、足場の悪いこのフロアを駆ける。

「たっはーん、マジだなこりゃあん。言った手前、少々困難だなん」

動き始めた相手に標的を合わせる。少しは何度も戦闘して、疲れや動きに鈍さが出るかと期待しても駄目だった。変わらずギアはトッポ。獣の様な動きはそのまま。

「……言っとくけど緋色、止められんのお前だけだぞん」

「……どうしてよ」

「俺は見ての通り手一杯だからなん」

リーチの短いナイフでやり合うなんて、無謀もいいところ。それでも捌き、対等にやっている。でもそれだけ。均衡はそのまま。押される事も押す事もない。

「……ごめん、無理だわ。動けない」

「……あっそうですか……」

そう動けない。例え動けたとしても、今の状態じゃ攻撃できない。

軽く罪悪感に囚われ。体は重く、地面に張り付けされた感じ。私だけかかる重力が大きい。

「・・・そうかい、癩頭を傷つけた事が悪いと思ってるのかん？」

「・・・そうよ。どんな言い訳にしろ傷つけてしまった、これは私にとっては悪いと思えるわ」

「今から俺はアズマを傷つける。それも悪い事かん？言い訳はアズマを殺したくないから、にしておこうかなん」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

言葉が詰まる。一季は悪くないと言えば、自分を囚えるこれが説明できない。逆に悪いと言えば、一季は傷つけず、アズマは救えない。

「そうよ、悪い。・・・だから悪い事をしてでもアズマは止めるわ」

震える手足。身体強化と矢の複数想造によるフィードバック。かなりの抵抗だが、立てない事はない。

「オツケーよん。大丈夫、どんな外傷でも、不意だけど例の回復力で治るさん」

「ホント不本意だわ。・・・一射が限度よ」

「・・・当てるわ。仕込みは終えてるもの」

まだ続いている dream out の余波みたいなモノで弓を想造。しかし、手は震えている。普通ならそんな状態で、精密射撃ができるとは思えない。

できないならするまで。できない事をできる事にするのが dre

am out。でも、それだつて難しい。運に頼るつて訳もない。頼るのは世界を騙すありふれた証拠。

「……………フィックス……………」

詠を紡ぐ。

「この矢は必中を約束する。私は構え、ただ射るのみ。射法七節。足踏み、胴造り、弓構え、打起こし、引分け、会、離れ。残心は不要」

腰を落とし、詠の通りに体を動かす。滑らかで、無駄がない。

「繋がるは一本の線。千の距離を捩曲げ一とする」

「つしゃあ！行くぞん」

最後の一音節を前に、仕上げにかかる。保った均衡をわざと崩し、アズマの槍で身を削る。変わりに体を掴まえ、壁へと押し込む。

「いいぞー、緋色ー！！」

「ストライク（必矢）」

手から離れた矢は、音もなく飛ぶ。アズマに吸い込まれ、左の脇腹に刺さり壁に縫い止める。しかし、一季には当たっていない。そして最後。一季が想造したナイフを二本。それで矢を抜こうとする両手を、壁ごと突き刺す。

「……………お見事ん」

刺さった所に見える青みがかつた線。アズマが切つた緋色の髪の毛

毛だ。そして矢も青みがかっている。アズマに絡まる髪が発信機みたいなもの。それに反応して、髪でできた矢が追いかけただけ。

「ふー、終わりかん」

「………まだよ」

足を取られながらアズマに近づく。急いでいる様だが、そうは見えない。

「………まだ………かい」

流石に笑えない。まだ終わりじゃない。怒りが収まる事はない。これで痛い、と感じなかつたら本当に殺すしかなさそうになる。

力が入る手。流れる朱。広がる手の穴。見てる方が痛い。想像しなくても痛い。ナイフが手を貫通するのではなく、手をナイフに貫かせてみたいだ。もう、あと一息すれば手は自由になる。

「ガアアアアアア!!」

「………アズマ………」

飛び出す瞬間、緋色がアズマを抱き寄せる。一季は口を開けて、「何い」とか言ってる。心なしかアズマも少し落ち着いて見える。

「大丈夫、みんな助かったわ。私も一季もファルもみんな、アズマのおかげで助かったわ」

アズマが憤激していた理由。助けられない自分の不甲斐なさがそう。その証拠に動かない人には手を掛けなかった。発端はファルではない。ファルと重なる江湮だろう。

何もできないから悔しい。何もできないから自分に腹が立つ。今回、ファルが死ななかつたのはアズマのおかげ。アズマは助けたのだ、と聞かせればいい。

「……………ああ……………よかった」

体を縛る鎖は切れた。囚われていた身は、自滅を止める。それを確認し、二人は行使を終える。アズマを縫い止めていた矢とナイフが消える。一季は自前のナイフはしまい、緋色は抱えたまま腰を下ろす。

「……………体中……………いてえ」

当たり前だ。あれだけ戦闘して、これだけ傷をつくつたのだ。これで元気なら何者だろうか。

助けるものは全て助けたこの結末。結果にはどうとも言えるが、運がよかつただけは言える。

32nd「社会見学終了」(前書き)

十人十色とは人が集まれば響きはいい。しかし、色が集まると混ざり合い、できる色は黒、混沌、カオスでしかない。人も、誰か一人色が濃いと黒にしかならない。

32nd 「社会見学終了」

「痛む所はある、アズマ？」

「痛む所はたくさん。痛まない所を探す方が難しい」

幾つも戦闘があつたこの階。いつまでもここには入れない。アズマにつけた悪行の証が見えなくなつたら、直ぐに離れなければ。

でも、ファルはまだ眠っているし、自分もまだフラフラする。もう少しぐらい休んでもいいだろうか。

「・・・緋色はトウマに助けられたんだな」

「・・・そうよ。それがどうかしたの？」

「いや・・・助けに行けなくて、済まなかった」

「・・・馬鹿ね」

やれやれ、といった感じで、一季が溜息を吐く。彼も既に治療済み。乗り込む際、いろいろと準備し、トウマからも受け持ったそう
だ。

だから食料もあり、水もある。社会のど真ん中だというのに、まるでサバイバルだ。獣はいないけどケモノと人が出る。

「・・・一季は大丈夫か？」

「それなりにねん」

「・・・そうか・・・」

「……ほら、そんな顔すんなよん。これは馬鹿を助けた名誉の負傷ねん。あゝ……いてえ」

とかいってマジで痛そうな顔をするのは止めて欲しい。心配をかけたくないのか、心配して欲しいのかわからない。

そんな事だから無理にでも自分のケツを叩きたくなる。

「……さて、ここを離れるか……な」

言うは容易く、実行するのは言葉以上に意思があれば、難しくもない。筋肉が緩まず、伸びきったままでも、立とうとすれば立てるし、歩ける。

それが第二者や第三者から、どう見られるかは別として。大方予想はつく。自分がどれだけロボット歩きで、笑える絵だかは。

「……ふー……そうね。行きましようか」

気を遣うアズマに呆れながら、緋色は荷物を纏める。リュックを背負い、ファルを抱え上げ、アズマについて行く。

「一季、行くわよ」

土を掃い、しかし団体行動に加わるうとしない。何やら落ち着いた顔をしている。緋色は直ぐに振り向けるが、アズマは一苦労どころか、結構な労力だ。

「……一季……？」

「……無理……手遅れだよん」

四人が向かおうとしていた、上へ続く階段。そこから多数の足音が漏れ出す。歩く速度は亀よりも遅い為、それ程不安の音源に近くはない。

これからの事を考えるなら、時間が少し早まったぐらいだ。不安や恐怖に終わりを告げるのは早い方がいい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ん？」

せつかくの臨戦体勢も先頭をきる人物にぶち壊しにされる。喜んでいいのか、がっかりしていいのかわからない状況。

「・・・・・・・・・・トウマ先生」

「・・・・・・・・・・どうやら片はついたみたいだな」

緋色の声を見無視し、アズマの顔を見る。一季は「オーマイガー」と大袈裟に言うが、当然無視。心配しているのは、いや訂正。興味があるのはアズマだけ。

「・・・・・・・・つ、トウマ先生、助けに来たんですか、それとも捕まったんですか！？どっちですか！」

「んー・・・・・・・・どっちも半分にして足せば正解だな。何にしても俺はアズマを止めるってだけが目的だ。アズマが停止したなら、俺は捕まった馬鹿だ」

心配でも興味でもない。生き残る為には、これしかないから。アズマを止めない、と言えばもう役は回らず、ここには来なかった。自分の為に、アズマを利用したに過ぎない。

「……俺達をどうするつもりだ」「さあ……そこはニンジンさんに聞け」

タバコを吹かし、脇へと退ける。脇役は影へ。主役の邪魔をしてはいけない。この場を支配する人は、トウマではなく参香である。そしてアズマ達はただの噛ませ犬。本気でかかれれば何の事はない。社会の弱者。底辺に位置している。

「……存外しぶといな客人。一人……増えたようだが、性格は悪そうだ」

随分本質を見抜いている。ここで同意をすると、一季から何が飛ぶかわからないから、胸中だけで思う。

「客人、緋色、性悪。お前達はこれからどうする？」
「……性悪って、酷いな……」

いつもの口調で言葉が終わる前に、撃鉄が落ちる。既視感のある状況。しかし、一季を狙う鉛弾はナイフに弾かれる。アズマみたいに、ただ呆然とはしていない。

「……危ないなん」
「……ふん、話は戻すがどうしたい」

一季と参香のやり取りの間に、緋色がいる所まで下がる。緊迫した顔。一季がこの場に似合わない発言をするから浮つく。いや、一季だけじゃない。

俺も少しふきそうになった。冗談だともう思えない。ここからは弱気になってはいけない。

「……………返事は？」

下手には動けない。戦力外は二人。戦闘を始めれば、負けは確実に、素直に、意思を伝えればいいが通じるか。

「……………この組織に……………下る気はないわ」

「……………ファルはどうする」

「……………もちろん、渡すつもりはない」

生唾を飲み込み、返答を待つ。考えられるのが否、というかこれしかない。何故こんな話をするのだから。

「……………だそうだとウマ」

「まあ、そんなもんだ。いい社会勉強さ」

向こうだけの話。秘密の暗号ではないが、理解できないなら結局暗号でしかない。いい社会勉強。我が儘は通じない、とでも言いたいのか。

「客人、緋色、性悪。お前達全員解放だ」

「……………」

「……………」

「……………」

無言。何か言った気がする。もう一度聞きたいが、また鉛弾が飛びそう。だから記憶に残る一字一句全てを復唱して、漸く理解する。

「……………おいトウマ、何か間違った事言ったか？」

「言っていない」

「・・・反応が薄いな。不安になる」

拳句、そっちが不安になるか。

「・・・とりあえず、ここから出ていいのかん」

「そうだ」

「だってさん、癖頭、緋色。出してもらえるなら出よん」

「目隠しはしてもらうがな」

当たり障りのない返事をして、対応に乏しい頭が順応していく。そう一季みたいに、簡単に信用できないアズマと緋色。当たり前といえは当たり前。何か裏があると勘繰ってしまう。

どうゆう風の吹き回しか知らない。しかし、気が変わる前にさっさと動いた方がいいか。

三人共目隠しをされ、視界は黒に。手は自由で、例の超音波はない。ファルも緋色の背中にいるとの事だ。特に何も無い。あれこれ予想する方が阿呆。せつかくの好意を不意にする方が馬鹿。

幾つか階段を上り、金属が擦れ合う音がする。外の匂い。少し肌寒い。今日の気温は低いようだ。

「車に乗れ」

トウマの声。少し前なら全面的ではないにしろ、信頼できたのだが、今は「仕方がないから従ってやる」みたいな心境。

「・・・緋色、ファルをかせ」

「・・・何するつもりだ」

「尖るなよ、王子様。応急処置だよ。破傷風になっちまうからな」

揺れる車の中でそんな事ができるのか。疑問に思うが、（仮にも）
医者がそう言うのだ。ファルの為を思うなら、黙る他なさそうだ。

車上では何事も無い。話しをする事もなく、トウマの処置と車の
エンジン音があるだけ。車の中にいるのが、自分の他に、緋色、一
季、ファル、トウマしか判らない。

参香はいるのだろうか。いたとしても、何を喋る訳でもないし、
やっぱりいなくてもいい。一季も何も話さない。もっと何か情報を
聞き出すのかと思ったがしない。

不安は募らない。かといって嬉しくもない。家に帰れる、という
実感は湧かない。暗闇が晴れたらどうなるか。疲労がそれを晴らす
事はない。

眠い。眠ってもいいだろうか。一季も寝てるかも知れないから、
静かなのか。順応が早いのは俺かも。ふてぶてしい奴だ、と思われ
る。それは確実。

でも寝るなら、家がいい。家に帰ったら寝てしまおう。そう家に
帰れるのだ。実感してくると嬉しくなる。早く家に着かないだろう
か。

・・・心なしか頬が痛い。何かに叩かれてる。止めるよ。
まだ寝てたい。

何、起きろ？しょうがない、起きるとするか。

「アズ！」

「・・・んあ・・・ファル・・・？」

不機嫌そうな顔でアズマを覗く。それがどうアズマに映るか、と
りあえず起きてるな、とは思う。

「・・・ここは・・・？」

「東雲、病院」

会話を交わす毎に鮮明になる頭。もう少し、はっきりしていれば
跳び上がれるのだが、残留する眠気と体を縛る筋肉痛が、動かして
はくれない。

「・・・つ・・・緋色と・・・一季は？」

「隣、部屋」

起き上がるのに苦勞をし、一步踏み出すのにも苦勞をする。そん
な姿を見て、肩をかすファル。それはいいのだが、身長差があり過
ぎる。若干無理に近い。

「・・・あれ？ファル、右腕はどうした？」

別にファルの右腕がない事を不思議がってる訳ではない。目の前
でなくなっただ事はわかる。それを指摘しているのではなく・・・

「東雲、義手」

処置のついでかは知らないが、結局あっち側なのはどうしてここまで恩を売るのが。面倒見のよろしい奴。

「アズマ……」

「……癖頭め、お目覚めかん」

二人共何事も無い。少し不機嫌そうに見えるが、それだけ。二人がいるのだし、話を始める雰囲気にもなった。というか話さないといけない。

「……ここって東雲病院でいいんだよな」

「そうよ。江湮ちゃんもいるわ」

「……そうか……帰ってきたんだな」

うんと遠出した気がして、ここが知っている場所だと分かると安堵してやまない。羽を伸ばせる場所とは偉大かな。

「……結局あそこってどこなんだろうな」

「んー……車でだいたい一時間つてとこかなん」

「意外にそんな所か。異世界みたいな感じがしたけど、ちゃんと日本だよかった」

やれやれとした感じで頷く。ファルに支えてもらいながら、しかし不本意。どっちが重傷だか判らない。

「……ところで今何時？」

「午後の……二時くらいかなん。まったく、ぐーすか寝やがってん」

「何時間ぐらい寝てた？」

「車の中も合わせるると三時間程かなん。トウマと参香が呆れてたな
ん」

「参香もいたんだ」

「ふてぶてしい奴だ、だつてさん。呆れてたよん」

仕方ないだろ。どのくらいあそこで神経を擦り減らしたと思つて
る。寝る事は不可抗力。生理的欲求。

「・・・トウマは？」

「いないわ」

「・・・あ・・・そ」

当然と言えば当然。いないとは予想できたけど、どこか寂しい・
のだろうか。あんな奴、とまで評価は下がったけど・・・。

「・・・」

「・・・そういえばトウマから手紙、預かってるわよ」

ポケットからその手紙を取り出し、見せてみる。手紙は各自ポケ
ットにあるらしく、ファルにまであるようだ。読めば文面は消えて
しまつらしい、想造された手紙。だから注意して読むようにだそ
うだ。

全部で四枚プラス一枚。個人用と全員用がある。とりあえず、先
ずは個人の分を読むとしよう。

「・・・音読するか？」

「しない方がいいわ。ずけずけ書いてあるから」

「成る程」

自分についているポケットの中を探し、ズボンの右ポケから発見。深呼吸をし、意気込んで手紙を黙読し始める。

『王子様へ』

まず江湮について話そう。江湮は知人の病院に旨は伝えてある。信じるか信じないかは別として、組織とは関係はない。帰る際に、地図を手掛かりに入院させてもらえ。

お前はしっかりと、消失したモノを取り戻せよ。言われなくてもか思ったり、余計なお世話とか思うかも知れないが、多分、最後の助言かも知れないからな。

感づいてると思うが、俺はあの組織に元いた身だからな。調度いい機会だから戻った。やらないといけない事があつたからついでにやとく。お前がやりたい事もついでだ。かなしみを取り戻すついでに江湮を助ける。

鈍だからな王子様。気づくか素通りするか、見物みものだったが最後まで見れないのは残念だ。ファルはどうするかな？セフ……『うつせえ馬鹿！！……いや何でもない』

忠告された通りだ。手紙に向かって罵倒するなどあほらしい。口にして恥ずかしくなった。

萎縮して再び文面に目を通す。そしてこれも忠告通りだ。手紙に隙間なく書かれていたが、上部に大きく空白ができています。

しっかりと噛み締めると暗示している気がする。これじゃ信じるなど言われても、信じたい気持ちになる。

仕方ない。信じてやる。

『結果は知るとつまらないからな。どうしても、何だって選べばいい。それと、今度会う事になったら遠慮する必要はない。馬鹿だからな、手え出せないなんて事にはなんな。こっちはガンガン攻撃すつから。ほんじゃさいならだ。』

「・・・・・・・・・・」

あの時社会勉強とか言ってたか。どうゆう意味だかは知らない。他人に手加減なしに手を出せる様にしろ。自分はそのトレーニング台、とでも言ってるのか。

暗示されている言葉を探ってばかり。ここまで考えさせるって事は、あちら側にばれたくはないらしい。その逆、とも考えられるが、信じてやると決めたのだ。他の杞憂は見て見ぬ振り。

今度会う時は覚悟してろ、トウマ

アズマが惰眠を貪り、元人様の診療所で心地よく、夢を見ない眠りについている頃。出発したビルとは違う場所へと辿り着く。乗員は六人から四人減り二人に。男性一人と女性が一人である。

男性は無精髭を生やし、いかにもなだらし無さを服に着ている。皺の目立つ服を被り、タバコを銜えている。しかし、そのタバコが

らは鼻に障る煙は漂わない。主原料はニコチンではなく、人体に無害な水。煙は水蒸気の体に優しいタバコ。

女性は鋭い雰囲気が漂う。彼女が羽織るワインレッドのジャケットが、それを相乗し引き立てる。腰の部分には凡その人では気づかない、物が鎮座している。それだけで普通の人は怯え、正常な動作はできなくなる。

二人の関係といえば、それを目の前でちらつかせても、口を揃えて「馬鹿か」と言い、首を傾げる仲。恐らく、戦車が目の前に現れても、目を輝かせるぐらいしかしないだろう。

「・・・だんだんと冬が来るか・・・」

「あつと言つ間に過ぎる程、短く感じるだろうさ」

「そこまで暇はなくなるのか？」

「呼吸をするのが暇なるさ」

「・・・運動不足は解消できそうだ」

溜息混じりに、肺に貯めた水蒸気を吐き出す。

「・・・シヤについてまだ悩んでいるのか？」

「もう終わった・・・って言ってもバレバレか」

「そう思われたくないなら、多少はその髭を剃れ」

短い顎髭を触り、今度は肺に煙を貯める。

「・・・ニンジンさんがいれば、会話不足はなくなりそうだ」

参香の返答は蹴り。予想してトウマは躲す。少し笑っている顔と少し不機嫌な顔。からかう側とからかわれた側。懐かしさが重なっ

ていく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・くく」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふっ」

漏れる笑い声。だけど何だか気まずくて、直ぐに表情を戻す。

「そんなにあいつらが大事だったか？」

「そう・・・かな。必需品って程ではないけど、ないと不安」

「そんな訳ないだろう。ないと困る、なければならぬ奴らだ」

「・・・・・・・・参った」と口にして、後悔が微かに見える。銜えていたタバコを握り潰し、火が消える。

「大事なんだろ。偽善になってまで助けたんだから」

「・・・・・・・・社会勉強」

「・・・今回だけだからな。今度会う時は、こっちだってできるだけ被害は被りたい。最悪・・・そうだな。しぶといんだっけな」

いい加減寒く、中に入る事を促す。入口でノックを四回し、何かを呟く。

「トウマも社会勉強しろよ」

「・・・・・・・・手加減なしで攻撃できるかな」

自分がアズマ達に、容赦なしに攻撃する姿を思い浮かべる。思い浮かべても、ありえない、と割り切る。自分がアズマ達に攻撃する事も、アズマ達が自分に攻撃する事も。

願わくば、アズマ達が少し人で無しになる事を願おう。

32nd「社会見学終了」(後書き)

活動報告にあんな事を書いた矢先に、早速投稿するのは如何なるのか。いや、でも筆が進んだからしょうがない様な、言葉に力がな
い様な。

でもいつまでも落ち込んでほられない。そうだ、元気を出せ。く
よくよすんな、ってなもんで今回で一応区切りが来ました。

タイミングがいいのか、少しは明るい話が展開しそうです。っと
いうか、このご時世そうしたい。

33rd 「変化なし」あり（前書き）

普通とは何なのだろうか。特に目立つ所もなく、特別に埋もれる存在なのか。だとしたら、特別が溢れている世の中で、普通とは最も特別な存在なのだろうか。

33rd「変化なし あり」

日々は目まぐるしく変化はしない。若干擦れた日課は、元の形へと、擦れたのが馬鹿らしい程、修正した。

アズマが見る夢は、いつも通り。悪夢であるし、知りたい内容である。江湮の所には毎週土日に見舞いに行き、ある程度の日常を過ごす。

ファルは右腕が義手になっても、変わりはない。アズマの後を、座敷童の様に、影の様に後を着いていく。学校では相変わらず人気者。話題に立つのは何故かアズマである。

緋色と一季とのお茶会も、屋上で行われている。からかわれ、日々を奔走し、毎日に暇はない。冷静に、生活に目を向けると、日常にも結構精神を擦り減らす。

今のところ変わった事はない。一つだけ挙げるとすれば、夜の住人になるのはなくなった。といっても一時的である。理由としては確実なのが一つ。反論が複数あっても、その一つで封殺される。

その決定的な一が、全員に宛てられたトウマの手紙である。この手紙は特殊、というか普通の手紙。ずけずけ書かれていなく、読んでも消えない。これこそが、ザ・手紙といえる。

内容はどうでもいい事から、重大な事まで。それが今回、夜に出向かないのに繋がる。

「来月だっけ？解禁されんの」

「手紙誰持ってたんのかん？」

「一季・・・だったわ確か」

「イチ」

舌打ちして、弁当を口に運ぶ。行儀が悪い、と窘める訳もない。少しぐらい羽目を外す方が、雰囲気的には軽い。

場所は屋上。時間は昼時。暦は秋の半ば。もうじき冬が顔を見せる。夏の暑さがが恋しくなるくらい、寒い日がたまにある。

購買部という戦場とは無関係な場所。一度弁当を作り忘れて購買部（戦場）に赴いたが、あれは見れば見る程カオスなのか判る。

授業終了と共に会戦。武器（財布）を持ち、死出の行列（先頭グループ）に乗り遅れた者達）を創作していく。自分はその末端。パンの姿を拝む事すら叶わない。たった一度の教訓で、過ちは繰り返さないと誓うほどに、あそこは地獄だった。

そうした戦争には参加しないが、厨房もまた戦場。喜ぶ人がいれば激化する。

「うまうま」

ファルが毎回こうして食べるから、仕方ないなあ、ってな事になる。単純、いい気になるな馬鹿、と緋色は思っている。それをひしひしと感じてるが、緋色も日増しに美味くなる弁当をつついてるか

ら、文句は言えない。

今日の献立は、鶏の唐揚げ、ハムとキャベツのマヨネーズ和え、芋の煮転がし。おまけに魔法瓶に入れた味噌汁である。

最近では緋色と一季が作れ、と迫るものだから、月一か月二で、しかも祝日という条件で外で食べる。材料費は向こう持ち。日替わりメニュー。反論は黙殺。全て暗黙の了解。

「…………お…………発見…………」

緋色は丁寧に割り箸を袋に戻し、アズマは箱に無造作に入れる。それを真似してか、ファルも同じくする。一季は割り箸をへし折り、中に入れる。こうして、広げた弁当に收拾をつけ、本日の昼の幕を下ろす。余った時間で、今後の動向について話を展開する。

「…………ん…………組織が去るのは今月の下旬。つまり秋のど真ん中。その後の動向は不明。サイクル的にも何も知らないから、日々気をつける。とりあえず、十月下旬までは外出すんな、だってさん」

そんな訳で、何もしない夜は暇になる。こう依然過ごしていた日常から離れて、しかも騒々しい日常から、穏やかな日常なのだ。何かツケが来そうだ。

はっきり言って、夜に何もしないとは、自分の首を絞める結果になる。それがツケになりそうで怖い。何故かは、時間が経過していく程に、消失した感情とそれを取り込んだイーターとの癒着が進むからだ。

それは、接着剤のように。最初の頃は抵抗も少なく、軽くあしら

えはまだ大丈夫。が、時間が経てば抵抗も大きく、本腰を入れないといけなくなる。

しかし、瞬間接着剤ではない。癒着が始まって、直ぐに結合する事はない。モノとモノが合わさるにはじつくり、時間をかける必要がある。それらが完璧に結合する前に、その繋ぎ目を切り離してやればいい。

中には上等の瞬間接着剤になる奴もある。相性やらが合う、と表現すればいいか。前にトウマが話していた。

そういえば、いつ頃トウマと知り合ってただろうか。想造はできたけど、消失したモノが判らなくて、それで・・・

一番古い記憶を掘り起こしてみても、あるのは体を包む虚さだけ。これがトウマかな、とのっぺら坊に定めても自信がない。本当に、一番最初に会ったのはいつ頃か。

「・・・アズマ？」

「・・・？・・・どうかしたか？」

「いや・・・もう昼休み終わるわよ」

「ああ・・・」

曖昧に返事をするアズマ。それに疑問を浮かべる緋色。あわてて、質問されない様に、「さっさと行こうぜ」と促す。

何て言ったらいいか判らないからだ。困惑して、心配やらをかけたしまう。トウマといつ知り合った、なんて、会った時期はばらばら。当てにはならない。

嵩張る弁当を邪魔にならない程度に、足元に置く。残り少ない秋

の日に当たり、反射していた弁当箱が、不意に影で隠れる。
ファルは隣にいる。緋色が一季か、どちらか来たのかと思い、見
上げるとどちらでもない。

「随分大きな弁当箱だね」

「……まあ……ね」

当たり前な感想を口にした人物を、記憶から探り出してみる。

推定身長170後半。体重は70ぐらいだろうか。細身な割に、
そんな事を感じさせない体つきである。

髪は長めで、一般的な色をした黒髪。特徴的な所がなく、その所
為か記憶に当て嵌まらない。

「……もしかして、覚えてない？」

「失礼極まりないけど、最初に謝っておく。ごめん、どちらさま？」

言つて、机の中から授業の準備をする。その後、改めて顔を確認
するが、何やら難しい顔をしている。

「……あなたもファルに何か用あんの？」

だいたいの用はファルにあり、それはアズマを通してファルに伝
わる。ファルが全部、アズマについて話を繋げてしまうから。野郎
の話をしてもつまらないから、不本意ながらアズマに聞かせて、情
報を得ている。

目の前の人物も、そういう奴だと思つたが、何だか違そつだ。

「いや、用があるのは東広なんだけど」

「・・・・・・・・俺？」

下の名前で呼ぶ人は、まず周りにはいない。その珍しさに、何だか疑問を覚える。

「・・・・・・・・俺の名前知ってるって事は、緋色か一季の友達？」

「違っよ。東広の友達」

随分一方的な友人関係だと思う。俺は覚えてないのに、向こうは俺の事を知っている。そして、友達だと口にする。何だか奇妙な感覚だ。

「・・・・・・・・昔、会った事あるか？」

「あるよ。・・・昔、東広が引越す前に・・・ね」

動いていた手が止まる。引越す、という言葉に何かを感じ振り返る。しかし、話し相手はいない。耳にあるのは、授業開始五分前の合図。視界の中には、背を向けて去っていく黒髪の彼。

変に胸騒ぎする胸中を抑え、鮮明にならない記憶にダイブする。引越した覚えは微妙。ホロウな記憶に、そのうえ劣化している。困難より、更に不可能である。

午後の授業は覚えてない。注意された気もするが、そんな罪悪感

は、疑問の中に取り込まれてなくなってしまう。

「アズ、何かした？」

「………んー……緋色にちよつとな」

本日の授業終了と同時に、部活に行く緋色を探す。本当は、あの彼を探したいが、名前も知らないし、顔もうる覚え。向こうの予定もあるだろうし、あの彼はまた今度にしておこう。

まず、外堀から、疑問を埋める事にしよう。

「緋色、ちよつといいか？」

「え……何？」

弓という目印がある緋色は、直ぐに見つかった。この際、緋色が驚く事は無視をしよう。

「……俺と緋色が初めて会ったのっていつだったけ？」

「昔の事をつて……ごめん」

「……謝んなくていい。こっちから聞いたんだし」

「でも……アズマからそんな話するの始めてだから、避けてるのかなって思ってた」

それはそうだ。思い出すだけで不快に思う。それを好き好んで話題に出しはしない。

「すまん、やっぱいいや」

「………大丈夫？」

「ああ」

テキストに返事をし、緋色と別れる。アズマの席の隣で待つファルに直接は向かわず、一階の自販機で炭酸を二つ買う。ファルは知識はあるが、日常には疎い。自販機を見た時も「何、これ」と聞いていた。

頭を抱える出来事ではあったが、プラスに考えるといい経験である。今のところのお気に入りは、炭酸のジュースだ。子供らしく、なかなかはにかんでしまう。

「ファル」

放課後も意味もなく教室に残る人は、何がしたいのかと疑問に思う。ただ何かを期待するなら、自分で行動すべきだ。果報は寝て待て、とあるが、それは最低限行動した人の話だ。何もしないで、何かを待つなど、そんなうまい話はない。そんな事ある筈もない。

暇持て余し野郎共の中から、少女の名前を呼ぶ。帰る支度をし、トコトコと擬音がつくぐらいの、小さな歩幅で歩く。

端から見れば、どう見えるかは知らない。恋仲の様に見えるのかも知れない。そう見えるから、自分には嫉妬の目が、死ねばいいのにといい呪詛が聞こえてくるのだろう。

実際にはどうだろう。そいつらに事実を話しても意味がない。どこぞの三流笑い話に終わるのが目に見えている。

二人乗りは危険、というのも、試しにやると難しいものだからだ。慣れない人はすぐに転んでしまう。だから後ろに乗る人は、手持ち無沙汰ではいけない。重心があっちこっちへ傾くのを防ぐのが、後ろの人の役目である。

「シユワシユワ」

その役目を完璧に熟しながら、貰ったジューズで喉を潤す。腰を掛けた状態で、アズマの背中に肩を預けている。それでもアズマに苦を感じさせない。一人で漕ぐ様に、自転車はスムーズに前へ進む。

「・・・おっと、ファル出てくれ」「了解」

不意に震える携帯。ポケットからそれを取り出し、ファルに手渡す。二人乗りで携帯なんて、白と黒の簡素な作りなくせに、やる事は遠慮のない公務員に一発で職務質問だ。滅多に見る事はないが。

「アズ、緋色」

「緋色が。用件何か聞いてくれ」
「了解」

今の時間だと部活中な筈だが、さてはて、急ぎの用だろうか。と
いつかサボリだな。怠慢はよくないぞ、緋色。癖になるから。

「そっくりそのまま返してやる！」

「はあ！？、わっ・・・と」

いきなりファルの口から、そんな言葉が出るとは思わなかった。
いきなりなんなんだ。

「緋色、伝言。心の声、聞こえた、言ってる」

「・・・あっそう」

読心術だ。しかも携帯越しだし、出てる相手が違う。卓越し過ぎ

てる。

「……で、用件はなんだ」

「……今夜、寄る、だって」

「あいよ。晚饭は？」

「……アズ、家」

「一季は？」

「……謎」

リョーカイとだけ言い、自転車を加速させる。若干バランスが崩れたが、すぐに立て直す。

冷蔵庫の中に二人分はあるが、四人分はない。さつさと家に帰って、買い物に出掛けなくては。運が悪いと出会ってしまう。

「遅かったわね」

時刻は六時を過ぎ、六が終わるまで、あと四分の一。秋ともなれば、その時間帯だと日は落ちてきている。そして部活もとくに終わっている。

要するに、家の前で乾されていた緋色は不機嫌そうだ。

「はぁ……っ……不可抗力だ」

そう不可抗力である。買い物に出掛けたはいいが、守備範囲の広い公務員に捕まり、ありがたいご指導。運も悪かったのもあるが、それはどうとも言えない。

それに、日が沈むのを、闇が下りる時間が早まったのを測り間違えたのはミスった。いきなり二対複数の鬼ごっこはやばかった。弛んでるな、最近。

「自業自得よ」

「……ちょ……待った。……こ……呼吸を……」

「早く中入りましょう」

「……」

容赦ない。自業自得と言われたら何も言えないし、外にいるのもなんだ。さっさと中に入ろう。

「ただいま」

「おじやまします」

二人に比べてグロッキーなアズマ。ソファーに横になり、大きく息を吐く。満身創痍と顔に書かれている様に見えるが、それは気のせい。自業自得と只今反省とは見える。

「……そういや……一季は？」

「わからないわ」

素っ気ない会話。ただ一季の性格が解る上での会話だから、一口に素っ気ないとは言えない。どうせ、寄り道か何かをしているだろう、というのが二人の考えである。

「お腹、空いた」

カーペットの上で転がりながら要求するファル。ソファから器用に体を起こし、厭そうにファルと目を合わせる。

「……もうちょい……待ってもらっていいか」

「むー」

「かー」

呆れた笑いしか生まないコント。ファルもこの家に馴染み、不満を言う様になった。遠慮がなく我が儘もある。だが、それが普通。黙っているより、我が儘を言ってる方が嬉しさを感じる。

「……仕方ないわね。台所借りるわよ」

「それは悪いから」

「いいわよべつに、押しかけたのこっちだし」

「でもなー」

「ただ、何作るかわからないし、舌が肥えてるファルを満足させられるかは微妙よ」

「む」

「批判は受けてもいいけど、責任は全部アズマにあるから」
「かかかかか」

どこと無く先が読める所為か、ファルの目が怖い。期待の目で緋色を見つめるが、期待に沿えないとどんな目で、どこに向くか。

「わかった。作るよ、俺が作る」

「なら、下拵えだけは手伝うわ」

「手伝う」

「いや・・・ファルは待っててくれ」
「めー」

「なんで手伝わせてあげないの」
「あー・・・実は斯く斯く然々」

料理になると戦闘力ゼロのファルは、手伝う事もできない。否、手伝わせたくない。以前、手伝うと言って包丁を持たせたが、殺人的な包丁捌きだった。

饒舌になったり、英語が流暢になる訳ではないが、力任せに、豪快に振るう為、食材は細切れ、包丁は根本から折れ、危うく流れ弾で俺を殺すところだった。

結局、その日の夕食はローストビーフが色物のハンバーグになった。

「ちゃんと教えなさいよ」

「そのつもりだよ」

冷蔵庫から必要な物を取り出し、戦場に立つ。

「ではいつもの様に。ファルも準備して」

「おー」

「殺す気が、殺す気なのか!？」

「自業自得。途中で崩れてもいいからやる」

「きー」

声がトーンダウンして、渋々従う。目を瞑り、大きく、静かに、深呼吸を一つ。自分の心音が頭に響く程、己の世界をつくる。

「dream out」

呟いて目を開く。エプロンから俎板、包丁を想造。キャベツを置き、千切りを始める。

「まだ甘いわね」

「ノウンも微妙だし」

「今のコンディションでも最低一時間はキープね」

「やっぱり死ぬ」

「・・・ファルを手本にしなさい」

テーブルに箸をならべ、皿を抱えて待っている。まさかな、ご飯が出来て、食べ終わるまでそのままにいるのだろうか。

「冗談きつい。俺はキープするのは苦手。短期決戦が望ましいが、必殺の一撃も作戦もない。だから長期戦なのだが、それだと勝率は下がる。だからこうして日常で一秒でも長く、キープができる様にしてるが、目を見張る結果はない。」

「・・・ちよつと貸して」

「ああ」

緋色の想造した包丁と自分のを交換する。他人が想造したモノは、何故か重量を感じ、手に重さを伝える。

「・・・切れ味はいいわね。イメージは強いわ」

「なんでだろうな？」

「・・・物をイメージする時、線がしっかりしてるからだと思うわ。ただこれも武器になる。少なくとも、滅多な事じゃブレイクされな
いわ」

「ふーん」

強固なイメージの塊。無にして有の存在。虚像が他人を傷つける事もないのに、実像として他人を傷つける。矛盾の実体は人をも殺める。

「まあいいや。キープもきつくなってきたし、早めに終わらせようぜ」

「じゃあ、残りはご飯後ね」
「やっぱり殺す気なんだな」

悪態をついてから、キャベツを箆に移し、想造物を全て消失させる。神経を縛る行為が終わり、えもいわれぬモノから解放される。暑い日に厚着をして、何時間後にそれらを全部脱いだような開放感。言葉にはできないが、そんな感じである。

「・・・それにしても、一季遅いな」

キャベツの千切りを終え、海老の処理をしながら緋色に話し掛ける。

「確かに遅いわね」

処理した海老に小麦粉、卵、パン粉を付け、皿に乗せる。

「ファルは知らないか？」

「知らない」

「だよな」

一季の探索は諦め、せめて来る前にご飯の支度を終わらせておく。

「あん？」

ファルに預けたままだった携帯が音を響かせる。人付き合いが少ないの人に掛ける人は少ない。しかし、逆を言えば特定の人物しか掛けてこない。となれば、一季からの電話である確率が高い。

数秒間鳴る携帯をファルから受け取る。やはり、と言ってもいい。ディスプレイに表示されるのは想像していた人物だ。

「どうした、一季？今日は用事があって来れないのか？」

『……………』

「……………一季？」

『すまん、フライングしたっぽいなん』

「何言ってるんだ？」

『助けが欲しいよ』

会話を運ばない携帯。エコーする電子音。それよりも早く、鐘を打ち鳴らす心臓。生唾を飲み込み、漸く体は動きだす。

「緋色、晩飯中止！ファルはサーチを頼む！一季に何かあった！！」

顔色が変わる二人。ファルが形作っていたモノは消え、手に顕れる黒と白の追走劇。

「一季のは確か」

昼に食べた弁当箱が目に入る。

「この中の多分これだ」

箱の中から箸を取り出す。使用後に袋に入れるのは緋色。そのままにするのが、俺とファル。折るのが一季な筈。

折れた箸を渡し、サーチにかける。探索している間に待つ時間が異様に長く感じる。今すぐ飛び出したいのを堪え、淡い光が方向を指し示すのを待つ。

光は収縮し、方向を指し示す。およそ南東の方角。距離はわからないが、そこに一季がいる。

意識が切り替わる。感覚が尖り、久々の胸中に何故か苦しい。怖くも感じるが、見ない振りをする。

貯まったツケは今日払われる。一気ではない分割払い。それがたまたま今日だけ。果報は待っていられない。待って貯まるのは、不安と不幸だ。

33rd「変化なし あり」(後書き)

お久しぶりの投稿。果たして何ヶ月振りでしょうか、ですが怖いので数えません。

さて、今話はほのぼの、あーあこんな日もいいなあ、としようとしたのに、いつの間にか暴走してしまいました。まあ結果オーライで事で、占めようと思います。

34th「日常を感じる」(前書き)

背中に立たれるとぞくりとする感覚。良くない気配。胸騒ぎからくる前兆。それは全て、危険視した本能からくる恐怖。それを持つて、危険から、恐怖から回避する。

なかつたらどうなるだろうか。危険を危険と思わず、恐怖を恐怖と思わない。どんな出来事にも、スムーズに対応できるが、それで生きていけるとは思えない。

34th「日常を感じる」

side | Kaduki

体から暖かさを奪い始める大気。着々と冬は足音を立てて、派手に近づいている。まだ、耐えられない程ではないが、風が吹くと一瞬体が縮こまる。

「ぬはーん。遅くなっちゃったん」

自転車で、逃げる様に猛スピードで走る。逃げる様に、と言っても比喩ではない。実際に、普通では見えないモノに追われている。前方は自転車のライトで照らされ、ワンダーは襲ってこないが、スピードを緩めると不本意な傷がつく。交通違反もこの際目を瞑らなければ、血を垂れ流して走る事になる。

何故こうゆう状況になったかと言えば、どうもこうもない。単なる寄り道、ゲーセンに寄った帰りである。楽しい事はあつという間で、最近弛んでいた所為もあり、帰る機会を逸してしまった訳である。

100%自業自得で、それでも自分が悪いとは認めない。自分を引き寄せたゲーセンが悪い、と責任転嫁する。

「腹減ったなーん。晩飯何だろかなつ、とん」

後ろから感覚がざわめく気配。軽く体重移動をして躲す。一瞬、視界の端に映る虚無なモノ。直線的な欲望は、大して大きな動作はまらない。単調な動きにはこれで十分。なのだが

「で……!？」

いきなり浮遊感に抱かれ、砕かれた地面と共に、宙を浮かぶ。

「な、なん」

疑問を感じ、上を見上げたのが幸運か。自分を狙う何かが見えた。自転車を捨てて、電柱の下に立つ。数コンマ前までそこにあつた自転車はスクラップに。それが自分ではない事に、思わずほっとした。い。

「……かあ……良くない事は仲間が多くて困るなん」

が、ほっとできる状況だとは、断じて認めたくない。漆黒な背景に、更に黒塗りの存在がそこにはある。弓を携えたヒト型のモノ、つまり感情を喰らったモノがそこにいる。

「……ん……そうかい。なんで引き寄せるかわかったけど……おい、お門違いだよん。確かにあんたの宿主とは近いが、僕自身じゃないぜん」

人間としての意思疎通。それがニンゲンに通じるだろうか。いや、それはない。だから、無駄としかこれは言えない。

「ち、すっかり怠けたなん。無駄話しちまったぜん」

更に矢が飛んで来る。虚無が放つモノもまた虚無であり、それは明暗が鮮明に分かれている。躲す事にわけではないが、このままだと人目が気になる。となれば、自分から危険地帯へと足を踏み入れなければならぬ。

危険とは恐怖を感じる場所。自分で線引きするべきだが、この男は平気で踏み込む。そんなのは無縁であるからしょうがない。

スクラップのカゴから鞆を抱え、一言、言葉を紡ぐ。

「dream out」

そして跳躍。力を込めていない跳躍は、軽く、足音も立てずに屋根へと下りる。

「……さてなん……僕にとっては不運だが、緋色にとっては幸運かなん」

鞆の中を探り、携帯、それとナイフを取り出す。鞆を捨て、革でできたホルダーを外し、交戦の意を示す。

「多勢に無勢だから、ちょっと仲間を呼ばせてもらうぜん」

携帯を開き、見ずに操作する。少しでも目を切れば、眉間に飛んでくるのは確実。意識を向けておかないと、反らした意識を的確に突いてくる。

「……………」

コールする事数回、増援を願う人物と繋がる。

『どうした、一季？今日は用事があって来れないのか？』

「……………」

『……一季？』

「すまん、フライングしたっばいなん」

『何言ってるんだ？』

「助けが欲しいよ」

「

数秒間の会話。強制的にそれは遮られる。意識を少し携帯に向けただけで、眉間を貫こうとする一撃。一瞬しか反応できず、反射的に避けるが間に合わず、手元の携帯から、明らかにおかしなモノが生えている。

「自転車に続いて携帯までかん。請求しちゃうぜん」

差を詰めようと、姿勢を低く、極力、足音を消して近づく。だが、相手は長距離戦。近づかせるなどという愚行はしない。

「……………」

足を狙う数本の攻撃。目を凝らせば見えない事もないが、足を止めるには十分。その間にイーターは、近づいた分の距離を離れる。

「げえー、相性悪いなん」

ナイフは超近距離戦専門。近づき、最低限の力で急所を切り裂く。喉、目、眉間、顎、脇の下、鳩尾。どれかを突けば、致命傷は与えられる。

それに対して相手は弓。技量があれば、離れていても当たらないなんて事はない。自転車をストックにしたり、携帯を貫いたり、技量は確認済み。おおよそ、その場に留まっていたら百発百中だろう。

「……どうしたものかなん」

今夜は月が見えない。幸運に縋りたいが、幸運は孤高にして孤独。単発な存在だから、群れる場所は好まない。

とりあえずは、勘を取り戻す為にいくらか時間をかけた方がいい。想造したナイフを、飛び掛かるワンダーに投げ、脳天を貫く。その間に狙撃されるが、蔓延るヤツらを盾にして防ぐ。

「まだまだ鈍ってんなん」

足首を回し、軽く柔軟。まだ波にのらない体に不満を感じながら、イーターに迫る。先程通り、後退し距離をとるが、このまま有利な場所へ運ぶのも一つの手だ。

地理の記憶と今いる場所を交錯させ、誘導させる。屋根の上を飛び抜け、イーターが距離を開けるより早く、距離を詰める。

ただそれだけしかしない。想造したナイフを投げて牽制もしない。すぐに傷は塞がり、腕を切り落としても、数分で生えるだろう。傷つけられるのは、本人だけである。

このままなら、ワンダーとかの横槍もないだろうなん

跳びながら、矢を番え放つ。それに対応し、想造したナイフを投げ付け、軌道を逸らす。これ以上無駄だと（そんな思考があるかわからないが）思ったか、弓を構えず、そのまま投げ付け始める。

「・・・やっぱ、おんなじなんだなん」

独り言を零し、向かってくる矢に目を向ける。数は全部で五本。空中での回避は厳しい。いつも想造するナイフより小さい、手の平サイズのモノを同じく五本、いつぺんに投擲し相殺する。

筈だったか、一本擦れ違い、そのまま右肩に吸い込まれる。

「あたっ・・・！」

バランスが崩れ、そのまま落下。こわいとは感じないが、やばいと思う。調度公園、蛍光灯に照らされた広場に落ちたのは幸運である。やはり群れるのは嫌いみたいだ。そして孤高と呼べるものだから、これ以上のラッキーは望めない。

「トウマめ、すっかり鈍っちまったよん」

素早く起き上がり、矢を抜こうとするが、それより先に矢を番えるヤツの姿が状況の悪さを伝える。

「ちっ」

手元から矢が離れるのと同時に、手元のナイフを放し、投げる姿勢の間で想造し迎撃する。

「げーん」

そのまま明後日の方向に飛ぶかと思われた矢は、ナイフに弾かれたにも関わらず、生き物の様に孤を描き、こちらへ向かう。

「ストライクかよ！」

直ぐさま足元の獲物を蹴り上げ、手に戻す。吸い込まれる矢を上方に弾くが、そんな事に意味はない。対象に刺さらない限り、この矢は止まらない。

「こんな厄介なもんだつたとは思わなかったよん、緋色」

引き寄せる元凶を抜こうとするが、その間に貫かれてしまう。そうすればまた、ストライクを放たれ翳られ続けてしまう。

ストライクを放っている時は、意識をそれに集中させなければいけない事は知っている。追撃がないのは、まだチェックメイトではない。が、今はチェックと言ったところ。打破する一手を考えなければ詰みだ。

仕方ないかなん

息を吸い込み、片目だけを閉じる。諦めた訳ではなく、以降の行いに集中する為である。

「フィックス」

小さく呟き、体を傾け、迫る矢を躲す。

「彼のものはきえ失せ、身は消失し、何物、もの、モノにも捕われ

ない。はやく、早く、速く、足は動く。反応は遠く、一瞬で目から
きえ去る」

迫る矢が一本のみでは止める事はできない。もう一度、悪あがき
で来るが、当たる事はない。

「モア・ライトニング（雷より速く）」

宙を飛び回っていた矢は、急に行き先をなくす。宙には浮いてい
るのだが、どこにも向かおうとしない。対象だった人物は消え、ど
こにもいなくなったからだ。ただ隠れただけなら、矢は隠れた方に
向かう筈だが、それも無い。文字通り消えたのだ。

「見えないだろん、イーター。これをやると、誰にも反応されない
限り、尾行にはうってつけなんだよなん」

また無駄話。懲りもせず話すが、やはりイーターは無反応。言葉
に反応する訳無く、辺りを見渡している。

「いくら探してもいないよん。なんせ、きえてるんだからん」

声は響き、足音も響いている。砂を踏む音も、地面を踏む音もあ
るのだが、その音源を確かめる事はできない。足と地面が触れる音
が聞こえても、そこには砂埃が舞っているだけ。残像、及び影すら
見えない。

「実はめっちゃきついんだぜん、これ。これだけで何日かは動けな
いだなん。だからあと三秒ぐらいが限界だん」

一秒。イーターの周りで砂埃が立つ。

二秒。空気を切り裂く音がする。

三秒。足跡は離れ、影が見え始める。

「反応できたかん？」

声がして、気配に気づいたイーターがこちらに振り向く瞬間、両腕が落ち、右足は膝から下が擦れ、体が半分から切れる。

一季はというと、腰を下ろし、呼吸を激しく行っている。ほうほうの体で、軽く過呼吸を起こしているだろう。

普通なら死んでいる状態。イーターだから生きている様なもの。しかし、一気にこれほどの傷は負わせられない。幾度も、ナイフを通さなければいけないが、それだと反応されてしまう。だから、反応されない事に意味がある。

相手の視覚、聴覚、触覚にとられない事で、この能力は成り立っている。今回はイーターが相手だから喋っていたが、人が相手だと喋る事もできない。聴覚を刺激するからだ。

反応されたら解除され、いままで反応できなかったものが、全て雪崩込む。この場合、両腕と右足、半身を落とされた事が、一季を反応する事で雪崩込んだ。

ただ、神経の伝達スピード、つまり、電気より早く、動かなくてはいけない為、使えば体はポロポロ。筋肉痛で数日は、日常生活すら厳しくなる。

「……っ……ああ……痛えん」

喘ぎ、咳込む姿は、まともに呼吸ができない魚を思わせる。必死で呼吸を整え様としても駄目。楽な体勢はなく、立っていても、座っただけでも、筋肉は痙攣を絶えずしている。

「お前も・・・そんだけ・・・傷負えば・・・数分は・・・そんなもんだろん」

芋虫状態のヤツは、ピクリともしない。見れば、切られた虚無の肉体が消え始め、一番大きな肉塊から、何かが生え出している。

「・・・さて・・・早く・・・来てくれよん・・・アズマ・・・じゃない・・・と・・・死ぬぜ」

信頼に賭けをして、ゆっくり横になる。右肩には、まだ矢が生えたままである。抜く力は残っていないし、今は全てが億劫。だから、今度は億劫の所為にするだろう。

「・・・ぐっ・・・な・・・」

右肩、更にもう一本、何かが生える。視線を痛みの向きに、何が生えたかを視認する。

「まだ・・・あつたのかん」

先程まで宙を放浪していたストライクが、新たに右肩に生えたモノの正体だった。やっぱり鈍った、とは思わずにはいられない、致命的ミス。これ以上は何もないだろうが、数分後は知らない。

死んでるか、博打に勝つか。

死への恐怖はないが、痛いのは嫌い。とりあえず、分岐点に差し掛かるまで寝ておく事にした。希望は賭けが勝つ事だ。死にたくはないので。

「・・・おい、大丈夫か、一季？」

「イチ」

覚悟を決めた意味がない。まあ、賭けに勝つただけしておこう。

「しつかりしろよ、まだ飯食ってないだろ」

「遅いよん、癖頭・・・とファル・・・危うく・・・寝るところだったけどん・・・ご飯が食べたいなん」

アズマに縦にされ、頬を叩かれるが、一季の焦点は虚。精魂使い果たした感じた。慎重に、二人に両肩を担がれ、移動を始める。

「緋色は？」

「イーターの方」

耳を澄ませば、咳く声が聞こえる。どうやら、揚げ足取りをやられたみたいだ。わかっていた事だが徒労だ。

「私は貴方の宿主。貴方が取り込んだのは、歓楽。今、私の元に再び戻る」

ヒトの形を成していたイーターは、形を崩し、粒子になり、緋色へと吸い込まれていく。

同時に、肩を貫いていた矢は消え、締め付ける痛みから解放される。

「お疲れさーん」

「遅かったわね、一季」

「まあなん。・・・それより・・・携帯と自転車、請求するからなん」

「なんで？」

「緋色のイーターに破壊されたからなん。しっかり責任とるようになん」

「・・・はあ。私が悪いのかしら」

一季が緋色のイーターを瀕死にまで追い詰め、緋色は楽に回収できたのだ。本来、全部自分でやらなければいけないのだから、感謝しなければならぬ。それを考えれば、携帯の修理代と自転車の代金は安いものだ。

「・・・言いたい事はあるけど、まずは帰りましょう」

帰りは早く、手を取り跳ぶ。若干遠く、道中危険は多いが、これ以上最悪にならない為には仕方ないだろう。自業自得、というやつだ。本当に仕方ない。

side | Azuma

数時間かけて、アズマ宅に到着。そして、夕食を囲んでいる。ただ、海老をそのままにしてほっといたから、身はぱさぱさで、とてもじゃないが美味しくない。

「この海老フライ・・・マジなん」

「一季が悪いわ」

「イチ、悪い」

非難の雨を受け、機嫌が悪そうな一季。せつかくイーターを瀕死にさせたが、宿主は緋色。徒勞で、怪我だけしか負っていない。せつかく帰っても、美味しくないご飯。不満も言いたくなる、だろうとアズマは思っているから、ある程度は言い返さない。

「エビチリとか、海老の土瓶蒸しとかないのかん」

「今度な。それに食わせてもらってるのに、文句はあんま言つなほら、あーん」

「この赤ん坊プレイ・・・屈辱的だよん」

dream out によるフィードバックで、箸も持てないくらい疲弊している。そんな訳で、一季は美味しくないご飯と共に、屈辱を味わっている。

俺と緋色には記憶としては新しい。やられてわかるが、一季の言うようにかなり屈辱的である。だからという訳ではないが、いつもからかわれている仕返しとして、笑ってしまうのは仕方ない。

「・・・なんかむかつくなん」

「俺も緋色もやられたからな。一季だけやられないのは不公平だ。だからこの屈辱さを味わえ」

強引にばさばさの海老フライを口に押し込み、渋い顔にさせる。それで渋い顔になっていたのは一季だけではなかった。

「・・・余計な事、思い出させないでくれる？」

緋色もだった。作り笑いだが、どこか渋い。あの日の生活が、どれだけ記憶の奥に仕舞いたいかわかる。

「・・・緋色もやるか？なかなか爽快だぞ」

だから引き出された時に、悪いイメージじゃなくすればいい。

「いきなり何を言い出す癡頭！」

「やるわ」

「そこおー、ノルなー!!！」

「自分が悪いのよ、一季」

「今度の夜道に気をつけるよん。何かなくなってるんぜん」

「はい、口開けて」

緋色も心なしに笑っている様にも見える。断片的に歓楽を取り戻せて、少しは楽しめるといいのだが。

「アズ」

「ん？」

「あーん」

「あ？」

ファルが口を開くようジェスチャーしていたので、何となく口を開いてみる。

「はい」

「ん・・・んん」

突然、ぱさぱさの海老フライが口に入る。何故かこう、美味しくないのに、不思議な美味さを感じる。

「屈辱的？」

「いや・・・そつでもないけど」

「僕、やって」

「・・・は？」

「僕、やられた事、ない」

「ああ・・・うん」

何の意図があるか解らず、ただあげてみる。興味本位で、どんなものか知りたいなら、経験としていいだろう。

「・・・あんま嬉しいもんでもないだろ」

「でもない。嬉しい」

「そうかあ？」

俺もファルにやられて、屈辱的ではなかったにしても、何だかむず痒かった。恥ずかしいというか、何と云うか、一言にすると意味不明。

「ワーオ、カンセツキスダナン癡頭！」

「ぶっ」

何だ今のカタカナ発音。明らかに周りに知らせたい様にしか聞こえない。ていうか緋色に伝えたい意図しか感じられない。さっきの仕返しか、この野郎。

「アズマ」

「・・・はい、なんでしょう？」

「あーん」

「あれ、一季は？」

「あーん」

何これ？怖い。なんか知らないけど、凄く怖い。何がしたいんだ
緋色。その笑っていない顔で、何を伝えたいんだ。

「あ……あーん」

「えい」

言葉はかわいらしいけど、実際感じたのは苦痛だった。海老フ
ライを喉の奥に差し込まれ、殺意を持ってやられた気がする。

「げほ……な、なんだよ……緋色……痛いじゃんか」

「それじゃ、お返しに私にもやっていいわよ」

「何それ？」

「はい」

目を瞑り、小さく口を開ける。お返しだこんにゃろ、とはできな
くて、憚れてしまう。どうしようもないので、とりあえずやるしか
ない。

「ん……おいし」

「そうか？上手くできなかったんだけどな」

「そういうわけじゃなくて」

「わけわからん」

緋色の考えが解らない。一体何がしたいのやら。それにだんだん
收拾がつかなくなってきた。これ以上続けると、ファルにとっても
俺らにとっても楽しいが、悪ノリしてやばくなる。

楽しい夕食もここで終わり。この後は、上がり過ぎた熱を下げる為に、慎重しく過ごす。空気読め、と言われた時には、ただ苦笑いするしかなかった。

今後、この出来事が楽しい思い出として思い出した時、今感じているより強く思うだろう。非日常の夜に身をおくまであと数日。できれば、その日が過ぎてもこうして笑いあえる事を望もう。

35th Holiday (前書き)

煩わしい日々も、暇のない日々も、日常としては最高のものである。何もしない一日程、つまらないものはない。

35th [Holiday]

週末。それは大多数が喜ぶ週の終わり。五日間の疲れを凡そ一日で癒し、もう一日で意識を切り替える。

今日はその一日目である。

shortly talk from Azuma

秋本番。紅葉と淡い光の午前の世界。夏と比べると涼しく、たまに寒い。その空気の中を歩く、二つの人影がある。

一つは癖っ毛のある頭で、しかし、本人はこのぐらいの癖っ毛ならあと百万人はいるだろう、と考えている。見た目はおおよそいい方。知っている人は知っている。家事全般は出来て、一家に一人は欲しい存在だと。

もう一つは純白のロングヘアが印象の少女。遠目から見ていると、その分白が際立って見える。美女というにはまだ幼く、美少女というならびっぴりであるう。

そんな二人は気まぐれで外に出ている訳ではない。確固たる目的があり、今はその場所に向かっていている最中である。

「あれ、何？」

「ん？・・・ああ、未練がましいアイス屋かな」

見れば車を改造した移動式のアイス屋が、けだるそうに店を構えている。特別暑い日と特別寒い日に食べたくなるものだが、暑くもなく寒くもない日だと買う人も少ない。

「食べたい」

「・・・駄目」

「どうして」

「食べるとファル、昼飯食えなくなるだろ。だから駄目」

「まー」

不満を口にするファルをおいて先に行く。一人になりたくなくて、未練がましくアイス屋を見つめたあとアズマの後ろにつく。

以前、緋色がそんな姿を見て、保護者みたいだと言っていた。我が儘を適度に受け流し、常識を持たせている。親と子供の様な関係だとも。見た目的にはぎりぎりいいが、実年齢だと完璧アウトである。なにせ、同い年であるから。

それから数分。目的の場所に着く。依然、ファルの顔は仏頂面でどこか不機嫌である。見兼ねた訳ではないが、適度にガス抜きしないとぐれてしまうのが怖い。

「・・・飲み物ぐらいなら買ってやるから。何がいい」

途端に顔が急変する。すっかりご機嫌。機嫌のグラフが急降下から急上昇。起伏が激しい。

現金なようだが、これであしらえるなら、まだ最悪の事態にはならないだろう。というか、なんだかだんだん江湮に似てきている。こうなると、自分の所為になってきて、江湮は両親ではなく俺の影響を受けている事になる。それだと第二の江湮ができてしまう。あんなませガキ一人で十分だ。

脳内で断固たる決意を固めた後、病院の玄関を潜る。目的は言うまでもなく見舞いである。眠っている少女、水谷江湮の見舞い。

初めてファルを連れてきた時、ファルに全てを話した。ファインダーになった切っ掛けでもあるし、決意の顛れでもあるし、自責の存在でもある事を全て話した。その全てを聞いた上で、ファルは泣いた。泣けない自分の分まで涙を流した。

江湮にファルはもう紹介してある。その時こそ不思議がっていたファルだが、当たり前だろう。眠っている、意識が沈んでいる人に話しかけているのだから。聞こえないとは思うが、しかし、無駄だとは思わない。無駄だとは思わないから、今日も声をかけている。

「よ、江湮」

「おはよう、エリ」

今ではファルも江湮に声をかけている。返事はないが、それでも会話を絶やささない。

「・・・ファル、ここの自販機で好きなの買っていいぞ」

手の平に五百円を渡し、先程の事が嘘ではない事を証明する。

「アズ、何いい?」

「何でもいいぞ。文句は言わないから」

「はい」

ファルを送り、少し静かになる病室。ただ、約束を守る為にファルを送った訳ではない。少し江湮と話したかったからだ。特にファルに聞かれて困る事でもないが、その方が変に恥ずかしがらずに済む。

「ファルさ、だんだんお前に似てきたんだよ。お前がそんな性格になったのって俺の所為なのか?」

軽く笑い、江湮の顔を見る。目を瞑っている顔。その顔が、そうだよと言った気がした。気がただけで、実際に返事はない。でも、気がただけでもいい様に思える。

「まったく、ファルまでお前みたいになったら大変だな。二人もいない。一人で十分だよ」

髪をそつと撫でる。仄かに暖かい体。規則的にしている呼吸。変わらない。意識がない事以外は変わらない。江湮は江湮のままである。今にも目を開けそうなくらい、江湮は元気である。

「アズ、ただいま」

「おう、おかえり」

江湮に触れていた手を離す。手に残る暖かさは、今の季節の様なじれったい暖かさではない。命の暖かさと言うべきだろうか、どこ

か暖かい。

「アズ」

「ん、ありがとな」

「どういたしまして」

受け取った飲み物はコーラである。相変わらず炭酸が好きなのだが、確かに病み付きになる。

「江湮、炭酸好き？」

「確かな」

「江湮、アズ好き」

「・・・多分な」

これは本当に多分だと思う。というかそうであって欲しい。別にうつつしい訳ではない。来られていい気分ではないが、苦にならない程にそれが当たり前だった。だからこそ、江湮には本当に好きな人ができて欲しい。そんな父や母を愛する様な感覚のままではないといけない。

「・・・ファルも好きな人を捜せよ。きつといいやつがいる筈だ」

これじゃ、まるつきり父親だなと思わずにはいられない。大きくなったらお父さんと結婚する、という娘がいる様な感じた。十七歳でこんな事を思うなんて、思いもしなかった。

「僕、アズ、好き」

「・・・多分違う感覚で好きになる人がいるよ」

「わかんない」

「俺もわかんね」

頭を搔いて脳内を刺激してみる。果たして今言った様な感覚に自分になつたかどうか。友好はあつても愛はない。親愛はあつてもラブではない。自分にはそんな感覚はなさそうだ。

「……………帰るか。昼にはバイトがあるし」
「うん」

やはり江湮とファルは似ている。側にいてくれるだけで、こつして元気づけてくれる。でもやっぱり、江湮とファルは違うな。

s h o r t l y t a l k | f r o m H i r o

足踏み、胴造り、弓構え、打起こし、引分け、会。止まった様な、流れる動作。一連の動きにそれら全てが入っている。

離れ。

矢は音を立て、的へと飛ぶ。

残心。

的に当たるまでの姿勢を崩さない。的に当たり、漸く張り詰めた緊張を解く。

「お見事ん」

ゆっくり視線を動かすと、半袖長ズボンの陸上マンがいる。今ここにいるという事はサボりだろう。

「怒られるわよ」

「心配ご無よん。今日はフリーだ」

時に陸上の練習で、フリーというものが存在するらしい。各々自由に、自分の好きに「練習」していいそうだ。決して「サボり」ではない。

「行使しちやえば簡単に当たりそうだなん」

「私はそんなズルしないの」

「もしそんな人がいたらん」

「実力で屈服させるわ」

放たれた矢は、的の中心を貫く。

「一季も行使したら、いくらでも速く走れるでしょ」

「残念。自前の足で走らないと、実感がないのでん」

「もしそんな人がいたら？」

「・・・実力じゃ勝てないから、走る前に何かしてみようかなん」

「具体的には？」

「武力行使」

それしかないだろう。だいたいスポーツまでに行使する輩は、どこか誤解している。本来これは与えられた力ではない。罪の証なのだ。それを大々に公開するなど狂気の沙汰。誰にも知られない様にするのが、ファインダーとしての義務な気がする。

「体は大丈夫なの？」

「ん・・・まあまあ悪いなん。今朝学校来るのも厳しかったよん」
「無理し過ぎね」

先日の行使でまだ体は怠い様だ。あの日はトウマが何かしらして直ぐに復帰できたみたいだが、もう頼るべき人物はいない。あんな性格でも、私たちを導いたり、アドバイスしたり、助けてくれたのだ。捻くれている程、そうゆうのが濃く見えるのだろうか。

「トウマはどうなったと思う？」

「・・・まだ周りに人がいるぜん」

「・・・それもそうね。まだ部活中だし、怠けると癖になるわ」

空気を裂く音。走るよりも断絶速い矢が弓道場を横切る。

「雑念」

僅かに的を外れる。雑念がそうさせたかも知れないが、自分の所為だ。100%中たる訳もない。もしそうゆう人がいるなら、疑ってみてもいい。罪を背負っている人がどうかを。

「今日はどうするのかなん？」

「招福にでも行くわ。お腹空いたし」

「真意はなんだろうかねん」

「・・・どうゆう意味？」

「例えば癖」

矢が的を外れる。小気味よい音を立てて停止。だが、今回は外れてよかったかも知れない。

「あばばばばば」

一季の頭上、多分いくらか髪の毛を持っていった。それ程ぎりぎりなところを射抜いている。

「殺す気かん」

「大丈夫。100%中たらないわ」

「どさくさに紛れて行使しやがったなん！」

文字通り間一髪である。一步どころではなく、半歩ぐらい間違えば朱いものが流れている。

「あー・・・なんか髪の毛を数本失ったん」

「それで済んでよかったわね」

「借金取り立てに来ましたん」

「いきなり話しを替えない」

「自転車自転車自転車携帯自転車携帯自転車携帯携帯」

「うっとうしいわね。払うわよ」

「体でん？」

「ハゲになりたい？」

「ジヨウダンデスヨン」

一季に向かって弓を構える。それだけで周りの人がどう反応するか。そんな事は一季だから、で納得される。悲しいポジションだ。

「・・・バイトして返すわよ」

「どこでん？」

「招福で」

口にしたとたん、かつはーと意味不明の言葉と行動を繰り返し、

弓道場を混乱させる。これではまったく意味がない。

「何か・・・あつたの、緋色さん？」

「すいません、ちよっと病んでるんです」

心配して話しかけてくれるのは嬉しい。しかし、そうしか言えない。いきなり騒いでおかしな踊りをし始めたら、何のフォーローもできない。それになんか目眩がしてきた。

「・・・それで一季は昼、どうするの？」

「んー・・・あー・・・僕も行こうかなん」

「じゃ、部活終わったらね」

「オッケーン」

綺麗な姿勢から放たれる綺麗な射。矢は綺麗な音を立てて的の真ん中に中たる。

shortly talk | view again

熱を上げていく鉄。下は朱く、鉄本来の色からは遠い。対して上はまだ保っている。煮えたぎる、下から沸き上がる感情の奔流を、皮一枚でその全てを抑えている。その防壁も、外からの圧力を加えてしまえば、保つ事は難しい。

「いらつしゃいませー!」

なんて事を考えてみたりする。

我ながらお茶目だな、と考えながら、お好み焼きを作る。頃合いを見て返し、水分が適度に飛んだかを判断して、ソースをかける。

「できました」

今日もまた忙しい。でも、日常にいれる実感だからほっとする。

「いらっしやい・・・ませ」

「・・・何よ？来ちゃ駄目なの」

「いやあ・・・なかなか恥ずかしいもんだぜ、知り合いが来ると」

愚痴りつつも、「客」を席へと誘導。注文をきく。

「ナンニイタシマシヨウ」

「ねこさーん、接客代えてくれないん？」

「すまんね一季君。家は絶賛人手不足でね。態度が悪いのはサービ
スしてよ」

確かに人は少ない。自分が来る前は一人で切り盛りしていたと言
ったり、そこまで客が来なかつたりと真相は不明。しかし、テキパ
キと仕事を熟す動きには貫禄がある。果たして何年この店を営んで
いるのだろう。

「だってさ緋色。バイトできるよん」

「バイト？」

「あついやその、こないだ一季の自転車と携帯壊したから、どうや
って買い替えようかなって」

「ならここでやったら？」

「ここは一つの候補よ。他も一応探してるわ」
「素直じゃないなん」

いきなりグーパーンチが一季へと飛ぶ。ぐへ、とか言ったが、またなんか失言でもしたのだろう、と納得。改めて話を戻す。

「ここも結構いいと思うけどな」

「まあ、別にここでもいいんだけど・・・アズマは私がここでやった方が嬉しい？」

「そりゃあな。作る係が俺とねこさん。サポートがファルだけじゃ、ちよつと心配だからな」

「・・・じゃあ、私も心配だからここでやろうかな」

「オツケー。ねこさん、一人バイト希望です」

内心でよっしゃー、と自分らしくない程に叫んだ事をアズマは知らない。

「バイト？オツケーだよ緋色ちゃん」

ちゃんという言葉にまたも一季が反応する。確かにちゃんと呼ばれる事があまりないので新鮮味がある。案外可愛いものである。

「なによ」

「いやべつに」

耳を尖らせる緋色。咎められたので、しっかりと自分の仕事をやらなくては何されるかわからない。

「とりあえず詳しい事はご飯食べたらね」

「わかりました」

緋色とねこさんが話している間に、一季が頼んでおいた料理はできています。あとは食べるだけだ。

「いただきます」

「はいよ、遠慮なくどうぞ」

複数人で食べるご飯はおいしい。冷めた感じもなければ、ぼそぼそした感じもない。何故かご飯はおいしくなる。

「ご飯を食べ終わり、早速奥へと緋色が消える。まだ営業時間なので、一緒には行けない。といってもピークは過ぎたので、二人でも十分捌ける客しか残っていない。それはそうと・・・」

「なんでいるんだ、一季？」

「いいじゃん。僕がいても関係ないだろん」

「まあそうだけど、座るならカウンターにいてくれ。そこは邪魔になる」

「へいへいん」

「ありがとうございます。お金、3800円」

また一組店を出ていく。満足そうな顔をしているからとりあえずよかった。

「いやあちゃんとやってるねえ」

「数分で弛む程器用じゃないので。ところで緋色は？」

「ご心配なく採用したよ。若い子が増えて、おじさん子供ができたみたいだよ」

「いいですねそれ。養子になろうかな、ねこさんの」

「冗談でも涙が出てくるよ」

「冗談ではない。本当にねこさんなら養父になってくれてもいい。それ程に感謝しているし、一緒だと落ち着くのだ。」

「それじゃ、早速接客お願いね」

「は、はい」

奥から出てきた緋色は、見た目かなり緊張している。元々目立たずが基本だったから、誰かに見られるのはかなり緊張するかも知れない。

「・・・変じゃないかしら？」

「大丈夫だよ」

「エプロン似合ってる？」

「お前がエプロン似合うのは知ってるよ。にしてもファンシーですね。よくあんなのありましたね」

淡いピンクが基調になっていて、胸には「MANMA NEKO」の文字と一緒に可愛らしいねこが描かれている。てか、やっぱりねこなんだ。俺のエプロンもねこだし、おんなじデザインだし。違うのは色くらい。赤がピンクになるだけで、こんなにファンシーになるのか。

「・・・そういえば・・・パールックね」

「俗にそんな事言うが、そんなもんは大量生産の末路だ。ファルだつて着てるし」

「ペア、ルック」

ファルの着ている「MANMA NEKO」の色は青である。ちなみにねごさんは緑だ。

「とりあえず接客するか。何事もやってみなきゃな。今は人が少ないし、気楽にやればいいさ」

軽くアドバイスしたのだが、あまり効果はなさそうだ。手と足が一緒に出ている。

「……い、いらつしゃい……ませ。ご注文はなんでござ……
……ご注文いただけますか」

噛んだ。場数を踏む為の客も苦笑いしているし、一季はげらげらと笑っている。もう少しボリューム落とせ、一季。今にも緋色が逃げ出しそうだ。

「ご注文……承り……ました。……それでは……ごゆつくり……どうぞ」

凄く恥じてるみたいだ。一言一言がめっちゃゆつくりになっている。

「帰りたくなつたわ」

「そんなもんだよ。ファルだって最初はああだったし、すぐ慣れるわ」

おどおどしてパニックっている。冷や汗だらだらで、緊張しまくり。多分頭の中は真っ白だろう。爆発しそうだ。したらしたで逃げ出さな、今度こそ。

こうして、緋色の、生涯初となるバイト生活が始まった。腕のいい店員二人に、美人の店員二人。評判になるには時間がかからないだろう。

追伸

その後、また噛んだ緋色は、ウサ晴らしの為に一季を連れていきました、まる。飛び火が俺に来ない事を願いたいが、無理な話しかも知れませ……強制終了

35th「Holiday」(後書き)

今日は学校で模試がありました、まる。なんで土曜日に学校に来なければならぬでしょう、泣き。

まあ、そんな事はもうどうでもいいです。やるならやってみよう。な訳ですが、選択肢は二つ。絶望するか失望するか。喜ぶ事はまずないでしょう、びっくりマーク。

36th「Last Holiday」(前書き)

一度離れると、勘は鈍り、行つにも躊躇いがある。自分の一部だった日常も、離れてしまえば非日常となる。初心に戻ると思えば、いいかも知れないが。

36th] Last Holiday

病院という所は、如何せん落ち着くには不向きな場所である。なにせ薬品の匂いが強く、擦れ違う人は、だいたいが病人か怪我人だ。小さな、自分と変わらない人までもがここにいる。

同情。そんな事は失礼である。ただ、疑問に思う。怪我はするし、病気にも罹る。これが普通なのだ、これが。怪我はすぐには治らないし、軽い病気の一つも罹らない、なんて事はない。どんなに健康体でも風邪をひかない事はないだろう。だから、ここに来ると心苦しくなる。

それとも自分は幸運なのだろうか。だとしたら、ここにいる人は不幸なのだろうか。

多分、どちらも違う気がする。そんなものは多分違うと思う。少なくとも江湮はそう感じていない筈だ、とは言えない、多分。

「・・・江湮は・・・どつちだ」

こつゆう問い掛けに、気がしたという事はない。ここでどちらかに、気がしたとなると、逃げているみたいに思えて、厭な気分になる。

「なにが」

「・・・江湮は幸せか不幸せかってこと」
「幸せ」

「どうしてそう思う」
「アズ、いる。それだけ」
「でもな・・・江湮は俺の所為でこうなってるから、少しは恨んでるかも知れないし・・・」
「ない」

あつさりと悩みを打ち崩す奴だ。ファルもそれだけ悩んだ事があるのだろうか。

「・・・言い切れる自信は？」
「エリ、アズ、大好き。大好き、守る、十分」

如何にも疑いを探らせる解答だが、咀嚼すれば確かにその通りかも知れない。もし、本当に仮に、思うだけとして、逆の立場なら、江湮を恨む事もないし納得もできる。

江湮に振り向き直すと、今度はそんな気がした。逃げかも知れない。そうは思うが、江湮は俺を恨んでないと思ってもいいかも知れない。

「・・・ありがとな」
「なにが」
「何となく」
「お礼は、ほっぺちゅー」
「どっからそんなもんを覚えてくるんだ!？」
「アニメ」
「タチが悪い」
「深夜アニメ」

「もつと夕チが悪い！」

悪影響があり過ぎる。今度からはどうしたものか。結構楽しんでるし、純粹に楽しめるならいいだろう。楽しみを奪うのも酷なものだ。まあ、そのうち見れなくなるのだし、どうしても見なくなったら、録画の仕方でも教えればいい。

「さて・・・と、そろそろ行くかな。じゃあな、江湮」
「バイバイ、エリ」

席を立ち病室を出る。出ると、明瞭な声自分達にかかる。一季や緋色ではない声だ。

「やあ、お帰りかい？」
「まあ・・・そちらは往診ですか、タデさん」
「やつほ、タテ」
「タデだよ、タ・デ。間違えない」

出会った人はトウマの紹介した先生、たて 蓼 だいすけ 大介という、真正正銘の医者だ。トウマと較べて胡散臭さもないし、トウマと較べて服装もしっかりしてるし、トウマと較べて清潔そうである。でもトウマと較べて少々細かい。

「これからバイトかい」
「はあ、一応午後から」
「あと一時間と二十分程か・・・お茶でも飲んでくかい？」
「いえ、予定がもうあるので」
「そうか。昨日の分まで持て成そうとしたのに、残念だ。また六日後に」

一週間後、と言わないところが違和感あり過ぎ。無駄に疲れる。

一季も最初は疑っていたが、多分今も怪訝そうにしている。トウマを信じるという事にはなっていて、蓼の事を信じてはいる。疑っているのは違う事だ。

蓼という人物は、ファインダーでもなければドリーマーでもないという言動。そんな人物がどうトウマと関わるのか。その事を聞いてみると、トウマに医療技術を教えたのは蓼さんらしい。しかし、そこが一季の疑う点らしい。

俺はべつに大丈夫な気もする。根拠こそ特にないが、トウマを信じる事にしたのだ。そのトウマが紹介した人なのだから信じる。

「それでは、さよなら」

「バイバイ、ダテ」

「た・で・だ！」

恒例となったやり取り終えて、病院の外に出る。昨日と同じ天気、で、纏わり付く空気も似ている。違いは天気予報で最高気温が二、三度低くなるくらいらしい。変わりなんて肌では感じられない。

時計を見るとバイトまであと一時間程。30分で買い物が終わらせて、緋色を迎えに行かなければ。まだ二日目、ぎくしゃくしているから一人だと行きづらだろう。

帰る間に、公園を横切るとそこではまた、けだるそうにアイス屋が店を開いている。まだシーズンでもないのに、結構な事だ。

「・・・アイス・・・食べたいか？」

「食べたい」

「そっか。ならデザートとして買うか。あと緋色の分も」

最高気温も下がる事だし、少しは冬の気分でも味わってみよう。

緋色は何味が好きだったっけ。バナナでいいかな。

「お迎えに上がりました」

「……よくぞ参られた。今粗茶でも、ってはやらないわよ」

「ノリいいな」

粗方やる事を終えて緋色の家に着いた。ドアホンを押して、出迎えをふざけて言ったのだが、ノリのいい返事だった。時間もないし、ふざけるのは止めましょう。

「んじゃ、行くか」

「迎えに来てくれてありがとね」

「んー、まだ行きづらいだろうと思うてな」

「心配かけるわね」

「なら、お礼、ほっぺちゅー」

途端に緋色の目が丸くなる。凄く驚いてる様だ。とかいう俺も啞然としてしまった。まったく、ファルめ、余計な事を言っな。

「……どっから……こんな事を覚えるの？」

「・・・アニメだとさ」

「深夜アニメ」

「制限しなさいよ」

「俺は最近、早寝早起きなので無理です」

夜の生活がないと11時には寝てしまう。だいたい深夜アニメは12時くらいからだから、そこまで起きる気力はあっても気はない。

「こんにちはー」

「おう、こんちは。もうすぐ昼休みだから、賄いは適当にね」

「リョーカイです」

空いているテーブルを借り、買ってきた食材を並べる。鉄板しか使えないから簡単なものしか作れないが、手を抜く気はない。包丁を手にして、まずは食材を切る。

「アズ、シュワシュワ」

「駄目だ。牛乳か水にしろ」

「あー」

「・・・本当に保護者みたいね」

「そりゃあ・・・まあ、そんな気分には近いな」

「アズお父さん」

「止めてー!!」

何が嫌なのだろうか。おふざけなのだし、そうマジにならなくてもなあ。

「・・・単純な興味だけど、ファルが結婚する時はどうするの?」

「なんだそれ」

「だから単なる興味よ」

「結婚？」

学力的にはいいのだが、日常的疎い。直に言うとなんかからかん。結婚という意味は知っていても、どうゆうものかは知らないのだからうな。

「僕、アズ、結婚」

「駄目よ、そんなの！」

「・・・なあ緋色」

「何よ。まさか是とする訳じゃないわよね」

「そうじゃないけど、多分まだ江湮と同じなんだよ」

「何がどうゆう風に？」

「江湮とかファルは保護者に対する愛情みたいなものなんだよ、多分」

「そうかしら」

「ああ。だから、ファルにも本当に好きな人ができる筈さ」

「・・・ないわね」

「ん？」

「ないわねって言ったの！」

「ふーん・・・まあいいや。出来たぞ」

話している間に料理を完成させる。今回は意趣返しで塩焼きそば。何にしても関わらず、ご飯にファルの目が輝く。

「・・・いただきます」

今回は一人いないから、少しだけ違和感がある。一季も予定が合わない時だってあるだろうが、そのうち行き当たると思う。基本一人では行動しない奴だから。

「一季はなんか言ってたか」

「さあ。プライベートよ、多分」

「独りぼっち」

「それはない」

口に焼きそばを運び、我ながら美味しいと思う。たまの塩焼きそばもいいものだ。塩分はあるが、ソースよりはヘルシーだ。今度作る機会があるなら塩も、海から取れた天然の粗塩にしようかな。ミネラルがあって健康にもよさそうだ。

「ごちそうさま」

一足先に食べ終わり、買ってきた袋とはべつの袋を漁る。先程買っておいたカップアイスが、中で冷気を保っている。

「ねこさん、食べますか？」

「ん、ああ、ありがとね。あつたかいものはパスだけど、冷たいなら大歓迎だよ」

既に昼休みに入っているねこさんに渡す。買ってなかったら買っ
てなかったで何も言わないが、貰える物は貰う人だ。好意はしっかり受け取る。

「アズ、ちょうだい」

ファルがリクエストしたのはチョコ味。見た目通りというか、期待通りというか、やっぱり甘いのが好きみたいだ。

「私のは何味なの？」

「ん・・・と、ああ。バニラだ」

「バニラなの？」

「・・・もしかして嫌いか」

「あんまり。イチゴ味が好きだわ」

「ありゃ」

失敗したか。となると、緋色だけ食べないのはなんだか気が引けるな。

「んー・・・」

「・・・いいわバニラで。食べれない訳じゃないし」

「そんな嫌々食うなよ。・・・ほら」

「は・・・？」

「やる」

仕方ないから俺のをやるか。俺のは調度イチゴ味だし、バニラは好きな方だ。

「食べかけで悪いけど、これでいいか？」

「え・・・あー・・・」

「・・・嫌か」

「そうじゃ・・・ないけど・・・じゃあ」

イチゴ味のアイスを渡し、改めてバニラの蓋を開ける。口に運ぼうとすると、緋色がフリーズしてる。

「今更だけど、食べなくていいぞ」

「いや・・・食べる」

妙に意気込んで見えるのは気のせいか。多分気のせいだ。意気込む理由がわからないし。

「おいし」

「そりゃよかった」

このあとでファルが（余計な）一言があつた所為で、事態がややこしくなつた事は備考としておく。

昼休みが終わり、店を再開する。ピークはこの時間帯。緋色にとつてはてんでこ舞いになるが、早めに体験して慣れた方がいい。

「すいませーん！」

「はい」

「ご注文お願いしまーす！」

「少々お待ちください」

「三名、お願い」

「了解。今行きます」

「お好み焼きできました」

といつても、こちらもまだまだついて行くのがやっとである。

「あ……と……あわわわわ……い……」

「焦らなくていいぞ。ファルもサポートしてるから」

「それでもテンパるの」

「アズ」

「ん、どうしたファル？」
「イチ、きた」

入り口を見ると、確かに一季が来ている。不思議がる事はないが、恥ずかしくなる。確かに一季は来た。一季のクラスメイトを三人くらい連れて。

「よっ、癖頭ん」

と、呼ぶ一季の後ろで「あれ、違うクラスの東君じゃない」「緋色さんがいる」「ファルもいる」やら、指を差される行為がされる。まさか、こんな所で会うなんて思わなかったのだらう。

とりあえず今席は満杯なので、席が空くまで待たせる。その間に絶えず視線が向いているので、居心地が悪いのは言うまでもない。

「四名、お願い」

一季達を（いやいや）誘導する。だんだん泥沼に嵌まっている様に思えていやだ。緋色の顔にもそう書かれているのが見える。

「……ご注文はなんでしょうか？」

「堅いねん」

「ご注文は」

「はいはいん」

明らかにからかっているな。緋色は注文だけだからあれだけだが、俺は作るからなんか怖いな。ていうかねこさんにバトンタッチしてもらおうかな。

「東君ご指名でお願いしまーす！」

退路は断たれた。一季だったら何か企んでいると思い、断る事が出来たが計算済みか、一季。わざわざ他人に言わせるとは断れないし、断ると不信がられるではないか。

「お・・・お待たせしました」

うわあ・・・やだなあ。心なしかみんなの目が輝いてる。もちろん一季の目は笑っていて、脇腹を突けば笑い声が漏れそう。それはそうと明日から俺の立場が危ぶまれそう。ファルの事で目立っていて、やっと収拾がついたのにまたか。

「ねえ、東君ってこのバイトさん？」

「へえー、ここで働いてんだ。何年やってんだ？」

「緋色さんとファルさんも一緒なの？」

やっぱりな。質問責めは覚悟してたが、そんないつペンには答えられないし、そう目立つのは慣れてるものじゃない。

「今は仕事なので、しかも立て込んでるので。質問は明日ぐらいに答えます」

不満の声は聞かぬ振りをして、小さく「答えられたらね」と、付け足しをする。

「・・・なんか言った、東君？」

「いや、一季君のどんな企みなのかとね」

通訳すると、一季に何を吹き込まれたと聞いている。揃いも揃っ

てポーカーフェイスが苦手の様だ。一季の方を見て小さく笑っている。

よかった、よかった。一季が適当誘った人みたいだが、これが真意じゃなさそうだ。多分、この人達を切っ掛けに学校に広まるんだろうな。あーやだやだ。

「ではごゆっくり」

全員分のお好み焼きを作り、営業スマイルをする。ただ、一季のお好み焼きにだけ、メッセージを残した。

「けー・・・わかってらん」

ソースで「夜」と書かれたお好み焼きを、忌ま忌ましげに四等分する。

やっとバイトが終わり、疲労から解放される。ねこさんから今日の働き代をもらう。今日の買い物は終えている。例え、闖入者が出ても大丈夫な量は確保してある。

「やっほーん」

「いきなりかつー!!」

店を出ていきなりである。そのいきなりさに思わず叫んでしまったが、恥じる事はしない。寧ろ好都合。今日の羞恥プレイについて言及したい。

「今日はなんだったんだ、一体全体」

「貴方、合体」

「なにそれ!？」

「今、深夜アニメ、やってる・・・」

「言わんでいい!」

オタクキャラになるぞ、ファル。やっぱり見せるの止めにした方がいいかも。悪影響ばかりだ。

「今日の事が聞きたいのかん」

「そうだけど、ずっとここにいたのか?」

「いんやん。あのあとのメンバーで、ボーリングやったんだぜんイエーイ、五連続ストライクん」

「てめえ、何を企んでんだ」

「何って、最後に友達と満喫ん」

「最後?」

「いや、最後かも知れないなん、友達と過ごすのは。このあとは親友と夜を過ごすからなん」

一季は言う。正直、もう戻ってこれないと覚悟していたらしい。生と死を行き来する、罪を洗い流す所業。いつ死ぬかわからないし、前回は死線を越えかけた。こうして休みを与えられたが、いつ死ぬかは謎である。いつも友達からの誘いを断るのも心苦しいから、今回はこうして最後かも知れない一日を過ごしたと言う。

そう、考えれば最後かも知れない。いつまた、日常を過ごせるか

わからない。夜を過ごし、短い睡眠をとり、付き合いが持てない日常を過ごす。一季の考えがわからないでもない。

でもだからこそ、戻るといふ意識は強く持ちたい。

「・・・最後かも、とか言つなよ。絶対、日常に戻るさ」

「言つなん、一番遠いくせにん」

「けえーっ」

「それに夜もなかなか楽しいぜん」

「俺は楽しめないね」

「こわくないからねん」

「いつか怖いつてかんじるさ」

今日の事について言及するのは止めましょう。話すなら家で、内容は夜について語ろう。

「さて、家に帰るかん」

「お前ん家じゃないぞ」

「いいじゃん、堅いこと言つなよん。他人の家で和めるなんてないんだよん」

「はんっ」

四人はアズマ宅へと歩き出す。慣れ親しんだ、だけど当人はあまり馴染めない家へと。でも、喜んでくれる人がいるなら、来たい人がいるならあの家でもいい気がしてくる。

「ところで今日の晩御飯は何の予定？」

「ファルのリクエストの」

「ハンバーグ」

「ほう。手伝うかん」

「当たり前だ」

はっきり言って、一季の料理センスに期待していない。ファルにも期待はできないが。和風ハンバーグの予定だし、大根おろしでも下ろしてもらおう。

生活感がある家はいい。独特の匂いというか、寒くない空間が暖めてくれる。体も心も、その家にいるだけで高揚させてくれる。

、だから、その家を離れるのは少し忍びない。帰るなら早く、でも最低限成果は上げられる様にしたい。

「今夜はどの辺？」

「前に行った、商店街周辺。あそこなら夜もやってるわ」

「人も多いな」

「喧騒もなん」

「ワンダー、イーター」

「ワンダーはうるちよる。イーターはかくれんぼか鬼ごっこ。遊びばかりだなん」

「危険なね」

作戦会議は5時間後の夜を、何をするか会議。久々の夜へと飛び出す。フライングしたりと、誰かさんが先日ヘマをやらかしたが、誰とは言わない。今度はしっかり、ヨーイドンで飛び出す。

「んじゃ、集まりは日付の変わるその日にねん」

「デープレスの前で」

「嫌な気分だわ」

「久々で慣れないのは仕方ない」

一度離れた習慣を再びやるのは厳しい。慣れないし何より苦痛に思える。それでも体を突き動かすのは強い意思。各々の、やり遂げるべき事。

「ではまた」

「おうん」

「12時に」

「一時、さよなら」

二人は家を出て、二人は家で待つ。一時の別れ。約束の時間までに、心身共に休ませる。特に大事なものは精神状態。揺らがず、怯えず、引き際を考え、一步を慎重に、一線を見続ける。

だが、久しぶりでそんな上手くはできない。勘が鈍ってるだろうし、いつもより慎重にいるだけだ。こんな日は勘を取り戻すだけに留めたいが、どうなるかわからない。その時になったらその時に対応しよう。

いつも通りに過ごす日々。皿を洗い、明日の弁当を作る。洗濯等の雑務を熟し、空いた時間でテレビを眺める。

「……行くか」

「ラジャ」

いつもと違うのは、このまま夢の世界へは行かない事。これから行くのは夜の世界で、難しい事に見る夢は冷たいモノ。

胸中は遠くに、意識を沈め、脳内でリピートされるイメージ。一部の人には知られず、知らない間に夜は過ぎていく。

36th「Last Holiday」(後書き)

今回と前は、まあほのぼのにしようかなと。今回の後半は夜へと飛び出した訳ですが、予定は全く考えてないです。

いきなり不運、いや幸運にぶちあたるか、何事もなく終わるか、勝手にキャラが動いてくれると助かります。

只今大会中、イエーイ。今日で終わってやっと家に帰れる。泊まりたいけど、やっぱり地元で過ごしたいものです。

37th「Restart」(前書き)

者、物、もの、モノ。どれでも、どれにも僕は当て嵌まらない。
およそ人間としては存在しない。生きているかなんてわからないけど、この瞬間、この気持ちを、うっすらと感じるならまだ生きている。

あなたに会いたい。

37th「Restart」

纏わり付くにおい。寄り添う不快な感覚。そこにワンダーがいるだけで殺意が朱く染める。そこにいる事に関わらず、一つ残らず殲滅したくなる。

しかし、それは無理な話。快樂、憤怒、睡魔、愛情、恐怖、憂鬱。どれをあげても、本能的に日常の上で感じるものである。感じるなと言われても無理な話だ。感じない日などない。

それらが昇華せず、不完全に形成されたものがワンダーである。

中途半端な楽しさ。

言葉だけの怒り。

眠れない睡^{ねむ}さ。

わがだまりの愛しさ。

100%安全な怖さ。

言い表せない鬱陶しさ。

全てが全て形を崩し、いつかは場の空気に発散されていく。発散されて何処へ行くのか。結果、形を持たない、本能的な核しか残らないさ迷うモノが顕れる。

言い換えるなら、生き物がいなくなれば、無感覚な生き物になれば、ワンダーはいなくなるし、イーターも消える。だから、殲滅させるなど無理な話である。

月光煌めく深夜。形を作れないヤツは路地裏に引込み、消えないヤツは闇を闊歩する。人も後ろを向けば、闇を闊歩し、光を恐れる。

自分も振り向けば負を見る。少女を傷つけ、存在しない人物を殺した。思い出す度に、この身は囚われてばかりでいる。仕方ないでは済まされない。今はただ、行動理由だけを持って進む。懺悔はいつでも構わない時にしよう。

「いつも早いな」

「当然。遅れるよりはマシよ」

蛍光灯の下。僅かに目立つ淡い蒼髪は、再びの夜に変わらずいる。そしてもう一人の待ち人も変わらず最後である。

「今何時？」

「そうね、ぴつたり12時ってところかしら」

「こんなもんか」

数分の遅れは許容範囲だが、気分によって大きさが変わる堪忍袋は、どこまでもつかかわからない。それは時計を凝視していれば、あまりもたないものである。

「……あつ!!」
「うおっ!……どうしたファル」
だから話していれば、気休めだが何となく袋に隙間を与えてくれる。

「今日、アニメ、見れない」

「あ……諦め」

「ない」

「仕方」

「なくない」

「んじゃどうするのさ」

「アズ、携帯」

「……ほい」

懐の携帯を手渡すと、喜々としてファルの目が輝く。なんかマップ。とてつもなく眩しい。

「……何するの?」

「多分携帯のテレビ機能じゃないか」
「なるほど」

ファルが開いた携帯を覗き込むと、もう既に深夜アニメを見入っている。

「悪影響なんだから止めさせなさいよ」

「まあ、とりあえず見て判断してからな」

と言って再びディスプレイに視線を戻す。何やらこの物語は俗に言う異能だろうか。とりあえず異能を駆使したものらしい。戦争程

ではないがバトルが展開していくみたいだ。

「なんてアニメなんだ？」

「ストライプライト」

「きいた事ないな」

ともかく一話だけではどうとも言えないが、展開はバトルが終わり日常生活になる。どちらかと言えば、バトルが主ではなくほのぼのの系がメインの様だ。というかなんだ、これ。いわゆるハーレムってやつか。ヒロイン数人が一人の男を取り合う様がおもしろおかしく流れてる。

痛快と言えば痛快だが、どこかすつとしないから快なんだろうな。何故か痛快にならない。なんか違和感がある。確かにおもしろいと思うけど、こつこつ災難というか、人間関係に悩む人を本気で笑うのは厳しい。

ピンクというか、ちょいえろというか、流石深夜アニメだ。オーピングこそ逃したけど、本編でお腹いっぱいなのだ。どんな感じかは知らないが、せめてオーピングくらいは軽くいきたい。

「……感想は？」

「まあ……いいんじゃない。一概には言えないし、緋色も今度見れば」

「予約して見るわ」

まあ、結果は期待しないで待つとしよう。てか、30分経っちゃったよ。アニメに見入っちゃたよ。何やってんだよ、一季のやつ。

「おまたーん」

「「遅い！」」

その10分後に一季が到着。当然文句を口にする。ファルは罵るのに参加しなかったが、俺と緋色はいらいらして仕方なかった。

「何やってたんだよ」

「アニメみてたんだよん」

「まさか・・・ストライプライトか」

「よくわかったなん。アズマも目覚めたのかん」

ひたすら頭を抱える事しかできなかった。目覚めたのは自分を辟易し呆れ果てる事だ。少しでも楽しいと思ってしまうたから、断じて認めたくない。

「行きましようか。夜は短いのだし」

「いやいや、夜は長いぜん」

「俺は寝る時間を考えてるから夜は短い」

「大人になれないぜん」

「あんたは何者だ!？」

活動できる時間は短い。明日に支障が出てしまっただけでは意味がないのだし少し急ごう。

商店街周辺まで、20分程で到着。ぱっと見、人の波は多い。その分店を出している所も多く、声やら雑音やらが飛び交っている。

「それじゃ始める訳だけど、班分けはどうする？」

「僕、アズ、一緒」

「「「やっぱりな」」」

率先して組を作るのはいいし、下手に悩むよりはいいや。

「いいんじゃないか。俺とファル、緋色と一季で」

「駄目よ」

「何故？」

「アズマが囚われた時に、ファルがアズマの自我を取り戻せると思う？」

「えー……ない、かな」

「ならまだ私か一季の方がいいわ」

「じゃ僕が癪頭と組もつかなん」

いやいやな意見が飛びそうな一季から持ち掛ける話が出るとは意外。という訳で、全員の会話が途切れるのは当然と言える。

「質問一季」

「なんでしようん、緋色」

「なんでその組み合わせにするの？」

「それは消去法だよん」

「どんな!？」

「突っ込むなあ、緋色」

黙れこのやろう、はぐらかしてんじゃねえ、みたいな感じが緋色から出てる。あくまで感じなので、文章がこんな風かは知らないが、そうゆう文になるくらい顔が……。

「だからさん、僕は携帯がないん」

「で、それが何？」

「携帯を持つてるのは癪頭と緋色しかないんだよん。僕とファルが組んだら、緊急時にどうやって連絡すればいいのさん」

「……う……」

一季の言ってる事は正論である。流石にこれには反論できないし、俺も納得できる。一季に何か裏がなければの話だが、今はまだわからないので言及はできない。

「・・・それなら、一季はちゃんと抑えてくれるわよね」

「できる限りやるさん。あのビルでもちゃんと抑えてやったるん」

「・・・確かに」

「んじゃ、班分けはこれで異論はないなん」

一季の目には本当に異論がない様に見えるのか。見えるだろうけど、緋色達に不満はある様に見える。ともかく班分けは終わった。俺と一季、緋色とファルで闇という闇を見て回る。

「それじゃ一時間後、ここに集合ね」

若干声から明るさが消えた気がする。そこは触れないで置いて、緋色の合図でバラける。今夜はまだどうなるかはわからない。

アズマ達は西の方へ、人が集まる場所を風潰しに巡っていく。夜の町は喧騒、快樂、危ない誘惑と様々に満たされている。そしてそこからそう遠くない暗闇に、人もいればワンダーもいる。

特に何をしているかわからないし、不埒な輩の討伐が目当てではない。そんな事をすれば、再びここに来るのが難しくなるだけだ。見るのはあくまでモノだけ。しかも、求めているかどうかのを。

以前緋色が言っていた様に、そう簡単に目当てのモノが見つかる筈もない。余程の幸運、いや悪運がなければ会う事もない。だから今夜会うとするなら、それは特がつくほどの大凶だと言える。

「さすがにいないな」

「あん」

「・・・なあ、一季」

「大丈夫、プライバシーは見てないからん」

「そつちを心配してんじゃねえ！」

今一季は俺の携帯を借りて、アニメ観賞をしている。凄い余裕があるのか、あまり鈍っているのを感じさせない。この前のフライングで勘は取り戻しているのだろうか。俺はというと、まだぎこちなさがある。何度かワンダーを、勘を取り戻す材料にすれば多分大丈夫だ。肝心な時にヘマはしたくないし。

「ちよつと動いてくる」

「うん・・・勘でも思い出すのかん？」

「なかなか体が動かないからな」

人がいない路地裏を選び、建物から地面へと下りる。まだ、光が照らしている場所だが、何匹かのワンダーがこちらを向く。

「数分で戻るから」

「勘がかん？それとも自分がかん？」

「どっちも」

使い慣れた言葉を紡ぐ。槍をイメージし、素手に顕現する。以前と変わらない感じ。手にかかる重さは変わらず、体で覚えた事がある。

ここまではいつもと同じ。心配なのは動くかどうか。明らかに体は重しい、調子悪いとかそうゆうものじゃない。怠けからくる重さだ。

「さて」

軽く屈伸。低い姿勢のまま蹴り出し、目の前のヤツに槍を叩きつける。ワンダーを消し飛ばし、尚も力の方向は下。派手な音を立てて地面を抉る。腕全体が痺れはするが、イメージだけは崩れない。刃零れもしない槍のノウンは上々だと言える。

イメージ、メイク、ノウンに文句はない。だがやはり課題はキープだろう。体を慣らしつつ、少しずつ勘が戻り体が軽くなるが、別の要因で体はどんどん鈍ってくる。

「こんなもんか」

言葉通り、数分で見切りをつける。囚われもしなかつたから上々と言える。手元の槍を消し、路地裏から出ていく。巻き戻しの様に、今度は重力に逆らいビルの上に降り立つ。

「ふー」

「おかえりん」

「あー・・・久々で疲れた」

行使を止め、普段以上に動ける縛られた体が解放される。たった数分でここまで疲れるのだ。実際の戦闘になつたらお話にならない。後先考えず、無理をすれば結構長くは行使できると思う。あの時みたい。

「どうやったら行使の長さを伸ばせるかな」

「知らん」

「なんだそりゃ？」

「いや、別に意地悪じゃないぜん。僕と癡頭じゃ想造するモノの大きさも、質量、数も違う。それに、僕が持つてるのは本当の物だよん」

「俺も想造の槍じゃなくて、実物の槍を持てばいいかな」

「それはまた駄目だよん。やっぱりナイフみたいに小物じゃないと、邪魔だし目立つよん」

確かに槍みたいなが物を持ってたら目立つな、間違いなく。何よりいつも持つてるなんて邪魔だ。それよりなんで俺は槍なんだろう。わかんないな。

「なあ」

「んー？」

「なんで一季はナイフなんだ？」

「そりゃ、性格上だよん」

「なら俺も性格上なのか？」

「んーと・・・性格上って言うよりは、心の在り方かなん。僕はこわさを感じなん。だから相手の懐に飛び込んでもこわくないし、寧ろそうやって無理にでもスリルを味わおうとするだなん。そんな訳で、ナイフなんだよん」

なら俺の在り方とはなんだろう。日々に退屈さを感じていないし、しよっちゅう後ろを向いたりする。そもそも槍とは、長物で切れるし突けるものだ。投擲にも使えるし、打撃にも使える。つまり万能なのだが、自分は万能とは思えない。よくて器用貧乏だろうか。

てか待て。なんの話をしてたんだっけ。どんな話から武器の話になっただっけ。

「・・・最初なんの話だっけ」

「知らん」

こつ思い出せないと不快な感じはするが、それを良しと思いたくもなる。思い出せないと思うと、連想して過去の記憶がついてくるから、やっぱり思い出さなくていいか。

「なあ」

「んー」

「今ふと思ったんだけど、なんで俺と組むのに積極的だったんだ？」

「またかいん。だからファルじゃ抑えられないだろん」

「だったら、さっき俺が飛び出しても微動だにしなかったよな」

「・・・それは・・・だなん・・・」

「自分で言うのもなんだが、囚われる可能性があるなら、少しは携帯から目を離すもんじゃないか」

アズマ達が離れたあと、私達も行くことしたらファルからこんな事を言われた。

「アズ、渡さない」

「………えー」

ついていけない頭はフリーズし、頭が行動停止しているから体は動かない。当然、別れた場所から一步も動いていない。

「行く」

「……うーん」

始まりから翻弄されっぱなしである。先行きが不安になる他、こんな事で肝心なところをしくり、危険になりたくない。だからせめてお互いを信じれる様にはなりたい。

「ねえ、ファル」

「敵、恋敵」

嫌われてるのかしら

ファルは私に指を差し、未だに殺意にも似た感情を隠さない。もしかしてもなにも、そう思わずにはいられない。

「恋敵」

「まだ言っの」

溜息しか出ない。とことん、これは何かなければ親睦を深める事はないだろう。一気に深めず、話をしながらの方がよさそうだ。

「もしかして、私のこと嫌ってる？」
「ない」

気持ちをはっきりさせようとしたが、嫌われてはなさそう。言葉通り恋敵。憎んではないけど気は許せない、みたいな感じだろう。

正直、私もまだ気を許せない。だから、アズマとファルを組ませない様ああ言ったが、こうした形で組むとは思っていなかった。実際、アズマが囚われたら、ファルは本気で止めるだろう。でなければ、アズマに心配そうな目を向けないし、食い入る様に見つめない。

こうしたところは江湮と重ねて見てしまふ。

あの時だって、江湮は身を呈してアズマを助けたのだ。見えない恐怖があったのに、彼女はアズマを助けた。

ファルも同じ。見えない罪悪感を背負っているアズマを身を呈して守るだろう。ファルも見舞いに行っているのだ。絶対、それを念頭においているに違いない。

そしてもう一つ似ているところが、こうしてアズマに好いている事と、私がアズマに好いている事を見抜いてしまふところだ。

「どうして私がアズマの事・・・その好きだってわかるの？」
「仕種」

それほどわかりやすいものだろうか。江湮ちゃんにも一季にも、そしてファルにもバレている。そしてアズマにはバレていない。四

人いてバレてないのが当の本人だけだから、わかりやすいのだろう。

こうして考えていると、やはり一季の策に嵌まった気がする。今頃ほくそ笑んでるに違いない、と思うと、一季の顔が脳裏に浮かんで腹が立ってくる。

だいたい何が目的なのだろうか。私とファルの仲を取り持つ為にやってるのか。恋敵同士大変そうだなん、とか思っているのか。多分、笑いながら。

とりあえず、腹が立つから考えるのを止めにした。ここは一季の思惑通りだが、当初の予定のファルとの信頼を築く事にしよう。

思考をしながら夜が過ぎる。最低気温は14。天候は晴れ。明日の昼頃までは保つ予報。幸運が訪れるか、不運が訪れるかはまだわからない。暗く、月光が差す夜は、どちらを思わせるか。

37th「Restart」(後書き)

はあー、今日も早起き。眠いつす。うちの学校が野球で快進撃をして、ベスト4に進出。全校応援、っていう名目で夏季課外がなくなったのは嬉しいですが、眠いものは眠い。まあ毎日眠いから、結局いつもの変わりませんが。

話はまだ転じては 아닙니다。緋色とファルの仲は微妙だけど、なんとか信頼関係にしようと考えてますが、あれ、このままじゃ一波乱ある事を伝えてる?.....ま、いいか。

38th「食らい合い」(前書き)

普段よりよくできるのは、リミッターが外れた訳ではない。ただ感覚が麻痺してるだけである。だから、限界以上の事もできるし、容易く自身を傷つける事もできる。我慢も似たようなものだろう。忍耐力があるなんて、ある筈がない。

side Azuma

あれから少し休憩して、また暗闇を廻る。時間にして、残りは20分程度。あまり遠くまで行くのは得策ではないだろう。あまり踏み込むと帰れはしないし、囚われて奈落に落ちる。一季の奴は当てにならない。

「ふわあわわわあ……ん……」

「……眠そうだな」

「久々だからなん。あー……帰りたいん」

「黙れ。アニメ見てろ」

「あと一時間はないよん」

暇潰しのものもなくなり、騒ぎ始める策士。暇になるんだったら緋色がファルと組めばよかったんじゃないかな。もしくはワンダーと戯ればいい。

「ん？」

「どつした、一季。暇潰しの道具でも見つけたか？」
「いや。多分退屈で煩わしい代物だなん」

見ると路地裏に入っていく男性が一人。遠くからで、すぐに物陰に消えたからよくは見えなかった。ただ、見て思う事は一つである。

怪しい

そりゃ何か法に触れる事をやる人はいる。それをいちいちどうこう言う気はないが、たまたま目に入ったのだ。だからたまたま、自分の知的好奇心の琴線に触れてしまった。ドラマみたいな展開でなかなかおもしろそうだ。

まったく、一季のがうつった。

路地裏を見るのをついでに、一季の暇を一時中断させよう。名前を呼び、見てみようという意思を伝える。もちろん暇な訳だから、ゆっくりだが重い腰を上げた。

「物好きだなん」

「お前に言われたくない」

本当に言われたくない。見つけたのは一季なんだから、最後まで責任をとれ。

「さてさて、何をしてるのかなん。白い粉引き渡しか、シャブの取引か、密輸の手引か、殺人の為の待ち伏せかん」

「一季の方がノリノリじゃねえか」

屋上から、声を殺して、息を潜めて、路地裏に入っただった男性を捜す。目的の人物はすぐに見つかった。周りにワンダーが有象無象にいる感じで。

なあ、一季

ん？

俺にはワンダーに囲まれてる様にしか見えないんだけど
奇遇だねん。僕もそうゆう風にしか見えないねん

明らかに、誰の目にもという訳ではないが、少なくとも自分達の目にはワンダーに囲まれてる。そして男性の視線はどこに定まってるのか、上からじゃわからない。

常人かも知れない。

、ただ、そんな考えは次の一言で消え去る。

「dream out」

聞こえ慣れた言葉は、小さな声でも耳に届く。考えてみれば普通なものだ。ファインダーは俺達三人だけじゃない。他にも、少なくともひっそりという。別に驚く事ではない。

やばくないか。助けなくてもいいのか？

いいんだよん。構う事じゃないん

でもさ・・・

割り切れ。あの人だって覚悟してやってるんだよん

覚悟。俺だつてそうだ。確固たる目的、覚悟があつて繰り出している。他人を構う暇はない。そんな事をして、目的を見逃すのはいただけない。

それになん、あいつがファインダーっていう確証はないんだぜん
いや、もう退いただろ

わかんないねん。あの用心深そうな参香なら、組織は退かせても、保険はつけそうだからなん

なんで信じないかな

なんで信じられるかなん

言われてはつとしたが、確かに確証はない。ファインダーかもドリマーかも知れない。その言い分はわかるけど、一季だから仕方ない。

おっと、あの人悪運強すぎん

路地裏の先。そこにはヒト型の何かがいる。そこらへんにいるワ
ンダーよりも5倍以上の嫌悪が、体の上を這いずり回る。今夜はあ
の人にとってどっちなのだろうか。

名前も知らない悪運が強すぎる男性は、肩で息をしている。ここ
で自分のじゃなければ逃げるだろう。自分のであれば、今のコンデ
イションを考えて決める。

選択は後者だ。

アズマ、逃げるよん。巻き込まれたら面倒だからなん
・・・ああ

巻き込まれたくはない。でも、それはあくまで『たら』の話だ。
もしもの、仮定ほど、嫌な方向に思いを巡らせるものはない。

一季

・・・け、わからんよん、どうしてそんな事すんのかん。囚われの素になるぜん

わかるけど・・・見ておかないといけない気がする
・・・癡頭め

逃げる一色だったが、どうやら止めた様だ。その場に腰を下ろしている。観戦はしない気ではいるが。

僕は見ないなん。トラウマになりたくないしん

見た事あんのかよ？

・・・囚われそうなくらい

不意に一人とヒトリを中心に明るくなる。正体は蛍光灯を想造したモノで、光源を確保するには申し分ないモノだ。路地裏では狭いが、逃してしまえば今度がいつあるかはわからない。悪運の中の不幸だ。

半径20メートルほどの光円。壁の関係で立体的に縦に長い。これがデッドライン。光が守ってくれるのはその範囲。故意に外に出るならまだいいが、光が消えればそこで終わり。限界を示す。

正体不明な人だが、劣勢を応援したいのは性としか言えない。

微妙。その一言に尽きる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「この微妙な距離をどうしてくれようか。さあ信頼関係を築くぞ、と躍起になっていたが、ファルとのやり取りにあまり意味はない。ファルは絶えず私から数メートルの距離をとろうとする。」

「なんかでもないけれど、確実にこれはストレスが貯まる。イライラしてる、間違いなく。ファルに対して凄くイライラしてる。」

「そんな不穏な空気をファルに送っていると、時折私の顔を盗み見る事がある。もちろん、すぐに前を向くが、時間が経つにつれてその回数が増えている。」

「気づいてるなら反応しなさい！！！！」

「とは言えない。というよりは言わない。向こうから何か言わない限り、もう何も言わない。独りよがりだが、もうどう転がってもいい気がしてきた。」

私とファルがやってる事は、路地裏を転々とし、たまに勘を取り戻す為に体を動かしている。危険の回避も兼ねて、10分やって間に5分の休憩を入れている。

「いく」

「・・・ふう」

片言な言葉に感情は感じられないが、こちらに向ける顔には何かを感じる。微妙にそわそわした感じのを。

「dream out」

黒に沈む黒い刃。明るい場所なら意味はないが、この闇の中なら見るには難しい。想造物は心の顕れ、深層心理も顕す鏡である。なら黒刀はファルの心の顕れ、誰にも知られない闇に消える自分を暗じているのか。恐らくそうだろう。

アズマから聞いた話だと、ドリーマーは『無』そのものだそうだ。自由、感情、思考、その他諸々は最低限カットされ、社会的にも存在していない。本当に何も無い。

でも、今は違うし、もしかしたらドリーマーの中にもファルみたいな人がいるかも知れない。社会的にいなくても、目の前で生きているなら関係ない。ファルは生きている。

屋上から落ちる矢は、加速しながら底辺に落ちる。ファルに飛び掛かる前の動作など与えず、ワンダー達を貫き霧散させる。少女に危険などありはしない。触れさせる事など彼女はさせない。

「あと10分くらいね」
「うん」

相変わらず敵対意識はある。それも最初に比べれば（少しは）薄くなった気がする。こちらもガンを飛ばしてたからかも知れないが。

「・・・あ、の」
「・・・え」

ファルから話をかけられた。思いもしなかった事だから、若干間を空けてしまった。耐え切れなくなったから話かけたのか、それにしても、今の言葉に敵対心がないのは嬉しい。

「な、何？」
「アズ、好き、確認」

私を指差し、返事を求める少女。確認、という事は本当に私がアズマを好きなのかを知りたいらしい。現状の確認だろうか。

「・・・好きよ」
「アズ、守る？」
「守るわよ。悲しむのは私だけじゃないから」

守らなければ、止めなければ、絶対にアズマは身を滅ぼす。そうして悲しむのは私だけじゃない。ファルも、似合わないけど一季も、アズマに関わった人はみんな悲しむ。

「僕、悲しむ？」
「そうね」
「でも、ドリーマー」

「関係ないわ。ファルはファルよ。私の前にいて、ファルはアズマを見ている。それだけでいいのよ」

ファルの胸に手を当てて、少しでも感覚を、温もりを、嫉妬を、愛情を、全てなんだっていい。生きている事を、存在している事を、ドリーマーではなく人間としてわからせたい。

触れられた胸に自分でも手を当て、わからない顔をする。自身の感情に対して、実際に感じないとわからない様だ。

「アズマがいなくなったらどう思う?」

「考え、ない!」

否定。ありえない、ありえはしない、ある筈がない、考える事すら馬鹿らしい。私もそう思う。止めると誓った私達が嘘をついた事になる。だから意思を貫き通す。

「・・・クス・・・」

「何?」

「いや、可愛いなって思っ」

「どこ?」

「アズマに対して向きになるところだよ。ファルの目にも私がそう映ってるのかしら」

ファルの頭を撫でてみる。いきなりで嫌がるかと思ったが、不思議がっている綺麗な瞳を向けている。

アズマの事は言えなくなってしまう。こうしていると、子供ができた気分になる。アズマと私の子供っては思いたくないけど、思ってしまう。

「ヒロ、可愛い」

どこか名前のアクセントが微妙だ。ただ、これがファルナリの信頼表現なのだろう。私は恋敵として、友人として、仲間として、対等な立場として一緒にいよう。

「私もアズマは渡さないからね」

「三角関係」

「……………その情報も深夜アニメから？」

「うん」

対等な立場じゃない。改めて考えさせないと。影響が強すぎるとアズマにちゃんと話そう。

Side Azuma

吐き気を誘う空気。充滿する血の臭い。想造された蛍光灯は、接触不良を起こしたみたいだ。つまり、名無しの人は己に負けた。呆気なく、自分の弱さに殺された。

直後、境界線は消え、ワンダーが死体に群がるが、イーターがそ

れを許さなかった。

「自分が死んでも消失しない」

トウマの言った通りだ。イーターは自立して動いている。感情とは生きる理由、原動力、エネルギー。感情が一つあるだけで、感情が一つしかなくても、それが理由となり生きられる。

どっちが死んだん？

名無しの男性

・・・止めるなら今のうちだぜん

言つたら、見なきゃいけない気がするって

我慢しないでいいからなん

背中越しにかけられる言葉。大丈夫・・・だと思つ。よっぽどの事がなかったら我慢せずにソッコで逃げるから。

イーターは足を無造作に掴み、引き摺っていく。思いやる気持ちはない。そんな余計な機能はない。ただ、その人が消失させた感情だけが占めている。

光のある、それでいて人気のない場所へと歩っていく。邪魔にならない場所で何をするつもりなのか。皆目見当もつかない。

「あいつ何する気だ」

「もう聞かないでくれん」

「・・・なんだよ」

「僕は話したくもないん」

一季は見るからにやる気が削がれている。そうも見えるが、引き

出したくない過去を抑えてる様にも見える。記憶を無理矢理引き出さないなど、できるものなのだろうか。わざと思い出さない。そんな事、俺にはできそうにもない。

建物、とは言えなくもないがよくて廃ビルだろう。そこへとイーターは入っていく。見物するには厳しそうだ。

「見れるところあるかな」

「んー・・・なかなかシャイなヤツだなん」

「なるほど・・・人見知りか」

疑問には思っていないが、改めて思うと不思議だった。イーターならわざわざ場所を移動する事はしない。やるならその場で、の筈なのにそれをしない。という事はあの人が消失した感情（今はもう何も感じないが）は人見知りか。

しかし、わかったところでどうしようもない。あのイーターに見つかれば、また場所を変えるか、それとも戦闘になるか。この二つだろう。

「なるべく見つからないポイントはないかな」

「ともかく、見るなら中に行くしかないようだぜん」

その通り、それには同意。とりあえず中に入ろう。

入り口からではなく、二階の、窓のない窓口から入る。足音は立てず、場所なら邪魔をされたくないから明かりを点けてると思う。

そうでなくても、コンクリートと骨の当たる音はよく響く。音がらして、だんだんと近づいている。

どっか部屋に入るのを待とん

返事はせずに、了解とだけジエスチャーする。暗闇に溶ける黒だから盗み見たりはできないが、聴覚と嫌悪感がどこにいるかを知らせている。見えなくても解る。

イーターと同じ通路には立たず、角に隠れながらの追跡。見つかる心配はないと思うが、それでなくても逃げ出したい。我慢したくないのに、それでもここにいる。この意識は何なのか。

足が下がっても、頭痛がしても、吐き気がしても、心臓が暴れ狂っても、退くという命令はこない。喉が渴き、生唾を飲み込んでも、まるで意味をなさない。

大丈夫かん？

・・・なんとか・・・かんとか

大丈夫だなん

テキトーに言ったから、後頭部を叩かれた。でもきつけにはなる。ちよつとはマシになった、かも。

嫌悪感の塊が止まる。今、背にしている部屋に明かりが点く。なんとも器用なイーターだ、と感想を述べる前に、見物できる場所を探す。

生唾と一緒に吐き気を飲み込む。心臓は破裂寸前。四肢は痙攣し、意識は目だけがはつきりしている。怖いとも何ともとれないあやふやな胸中。覗き込む時も、意気込みも決心もいらぬ。自然に、見慣れたかの様に光景（惨状）を見る。

そこは食卓だった。平和な、団欒のある食卓。そんな筈はない。そう思いたい程にグロテスクだ。

そこは強欲な食卓。前見たホラー映画にこんなシーンがあった。一季に無理矢理見せられたが、あれに似ている。ゾンビが肉を食うシーンがリピートする。生肉に齧りつき、ただ貪欲さをアピールしている。

意地汚く、元感情の主を腹に収めていく。変化は大きく、男は頭から消え、骨も、血も、血飛沫すらもなく消えていく。しかし、イーターに収まる腹はない。変わっていくのはイーターのカラダだ。だんだんと人に近づいている。

虚無だった色が、中に収める体に比例して色を取り戻していく。それは擬態なんてものではない。生まれ変わり、成り代わり、再び、消失した生を具現している。殺される前の状態がそのままそこに・

「ぶっ・・・おえっ、ええっ」

我慢の限界。胃液が逆流し、床に吐き出す。いや、我慢なんてとくに越えてる。ただ麻痺してただけだ。意識が、精神が、感情が、感覚全てが麻痺している。その分摩耗し、擦り切れ、何にも反応できなない。

「アズマ!!!」

一季の声で、思考だけが戻る。目は元から見えてたから、刺激を脳に送る。見えたのは、視界いっぱいの上半身が色づいた体と、下

半身が虚無のカラダ。それに、何の感情もない目。

わっ、やばい

感覚が戻った頭は、どこまでも冷静で、どこまでも冷たい。

38th「食らい合い」(後書き)

いえい、ふおう！やっと夏休みらしい夏休みです。課外が終わり、課題に追われる夏休みです。今回こそはへマをしない、と意気込んでも、計画通りにいかないのが計画なのです。

39th 「違和感」(前書き)

違和感、疑問を感じるのは簡単である。猜疑の心を持てば、それだけで全てが怪しく見え、虚構の塊に思えてくる。

39th 「違和感」

集合場所には二人のみ。集合時間はすでに過ぎている。苛立ちを感じているが、同時に焦燥も感じている。

唯一の連絡手段は携帯。しかし、どうしても繋がらない。焦燥を煽る電子音だけが、耳に障る。電波の届かない場所か、或いは壊されたのだろうか。もしそうなら、何かあったという事だ。

「ファル………捜す？」

「当然」

行き違いになるのは怖いが、この焦りを抑える事はできない。考えるだに恐ろしい結末を想像した頭は、体をも縛る。震える手足で、青年達が跳んでいった方向に走っていく。

同時刻。

彼女達が捜し求めている二人は、廃ビルの中にいる。以前は輸出入の手引などをしていて潤っていた会社だが、15年前、密輸を手

引していた事がばれてしまいあえなく倒産。社長を含む五人が捕まり、何も知らない部下には迷惑極まりない。何しろ、首謀者は大々的で、ルートも雑。捕まえて下さい、と言っている様なものだった。

結局、ビルはその後買手が転々とし、しかし、そのどれもが長くは続かなかつた。そうしていつの間にか放置され、寂れ、今の様な事になっている。

余談ではあるが、その社長の名は笹川さみがわ 孝介こうすけという名で、犯罪を犯しても他人の目を気にせず、大通りを堂々と歩いて、去年出所している。

埃が舞い散り、目が痛くなる。口で呼吸をすれば喘息になりそうだが、しないでいる方が、暴れまくる心臓を抑える事はできなさそうだ。麻痺していたものが一気に雪崩込むから、無理もないと思える。

「……っ……ありがとな、一季」

「お礼はもらえないなん。暴れんなよん」
「?……ああ……マジか」

自分を罵倒したいが、駄目な様だ。まだ冷静過ぎて冷たい。自分の左腕が失くなったのに……ああ、全然痛みも驚きもないや。どうしてくれようか、この左腕。

「お食事中すまんなん。このまま帰してくれるって事はん」

「……ム……り……ダ」

「……どうして話せるんだ？」

「そりゃあ、ちょっと取り戻したし、上半身だから少しは知能を取り戻したんだろん。それに癒着した時間も長そうだん」

「・・・・・・・・ソ・・・・・・・・ノ・・・・・・・・トオリ・・・・・・・・」

「ただ、殺して食ったから得た感情はないし、楽に殺せる体にはなつたなん」

講釈を聞く暇はない。逃がさない、というなら闘うしかない。意思を示すなら、どんな行動でもいい。立ち上がるなり、武器を向けるなり、目を合わせるなり・・・

「dream out」

言葉を紡ぐなり。果たして一触即発。これでもう退けない。

「おい、アズマ」

「大丈夫さ」

「・・・・・・・・なら、せめて止血ぐらいしろよん。・・・・・・・・痛みはん？」

「不思議とない」

「囚われてはん？」

「不思議とない」

「・・・・・・・・ホントに大丈夫かん？」

「至って平常」

確かに左腕が落ちたのに、何の感情も浮かばないのはおかしく思う。激昂もなければ激痛もなし。麻痺して後に痛みを感じるなら、それはそれで怖い。それはそうと・・・

「意外に真摯なんだな」

「・・・・・・・・イキナ・・・・・・・・リ・・・・・・・・ツッコ・・・・・・・・メナ・・・・・・・・イ・・・・・・・・ダ

「
」
「そこも人見知りか」

右手を何度か開き、動作の確認。特に問題はないし、特にを省けば微妙にバランス感覚が歪な事。ともかく、これ以上失うものが出る前に終わらせてしまおう。

「ふー………っ！」

右手だけでは大したスピードもなく、速さに伴う威力もない。無意識の内に左手を添えようとしているが、ないものにプラスチックアはつかない。

横に払う一撃は難無く躲かれ、槍の勢いを止める物はコンクリが剥き出しの壁だけである。粉塵を上げ勢いがなくなる。漸く、槍を手元に戻す。

攻撃が来る事に対して、素早く、不器用に、余計な動作を入れながら成り損ないを見ている。

目の前に攻撃が飛んでくる、なんて事はない。漸くを待つほど真摯だった。

「め……めんどい」

早々と結論づけるのも難だが、これはもう面倒以外のなにものでもない。

「一季……帰りたい」

「ば、馬鹿！よそ見すんな！！」

振り向いても一季の姿がない。擦れ違いというには早過ぎて、擦れ違ってすらいない。一季の姿は、自分と成り損ないの間に割って入っている。

「一季！」

「バーロウ、よそ見すんなよん。どうやら、視線を気にするみたいだからなん」

一季と何秒相對していたかはわからないが、相手はすでに距離をとっている。手元には何も無い。想造しているモノは不明。しかし、左腕は引き千切られたと感じるより、鋭利なモノに切断された感じがある。

「一季は見えたか？」

「残念ながら見えん」

後ろ向きで顔は見えないが、険しい顔をしているだろう。ただわかる事は、何に対しても視線を気にする事だ。

「め〜ん〜ど〜い〜ん」

「メイドイン？」

「日本生まれ、日本育ち、人からできたヤツだなん」

「緊張感が全くねえよ」

対処法一。ともかく、目を切らない。人見知りな人ほど他人の視線に敏感だから、常に挙動を気にすれば多分大丈夫。

「一季！」

「あいよん」

対処法二。同時進行で相手の視線の先を見る。目が合えば自分が、違う向きなら誰を狙っているかがわかる。

「ひゅーん」

「遊ぶな」

「だってなん、スリルがないだもんなん」

「お前だけだ」

わざと視線を逸らし、気配だけで避けている。確かにそこらのものより、嫌悪という存在感は断然強い。見えなくてもわかるにはわかる。

「後ろに壁、左足元に瓦礫！」

「はいよん」

対処法三。狙われてない方が、障害物、スペース、足場の有無を知らせる。何かに足を引っ掛ければ、反射的に倒れる方に目を向けてしまう。その間に襲われたら、文字通り目も当てられない。

「後ろに足場なし。更に周りにもないよん」

「げ」

踵に抵抗を感じられない。つまり後ろは穴。確認すれば安全地帯は視認できるが、そっちは許してくれない。

「……！」

一季。

視界の端に映る人影。あくまで意識するだけで、視線は送らない。冷静に判断し、この場ですべきなのは視線を逸らさない事。

一季の姿が成り損ないのカラダで見えなくなる。カラダに変化はない。静寂になり、一季も一言も喋らない。

「……………一季」

「……………」

静謐から一転、体から血を流しながら、慌ただしく後退する。

「一季！」

「目を切るな！！」

忠告は遅い。心配からくる視線の移動は、敏感にヤツは捕らえる。動ける時間は0.1秒。横を擦り抜ける事は不可能。下がるうとしても後ろは謎。振り向いて、場所の確認だけで2テンポ遅い。

なら、さっさと後ろに下がる。振り向くのと場所の確認は後回し。生きる方が大事だ。

躊躇せず、迷わず、後ろに跳ぶ。上着を掠り、動作の余韻が見える。恐怖に耐え兼ね、すぐさま振り向く。

約5メートル。壁が見える。だが、臆病風に吹かれたか、距離が少し足りない。素直に下に落ちた方が、無難な選択な気もする。

ワンダーを踏み潰し着地。こちらに向いてくるヤツラを槍で貫き、

上を仰ぐ。成り損ないの姿は見えない。

「ええい、邪魔だ」

集ってくるワンダーを払いのけ、下った道をまた上る。時間にして十秒にも満たないが、急がせるには十分である。

よくない考えが、心をざわめかせる。負傷した一季が心配だ。足手まといかも知れないが、いないよりはマシだろう。

見える姿は一季の倒れた姿。視線は成り損ないに釘付けだが、危険な状況には変わりない。

さつきと似通った場面。俺と一季の立場が逆になっただけ。そして脳裏を横切るのは、さつき一季が受けた傷。俺も攻撃すればそうなる可能性はなくもない。

だからといって、手を拱いているのもできない。相手の得物を確認するのにもいい機会かも知れない。動くなら動いてしまおう。重心を低くし、足音は極力立てずに槍を引く。空気を切る横風ぎよりはばれないと思う。

狙いは上半身。下手に殺せる様になつたウィークポイント。

人を殺す。

もう人じゃない。

殺してくれ、と言っている『様な気がする』。都合のいい無言の返答だ。

それでもいい。今後生き延びたとして、コイツはどうする。もう

人として生きられないなら、殺した方が情けだ。

迷うな。答えは出てる。

槍を突き出し、カラダを貫く。骨の抵抗があり、血が流れる。心情を波打つ現実を抑え、そのままの状態にいる。溜息を一つ。静かに力を抜く。

「ばっか癪頭、避ける！」

疑問も浮かばない。忠告の方が若干早かったが、反応したのは遅過ぎた。

見えないところからの、突然の衝撃。刺激された場所は背中。血が流れるのがわかる。やべえ、凄く熱い。

見ようとして、強引に振り向くと、背中 of 違和感は消える。変わりにまた死角から鋭い痛み。

漸くわかった。一季がヤツの武器を見えないのも、俺が見えないのも、全部コイツが見せてないだけ。人見知りだから見せない様に、透明にしているだけだと思っていたが違うみたいだ。早とちりした。コイツにとって死角は『死』そのもの。人見知りという可能性もあるが、喰らった感情は『慎重さ』という可能性も入れておくべきだ

った。

二人で見えていたって意味がない。必ず、二人の死角から攻撃するから。挟み打ちなど思う壺。いや、感情的の欠陥と言えるだろうか。

「げふ……あつ……が……」

喉元を掴まれ、片手で体が宙に浮く。頭も浮いてきた。何も考えられない。

視線は上方。無理矢理上に向かされている。全部が死角。攻撃されるところが最大になる。

「放せよ、このやろう!!!」

一季の声が聞こえる。聞いた事のない程、切羽詰まった声だ。一季らしくないな。大丈夫、まだ動けるから。

……あれ？何だ、麻痺してんのか。だからか、妙に焦りもないのは。あーあ、どうしてくれようか。まったく、鈍ったかな。だから体動かしたのに、肝心な時に動きやしない。

どうやってたかな、やる気の出し方は。いつも何を思い浮かべてたっけ。駄目だ、頭がくらくらする。

「……ぐ……あ……あ」

何も感じない。痛覚、触覚、嫌悪感、何も感じない。多分体はズタバ口で、裂傷で大量に血が出てるだろう。なんだか、眠くなつて

きたな。

「アズマー!!!!」

寝させてくれよ、一季。やっぱり、いきなり生活のリズムが崩れると眠気が凄い。でも、ちゃんと学校行くから、弁当作ってやるから、それで勘弁してくれ。

「アズマー……っ、江湮はどうすんだよ!!!!」

江湮。いつも側にいて、いつも一緒にいた奴。でも不思議とストレスは溜まらない。寧ろ、生活の中に溶け込んでいた。江湮は今、寝てるんだっただか。俺の所為で。

最近見舞いに行ったけど、何も変わらない。話し掛けても、変わる筈がない。はっきり言って怖かった。このまま、目的のヤツを消しても、戻らないんじゃないかと。

でも、そしたら何の為にここにいるのか。

やっぱり、それも変わらない理由があるからなのか。そう、そうかも知れない。都合も何もかもよくない。自分の意思でいる。

「……そう……だったな。……まだ………寝ちゃ……
駄目だ」

右手に力が入る。首を締めるテに抗う。抗うというよりは添える程度のもの。それでも発端にはなる。

「……ぐ……あ……」

指先から順に力を、意思を入れる。感覚が麻痺しているなら調度いい。痛みにぶれる事はないし、いくらでも限界を定めても構わない。

「・・・dream・・・out」

継続を忘れていた動作。一からの組み立てになるが、さほど大した事じゃない。さつさと組み立ててしまおう。

成り損ないのウデに埋まる程に込められる握力。痛みがないからテは離さないが、意識が掴まえている彼に向く。

「・・・・・・・・マ・・・ダ・・・ウゴク」

「当たり・・・前・・・だろ」

常人なら痛みによる反射で、手を離す程の力が入っている。が、それでもまだ引き剥がせない。右手だけでなく、左手もあればよかったかも知れないが、今はもうない。

「・・・ネバ・・・ル・・・・・・・・ナ」

「諦めが・・・悪いんだよ」

「コイ・・・ツ・・・モ」

「・・・っ!」

「一季」

「心配すんなよん。いーま、助けるからなん」

声からしてかなりヤバそう。畜生、馬鹿野郎、何やってんだよ。さつさとイメージしてメイクをする。鈍ったのがこんなに祟るか。フィードバックなんて関係ない。

早く、早く早く早く早く早く。

横から伸びる誰かの手。誰の手か。他にいるのは緋色かファルか。十分それは有り得る事ではある。有り得る事ではあるが、それは違う。

「……………ん……………」

「あああああああ!!!」

強引に引き剥がされるテ。アズマの首にはツメの跡が残り、少なからず肉を削られた。そこは瑣末事である。

問題点はさつきまでなかったアズマの左腕が、今はあるという事だ。

問題にしてないのは当の本人くらいで、しかし、外野も構っていない場合ではない。

引き剥がしたはいいが、フィードバックでその場に座り込む。動こうにも動けない。チェックメイトからチェックに戻した様なものだ。

「……………つ……………く……………」

何とか視線は定めたが、これだと一季の背中が死角になる。一季が俺を助けようと成り損ないに攻撃すれば、距離がゼロになり今度こそ危険だ。

そんな考えをしている間に、成り損ないがアズマに背中を向ける。つまり、一季の方に振り向いた。視線が外れ、一季に合わせる。アズマも人の事は言えないが、一季も満身創痍である。

一季の目を見た瞬間、感情は寒色で塗り潰される。背筋が震える感じ。体温が低下するのがわかる。

普通、無くした感情を他人に感じさせられるか、と聞かれればノーである。疎いというのに、何をすれば与えられるかなど考えられない。

一季の消失した感情は恐怖。彼自身がそう言い、その言葉通りの感情表現だった。だから、一季の雰囲気を与える感覚は、アズマにとって疑問であり、直視できないほどに異質であった。

「・・・ア・・・」

それも終結を迎える。成り損ないから生える何か。それは頭を貫き、僅かに脳漿を飛び散らせる。直後に、カラダは倒れ、一季から発せられる感覚も消えた。

「・・・緋色かん」

呆気ない終幕だが、それでもいい。終わってくれば、あとは過去として時間と共に風化していく。

いくらか経っただろうか。先ずファルが来て、いつもの様にアズマに突撃。そのあと来た緋色が憤慨したのは何故だか知らない。何かお互い砕けた風に見える。

「で、なんで携帯が繋がらなかったの？」

「んみゃー・・・充電切れだよん」

アニメの見すぎ。よりにもよって電力を一番使う機能だし、元々充電してないのもあるが。

「アズマと一季は大丈夫なの？」

「大丈夫？」

「・・・まあ」

「・・・ぼちぼちなん」

「?・・・」

お互い顔を合わせない。歪に、何か胸の内に入り込んだものがある。気にする暇も、言い出すタイミングも逃し、不快な感情を発している。

アズマの左腕、肘の関節から少し下の部分。他は血だらけだが、そこだけ綺麗で、違和感を振り撒く。

一季から感じた恐怖。今はもう感じないが、はつきり、全身を震わせた圧倒的な死の連想。疑問に思わずにはいられない。

二人が問い掛けたい言葉はどちらも同じである。それをお互い気づいているから、言い出せない。胸中で何度も連呼している。

「お前、いったい何者なんだ」

四人の見てないところで、崩れていくものがある。それは人の左腕で、微生物に分解されるより早く、形を失い、空気中に姿を消していった。

39th 「違和感」(後書き)

変化をつけたり、抑揚をつけたりするのがかなり苦手です。まあ、そろそろ動き出そうとしてますが、読み返してフラグを回収しないと、無茶苦茶になってしまふ。それだけは、どうにか、頑張っただけなのですけど、むつかしいです。

40th「離合」(前書き)

常日頃からやっていた事をふけると、気持ちが悪い。部活でも、勉強でも、バイトでも、仕事でも、やらなかった日は何故か後ろめたい。

週末からだっただけだが、日曜日を抜けると急に寒く感じる。まだ夏の気配が抜けなかつたり、もうすぐ冬がくるかと思つたり、どつちつかずだつた季節は、漸く順序よくコマを進める。

屋上はめつきり使用者が減り、数えるほどにしかない。元々少数だつたが、その所為で数の増減は分かりやすい。

「よっ、緋色」

「ヒイロ」

「・・・うん」

少し間をおいた返事は、疲れが残っているのを思わせる。いや・
・違う。恐らくは自分の所為だろう。

妙な違和感を醸し出す左手。昨夜の出来事は記憶としては鮮明過ぎて、現実としては荒唐無稽なものだ。それは非日常の中でも言える現実だつた。

なくした腕は生えない。切断した指がまた生えるという話は聞か
が、腕から下となると最早話にならない。無意識の内に想造したか
も知れない。そんな考えも行使を止めにした瞬間に瓦解する。

一季もそれは同じ考えだったらしい。あのあとのらしくない顔と、自分との間にできた溝は、空しい風が胸を吹きすさぶには十分だった。

それは自分も。あの黒に塗り潰された感覚は、胸中の中心に突き刺さっている。

「早いなん、三人共」

長袖を着て、ふらふらになりながら来る一季。長袖を着ているのは、寒いからではない。包帯を隠す、所謂隠れ蓑みたいなもの。蓑ではないから隠れ服というべきか、そこは流れる雰囲気消え去る。

「お腹すいたから早く食べようよん」

「・・・そうだな」

いつもと変わらない風景。でもそれは、そう振る舞っている様には見えない。何故かと聞かれれば、壊したくないから。

関係を、親愛を、数少ない日常を、今いる時間を失いたくないからである。

正直、真相を知るのが怖い。一季も怖いとは感じなくとも不安とは感じているだろう。その証拠に、全然目を合わせない。ちらちらと、盗み見るのはアズマの左腕ばかりである。

罫が入るのは少し。ただ、少しずつ力を入れただけで罫は拡がり、気づいた時には裂け目となっている。この、今いる時間が、このま

まで済まそうとしている思惑が、その行為となる。

「今日の夜はどうすんだ？」

「コンディションを考えるなら、延期にした方がいいわね。一季」

「ん、厳しいかなん。うん」

「アズマは」

「ああ・・・俺もそう思う」

延期にしたい理由は他にもある。だけど考えたくはない。そこま
で、一季との間に溝ができたなんて。考えたくないが、直視もでき
ない。馬鹿みたいだ。まったく、本当の馬鹿だ。

一季とは教室で別れ、緋色とは屋上で別れた。用がある、と言っ
ていたが大した事ではないと思う。意味があるのは、その時何か言
いたそうな顔だったが、何も言わない。語るべきは一季とある。そ
れをわかっているからこそ、緋色は何も言わない。

歯痒い。

一言で表すなら、他にも微妙とか、遣る瀬無いとか、煮え切らな
いとかもありそうだが、歯痒いが適当に思える。実際、歯だけでな
く至る所が痒くてしょうがない。むずむずする。

溜息を一つして、次の事について模索。勿論、次の授業について
ではなく、何をどう切り出すか、という事だ。多分ではなく確実に、
話したら・・・結末はずっと悪い。

「どうかした？元気なさそうだけど」

「・・・あんたか」

存外ぶつきらぼうな返事だと、口にしてから思う。心ここに在らず、な訳だから後で怒らせるより、今気分を害させる様にした方がいい。しかし、そんな考えとは別に特徴のないいつもの顔でいる。

「いつもの大きな弁当箱がないね」

「あ、そうだな」

どうやら屋上に忘れたらしいが、それほど重大には感じない。少し面倒だとは思うが、それ以上は心の奥底に沈む。

「・・・・・・悩んでるみたいだね」

「・・・・・・淒くね」

悩みを打ち明ける仲ではないから話さない。なにせ名前も知らないのだ、この自称友達は。

「それは話してもらえる？」

「話せる内容だとしてもあんたには話せない」

「酷いいわれようだね」

「だって名前も知らないし」

「知らないんじゃないくて、覚えてないんですよ」

「それはあんたの解釈だ」

「それじゃ名前を言っつて、思い出したら話してくれる」

「それはどうか。そうでなくても教えるかどうか」

この記憶に刷り込ませる様な話し方が違和感を感じる。忘れている様なら失礼だが、この口ぶりからだとは本当の事かも知れない。確かめる術などありはしないが。

「おつと時間だ。じゃあね、東広」

時計を見ると予鈴の5分前。真面目をそのまま顕したらこんな感じだろう。特徴のない所が特徴的だ。

「ちょっと待った」

「何かな」

「名前を聞かせてくれないか」

名は体を表すが、田中 一郎なんて有り触れた名ではないだろう。

「・・・黒井 徴」

「やっぱり知らない」

「ちゃんと思いついてね、東広」

既視感もない。ノイズと黒が曖昧なグラデーションを描いている記憶には、あの背中はない。幼く、少しの間いただけの他人を親友と呼ぶユーモアな奴だろうか。

「アズマ」

「うおっ、緋色。・・・どうかしたのか？」

「忘れ物」

緋色の手には、波模様の風呂敷に包まれた弁当箱がある。とりあえず、感謝をして受け取る。

「・・・さっきの人は誰？」

「見たのか」

「で、誰」

「さあ。元隣人を親友って呼ぶ奴」

「そうゆう関係だったの？」

「わからない。引越したそうだ、俺は」

「・・・そう」

「・・・俺って、引越してここに来たのかな」

その疑問さえも、答える人はいない。例えいたとしても、全てを信じる事はできない。それを知っているのは、江湮の両親ぐらいか。

「無理しないでいいわ。アズマはアズマ、今ここにいる。それでいいの」

「でもなあ、怖くないか？」

「何を今更。おかしいのは昔からよ」

「・・・昔からね」

緋色に悪気があった訳ではない。ただ、昔話をされると覚えてないから、つい渋い顔になってしまう。

「・・・無責任かも知れないけど、私だって、勿論一季もファルも一緒にいるだけで嬉しいのよ」

本当に無責任だな、と文句は言わない。そうであって欲しい。自分自身がよくわからないのに、こんな自分でも一緒にいて嬉しいと言ってもらえるなら、それに越した事はない。

そうなら、早めに話して打ち解ける方が無難ではないか。

「ちゃんと話しなさいよ」

「ご助言ありがとうございます」

結局こうなるのだ。さっき目で諭した意味がない。だから、感謝の言葉は目で諭しておく。

問題は一季とどう話すかだ。ロじゃ一季に勝てないし、恐らく逃げよとする。上手く逸らして、はいおしまい、なんて展開になったら面倒だ。正面から話し合うのがいいかも知れない。

「ファル、帰るなら緋色と帰ってくれ」

「アズ？」

「ちよつと一季と話す事があるから」

「ほっぺちゅー」

「・・・えー」

まったく、ファルも交渉が上手くなったものだ。さてさて、それはともかく最初は部活に行くか、サボるかを見なきゃな。

授業を全て終えて、人込みに紛れて一季を捜す。見つからないかも、と思ったが拍子抜け過ぎるくらい杞憂に終わる。眠たそうな横顔を見ながら、一季を尾行する。

周りに三人ほどいるのは、見覚えがある。招福に来たメンバーだ。という事は、あの三人は陸上仲間か。全員向かってる方向は一緒だし。

見つかると面倒だと思いながら、角に消える一季達を、極力足音を立てず近づき角から顔を出す。

「ヤッホーン。アニメの見過ぎかん」

もし、目の前に女子の顔がアップで現れたなら赤面もの話だが、男子が男子に赤面したら性癖を疑われる。

何はともあれ、見つかってしまったものはしょうがない。開き直る事もしないし、何をどうしようかも思い付かない。言い訳の言葉を模索する事にしよう。

「あれー、どうしたの東君？」

「陸上部に入部希望？」

「あー、それあるかもね」

各々勝手に想像しているが、どうにも落ち着かない。元々視線が集まる事に慣れてないからだろう。どうにか打開できないかな。

「・・・ちよつとスマンねん。今日部活サボるなん」

「またかよ」

「まあ、サボり魔だし今更っていう気もするけどしっかりしてよね」
「今度埋め合わせね」

「はいよん」

さいならん、と手を振り見送る。緩い雰囲気の流れていたが、一

季が振り向く時には、それが重くなったのが判る。予想していた事だ。

はつきりと、一季は俺を敵視している。

「驚かないのなん」

「まあな。ちよつと驚いたかな」

「で、何か用があるんだろん」

「この歯痒い隙間をどうにかしたい」

「歯痒いねん。ま、なかなか癖頭が何者かはだいたい心当たりがついてるし、癖頭も僕が何者か知りたそうだしねん」

何者だとかを知りたいのかは不明。ただ、壊したくない日常に罅を入れたのは解る。どう転がるかは、今後の行動次第。修復できるか、若しくは飛び移れない程に離れるか。俺も一季も前者を望んでいるのは、恐らく間違いない。

「癖頭は記憶がないから、自分の説明はできないん。でも僕は十中八九、癖頭が何者か予想できてるん。そして、自分が何者かもわかってるなん」

「・・・ああ」

「だから勝負だん」

一季の言っている事は事実だ。予想が何なのかは知らない。そして、それは自分じゃ話せない。俺が勝負に負けたとしたら、一季にリターンは少ない。考えれば、対等じゃない時点で勝負は成り立たない。

「癡頭が勝てば、予想、その他諸々全部話そん
「でも」

「そう、癡頭が負けた時のペナルティーはあまりにも軽いん。だから、そうだなん・・・負けた時は陸部にでも入ってもらうかなん」
「そんなんでいいのか？」

「なら他に代案はん？」

「んー・・・」

「・・・ダメダメだなん」

「うっせえ。で、勝負の方法は？」

「そうだなん・・・鬼ごっこ」

真面目な顔して言うものだから、つい流しそうになった。もっとう違うものかと思っただが、これでは勝負ではなく遊びだ。

「何故？」

「別にかくれんぼでも、腕相撲でも、あっちむいてほいでも・・・
殺し合いでもいい」

「・・・」

「ま、それだと癡頭が圧倒的不利だし、殴り合いなら負けなし」
「どうだか。昨日怪我したし、フィードバックで体がたがたなんじやないか？」

「・・・嘗めんなよ」

思わず一步退く。昨日程ではないが、それでも首の後ろを掴まれた感覚がする。直ぐにでも致命傷を与えられる。そんなプレッシャーがある。

「ともかく、場所は・・・そうだな、学校にしようん」

「何時だ？」

「深夜とともにスタート」

「いつまで？」

「んー・・・登校時間まで」

結構な長丁場になりそうだ。いろいろ準備しておかないと、途中で倒れるな。

他、ルールを決め、とりあえず別れる。呆気ないとも言えないし、拍子抜けとも言えない。そのまま即、何かありそうな気もしたが、それもなし。参戦しておいてなんだが、主旨がなんだかさっぱりわからない。意味すらもわからない。

一季の悪戯としか思えないのは何故だろう。

一握の疑問をしまい込み。弓道場で待っていたファルを連れて帰る。ファルに今夜の旨を伝え、強引に納得させる。

助力はいらない。意地ではなく、これは一種の決闘だから。考えてみれば、一季の優しさとも考えられる。敵視はしても一線は引いている。俺の事を何だと思っているかは知らないが、あれだけの殺意を込めていながら、戦闘にはならなかった。

だけどあえてしなかった。人目につく可能性もあったからかも知れないが、鬼ごっこという戦闘を選んだのも、一季の優しさと考えてみたい。まだ、親友という立場にいれる事を嬉しく思う。

「んじゃ行ってくる」

「夜食、作る、待ってる」

「いや、いいよ。帰って家がなくなったら困る」

「まー」

何がしたいかなんとかなく理解できるが、余計な事をしないで家で寝てほしい。時間は11時30分を過ぎた頃。いろいろと準備し、最低限の物から、必要性のなさそうな物まである。持っていて損はない筈だ。邪魔にはなりそうだが。

やはり、一度建物の中で嫌な思いがあるからだろう。サバイバルにでもって訳ではないが、これは実際死にかけた。身震いするから思い出すのはもう止めにしよう。

「さて・・・怖いな」

夜の学校というのは、ホラー映画には定番の舞台である。そんな場所に近づく機会があるにしても、絶対近づきたくない。凄く抵抗がある。あーあ、一季の陰謀かな。絶対、わかっててやってるよ。

「・・・ここかな」

不法侵入した学校を散策する訳ではなく、直感である教室へと入る。そこは一季の教室で、窓際の席を見る。予想は怖いぐらいに的中。実際に人がいて、心臓が若干飛び跳ねた程だ。

「よっほん」

「やつほ」

「それにしてもよくわかったなん」

「なんとなくだ」

「流石に幼なじみだもんなん」

「・・・何年間の？」

「ふ・・・それも賭けに入れるか」

「カツコつけてもカツコ悪いぞ」

いきなり不機嫌な顔になる一季。してやったりと思えるし、何とも言えない感じになる。同時に後悔もしてしまう。今の状況に溜息をつきそうになる。

「さて、もうすぐかん」

「目でも閉じるか？」

「そうだなん。始まるまで目を閉じててくれないかん」

目を閉じると、気配が横を抜けていく。何故か空しい。理由はわかる。でも今思うのは反則。思ってしまったえば、目を開けてしまいうことになる。

簡単にはいかなかったな、と改めて思う。昨夜の騒動から一転して、今に至っている。元はと言えば、この体を説明できない自分が悪いのだ。ちょっととした傷なら直ぐに治った体だが、まさか腕まで治るとは予想外だ。生えるとも言ってもいい。

この体に理由はあるかと聞かれれば、わからない。一季はあの恐怖を与える事に説明ができるみたいだ。ここからして対等な立場ではいけない。だからこそその勝負なのだろう。そういえば、あまり思い出そうともしなかったが、いつから一季と知り合ってただろう。

劣化した、黒い記憶に音声などついていなく、誰がどれだかわからない。細かい所まで自信がなく、求める記憶が大雑把過ぎて曖昧である。余程印象的でない限り、思い出せそうにない。気づいたら一季がいて、緋色がいたという感じのものはある。

一季がそれらを覚えていてるみたいだが、覚えてなくてもアルバムが何かに記録を保管しているだろう。カメラでもビデオでも。自分の家にはそうゆうものがない。緋色の家にもあるかも知れないが、緋色と何年の付き合いかわからない。自信のある一季の方が堅実だろう。

「そろそろか」

闇に慣れた両目は、時計の針が12時を差すのがはっきり見える。深呼吸をして、教室を出る。緊張感が恐怖か。微妙に体を震わせる感覚が解らない。一季相手に六時間は足りない。一分も惜しい。迅速に、冷静に行動しよう。

暗闇の中での鬼ごっこ。人ならざるモノや、命を落とす事はなくても、気を抜く事はできない。イベントとしてはインパクトに欠けるが、遊び心を捨てないと恐怖に吞まれる。

40th「離合」(後書き)

ちよつとこの話は苦しんだ感があります。仲良しだったのが、いきなり気まづくになる事がなかったので、どうゆう心境だか考えられないのです。いやいや、そうゆう人間関係がない訳ではありません。友達いっぱいいますよ……多分。

多少というか、結構違和感があるかも知れませんが、力不足な私に慈悲をくれる事を願います。

41st「Midnight Trick」(前書き)

闇は、悪戯心を、恐怖心を、安堵を、好奇心を、睡魔を与えてくれる。正と負の感情を両立させるのが闇。それがどちらに偏るかは、その中に何もいない時か、何かいる時だ。

深夜。起きている者は、安眠に包まっている者よりは少ない。夢の中まで起きている、というなら話はまた別になるが。

「……………」

「そんな近くでテレビを見ないの」

アズマの家には、深夜の闖入者がいる。誰とは言わずともわかる。では何故？恐らく、多分、胸騒ぎ、脳裏を過ぎる、なんとなく、こくなるのではないかと思ったから。

根拠はない。根拠はないが、いちいち理由付けをしなくてもいい。本当にただなんとなくの行動。案の定、家ではファルが一人。アズマは出て行った後だった。

「……心配？」

「べっ」

「その番組面白い？」

「べっ」

ファルはテレビの前で、面白くもないバラエティ番組を見ている。見ているというよりは、たまたま視線がそこにあるだけ。そこらの、視界に入る周りの景色と変わらない。

「何か食べる？」
「食べる」

眠くはない。眠りたくない。眠れる筈がない。眠れない。夜は長く、でも惰眠も安眠もできない。惰眠も安眠も、安心しなくてはできない。この家に家長はいない。それだけで違和感を感じるのは、彼の存在が大きい。全てを包む包容力は、安心を与える存在は、彼がないと発揮されない。それまでは、眠れない。

恐らく、多分、胸騒ぎ、脳裏を過ぎる、なんとなく、彼の居場所
はわかる。でも行かない。決まってそうだ。この場合は行かない方が、『彼ら』の決心を鈍らせる事はない。負けず嫌いなのだし、白
黒つけようという、決心をブレさせてはいけない。

深夜。意味もなく起きてる人は少ない。意味があつて、今は起きている。どんな理由でもいい。自分にとって、それだけが『眠い』
よりも勝る感情であるなら。

恐らく、多分、胸騒ぎ、脳裏を過ぎる、なんとなく、黙って待っているしかできないのは、何故か時間が長く感じて仕方ない。

呼吸が静かだ。静か過ぎて鼓動が遠い。冷静とは言えない胸中。遠く聴こえるだけで、胸に手を当てれば大きく跳ね返す。

確かな足音。廊下を反響し、その音は一つだけ。まるで世界に一人だけ、という孤独感もあれば、この学校には自分しかない、という支配感もなくはない。しかし、それらに繋がるのは黒く塗り潰される負の感情である。

さ迷い歩く訳ではない。一季の行動パターンは、わからなくもない。ただ、こつゆつ時に限って、ランダムに、勝手気ままに、テキトーさを闊歩させる。

「・・・・・・・・」

一階から風潰しに散策しているが、影すら見つからない。教卓の影、机の下、掃除用具入れの中、ベランダを覗いても、痕跡もない。

「・・・・・・・・ぶはあ」

リュックの中にあるペットボトルを取り出し喉を潤す。時間は惜しいところではあるが、焦って見つかる訳でもない。それを見越してこの制限時間。余りある時間が心を削る。

「ん・・・・・・・・げっ」

耳を刺激する音。左右に振れる文明の光。急いで飲み物をリュックに戻し、ベランダに出る。極力音を出さずに窓を閉め、物陰に隠れる。教室に入ってくる誰か。一季ではない。見回りに来た夜勤の先生だ。

懐中電灯の光が頭上を横切る。今まで以上に脈動する心臓。他人の心音なんて聴こえるとも思えないが、無意識の内に体を小さくし、形だけでも音を押さえようとしている。

一季とのルール。他の人にはばらさないとというルール。知っているのは何人でもいい。しかし、参加するのは二人だけ。互いに互いしか見る事はできない。

遠くなる足音。もう大丈夫だというのに、余韻が残る心音。呼吸を忘れていたのか、咳込みながら酸素を取り込む。どれだけ神経質になっているのやら。

「ふー……」

喉を潤したのに意味がなかった。また渴き、唾だけでは潤せない。見回りも遠くなった事だし、動き出さなければ。

背中にかかる重み。だんだん煩わしく感じてくる。携帯食料もあるから、少し食べて軽くするか。食べ歩きしても構わないだろう。しかし、こつゆつのはあんまり好きじゃない。食べるなら食べる時にながつつり食べたい。

「……どうだったかな」

一季の服装は。コンビニの物が結構好きで、おにぎりとかサンドイッチばかり食べてたな。外食は基本ない。専ら家で食べてたな。よくは見えなかったが、そうでなくても何か持ってる筈。で、食べるならやつぱりおにぎりとかか。

ゆっくり食べる派だから、一つ所に留まってゆっくり食べると思

う。基本一人が嫌いで、一人なら何かしながらか。携帯はないからテレビのある部屋。そこにいるかも知れない。

確か会議室に一個あった筈。それも飛び切りデカイやつ。何インチあったかはわからないが、贅沢な物だった覚えがある。

三階の左上、生徒会室の隣にあった。特に自分と接点はないが、過ごしていると覚えるものだ。ともかく、一季の手がかりがあるかも知れないのだし、早めに行こう。

しかし、意識の下に一季のルールがある。見つからない様に、と思うと、見つかったてはいけない、と過敏に連想してしまう。念頭にそれをおいてしまうと、途端に足が重くなる。

見つかっても構わないだろう、とは思えない。一季が定めたルールだ。どうやってか知る方法があるに違いない。

「
」

心臓が飛び跳ねる。鼓膜が音を拾い、それが次の行動を反射的に促す。三階に行く手前。今ならまだ、二階の適当な部屋に入ってやり過ごせる。手早く近くの教室に入ると、息を静かにする。一度目程、動揺したりはしない。

.....

どうやら気づいた様子もなさそうだ。こんな時間に人がいない、と思ってる所為もあるだろう。形だけの作業に怠さや、面倒さが漂うのがわかる。

会議室にそっと入り込み、見渡す。暗く、何も見えないが、いる

事は期待していない。期待しているのはいた形跡。ローラー作戦で、追い詰めていけばいい。

テレビに近寄り、スイッチを押す。反応はない。触れてみるが、温かい感じもない。一度教室を出て、来る様子がない事を確認。プラグを差し込み、電源を入れる。それから流れる音量は普通。ばれない様に、音を小さくした感じはない。

「・・・」

中心にスペースを作り、『口』の字を模っているテーブル。それらにセツトになってるパイプイスを、一つずつ手で触っていく。正確には座席と背もたれの部分だけを触っている。が、これにも一季の痕跡はない。

「むう・・・」

違う部屋で食事でもしただろうか。そもそも仮定だらけで、何の確証もない。一季の性格と長年の付き合いから予想しているだけで、穴だらけの散策である。だとしても頼るのは、縊るのは、当てにできるのは、これらしかない。

もう一度考える。仮定だらけによる虚像を、直感的な判断を、間違えてはいないと思える精神を、再構築し考える。間違いか、と思うとそれだけで崩れる。やる気も、決心も、意思も。そうなれば、眠気に負ける。残り時間を怠惰に過ごしてしまう。長時間とは、そうゆう事を教えてくれる。

無駄と思えるものは無駄ではなく、小さな事を知る布石。何かすれば、それだけ当てを潰せる。

どこへ、何を、そうでなくてもどこへ行つたか、何をしたか、何を考えていたか、過去でもいい、何か手がかりは……

「ん？」

手を触る何か。テーブルの上をなぞっていたら、僅かに、空しい程に小さな抵抗をする。スムーズにいかせない物がある様だ。

手元ははっきり見えない。かろうじて形はわかるが小さい。消しゴムのカス、ではない。それより薄く、柔らかい。

「よっしやよっしや」

手に付いた物を掃い、確かにいたのだと実感できる。あつたのは、海苔の破片とパンくずだ。一季はここに『いた』。それだけで、沈んでいた気分は急浮上。思わず声を上げてしまう。

間違いじゃない。

俄然自信が胸を占める。浮かれる場合ではないが、今だけ感じていたい。一季の事はすっかりわかつている。今更だけど、本当に。何者であろうと関係ない。幼なじみで親友。それに変わりない。

小腹を再度満たし、万全の状態を保つ。夜に消えていく廊下。先は見えない。暗さに目は慣れてるが、夜目がある訳ではない。そんな中で一季の姿は見えない。近づいて、聞いて、触れて、感じなければ捜せない。

さっきの事でそれは解った。からかうのが得意な、というよりは好きなあいつ。おちよくるお調子者。どんな意外な所にいるだろうか。鬼ごっこよりかくれんぼの方が近い。

でもやっぱりそれは、一季のアドバンテージだろう。捜すだけなら、見つけておしまいである。見つかったても、姿を眩ませればゲーム（悪戯）は続く。魚がかかっても、途中で逃げられては意味がない。

「へきよ……!？」

「あ……ん……」

人間、唐突な出来事があると動けなくなる。それは、頭が理解するのに時間がかかるか、動揺が一周して冷静になるかはわからない。わかったとしても意味がない。

とりあえず

「いたあー！ー！！！」

二人とも金縛り罹って動けなかったが、アズマは理解して、一季はアズマの声で、漸く我に帰る。

「ダツシュで遁走ん！」

「逃すかバカ野郎！」

捨て台詞に思わず合わせたアズマだが、すかさず二人はルールに則る。

最初の一步は人並み。二歩目からはいきなりトップスピードにのり、終わりになるかも知れない追走劇の開始。廊下は走るな、なんて良識を清々しい程に粉々にする。良識が見てない裏で、違反を行うのは楽しい。そう、良識は壊す為にある。

壁を足蹴にし、更には天井までも足で踏む。二人にとって、床は床でなく、地上は足場としか考えていない。囲まれた空間と、行使できる力だけが熟せる動きだ。

曲がり角も苦しめない。最高速度を落とさず、床に足を着けず、壁を蹴り続ける。軌道は孤を描かず、足を着けた場所を追えば、角を描いているのが見える。後ろで一季の描く軌道をなぞるアズマはそう思う。

ハイスピードで動く一季に、最高速の伝達速度で反応する体。少しでもバランスを崩せば、足を滑らせれば、ここでの勝負は終わる。だが、それはない。まるで、一季が導くかのように、着地の場所を1センチも踏み間違えない。

壁を蹴り、天井から下へと下りる為に足を蹴り出し、力を下に向け、天井と床の短い空間の中で半回転し、地に足を着けたと同時に走り、カーブを曲がる。一秒にも満たない時間。その残像が焼き付く間に、動きをそのまま、自分の体でも再現する。

行使してからずっとスローな視界。目は一季を追いかけて、体は一季の真似をする。始めはワンクッションしか入れなかった動作も、今は数回、フェイントまで入れている。だんだんと何度が上がっている。目で追えなくなったら最後。オリジナルがなくなったら、ど

う動いていいかが解らなくなる。

思えば目的が、達成すべき事が変わっている気がする。追いかけてはいるが、追いつこうとは思っていない。工夫もなければ、手段も考えない。望んでこの状況を長引かせているのか。寧ろ違う感情が胸にある。

快樂。

あくまでかも知れない。似ても似つかない感情だが、心が浮き立つ事は偽れない。だとしても、今までこんな事はあつただろうか。バトルジャンキーでもないし、戦闘に快樂を求めたりしない。痛く、辛く、寂しく、空しいのが、今までの全てを含めての感想だ。

「!!!!!!」

無重力だった感覚が、急に下へと落ちる。原因は明白。集中力散漫により、足を滑らせた。同時に高ぶっていた感情も、急激に温度が冷める。

「つ……馬鹿が」

手繰り寄せた、幸運とも呼べる邂逅を棒に振った。何と言う愚行により、チャンスは消えた。二度目があるかどうかもわからない。ラストチャンスだったきも知れないというのに。

「くそ！」

一季の消えた先を追っても、もう見つからない。文字通り闇に消えた。フィードバックによる痛みを抑えながら、近くの教室に入る。しかし、体が重い。行使した所為もあるが、あの無重力の感覚が体に染み付いている。重力がこんなにも重いとは、妙な感覚だ。

「ふう」

飲み物で喉を、纏わり付く悪いイメージを流す。過ぎた事は仕方ない、では済まされない。変に何かが頭の上を渦巻いている。でも別にいいだろう。気を取り直して、また捜せばいい。後悔はしてもいいが、足を止めてはいけない。ともかく動こう。

さて動こう、と決意した矢先、慌ただしい足音を敏感にキャッチする。また見回り。そして今度は何か急いでる。早く身を隠さないと。リュックはテキトーに机に掛けて、俺はどうしよう。

迷う間にも時間は進む。ドアは荒々しく開かれ、不安になりながら心臓を震わせる。同じ様に荒々しい足音を立てて、教室を散策している。音が聴こえる。教卓の下から、一つ一つの机の下まで。カーテンの裏も調べている。その音を、心臓の大音量と共に聴いている。外に出る為の窓に手がかかる。ベランダも調べるみたいだ。

やばい、どうする。こうなったらおしまいになる。このままだとやばいやばいやばいやばい……

「……………」

絶望とは裏腹に、早足で先生は去っていく。どうやら違う教室も調べる様だ。先ずは

「 た、助かった〜」

掃除用具入れから、倒れながら出る。本当にやばかった。ベランダに出てたら見つかった。ベランダを調べれば、あと残ってるのはここだけだったが、調べられなくてよかった。それにしてもなんであんな見回りを躍起にしてるのだろう。誰かいるという確証もな・

「・・・あれか」

あった。思いつ切りある。あんな大声出したのだ。聞き間違いで済ませる方が難しい。その上あれだけ走り回ったのだ。誰かの目を掠るのは確実な筈。あれが決定打。

鬼は自分で逃げるのは一季。逃げる者は鬼に対しては逃げるしかできない。なら鬼は？逃げる者には強いがそれより強い者がいれば、鬼も逃げるしかない。敵の敵は味方ではない。敵の敵は利害が一致しないと、第三勢力でしかない。

見つければ終わり。

この条件で自分より強い鬼。一季を捜すのが厳しくなってきた。正直に言えばばれてるが、見つからないまま時間が経過すれば、少しは警戒の糸が緩むかも知れない。行動するなら物音も立てず、気配も感じさせない様にしないとならない。動かない方が無難な気もする。とりあえずは休憩も兼ねて、息を潜めよう。

先ずは何にしても、休む場所を探さなければ。何もしてないと眠

くなる。最低、寝ても見つからない場所が好ましい。今は躍起にな
つてるから探すのは難しいが、体育館の上の通路なら来ないだろう。
寒いのは大丈夫。毛布も持ってきたし、ほんと、いつ役に立つかわ
からない。

重い体を引きずり、体育館へと移動する。時間を残しつつ、適当
な時間までは体力の回復を狙う。眠れるとしたら二時間。それで残
りは最低でも三時間。足りるとは思えないし、それでも粘れるだけ
粘らなければ。

諦めはしない。絶望もしない。投げやりにもならない。それさえ
しなければ、囚われる事はない。暗闇は、いつかは晴れてくれる。

41st「Midnight Trick」(後書き)

夏休み終了まであと一週間。大会まであと一週間。課題は終わってないです。はい、そうです、終わってないです。でも私は信じてます。O型の人は、期日が迫る程に集中力を発揮する事を。実際の何年かは、ラスト一週間で終わらせてる気がします。

42nd「放浪 ホロウ」(前書き)

見解なんて、人の考え次第で変わる。今ある事をリアルととるか、ゲームととるか。全てがゲームだとしたらよかったのだが、それは皺を寄せてるだけに過ぎない。

42nd「放浪 ホロウ」

ふわふわしている脳内。今だ夢心地で、でも見る夢などない方が熟睡できる。そもそも二時間ぐらいでできる眠りも、高が知れてる。

体が欲するのは眠り。目を開けなければ、すぐにでも眠ってしまいたいそう。だから目は強引に、手で開けてもしなければいけない状態にある。些か間抜けに見えるのは仕方ない。毛布を仕舞い、立って一つ伸びをすれば、半端ながらも目が覚める。

残り時間は多分三時間程。気まぐれな人がいれば、もっと早くなる。正直足りないかも知れない。二時間の睡眠を悔やむなら、諦めた自分を責める。まだ諦めないから、責めるといふ無駄な事もしないが。

ともかく、最後にする為に、第2ラウンドを始めよう。

足を踏み入れると、今だざわつく雰囲気は治まらない校舎。一時間経っても、見回り役の先生の警戒網を解く事はできなさそう。もう気疲れをして、諦めてもよさそうなのだが、どうも根性はあ

る様だ。まあ早く落ち着いて・・・

「イーーーーヤアーツホーウ!!!!」

イーーーーヤアーツホーウ、じゃねえよ。あいつか、あいつが引つ掻き回してるからまだ搜索してるんだな。とことん引つ掻き回して、俺の行動の邪魔をしたいんだな。てか、どこまで許せるのか。ルール振曲がってないかな。知られてもいいけど、見つかったは駄目。そつ一季が定めたから、とやかくは言えない。

でも、やっぱりありなのか、こんなの。腑に落ちないのは仕方ない・・・のだろうか。

「どおーこだあー!!!!」

先生もめっちゃ躍起だ。凄い勢いで廊下走ってる。前代未聞だろうし、確実にやけくそになってる。一季の楽しそうな顔が浮かぶ。恰好的ですよ先生、ご愁傷様。

荒れ狂う心を体現した音が戻ってくる。ストレスがよつぽど溜まった足音。見つかつてはいけない、というルールがなくても、今の状態では会いたくない。とばっちりはゴメンだし。

障害物はさ迷う。見つからない様にと、慎重に、安全そうな場所以上に、遠くに離れる。ただし、このままだとジリ貧。謙虚に隠れていたら、見つけるのは困難。だとしても打開策はない。今は一階一先ず、同じ階にいない方が最善か。

上る途中で、また一季の声が聴こえる。大雑把な位置は解るが、具体的な位置は解らない。どうしたものか。時間は、まだ起きてから30分程しか経ってない。当然、眠気も抜け切ってはいない。このままじゃ駄目だ。ダメダメ。全然間に合わない。

リスクを承知で捜してみるか。だけど、いまいち思い切りよく出れない。何か確固たるものを考えてみる。一季はおちよくなるのが好き。いくらルール上だとしても見つからない様にするのは当たり前だが『あえて』の行動をする。

・・・・・・・・どこだろうな？

眠気で頭が回らない。体は動くんだけど。まあ、頭はそのうち覚める。だから覚ます為に体を動かすか。

「すうー・・・イーーヤアーツホーウ！！！」

間違ったかな、とは思うがその気にならないと体は動かない。後悔しないように体を動かさないと。

思った通りにUターンして、こちらに向かう足音が聴こえる。危険を恐怖と感じ、早め早めに姿を眩ませる。上の階へと上りきり、先生とは反対の向きに走る。

今ので一季にはばれた。愚行と罵るかは別として、これはこれで行動を制限できる筈。大々的に姿をばらさなくなるとは思うが、そうすれば捜すのに専念できる。まあでも、静かになるのもう一時間ぐらい必要かも知れない。

騒ぐなら騒ぐで居場所が解る。何度か叫べば位置を取るパターンも解る。どちらにしろ追い詰める事になる。多分、それは一季も気づいている。それを踏まえた上で、どう行動するか。どんな奇策をするかは知らないが、一つだけ解る。また面倒な事でも考えてそう
な事は。

「おーにさーんこーちらん、手は鳴らさないけどおーいでん」

面倒だ。俺までおちよくる気が。なら、想定していた通りに動く
としよう。

今のところ一季の場所はわからない。暗い廊下を反響する声。右往左往する飽きない足音。居場所をシャットアウトする要因はいくらでもある。導いてくれるのは最初の声。発せられる瞬間だけが伝えてくれる。

「おーにさーん・・・」

スタートは早く、先生が辿り着く前に一季の場所に走る。廊下を走り、下に行く。逃げる前に追い詰めれば、挟み打ちにできる。俺に捕まるか、先生に見つかるか、運が良ければそうなる。

「おーに・・・」

声の発生源に着いてもいない。だが近い。というか近すぎる。これだけ近いと視認できる筈。それに声の高低が一定だ。普通アクセントが微妙に違ってくるのにそれも無い。何故か、どこか淡々としてるのが不自然。

その答えは目の前に転がっている。

「おーにさーんこーちらん、手は鳴らさないけどおーいでん」
「・・・想定済みかよ」

あつたのは古めかしいテープレコーダー。最初のやつを録音した訳か。ご丁寧に俺がまた来たのを知ってから。結局後悔する羽目になった。

そして、追い詰める筈が、今度は逆に追い詰められている。

先生が姿を現すと同時に、アズマは姿を消す。しかし、角を曲がればばれる程度にしか姿は隠せていない。頭はフル回転し、眠気もすっ飛ばす状況。抜き足、差し足、忍び足、なんて事をしていけば間に合わない。

「そこかあ！！！」

だから、もう走るしかない。音を出してでも見つかるよりはマシだ。見つかるより、角から顔を出すより、逡巡している間に、自分が即決即断して走るしかない。

双眸が姿を捉える前に走る。姿は角に消え、追いかけるという考えに至る間に更に先へと進む。階段を二段飛ばしで駆け登り、必要以上に角を曲がり、近くの教室に飛び込む。

決断が一瞬遅れていれば、姿が見られ、追走する心に火が点いていた。無意識の判断だが功を奏した。しかし、いくらなんでも逃げ

すぎだ、とは言えない。やはり、過敏に意識をしている。先生「恐怖の対象となっているから、仕方ない事でもある。

それよりも、作戦の練り直しをしなければならぬ。追い詰めた、と思えば追い詰められている。簡単な、小手先のトリックで翻弄される。それもタイミングを合わせて。何でもお見通し、という訳らしい。幼なじみって怖い。

一息ついたところで、唇を湿らせようと飲み物を取り出すが、既に空になっている。ちよつと間が抜けてしまった。他に必要もない物はあるが、思えば一本で済む筈もない。面倒だが喉の渴きを我慢できそうもない。素直に水道の水を飲むことにしよう。

周りに意識の糸を張り巡らせながらの移動。耳と感覚、琴線に触れたら即座に体を反応させる為に、体は緊張している。目は覚めたが、まだ深いところで沈んでいるものがある。喉に障る水を飲み込み、顔を洗う。水は冷たく、形を変えて沈降しているものを浮上させる。

「はっはっは・・・怖い怖い」

声にした方が、感じている程怖くは感じない。茶々が入っている様に思えて笑える。本当に怖いなら、声にも出せないし、自覚するのも難しい。

改めて感じる深夜の学校。怪談話としては定番化しているシチュエーション。暗さに怯えるより、お化け屋敷にいる様なドキドキさがある。

一度目を閉じて、深呼吸を一つ。自然な状態。学校で受けるテスト前の様な心境ではなく、広い空間で漂う様な脱力感。逆に、孤独が不安を与えるが、それが心を繋ぎ止める。

漸く目を見開ける。曇っていたものがよく見える。無駄に張り詰めていたものが緩む。無駄を最適に、でしゃばっていたものは周りに合わせ、一つ並びになる。下手に疲れる事もないもなくなるだろう。

適度な疲労感。あとは冷静なままでいて、一季を捜して捕まえるだけ。それだけだが、見つけるまでが難儀か。まあ、大丈夫だろう。

開き直ったかどうかは定かではないが、アズマの中では大分樂觀さが芽生えてきた。つまりは時間に対して過敏に捉え、焦りと感じ、軽く囚われてた訳だ。下手に一季の姿が見えるから、考えるとそれすらも悪戯に思える。しかし、そのおかげで周りが見えてきている。一季はちよつと度が過ぎたみたいだ。結果的に、アズマにプラスになっている。

空になったペットボトルに水を入れる。飲む為ではない。できれば、もっと別の事に使う様にはしたい。

水道から離れ、先ずは勝手気ままに歩いてみる。今は捜そうともしてないし、気まぐれさを醸し出す。だからといってジョーカーは引きたくない。安全そうな道を選んでいる。選んでいるがあくまで勘なので、ばばぬきみたいな感じだから・・・

早速引いてしまった。見つかる前にさっさと引き返そう。でも一季っていう可能性もなくはないし、でも一季だとしたら足音は立っていないし、気配も漏らさない。一応の事もあるから、確認だけはしておこう。

リュックから財布を取り出し、一円玉を掴む。手頃な物がなかったとは言え、これからする事は酷く罰当たりだ。今後、金が手から離れそうだから、すみません、とだけ謝罪。教室の出入口から、できるだけ遠くの壁に投げつける。

アルミ質の甲高い音。だが、小さな音。前以て注意深く聴こうと思わないと、耳は拾ってくれないだろう。日頃から周りに敏感な自分達なら気づくし、気づかないなら求める人物ではない。

淡々とした足取り過ぎていく。気づいた様子が足音に影響する訳でもない。確認の為に後ろ姿を見届けるが、どうにも暗闇が邪魔している。近づいてもいいが、自分からジョーカーを引く愚行は、今は止めた方が良さそうだ。

去っていく向きとは逆に意識を向けても、何も琴線に触れるものはない。行き当たりばったりを、運よく会う事を期待したが、さっきあったからもうない。そんな虫のいい事は流石に。

一円玉を拾う。別段どこに向かうとも決めていなかったから、運任せでもいい。道は三つ。内一つは先生の向かった方。どうしようか、と思い、手にあるのは一円玉。それを指で弾き、また乾いた音。掌に落ち、その存在までも薄い。表なら真っすぐ、裏なら鬼とは逆

の道を。

どちらがいいとか、期待もゼロ。テキストにするから、テキストに決めても構わない。だから、出た側に関心はない。結果は裏。自分で定めた通りに足を運ぶ。

後の選択肢は全て惰性。教室の中も、分かれ道も、階段も、気分のままに進んでいる。それは散策というよりは、文字通りさ迷っている様にしか見えない。意味はない。全ては無駄。

だけどそれもいい。責任のある行動は心を摩耗させ、責任のない行動は心を治癒してくれる。アズマにとってはリラックスできる事で、精神の張りを緩めている。今なら、スムーズに行使もできるだろう。

「……………んー」

ただ何となく、心を惹かれて教室に入っている。また無駄な事なので、意味など全くない。意味もなく教室の中を歩き、意味もなく誰ともわからない机を指でなぞり、意味もなく外に出てみる。

秋の寒さが肌に浸透し、思わず手を添えさせる。夜空は星が見えない。曇り空である。月の位置は判るがそれだけ。今夜の光は淡いが、弱すぎる。本能的な感情を昇華させる程ではない。

そういえば、今年の秋は暑かった。今でこそこんな気温だが、秋の暦が季節上から消えたかな、と思える程だった。黙っていても時間は過ぎる。特に消えた秋は黙り込むだけ。何もない。

イーターの発生から約三ヶ月。いや、実際はわからない。三ヶ月

前は確かに、かなしみ、を胸中に収めていた。なのにイーターがいた。他のかも知れないが、確かに顔が、知らない顔を見た。イーターはイーターなんだが、何かよくわからない。わからない。

「へっ・・・きしっ！」

外に出すぎた。体は寒さを訴え、中に入る事を促している。頃合いも良さそうだし、またテキトーに歩くとしよう。

教室に戻ると、タイミングがいいのか悪いのか、暗さを消す光が横切っている。めげない先生だ。本当に先生が一応の確認をしていると、顔が怖い。凄く怖い。鬱々としたものでも溜まっている様に見える。また一季に弄られたのだろう。容赦ねえのな、あいつ。とまあ、間違いなく先生だ。さつさと一季と鉢合う事にしよう。

視線は上下に、焦点を定める訳でもなく、虚空をさ迷っている。けだるい瞳。最早どうでもよくなっている。己の秘密に一季の秘密。知的好奇心を揺さ振る材料ではあるが、初心に戻ると何をしているんだろう、という事になる。

だとしたら、この時間は全て無に帰す。無駄だったが、自分達は責任を背負っている。背負っている以上、妥協は許されない。始めた時点で途中退場はできない。

「イーーーーヤアーツホーウ!!!」

階下に響く一季の声。だが遠い。闇から出てくる声は悪魔の誘いの様に思えるが、実際は全てを終わらせるキーカード。ひくかひかないかは聞くまでもない。

とその前に。

「・・・大丈夫かな」

荷物をテキトーな教室に置き、中からいくつか物を取り出す。そのうちの一つを床に向かって何かしている。第三者から見れば奇異な行動だが、本人からしたらちゃんとした行動である。だが、シルエットしか見えないから結局は奇異な行動にしかならない。

「イーーーーエイエイエイエイ!!!」

「うるせえー」

誰も相手にしないから寂しいのだろうか。先生はもう向かってる筈だし、仕込みも終わった。そろそろ行くか。

「この野郎!!!! 舐めやがって!!!!」

かなり憤慨してる様子。一季の奴、あの先生を胃潰瘍で殺す気なのか。文字通り、過ぎた怒りは身を滅ぼすってやつだな。俺らにも当て嵌まるけど。

さて、一季はどこにいるかな。せっかくおびき寄せたんだ。この様子を見ないなんて事はない。こちら辺で、ゆっくり観賞できる場所といたら、ここだろうか。

当たりを付けた教室のドアに手を掛ける。札に書かれている文字は『家庭科室』。出入口は上下ではなく、左右に一つずつ設置されている。逃げ道が確保されている分、ここにいる確率は高い。

「・・・あらーん？」

「楽しんでるのな」

教室の外を覗いていた視線が、こちらに定まる。とりあえず予想は的中。幸運はもう一度微笑みを授けた訳か。

「どうしてわかったのかなん」

「そんなもん幼なじみだからな」

「へえー、怖い怖いん」

惚けた振りしてわからない笑みを浮かべる。こいつの微笑みは女神じゃないな。悪魔とまではいかないが、障らない笑みだ。

「さて、せっかく掴んだチャンス、生かせるかなん」

「そうさな。楽しい悪戯ゲームは終わりだ。夢でも構わないけど」

「冗談。最後までやらなきゃ、遊びに失礼だよん」

「同感。それじゃ、第二ラウンドだ」

同時に身を屈め、同時に息を吸う。イメージするモノは同じ。限界を定め、限界以上に動く行為。そうして吐き出される言葉も、勿論同じである。

「dream out」

前方へ駆け出すアズマに対し、悠々と構える一季。愚直に、正直に、手を突き出すが、それを簡単にあしらう。迫る掌を躲し、受け流す。前方にかかる勢いを止める間に横を摺り抜け、スタート地点から飛び出す。それから遅れる事コンマ3秒程。漸くアズマも飛び出す。

呆気ない再スタートだが、誰も派手さは期待していない。一季なら退屈を紛らわしてくるならどうでもいい。だから、自身を楽しませる為に動きはどんどん加速する。

「ヒューーン」

タタン、と小刻みの音が連続して響く。動きは初回と同じ。人外としか言えない逃走は、初めからトップスピード。追走する方もそれは変わらない。だが、至って大人しいものである。

「どうしたん、可愛いもんだなん」

「そっちこそ、話す余裕なんてあんのかよ」

アズマの追走は一季の軌道をなぞるものではなく、自分自身で力一歩は孤を描いている。流石に角を描くよりは遅いが、先の事より捕まえようとする意思が強い。

「うわお！」
「ちっ」

横から進路を塞ぐ様に出た手が空を切る。掴んだ、と思った瞬間、進行方向とは逆に思いつ切り床を蹴り、逃走者は反対側へと跳んでいく。

「あつぶなん」

遊び心が充満していたが、その空気は一季の肺から溜息と共に抜ける。息を吸う時に入るのは、僅かな緊張感。初回より明らかに違う雰囲気。ゆっくり、静かに口元をつらす。

「やる気満々だねん」

「獅子は兎を狩る時も、全力で狩りにいくからな」

「アズマが獅子で、僕が兎かん」

「違うのか？」

「違うねん。僕は・・・同じく獅子だよん」

静けさに紛れて、獅子の体がふらりと傾く。見逃した訳ではない。焦点は常に合わさっていたが、急にではなく、それこそ消える様に視界から姿がなくなった。

「・・・!!!」

「まーだまだん、ゲームを続けるぜん」

今の一瞬。呼吸をし、唾を嚥下する一瞬に、一季は自分の横を摺り抜け後ろにいる。そんな事が有り得るのか。有り得るからそこにいるのだが、改めてキーカードの力量を確認する。同等などと思う方が馬鹿だな。

「・・・せいぜい余裕そうにしてろ。必ず捕まえてやる」

「負け惜しみにしか聞こえんよん」

「うっさい」

つかの間のやり取りの後、再び始まる鬼ごっこ。やや、ではな
かなり勝色は薄い。敗色は濃いのだが、それは何かで薄めてやれば
いい。勝色は濃くできないが、他の色がそれより薄ければ勝色は濃
く見える。そうする為には、まあどうにかしよう。

いくらカーブを角で動いても、少なからず、本当に少ないが、ス
ピードは落ちる。トップスピードとその差は目に見えて解る。その
繋ぎ目、さっきリユックから取り出した軟式ボールを投げつける。

「どおっ！」

流石に当たる事はないが、動きを邪魔する事はできた。こちらを
睨み反対方向に体を向ける。

「ルール違反だぞん、癡頭。互いに攻撃しないんじゃないのかん」

「俺は一季に向かつては投げてない。繋ぎ目に投げたんだ」

「なんだよそれん。癡頭のくせに」

「次は硬球でも投げっかな」

「鬼！」

「だって鬼だもん」

直線で差は微妙に詰められるが、カーブになると貯金は赤字にな
ってしまふ。カーブを気にせず、容赦なしで突っ込めば多分追い付
ける。ただ、躲されるとそのまま壁に激突。悪くてアクション映画
のスタントシーンだろう。

「そろそろ疲れてんじゃないのかん」

「けっ、他人の心配してる場合かよ」

「いんや、慈悲だよん」

正直一季の指摘は当たりだ。いつも通りの自分の体力のなさには辟易してしまう。ただ、ここでスタミナ切れを起こせば、精神的にも時間的にもゲームは終わってしまう。もってあと？分。考えるのは止めにしないと、崩れてしまいそうで怖い。

「顔が笑ってるぜん」

「・・・まあ、ゲームだからな。楽しむのは勝手だろ」

ゲームはゲームだが、実際のところは不明。本当にゲームだとしても、自分にとっては死活問題だ。報酬は怖くなる程に欲しい。結局はその人自身の捉え方次第か。

「ふう・・・」

「笑顔が引き攣ってるぜん」

「笑ってる余裕がないんでなっ！」

アプローチはかけるが、嘲る様にすんでのところで摘まれてしまう。その度に疲労を、どうにもならない焦燥を、つまらない苛立ちを募らせていく。あまりにも藻掻くだけで、大した成果を上げられない、という訳でもない。少なくとも、一季の精神と疲労にダメージは与えているし、だが強がりには崩せていない。長期戦は予想していた事だが、その時間はもう用意されていない。

何度目の挑戦か。手を伸ばしてもまだ掴めない。さっきより、明らかに、指が服に近づいている。触れれば勝ち、という訳ではない。

ちゃんとお互いの勝敗がわからないといけない。だからまだ勝ちには遠い。決定的な一手が、一季を詰ませる手順を揃えていない。

いや、揃えてはいないが仕掛けてはある。その場所に誘導するにはどうするか。多分一度しか通じない。多分一度で十分。体力も少ないし、これで決まらなかつたらまた考えよう。

「よっ……りゃっ！」

上にいく階段の手前。硬球を天井に投げつけ、バウンドさせて一季の鼻先を掠らせる。あつぶな、とかマジで余裕のなさ気な声を出して右手にある階段を駆け登る。我ながら器用だ、と思うが、人間集中していると何ができるかわからない。そう解釈しとこう。

二階。仕掛けはここにある。自然に力が入るが、下手に力を入れても構わない。結局は運任せなのだ。あとは意識を留めるだけの意思を残すだけ。

突き当たりを左に曲がろうとする一季が目映る。仕掛けは右側心が焦る。様々な思考を展開していく。ここはどうしても右にやらなくては。

脳裏に浮かばせるイメージ。疲労は最高潮の一步手前。気にするな。這い蹲つても捕まえるから。使い慣れた刃がない無銘の槍。少々ルール違反かも知れないが、一季を狙う訳ではない。あくまでその先にある床にしておこう。

加速。跳躍。足音が消える。一季が振り向く。複雑な顔。一瞬足踏み。そして、跳び退く瞬間、槍が床に凹みを作る。

「反則くせえ！」

暴言を吐きながら、思惑通りに進んでいく。次で最後。出し惜しみなんてしない。だから……

「一季ー！！！」

声を張り上げ、余力を全て走る動作にぶち込む。比にならない速度。それは陸上経験者の一季から見れば、目を疑う速度である。

このままだと捕まる。考えなくても理解できる。この狭い通路で、腕のリーチから外れる事はできない。逃げ道は一つ。あと数メートル先の曲がり角。そこを曲がれば、結果だけ見れば、一季の勝ちでアズマの敗け。あの速度でカーブを曲がれる筈もない。

突き出される腕。低く壁を蹴り、曲がり角に飛び込む。足が入り、全体の三分の一が安全圏に入る。しかしまだ負け確定ではない。

狙っているのは首襟。指先に力が入り、指の一本でも引つ掛かれは勝てる。骨折しても、脱臼しても、放す事はしない。スローになる仕種。その中で一季と目が合う。狙いはばれている、と語りかけている目。それでも迷いはしない。

首を捻り、強引に逃れようとする。最後の悪あがき、というよりは決定的な動作だ。僅かに遠ざかる首襟。その僅かが、無常にも手を躲す。

勝った、と確信する一季。笑みを浮かべ勝ち誇る。まだ視界はスローで、悔しがる顔を覗こうと、短い時間の中でアズマを霞み見る。ただ、その顔は、一季と同じく笑みを浮かべていた。

「あらん？」

意識とは別に視線が上を向く。何かがおかしく、足が上にある。そのくせ、視界の中は鈍行。ゆっくり、堕ちていく。ゆっくり、覚醒されていく。ゆっくり、頭が床に触れる。そこで漸く通常スピードに戻り、全身を穿つ鈍痛と、全身に纏わり付く冷たさが、一季の体を襲っていた。

「ふう……はあ」

「……疲れ……てんなん」

「まあな……とりあえず、ゲームオーバーだ」

倒れた体に手を置き、勝利の言葉を口にする。バシヤリ、と足元で響く音。その正体を一季は聞かない。聞くまでもない。

「立てるか？」

「一応なん。……ちべてー。水まで蒔くか、普通ん」

最早体が濡れたから気にしていない様子。足を掬った水を、手の中で漂わせている。

「手段は選んじやいられないんだよ」

「もつともでん。それにしても寒いん」
「あー・・・ちよつと待つてろ」

リュックは近くの教室に置いていった筈。確か入ってすぐの場所に・・・あつたあつた。

「とりあえず着替えと、濡れた服はその袋に入れといてくれ」
「なんでもあるのなん」
「最低限はな」

やれやれ、と言って、好意を受け取る。

「・・・下着はん？」

「それはない」
「用意悪いなん」

盛大に突っ込んだからパンツまで濡れてるだろう。全部俺が仕掛けた事だから、責任ぐらいはとるつもりだった。見返りは大きいのだし。

「さて、もう明け方だけど、どうしようか」

「もうそんな時間かん。楽しい時間はあつという間に過ぎるなん」
「楽しかったか？」

正直辛かった。早く寝たかったし、家に帰りたかった。怖かったし、何より疲れた。快樂なんてものが入り込む隙はない。胸中は負で埋もれていたから。

「なんだよん、癡頭だつて笑つてたクセにん」
「自覚なしだ。知らない」

ちよつと嘘が入ってるが、事実には塗り潰される。無意識の内だから、結局自覚はない。途中気づいたが、否定したから意味はない。

「さてと……これからどうするかな？」

「とりあえず……逃げつかん」

「……え」

意識を一季から離すと、忙しく音を立てる人がいる。こんな時間帯にいる人物としたら一人しかいない。

「パス」

「ん……前言撤回。準備良すぎん」

騒ぐジョーカー。ゲームは終わったからもうジョーカーでもない。それにタイミングがいい。先生にとっては悪いけど。

「お前ら、とうとう見つけ……」

怒鳴りに来た先生がフリーズしたのも解る。夜通し駆け回った怒りを忘れる程に異様だからだ。駆け回る羽目になった原因の二人だが、おかしな仮面を着けている。

「私の本名は神のみぞ知る。仮名は朗々の意を持ち、本名に劣らず神々しい」

「……なんだそれ」

「今夜やってたアニメの台詞。ほら、やれん」

「知らねえよ！」

「ちよつとタイム。打ち合わせします」

先生聞いてないよ。てか動かないよ。追いつけてる？理解できる？俺はまったくできません、先生。

「テイクツー。私の本名は神のみぞ知る。仮名は朗々の意を持ち、本名に劣らず神々しい」

「……私の本名は悪魔のみぞ知る。仮名は毒々の意を持ち、本名に劣らず禍禍しい」

今だけ自分の存在を消したかった。こんな奇天烈な仮面（自分で持ってきた）を着けて、奇天烈な事を言ってる。棒読み以外のなにものでもない台詞が恥ずかしい。唯一、正体がばれていないのが救いだ。

持って来なければよかった。一季がこんなテンション上げるなんて。もしかしてとは思うが、仕返しか、そうなんだな、そうなんだろ、一季。

次で逃げるよん

その言葉が欲しかった

囁く声は救いの声。溜息をついて、蛇足だった邂逅の別れを惜しむ。

「しからばん」

「退散！」

これだけは一流役者程ののめり込みさで言った。二人の姿が消えてから、怒号が飛んできたが、同時に一季の引つ掛かった水溜まりに足を入れ、盛大に呻き声と不協和音を合奏させた。

一季とは途中で別れ、俺は漸く家に着いた。報酬は学校で、昼休みに、緋色とファルも同席させてから渡すらしい。ただ、報酬は半分になりそうだ。その事も一緒に話すらしい。

家の中に入ると、何も言わずに進んでいく。鍵を使ってなければ、泥棒の様に見えなくともない。

「ん？」

リビングに行くと、テーブルに突っ伏している人が二人。まず疑問に感じたのが、二人という事である。

「なんでいるんだ？」

ファルは解るが、緋色がいるのは如何なものか。もしかしても何でもないと思うが、訪問して待っててくれたのか。

「まあ、そう思うのが当然だわな」

二人が突っ伏しているテーブルの上には、ラップの掛かったご飯が鎮座している。簡単な、大根おろしとツナのスパゲティーだ。最早朝飯と変わらないが、頂いた方がいいよな、腹減ってるし。

冷蔵庫から牛乳を取り出し、コップを一応三つ取り出す。戻ってくる、緋色が上体を起こして、髪が寝癖でいいように乱され、寝ぼけてます的な目がさ迷っている。

「ただいま」

「…………おは…………えり？おか…………へり？…………おきゃえり」

「…………」

席に着き、牛乳を注いだコップを緋色に渡す。寝ぼけてるなら牛乳飲め、との意味で渡したのだが、どうやら通じた様だ。

「……………………アズマ？」

「おう」

冷めたスパゲティを口に運びながら返事をする。そして疑問形な点が、少しパニックを起こしていると判る。説明するのが面倒臭そうだな。

「あれ、一季は？」

「ああ、終わった。今日学校で話す。話すから、緋色とファルも来る様に、との事だ」

あながち二人も無関係ではない。一季としては俺だけに話すつもりだったらしいが、それは却下させた。二人だって関わったのだから、のけ者にはしたくない。

「腹減ってたから、ご飯があって助かった」

「…………アズマ」

「ん？」
「味はどう？」
「美味いよ」
「アズマ」
「ん？」
「おかえり」
「ああ、ただいま」

これで漸く、家が、暖かい場所が、安心できる場所ができた。それらは決して作られるものではないし、自分達で作るものだ。それが無駄だとしても、心を満たすには十分な要素である。

早朝の出来事。睡魔が襲ってはいるものの、それは安心していう事。自覚しなくても、意識しなくても、それはちゃんと解っている。あともう一人客人がいればもっとよかった。

42nd「放浪 ホロウ」(後書き)

更新遅れました。お詫び申し上げます。そして、暇つぶしになっ
てくれたら幸いです。

43rd]sleepy day] (前書き)

・ 恐怖・ というのはどうゆうものだろうか。『恐』れと『怖』れ。分解するところだが、何もわからない。ただ、どちらも『心』は入っているから、感情だという事はわかる。どうせ、心に布を被せたって、『怖』い事は筒抜けなんだ。

43rd [sleepy day]

side | Azuma

本日の授業は、至る所で様々な音が飛び交っている。学生の本分は学習であり、寝る事ではない。先生の本分は学生を教え導く事で、寝る姿を晒す事ではない。

怒られ続けている人数は最低でも五人。アズマ、緋色、一季、フアル。もう一人は夜勤をしていた先生だ。

教科書の本分は基礎と応用を教えるもので、叩くものではない。そのほか周りから注意が飛んだり、呆れられたり、ともかく居心地が悪い。居心地が悪くても、それで眠気が消える訳ではない。

机の本分は勉強する場であり、眠る場所ではない。それで眠気が消えるなら、喜んで机の本分を忘れたい。そんなものは最初からないから、毎回怒られてる訳だが。

ぼやける視界を擦りながら、ある程度は活性化させる。だが、ある程度なだけで、それは簡単に壊れる泥の堤防。静かな波を立てる睡眠欲が、簡単に壊してしまう。

「起きろ、東 東広！！！！ファル！！！！」

「……ふぁ……ひ」

「……ねむねむ」

緋色達と違うクラスなのが不運だった。四人で寝れば多少は目立たないが、こう午前の、しかも一時間目の授業から寝る人は少ない。

仕方ないといえば仕方ない。家に帰ってから二時間程ぐらい眠れたが、弁当を作る時間に割いて、それは消えた。緋色の話しだと、ファルも俺が帰るまで起きていようとはしていたらしい。実際嬉しい事だったし、気持ちだけでも伝わった。ファルが舟を漕いでいるのも俺の所為。一応、聞こえたかはわからないが、家を出る時に感謝はしておいた。

「むぁ」

瞼が垂れ下がり、如何にも眠いです、と訴えている。学校でなければ寝かしてやりたいが、生憎と状況が許してくれない。そんな綺麗事を言っても、自分だって眠いものは眠い。

「うぁ」

という訳で寝る。それに倣って、ファルも寝始める。

「起きろー、二人とも」

結局は変わらない。毎時間これが続くと思つと憂鬱に思えて仕方ない。

眠い。猛烈に眠い。アズマを待たずに寝ていればよかったが、どちらにしろ寝れなかったのだ。なら、大して変わらない。大して変わらないが、眠いのは変わって欲しい。

授業ぐらいはちゃんと受けないとあとが面倒になる。自分で望んだ事なのだし、しっかり起きないと。それにしてもなんで真つ暗なのかしら。

あれ、私今起きてる？

「ろ、さい！緋色、起き　！起きなさい、緋色！」
「はい！！！！・・・あ」

勢いあまつて席まで立ってしまった。いつもそんな事をしない、いつも物静かな、優等生風の人がやるから、ギャップの方もある。優等生の本分は学校が求める生徒像を作る事であり、それを瓦解させてはいけない。

そして、そんな奇異な行動を周りは笑う。当然、羞恥の渦に巻き込まれ、静かに席に着くしかできない。恥の本分は己の器量で自ら

を辱めるもので、自慢するものではない。

「はあ」

溜息を吐いて、彼について思いを馳せる。今何をしてるのか、寝てるのか、起きているのか、私と同じで恥を搔いているのか。

実際は一番最後。恥を搔いているかは別だが、先生からの標的にはなっている。

「どうかしたの、緋色さん？」

話し掛けたのは、右隣りの席の確か佐久山さん。疑問か好奇心かどちらにする自分の内には抑えられないから聞いたのだろう。それに対して理由はあるが、ただ寝不足で、と答えるしかできない。事実だが、詳細は語らない。

「もしかして……」

「……なんですか？」

女子の本分は知らない。知らないが、噂が好きなのが大半なのだろう。目の前の佐久山さんも、消えては出る噂の真相を確かめようとしている。

「東君と何かあったとか」

言い終わる前にきゃー、と小声で騒ぎながら、頭を左右に振る。脱力ものの問い掛けだが、人間言われた事は想像してしまうものがある。

秘密は、と聞かれれば、自分にとって最も大事な事を、記憶として頭に浮かべる様に、それが動揺を与えるなら顔にまで浮き出る。例え、その記憶がなかったとしても、なければないで今の緋色の様に何かを想像してしまう。

「……な!？」

「きゃー」

想像したのはかなりでもないが、如何わしいものである。お互いが想像したのはそうだが、ただ、緋色はキス程度のもので、目の前の女子はそれよりエロチックな事を想像している。

「そこうるさいぞ!」

再度視線が集中する。どうかしたのかな、という声が飛び交ったり、二度目からは様々な憶測が流れていく。本人はそれどころではなく、非常に複雑な顔をしていた。

「な、なんで私とアズマになるの?」

「え、付き合ってるって噂だけど。それとも日高君と付き合ってるの?」

「ま、まだないわよ!」

「ならいつかはあるのね。きゃー」

「しつこいぞ!」

教科書で頭を叩かれ、話はこれで終了。しかし、告げられた噂は脳内で反響。今は嘘だが、これから事実にしたいという願いが緋色の中にある。

噂の本分は他人を惑わす為にあり、自分自身を偽るものではない。

ただ、自分を元に流れた噂は様々に脚色され、自分に帰る頃には結果的に惑わす事になるが。

side | Kaduki

寝るには寒いが、寝ないには勿体ない天気。外は晴れで、今の授業は体育。内容はサッカーである。ある程度やる気を見せる人は、息を切らしながらボールを追いかける。それ以外の、やる気を見せない人は校庭で怠惰に時間を潰している。一季はどちらかと言えば後者寄りで、日の当たる、それでいて惰眠を阻害する人の目を避ける場所にいる。

今朝まで続いた逃走劇は一季の負けで勝敗が決した。新鮮なもので、あれから初めて寝たが夢にまで出ている。あまり快感を与えないが、快楽は与えてくれる。楽しい時間の本分は人を悦にする事で、自分を苦しめる事ではない。今はそんな二律が背反している。複雑だと思いが心地好い。

夢の中にいるジブンは、客観的に自分を見ている。あくまで夢だから、詳細は信頼できるものではない。だから、体が覚えているものと流れる映像が一致するものだけを楽しんでいる。

寝ている時に見る夢の本分は一種の願望であり、それ程素晴らしなものではない。『儂い』という漢字しかり、人が見る夢程不確か

で、千切れ千切れなものはない。

「一季ー、起きてくれー」

やっぱり儂いものだ。一瞬で霧散して、忘却してしまう。

「・・・くわっ」

「不機嫌ですね」

「五秒以内に、更に20文字以内で用件を伝えよん」

「サッカー負けそう。参加して」

「・・・仕方ないなん。後でジューズ奢れよ、こまつちゃん」

これでただのクラスメイトなら断るが、陸上仲間なら仕方ないとする。

「なあ、一季。また招福行こうぜ」

「暇がないんだよん。今度なん」

「了解」

のろのろと割り込む。サッカーの様な大人数なら、途中参加でもばれない。思惑通り、先生にばれた様子もない。欠伸をしながらボールを追いかける。

「んー」

ボールを持っているのはクラスに二人いるサッカー部の片割れ。どうやらそれを二つに分けてチームを作っているらしい。チームバランスを整えようとした様だが、生憎こっちのサッカー部は休みみたいだ。はつきり言ってめんどくさい。

おーきたきた。さて、取れっかなん。期待されるのは嬉しいけど、応えるのはめんどいな。

「らっ……たら!!!」

軽いフェイントには引つ掛からず、楽についていけたが、どこかプライドに触れたらしい。怠重い体にアタックし、強引に抜く。その所為で一季の体は倒れ、今朝に似た鈍痛が背中から広がる。

「大丈夫か？」

「……ふふふふ……ほう」

こまっちゃん心配の言葉を聞かず、ゆっくり立ち上がる。背中の砂を払い、嘗めたマネをした野郎を睨む。

やりやあがったなん、こんちきしょうん。眠い所為で抜かれたけど、それはいいとして転ばしやがったなん。ストレスも溜まってるし、ぶちのめしてやる

決意に顔が歪む。不幸だとすれば、今日この時間に体育があり、ゲームで勝っている事だろう。不幸の本分はついていない事で、決して人為的な事を不幸と言っではいけない。

「……」

再度対峙する二人。この小さなフィールドの中なら、こんな邂逅は茶飯事だ。異様な空気だけは、日常で感じる範囲のものではないが。

腰を落とさないディフェンス。サッカーは常として腰を落として

プレーをする。高い瞬発力が必要だからだ。一季の行動はサッカー経験者から言えばザルと言える。

一季と対峙する人は、異様な雰囲気を感じできず、内心嗤っている。サッカー部のしかもレギュラーとそうでない人がボールを取り合っても、結果は明白。しかし、場を盛り上げるイベントとしては上等で、注目が集まりはする。それが、頼りになるといふ事に繋がるのは別として、一時の人気者になるのは間違いない。

「・・・ふ」

フエイントを入れ、蹴ると思わせて蹴らない。右足はボールを素通りし、左足で軽く前に出したのを、また右足を出し進行方向を変える。一秒かかるかからないかの攻撃。それを防げる筈もなく、勝利を確信している。ただ、焦点を合わせるのはボールだけでなく、一季にも合わせた方がいい。何しろ、信じている勝利は仮初めなのだから。

「え・・・あれ？」

気づけば足元にボールはなく、相手に渡っている。そうしてゴールを決められてしまう。周りからは落胆の声。ドンマイ、と声がかかるが、励ましが逆に煩わしい。

眼前には喝采を浴びるクラスメイト。ある意味で目立つ奴ではあるが、陸上仲間と他のクラスの数人しかつるまない奴。

そう一季は認識されていて、その立ち位置の人の嗤いがプライドの琴線に引っ掛かる事を、一季は解ってやっている。

「やったな、一季」
「ふふん。楽勝だよん」

わざと聞こえる声量で言う。神経を逆撫でし、沸々と温度を上げる音が耳まで届く。それに笑みを浮かべる。歪ではない。純粹な、友人との笑い話で浮かべる様な笑みを浮かべる。

「おっしや行くぞん！」

ジュースの為に、とは言わない。表向きはそうだが、本音はストレス発散である。弄れるだけ弄ってしまうつもりではいる。

「どうした、サッカー部。肩書だけかん？」

「黙ってる！！！」

「怖いなん」

わざと前に立ち塞がる。馬鹿にした様な構えは、本当に馬鹿にしている。相手の一秒にも満たない動作も、複数入れるフェイントも意味がない。コンマ一秒にも満たない動作で反応するのだから、フェイントは足踏みしている様にしか見えない。

「しゃきーん」

学習しない奴だな、と思いつながらボールを掠め取る。学習の本分は五感で、体で、そして他人から学ぶ事で、理解できても実行しない事は学習とは言えない。

ま、ちょっとは発散できたかな

ストレスは自然に発散するものと、他人に渡す事で発散するもの

がある。ストレスを他人からもらった人は、若干外れるが不幸としておこう。

side | Azuma | again

「あー………眠い」

自分の感覚を口に出せるなら、まだ自覚があるから大丈夫、とか言うけど、眠いのには自覚があっても更に眠くなるだけだ。

「あと一時間……か……ふぁ〜ん〜」

三時間目と四時間目の間。所謂休み時間なのだが、ファルはもう眠っている。最初の頃よりは大分楽になったが、気休め程度だ。一周して逆転してくれたら、なんて事になったら一番危ないだろうな。

「眠そうだね」

「ん……徴、だったつけ？」

「思い出したんだ」

「覚えた、の間違いじゃないの」

どこかズレてる気がしてしょうがない。間が抜けてるとまではいかないけど、違和感がある。それに気になる。こいつはどこまで俺の事を知っているのだろう。いつから知っているのだろう。疑問は

いくつでもあり、口にするとパンクしそうだ。

「……………」

「……………どうかした？」

怪訝そうな目で見つめていると、他意のない声で返される。無害ではありそうだけど、やっぱり何か気になる。

「そっいえば知ってる？」

「何が？」

「噂話」

「なんだそれ。誰かが口にした事が独り歩きしただけだろ」

「結構有名だよ。昨夜から今朝にかけて、校内を駆け回る無数の子供達、だって」

「……………へえー」

なんか引つ掛かる。今朝校内に確かにいたけど、俺達じゃないとは思っただけど、事実なんで俺達の所為な気がしてきた。

「壁はおろか、天井とかにも足跡があったんだって。学校じゃ急遽、清掃業者を頼んだみたい」

「……………へ、えー」

あ……………足跡とは盲点だった。道理でさっきからうるさいのか。一季はどうだろ、気づいてるかな。気づいても痕跡を消す暇なんてなさそうだし、でもあんまり気にしてもなさそうだし。

「……………何か知ってるの？」

「いや、なんも。そうゆう事には疎いから」

当事者だろ、と自分でツツコミながら、不自然さを漂わせない様に動揺を抑える。ばれるのとはべれないのじゃ、べれない方がいい。もし、実は俺なんだよ、とか他人に言っても冗談話で終わるだろう。徴には冗談が通じなさそうだが。多分、恐らく、何となく、勘だけだ。

「今日も屋上で食べるの？」

「その予定」

「そう。仲良しだね」

「まあ、そんな定義に嵌まる部類ではあるな」

仲良しとかそうゆう事は考えた事がなかった。気づいたら一緒にいるのが普通。いない方が不自然。そんな考えを共有して一緒にいる。ファルは途中参加だが、それは些細なものだ。

「それじゃ、もう時間だから。またね東広」

親友の本分はいる事が自然と思える事で、同じ学校にいる人を親友と呼べない。複数いるとしても、そんな大人数もない。一人いるだけで人生の四分の一は幸せだろう。食欲、睡眠欲、性欲。残り四分の三がそれら。欲を満たすのが人生で最高のもとは必ずしも言えないが、吐き出せない欲を口にできる親友さえいればいい。

背筋を伸ばし、首を鳴らす。四時間目も結局寝て過ごしたが、この時間になると空腹と睡魔で集中している人も少ない。おかげで目立つ事もなかった。つまり、爆睡できた訳だ。目も冴えてきたし、さっさと屋上でご飯を食べるとしよう。

「ファル、飯だ」

「・・・ふぁ・・・ひ。うん」

ファルもある程度目が覚めてる様だが、まだ寝足りないらしい。見た目はともかく、年齢が同じで、知識が年齢以上にあるとしても精神の上ではまだまだ年齢以下。中身の成長は年齢で作用される事もあるが、精神の占める割合が大きい。数時間の睡眠で耐えられる俺に対して、耐えられないファル。つまりはそこらへんが少女の本当の年齢だろう。

ファルの手を引きながら歩いていく。別に俺から繋いだ訳じゃない。ファルからなのだが、これでどこかに行つてケガをしないのなら構わない。思いつ切り保護者だな、とは思つてしまう。

「よっ、緋色。屋上行くだろ」

「・・・うん」

「?・・・どうかしたか」

どこことなくよそよそしい。俺の意味不明さについてなら、違うだろうし。もしそうだとしても今朝心配して家に来ないだろうし。となれば、なんかあったのだろうか。

「・・・眠いのか?」

「まあ、少し」

「・・・手でも繋ぐか」

「いいわよ、そんな！」

「そうだな。両手は塞がってるし」

「・・・・・・・・それじゃこれで」

と言つて、緋色は俺の右腕の袖を掴む。両手に花、と言える状況ではあるが、本人がそれ程意識している訳もなく、見た目には仲睦まじいとか、女子二人が取り合っているとかしか見えないうらう。

「一季は・・・まだいないか」

めつきり減つた屋上の使用者。最早酔客か物好きな奴しかいない。てか俺らしいかない。

「寒いな」

「そのおかげで、聞かれたくない話ができるんですよ」

「その通りだけど、なあ」

裏の方に廻り、せめてもの寒風を防ぐ。一季なら多分心配はいらない。いつも屋上にいるのだし、捜すだらう。遅いのはいつもの事だ。今回は寒さが苛立ちを促進させているが。

「ねえ、アズマ」

「何用かな？」

「何か噂とか立ってない？」

「噂、ねえ。火のない所に煙は立たず、っていうけど、今回は一つだけ火種があるかな」

「ふ、ふーん。そうなんだ」

どこか期待を含んでいる様な声。詰まらせるあたりわざとな気も

するが、アズマは気づかず欠伸をしている。

「なんかさ……」

「う、うん」

「校内を駆け回る無数の子供達、っていう噂があるんだよな」

「……え」

「まあ、当事者は俺と一季なんだけどさ、ここまで正体がばれないで広まると憚られる感じがするなあ」

「……そう」

そういえばそんな噂もあったかしら、と思い返し、思い当たらなかった自分を、落胆の色で染めている。望んでいた事だとしても、恐らくは同じ結果だろう。冷静の中で、そんな事を緋色は考える。

「日高 一季はいるか？」

「……」

「いるかって聞いてんだよ！」

いや、いきなりそんな事言われても何も言えないし。それにあまり友好的でもない。もうちょっと、他人と関わる事を学んで欲しい。

「なあ、緋色。ここってどんな高校？」

「国立校で、偏差値はそれなりに高く、服装、頭髪にはあまり頓着せず、ある程度の自由を重んじる学校よ」

「その筈だよなあ」

「どの学校にもこうゆう奴はいる、と考えればいいか。もとい、割り切る。」

「馬鹿にしてんのか」

「いやいやまあまあそれはおいといて、一季はまだいないよ」

「お前らって一季といつても一緒にいるよな」

「一日の半分以上は」

「ダチの為に嘘ついてんなよ」

「嘘つく要素がないよ」

「庇ってんじゃねえぞ」

「……………」

正直うるさい。そりゃ一季とは親友だけど、庇い立てはしない。する必要もなさそうだし。お腹空いたから苛立ってるってのはなさそう。大方、一季に何かやられたのだろう。

「まあ、いない事は本当だからさ、他当たってくれよ」

「ふっ、ざけてんじゃねえぞこらあ！！！」

襟首を持ち上げ、ひたすらに暴力的をアピールする。いつの間にか起きたファルがはっとして、止めようとするが手で制止する。あまり、面倒を広げたくない。

「おろ、日高はどこにいるの？」

「知らねえよ！こいつらから吐かせてやる！！！」

後ろから三人、恐らく仲間だろうが、喧嘩友達とでも言う奴かな。こっつてホントに国立校か疑いたくなる。

「おら、さっさと吐けよ。むしゃくしゃしてるからお前でもいいぞ、ああん！！！！！」

「……………はあー」

自分だけならよかったが、緋色達まで巻き込むとなると仕方ない。面倒事は避けたかったが、全部一季の所為にしよう。まったく、いつも第三者を演じやがって。

「……よつこら……せつ!!!」

こちらから手を出すとは思ってなかったのか、あまりにも無防備なその顎に頭突きを一つ。軽く歯が折れたか、最低でも脳震盪ぐらいは起こしただろうか。まあ、そのまま倒れてくれた方がいい。

「ひ弱なキャラだと思ったか？残念だけど、どっかのませガキのおかげで、荒事には慣れてんだ」

悶絶する切り込み隊長。勇気の本分は何事にも即決ができる事で、慣れとは違う。目の前の奴らはただ殴るのに慣れただけで、殴る勇気を持つてる訳ではない。そんな奴らが殴られる勇気を持っている筈もない。それは単なる暴力でしかない。

「で、どうする。こちらとしては去ってくれた方がいいんだけど」

アズマのクラスでの存在は、目立つ訳でもなく、だからといって影が薄い訳でもない。どちらでもないから、何でもない。見た目からすれば、ひ弱なレッテルを貼られるのも無理はない。しかし、それは見た目であって必ずしも中身ではない。

「この野郎!!!」

あくまで数はこっちの方が有利と判断したか、まだ状況に疎い。それとも先刻のはマグレだと思っているのか、虚勢だと思っているのか。どちらにしる、マヌケにしか思えない。

「緋色、ファル、弁当頼んだ」

「わかったわ」

「了解」

迫る大振りの右フックを屈んで躲し、鳩尾に肘を打ち込む。それだけで体は倒れ、陰になって見えなかつた分、突然倒れる仲間に混乱している。残りは二人。最早戦意すら見えない。

「帰るならこの二人連れ帰ってくれよ」

それだけ言つて後ろを見せる。明らかに油断してる。それを見て取つたか、二人の内の一人在振りかぶる。それを見た緋色とファルは何もしない。アズマも想定してたから、動じず振り返るが何もしない。

「ひよーん」

「は……?」

突拍子もなく、突然、予期せぬ、闖入者が、この騒動の元凶が空から降ってくる。

「あだっ!」

避けるついでに足を引つ掛け様としたのだが、不意という不意を突かれ、顔面に入る拳。その後、目の前の彼に落ちてくる一季の体。勿論、一季の全体重プラス位置エネルギーが運動エネルギーに展開され、それらがのしかかり、痛いなんてものじゃ済まないだろう。

「やれやれん。・・・あとは頼んだよん、誰かさん」

倒れた三人を残った一人の前に持っていく。二人はまだ意識があつて立てるには立てるが、一季のフライングプレスを喰らった奴の意識はない。あんなのプロレスでも見れないだろう。

無事な一人は最も酷い一人を担ぎ、二人は千鳥足で、四人は去っていく。

「楽しかった。またやろうん！」

去り際にそんな事を言ったものだから、我慢の限界を迎える。

「またやろう、じゃねえボケエ！！！」

憤慨極まって、思わず頭を殴ってしまった。カツとなってやってしまったが、後悔はしていない。面倒事を向けられたせめてもの仕返しだ。

「痛いん」

「黙れ」

「癩頭、怖いよん」

「・・・それはホントの事なのか？」

皆が寝不足な理由に触れる。ふざけた笑みを浮かべた顔が、僅かに揺らぐ。この話を聞くのが今回集まった理由。緋色にも、ファルにも聞く権利はある。

「ああ・・・報酬についてだけどなん、半分でいいかん」

「今朝も言ってたけど、どうゆう事だ？」

「だって癡頭ズルしたしん」

「あれは黙認してたる」

「僕ケガしたしん」

「・・・あれは・・・」

「ケガしたって事は、少なからずやる手前で殺意があつた訳だしん」
「ぐうおう」

殺意が全くなかった、と言えば嘘になる。振り回されてたから苛立つてたし、水を撒いた時も、これでもくらいやがれ、と言わんばかりに怒気を込めたのは覚えている。

「それに」

更に付け足す。

「緋色とファルは何もしていないん。秘密を散蒔く程、お人よしでもないんだよん」

つまりは何も勝ち取っていない二人には、聞かせる予定はなかった様だ。勝者の権限で、百歩譲って二人に半分は聞かせるという訳らしい。

「僕の事が、癡頭の事が。それともどっちも癡頭だけ聞くか。もし三つ目を選ぶんなら他言はしないと約束できるかん？」

「そ・・・れはさ・・・うん」

「できないなん」

「できないわね」

「できない」

三者三様に実行不可能だと言い張る。まるで顔にできません、と

でも書いてあるかの様な言い分だな、とは言えない。自分でも自信がないから、無理だろうな。

「で、どうするん？二つに一つを取るかん？足して一にするかん？」
「……………」

緋色に目を合わせて、意思を伝える。緋色は何も言わない。当たり前と言えば当たり前。決めるのは自分。今回は意見を言い合う必要はない。

「…………正直、自分については少しでも知りたい。でも、推測…………なんだろう？」

「そこ聞いちゃうん」

「ならいいや。推測は推測のままだし、だったら真実を知りたい」

「…………で、報酬はん？」

「…………一季って本当は何者なんだ？」

首を掻いて、でもそれでも顔はふざけてはいない。至って真面目である。その顔が、雰囲気、背筋をひやりとさせる。

この雰囲気。あの時程ではないが、似た雰囲気が流れている。緋色も、ファルもそれを感じているらしく、足が微かに震えている。

「ん、ああ？…………ああ。けっ、漸く話す気になりやがったか。全くよう、怖いのはわかったけどよう、ああー逃げてえな」

「…………一季…………か？」

頭が状況を理解していない。目の前にいるのは一季。そうなのだが、本当に一季か、と疑う程の口調。いつものふざけた、軽い口調ではない。何か、一季の姿を模した何者にしか思えない。

「ああ、その通りだよアズマ君。僕はカズキだぜ。ただアズマ君が知ってる一季とはちょっと違う。カズキはカズキでも、僕は一つの杞憂、つまり一杞な訳だ。お分かり？」

「………何とか」

「いいね、その物分かりのよさ。ん、もしかして怖いか。そりゃあ勘弁した。これは抑えられないんだ。一季の時なら少しは弱まるけど、僕はそんなもん無理なんぞでな。堪えられないなら、ここから離れてちょうだい」

なんだろうかな、このマシンガントーク。一季も妙に饒舌だが、一杞と名乗るこいつは一季以上に饒舌だ。

「一応分かったけど、一季の悪ふざけにも思えるんだよな」

「だから怖かったのに。まあ、それは仕方ないけど、残念ながら違う」

「証明する事はできるのか？」

「そうさな、日頃の一季に恐怖とか感じる事はあるか？」

「本気で敵意を向けられた事以外は」

「そんなもんだ。でも僕の時。常時、いつでも、気がつかなくとも恐怖を感じる。それが一杞である証明」

別に冗談で言っているとは思ってないが、冗談であって欲しかったのもまた事実だ。ともかく、一季が一杞であるかは、場を流れる雰囲気判断できる訳か。

「一季はどうしたの？」

「おう、そこ行っちゃう、緋色さん。まあ、一つを話すって訳だし、どうせこれも一つの内のもんだ。話してしんぜましょう。でもちと怖いな。ドン引きされんのは気まずくなるし」

「早く話せ」

「おっけー。いいねアズマ君。その誰にでも遠慮しないのは」

「それは一季だからだ」

「・・・まあいいや。自己紹介から始めよう。僕は一杞。単刀直入に言えば二重人格と言えるかな。でも同時に意識はある。一季が表でも僕は一季を通して情報を得られるし、逆もまた然り。正確には二重人格とは言えないが、理解しやすい様に二重人格としておこるかな。因みにお互い反発はしてないから、気分が変われる」

二重人格の本分、というよりは定義か。それは一つの体に二つの精神という事。一般的かは知らないが、片方が表に出ている時は、もう片方は滅多な事では出ない。それが、ぼんぼんと頻繁に変えられる。異常の中での異常。

でもそれは些か疑問が生まれる。肉体の主導権というのは二人の中にはない様だが、生きている以上生きたいと思う筈だ。それに、少なからず、どんなに親しい人でも反発は当たり前だ。

「・・・一杞は、それで生きてると感じてるのか」

「何が？」

「一季と反発しないと云ったが、それは一季の内にいるだけで、自分で生きてるとは言えないんじゃないか？」

「それは間違いだよ、アズマ君。カズキ二人の求めるのは、スリルと好奇心だ。僕はもうスリルを内に宿している。それだけで生きてる実感がある」

「・・・その恐怖を内に宿した切っ掛けってというのはあるのか？」

「まあ・・・あるよ。プライベートだけど」

そこまで突っ込む気はない。プライベートというが、一季の家庭は知っている。どこにでもある暖かい家庭だ。それ以外に、切っ掛

けと呼べる事があるみたいだが、俺が知る意味はない。

「私からもいいかしら？」

「どうぞ」

「貴方が一季に与える影響はないと言えるかしら？」

「ああ、ない。少なくともない。ただ、余りある恐怖が今漏れ出ている様に、一季も少なからず普通よりは多少恐怖は感じてるかな」

一杞に対する好奇心は大きい。身近な人に、こんな事を抱えている人がいるのは初めてだから。でも、あまり聞きたくもない。そんな好奇心の矢を向けるのは気分のいいものではないし、向けられた方もいい気分ではないだろう。

「感情を消失して、その感情を取り戻したいから夜徘徊してるが、一季は感情を消失した訳じゃないんだろ？」

「ああ。感情を多く取り込んでいる事を消失とは言えない。仕方ないから僕らは『増発』と呼んでる」

「・・・その増発した恐怖を煩わしいとは思わないのか？」

「さつきも言っただろ。恐怖は僕らにとって生きる原動力。減らし方はわかるけど、結構便利なんだぜ」

「便利ってというのは？」

「ぶっちゃけ言っちゃえば、僕は今だって怖い。いつだって、家にいたって、寝ても覚めても一つの杞憂を想像している。そんな事だから、多大に恐怖を感じてる。でも感じてるからこそ、何事にも反射的に、恐怖が後押ししてくれる。一季もそうだけど、僕程じゃない。戦闘は専ら一季で、僕は専らサポートさ」

こうして表に出る事自体少ないのか。そうだとしても一杞はそれで満足そうに見える。そう推測しても、俺が関わる事ではない。たまには一杞を表にしているのか、なんて口が裂けても言えない。

「他に何かあるかな？この機会に聞いた方がいいぜ」
「聞きたいだけ聞くと混乱する。ただでさえ容量オーバーなのに、
パンクしそうだ」

親友が二重人格者でした、なんて納得するのにも時間がかかるのに、これ以上説明されても半分以上が抜け出る。そうなのだが、最後に聞きたい事がある。

「最後に一つ」

「何なりと」

「カズキはどうして今まで黙ってたんだ？」

「どっちに聞いている？」

「二人に聞いている」

「……いろいろと理由はあるけど、あれだな……怖かったから
だ」
「……」

「話したらいろいろ失いそうです。それにあの闇医者がな、きな臭
くて」

そうか。一季を通して見てたから、感じる事もできるのか。しかし、考え方も同じか。どっちかトウマを信じてやればいいのに。

「それでトウマがどう関係してんだ？」

「ぶっちゃけはれたくないんよ、同業者には。結構稀有なもんでさ、
あの組織が好奇心で狙うかもなんだよね」

あの組織ね。あんまいい思い出はないな。監禁されたし、死に
かけたし、謎空間だったし。まあ、ファルとは出会えたんだけどね。

「そんな異例な事なのか？」

「ぶつちやけ異例も異例。増発は他にも、多分いるかもね。少ないけど。でも本命が二重人格者っていうのは僕くらいかな」

「やれやれとした感じで口にする。本当に呆れている様で、それが二人の考えだとすると話した事に後悔しているのではないだろうか。今まで会話のやり取りに対して、ずっと恐怖していた訳か。」

「強がりやがって」

「?・・・何か言ったか?」

「この話も全部カズキは恐怖を感じてたのか、って言ったんだ」

「・・・ぶつちやけね。だってさ、いつだって異常ってのは気味悪がられるものだし。僕は・・・さ、ね。だからこの話が終わったら・・・離れてもいいよ」

「確かに気味悪いな」

「だろ。だからさ・・・」

「そんな事言うカズキは気味が悪い。お前はいつだって能天気で、ちやらんぼらん奴なんだ」

「それは僕じゃなくて一季の方で・・・」

「同じだよ。お前はカズキだ。二重人格者でも俺達の知ってるカズキなんだよ」

「無茶苦茶だな」

「うつさい。それにな、気味悪いなら俺だってそうだよ。記憶が虚で、傷だつてすぐに治るし、干切れた腕だつて生える。どうだ、考えればこっちの方が異常過ぎるだよ」

「自慢する事でもないよ」

「野次ばかりだな。で、どうなんだ。まだ、馬鹿な事言うか?」

「・・・これじゃあの時と逆の立場かな」

「・・・いつの時?」

「水谷 江湮の時」

そういえばそんな事もあった。いや、あの時俺は殴られたぞ。違
うじゃん、やってる事。

「まさか、あの時怒ったのって・・・」

「そ、僕なんだよね、実は。ま、たまにちよくちよく出てるけど」

なんだ、結構前から知っていたのか。いつも、第三者を気取って
るのに、いつの間にか手綱を引いている。いつも・・・

「重ねて言うけど、一緒にいていいのか？こちとら二重人格者で、
その中でも異常者。加えて隠し事をする奴だぜ」

「わかってるくせに。こつちだつて意味不明野郎だし、何も言えな
い愚か者だよ。いいじゃんそれで」

「このお人よしが」

「なんだよ、アホ」

親友の本分は、さっきも言ったがいる事が自然に思える事だ。こ
うして全部話した事で溝ができたり、不自然に思える訳はありえな
い。本音で話せるのが親友だろう。

「あ、お昼ご飯」

予鈴の音で、誰かが気づく。その誰かが呟いたその言葉には、空腹を誘うものが含まれていた。時間の本分は24時間、1440分、86400秒をいかに使うかで、別にご飯の時間を割いて語り合ってもいい。どう使っても自業自得になるのだから。

43rd [sleepy day] (後書き)

不規則な更新をお許し下さい。ってか何で私は非情になれないのでしょうか。どろどろな展開より、ホットな展開を好むからでしょう。多分。次回からはちょーちょーっとと非情になってみようかなとは思いますが。善処できればします。努力できればします。

44th「忘却」(前書き)

月というのは素晴らしいものだ。太陽がないと輝けないというのに、太陽に負けない程に惹きつける存在感がある。主役になれる器ではないが、夜間のみなら主役には相応しい。

44th「忘却」

秋の終わりは非常に興味深い邂逅があった。いや、非常という意味も、程度がはなはだしいさま、という意味ではなく普通ではない、という意味の非常だ。友人から、二重人格者です、なんて告白は頭が痛くなった。語り全てを理解する事はできなかったが信じる。その一言で十分。

「寒い」

「仕方ないわね。寒暖の差が激しかったもの」

「それなら屋上は止めにしないか？ぶつちゃけ僕も寒い」

「なんで一杞なんだ？」

「今日は眠いんだとさ。ぶつちゃけ眠るのが怖いから、僕が出てる」

「不憫ね」

「同情しなくていいぞ。どうせ異常者だから」

風を避け、弁当を広げる。今日の献立は、レンコンと牛肉の炒め物、カツオの竜田揚げ、だしまきたまご、マッシュポテト。飲み物は魔法瓶に入れた番茶である。最近では寒いから、お茶は多めにある。

「さ、食べるよん」

「ず、ずりい」

こつゆう時だけ一季か。一杞の事をいい様に利用している風に思

える。

「いやさん、これは一杞の同意だよん」

「どうゆう意味だ？」

「んー・・・そうだなん、水が全体の容器の九割入っているとしてよ
うん。そこに二割の油を入れようとしても、結局一割しか入らない
ん。恐怖が大半を占めてるから、美味しいと思ってても素直に美味し
いとは言えないのが辛いよん。ま、元々容器に収まり切らないか
ら周りに溢れただけどねん」

何て言うか、それはどうなんだろう。どう言うべきなのか、口に
出せない。 んじゃないかな、それは。あれ・・・..
う言えばいいかわからない。

「なあーんか、あんま真つ当な奴がいないなん」

「そうゆうものでしょう。異端は同類を求めるのが当たり前。なら
自然と集まるわよ」

「みんな、異常」

「ま、その方が話しやすいしな」

「それが、ここでご飯を食べる理由でしょ」

「という事は？」

「それは食後ね」

「あまり美味そうじゃないデザートだなん」

竜田揚げを口に入れながら、お茶を啜る。寒い分お茶が美味しい。
これで天気までよかったら最高なんだけどな。生憎の曇り空。雨は
降らないと思うが、今夜は多く出そうだ。

基本、月の出る日に動き、早めに家に帰る。そして、できれば連
続してやらない。非日常に鎌を掛けて、日常を疎かにしてはいけな

い。この時間が何より心を癒すのだ。心身を安定させなければ、散策する以前の問題だ。

平常心。ぶれない心。確固たる意志。夜という闇の中で、精神を摩耗させないのはこれらである。摩耗させれば、どうなるかは結果が見える。

「うまうま」

「・・・ファル、晩飯は何がいいかな？」

昼ご飯から晩ご飯の話をするのもなんだが、今夜は予定が詰まっている。早めに手前の予定を組んでおこう。

「なんでも」

「人参でもか？」

「まー」

「わかったよ。でも人参は食べれる様になれ」

夜が慌ただしいから今が平和と思えるのか。多分その通りなのだろう。年の割に達観し過ぎだ、とか思う人はいるだろうが、子供は周りの環境で大人になる。二十歳だからって大人とは言えない。自分はその年齢だ。

「くあ・・・わわわわわ」

「だらし無いわね」

「そうだな。たまにはゆっくり寝たいな。いや、ただそうすると弁当が作れなくなる」

「脅迫、ととつていいかしら」

「そこまで深刻にする問題か!？」

「なあ、話を戻さない?」

「すみません」

また裏サボリになり、一杞が表になっている。今はご飯を食べ終え、残り少ない時間を作戦会議に使っている。

「今日の予報は曇り。これ、今日の気象情報と週間天気予報」

鞆から取り出された情報は、多に重要である。月が出る夜と出ない夜では数が違う。思うに、光というのはなんであれ恍惚とさせるものだ。感情は情を感じる。情とは心だ。そして恍惚とは心を奪う事。ワンダーには本能的な心しかない。心を奪われれば当然消える。特に月や太陽の光は一発昇天。だから、主に月が出る日に行動する。しかし、敢えて月の出ない日に行動する理由は一つしかない。

「基本、雑魚は無視でいいのか?」

「当然。あくまでも本命だけよ」

「ま、そんなに期待しない方がいい。ぶっちゃけ気休めなんだし。期待し過ぎると、外れた時に落胆も大きいし」

少しでも出逢う確率を上げる為だ。無茶ぐらいはしないと、前になんか進めない。未だ一步も進めていないけど。

「今日はどこ廻るんだ？」

「なるべく人が多いところかしら」

「となると、駅周辺か繁華街。もしくは中央公園周辺か」

「喧騒が多いといえば中央公園だけど、巻き込まれそうね」

中央公園も人が多いには多いが、主にいるのはまあ、その手の筋の人だ。あまり関わりたくはないが、感情の高まりやぶれは大きい。惹かれるモノは多いだろう。

「いいんじゃないか、中央公園で？」

「・・・行くのはいいけど、あまり目立たない様にしたいわね」

「そんじゃ決まり。ただ、怖いから直接集合じゃなくてアズマ君の家に集合で」

「なら俺ん家で飯食べた方が手っ取り早い」

「そうする、緋色さん？」

「お言葉に甘えて」

話しも中程に終わり、チャイムが鳴る。弁当箱を片付け、教室へと戻る。とりあえず今日の予定を頭の中で反芻させる。緋色達が部活をしている間に買い物を済ませ、家に来た時に食べられる様にす。今は何を作るか、彼の頭の中では献立を考えている。とても、命懸けの夜を前にしているとは思えない。

ことごとと音を立てるなべ。強火を弱火にし、ここから数分煮る。砂糖と味醂と酒を加え、また同じぐらいの時間を待つ。待っている合間合間に玉葱を微塵切りにし、醤油、レモン汁、塩を混ぜ、電子レンジで30秒加熱させる。タコをぶつ切りにし、適当に見繕った野菜を切り、それらに作ったソースをかけて、パセリを散らす。またなべに戻り、糸コンニャクと醤油を加え、7分程待った後、牛肉を加え、火を中火にする。

「アズ、ヒイロ、来た」

「おう、緋色」

「お邪魔します」

予定通りとはいかなかったが、まだ想定内だ。一季なら遅れるだろうが、一杞はどうだろうか。とりあえずは大丈夫だろう。

アクを取り蓋をする。一段落を終え、違う料理の仕上げにかかる。塩でシンプルに下味をつけていたつぶ鯛を、オーブンから取り出し皿に盛る。単純な味だがつぶ鯛はこれで十分美味い。途中途中になべの中を混ぜながら、汁が少なくなるまで煮る。最後にバターを全体に絡ませて完成。

「ファル、皿出してくれ」

「了解」

「私も手伝うわ」

四人分の皿を出し、均等に盛りつける。

「緋色はご飯を頼んだ」

「わかったわ」

緋色は「飯を盛り、ファルは完成したもものからテーブルに運んでいく。充滿していく団欒。全部が揃うまであと少しである。」

「おいつす」

それもう少しの間で、あとは食べるだけ、のところでやってきた。相変わらずタイミングを誤らない奴だ。

「いらっしやい・・・一季」

「うづん・・・やっぱわかるかん」

「当たり前だろ。怖くないし」

「そうじゃなくてもん？」

「わかるさ。何年幼なじみやってると思ってるんだ」

「さて何年？」

「そこ聞くのか？」

あまり頓着しないし、過去の事はどうとも思っていない。だからどう言われても構わないが、時々気になる時もある。

「ともかくさ、食べるか」

せつかくの、とまで珍しい訳ではない。殆どこの家で食べているからか、あまり丁重にはしていない。が、客人を立てたせ続けるのもよくない。ご飯も冷めてしまっし、今後の事もある。今はただ、この雰囲気味わうとしよう。

「緋色は部活はどうなんだ？」

「どう、って聞かれてもどうゆう事かしら？」

「いや・・・どうゆうもののかなと」

部活などやった事もなかったし、普段はどうしているのかも、単純な興味もある。家にいる時の事はわかるが、いない時の事はわからない。

「・・・私は部活はただの精神統一にしか使ってないわ。・歡樂・がない分、想造する時のデモンストレーションとしか考えてないもの」

「・・・すまん」

「謝らなくていいわ。アズマが興味があるのはわかるもの」

「いやあ、うん。そんなもん」

「他に何か聞く？私はそんな志だから、周りとはあまり交流はないけど」

「・・・緋色は上手いのか、ってのはいつものやつでわかるか」

緋色の矢が外れたところを見た事がない。百発百中、一発必中、難しく考えなくても必ず中たる。中たらないのは、それは外れたのではなく緋色が外したか、相手が迎撃したかで、内的要因ではなく外的要因でしかない。

「それは行使してるからよ。目標との射角をゼロに、空中での腕の制止。精神的な事以外はそうして無理矢理にやってるの」

「つまり部活だと？」

「十本に七本ぐらいかしら。これで県大か、もしくはそれ以上ぐらいね」

「ふーん。部活っていいものか？」

「人それぞれよ」

「緋色は？」

「興味ある？」

「それなりに」

「どうやら、緋色の事を知った気でいたかも知れない。いや、人並み以上には知ってはいる。その分、普通に関わり、普通に知る事ができない。普通じゃないからこれは過ぎた望みなのだろうか。」

「……部活は一つの組織だから、独立しているんな事をしてるわよ。バーベキューとか、お泊り会とか」

「……部活内恋愛とかも？」

「……まあ、別に禁止じゃないから、してる人もいるわよ。ほら、弓道ってカツコイイから」

「緋色はしてるのか？」

「……恋愛？」

「ああ」

「ファルもあれだし。ませガキみたいになってきているから、ここはアドバイスを送って欲しい。俺はまだないから。言っても通じないし、わからない。」

「何、アズマは私の事好きなの？」

「そうだな。……好きだよ」

「……え」

「一季も。ファルも。江湮も。みんな好きだけど、なんか違うんだろ。こつゆう好きとは」

「知らない!!!」

「……えー……」

「何故そんな不機嫌なんでしょうか、緋色さん。何か気に障りましたか。私にはさっぱりです。」

「一季……は？」

どうなんだ、と聞きたかったが、言葉が途切れる。別に一季が奇怪な行動をしてる訳ではない。ただ、感覚的な事である。

「なんだ？陸上の事でも聞くのかな、アズマ君？」

いつの間にか一季は一杞になり、肉じゃがやタコのカルパッチョ、つぶ鯛の塩焼きを突いている。通りでさっきから鳥肌が立ってるのか。

「どうかしたかな？」

「あー・・・味はどうか？」

「ああ・・・美味しい。ホントに美味しい」

「そっか」

「ああ。あつたかい味だ。‘恐怖’を忘れるぐらい美味しい」

「・・・やっぱりなくそうとは思わないのか？」

「いい誘惑だね、アズマ君。確かにこの美味さを100%感じるのも魅力的だが、それじゃ僕のアイデンティティーが消える。という事は同時に僕も消えてしまうのさ」

「難しいな」

「そうゆうこった。ぶっちゃけ貴重な体験だったよ。すまんね、一季」

それだけ言うと、漏出していた恐怖が消える。一季に戻ったという事か。見た目に変わりがないから、はっきり言って感覚に任せている。

「どうかしたかん？なんか話そうせん」

「いやさあ、うん。リアクションに困るんだよ」

「僕に言うなよん。たまにばって変わるから僕も驚くんだよん。そ

れに、もうばれたから結構オープンになったん」

「積極的になっただって事か？」

「ああ。一杞も癖頭や緋色、ファルとも話したいみたいだなん」

「嬉しそうだな」

「うん。けど・・・同時に怖いなん」

「?・・・何が」

「これがいい変化か、悪い変化かかってなん。一杞も思ってるよん」

そう言っでご飯を掻き込む。あまり、散策前に暗くなりたくないのだが、如何せん予定通りにはいかない。

「さて、お先におかわりん」

「あ、この！俺も食べるからな」

「早い者勝ちだよん」

「ちつくしょう！」

急いでご飯を掻き込み、腹に収める。夜の為にエネルギーをしっかり蓄えないといけない。食べる事だけがエネルギーの蓄えではない。この空気をもう少し、ぎりぎりまで感じて、夜のツメタサに堪えられる様にするのも、エネルギーの一つである。

皿をスポンジで洗い、水で洗う。タオルで水を拭き取り、食器棚

の中に仕舞う。それらを四人で分担し、早め早めに終わらせる。

「9時に出るから、それまでは待機ね」

「あと10分か」

手頃な時間とは言えないが、気持ち切り替えるには十分な時間。手に付着した泡を落とし、エプロンを仕舞う。ソファに腰を掛け、目を瞑る。

眠る為ではない。単なる仕種でしかない。やるなら自然な、一番落ち着ける行為がいい。それに、今日はいつもよりも危ないのだ。

『今日は曇りだから、数も多いわ。いつもみたいなの二人一組じゃなくて、四人で行くから。危険だという事を念頭に置いてね』

緋色の忠告が体を堅くさせる。可能性を上げる事は同時に危険性を上げる。安全策を取り、晴れた日に行ってもいいが、今回は前進が主。こちらから打って出る。

「アズ」

「ファルか。どうした、時間か？」

「無茶、しない」

「・・・しないよ。俺は生きないと」

江湮が目覚めない。アズマの行動理由はそれしかない。・悲哀・を取り戻す事は糧とせず、他人の為に、しかも原因と呼べる発端の為に夜をさ迷う。それをファルがどう捉えたかは知らない。

ファル自身にもそれはわからない。アズマの手を取り、見詰めるだけ。それはどんな意味か。ファルにも皆目見当がつかない。そうしたいからそうする。まるで赤ん坊の様に。

「またアニメ情報か？好きだな」

「違う。僕、アズ、し・・・しん・・・ぱい」

「嬉しいよ。でも俺もファルが心配だからファルも無茶するなよ」

「・・・だきだき」

「ん？」

「だきだき」

抱き着いてくれ、と要求しているのか。若干逡巡して、背中を手を廻す。触れて解るのは、震えているという事。いつも散策前に震えていたら、どれ程心細かったのだろうか。そんなに心許なかったか、頼りづらい程一人で抱えている様に見えたか。

大丈夫。心中で呟き、ファルの背中を叩く。大丈夫。手一杯だけど、それでも他人を背負う事ぐらいはできる。大丈夫。

「行くか」

「了解」

時計は空気を変えている。立ち上がり、緋色と一季は既に準備を済ませているみたいだ。リュックを背負い、外に出る。寒くはないが、心がツメタサを増す。いつもより早い時間帯。リュックの中には、食料、水、その他防寒着やらが詰まっている。しかし、温度差が激しい。実際にはなく、空氣的に。

「いやあ、なんかわくわくするなん」

大した移動手段などなく、勿論今は徒歩である。数十分歩いていれば到着する距離だが、その間、黙っている事などできそうにはなさそうだ。

「なんだそれ。コワイー、とかじゃないのか？」

「スリルとホラーは表裏一体だよん。ジェットコースターみたいなものだけど、僕嫌いなんだよん、ジェットコースター」

「俺は好きだぞ」

「なんでん？」

「なんでって、面白いし。スリル感じるし」

「スリルって身の危険性だろん」

「いや、怖いって思うだろ」

「安全なのに」

「そりゃ事故があつたら大変だし」

「100%安全なのに怖いって思うのかん？」

「それはただの屁理屈だ」

ただの、とは言えない。凄い屁理屈だ。一季は通常よりも重い恐怖を背負っているから、敏感なのかも知れない。だから、安全な恐怖、危険な恐怖が区別できる。第六感に近いだろうな。

「流石に多いな」

周りを見渡せば、唸るナニか。ソレらは目に見えて数が違う。蛍光灯の下を伝い歩いているから、アイテは触れる事すらできない。が、感覚には触れている。土足で嫌悪の琴線にさわる。一季の様な増発がなくても、過敏に反応してしまう。

「いちいち体力は使ってられないわよ」

「使わないよ」

「それに相手にするのはコイツラだけじゃないわよ」

「絡まれるのは御免だな」

「そうね。絡まれたくはないわね」

中央公園は木が多く、周りからは見えづらい場所である。その為

か、蛍光灯が多数設置されており、明るい空間である。ただ、この場所に乗じて犯罪も多く、そんな場所を平気でうろつく人はいない。その事もあり、恰好の穴場として夜な夜な集まる人がいる。最近来た事もあり、その時は緋色のイーターを回収した。

「うーん、適度な疲労感」

「そうかあ？俺はちよつと疲れた」

「それが適度な疲労感だよん」

「ウォーミングアップって言葉よ」

とんとん拍子に進める訳もなく、仕方なしに戦闘を繰り返した。最低限に抑えようとしたが、それでも疲労感は残留する。また、それに惹かれるモノも少なくはない。

「さて、本題だなん」

現在地は公園の外。公園の中はまだ喧騒やら気配やらは少ない。まだ9時を過ぎた頃だ。夜は長いと言うから、この時間帯はここを訪れる人にとっては早いのだろう。好都合と言えば好都合だが、人が少ないと、ヤツラの集まりも少ない。

「ま、先ずは休もうぜん。癪頭、おにぎり」

「確か向こうにベンチがあったかな。食べるならそこにしよう」

蛍光灯の光の範囲にあるベンチ。あまりいい場所とはいかないが、贅沢も言えない。周りがワンダーだと、美味しいものも半減しそうだ。

「やっぱ海苔はぱりぱりでないとねん」

家ではご飯と海苔は別々に分けてある。一緒にしておくど、ご飯の水分で海苔がフニャフニャになるからだ。手にも着くし、食べ易いなら別々の方がいい。

「まだ人は少ないわね」

「だろうな。まだ良い子が眠り始める時間だし」

「なら私達は悪い子？」

「そうは言わないさ。まあ、悪く成り切れない子供、ぐらいかな」

「アズ、お茶」

「はいよ」

本格的には食べない。小腹を満たすだけ。といってもまだ動く予定はない。時間は多くあり、計画的に運び、明日は土曜である。多少の夜更かしは心配は無用。おにぎりも沢山ある。長期戦は想定内だ。

「人集まるまで何してようかな」

「散歩、しよ」

「いいんじゃない、散歩。それにここだと目立つわ。歩き回った方がいいわよ」

「そうだな。周りの地理でも確認しようかな」

周りからは奇異な視線しかない。実際、通りすがりの人は変な目で見ていた。数が少ない分、緋色の言った通り目立つのだろう。

「ふーん。今時珍しい人達もいるものだな」

「なっ・・・!？」

「おや、これは失敬。好奇心のあまり声をかけてしまったのだ。驚かせたなら謝罪の言葉を述べよう」

透き通る声で、上から発せられている。自分の身長は平均男子の身長よりも高いのだが、それでもこの男の背は大きい。長袖のＴシャツに、体より一回り大きなパーカーを羽織るこの男性。それより今、気配を感じなかった。

「どちら様です？」

「おっと。またも不法を犯してしまったな。その物怖じしない態度、君はなかなか度胸が据わっている」

「・・・何か用があたりですか？」

「ああ。先程から失礼ばかりで申し訳ないが・・・」

目が細まり、確実に視線を合わせる。何かよくない。何故だか妙に身構えてしまう。

「握り飯を貰えないだろうか」

「・・・え・・・まあ、いいです・・・よ」

「だそうだ。カナメ、トシラオ、サゲツ。許しが出たぞ」

「・・・えー」

この男の声が掛かる先に、呼ばれた人達が来る。これは久々に、とてつもない厄介事に絡まれたのかな。緋色、一季、溜息を吐かないでくれ。

「改めて礼と自己紹介をさせてもらう。私の名前は掬羽ハバハと言う。年は25歳。一応、このグループのリーダー的ポジションだ」

「誰もそんな事思っちゃいなえがな。おれの名前は要潤カナメだ。おにぎりはありがとな、坊主」

「・・・斗白鳥トシラオ」

「失礼だよ、斗白鳥。変わってお礼を言うよ。ありがとね。僕は又サ子ゲツって言うんだ」

各々の自己紹介が終わるが、何とも頷けない。自分達も物好きな連中として見られているが、この人達も十分物好きな人達だ。

要潤と名乗った男性は竹を割った様な人で、おにぎりを食べながら豪快に笑っている。

斗白鳥という女性だろうか。口数も少なく、フードで顔の半分は隠している。最初の頃のファルに、どことなく似ている。

叉子という男性は所謂爽やか系。髪を金髪にして、なんかきらきらオーラ（仮）みたいなものが出てる。ただ、左腕がないところが焦点を合わせてしまう。

「こちらの自己紹介が終わったのだ。よかつたらでいいが、名前を教えてもらえないだろうか？」

どうしたものか。緋色、教えていいと思うか？

アイコンタクトを交わし、一応の了承を得る。喋るのは最低限だけ。何故ここにいるかを聞かれたらどうにかしよう。

「東広つて言います」

「・・・緋色です」

「一季だよん」

「ファル」

こちらは手短かに終わり、向こうは改めて友好の言葉をかける。どうやら危険はなさそうだ。

「そちらはこれで全員なのかい？」

「はい、全員です」

「そうか。こちらはあと一人いるのだが、如何せん馬鹿者なのだ」

「もしかして、その人を捜しているのですか？」

「いや、捜してはない。方向音痴だが、勘はいい。そのうち合流できる」

「そういやあいつ、いなかった最長記録は半年だっけ？」

「・・・五ヶ月と14日」

「細かい事気にすんなよ、斗白鳥。それで勘がいいとかは微妙だけど、結局おれらの周りをさ迷ってたのは傑作だったな」

豪快に笑い声が響く。他人を他人と思わせない様な親しさだ。この人的にはもう、意気投合している感覚なのだろう。他の三人、特に斗白鳥という人は心を許していない。

「ところで坊主達。ここで何してんだ？」

遂にこの質問が来ちゃったか。動揺しないで、ポーカーフェイスを気取ろう。俺は手一杯だから、誰か頼んだ。

「グループデート」

緋色が一季が喋るかと思ったら、まさかのファルですかい。でもこれが一番無難かも知れない。ナイスだファル。

「いいなあ、若いって。おれ彼女なんて出来なかったんだよな。なあ、叉子？」

「何言ってるの、要潤？僕は彼女いたよ」

「な・・・掬羽は？」

「すまないが、私もいたのだ。結構前に別れたが」

「・・・斗白」

「いた」

あ、なんか凹んだ。いや、こちらも方便なんだけどね、うん。本
当の事は言わなくていいか。

「まあ、要潤の事はおいというて構わないか。君達は何だってこんな
夜に決行したのかな？」

「それは・・・夜の方が趣があるから」

咄嗟に出た言葉だが、理由といえばこれしかなさそうな気もする。
ちよつと用事があつて、なんて猜疑を突く言葉になる。

「・・・ふーん・・・そうか、成る程」

どこか納得した様子を見せる。どうやら、難関は過ぎたみたいだ。
あとはどうでもいい。時間まで何とかしてやり過ごそう。

「それなら、ちよつと確認させてもらおうかな」

その声は耳に届かなかつた。変わりに届くのは、ガラスの割れる
鋭い音。続いて暗くなるベンチ周辺。つまるところ、安全地帯が危
険に様変わりしたという事。嫌悪感が最大になるところで前に走り
出し、安全なラインまで飛び退く。

「ちっ」

一季の方から聞こえる舌打ち。どうやらそうゆう事らしい。これでもう裏付けされた。ごまかす事はできそうにもない。

「嘘はいけないな」

「嘘も方便だよん。ま、最初から確信があつたみたいだけどん」

「それはそうだ。こんな時間にうるつく人は物好きな人しかない」

俺達は物好きな部類に入るらしい。ならこの人達もそうなのだろう。同じ部類、同じ目的を共有するみたいだ。

「結局、絡まれちゃったわね」

「絡まれるってこっちの事だったのか？」

「そうよ。あの組織ではなさそうだけど、組織を作る人は少ないいわ。ただ、たまたま出会ってしまったわね」

「たまたまではないさ。過去はわかるけど、未来はわからない。なら今が全てで、今夜出会えた事は偶然ではなく必然だよ」

「それは結果論ね」

「見解の相違は人それぞれなものだ。ところで君達に聞きたい」

「何を」

「君達はドリーマーかな」

「違う。俺達はファインダーだ」

「・・・これは事実みたいだ」

何を根拠に言ってるのかわからない。それはともかく、この口ぶりからすると、間違いなくこの人達もファインダーなのだろう。

「けど一人は違うみたいだ」

視線がアズマを通り過ぎ、後ろに隠れているファルに合わせられる。少女は凜として受け止めたが、裾を掴む腕の震えは止まらない。

「私達も接触があつたが、ドリーマーと話す事も初めてだし、懐かれる人も初めて見た」

「ドリーマーじゃねえ。ファルだ」

「これはまた失敬。そうだね、ファルと名乗ってたね。・・・ふむ、どうやら見たところ危害はなさそうだ」

「こちらは敵意剥き出しである。先に手を出す気はないが、向こうが危害を加えるなら、打つて出るつもりだ。」

「君達も何かしらあの組織と接触があつたみたいだな。よければ何か話してくれないだろうか？」

「悪いから話さない」

「け、まどろっこしいな。腕づくでやりやあいだろ」

「そつちがやる気なら、こつちもやつてやる」

「いいねえ、その度胸。てめえはおれがやる」

「待て、要潤」

「・・・ちつ、わーつたよ」

要潤の身長は掬羽より大きい。今は掬羽の方が大きく見える。それ程の存在感があるのに、どこかいない雰囲気。漂わせる。

「東広と言つたな」

「・・・ああ」

「そちらは敵意がないみたいだ。無理に闘う必要もないし、話したくないなら話さなくてもいい。ただし、聞かせてくれ」

「・・・」

「まあ、聞いて損はない。はっきり言う、仲間にならないか？」
「ならない」

問い掛けを一蹴する答え。

「・・・即答」

「随分と嫌われたものだね。仲良くなれると思ったのに、残念」

「落胆するなよ、叉子。友好を築くのは時間だが、信頼を得るのは行動だよ」

「そうだね」

「という訳だ。今夜の出会いを嬉しく思うよ、東広」

「いー」

「ふふふ。・・・最後に一つ。見たところ、ファルの右腕は義手みたいだ。余程素晴らしい人が作ったのだろう。本物と腕と変わらないいい物だ」

顎に指を当て、鋭い目がファルの右腕を見極める。どうゆう目をしているのか。

「それでだ・・・東雲 トウマって人は知っているかな？」

「・・・」

何故ここでトウマの名前が出るんだ。何か関わりがあるのだろうか。

「まあいいか。お節介として忠告をしよう」

「いらない」

「そう言うな。東広の消失した感情は何だ？」

「教えない」

「強情だな。それで忠告だが、消失した感情の言葉は忘れちゃいけないよ」

「・・・??」

消失した感情は、'悲哀'。それはわかる。何が言いたいのだろう、
一体。

「ははは。また会える事を願うよ」
「願い下げだ」

また、ははは、と笑って姿が掠れていく。一触即発の空気が穴を
開け、萎んでいくのが肌で感じる。それに変わり、疲労が注入され、
あとに残ったのは壊れた蛍光灯と綺麗に食べられたおにぎりだけだ。

「 くの」

「・・・えっ・・・？」

「バカー」

「へっ、っ!」

緋色の鉄拳が顔にクリーンヒットし、俄に意識が飛びかける。引
き止めたのは疑問と痛み。疑問と痛みが1：4といったところ。

「痛いぞ、緋色」

「うるさい！なんでぼんぼん話を進めるの!?!あれで戦闘になって
たらどうするの!?!」

「あー・・・」

「向こうの方が有利なのよ。数もあと一人いるみたいだし。戦闘に
なったら確実に負けてたわ!」

「はい・・・はい」

「あなたには江湮ちゃんを助けるっていう目的があるのに、そう囚
われるのかしら!」

「囚われてたか？」

「囚われてました！怒りで軽く囚われかけてたわよ!」

「うっ・・・すまん」

「だいたいね……」

「落ち着けよん、緋色。囚われかけてるぜん」

助け舟を出した一季の言葉に思わず緋色が口ごもる。再考するとどちらも今は危険な状態なのだ、俺も緋色も。

「でも軽率だったぞん、癡頭。もうちょっと考えろん」

「ああ……わかった」

「それとさっきの忠告なん」

「あれがどうしたんだ？」

一季の声が僅かに重くなり、表情はいつになく険しい。険しい、というよりは心配に歪む顔。先程の掬羽の言葉にどれ程の意味が込められているのか。一季は全てを理解した顔で話を続ける。

「……緋色、記憶の中でどれが、歓楽、か思い出せるかん？」

「……思い出せるわよ」

「それは何かなん」

「……私とアズマと一季とで行った散歩。幼い時に行って、でも帰り道がわからなくなっ、それで何とか帰れたけどこっぴどく怒られたわ。でも……楽しかったと思う」

「うん、それは僕も覚えてるよん。確かに楽しかったん」

そんな事もあっただろうか。それらしきものはあるけど昔過ぎて他のと同じく虚になっている。

「アズマ、記憶の中でどれが、悲哀、か思い出せるかん？」

「ああ、思い出せ……る？」

その後の言葉が続かない。思い浮かべたのは悲哀がなくなった発端の件。だが、思い浮かべて思うのは疑問。自分に対しての疑問。この記憶でいいかの問い掛け。これが だっ たっ け。あれ、思い出せない。

「つまりはそうゆう事なんだなん、アズマ」

「……っ」

「感情と一緒に、それに関わる感覚も忘れてるん。例えば会話で。うちのおじいちゃんが死んじゃったんだ。アズマならどう言葉をかける？」

「……え……と……」

「わからないだろん。それは悲しいねとか、気の毒だねとか、相手の悲哀にも疎くなってるん。咄嗟に言葉が出ないん」

確かに言葉が出なかった。どう言えばいいかもわからなかった。やばい、これはやばい。

「……感情を消失して一番厄介なのは、こうして言葉を」

忘れてしまう事。

どうしてだろう。声が酷く遠い。こうゆうのをどう言えばいいの

だろう。言葉が見つからない。

s i d e | H a b a h a

曇り空ならどこかの木の下では眠れない。仕方ないので、人様の物置を借りる事にした（不法侵入）。ガレージもついていたので、そちらもついでに利用している。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「掬羽？」

「どうした、叉子」

「いや、東とか言う子供達について考えてたのかな、って」

「ああ、その通りだ。なかなか興味深かった。それに」

「それに？」

「握り飯が美味かった」

「ぷっ。確かにそうだね。彼のおにぎりは美味しかった。斗白鳥も食べるなんて、珍しい事もあったね」

それに、まだ何か知っている様な感じもある

あくまで推測だから言葉にはしない。掬羽が思っている様に、叉子もそう推測している。要潤も斗白鳥も彼を気に入っただ様だから、暫くここにいる事に誰も反対はしないだろう。

「ところで二人はどうした」

「生理現象」

「またか。懲りないな、要潤も」

ガレージの方では夜の営み、ではなく、耳を澄ませば何かを叩く音しかしない。それに混じり、要潤の痛みに似た声が聞こえる。夜ばいをしようとする要潤が殴られているのだろう。要潤もそうだが、斗白鳥も物好きだ。

「さて・・・寝る」

「おやすみ」

瞼を下ろし、眠る体勢に体が入る。今日一日の事を思い出しながらいれば、だんだんと眠りに入る。本日の最後にあっただ出会いに感謝しながら、意識は完全に無意識の下に溶け込んだ。

44th「忘却」(後書き)

はい、戦闘はありませんでした。嘘つき、と呼んでくれても構いません。深く傷つきません。最近は何子乗って文字数が増大しています。調子乗っていい事がなかったのに。とりあえず、新しく出てきた四人、いや五人を動かしてどうにかしようかな、とは思っています。

45th「壁」(前書き)

熱とは温かいものでもあるが、自分を酔わせるものでもある。熱、ねつ、ネツ。高すぎれば、死に至る事もあるだろう。病気からくる発熱という意味ならば。

曜日というのは七曜の星から来てる。元は北斗七星の和名の一つらしい。日と月。そして水星、金星、火星、木星、土星の総称らしい。今日はその土星。つまり一般的で言う土曜日で休日。その日に何もせず空を見上げている人物が一名。詳しく言うと、ベンチに座る人は二人で、そのうちの一人が微動だにせず仰いでいる。

しかし、見上げた空はいかにも悲しげである。涙を瞼の縁まで溜めた天気で、そんな日に歩く人は少ない。その少ない中の東 東 広という人物は、昨夜について思いを巡らせている。

あのあとは、とてもじゃないが散策に出る精神状態ではなかった。焦点は疎らで、心身ともに揺らいでいた。頭の中で幾度も連呼される、忘れてはいけないよ、という掬羽の忠告。それで繋がるのは、何故あの時好戦的な態度をとったのか。つまり、あれで戦闘になり、緋色達が死ぬ可能性があったのに、それを怖いと思うが、ない自分がいた、という事に繋がる。

その考えに辿り着いても、繋ぐ線が途中で透明になっていて、しっくりとこない。言葉が嵌まらない。でも、わかっってしまう。だからこうして意味もなく、無駄に、徒に、徒然と放浪している。涙が流せるなら、とも思ったが、泣き方を忘れた。故に、この意味の判らない塊を発散する事ができない。

「・・・・・・・・雨」

ついに耐え切れなくなった空が泣き出した。所々で視界を過ぎる人達は、早々と去るか、傘をさして視界から消えていく。しかし、アズマはベンチで空を見上げるだけ。

このまま雨にうたれていれば、少しは気分が晴れるかも知れない。そんな考えだが、胸中は暗色で塗られて、それは水性のペンキではない。服にこびりついた墨汁の様に、擦っても落ちてはくれない。

不安、恐怖、絶望、焦燥、落胆。黒という黒に染まる心情。他多数の言葉にできない、理解できない、範囲外である感情。言葉に置き換えるのも億劫。知りたいのはそんなモノではない。果たして、江湮を救ったあと、全てを取り戻したあと、何を思い出せるか。

消失したモノさえ虚か

言葉には多分できる。でも自信がない。言葉としては理解できても、感覚としては許容できない。当たり前か、消失したのだから。

曇天を見つめていた視界に、急に何か割り込んでくる。心ここに非ず、だったから、何なのか、状況の変化に時間が必要だったが、それは誰かが翳した傘だ。

「・・・・・・・・ファル」

「大丈夫、夫？」

誰かなのは普通に考えると解る。ずっと朝から付き添っていた人物。それを思うと、少しは頭が冷えた。そういえば、招福に行かないと。

冷えた体を動かし、ぼやけた視界で遠くを見る。感覚はほぼ皆無。寒いという事すら感じない。体に当たる雨すら、煩わしいとも感じない。あるのは、ファルが濡れた服を引っ張っている事だ。

「どうした？」

「大、丈夫？大丈夫？」

心なしか声が掠れている。もしかしてでもなくても、泣いているのだろうか。

「どうした、なんで泣いてるんだ？」

「し……しん……心配」

喘ぎ声と咳込む声が混じり、なんとも言えない声になっている。しかし、自分の悲しみを感じれないのに、他人の悲しみを考える事はできない。それだけが頭に残り、身を縛り、本当の意味も理解できない。

ふとして気づく。傘の下にいるというのに、時折頬に雨を感じる。見れば、傘のビニールの部分はぶれ、これは想造されたモノだとわかる。

「……大丈夫だ。うん、大丈夫。だから行くか」

冷えた手で、ファルを引いていく。傘は追いついていない。それが、更に想造された傘に穴を空けていくのは言うまでもない。

「こんにちは」

「ありゃ、どうしたの東君？びしょ濡れじゃないか？」

「来る途中で雨に降られてしまって」

「とりあえず、着替えてきなさい。適当な服見繕うから」

「すみません」

確かにこのままバイトをすれば、迷惑になるだけ。ここは厚意に甘えないと、後々が面倒になる。

「・・・何かあった、東君？」

「い、いえ。どうして、ですか？」

「なにか元気というか、いつもと違う様に見えるんだよね」

「気の所為ですよ。服ありがとうございます」

「ありがとう、ねこ」

どういたしまして、と気さくに流すと、また店の方に戻っていく。俺も着替えたなら、さっさと手伝わないと。

「さて、何からやりますかね？」

「そうだね、といってもまだお客さん来てないから、皿でも洗ってもらおうかな」

「わかりました」

「ファルちゃんは下準備の手伝いをしてちょうだいね」

腕を捲り、さっさと取り掛かる。客が来ればフル回転するのだから早めに終わらさなければ。

「・・・東君」

「はい」

「無茶・・・してないかい？」

手を動かしながら語りかけてくる。かといって、こちらも手を止めて聞く程の、深い話ではないので手は動いたままだ。

「してませんよ」

「そうか。おじさんも東君ぐらいの時は、無茶したんだよ。家は裕福じゃなかったからねえ、おじさんも沢山バイトしたものだよ」

「まだおじさんって年でもないでしょ」

「それはありがたい言葉だね。話を戻すけど、無茶をし過ぎて、いつも限界を越えてたんだ。しょっちゅう体を壊して、周りの人を心配させてた」

「・・・はい」

「おじさんは東君の事が心配なんだよ。東君にも話したくないもの、話せないものが一つぐらいあるみたいだけど、あまり無茶はしない様にね」

はい、とは言えなかった。無茶をして己を昏睡させた奴がいる。なら、そいつの為に多少の無茶をしても早めに起こしてやりたい。

「ま、おじさんが言えるのはこれぐらいだね。ほどほどにね」

「・・・はい」

いつの間にか止まっていた手を動かす。聴き入っていた訳だが、恥じる事でもない。ありがたい忠告として胸の内に留める。

「あ」

無意識に皿を重ねていた所為か、バランスがズレていた様だ。置いた時にはもう遅い。積み上げられた皿は、形を崩し、落ちていく。咄嗟に手を差し出すが、片手で掴める枚数なんて高が知れてる。一枚は掴んだが、他数枚は僅かに落ちる速さを遅めただけ。焼け石に水だったが。

「あ……つちゃ」

派手な音を立てて皿が割れる。割れなかった物もあるが、それはもう使えないだろう。

「すみません」

「いや、それより大丈夫かい？」

「はい、大丈夫です」

「なら続きはやるから、割れた皿の片付けをお願いするよ」

言われなくてもやるつもりだった。ここでねこさんがやると言うたら、強引に自分がやると拒んでいただろう。

奥から箒とちり取りを取り出し、破片に気をつけながら丁寧に掃く。食べ物を扱う場だ。いつも綺麗にしなくてはいけない。

「よし」

床の上からちり取りの上に乗った皿を持ち上げ様として

「あれ・・・？」

50センチ、ちり取りが上がった所で手から抜け落ちる。当然、集めた破片は、落下した衝撃で元の木阿弥になる。

「あはは・・・すみませんね」

これ以上ふざけているとねこさんから喝が飛んできてしまう。何やってるんだか。

行動しようとする頭とは別に体は動いてくれない。また片付け様とするが、今度は箒で上手く掃けない。

「東君」

あーあ、やってしまった。これは注意が飛ぶかな。悪くて頬を抓られるくらいかな。

しかし、想像とは裏腹に手を掴まれ奥へと連れられる。椅子に座らされ、無意識に背筋を伸ばし、イマイチピンとこないアズマの額に大きな手が触れる。

「うーん・・・とりあえずこれ」

渡されたのはどこの一般家庭にもある体温計である。まさか、とアズマは思い、慌てて抗議する。

「ちょ、ちょっとねこさん」

「いいから静かにしてる。今、おでこに触ったけど熱っぽいよ」

「大丈夫です。俺は元気ですよ」

「無茶している人はそう言うから。おじさんもそうだったからよくわかる。だから、証明させる為に体温計で熱計って」

そんな馬鹿な、と笑い飛ばしたいけど、それは結果を見てから言おう。今騒いでいたって何も変わりはないのだから。

アズマ自身ここ数年は風邪など引かなかった。しかし、それは大した意味をなさない。風邪を引かなかった期間が長かっただけで、それが慢心に繋がらないとも限らない。

「げっ!?!」

体温計が示す温度は平熱の二度も上。一体何をしたら、って雨にうたれたのが最たる原因。他は、積もりに積もった疲労か何かも原因だろう。

「……ん〜……わ〜……」

いきなり歪む視界。体はずっと異常を訴えていたが、否定していた頭は漸く証拠を突き付けられ肯定する。病は気から、との言葉も今なら理解できる。本当に気の持ち様次第だ。今まで上の空だったから気づかなかったんだな。そう思いながら、頭はどんどん高度を失う。

最後に聞こえた音は何だったろうか。多分、他の人が聞いたなら、涙目か思わず頭を押さえてしまうだろう。

降り出した雨は、昨夜の天気からの崩れ。今の今までもったのなら、大したものだろう。

静寂になる一瞬。雨の音だけが、この世の中にしかないような閑散たる空気。ざわめきも何もかもがない中、最後の一射を手元から放つ。

「ありがとうございます」

彼女はそうして別れを告げる。先程までそこにあっただ空気は、今は霧散し、消えている。ただ、それを証明する物は、見事なまでに的の中心を射た矢だ。思わず引き抜くのを躊躇うくらい、見事に真ん中を射た矢だ。

傘をさして歩く。午後からは予定があり、部活仲間からの誘いは断った。この雨の中、移動するのも面倒なのもあつたが、好意を寄せている人の側にいたい、という本音もあつた。自然足取りは早くなり、家に荷物を置くとすぐに家を出た。両親にはバイトに言ってきます、と言いついて残して。

雨はそれ程強くない。気温は低く、雨に濡れたままだと風邪を引きそうだが。長い髪がいつにも増して収まりがつかず、所々が撥ねている。それでも雨の降る天気が好きだ。望むなら、もっと土砂降りの方が好ましい。周りの音すらそのカーテンコールの中に吞まれ、

雑音すら許さない。だが、そんな大音量でもさながらオーケストラの大合奏の様に聴こえる。

今はまだ、デュオかトリオ程の音量だが、心を静かにしてくれる事に違いはない。ふと地面を見れば、雨は跳ね返り周りへと弾ける。もし今降っている雨が、一点集中で降り注いだら、という想像に駆られた。本当に、もしそんな事になったら、まるでドリルの様にアスファルトの地面を穿つだろう。ありえない、そんな想像は。頭を過ぎった不可能な想像をしまい込み、招福へと辿り着く。

「こんにちはー」

「ヒイロ！」

「おう、こんにちは」

「・・・アズマは・・・どうしましたか？」

ファルがいる、という事はアズマがいるという事である。その彼が店にいないのはおかしい。奥の方で何か作業しているのだろうか。

「ちよつと風邪引いてね。奥でおやすみ中」

「えっ!？」

「まあ、無理がたたったんだろうね。もうすぐお昼休みだから、賄い食べたからお見舞いでもしてやってよ」

「はい」

予想外の出来事だったが、真実を聞いたからこそ心配せずにはいられない。ここ数年は風邪知らずなら尚更だ。

「・・・台所ちよつと借りますね」「何か作るのかい」

「卵粥でも。多分、お腹空かせてますから」

「そうか。緋色ちゃんみたいなの可愛い娘から食べさせてもらえるな

んて、東君も幸せ者だね」
「何言い出すんですか！」

物凄い剣幕で雇い主を睨むバイト人。こんな関係が許されるのも招福ならではという事で、片付けられていいのだろうか。

「・・・緋色ちゃん」

「はい」

「東君、最近無茶してるみたいだけど、何か知らないかい？」

心当たりはある。昨夜の出来事は、アズマの心を深く乱した。忘れてしまいそう、悲しみを滲み出す記憶を。元々記憶が虚な分、これ以上記憶としての感覚が失くなるのが怖いだろう。私も実を言うとうと怖い。今はまだ区別ができるが、このまま何年もいたら判断できなくなるだろう。アズマは今どれが、悲しみの記憶だかを判断できないと、正直ヤバいかも知れない。

「・・・わかりません」

「そつか。問い詰めるなら緋色ちゃんがやってね。こんなおじさんには話しくいだろうから」

「まだ、おじさんって年でもないですよ」

「・・・はは」

「何ですか？」

「いや、東君も同じ事言ってたから」

意味ありげな声で笑われ、思わずポウルを落としてしまった。多分、今熱でも出てるだろう。体温計で計れば一度くらい高いと思う。

暗い、というよりは虚無の世界だ。何も見えないし、何も感じない。そう思っていたら急激に背景は構成され、いつもの悪夢の場が広がる。

この映像が流れるだけで夢だと実感する。夢だと断定する人はもう半分目覚めている、と誰かが言っていた。確かにそうかも知れない。このあとはどうせ、血に濡れた自分と、知らない誰かが何かを抱えているのだろう。

展開は読めて、それでも展開通りに進んでいく。いつもの様に吐き気を誘い、精神を崩壊させていく。慣れない。慣れる筈がない。どれ程屈強な精神を鍛え上げても、これには勝てない。どれ程展開を知っていても、崩壊は免れない。

ゆっくり、いつもと同じ速さで夢は終わりを辿る。最後の場面。この先を知りたいと思っても遮るモノは大きく、走っていたらいきなり巨大な壁に阻まれた様な感じである。これ以上は侵入禁止みに。そうだとしたら、無意識の内に停止をかける自分があるのだろうか。知る術はない。

壁がなくなれば、それはもう夢から覚めた証であり、ぼやけた視界に誰かの顔が見える。

「……………緋……色？」

a t | o n c e s i d e | H i r o

湯気の立つ卵粥を持ちながら、店の奥へと行く。ねこさんが使っている様な私室を抜け、綺麗に整えられた部屋にアズマは寝ていた。額に濡れたタオルをかけられているのはいいが、氷枕まであるのは何故だろうか。至れり尽くせりなのか。

「…………アズマ」

声をかけてみるが応答はない。いや、なくてよかった。熱が出るなら、起きているより寝ている方が苦痛は楽になる。せつかくの卵粥が冷めてしまいが、それは仕方ない。

「アズ」

少女も心配して一緒にこの部屋に来ている。体を揺らしているが、やっぱり目覚めない。気長に待つ、とは言っても時間にも制限がある。あと30分もすれば昼休みは終了。見舞いは持ち越しである。

「タオル変えなきゃ」

アズマの額に置かれたタオルは、時間で乾いたのか、それとも熱によって乾いたのかは知らない。後者だとすれば体温はかなり高い筈。

「ファル、氷枕変えてきて」

「了解」

アズマの為を思って駆けていく少女。かくいう自分は、ちょっと公私が混同しているかも知れない。

「・・・熱・・・計った方がいいわよね」

きっとその方がいい、という事で、枕元にある体温計を手取る。しかし、硬直。体温計をセットする所は種類によって違うが、基本は脇の下である。という事は・・・

「し・・・しし・・・失礼しまーす・・・」

服を脱がさなくてはいけない。その行為はちょっとどころではない。今じゃなくても凄く蠱惑的な想像（妄想）がある。高鳴る鼓動に震える手。何に震えているかというところ、やはり羞恥と緊張か。

ボタンを外し、服をめくる。鍛え上げられた肉体。がっしりとしたその体つきは、男らしさがある。視線をそちら側に向けずにはいられず、ちらちらと覗き見してしまう。

手はまだ震えていて、収まる気配がない。これで弓道をやれ、と

言われたら無理である。何の為の日頃の行いだ、と自分を叱咤し、漸く目的をクリアする。

「はっ……っ……はあ……何と言う……疲労感かしら」

体力の消費など運動量と精神状態で決まる。運動に対する持久力があっても、精神が弱ければいつ終わるかわからないレースでは勝てない。緋色はどちらも、夜の散策の上で鍛えられてはいるが、前例のない状況になれば精神も乱れる。

「……う……」

体温計が熱の計測を終えたと囁く。一難去ってまた一難、とは人によって違つだるうが、彼女にこれはできるかできないかの瀬戸際である。

「心頭滅却、色即是空、煩惱退散、喝！」

日頃仏教になど興味はないが、今は神様にでも縋りたい気分である。言葉だけで悟りなど開ける筈もないが。

「これは……きついわ」

医者顔負けの摘出手術だ。右手を左手で押さえ付け、焦点を異物（体温計）にだけ定める。周りに触れたら駄目だ（主に自分が）。取り返しのつかない事になる（主に自分が）。

一秒毎に、慎重に手を進める。手が体温計を掴むが、それ以上奥には力を入れない。筋肉の収縮。伸ばした手を、行きと同じくらいの速さで戻す。

戻してから数秒。挟まれる抵抗がなくなり、体温計は役目を終える。

「・・・ミツシヨン・・・コンプリート」

脱力し、大きく息を吐く。呼吸していなかったのか、酸素を吸うのと吐くのが妙に早い。深呼吸をして、強引に整える。物凄い疲労もう二度とできない、できそうにない、やらない、やりたく・・・ない訳でもない。

「・・・熱は・・・38度5分」

高い。一体何をしていたのだろうか。起きてたら問い詰めているところだ。まったく。

とか言ってる自分も、同じくらい熱があるのは知る由もない。今はグラフ的には急降下しているから、何の問題もない。

「・・・・・・」

手にあるのは体温計。アズマが使った体温計。先っぽはてかてかしてる。金属の部分ではなく液体である。アズマの体液、不純物の排泄行為、汗腺から出るもの、つまりは汗、である。決して、緋色の涎ではない。

「・・・・・・」

危つくそうなりそうだったが、寸でのところで睡を飲み込む。同時に理性も飲み込んだか、夢遊病者の様に焦点が虚だ。

匂い。

鼻を鳴らして匂いを感じる。そんなに匂う訳でもないが、麻薬をやった様にトリップしている。顔は真っ赤で、これではどちらが病人かわからない。

「・・・・・・・・・・はあふ」

最早危険を通り越して、崩壊寸前である。警報を鳴らしても、誰の耳にも届かない。それは自分の内であるから、誰かが声をかけたらずれば正気に戻るだろう。

「・・・・・・・・・・緋・・・・色？」

ただ、戻ったら戻ったで、記憶ははつきり残っているから悶絶もなの、それ程消したいぐらいの羞恥に駆られるだろう。

「うわぁーきゃー！！！！」

我に帰る勢いと共に投げ飛ばされる憐れな体温計。先程役目を終えたそれは、二度と使用される事はなくなり、一生の役目を終えた。

「見た！？見たのね！？見たなら見たと言いなさい！」
「……………何で……………いるんだ？」

緋色の狼狽振り余所に、静かな声で率直に疑問を投げ掛ける。その問い掛けは、今の行為を見ていない事を意味している。冷静にそれを理解し、狼狽を隠す。そのまましていると逆に怪しまれるからだ。

「……………どのくらい……………寝てた？」

「それはファルが知ってるわ」

「そっか。……………緋色は……………」

と言つて腹の虫が鳴り出す。誰かは緋色、ではなくアズマである。その訴えに、若干冷めてしまった卵粥を思い出した様に膝の上に置く。

「お腹空いたでしょ？」

「まあ」

「卵粥作ったから。食欲はあるかしら？」

「適度に」

「はい、あーん」

「え……………っつと」

勿論拒むだろう。それは予想していた。だからこそ抵抗は許さない。

「熱かったかしら。ふーふー」

「いや、そうゆう事じゃなくて」

「いいから病人はおとなしくする」

病人にそんな無理はさせられない。それは建前なのだが尤もな理由である。アズマは成す術もなく、行為全てを受け入れるしかない。その度に顔が朱くなるが、それは緋色も同じである。

「むう」

「どう、美味しいかしら？」

「まだぼけてるから、イマイチわからない」

「そう。・・・はい」

「むう」

アズマの体調はいかにも悪そうである。いつも健康な分、そう見えるのかも知れないが、病人に変わりにない。なら十二分の睡眠と栄養は必要だ。だからといってやり過ぎもいけない。胃が受け付ける程度に、栄養は抑えよう。

「水は飲む？」

「ああ。もらっとく」

余程喉が渴いていたのか、コップの水は見る間にアズマの中に入っていく。大分汗もかいていたし、これも仕方ない事だろう。

「もういいや」

「わかったわ。またお腹空いたら言っつてね」

今の数分の動作でも堪えるらしい。大きく溜息を吐いて、早く横になりたそうな顔をしている。もうすぐ氷を入れ替えた枕をファルが持つてくる筈。予想した通りに、安眠の道具を抱えて歩いてくる音が聞こえる。

「アズ！」

起きているのに驚いた様な声。しかし、同時に安堵の声も聞こえる。とりあえずは大丈夫で、嬉しい様だ。

「おう、心配かけたな」

「大丈夫？」

「まあ・・・まだ怠いけどな」

「氷枕」

「ああ、ありがとな」

体を起こしていたのがきつかったのか、氷枕を敷くと気持ち良さそうに頭を埋める。その上に絞ったタオルを乗つけて目を閉じた。

「それじゃ、また後で来るわ。何かあったら呼んでね」

「・・・ああ」

「バイバイ、アズ」

「・・・ああ」

食べた粥は半分程だったが、睡眠を誘えたなら作った甲斐があったというものだ。名残惜しくもあるが、仕事はきっちり熟さなければならぬ。次の見舞いは、それを終えてからにしよう。

「お待ちせしました、ねこさん」

「おう、お疲れ様。お疲れで悪いけど、お客さん来てるよ」

「わかりました」

「MANMA NEKO」のエプロンをかけ、カウンターに向かう。だが、足を止める。

「……………」

ここで一季が連れて来た友人達ならどんなによかっただろうか。そんな幸運は望めない。

「よつす、また会えて嬉しいぜ」

「要潤……！」

「と、他二人ね」

陽気に、それこそ友人に話しかける様な声は、昨夜の人達だった。不幸を言うなら、あの日に、あの時間に、あの場所に赴いた事だろうか。わかる訳がない。

「どうして……………」

「っていうのは、僕がサーチを使えるから」

「何で……………」

「っていうのは、これ」

懐から出されたのはアズマのおにぎりである。

「まさか、緋色ちゃんが作ったおにぎりだったのか。てっきり彼が作ったと思ったんだけど」

思わずアズマの、と口が滑りそうになったが、ここは本当の事を言わない方がいい。アズマは今熱で寝込んでいる。彼らに知らせて

はいけない情報だ。

「ところで彼はどこ？」

「残念ながら、いつも一緒ではないのでわかりません」

「ファルはいるのにな？」

「アズマがファルの保護者ですが私だって似た様なものです」

「まあいいや。要潤、お腹空いてる？」

「朝メシ逃したから、結構腹あ減ってるぜ」

「・・・少し」

「なら、こっからここまで、お願いね」

指がメニューの上をなぞる。始まりから終わりまで、なぞられた数は十枚以上ある。それに驚きはしない。注文をねこさんに伝える間も、違う事を考えている。

一季はどこに行ったのかしら

彼女が求める助けはどこにいるか。遅刻癖で遅れている訳ではない。ちゃんと彼にも理由があって遅れているのだ。

空は曇天。雨はあまり強くない。風はなく、走るだけなら構わない。そんな事を思っても、わざわざ濡れるだけな行為はしない。傘で前の視界を隠し、視線は下を向いている。靴は地面に落ちた雨を吸い込んでいる。歩く度に、水と水が弾く音がする。それは擦れ違う人も変わらない。

淀みのない、招福へと向かう足が急に止まる。バシャリと音がして、誰かも止まる。溜息を吐いて、お互い顔を見せないまま会話を始める。

「よく気づいたな」

「あなたには気配がないからなん。擦れ違う人に気配がなければ、それはあなただって事になるん」

「そうか。それはこれから気をつけられそうにない」

傘で覆っていた視界を開け、琴線に引っ掛かった人物を改めて凝視する。

「今日は一人かん？」

「それはそちらにも言える」

「生憎ながら、癖頭とはいつも一緒ではないのでん」

傘を閉じ、わざわざ濡れるマネをする。一つ、また一つ、新しい吸水性を持つ物に、雨は飛びついてくる。多少弾きはするが大多数は服に染み込み、色に黒みを足す。

「やる気は十分か」

「どっちが。もし止まらなかったら、そのまま素通りはしなかったらん？」

「その通りだ」

初めからやる気だったのは向こうで、こちらはそれに応じただけ。応じてから後悔するが、応じなかったら応じなかったで、目的地に辿り着けなかったに違いない。

「君の消失した感情は何かな？」

「企業秘密ん」

「では、教えてもらう事にしよう」

向こうも傘を閉じ、臨戦体勢に入る。避けては通れない道。通してはくれない道。通るには強引に通るしかない。

「はあー・・・」

「何かあったか？」

「いや、昼飯食べてないなん、って」

「そうか、私もだよ」

内ポケットからナイフを取り出し構える。体に当たる雨が冷たい。しかし、心は更にツメタク、氷点下までいく。余計なものを考えないなら、人を相手にするなら、この方が都合がよい。

「dream out」

嘆息しながら行使する力。いつも通り遅れるし、目的地に辿り着けるかどうかは何より怖い。今日の壁は、いつにも増して厚く感じる。

45th「壁」(後書き)

闘う一歩手前です。次回、緋色とファルはどうなって、一季はどうなって、アズマはどうなる？

はい、話は考えてますよ、書いてませんが。終わりを忘れない様にしないと。ああ、もう、忘れないうちに書かなくちゃ。でも投稿時期は不定です。

46th「雨」(前書き)

総量が同じ二つの水。定期的に流れていく水も、断続的に流れる水も、結局は変わらない。ただ、最初から最後まで貯まった水が、一気に解放されれば、一口に変わらないとは言えない。

ねこさんはただ驚いていた。緋色はただ狼狽えるだけだった。フアルはただ何もせず構えている。まだお望みの助けは来ない。彼女は知らない。一季も確固たる理由がある事を。彼は今、掬羽と戯れの真つ最。知らないから、焦る心に助けを望んでいる。

食事の概要は、斗白鳥は言葉通りにお好み焼きを半分程食べて、無言でご馳走様をした。又子は普通に、それこそ平均男性ぐらいの量食べて「腹八分目くらいかな」と言っつて、余裕のまま食事を終えた。

驚くべきは要潤である。最初の三枚はほとんど三人で食べたものだが、残りの注文した七枚以上のお好み焼きを腹に収めた。それはまだ序の口らしく、メニューを手に取り、更にお好み焼きを同じくらい頼み、焼きそばを三人前くらい、頼んだ注文全てをスピードを落とさず完食した。

緋色的には時間をかけてくれるのは助かる。腹一杯食べさせて、動くのが大変だ、と言わせるくらい薦めた。それが功を奏したのか周りの傍観者までヒートアップする。特にねこさんなんてあまりの大食振りを気に入ったのか、おまけまで食べさせている。それにしても「凄い」の一言だ。それに尽きる。

「げっぶ。さすがに腹一杯だ」

とか言いながらデザートを口に運んでいる。底無しではないが、その体はそれ程までに燃費が悪いのか。朝ごはんを抜いたからといって、そこまでは食べられないだろう。

「お茶をくれないかな」

「はい、ただいま」

「連れないねえ」

「当然の接客です」

口を動かしているのは見えるが、お互いに注意しないと聞こえない声量。ここを闘いの場にはいけないし、事情を知らないねえさんにばれてもいけない。

「ここに来た理由は何かしら」

「ご飯食べに来ただけだよ」

「なら、四人で来る筈よね」

「考えが早いね。そう、掬羽には予定がある」

「・・・一季が来ない理由はそれかしら？」

「一を知って十を知るって彼女の言葉かな」

溜息が出る。助けは期待できない。今は敵意がないみたいだけど、それはここに来た目的次第。

「そう、掬羽は一季を足止めにしてる。なら、ここに来た理由はもう気づいているよね」

「・・・知らないわ」

知らなくはない。昨日の口ぶりからすると目的とは多分、あの組織についてだろう。勿論、話す気はない。欲しいのはあの組織の情

報とトウマの情報。そして、それらにはどちらもファルが関わる。つまり、欲しいのはファル。それなら戦闘になる可能性は大。二対三。望むべき対等には程遠い。

「ふーん。ならここを戦場にしても構わないかな？」

「ッ……」

来ると思った。そうなると思った。だから、それだけはいけない。そうしてはならない。最悪、自分だけで三人を相手にしなくては。

「怖い怖い。しかし、残念だなあ。折角仲良くなれると思ったのに、そちらのファルとも」

「ファル！」

殺気を全身から放っている緋色の横で、ファルもまた同じ様に佇んでいる。二人とも、護ろうとしているものは同じ。なら、とろうとする行動も同じ。

「……殺意」

「みたいだね。なら、やる事も決まったみたいだしそろそろお暇しよう」

「さてと……おいくらだ」

爪楊枝で齒に挟まったものを掃除している。その余裕たつぷりの顔を驚かせたいものだ。なにせ20枚以上のお好み焼きを食べたのだ。

「お代、13,250円」

当然このぐらいの値段にはなるだろう。おまけじゃなかったらも
っと高い筈だ。

「ほら、二万円」

ポケットから無造作に出される諭吉さん。そんな仕舞い方でいい
んだ。

「・・・では、お預かりします・・・とでも言うと思いませんか？」

私は出されたお金を、思いつ切り、もしお金の神様がいるとした
ら全員を敵に回すぐらい、勢いよく破った。ただし、目の前の三人
に見せる程度だから、それ程大袈裟ではない。

「バレバレよ。想造したお金なんて受け取れません」

落胆しているのは二人。要潤は体が痙攣している。イメージにあ
るモノの形と実際の形が異なるのだ。頭の中がパンクしている、つ
まりフィードバックを起こしている。

どうする、又子。お金もってるか？

ええっ・・・と・・・

おれ、因みに50円

50円！？なんでそれしかないの？また豪遊でもしてたの
ち、違うッ！

凶星か

そうゆう又子はどーなんだ。金あるのかよ

ふふ・・・信頼はお金じゃ買えないんだよね

ないのか！

こそこそと会話をする二人。驚いた顔は見たが、どこか不毛な争いをしてる。それとは別にフードを被った彼女は我関せずで、お茶を啜っている。それ以外は目も合わせ様としない。

「これしかねえな」

「だね。多分一石二鳥だよ」

「てえことは・・・」

「うん」

話は纏まった様だ。どうやらでもないが、お金を想造するくらいだから、金欠なのだろう。いや、見るからに。

だから、見るからにそれだから、次に行動しようとする事も、薄々だがわかってしまう。手間が省けていい。

「行くぞ(よ)、斗白鳥!」

食い逃げするというなら、ここを戦場にしないで済むし、ねこさんへのいい口実になる。何よりアズマにばれない。

「ねこさん、食い逃げを追い掛けます」

「行く」

「ああ、うん。無茶はしないでね」

残されたねこさん。かけられた言葉はありがたいが、多分それは聞けない。譲れないもの、というのがあるから。

外はまだ雨が降り続けている。傘をささず飛び出し、雨を弾く音がする。目的の三人はすぐに見つかった。なにしろ、あまり移動していないのだ。要潤が何故か腹を押さえて蹲っている。

「しまったー・・・ツツ・・・食べてすぐ運動したらいけねえのに。
おー・・・腹いてえ」

思わずすっ転びそうになる。下手に冷血じゃない分、好感は持っているにどこかやりづらい。とりあえずは大々的に近寄り、誘いに乗った事を知らせる。

「すまないけど、近くの公園はないかな？」

「・・・そこにあるわ。ベンチと小さな池ぐらいしかないけど」

「やっぱり、仲良くなりたいな」

「そちらの出方次第ね」

「残念。なら無理かな」

肩を貸しながら又子は悲しそうに言う。本当に仲良くなりたい、信頼を築きたいなら行動で示せばいいのに。何をそんなに頑なに拒むのか。そちらにも譲れないものがあると解釈していいのか。

雨は池に幾つもの波紋を生んでいる。無数の雨は無数の波紋を作り、その波紋は互いにぶつかり消える。それは人の様に。同じベクトルの考えなら助け合えたのだが、こちらとそちらではベクトルの向きが違う。そうして消える。消えるのはどちらか。死なないまでも、失うものは大きいに違いない。

「うっ・・・いてえ」

「言わんこつちゃない」

「・・・バカ」

「それは手厳しい」

もう濡れているからどうでもいいのか、雫が張り付いているベンチに座る。ホントに、見た目通りの性格だ。

「わりいけど、おれは傍観させてもらうわ」

「どうぞー、どうせ要潤の性格なら正々堂々やるっぜ、とか言っ
て抜けてたでしょ？」

「おおー、その通り、流石。ま、おれの予約はもう決まってるしな」

それは勿論アズマの事だろう。昨日は啖呵きって宣戦布告したの
だ。三人から二人になるなら好都合。予定とは変わったが、これで
勝てる望みが増えた。

「それじゃ、僕は緋色ちゃんとやるっかな。斗白鳥、そっちはよろ
しくね」

「・・・了解」

どうやら叉子とやる事になりそうだ。相手の得物は未知数。果た
して何を想造するのか。それは相手も同じだが、始めから武器は手
にした方が懸命かも知れない。ファルのサポートをする暇があるか
はわからないが、始めから手にした方が援護しやすい。

手の内をばらすのはどうか知らないが、大したカードも切れな
い。先ずは、どのくらいの力量かを探らなければ。

「dream out」

指の間に顕れる、合計八本の矢。それに比べて叉子は得体が知れ

ない。持ち手は普通に見えるのだが、その先がない。刃がついていく訳でもなく、かといって鈍器にしては短い。あれ程奇異な存在だとは想像できなかった。果たしてあれで何をするのか。

ファルもまだ向かい合ってるだけだ。黒刀を構えるのに対し、斗白鳥は何も手にしていない。何をするのかわからない分、後手に回るのが定石だと思うが、どうしたものか。

「先ずは・・・確認よね」

両手のモノを全て投げつける。中たれば儲けもの。その得体の知れないモノで防ぐなら、いくらかわかる。

「矢・・・ね。飛び道具は意味がないか」

思った通り、柄しかないモノが振るわれる。鋭い風切り音と共に、矢は何かに憚れる。右手だけだというのに器用だ。

振り終わり、地面に叩きつける様な動作。それで僅かに泥が跳ねる。まるで波打つかの様に。やはり、何かがあるとしか思えない。

いや、柄の先に続くモノはあった。目を凝らせば、うつすら見える。蜘蛛の糸の様な細さだが、ソレは確かにある。黒光りする、ワイヤーみたいな。その先を辿ると、更にある。重りみたいな鋭いのが。つまりは

「鞭、みたいね」

その様にしか見えない。ただ、尖端はいかにも突き刺す以外用途がなさそう。槍の先の様に尖り、水晶の様に透明感がある。実際鞭と言えるか定かではないが、鞭というカテゴリーには入るだろう。

「いい洞察力だね。斗白鳥」

「・・・やだ」

「えー、悲しいけど仕方ないかな。殺すのはやめてね」

「・・・無理」

「んー・・・要潤、もしもの時は止めてやってよ」

「ま、できたらやってやるよ」

それ程、殺す可能性が高い程に斗白鳥は強いのか。手助けには行きたいが、あの鞭のリーチ。助けに行こうとしたら、貫かれるだろう。ここは、ファルを信用して、早めに倒す事を考えよう。

「フツ！」

息を吸い込み、吐き出すと同時に、新たに想造した矢を投げる。左右でタイミングをずらし、素早く構え、また投げる。

「うおっ、いきなり激しっ！」

鞭をしならせるが、それだけで多数の矢を凌げる筈もない。防御を突破した数本が太股に刺さる。

「いったいなあ」

「ファルの方が気になるの」

「そう。でも、後先考えずに投げるのはできないよね」

確かに。確実に仕留められる訳もないし、ここで疲れたら馬鹿だ。ペース配分は考えているが、出し惜しみもしてられないという葛藤もある。

結局、長期戦も頭の隅に漂っていたから、三十本程投げて終了する。叉子の体に刺さっている矢はその内の数本。しかし、急所は完璧に避け、刺さっているモノも浅い。まだ、足止めにもならない。

「ほら、止めちゃいけないよ」

当然、距離をとる矢に勝つには距離を詰めるしかない。鞭のリーチ。波打つ力が一番強い距離。尖端だけを注視しないと、ワイヤーの位置がわからない。絡まれたらきつい。

「くう！」

加速度的に伸びる鞭に反応出来ず、だが左腕を掠るだけで済んだ。これだけで済んだなら僥倖。でも、次も躲せるとは思えない。

「んー……中々な状況判断だね。けどつながったわ！」

「はあはあ……」

予想された場所周辺に、上から矢が降る様に投擲したが、致命傷を与えられなかった。右腕と頬を掠めただけ。トータルでまだこっちに歩がある。ある筈。

「やるね」

なのに叉子は涼しい顔をしている。まだ数分。それだけしか経っていないのに、息が切れる。雨は止まない。空気は冷たい。体は重い。精神が思いの外削れていく。

「……ふうー」

落ち着け。まずは深呼吸。ゆっくり、ゆっくり。吸って、吐く。焦ってはいけない。焦れば負ける。一旦落ち着く。整えなければ。

「はー……」

左右で四本。数は少なくなったが、向こうは鞭だ。近距離戦が苦

手なのは同じなのだ。懐なら鞭のリーチは潰れる筈。

「よっ」

振るわれる鞭。尖端しか視認できないが、ちらちらとそれを繋ぐものが見える。まるで生き物の様にうねり、牙を向いてくる。

尖端は消え、左から、死角から風を切る音。直感的に前へと走る。後ろで鋭い音がして、叉子の腕が魚を釣り上げる様な動作をする。

「く……」

後ろ側に目はない。避けるの運任せ。なら、もっと確率的に高い事がある。右手の矢。それを苦し紛れに、悪あがきで投げつける。躲されるも、しかしバランスを崩した。それが鞭にも伝わり頭上を過ぎていく。

「……！」

今鞭の尖端は頭上を過ぎた。再度振るうには間に合わない。一気に間合いを詰め、残った左手を突き出す。

「のっ、フィックス！」

遅い。これなら言い終わる前に致命傷を与えられる。狙いは腹。命まで奪おうとは思っていない。傷を負わせて、立ち去る様に仕向けられればベスト。

「子の意は左腕。私の背負う五体不満足さと、貴方の五体満足さを繋げよう。ならば……」

「遅い！」

二本の矢が腹に刺さる。血が喉を逆流し、鮮やかなものを吐き出す。貫通はしていない。だが、臓器には傷がついた筈だ。内出血はしてる。致命傷は確実。

「な……な、ならば……」

「!……まだ」

右手にあるのは鞭の尖端。手元に戻す時間は十分あった。危険信号が黄色から赤に変わる。逃げなければ。

「ッウ……!」

下ろされた右手は、左腕に突き刺さる。深々と刺さり、抜けそうにない。逃げられそうにない。向こうの方が致命傷だが、叉子は攻撃の手はまだ終わっていない。

「ならば嘆息を共有し、知る事で、貴方と私は信頼を築き上げる」
「……ご、んの!」

悪あがき。右手で顎を殴るが、これ程非力な事はない。強く殴る事など想像した事もないから、イメージすら作れない。正に無駄。

「フォーサイドトラスト（強引な信頼関係）」

「・・・あ・・・」

別段、怪我したとか、致命傷を負った訳ではない。いや、そっちの方が痛みで頭を叩き起こしてくれた。状況はただ、それよりも心をぶれさせる。

「左腕・・・もらい」

「・・・ない」

叉子の腹を刺す、矢を掴んでいた左腕が、消えた。ゆっくり視線を逸らすと、先程までなかった叉子の左腕がある。それは男性のではなく、女性の様に見える。判断の決め手は、先程左腕を掠った傷。それと先端が突き刺さった跡。その部分が朱く染みを作っている。疑問よりも本能的な恐怖。命令は退。一先ず何もかもそっこのけで、距離を開ける。

「逃がさないよ」

体にかかる力は進行方向とは逆。なくなった左腕にその力が集中している。思いがけない力にバランスを崩し、前のめりに倒れる。それが僥倖なのは知らない。地面との摩擦で強引に引きずられる事もないし、左腕を近くで見れたのは冷静にさせた。

「・・・なにこれ」

一本のワイヤーが左腕からのびている。その先は何度見返しても又子に繋がっている。さながら運命の糸の様に。本当にそうなら口マンチックだが、如何せん状況が状況だ。甘美のカケラもないし、相手も役不足。

しかし、左腕がないのは大きな枷だ。端的に言えば力が半減する。弓も引けないし、矢の量も半分。近づくのは勝手だが、離れるのは限界がある。そして離れれば、鞭のリーチが最大限に活かされる。ならば、近づくしかない。見れば体に繋がっているのは自分だけ。又子自身に繋がっている訳ではない。あくまで柄なのだ。右手をどうにかしてやれば、この限定された拘束も解ける。

「そーら、動揺してるの？」

緋色の腕が鞭を振るう。自分の体の一部が自分自身を傷つけるなんて、皮肉な話にしか思えない。

いや、冗談を考える時間はない。直線的に、点の起動を描き脇腹を掠る。だが、見える。先程のあれ。痛みで動きが鈍い様だ。肉を切らせたはいいが、後々骨を断つつもりか。気前のいい前払いだ。が、状況は猛スピードで叉子に傾いている。

「ファイ ッシュ!!!」

「つう!!」

左腕につられ、成す術もなく宙へ釣られる。繋がっている限り、相手の間合いは手の平の上。それでも足掻かなければ負けてしまう。

叉子が左腕を振るうと同時、こちらも右腕を振るう。空中で狙いがつけられるのか。そんな問題は瑣末だ。だから、いつもの様に、狙いをつけられる様に、平常心を築ける様にしていたら。それが地上でも空中でも変わりはない。

「ヒイロ !!!」

それは本当に思いがけなかった。矢を投擲した瞬間、ファルが足首を掴み、鞭の軌道から外れる。

「伏せ!!!」

犬扱いされた、と愚痴りたいがそれは後だ。後ろで耳をつんざく

音が反射的に従う。振り返って見えるのは、鏝ぜり合う泥だらけのファルと黒刀を平然と受け止める少女。いや、顔は見えない。だが、そう思わせる程、微動だにしない。

若干見とれたが、観戦してる暇はない。ハッとして気づき、振りかぶる叉子を見る。一瞬でわかる間合い。投げても少し遅い。なら、もっと単純なモノがある。

「う……あああああッ!!」「うおっ!!」

のびるワイヤーを力任せに引つ張り、バランスを崩させる。これは自身を打開できるのモノだが、同時に自身を崩壊するモノにもなる。こちらでも使える二面性なら、存分に使った方がいい。

「フッ!!」

大したイメージも構築できないが、重傷の腹部を蹴ればそれなりに痛手は与えられる。前のめりに崩れた叉子に近づき、蹴り上げる。若干浮く体。痺れる脚。これだけの反作用。威力は期待できる。

「ッ……ガ……ハ」

「……叉子」

先程まで涼しい顔をしてたが、苦痛で歪んでいる。それでも倒れない。恐らくでもなく、間違いなく激痛が体を駆けずり回っているのに。痛みで蹲ってもおかしくはない。

「痛々しいわね。まだやるのかしら」

「うわ・・・悪者発言。はあ・・・左腕ないのにまだやるの?」

「どつちが」

「それは悪者発言?それとも・・・続行する事?」

「・・・まだやるのかしら」

「哀れみはいらぬ。僕は、情報しかいらぬから。・・・ほら、ファルが大変だよ」

金属音と呻き声。振り向く要因は十分。ファルが危険であるのは、振り向く前から予想できた。淀みなく、冷静に判断。走ってはぎりぎり断定。矢なら当たらないにしろ間に合う。牽制にでもなればいい。ともかく、ファルが起きるまでの時間が欲しい。

右手に四本。腰を落とし、手首のスナップを利かせて投げる。返す腕でもう一回、同じ数を斗白鳥に投げる。稼ぐ時間は数秒。その数秒があれば、ファルの危機は脱出させられる。ただ、ファルのは

「はい、ざんねーん」

数秒をもって助ければ、数秒をもってピンチになる。他人に気遣

いばかりじゃ自分は蔑ろになる。肩から何かが絡み付いてくる圧迫感がする。サクリ、と地面に何かが刺さる。軽い音なのに視界にあるそれは、作威的なものを伝える。

「よそ見はいけないな。他人の言葉を信じるかは勝手だけど、やすやすとひっかかっちゃいけない」

動く程にワイヤーは体に食い込む。解こうとしても厳しい。肩から足まで巻き付かれ、さながらハムに近い。力付くでやってもいいが、それは大きな賭けになる。ワイヤーを引き千切る事をイメージしても、相手のイメージがそれを勝ってしまったらフィードバックが起こる。そうなったら、もうどうしようもない。

冷静になればなる程、潰れていく思案。頼みの綱、と呼べないぐらいの細さ。蜘蛛の糸が救ってくれる訳もない。実行するにはリスクすぎる。

ファル!!」

又子の後ろでファルの姿が見える。緋色の危機を目にした様だが、それは好手ではない。

「この」

、まだ振り切れていない。横に並走する斗白鳥に阻まれ、焦りが募る。それが募るのは緋色も同様。いつ又子が加勢に入るかわからない。両手が使えないのが、激しく焦らす。

「……っ……叉子は斗白鳥に加勢しなくていいのかしら？」

「……んー」

「長引くんじやないかしら？それにファルは強いわよ」

傍目からみれば斗白鳥は徒手空拳のままだが、金属音が響いている。どうなっているかは緋色にはわからないが、ファルは対応している。血を流しているのは明らかに斗白鳥の方だ。

「確かにね。でも、多分大丈夫だよ」

「随分な信頼ね」

「ハハハ……信頼ね。そんなモノはないよ」

「？……ない？」

「そう、ないよ。斗白鳥が死んだら泣いたり、怒ったり、絶望したり、動揺したりするかもね、多分。でも、斗白鳥だからって訳でもなく、要潤でも、掬羽でも、どんなに親しい人でも、信頼は築けない」

「……信頼……が……」

「消失したよ。当たり前な環境にいたから」

当たり前な環境。言われたら様々な可能性を想像を巡らせてしまう。自分と似ている、一番想像しやすい、その身においた環境を思い浮かべてしまう。

「ま、そこまで話す程信頼されてないから。で、どうする？死のうか？」

突き出される尖端。信頼を築くには行動、とは言ったものだ。信頼……という感情を知らない叉子は、平気で信頼を崩す行動をする。

相手の機嫌をとろうとする行動なんかしない。

「あ
」

腹部を何かが侵していく。同時に体中の熱がそこに集まった様な感覚が支配する。熱さの後には痛みが波を立てて広がる。それらが意思を阻害し、下半身から力が抜けていく。拘束から解放され、逆にそれが更に血流を増大させる。なかつた左腕に感覚が戻り、それだけは素直に喜んでいる。

雨にうたれていっているのに、風呂に入っている様に暖かい。血が雨に混じり、薄れていくのが見える。自分を中心に広がっていく液体が雨なのか、血なのか。何もかもが億劫になる。

なんか今度は寒い

血が頭に回らなくなったのか、何も浮かばない。冷静になりすぎた訳でもない。単に事を浮かべやすくなっただけ。考えを纏められる余力ができただけ。意識が失うまでの短い時間。はたして、何を

思い浮かべられるか。

「・・・ッ」

小さな声だった。雨に紛れ、一瞬の後には余韻すら残らない。苦悶の声にも似た含み。誰に対してでもない声。だから、誰も聞きはしない。

「いつつ・・・どうしようかな、これ」

闘いを終えて一人、緋色につけられた傷を見る。腹部に三つ、血が溢れている穴がある。勿論触れるだけで悶絶する痛みが自身を襲う。できれば触れたくないが、消毒、もしくは水で洗いたい。

「水道は・・・なんか怖い」

雨ではさすがに衛生面で気になる。蛇口の下で横になり、水をかける。

「ッ！・・・ッ・・・」

涼しい顔ではいられない。涼しさを超えて寒いし、そして何より痛い。袖を噛み、気休めで堪えるが、堪えられない痛みは苦悶の声として洩れる。

「ん……？」

そのまま傍観を始めようとした叉子の変化に気づく。別に気にするものでもないが、余韻が残る今、少しの変化でも感覚的に反応する。

「……雨が……」

止んでいる。頭上には仄暗い雨雲。されど雨はなし。今まで降って地上に作った水溜まりも、元からあった池も、波紋の一つすら立っていない。葉に滴り、更にそれが地面に落ちる音しか、雨の気配はない。

「……緋色　？」

ありえなくもない。何も考えられないなら、なんでも考えられないという事。何も描かれていないキャンパスに、何も描けない訳はない。ゼロからのスタートは、何をやっても、どの方向に行っても、いつ始めても構わない。

「　水、氷、雪、全ては委ねる様に杯に身を預けていく」

合奏していた雨が消え、声は遠くに響く。先程まで聞き手は一つしかいなかった。嘘、偽り、虚言は世界を騙し、狭い範囲を塗り替える。聞き手は一つから一つと一人に増えた。

「遙か高さから落下する水が地面を穿つ。注がれる水は一息に解放され、飲み込み攫う」

「まっずー・・・いかな」

止めようにも止められない。詠は長すぎて意味がない。造るなら手早く、数秒で。ならこの詠も長さ的にはもう終わる。何より、もう変化は終盤に差し掛かっているから。

「ノイズレスティア（静謐なる涙）」

視線は緋色から頭上へ。見えたのは屈折している空。目に刺激を与える光が曲がっている。その境目、いつもの空と歪んだ空。曲がりなりに、容器の形が見える。

「いや・・・ヤバい？」

空は一辺倒で、迫るものも、落ちるものも、水だといまいち距離感が掴めない。すぐそこに、一瞬の後に降り懸かる距離で漸くわかる。

「雨というより滝かな・・・これは」

静謐が音を立てて崩壊する。騒音が立てば静謐の意味をなさない。実際崩れたのは、雨を内包させていた容器だ。貯めたあと、解放させてしまえばもう野となれ山となれ。どうしようできない。

「　　だはっ・・・がぼ・・・」

抗う間もなく、声は波に攫われ、一瞬後には何も残らない。遮蔽物も何もなく、四肢は水中に漂うだけ。地上で波に攫われるとは稀有な経験だが、息ができない以上そんな暇はない。

三半器官はパニックを起こし、どちらが上か下かわからない。ただ、限りがあり、近くに木が生えていたのは僥倖だった。短い体験だったが、体感時間は長すぎる。叩きつけられ、衝撃は大きかったが、その間で十歳程老けた気がする。しかし、流されずに済んだのはよかった。

「・・・叉子」

「斗白鳥は・・・大丈夫そつだな」

全身濡れねずみになっているが、平気と口にする。少なくとも叉子よりはグロッキーではない。

「ファルは？」

「・・・不明」

「そっか」

息を整えながら言葉を噛み締める。あの状況で周りを気遣う暇などなく、ましてや自分の身一つを守るだけで精一杯。確認するのはその後だ。

「さて、先ずは温まりたいな」

「・・・同感」

「そつだな、おれも温まりてえな」

焦点が要潤に集まるが、誰ひとりとして声はかけない。沈黙すらおりにくる。

「え・・・無視？」

「別に要潤がいるのはいいけど、何もしてない奴が言う」

「やかましい。しかし、嬢ちゃんも見当たらねえし、どうやらもう一人を逃がす為にやったみてえだな」

「いや、うん。もういいや」

「んじゃ、さっさと集合場所に行こうぜ。寒くて仕方ねえや」

二人は肩を借りながら、千鳥足で歩く。一人は腹部に重傷を、もう一人はあまり傷も負っていないのに何故か血だらけ。

そんな事はお構いなしに進んでいく。それは悪い方向か良い方向か、どちらに進んでいるかを知る術はない。彼女の思惑は何にしろ、この撤退は好ましいと言える。しかし、寝ている間に颯爽と時間は過ぎていく。おいていかれる事はないにしろ、ついていけない事はある。

「・・・どう？」

終結の後に、少女は何をさがすのか。やはり、行き着く先は悪い方向だろうか。

46th「雨」（後書き）

緋色なあ、うん。ヒロインだったっけ。ファルでもいいかな。それはともかく、これを一話で納めるのはテンポが早いのかわかりません。他でテンポが遅いの、なんか遣る瀬無いです。とりあえず、まだ続きます。一季が出てないですから。

ああ、どうしてくれようかな、この主人公は。どうにもこうにも、かつこよく表現できない。いいかな、もう駄主人公で。うん、下手に詰め込まない方がいいかも。そんな主人公いませんが。少ーしくらい、ね。うん、頑張れ（自分が）。

47th「不届」とどかず」(前書き)

些細な違いとは感覚を狂わせる要因である。間違い探しや目の錯覚。それは気づかなければ侵食であり、崩壊の火種にもなる。

47th「不届(とどかず)」

side | Azuma

胸騒ぎがして目が覚めた。体を取り巻く倦怠感よりも、虫の知らせとも呼べる 悪い予感だ。

直感、神のお告げ、よくない前兆。カラスが睨む、クロネコが横切る、靴紐が切れる、茶碗が二つに割れる。そんな不幸の前触れを今なら信じてしまう程に、胸に虫が食いついている。

いい予感は当たらない、あまり期待しないから。

悪い予感は当たる、心のどこかで期待しているから。

部屋にあるお粥はすっかり常温。それ程に時間が経過しているのか、視界がぼやけて時計がよく見えない。

熱で朦朧とする意識を働かせ、ぎこちない体を動かす。秒針が一

回りして漸く立ち上がり、廊下を歩いていく。ぎしぎしと音を立てる。右往左往しているその姿と足音が危なっかしく思えたのか、ねこさんが出てきた。

「あー・・・ねこさん・・・？」

「どうしちゃったの、東君？大丈夫かい？」

「はー・・・多分・・・？」

理解できないまま進み、気づいたらまた布団に寝かされている。ねこさんは重症かな、と眩き心配そうな顔をしている。

「・・・ねこさん」

「はいよ」

「今・・・何時ですか・・・？」

「四時くらいだね」

「・・・緋色は」

「・・・実はね、食い逃げされたから緋色ちゃんムキになって追いかけてちゃったんだよ、ファルちゃんもね」

「食い逃げ・・・？」

勇氣ある行動をした人もいるものだ、と感心し、心の中で祈る。最高でも半殺しで留まっている事を。

「どんな人なんですか？」

興味本位で聞いてみる。本当に単なる好奇心だった。

「なんか凄い大食漢な人と、言っちゃ悪いけど左腕がなかったね」
「・・・え」

「あと、フードで顔を半分ぐらい隠してる人がいたかな」

呆然としてしまい、その脳裏に思い浮かべる人は昨夜の四人。いつもなら飛び起きてしまいそうだが、心中とは別に体は熱に侵されている。話しては三人だが、掬羽はどこへ行ったのか。その前に、緋色達は大丈夫なのか。

「それじゃ、大人しくしていること、いいね」

そんな事はどうでもいい。生返事をして、ねこさんが引っ込んでから体に力を入れる。先程の忠告は忘却というゴミ箱に。養生しているなんてとんでもない。目的はある。でもハッとして思う。

何の為に、どうして向かうのか、緋色達がどうなってもならないというのに。

「ちっ……黙ってる!」

叱咤するも意識の水面下では足が動いていない。意識が届かないなら、体が動く訳もない。呆然、無意識、思考零。頭痛が不協和音を響かせながら立ち尽くす。

「……わからない……。何がしたいんだよ……。俺は……」

涙を流せるのに、涙の流し方を忘れた。何をすべきか、何をしたいのか。虫が胸を食い破ったみたいだ。何か透き間風が通るのを感じる。

「ん?」

薄い、何かを叩く音に聴こえる。例えばガラス。コンコンという高い音が鳴る。窓の外に映るシルエットは小さい。その影の形には見覚えがある。

「ファル!？」

窓を開けると捨て犬の様に、全身から水が滴っている。ここに来た際に、着替えた意味がない。そんな事を問い詰めてやる余裕はない。

「そつだ、緋色は!？あいつらは!？」

はたしてそれは雨の所為なのか、涙を流しているのか。掠れた声で伝える内容と、噎せる様な声は後者なのだろう。そうして伝える言葉は一言。

「わ、わか・・・わからない」

「・・・一季・・・は？」

「掬羽」

緋色の行方も、あいつらの行方も。動揺しているファルの意識もわからない。頼る相手は自分しかない。その事を痛感するも、どうしようか苦悩してしまふ。

しかし、動かなくなった足は、第三者の介入により意識が戻った。ただ、それだけ。足は動かすが、水面に浮かぼうとはしていない。心ここにあらずの双眸は、ねこさんがいるであろう方向にいく。

「・・・すみません」

本日四回目の謝罪。己の愚行か、それとも言い付けを守らない事

に対してか。多分どちらも。ねこさんには迷惑ばかりだ、とまた心の中で謝罪した。

何の準備もなしに飛び出したのは早計だったか。しかし、些細な事は気にしてもらえない。緋色の物が手元にないから、ファルのサーチはできない。一季も同様にない。

「・・・っ・・・ハア・・・」

「大丈夫？」

「多分・・・？」

それに、熱があるのも忘れていた。ただ冷やすだけでは駄目らしい。冷やすのに寒気がするのをおかしな感覚。最早方向感覚さえも迷走している。

「アズ、こっち」

「おう・・・」

視界が更にぼやけてきた。サーモグラフィーみたいな画面だ。体の輪郭は見えるのに、細かな所が見えない。

「・・・アズ」

音もクリアに聞こえない。妙に抑揚がついて、アアズウという風に聞こえる。大雑把な位置しか、飲み込める情報はない。

「ハア・・・っ・・・ハア・・・」

それ程の距離でもないのに足元は覚束ない。更にはアズマから湯気が出ている様にも見える。発熱している事に相違ないが、そこまで体温が上昇しているなら、危険の域を超えている。

「アズ、帰る。僕、探す」

「あー・・・？・・・大丈夫・・・？」

まともに会話すらできていない。噛み合わないそれは、ファルの心配を増加させる。その心配の言葉もアズマには届かない。

「・・・ここだったか・・・」

足を踏み入れて去来するのは江湮との思い出。断片的に、しかし鮮明に、部分部分の情景は脳裏にやきついていて。どうしてもあの日の、あの出来事の、あの時の感情だけは、どうにも色褪せているが。

穿たれている地面に、歪に斜めに倒れている木々。「池に入っ
はいけません」と意があつた柵は所々がない。

「・・・何が・・・あつたんだ・・・」

あまりの惨状、あまりの光景、あまりの衝撃に、言葉を漏らす。その独り言じみた問いに答え様とするも、的外れな答えしかない。一歩進む毎に、右へ左へ傾く体を、ファルは小さな体で支える。それはもう健気としか言えない。

身を按じたファルは、強引にアズマを木の下に座らせる。彼に抵抗する力はなく、なされるのみ。息は荒く、座っていても変わらない。でも、動き回るよりはマシだろう。

「アズ、待って。僕、探す」

頼れる人も、今は頼れない。頼ってしまえば、更に危険を超えてしまう。域を脱しすぎてしまえばもう戻れない。彼はいつもそのぎりぎりをさ迷ってしまう。熱という加速装置を積んでいるなら、ここで限界なのだ。

彼をおいて、ファルは緋色を捜しに行く。少女の視界から消えるまで、見つめ続ける。これが今できる最高の思いやり。病人を連れ出した時点でそんな事をするのは痴おこがましいが、彼は望んでここにいる。例え意識があつたとしても、反論や責めたりしない。

少女の視界から彼は消え、彼の歪んだ視界からも少女のシルエツトは消えた。肺から熱を吐き出し、気に遠慮なくのりかかる。

静寂で閑静で静謐。雨音は確かにそうだが、状況だけはそうは言い難い。ただ、それさえ省けば本当に静かである。

「おや、誰かと思えば東広か。搜索しに来てみれば、予想通りだな」

気配もなく、目の前に現れる大柄なシルエツト。焦点の合わない両目で数秒見つめて、漸く誰かわかった。

「……はば……は……？」

語尾のアクセントが微妙に上がり、つられて掬羽も疑問を浮かべる。

「……大丈夫か、東広？」

「ああ……うん……」

「話しは理解できてるな」

「まあ……な……？」

「……東広もここで彼女を捜しているのか？」

「あー……うん……そう……？」

「……前言撤回。理解できてないな」

敵意どころか視線すら向いていない。思わず身を按じてしまう。しまうからこそ、アズマの額に手を当ててみた。

「……どうやら東広は体調が優れないようだな。そんな体で彼女を捜すとは、健気な……かくいうこちらも彼女を捜しているの

だ。だが、これは今東広に話しても通じないか」

肩を竦め、嘆息する。掬羽の言う通り、アズマは勿論わかっていない。目の前に掬羽がいる、それだけ。あれ程焦っていた、問い質したかった事が、温度を上げる熱で融解してしまっただけらしい。

「一応言うが、一季　あの彼は何者だ？ ナイフだけであれだけ立ち回れるなんて、自分が何かをよく知っている様だな」

「・・・んーあ・・・そう・・・？」

「まったく、君は。仕方ない、病人を見過ごす程、人間くさってもないし、知り合ったのも縁だ」

脱力しきつた体を起こし、そのまま背中にもせる。想像より重かったが、今更捨て置く訳にもいかない。後悔せず、病人を担ぎ去っていく。

「・・・・・・又子か。斗白鳥と要潤も一緒か。今寝床にいるのか？・・・ああ、わかった。それと風邪薬を買ってきてくれないか？・・・理由はあとで話す。では頼んだ」

そう言うのと携帯を仕舞い、背中の人を担ぎ直す。特に利益は考えていない。仕方ないとも言えるし、突き詰めれば放っておけなかった。ただ、それだけ。他にめばしい理由はない。

それは好意としては有り難いのだが、その先の事、ファルの存在を知らなかった訳だが、好意が空回りする程、罪悪感はない。

「・・・どう・・・」

side | Habaha | group

「何故、^{なにゆえ}彼がいる？」
「突っ込むな、叉子」

空き家と看板が立てられたこの家は、外見こそしつかりしているが、中は家具一つない。勿論、ガスも電気も水道も通っていない典型的な空き家である。しかし、そんな事を一々気にする筈もない。ここより酷い所はあったし、寧ろ屋根があり雨を凌げるなら大歓迎である。

そこに集まる四人、ではなく五人。サイズの大きいパーカーを着た掬羽、左腕のない叉子、五人の中では一番背の高い要潤、フード

で顔を隠している斗白鳥。そして熱でダウンしているアズマがこの家にいる。

掬羽が背負ってきたアズマを目にした時、事情の知らない三人は絶句した。理解して、状況を飲み込み、漸く出した第一声が理由の追求である。

「電話で言ってた風邪薬って彼の分？まったく掬羽は・・・」

「そう愚痴るな。心配しなくても、いきなり寝首をかく様な男じゃないさ」

「随分な信頼だね」

「だから愚痴るな」

フロアリングではなく、和室に寝転がす。毛布や布団などの代物、暖房機具などないから、暖はとれないにしろ、外に放置されるよりはマシだろう。

「・・・嬉しそうだな、要潤」

「だーってよう、暇だったんだぜ、おれはよう」

「東広は玩具じゃないだろう」

「玩具ならつまんねえさ。坊主は暇を潰せるから、遠慮なんかしねえよ」

「彼は一応病人だ。重症の奴と闘っても楽しいなら、勝手にしろ」

「・・・やっぱやめる」

といて諦めた様な顔には見えない。でも暇なのは確かで、アズマが起きるまで何もしないのは些か微妙だ。何かするならする、そしてするなら楽しい方がいい。

「んじゃ、全員集まったし、やろうとするかい」

「そうだな、では」
「準備は万端」
「・・・いい」

異様な空気に変わる空間。異様といえば異様だが、どこか違う異様さ。深夜の暗闇と光の入らない部屋の暗闇の様な、同じ暗闇だが与える印象が、雰囲気が違う。感覚で言えばそんな些細な違いに似ている。それもその筈。

「「最初はグツ、ジャンケンポン」」

単なるジャンケン、されどジャンケン。なのだから、勝負するか
らには負けられない。

「ふっふっふ、勝利だ」
「よおっしや、勝ちい！ー！ー」
「げ」
「・・・負け」

賭けるものが何だとしても、負けたら屈辱感が搔きむしる。勝てば全て、一瞬で勝者と敗者が別れる。

「・・・準備はいいかな、斗白鳥」
「・・・きわめて」
「では　最初はグツ、ジャンケンポン！！」

出された手には不思議と力が入る。血管が浮き出る程に力が込められた手の形は、叉子がパー、斗白鳥がグーである。ジャンケンのルールであれば、勝者は叉子で、敗者は斗白鳥となる。

「ふー……」
「……残念」

一言しか口にしていないのに、その言葉にはちゃんと感情が込められている。端から見れば本当に悔しがっている。声色だけでしか、逆を言えば声色だけでもそう判断できる。

「では頼む。椅子四つ、それにテーブルを一つ。形は斗白鳥に任せ
た」

「……dream out」

呟かれる言葉。途端、何も無い部屋に像が結ばれ、無骨な椅子とテーブルのセットが顕れる。典型的ともいえる形だが、平凡ともいえる。

「相変わらず、色気のねえモノだな」

「……不満」

「そんなもんはねえよ。喜んで座らせてもらっつた」

「叉子、ケースはどこにやった」

「ここにあるよ」

隅に放置されていた少々大きめのアタッシユケース。中から取り出されたのは、古めかしいランプ。昔の探鉱者が使う様な、360°を照らせる様なタイプのものだ。他に取り出されたのは、また何かのケースである。

「では、楽しむとしよう」

薄暗い空間。何をするか、と聞かれたら怪しい物事しか連想できない。弁明はできないし、空き家に侵入している時点で言い訳の余

地はない。

side| ????

男性は遠くから公園の様子を眺めていた。無精髭を生やし、いかにもホームレスの様な容貌である。事実そうであるから、いつまでも公園を見ていた。雨が突然止んだ時、思わず呼吸も止まった。

空は何故か、その形を歪め、宙に水を溜めていた。それに視線を奪われている間に、不意にそれは落ちていった。距離をとっていたから波は来なかったが、水飛沫は確かに顔を濡らした。

そのまま呆然としてみると、何かが流れていくのが見えた。それは人の様にも見えるし、それは少女であった。少女はピクリともせず、ただ流れに弄ばれている。

男性は見逃すという行為が考えられず、恐れもせず近寄り、抱え上げる。服が雨を吸って重かったが、重いのは雨の所為だけではなかった。腹部から流れている血。それが男性を冷静にさせ、性急さを刺激させた。

とりあえずは落ち着ける場所に行かなくては。少女を抱えたまま、
できる限りの全速力で寢床へと急ぐ。両手の中で眠る体は、冷たく
感じた。

s i d e | A z u m a

地面とは違う感触。草の様な、そんな質感の柔らかさがある。そ
して暗い。目を開けているのか、目を閉じているのかわからない。

「……………どこだ……………ここは……………」

指先から動かしていき、徐々に手、腕、二の腕、肩、体と動く事
を確認していく。

身動きはできる。

それだけは判る。次に記憶を辿る。断片的にある、ロクに覚えて
いない記憶。そういえば熱でしてた、と思ったら唐突にクラリとす
る。

「……気持ちわる」

逆流してくる錯覚。錯覚はイメージを作り、更には現実として顕れようとする。吐きそう、と思えば、体がそうなるうとなってしまう。

口元を押さえ、微かな光が隙間から見える。ここで目が開いてるとわかり、とにかく光を求めてのろのろと歩く。

「……」

「……おう、こんばんは」

ああ、確かにある、うん。ファルに付いて行って、その後には佇んでたら掬羽が来たんだな。そうだったな。

「……掬羽」

「何か用か」

「トイレ……借りてもいいかな」

「どうぞ、といっても私たちも知らないから探してくれ」

無言でリビングから出て、黙々とトイレを探す。逆流してきた胃液はもう決壊寸前。吐きそう、いや、は……

「大丈夫か、東広？」

「何とか」

「今度は理解できてるな」

大分眠っていたから気分はいい。声も聞こえる。視界も歪んでいない。その他の五感も戻ってきた。まだ意識が遠いが。

「・・・ロン」

「うわっ、またか。まったく、このままじゃ焼き鳥になる」

どうすればいいのだろうか、これは。目の前で繰り広げられているのは、言うまでもなく麻雀。

「安上がりでもしないときついかな」

「うーむ、あそこで裏目ったのがいけなかったか」

「掬羽は大穴狙いすぎなんだよ。国士無双とかドラ六とか、わかりやすいぜ」

「・・・洗牌」

紛う方なき麻雀なのだが、ルールはわからない。だから、何を言っているのかさっぱり理解できない。

「坊主もやってみるか」

「・・・麻雀を？」

「だよ。掬羽じゃつまんねえから、坊主がやれば少しはマシかもな」
「でもルール知らないし・・・」

「知らない事はそのまんまにしちやいけねえさ。何事も初めてなら、いつ始めたって変わりねえよ」

その通りなのだが、これはこれで弄ばれるのがオチな気がする。
ていうかこれは他に選択肢がない。掬羽もどうして席を譲る。

「斗白鳥、もう一つ椅子を造ってくれ」

そう言うつと椅子が姿を顕し、掬羽がそれによつ掛かる。至れり尽くせりだな。

「ま、先ずは見て真似してくれ。最初はそれからだ」

今俺は病人なんだけど、とか言っても逃れられないだろうな。とりあえず言われた通りに真似して牌を重ねていく。最初に17個、そしてそれらの上にまた同じ数の物を。要潤がサイコロを二つ振り、出た目の合計は九。

要潤は自分から九列牌を中心に置き、後ろの二列を又子の方に持っていく。斗白鳥は右端の一つをテーブルに下ろし、上に何も無い牌から一つ飛ばした一つをひっくり返す。

どうやらこれが鍵で、これの次の数がドラというらしい。そうして二列、四個ずつを要潤、斗白鳥、俺、又子の順に取っていく。計12個取り、最後に要潤は二つ、ちゃんちゃん、と言って取り、他は一つずつ取り並べる。漸く準備が完了したらしい。

「上がり方は同じ牌、もしくは連続する牌を三三三三三三二で揃えれば

いいさ。二は同じ牌揃えなきや駄目だが、他にも揃え方次第でも上
がれる。全部二ずつ揃えてもいい。他はまあ、やりながら覚えな」

なんとも適当だな。ま、それでも構わない。あとはやりながら覚
えるさ。

「でだ坊主、お前はあの嬢ちゃん二人とどうゆう関係だ」

「どうゆうって・・・」

「どっちかと付き合ってたのか、って聞いてんだ」

「付き合ってたない。緋色は幼なじみだし、ファルは家族だ」

「はっ、なかなか初心だな、坊主。キスはしたのか？セックスはし
たのか？」

遠慮なしだな、こいつ。さっきから突っ込んだ質問ばかり。気が
置けない訳ではないから、話しやすいといえは話しやすい。

「・・・ポン」

「ん、ポン？」

「ああ、ポンは同じ牌を自分が二つ持つてて、その牌を誰かが出し
たらポンって宣言すれば自分のとくに置ける。他はチーってのがあ
って、連続するやつを取れる。これは左隣りのやつからしか取れね
えがな。ただ、調子のもつてやると役なしとかなるからな、気いつけ
な」

成る程。ポンとかチーは手持ちの牌を確認した上でやるのか。さ
て、どうしたものか。今の手持ちはとりあえず二つ組の牌が多いな。

「・・・坊主は二人が心配じゃねえのか？」

「・・・心配さ。でも心配なだけで、その後が繋がらなくて
どうにもやる気になれない」

「例えば……二人が死んでたら？」
「怒るだろうね。でも……」
「……涙」

掌に力が入る。思いも寄らぬ握力で牌を押し潰してしまっ程、それは悲鳴を上げている。

「てえことは、悲哀、がねえのか」
「ああ。で、前にこんな事を聞いたが知って何がしたい、掬羽」
「別には何も。単なる好奇心だ」

その言葉を簡単には信じれない。例え本当に裏がないとしても、しかし、こんな情報は意味がない。表裏ではなく、表のみしかないこの物事。必ず反対になるものはあれど、これにはない。いや、見えないだけかも知れない。

「何がしたいのかな、君は？」
「無事なら捜すさ」
「無事じゃないなら？」
「……何を言ってる」
「言葉通りの意味だよ。緋色ちゃんは重傷を負った。そしてファルを逃がす為に、彼女自身の詠で自分さえも巻き込んだ」
「……傷」
「そっだよ……結構深いから死んじゃったかもね」
「……立直」

手の中にある牌が耐え切れず、とうとう割れた。同時にアズマの理性にも罅が入る。テーブルを素足で跨ぎ、又子の胸倉を掴む。が、掴んだ瞬間、背中から力が加わり、そのままテーブルの上で組み伏せられる。

「落ち着けや、坊主。まだ決まってねえだろうがよ」

「黙れ!!!!」

「又子もさ、刺激すんなや」

「知らないよ。どうやら僕は彼とはどうあっても仲良くなれそうにないから」

乱れた服を直し、ケースから缶コーヒーを取り出す。何もなかった様に、悠長に喉を潤し始める。テーブルの上ではまだアズマが、憤怒の形相を浮かべている。

「坊主、囚われてんなよ」

「・・・こそ!」

「ふ・・・それでもまだストレスが発散できねえなら、おれが相手になってやる」

「なんだそれ」

「表に出な」

背中からの圧力が消えると、要潤は玄関へと向かう。このまままた、又子へと飛び掛かってもいいが、今度は掬羽と斗白鳥、どちらが阻止するかわからない。仕方なしに従い、他の三人も外に出る。

外は雨は止んでいるが、雨の余韻が大気を冷たくしている。肌寒く、思わず身震いしてしまいそんな寒さだ。

「さて、やるとするか」

「・・・なんで要潤なんだ」

「ああ、理由が欲しいのか?いらねえだろ、そんなもん。胸の内で燻ってるもんを掃き出しちまった方がいいだろうが」

「それなら又子のままでもいいだろ」

「駄目だ。それに暇なんだよ。坊主はすっかりしておれは暇潰しができる。一石二鳥じゃねえか」

どうやらもう逃れられないらしい。逃れられないといえ、ここに来た時点でそうか。不幸か不運か悪運か。幸運はちっとも巡りやしない。

「心配すんな、手加減なんかしねえからよう!!!!」
「・・・dream out」

風邪をひいている事など・・・すっかり忘れてしまった。

47th「不届」とどかず」(後書き)

むう、麻雀やりたいなあ。因みに私の好きな上がり方はいつきつうかん(漢字がわかりません)です。他は三色同順が好きです。

露骨すぎたかな、とか思ったり、一季がまた出なかつたな。名もなきホームレスのおっちゃん、また出たらいいね。

あ、あと編集しますので、誤字脱字のチェックとか、ちょっと書き直しますので悪しからず(多分)。

48th「理由」(前書き)

泣き方はいくらかでもある。人は悲しみに泣き、喜びに泣き、悔しさに泣き、愛おしさに泣く。例え、涙が枯れていたとしても、自然に、それこそ無意識の内に、涙を流す。疑問に思えるだろうが。

手入れのされていない庭。草は勝手気ままに生えていて、歩く度に雑音を立てる。動く時には阻害され、動きづらい事この上ない。その中を二人は走り回る。雨により、草には露が付着して足元を確実に濡らしている。そんな事に頓着していれば、その隙を突かれ、重傷を負い、最悪死ぬだろう。

「坊主も槍だったか」

「特に拘りなんてないけどな」

要潤の使うモノは自分と同じく槍。ただし、長さは違う。要潤の身長をそのまま槍にした様な、下手すれば身の丈以上の長さがある槍。自分のと比較すれば、1.5倍くらいはありそうだ。そう考えると、要潤のリーチはかなり広い。

「嬢ちゃんとあのガキは何を使うんだ？」

「教えないさ、そんなこと」

「そうかい。あのガキはまだわからんが、嬢ちゃんは死んじまったかも知れねえから、やり合えるかは微妙だな」

「・・・・・・・・」

槍を持つ手に力が入る。さて、何で怒ってるのだろうか。叉子に言われた時もそうだった。ならないというのに、何をあ

なに激昂して……どうしてだろう。

速く、大きな風切り音。遠心力としなりで、とてつもない威力になっただけいなそれは、音以上に脅威を感じる。懐に入れば何とかなりそうだが、容易には踏み込めそうにない。

「へっ、ビビったか!？」

「まさか、模索してるんだよ」

そうは言ったものの、打開策はない。考えている暇もない。要潤は非常に好戦的。頭より体で動き、その場その場で最善の策を手繰る。

こちらもそうでなければ、とてもじゃないが追いつけない。頭より先に、反射的に、無心に、勝てる要因を積み重ねなくては。

「周りは大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ。坊主は寝ててわからなかったと思うが、ここは郊外にある捨てられた別荘さ。だから、気にする事なんざねえぜえ!!」

剣道の様に振りかぶり、頭上から落ちてくる槍。草を切り裂き地面を削る。

「よっ
」

持ち手はいつの間にか石突きの方ではなく、柄の中間部分になっている。一瞬手を放し、持つ部分を変えたいらしい。そのまま素早く槍を横に振るう。

ガチリと金属と金属がぶつかり合い、火花が散る。遠くから見れ

ば幻想的と持て離されそうだが、そんな感慨は毛ほども浮かばない。

そのまま中腰辺りで制止している要潤の槍の下を滑らせながら潜り、バットを振る要領で足を掃う。

だが、当たらない。正確には当たっているが、横に振るわれる槍の柄に足をのせ、力を外に逃している。槍の速度と同じ速さで動いているなら衝撃は皆無。ダメージはゼロだ。

力を逃した分、距離は開くがそんな大した距離でもない。絶え間無く打ち合っていたから、この時間は長く感じる。疲労がこの時間に溢れ出すのを感じる。そんな休憩も、息を整えるだけで終わる。

「ダアラー!!」

一気に走り寄り、突き出される。腕の長さや槍の長さで、伸縮の瞬間が短い。一瞬で肉迫し、その短時間に反射を頼り、避ける。しかし、完璧に避けられはしない。

「・・・グ・・・ウ」

脇腹の肉が微かに抉られる。ここで反撃と、槍を伸ばしたところで痛みで鈍った攻撃が当たる筈もない。

だから

「あああ あっ!!!!」

一步踏み込み、懐に入る方が当たる。石突きで顎を狙い、半回転させ、身で金的を下から叩く。

「ちい！」

一步分後ろに体を退き、躲される。それは防御には適したものが、これから攻撃に転じるなら遅い。今攻めないと勝機は次にいつ来るかわからない。

体ごと当たりにいき、槍を突き出す。矛の横を掃われ、向きが変わるが、無茶苦茶に体重移動をさせ、左足で脇腹を蹴り飛ばす。

無茶な軌道だけは頭の中でイメージはできている。あとはイメージ通りに体を動かすのではなく、体がイメージ通りに動くだけ。動きは最初からできているから、多少無茶苦茶でも体は動いてくれる。他にかかる負担を考慮はしてくれないが。

「け、やるじゃねえか」

「そんなもん知るか！」

今はただ攻めるしかない。何から何まで無茶なイメージを浮かべてはいない。振るだけなら、強く振るう事のみをイメージする。

「フツ！」

足で蹴り飛ばし、横に避けたところに力一杯追撃。下半身には結構な負荷がかかっている気がする。が、甲高い音がそんな意識を追い出す。腕の痺れと若干の舌打ち。舌打ちは要潤のものだ。

「なんだあ・・・そりゃあ」

パキリ、そんな音がした。無意識の頭に意識が戻る。視線は槍と槍がぶつかり合っているところ。自分の槍に異常。元から異常なモノを普通とは呼べないが。はない。あるのは要潤の槍だ。言うなれば鬨ぎ合っている。無と有の間を、頭の中のイメージと今ある存在の差異を。槍は歪に破片を飛び散らせている。

「どうして・・・こんなイメージがつえーんだよ・・・」

飛び散らせているのは要潤のイメージでも同じだ。今はリアルに飛び散らせたモノに合わせ、イメージも壊している。そうして手間をかけ、徐々にイメージが現実を飛び越え、再構築していく。

「こんのやろっ　　！」

留守になっていた足に衝撃が来る。外側から内側に、おかしな方向に力がかかる。脳内で骨の鳴る音がして、思わず距離を空ける。

「ああー・・・パンクしそうだ」

頭を抱え、何かを振り払う様に左右に首を回す。時間をおいてくれるなら、アズマにとってもありがたい。先程の会話が気になり、集中力が途切れたからだ。

イメージが強い、という言葉は結構かけられる。緋色やファルにイメージだけはしっかりしている、との事らしい。あれだけ思いつきりぶつけても、罫が入ったのは要潤のだけ。自分の槍は歪み一つない。

あ、ヤバい。疲れた

歪みがあるのは自分自身。そうだった、強いのはイメージだけだった。キープは全然できないんだった。

止まっているより、休んでいるより、動いて忘れていく方がいいらしい。今こうして立っているだけでも、呼吸が乱れる、視界にノイズが走る、頭が漂白される。

決して行使による疲労だけが原因ではない。忘れていく事がもう一つ。自分は病人だという事。今の休憩時間で体は思い出したが、頭はまだ忘れたままでいる。つまり体は不調を訴えているが、頭はそれを受け入れ様としていない。しかし確実に、その余波は五感に響いている。

「……んー……むう……?」

くらくらする意識。それを熱に侵されている、ではなく疲労が原因だと置き換えている。動いていた方が疲労を忘れる。なら、動いていた方がいい。

「ふー・・・っ！」

息を吐き出し、足に力を入れる。地面を蹴り、前屈みのまま要潤のリーチに飛び込む。

やはり動いている方が、視界がクリアになる。

「まだまだ！！！」

当然、彼は迎え撃つ。既に動揺を治し、自分の身長程もある槍を器用に、ぶれもなく真っ直ぐ突く。

狙われるは顔面、視界一杯に広がる矛先。重心を僅かに右に傾け、だが左頬に紅い線が入る。血飛沫の派手さは、思わず嫌悪しそうなくらい。しかし、派手さ程に痛みは感じない。

傷には動じず、こちらも槍を突き出し、右足でブレーキをかけ、止まらない速さを体ごと回転させ叩きつける。

流星に防ごうとはしない。先程の一件がある。本当にぎりぎりになるまで、防ごうとはしないだろう。

「ハッ、いいぜ。もっと・・・もっとおれを囚われさせてみる！！」

その宣言に外野の二人が溜息を吐く。また悪い癖が出た、と。楽しめるものは何だって好き。ギャンブル、女遊び、麻雀、喧嘩、嵌

まっつてしまえば、抑えはきかない。

更に上を求める事はないが、何事にも遠慮なんかしない。やるなら徹底的に、ゼロになるまで、壊れるまで、命の取り合いなら勿論殺すまで。底のない快樂に、身はどんどん落ちていく。

「彼、死ぬかな？」

「死んだら所詮そこまでの話した。要潤を屈服させられるなら、それもまたそれだ」

「・・・手間が省ける、つて？」

「囚われた奴を解放する大変さは、わかるだろ？」
「確かに」

また耳を貫く音が響く。要潤の槍を防ぐ度に、連続的に火花を散らし、鈍い音が立て続けに、両者に鳴る。

「ガ」

「グッ・・・いいぜ、もっと来い!!!」

手持ちの槍だけでは手数が足りない。勿論、槍が必殺なのに変わりはないが、二人ともそれは熟知している。矛に対しては常に意識している。つまり、必殺のみを防ぐ壁がある。

ただ槍をちらつかせていれば、当然、他は疎かになる。条件的な鉄壁は砂の様に脆くなる。言っつてしまえば、こんなにやくで斬鉄剣を防いでいる感じだ。

「・・・ふー、はあー」

防ぐ手を下げる方法はいくらでもある。一つは今やっている様に打撃を積み重ねたり、一つは緩急をつけ疲労を煽ったり、一つは相手の心をついたりすればいい。

しかし、二人には最初の一つしか選択できない。アズマには疲労を煽る技術もないし、要潤を揺さ振る過去を知らない。要潤もアズマの過去を知っている訳もなく、軽く囚われているから愚直に、真っ直ぐにしか攻められない。従って、二人は壁を周りから崩す方法しかない。

「ククククク・・・」

「・・・なんか囚われてそうだな。いや、囚われてるのかな」

いつもは自分になっていく所為か、囚われた人とはかなり不気味に見える。憤怒には憤怒の、恐怖には恐怖の、快樂には快樂の顔がある。怒り、怯え、笑う、そんな表情。要潤の場合は笑っているが、その笑い方がどうにも歪だ。

果たして自分もこんな風なのか。

緋色や一季も、完全に囚われる前に小突いたり、衝撃を与える。それは、囚われを解放するのが大変だからなのか、自滅するのを見ていられないから、だからするのかはわからない。

そういえば、緋色と一季はどうしただろうか。ファルも、今必死で俺の事を捜しているのか。どうせ死んでも・・・

「またかよ」

やはり思い出せない。これがどうにも腹立たしい。喉から言葉が出そうなのに、言葉にしたくない自分がある。・・・いや、当たり前か。そんな事を言う資格なんて自分　アズマトウコウ　にあ

りはしない。

ありはしないというのに、他の感情が自分を焦らせる。行き着く先は、どうせ　　ない。思えばそれが何なのだろうか。緋色達が死んでいても確かに　　ない。でも・・・そうだ。結局は単純。理由なんて飾りでしかない。だから

「・・・いいのか」

眩きは誰への言葉か。どうゆう訳で脱力したのか。その体に、考える間もなく槍が、場所にして左の肺から生え出てくる。

「　　ちっ、駄目か。叉子、斗白鳥、止めるぞ」

「わかったよ、って斗白鳥をどうかした？」

「・・・大丈夫」

「えー・・・え？」

驚愕か疑問か、判断する間にアズマの体は動く。激痛に歪む顔と快樂に歪む顔。優勢なのは要潤の方だというのに、追い詰めているのはアズマに見える。だとしたら、この状況はどうやって理解すればいい。

「・・・ぎ・・・い」

槍が貫通したまま、左手で押さえ、右手に力を入れる。体内に異物がある状態で、筋肉の収縮を行えば傷口を広げる行為、更に痛みを引き起こす事になる。

覚悟していれば堪えられる、なんて事はできない。激痛は激痛。おかしいな性癖がない限り、それを置き換える事はできない。肉を抉る痛み、異物が入り込む不快、視界が発光する眩暈。そんな状態で狙いはつけられない。

「……お………があ………」

でも、多少の無茶は許してくれるモノがある。どんなに痛くても、どんなに力が入らなくても、イメージしてしまえばその通り動く。

イメージしたのは、カ一杯、手加減なしに、要潤の顔面をぶん殴る事。恐らく外れない。この拳が、要潤の顔に当たるまでをイメージしても構わないだろう。

「うお お おおおお つ!!!」

耳に障る音がして、アズマの拳が要潤の顔を撫でる。撫でるという表現にしては、あまりにも音が痛い。

「………」

無言のまま、数メートルの距離を吹き飛ばす要潤。最低でも頬骨は砕けたろうし、殴りつけたアズマの指も曲がっている。それ以上に突き刺さった槍が、見た目にも痛い。

「……ツ……ハア……ふっ……ツツツッ！……ツッ！！！」

決心して、一息にそれを抜く。鈍い痛みが続くより、鋭い痛みが一瞬の方がいい。血に染まるそれに続き、紅い液体も落ちる。急ぎ、手で塞ぐが、そんなもので止まる筈もなく、今度は体内で残留して気分が悪い。

「……死にたく……ない」

それは初めて漏らした本音だったと思う。死ぬ訳にはいかないと思っただ事はあるが、死にたくないと願った事はなかった。しかし、無情にも視界は遠退いていく。

「大丈夫、ではなさそうだな、見た目通り」

「こっちは脳震盪起こして気絶してるだけだよ」

霞がかかる意識に、僅かに声がひっかかる。要潤は気絶したらしい。その証拠に、槍も想像の産物に戻っている。無駄な手間をかけたみたいだ。

「ほら、治療するから。・・・寝るなよ、寝たら戻ってこれない」

「・・・む・・・無茶・・・言うな・・・」

「よし、その調子だ」

その場に転がし、斗白鳥に何か指示を出している。数分後、戻ってきた少女の手にあるのは救急箱だ。

「応急処置ぐらいしかできないが、しないよりはマシだろう」

「・・・いい・・・大丈夫だ」

「何がだ東広。今の状況をよく考えた方がいい」

「そう・・・か。なら・・・傷口を見てくれないか」

「・・・・・・東広・・・君って・・・」

じくじく音が聞こえる。傷口が閉じる音が脳内で反響し、不快な音楽を奏でている。しかし、これで傷の方は大丈夫だろうが、中に溜まっている血をどうにかしたい。

「・・・済まなかった・・・じゃ、帰るわ」

詮索されても困るし、これ以上関わっても、こちらに利益はない。そちらの欲しい情報を俺は持っていないのだから、止める理由もないだろう。

「・・・東広！」

どうやら駄目みたいだ。さて、どうしたものか。大人しく、抵抗せずに捕まるくらいしかできないのに。

「忘れ物だ」

弧を描いて飛んできたのは、小さな箱。掴み損ねたそれを拾い、目を凝らして見えた文字は風邪薬。表面にはそう書いてある。

「お大事に」

まったく、とんでもない置き土産だ。おかげで思い出してしまった。早く帰って寝るとしよう。あー・・・寒気が凄い。

アズマが去った後、四人は空き家の中へと引っ込む。要潤は未だ目が覚めない。覚めたら覚めたで大変だから、痛々しく晴れ上がった頬の血抜きをしてから寝かせる。

「よかったの？彼を帰して」

「あれは一つの礼だ。それに、泳がせた方が近づけそうだ」

「あっそう」

「優秀なナイトのようだし、東広と真っ正面にぶつかるのは得策じゃない」

「そうだね。でも、掬羽の方が強いよ」

「さてな」

自嘲気味に鼻で笑う。自分はそれ程強くない、と言いたい訳ではないにしても、真っ正面ならという意味では当たっている。考えなしに突っ込めば、本当に負けてしまっイメージがある。

「今はただ、待つとしよう」

夜ももう深い。眠るにはいい時間だが、タイミングとしては少し早い。沸々とする余韻が、せめて冷めるまでは眠れそうにはない。

「・・・少し夜風に当たってくるか」

重くならない瞼に耐え兼ね、そのまま怠惰に過すのも性に合わない。外に出て、どこかで火照りを発散しよう。

大見え切って早々に離れたが、どうにもこれは帰れそうにない。勢いだけで爆走して、知ってる場所まで来たが、安心したのかガス欠。動くのは厳しい、っつか動きたくない。

疲労は最高潮で、熱も改めて思い出したからふらふらする。現状は極めて悪い。まだなんとか電灯の下にいるけど、これじゃどうにもできない。

さて、今何時だろうか。携帯を招福に忘れたから、時間もわからない。お腹すいた、とかも思えないから、腹時計も当てにならない。しない。

「アズマ・・・」

思いも寄らない声だった。そして間違える筈もない声。誰なのかは、見なくてもわかる。懐中電灯が周りを、彼女の事を照らしている。

「・・・ひ・・・いろ・・・」

本当に、考えもしなかった。誰も予想できないだろう。そして、要潤との闘いで原動力になっていた事を彼女は知らない。

「だ、大丈夫、アズマ？血が・・・こんなに」

駆け寄る彼女の手は暖かい。間近でその顔を確認して、漸く現実の事だと理解する。

フラッシュバックするのはあの時の感情。何を持ってあそこまで激怒するか。何を持ってあそこまで支えになるか。生きていると信じる中に、どうしても心配してしまう心がある。しかして、心配する心が溶けてしまえば・・・

「う・・・あう・・・あ・・・」

誰しも安堵して涙を流してしまう。

「ちょっと・・・アズマ・・・」

号泣しながら女性に抱き着く男子高校生なんて、あまりいないだろう。悲しみが消失し、泣き方を忘れているなら尚更だ。

そうだった。悲しみだ。どんな感情かはまだわからないけど、言葉は思い出せた。でも、今は違う。これが悲しみの涙ではない事はわかる。

「うつ・・・よかった・・・ひくつ・・・生きて・・・生きてて・・・よかった・・・た」

泣くのに理由はいらない。感情的要因が大きいにしても、大部分は悲しくて泣く。しかし、大部分なだけで、他の要因でも泣く。

怒りに泣き、恐怖に泣き、痛みに泣き、嬉しさに泣き、動揺に泣き、そして安堵に泣く。悲しみが無いから泣き方を忘れたなんて、些細な事でしかない。

「大丈夫よ、アズマ。私も、アズマが生きててよかった」

「あう・・・うあああああ！！！」

涙腺は崩壊。今まで涙を流していなかった分、体が驚いたらしい。それにも合わせ、泣ける喜び　嬉し泣きまでもが相乗している。

アズマは生まれて初めて泣いた。

気まずい空気が流れている。安堵のあまり泣いて、更に緋色に抱き着いてしまった自分。彼女は赤面していて、彼も同じく赤面している。

「あー……一季とファルは……どうなったかわかるか？」

「会った……わよ。どっちも凄く動揺してて、とりあえず別れて捜そう、って」

「そうか。よかった」

また安堵の溜息をする。今度は泣かないだろうが、二人を前にしたらまた泣いてしまうかも知れない。涙腺が緩くなったのも、困った事だ。

「その、緋色は怪我したって叉子から聞いたんだけど」

「なっ！やっぱり掬羽達といたのね！！！」

しまった。これはもしかしてでもなく、地雷を踏んでしまったかな。やべ、すっごい怖い。

「・・・心配してくれるんだな」

「当たり前でしょ！！！」

「そうだな、俺もそうだ。凄く心配した」

「・・・当たり前ね」

「正直に言うとき、ずっと考えてた。緋色達が死んでもどうせ悲しまない。なのにどうして助けようとするのか」

「・・・うん」

緋色は何も言わず、素直に聞いている。ここは口を挟むべきではない。アズマの考えがわかる様に、彼女も以前はそうだった。何をしても楽しくないなら、何をしても意味がない。だからわかる。

「結局単純だった。ただ、緋色達を心配してた。ただ、緋色達に会いたかった。たったそれだけの理由だった」

「それでいいのよ。私だってそうだったもの。いつだって理由なんてそんなものよ」

深く頷き、緋色も静かに涙を流す。募っていた感情が氷解し、それが露となり目から溢れる。一緒になって泣いてしまいそうなの。そんなもらい泣きはいらぬ。そっと肩を抱き、ここにいる事を教える。

会いたい。それだけで十分。それだけで、こんなにも暖かい気持ちになる。

「緋色は大丈夫なのか？」

「怪我の事かしら？」

「ああ」

「それは治療してもらったから大丈夫。親切なホームレスだったわ」

「へー……今時、そんな人もいるもんだな」

「そうね。今度、多分ないと思うけど、会ったらお礼しないと」

そうだな、と相槌を交わし、腰を上げる。いつまでもこうはしてられない。早く一季とファルを見つけて、安心させないと。

一季には殴られて、ファルには飛びつかれそうだけど、それでもいい。そうなったら一季は殴り返して、ファルは思いっきり抱きしめよう。

無精髭を生やし、いかにもホームレスの様な風貌をした男性。その男性は、タイミングよくあの公園の近くを通りがかり、タイミングよく彼女を助け、タイミングよく治療した彼女を送り出した。そう、全てがタイミングよく（・・・・・・）事が運んだ。

「まったくあいつらは、俺がいないと死んじゃまうな」

一人愚痴で、着づらそうにしていたボロボロの服を脱ぎ、右手にぶら下げていた鞆から服を取り出す。その服もまた、着ていた服と変わらずみすぼらしい物だ。見様によつては白衣の様にも見えるが、汚れていて白衣ではなく灰色がかったている。

「遅かったな トウマ」

遅れた事に対して悪びれた様子もない。だが、それを咎めようともしない。

「どうだ？」

差し出されたタバコ。数秒見つめたあと、怪訝そうに問い掛ける。

「これって水蒸気のためのタバコ？」

「そんな事ある訳なかるう」

「んじゃ結構。戻るまで我慢でもしよう」

タバコを箱に戻し、一人吹かす。それを羨ましがる事もなく、二人は駐車した場所まで歩く。

「しかし、お前に手術を施さなかったのは、こうゆう我が儘をやらせる為じゃないぞ」

「堅い事言つなよ。だったら、今からでもしちまえば、従順な部下ができますよー」

「それこそ堅いな。まず手術を施せば、戦力は大幅ダウン。それに医者のお前程の人間が、人体を知り尽くしてない訳ない。その気になれば、腕だろうが、内臓だろうが、脳の一部だろうが想造できるだろう」

「評価高いね、これまた」

やろうと思っていた事を全部正解させられた、と心中でぼやく。トウマ的には手術されたあと、テキトーに前頭葉を想造し、いざアズマ達と会ったら消す予定であった。そうなれば、情は湧かない。その予定であったが、根本から崩された。

「まったく、何でもお見通しだな・・・」

「それ以上言ったら、喉笛でも摘出しようと思ったが、学習したか。それにトウマ」

「・・・ああ」

「流石に、ここまでは予想はできなんだ」

懐のトカレフを抜き、振り返る。眼前に構え、焦点を合わせる。だが、狙いが合わない。そこに姿は見えるというのに、そこにいない(・・・)と誤認をさせる。

「どうして気づいた？」

「簡単だ。明かりはあれども人はなし。陰は出てても気配はなし。」

最後に、ワンダーが異様に騒いでいるのでな」
「成る程。それも直せそうにはない」

佇む男に気配はない。勿論、相手も他人の気配を感じる事はできない。

「サインレス（無存在）か。こりやまた有名人が来たな」

「貴方より有名ではないさ、ハートレス（色無し）」

「そりやどうも」

「あの子達と関わっていて、どうやらいい方向に傾いたみたいだ」

「そういえば、会ってたっけか」

「誰かの所為でここら一帯は、外来のファインダーは入れなかったのですね」

「………へえ」

「トウマだとは確信が持てなかったが、今こうしているから確定したな」

「そうかい」

隣でまだ残っているタバコを吐き捨て、目が細くなる。姿を隠されたら、どうにもできなくなる事を、重々承知している。

「最近、東雲病院が潰れた、という情報が入ったから、早速赴いてみればビンゴだ」

蛍光灯からゆっくりと離れ、足音を立てながら歩く。

「しかし、どうにもあの東広とか言う彼は強い。何者だい、彼は」

「俺は知らないね。本人に聞きゃあいいだろうよ」

「そうか。なら、先ずは復讐でもさせてもらおう」

「復讐……まだくだらない事やってんのか」

「それはハートレスの物差しで、だろ。こちらの物差しではそうはいかない。殺せるかは、二人いるからきついが、命を削るくらいはしよう」

銃口から火が吹き、火薬の臭いと共に、耳も貫く。しかし、連続しては撃たない。この状況は、掬羽から目を切らない事が最優先であるから。少しでも視線を逸らせば、どこにいるかわからなくなる。

「何だよその・・・不釣り合いな武器は」

手にあるのは鎌。それも、普通のサイズではない。死神がいるとしたら、このぐらいデカイ鎌を持っていても不思議ではない。だとしたら、掬羽は死神という事になる。

「・・・いやはや、ねえ」

自分の想像力の強さを呪いたくなる。今はただ逆に、死神すら殺せる人間になればいいだけの話。差し出す命など、ありはしない。

今夜、この闘いの顛末は、三人しか解らない。

48th「理由」(後書き)

しゃあ、おっしゃ。とりあえず、謝る。編集は断念します。それはおいといて、この邂逅はおしまい。ちよくちよく四人は出てくるでしょうが、その時はその時で。次回からは、何か楽しい話を作れたらな、と。てなわけで、イエス、修学旅行だぜ！(詳しくは活動報告で)

49th「とらぶる」とらぶるふえすていはる」(前書き)

今回は、意味不明発言はなしです。最初に言っておきますが、この話は、ほぼ作者のノリで書きました。楽しければ幸い、楽しくなかったらドンマイ。そして、次話までが文化祭の　　コーヒーぶれいくというものになります。

やば、後書き書く事なくなっただかも。

さて、なんでこうなったかな。

目の前にはヒートアップしている　もう手がつけられそうにな
い人達がいる。

「盛り上がっているかい、東君!!?」

「いえ、すいえすいえすいえす」

こうゆう行事、つまり、みんながはっちゃけられ、テンション上
がりまくりで、上下関係も、存在感も、何もかもを壊してくれる行
事　文化祭。それは、人間関係の垣根をも簡単に壊してくれる。
いつも話し掛けない、話しを掛けられない人達から　今日だけ
声が掛かる。

はて、なんで、どうしてこうなった。

遡る事、一週間程である。

「う……がほッ……！」

授業中、いきなり吐血した。原因は、要潤との闘いで受けた傷の名残である。勿論、傷口は塞がっているが、早過ぎる自己治療能力も困ったものである。

次の日に、調子が悪いまま学校へ行ったら、二時間目始まる直前に吐いたのだ。特別意識を失った訳ではないが、本人以上に周りが大パニック。混乱の大嵐である。

ともかく、一般の病人に行っては、更に新たな混乱の火種を作るから、消火担当の蓼さんに任せる事にした。あの人なら上手くできちあげるだろうし。

そんなこんなで、蓼さんの 江湮の入院している病院に、自分も入院する事となった。検査の結果、胃潰瘍だ、と表向きにはなっているが、本当は肺に血が溜まっている、命に関わる一大事だった。そういえば、緋色との会話ですっかり忘れていました、と暴露したら叩かれた。どうやら、更に放火してしまつたらしい。ありえない、と言葉を漏らしていたのは、聞かない事にした。

そうゆう訳で、一週間程入院していた。何しろ、変に傷口が塞がっていたから、治したり、血を抜いたりするのが大変だったらしい。何回も切つて、固定しないと、直後から傷が閉まりだすから、苦笑するしかなかった。縫う必要もないのは、些か頭を抱えた。

それだけならよかつたが（決してよくない）、熱の所為もあつた。またそこで思い出し、しかし特に問題もなかつた。そんな事を言つたら、また叩かれそうだから言わない訳だが。

ともかく、回復は早いから、一日様子を見たら退院した。結局、手術に時間がかつただけで、本当に困つたものだ。

それがどう今回の事に繋がるかは、一週間の間に文化祭の大元が決まつたからだ。前々から準備はしていたが、俺は完全にアウエー。蚊帳の外を決め込んでいた。

そこに一週間の入院。役職も決めていなかったから、死人に口無し（死んでいないけど）という訳で、いない人が口出しできる筈もなく、とんとんと役職が決まつてしまった。

「き………つついわ〜」

周りより熱が低い事は、この際気にしないで欲しい。入院中には、緋色と一季がちよくちよく来ていた。（ファルは学校を休んで、病院に一緒にいた。）何をやるか、など話題が上がったが、二人とも黙秘。秘密にした方が面白そうだから、だそうだ。緋色に関しては、ただのノリだろうな。

「全然面白くない」

「ん？」

「いや、なんでもない」

ファルもヒートアップしている群集に混じり、今までに見た事のないぐらいの騒ぎようだ。集団心理って怖いね。

今はクラスの出し物である。全学年、全クラスが終了したら、後日に教室毎に簡易露店を開くらしい。らしい、というのはわからないからだ。出し物はわかるが、露店は何か、役職は何かわからない。まあ、どうでもいい。

出し物は一年からやるのが恒例。一年にそんな完成度は求めていなく、ダンスは息がそんなに合っていない。これを来年に活かしま

しよう、つてのが教訓。その言葉が、二年、三年の出し物でよくわかる。思わず声を漏らしたぐらいだ。周りの人を、更にヒートアップさせる起爆剤にもなっているが。

結局、自分達のダンスは酷かった。比較すると雲泥の差があるな。因みに緋色と一季のも酷かった。緋色は劇みたいだったが、喜劇は緋色に似合わない。台詞のほとんどが棒読み。

一季は突出しすぎ。ミュージカルなのだが、凄い嵌まりまくり。その所為で周りと合っていない。人の事を言える立場でもないから、口は慎んだが。

「ついてけねえ」

ぶっちゃけてしまえば、自分は病み上がりの身である。体は動かせるが、倦怠期というか、気分が悪いというか、何だかイマイチ本調子じゃない。重労働は、できればパスしたい。

さて、今日はなんとかスルーできたが、明日もあるとなると憂鬱だ。どうにか回避できないものか。

いやさ、なんでこうなる。

終わりは始まりとも言っし、始まりは終わりとも言っ。そうだな、そんな事を言ってた人もいたな。つまり、文化祭一日目終了と同時に、文化祭二日目の前夜祭が開始した訳なんだな、これが。

無論、自由参加だから逃げようとしたが、ファルは既に参加する気満々。そんな上目遣いで見るな。帰るに帰れない。またアニメ情報だろっけど。

「イエーヘーイツ！！盛り上がってるかい！！？」

司会進行の三年が、体育館に残った生徒を纏める。余韻と元気が残る。余りまくっている人に、統率性もクソもない。あんな開催宣言をしたら、火に油を注ぐより、大爆発を引き起こしそうだ。約、多分一名を残して。

「ふう……」

体育館は熱気に包まれていて、温度差のある自分はある自分であてられそう
だ。避難場所を求め、辿り着いたのは自分の教室。電気を点けるの
も億劫だし、そのままベランダに出てみた。

「はぁ・・・寒」

それでも自分とは温度が合ってる気がする。こうゆうイベントが
大好きな一季。こうゆうイベントには、積極的に参加する緋色。一
季は純粹に楽しむだけが、緋色に、楽しい、という感情はない。
だからこそ、忘れない様に、どの要因が楽しいと感じれるかを、
忘れてはいけない。忘れない努力をしないといけない。自分も、危
ないところまで来ていた。でも、なんとか思い出せた。そうゆう意
味では、あいつらに感謝してもいいかも知れない。

「あれ？」

「ん？」

声がして振り返ると、誰かが立っている。決して暗闇だからわか
らないのではなく、名前がわからないから、誰かとして呼称できな
い。女子っていうのはわかるが。

「東・・・東広君ですよね」

「・・・え・・・と・・・」

「もしかして・・・わからないですか？」

「ご指摘の通りで。他人の名前と顔を覚えるのが苦手です」

「そんな畏まらないでください」

「・・・はあ」

誰だったかな、この人は。俺は目立とうとしてないから、あまり有名でもないと思う。一季の所為でどうだか知らないけど。

「わたしの名前は八坂やさか 唯一ゆいって言います。同じクラスだから、こんな自己紹介も変なものですな」

「同じクラス？」

「そこまで知らなかったんですか!？」

「先程言った通り苦手なので」

「だからそんな他人行儀じゃなくていいですよ」

「でも、そしたら八坂さんは・・・」

「これはクセみたいなものです。家がこうゆう家柄なもので、叩き込まれたので、どうしても変えられないのです」

「ふーん」

なんだかほんわかしてる人だな。顔も綺麗、というよりは可愛い。男子にも人気がありそうだ。女子からも、この性格だし絡み易いだろう。何より裏表がなさそうだ。

「それで、八坂さんはどうしてここにいるんだ？」

「ちょっと疲れてしまって。東広君はどうしてここにいますか？」

「俺は病み上がりで、まだ本調子じゃないから」

「そういえば、胃潰瘍で大変でしたね」

「あー・・・うん」

それは嘘なんだけど。本当の事を言っても混乱させるだけだし、話さない方がいいだろう。

「それにしても寒いですね」

「もう11月だからね。でも、今日に限っては調度いいかな」

「あ、わかります。ちよっと周りとの温度が違うから、今はこのくらいがいいですよ」

例えば、江湮や緋色、一季とファル以外で、こんなに話した人は初めてかも知れない。あの徴という奴は別として、極力周りとの接触を断ってきたから。でも、今後もそれは続けた方がいいだろう。

「そういえば、ファルさんは？」

うーん、あいつをファルさん、か。どっちかって言ったら、ファルちゃんの方が似合うな。まあ、八坂さんにはそっちの方が言いやすいのらないけど。

「ファルは今体育館だよ。あいつも例に漏れず、騒ぐのが好きなんだろうね」

「そうですか。いつも東広君と一緒にいるから、ちよっと意外でした」

「まあ・・・ね、間違いじゃないよ。家じゃいつもべつたりだし、一緒に風呂に入ろうとするし、妥協して、一緒に部屋で寝てるだけだし」

「え！？その・・・同棲、してるんですか」

「話してなかったね。一応、親戚の人なんだ」

という事にしておこう。

「両親が事故死しちゃって。で、向こうの両親と俺の両親と関わりがあつて、それで俺を頼ってきたんだ」

自分でもびつくりだな、こんな虚言、真つ赤な嘘。でも他に説明のしようがないしな。ある組織の戦闘員を引き取ったなんて、どこ
の映画だか。

「優しいんですね。何となく、ファルさんは幼そうに見えて、大変
そんな感じがしますが」

「見た目通りだよ。だから、今回は小悪魔の攪乱つてやつかな」

「小悪魔つて、そんな」

「小悪魔だよ。やる事なす事全部悪戯つぼくて、幼い」

「そうですか」

クスクスと笑い、本当に穏やかに笑う。やっぱり、こうゆう人には
は笑い顔が似合う。

「確か東広君は、他のクラスの炬さんと日高君とよく一緒にいます
ね」

「幼なじみだし、悪く言えば腐れ縁かな。付き合いも長いし」

「いつも屋上でご飯を食べてますよね。結構有名ですよ」

「へえー、それは初耳だな。いつもご飯食べてるだけで、そんなに
有名になるもんかな」

「集まつてるメンバーが、ですよ。炬さんは綺麗で、ファルさんは
かわいくて、日高君はかつこよくて、東広君もかつこよくて」

「ふーん」

「ふーんつて、東広君自覚してないんですか？」

「いや、まったく。考えた事もなかったな」

そんな事を考える暇もなかったし、そんな趣味もない。ナルシス

トなんて考えに辿り着く事もなかった。多分、緋色と一季も、そんな事を考える暇はなかっただろう。ファルは例外として

「それにしても、あの量の弁当を作る炬さんも大変ですね。感謝してますか、東広君？」

「・・・はーん、成る程。確かに料理できるけど、そりゃあ緋色の株も上がるわな」

「・・・え？」

「いやいや、大変だよ。あの量の弁当作るのも運ぶのも。そのくせ、感謝するのはほんの時たまだし」

「え・・・と・・・えー!？」

耳が痛い。そんな驚く事かな。いいじゃないか、男が弁当作れたって。

「あの弁当、東広君が作っているんですか!？」

「そうだよ」

「へー、凄く意外です」

「そんなに意外にされて、ちょっと傷つきました」

「あーすみません、ごめんなさい」

そんなあわてふためくと、なんだか悪戯心が芽生えてしまう。多分、一生懸命なんだろうな、何事にも、何でも、様々な事に対して。

「いいよ、別に。誰だって誤解はするし」

「はう・・・すみません」

「そこまで謝られると、こっちもなんか遣る瀬無くなるよ」

「ああ、はい。なら話題を変えましょう」

「うん、それでいい」

「なら、東広君の作るご飯っておいしいですか？」

「自分で言うのもなんだけど、おいしいと思うよ。周りはおいしいって言ってくれるし、毎回残さず食べてくれる」

「そうですか、わたしも食べてみたいです」

「なら・・・食べる？」

「いいんですか!？」

八坂さんの目が蘭と輝く。口にした言葉に他意はないのだろう。それこそ裏表のない、純粹な発言だったと思う。だからこそ、こんなに喜んだ声を弾ませる。

「明日は各々弁当を持ってくる筈だったよな。その時も屋上にいるだろうし、よかったら来る？」

「でも、邪魔じゃないんですか？」

「気にしなくてもいいと思うよ・・・多分」

最後の言葉だけは聞かれない様にする。多分大丈夫だと思う。明日は散策の予定はないだろうし、今日の昼もそんな話しはなかった。するとしたら週末だろうし、多分、いやきつと大丈夫。

「それじゃ、お願いします」

「ああ、期待していいよ」

期待に満ちた顔は、つい応えなくなる。背伸びしない程度に、いつものように作ろうとしても、力が入るだろう。本当に期待しても構わない。

「それにしても、今日だけで大分東広君の印象が変わりました」

「基本何も話さないからね。暗い人かと思ったでしょ」

「いえ、そうじゃなくて、なんだかいつも張り詰めてる風に見えていたんです。それで周りも話しづらいと思うんです」

それは思惑通りだ。周りに関わりたくないのは本音だし、いつも張り詰めていたのは確かだ。何しろ、救わなきゃいけない人がいる。実際、勉強どころじゃない。そうなのだが、日常を疎かにしてはいけない。日常が一番の支えになるから。

「・・・東広君？」

「ああ、うん。いや、なんでもない」

「でも、印象が変わったのは本当です。もっと早く知り合えばよかった、と思える程に楽しいです」

「それは光栄だね」

本当に笑顔が似合う。ずっと笑っていれば、周りも笑ってくれる。それ程に、穏やかさが溢れている。

「あー！！！！」

「ん？」

なんかさっきもあつた様な光景。そして今度は男子が四、五人くらいいる。

「何抜け駆けしてるんだあ、東広っ！！」

そして、ここでも垣根を壊している事を發揮するか。正直言つて

俺、あんたの事知らない。

「俺の唯一ちゃんに！」「わー八坂さんが東広の毒牙にいつ！」「現実か！？幻か！？一発殴ってくれ！！！」「どおりやつ！！！」

一辺にそんな事を言うもんだから、何がなんだか聞き取れない。わかるのは、一斉に俺に殺意を向けてきた事だけだ。

「なんで、どうしてこうなる！さっぱりわからん！！！」

最早心中だけでは収まりきららない。叫んだところで何も変わりはないが、八坂さんは笑っている。こっちは何故だか知らないが涙が出そうだ。

二度目の、校舎内での鬼ごっこ。ただし、今度は鬼が五人。捕まったら、本当に食い殺されそうだ。

初日の文化祭は、こうして幕を閉じる。ラストの二日目。どうなれば幕が降りるかは、楽しみにしていればその通りになる。できるなら、降りてほしくはない。

なんかついつい手が進んで、文字数がハンパなくなってしまった。まったく、今週土曜は模試だというのに。ええ、こんな暇はありませんよ、これでも勉強しています。小説で国語の勉強ができるなんて最高じゃないですか。

とまあ、模試が近いです。来年受験生です。凄い崖っぷちです。でも大丈夫です。この国には背水の陣という・・・

なんでもない、ただの屍の様だ。

「「「「いらっしやいませ！！！」「「「「「

今は練習中、最後の確認との事だ。ところが俺は隅の方で丸まっている。隣ではファルが心配そうにしているが、体調不良な訳ではない。単純に 嫌だ。

「どうした東君？」

「君も男だろう。一度はやってみたいはずだ」

また簡単に壊してくれるな。こっちはまだサブリミナル効果に侵されていないんだ。群集の中だと、どうして自分のモラルが麻痺するが、まだこっちの感覚は麻痺していないんだ。

「さっさと・・・」

なんか嫌な予感。じゃなくて、直感。逃げ場は・・・

「着替えるー！！！！」

ないよね。

仕方なしに降参した。着替えさせられるのはゴメンだから、もう着替えてやる。自分からやるのも結構な諦めだと思う。でも・・・仕方ないのか、本当に。

「似合ってるじゃん」

「認めたくない！」

物凄い眩暈と逡巡の後に着た服は・・・

「・・・メイド服なんて」

わー、熱が振り返したかな、視界が揺らいでるや・・・いや・・・涙か、これ。一回泣いたら、なんか涙腺緩くなったかも。

でもこの喫茶、思い付かなかった訳でもないが、ベタな様な気もする。これぞ高校生って感じたが、発案者は誰だ。

「アズ」

「あー、うん似合ってる似合ってる」

笑顔になれるのは純粹なのかな。男子は女装し、女子は男装する、そんな喫茶店で、役職はウェイター。重労働だ。

「さ、ウェイターは頼んだよ」

「・・・めんどい」

、つい本音がぼろりと出る。そりゃあ本業だけど、注文とるなんて簡単だけど、だからこそやだ。バイト以外で働くのも、なんか複雑だからだ。別に招福で働く事を苦とは思ってないが、ここでやるなら話しは別。そう、別。別なら別で、どうにかしようか。

「でも、やっぱり抵抗がなあ」

いつまでも燻っているのは、はっきり言っていかがなものか。そうだ、ぐだぐだしてるのは俺らしくない。恥じらいは持ちつつ、腹は括ろつ。

「おー、惚れそうだよ、東君」

「男に好かれても嬉しくない！」

「そんなご謙遜を」

「お前一体誰だ!?!」

同じ空間にいるなら、それにつられて自然とテンションが上がってしまふものだ。温度の高い水が、少量の温度の低い水を温めるのと同じ。ガラスか、壁が一枚あれば変わるが、生憎とその壁は今崩壊している。核ミサイル級の衝撃があつたのかな。

「さーもうすぐ本番だ。楽しんでやろつぜー!?!?!」

「「「「「おー!?!?!」」」」」

「おー」

あーあ、なんでこうなるかな。

「いらつしゃいませー、三名様ご案内です！」

やっぱりね。混雑は予想するまでもなかったけど、それでも凄い混雑してる。クラスの半分が出し物をして、残り半分が客として来る。午前と午後を境に交代し、今度はこちらが客になる。

「八坂くん、ご指名です！」

「写真撮影は一枚百円でーす！」

「ケーキと紅茶オーダー入りました」

「田中ちゃん可愛いよー」

何だかなあ、メイド喫茶じゃないのだけどそんなノリだ。もう悪ノリしてる様にしか思えない。

「東ちゃん、ファルくんご指名入りました」

「げ！」

「了解」

因みに、女装しているなら、男装しているなら、男は『ちゃん』になり、女は『くん』になる。尤もな話のだが、そこを問題にはしていない。俺ら二人を指名するといったら・・・

「おいつすよーん」

「来たわよ」

「イチ、ヒイロ」

まあ・・・デキレースだな。こんなできた話はない。どうして一季達のクラスが後半グループなんだ。誰かタイムテーブルをいじく

ったのか。

「似合ってるなん、アズマちゃん」

「・・・ドウイタシマシテ」

「テンション低いねん」

「こっちは病み上がりなんだよ」

「軟弱者がーっ!!!」

「イジメか!?!」

チクシヨウ、あのあと会った時に、どうしてこんな奴に涙を流したんだろ。あの時の涙を返せ、バカヤロー。

「アズマって結構女装、似合うのね」

「俺にそんな・・・」

「駄目だよん、緋色。規則に沿ってアズマちゃん、って言わなきゃん」

それ、遮って言う事か。しかもなんて事を言い出す。この機会にいじくり回す気が。

「アズマちゃんって結構女装、似合うのね」

「・・・ノルなや。それに緋色も病み上がりだろ？無茶するなよ」

「大丈夫よ、ちゃんと完治したから。ファルくんも似合ってるわね」

「ありがとう」

「誰かと違って素直ね」

「へえー、誰だろね」

「アズマちゃんと違って素直ね」

「わかりました、認めましょう！俺は素直じゃありません!..!」

周りの視線がこちらには集中しない。もうテンションはずっと最

高潮で、低かった温度がやっと同じ温度に到達しただけだから。そうになると、自分の中で保っていたものは瓦解している事になる。

「で、緋色と一季は何をやるんだ？」

「教えないん」

「お楽しみで」

「まだゆうか！」

今更隠す事でもないだろうがーッ、と心中で叫んでみても意味がない。

「もういいや、詮索はしない。・・・楽しみにしてるからなー！」

「ごっご期待」

長い雑談だった。はたして何をしたか、なんて、何もしていない。注文も受けてなければ、ただの雑談だった。でも、変わった。漸く同じ温度になった。やっぱり、一緒にいないと調子が出ないらしい。

「それじゃーあ・・・パフェと紅茶二つずつよろしくねん、アズマちゃん、ファルくん」

許諾の意味と一緒に、地獄へ堕ちると親指を下に向けた。砂糖とメレンゲじゃなくて、辛子と塩でも入れてやるうか。

「お待たせしました」

「お待たせ」

結局入れない。作るのは俺じゃないし、作れるけど作るのめんどいし、作るのには時間がかかるから既製品である。それにサイズは小さめ。昼を挟むから量は少なく、時間の確保の為に一人様一品と

飲み物一つ限りである。

「これアズマちゃん作ったのかん」

「いえ、作ってないワヨー」

うーむ、悪ノリしてきた。もういいや、どうなっても。どうとでもなりやがれ。

「それ誰のマネかしら？」

「・・・誰かのマネヨ」

「・・・dream・・・」

「まてまてまてまてまて！・・・！落ち着けー！」

「で、誰のマネかしら」

「・・・ウフン・・・緋色ヨ」

「dream・・・」

「どうすればいいんだよ！・・・！」

我関せずで一季はパフェを食べている。っておい、ファル、お前まで食べるな。

「ファルくんご指名です！」

「ほら、ファル。仕事だ」

「アズ、一緒、来て」

「・・・仕方ねーのな」

口元についてたクリームを拭い、ファルについていく。指名した客は不機嫌そうな顔をしたが、それは黙殺。逆に感謝してほしい。俺という付き人がいなければ、ファルくんは来ないのだから。

「注文、何」

「えっ……と、モンブランで……そちらは？」

付き添いの理由か。まあ、普通気になるわな。気にするな、と言われても無理な話だし、ここは説明しよう。

「私あ、ただのお……家具ヨ。気にしなくてイイワ」

背中に殺気の刃が突き刺さる。前からは困惑の盾だし。でも後悔しない。うん、悪ノリするのもいいもんだ。

「まあ、先ず自己紹介からしますか」

「自己紹介って……同じクラスの藁谷だけど、東広……ちゃん？」

「あー、そうか。そりゃあ知ってる訳か……ちゃんって呼ぶのね？」

「………ノリで」

「やっぱり、こうゆう行事があると、はっちゃけちゃうのカシラ」

うわっ、なんだか吐き気が迫ってきた。自分の発言に嫌悪するのは、何と言う驚異だサブリミナル効果。否、こうゆう行事か。

「ゴメン、今の発言なし。自分で言っというてなんだが、なし。ってか忘れて」

「………ふっ」

あ、鼻で笑われた。なんか屈辱的。モンブラン口に突っ込むぞ。

「いやさ、いつもの東広……ちゃんとのギャップがあるから、なんか面白い」

「笑うな！はい、モンブランおまちどお。ごゆっくりしないでいい

からどつぞ

結局。

帰る先はここしかない。ちくしょう、来ちゃ悪いか。ここしか居心地いいとこないんだよ。

「僕らもうすぐ行くよん」

「そりゃあようござんしたね。忙しいんだ、茶々はあとにしてくれ」

「あ、あとにいられていいんだねん」

「ダメに決まってるだろ！」

いつもと違う彼の雰囲気、若干戸惑う周り。文化祭の気にあてられたのだろう、と各人は予想を立て、その予想で間違いないと思っっている。ただ、彼の本来を知っている三人と、昨夜知り合った一人だけは、これが普通なのだ、と思う。

必ずしも、女装をした反動で、壊れてしまった訳ではない。

漸く昼休みの放送が響く。これを境に労働者は客に、客は労働者に、一時間の休憩を挟んで変わる。各々は教室に戻り、後片付けと準備を並走して行い、腹を満たす為に奔走する。

「本当に・・・いいのですか？」
「今更何を。もう八坂さんの分まで作っちゃったし」

散らかった教室を片付け、早々に重箱を片手に屋上へ向かう。今日は二人ではなく三人、いつものメンバーに若干の闖入者がいる。それを少女は不思議そうに見るが、別段嫌そうにはしない。何かする気配や素振りはないが、立ち位置は新参者の彼女と彼の間を割る形にいる。

それを咎めようとしてもしないし、何故その立ち位置にいるかを問う事もない。今日はたまたま、そこにいる、そこにいたい気分なのだろう。

「・・・ちよつと待ってて」
「あ、はい。わかりました」

流石にいきなり連れて来ると引かれそうなので、初めに断っておこう。主に一季が突っつきそうだから。

「お待ちせ」
「よっほーん」
「お疲れ」

いつもの挨拶から始まり、とりあえずは傍に寄る。待たせるのもいけないから、早めに切り出すとしよう。

「今日って散策の話しはしないよな」

「んー・・・しないかなん。そうゆう気分でもないしん、打ち上げもありそうだしなん」

「それがどうかしたのかしら？」

「実はさ、一緒に昼食をとりたいて人がいるんだけど」

「はーん、なるほどん。ま、いいんじゃないかん」

「緋色は？」

「断る理由がないわ。私もいいわよ」

よっしよっし、とりあえず許可はもらったと。気が変わる前に、さっさと紹介しよう。

「オツケーだつてさ」

わかりました、と言って俺の後ろからついてきた八坂さんを見た二人は・・・まあ、予想よりも三割増しで、凄い顔をしていた。

「・・・本当にいいんですか？」

「うーん、詳細は伝えてなかったからな。とまあ、八坂唯一さんだ」

「あー・・・うん。ちよつと来い、アズマちゃん」

一季は声にするが、緋色はただ手招きしている。ファルだけを残し、三人はちよつとの時間をもらった。

アズマちゃんが彼女連れて来るなんてん・・・夢かん

さつきからアズマちゃんアズマちゃん言うなよ。それに八坂さんは彼女じゃない

それじゃ何よ

何よ、と問われる前に、どうして小声で話すんだ。これじゃ失礼な気もする。

何よ、って聞かれてもな・・・クラスメート

本当にそれだけかん

それだけだ

本当ね

・・・俺って信用ないのな

話しはそれで終わり。何を確認したかったのか、皆目検討もつかない。とにかく、先ずはご飯にしよう。

「わあ、凄いです」

率直に、そんな感想が八坂さんから聞こえる。大して気合を入れた覚えはない。いつも通りである。その筈だが、「おうおう、いつもより豪華だねん」と、いちいち一季がうるさい。

「なあ、そんな豪華に見えるか？」

もう一度言うが、それ程力を入れた覚えはない。六時頃に起きて、芋の煮転がしや鶏の唐揚げ、せんまい 薇の煮物、みそ汁と下味等に時間がかかるものは多いが、そんなに豪華だろうか。それにほとんどは前日におわらせている。

「いつもより豪華ね」

と緋色は素っ気なく突き放す。というか何故にそんな不機嫌なん

だ。紹介する時は乗り気だったのに。そんなに難癖つけてると・・・

「・・・あ、あの・・・やっぱり邪魔だったでしょうか？」

ほら、やっぱり。こうなっちゃう訳なんだよ。どう弁明しようか。

「い、いや、そんな事はないよん。な、緋色？」

「え、私？」

「誰がどう見ても不機嫌そうにしか見えないうん」

「一季は違うっていつのか。なんだよ最初の躰き」

「知らーん」

この野郎が、何がしたいんだよ。しかし、一季としては別に不機嫌になる理由はない。かといって、緋色も理由はない。ないのだが、見た目不機嫌なのは緋色だけだ。

一季・・・もしかして嵌めたかしら？

「？・・・何か言ったか？」

「アズマには何も言っていないわよ！」

「あの、もしかしてですけど・・・妬んでますか」

一瞬、静かになった。「それ地雷だーん」とか一季が叫んで倒れたが、静かすぎると逆に音が聞こえなくなるらしい。

「炬さんって東広君と付き合ってる・・・んですよね？」

またもや沈黙。火に油を注ぐのは状況が悪化して怖い、寧ろ密室で炭に火をつけた方が怖い。そう、怖い。騒ぎ立てる怖さより、沈黙している怖さの方が、逃げ出したくなる。

多分、一季がそれを一番わかっている。わかっている筈なのに、

どうして火種を放つかな。

「な・・・ないわよ」

「そうなんですか。結構な噂になってますけど」

「その噂ならもう聞いたわ」

「本当なんですか、東広君？」

「ん・・・ああ。噂は知らないが、緋色は好きだけど、彼氏彼女の仲じゃないな」

「好きって、友達として、ですか？」

「ああ、そうだよ。それにさ、緋色には俺がいつ好きとは違う、好きな人がいるだろうし」

「・・・同情しますよ、炬さん」

「もう慣れてます」

「・・・なんだよ。まあさ、さつさと食べようぜ。午後は緋色と一季のだし、楽しみにしてるからな」

いつもと同じ昼食なのに、何故かいつもと違う。参加者が増えただけでもなさそうなのに、何故だろう。

何故か 胸が痛い、

何故か 居心地が悪い。

何故か 温度差ができる。

昼食を挟んだ所為か、温度が若干下がった。が、午後の開始を知らせる合図が、再び熱を注ぎ込む。なんて事はない。熱量を溜め込んでいただけだ。

「さてと・・・どっから行くかな」

背伸びをして、回るルートを模索する。といっても予定は二つしかない。緋色の所と一季の所、両方行っても時間は余る。そうなたらそうなたで、あとはどうにかするつもりでいる。

先ずは一季の方が近いし、一季のクラスの出し物から行ってみよう。

なんだか、あれだな。一季の独壇場だな、これは。俺が入るとなると、本気で脅かしに来そうだ。

入口にはでかかど『お化け屋敷』と書いてある。誰用だか知らないが、ローマ字で『OBAKE YASHIKI』、更には英語で『HOLLER HOUSE』と、紛う事なきお化け屋敷さをアピールしている。

「あー・・・楽しみにしてるなんて言わなきゃよかった」

Uターンしたい衝動を抑え、いざ列に並ぶ。並んでいる最中から叫び声が聞こえてきた。よっぽど怖いらしい。そりゃあ、二つの教室ぶち抜いてるから、やり込んでるのだろう。完成度高すぎだろ、にしても。

「どぎ、わく」

一緒に並んでいるファルは、目をきらきらというよりは、凄く輝いている。その目には期待以上の何かが含まれている気がする。それを知るのは吝かで、知ったら何か壊れてしまいそうで怖い。

そんな入る前から恐怖を感じている横で、また一人 今度は間違いなく期待で 目を輝かせている女性がいる。

「なんだかわくわくしますね」

今にも走り出しそうに、両手を胸の前で堅く握り締めている。そんなに好きなのだろうか。

「好きなの・・・お化け屋敷？」

「はい、ホラー映画などは週二のペースで見えます。東広君は嫌いですか？」

「いや、別に嫌いじゃないが、悪意のあるホラーはな・・・うん」

その理由というのも一季である。思い出したくないが、一季である。真に不本意だが、好きにも嫌いにもなれない理由が、一季である。

「つと・・・順番か」

前の人が入り、漸く扉の前に立つ。本当に、ここは学校で間違いないのだろうか。中に入ったら別世界とか、一季ならありえそうだ。

「つ・・・お前は・・・」

見れば受付の人が、俺を指差して絶句している。ならば俺も応えよう、応える義務がある。

「なつ・・・お前は・・・誰だ？」

知らないから台詞に困ったが、自分でもベタだった。でも、直接的な言葉は意外と効くものだ。話しの腰を折られたから、当然か。

「昨日お前を追っかけてた・・・」

「男子生徒A！」

「違う！！！」

喧しいな。そんな事言われても、こっちはそちらの統率性ばかりに感心してたから、顔は見えない。

「うるさいなんって、次アズマちゃんかん」
「まだ続くのか、それ」

暗いカーテンから現れたのは一季だ。顔しか出してないから、見様によっては生首にも思える。

「俄然テンション上がったぜん。では説明を」

そう言つて、カーテンの奥に消える。ミスった、ここで大声出したら、そりゃばれるわな。

「では、せつめいいたします」

なんかつまらなそうな顔をしているな、男子生徒A。説明に力が入ってない。

「このおばけやしきはパーティーをくんでもらいます。パートナーをたよつてもよし、みすててもよし、てを・・・お前は繋ぐんじやねえ」

「わかりましたよ、男子生徒A。ではさよなら」

「うるせー、俺の名前は・・・」

聞く前にさつさと中に入った。だんだんと人をあしらうのが上手くなつたかも知れない。それはともかく・・・

「暗っ」

明からいきなり暗に来たから、何があるかよく見えない。安全性は大丈夫なのか、これ？

「つとお、引つ張るなファル」

「掴む、ない」

「え、なら八坂さん？」

「わたしも掴んでないです」

確かにファルの声がする方からは、引つ張られる感じはしない。そして、八坂さんはファルの後ろにいる。という事は・・・

「いきなりか！！！」

放そうとする手に力が入る。くわー・・・なんだこりゃ。

「すみません、組と逸れてしまつて。ちょっと一緒回つてもいいかな」

声からして女の子だ。顔はまだ暗いから見えないが、しかし、焦つて損した。あんなに動揺して恥ずかしいつたらありゃしない。

「え・・・ああ、そうゆう事」

随分な拍子抜けに、思わずほつとする。暗闇という事だけで、恐怖の原因が生まれる。それは視界がほぼゼロだからだ。目を瞑つたまま歩けるか、と聞かれたら、おっかなびっくりで一歩ずつ前に進まなければいけない。

「んー・・・む・・・よし」

ただ、今は目が開いている。見えないのは慣れていないからで、慣れてしまえばどうという事はない。道が見える、それだけで恐怖

は身を隠す。

「もう目が慣れたんですか？」

「まあ、なんとか」

というか、冷静になってきた。うん、多分このままならいけるが、まだ入ったばかりだ。何があるかわからない・・・って・・・あれ、引っ張られて来たけど、なんか掴んでる手が堅い。何て言うか、作られた様な・・・

そう考えていると、いきなり腕が支えをなくし床に落ちる。その音に思わず八坂さんが短い悲鳴を上げる。俺はというと、あまりの展開についていけず、未だ腕を掴んだままである。

「　　あら、腕が取れちゃった」

随分とまあ、嬉しそうにいいやがりますね、この人は。えーと・・・ちょっと待て。今この人の腕は取れました。はい、もの見事にこの手にあります。さて、どうゆう事かな、これは？

「仕方ないから、あなたの腕ちよおおだああああい！！！」

W H A T ?

細い腕が、自分の腕に引っ付いてきた所で、漸く理性が戻ってきた。つまりは　そうゆう事らしい。

「・・・み・・・みぎゃー！！！」

羞恥も外聞も気にせず、思わず叫んでしまった。ってかこの人かい、仕掛人。暗くてよく見えなかったけど、顔から血が流れてるし、右腕になんか鋸っぽいの持ってるし。偽物だよ、あれ。流石に本物は無理だよ。でもだったらなんであんなに光ってるんだ？

思わず持っていた手を叩きつけ、二人の手を引っ張って進んだが、どうやらルートに誘導していたらしい。『順序』とやたらめったに赤で書かれた立て札が、夜光塗料により暗闇で不気味に光っている。

「く」

今度は間違いなく仕掛けてる。目の前にあるのは、微かにライトアップされた井戸だ。これまた、『中を見る』と冒険心を煽る挑戦しなくてはいけないトラップがある。

「僕、やる」

「マジで!？」

志願したファルの勇氣は汲んでやりたい。寧ろ勝手にやっちゃってください。そんなやりたいならもうやってください、無双しても構いません。

「行く」

「うん、頑張れ」

何となく何があるのか気になる。これは何度も感じた事がある。ホラー映画の怖い部分は、目を閉じ、耳を塞いで躲そうとするが、どうしても先が気になる時がある。

あの変な井戸の中には何があるのか、意味がないとは思うが、ファルの後ろでスタンバってる。全ては、探究心を満たす為。

「なんか気になりますね」

そして八坂さんもその部類に入るらしい。体は退き気味だが、顔だけは井戸に向かってる。対して俺も似た様なもので、お互いに服の裾を引っ張っている。

「.....」

「.....どうした、ファル?何か...あるのか?もしかして不幸の手紙か?ホラー映画の観賞会か?どうなんだ?」

一言も喋らないファルに、疑問の言葉を連続して投げつける。しかし、どれも打ち返して来ないから、決心して覗き込む事にした。勿論、八坂さんも、である。

「……………なんだ、こりゃ」

「そう……………ですね」

「ない」

井戸の中は何もない。教室の床が、微かに見えるだけで他は何もない。それに、井戸の素材は段ボールでできている。教室を掘るのは駄目だろう、常識的に。

でも、こんなものか、と嘆息してしまう。単に恐怖心を煽るもので、実際びくびくしていたが、何の変哲もない。人員不足だろうか。

「まあ、こんな物も……………」

今日はよく、言葉を遮ったり、遮られたりが多い。しかし、これは誰だって言葉を失いたくもなる。

にちやり

そんな音がして、同時に頬を温かいやら冷たいやら、どっちかわからないものが撫でた。

「きゃあああああああ!!!」
「だあ!!!」

二人の叫び声が響く。しかし、ファルがきゃあなんて、イメージ崩壊・・・いや、そういえばファルも女だったか。そんな事はお構いなしに、二人が俺に飛びついてくる。

普通なら女子二人に飛びつかれて、違う意味で精神が錯乱しそうだが、今はそんな場合じゃない。抱き着かれた拍子に、変な体勢で崩れたから、せめて二人に最低限痛みはない様にした。三人分の衝撃のしかかり、痛かったが。

「あ、大丈夫ですか？あの・・・重く・・・ないですか？」

体重の事で女子が敏感になるのは解る。ただ、アズマが思うより八坂さんの体重は軽い。普段鍛えている事もあるが、そんなに気にする程でもない。「大丈夫」と返し、危なげない動作で立ち上がる。

「アズ、無事？」

「ああ、大丈夫だよ。それにしても何が・・・」

視界を先程いた場所に戻し、何があるのかを見り。見えたのは、腕のみを漆黒のカーテンから出している人。その腕もまた、赤い塗料で装飾されている。

まったく、不意打ち上等かい。油断した所に、安堵した所に、いきなり恐怖が割り込んでくる。何もない、と思わせるのが一番の方法だが、よくツボを押さえていらっしやる事で。どうせ一季が発案だろうが。

「これも・・・ペンキか」

頬に付いた液体を拭くと、手の甲に赤いものが付着している。鬱陶しいのでどうしようか考えると、腕が引っ込み、再度出てきた手には、三枚の濡れタオルが握られていた。

「随分律儀なお化けだな」

ありがたく受け取ると、やはりお化け役を貫いているらしい。喋りはしなかったが、Vサインをし、手を振って別れを伝えている。フレンドリーなお化けもいたものだ。

「・・・行こうか」

「はい。・・・あ、お化けさん、ありがとうございました」

お化けもそれに応えて、親指を立てる。本当に律儀だな、八坂さんも、お化けも。

その後は、リラックスした為か、慣れてきた所為か　それとも急に完成度が下がった所為か、最初の二つと比べると格が下がる。悲鳴もあまり出ず、脅かしにきた人はショックで隅の方で蹲っていた。

でも、まだ油断ができない。何と言っても、一季の姿を見ていないからだ。しかし、考えてみても不思議ではない。いつも第三者を演じているなら、自分から出てくる事はない、とも考えられる。実際にそうなのかも知れない。

立て札には、『このあと出口』と書かれている。今までなら、ここで安堵して、そこを付け込まれるのだが、勝って兜の緒を締めよ、

だ。まだ勝ってはいないが、ここまで来て油断する人はいない。

「やあ、お帰りかなん」

って、やっぱり出てくるか。ここで不安要素は消えたが、正直会いたくはなかった。

出口付近に、顔を黒い布で隠した人がいる。でも、一季だと確信が持てる。だって一季だからな、こんなふざけた口調の奴は。体勢はうつつ伏せで、その周りにあるのが目を引く。

断頭台。

すなわちギロチンが、場所にして一季の首の真上にきている。まさかね、あれを落とすのかな。あれで首が飛んだらどうしたものか。

「楽しんでもらえたかなん、アズマちゃん」

「またかよ」

「今日はこの呼び方で貫き通すよん」

「そうかい」

「さて、ファルと唯一さんは楽しめたかなん」

スリルが快楽を上回ったか、微妙にしか首を縦に振らない。だとしたら、これは大成功である。お化け屋敷は怖がらせる為にあるのだ。素直に楽しかった、と言うなら半分成功。怖かった、と言うなら、実行した人には最高の感想だ。

「で、通してくれるのか」

「ま、談笑する訳でもないしん、あとも支^{つか}えるから、ご退出を願おうかなん」

「じゃ、行こうか」

「ああ、じゃあねん」

でも、一季がトリを飾っているのだ。バカ正直に通してくれる筈もなかった。さよならの言葉がスイッチなのか、一季の言葉と同時にギロチンが落ちる。

ストンという小気味よい音。そして 鮮血が辺りに散っていく。

「は・・・はうろうう・・・」

「つとと、八坂さん！」

精神を保ってきた八坂さんだったが、最後の最後に糸が切れたらしい。もしかして、家でもこんな感じではないだろうか。ホラー映画を見た後は、こうして気絶してそうな気がしてしょうがない。

「おや、倒れちゃったかん」

怪物の定義って何だっけ。記憶によれば、確か死なない事、だったかな。幽霊が怪物と同等かは知らないが、幽霊も首が飛んだぐらいじゃ死なないだろう。

「・・・よつとん」

全身黒尽くめでわからなかったが、見せているのは顔だけではなかったらしい。首から上がないまま、器用に首が飛んだ場所まで歩く。

「あー・・・上手く首が繋がらないなん」

頭を拾い、また首の上に乗せる。別に口出しする気はないが、前後が逆だぞ、一季。

「はわあ・・・」

「お前もか」

ついにはファルもダウンしたらしい。事切れた様に、俺によりかかる。はつきり言って、二人背負うのはかなり難儀だ。

「残念。アズマちゃんは怖がらなかったかん」

「正直ビビったけど、一杞まで出てくるのはやり過ぎだろ」

「んー・・・やっぱりわかるか。ぶっちゃけ凄いな。それじゃ、本当にさよなら」

「ああ、じゃあな」

実行に回った人が、これ程嬉しい事はない。何せ、悲鳴も上げる事さえさせなかったのだから。本当に、クオリティーが高すぎる。

おかげで出てきた時に、凄い注目を浴びてしまった。

「・・・ん・・・な・・・」

「スマンね。道を開けてくれよ、男子生徒A。介抱しなきゃいけないんでな」

そう言うと、情報の処理が追いつかなかったのか、床に伏せてし

まった。ここでも失神するか。この犠牲者に誰か助けの手を差し延べないかな。俺は、ほら、もう二つ埋まっちゃったから。

50th Anniversary Special (後書き)

……え、別に控え目になって
ませんよ。ええ、一話にしようとしたのに、調子の上で書いたら三
話になっちゃった、なんて事で傷心してませんよ、ええ。

ああ、バトルがないって、シリアスがないって、なんてアイデア
(妄想) が生まれるんだろう。

頬を撫でる風が冷たい。

今どうなっているのか、どこにいるのか、ふわふわしていてそんな瑣末事は不思議に思わない。

浮遊感はあるけど、それに酔う事はなく、寧ろ心地好ささえ感じる。ただ、誰もいないというのはこんなにも悲しい。

こんなにも温かい場所なのに、こんなにも一人(独り)は寒い。だからこそなのか、こんな楽園の様な場所も一人(独り)なら一人(独り)占めをする事は淋しい。・・・いや、一人(独り)占めをする勇気がないだけかも知れない。わたしはいつも一人(独り)で、孤独に生きる勇気なんて、持っていない。

「……………ん……………」

「お……………起きたか。よかったよかった」

その声は、わたしを夢から掬い上げるには十分過ぎた。彼の顔が鮮明に映り、思わず揺らいでしまった程に。

彼女達は穏やかな寝息を立てている。無防備な事だし、この眠りを妨げるのはどこか憚れる。

場所は自分のクラスのベランダ、時刻は二時頃。何故そんな場所かというと、もう午前中にうちの教室は本日の役目を終えたからだ。つまり、休憩するにはもってこいで、休憩する人は少ない。静かに過ごすには最適だ。

それにしてもよく眠る。よっぽど衝撃的だったかな。かれこれ30分は寝ている。いい加減足が痺れてきた。普通　普通がどうか知らないが　立場的には逆なのではないだろうか。女子が男子に膝枕をするのは、実際理由はよくわからない。

まあ別に、男子が女子に膝枕をしても構わないだろう。普通の事を羨む訳でもないし、ファルや八坂さんにそうさせるのは抵抗がある。

「……………ん……………」

「お……………起きたか。よかったよかった」

先に起きたのは八坂さんだった。そんなもんか。ファルも昨日夜遅くまで起きてたから（どうせ深夜アニメでも見てたのだろう）寝不足だし、寝ていてもおかしくない。

「……………え……………」

いきなり八坂さんの目から涙が一粒、頬を伝った。最初は寝起きの所為かと思っただが、次から次へと涙は止まらない。

「え……………ど……………どうかした？」

そんなに何かしたのか。泣く原因がわからない為、何をすべきなのか、ただ慌てふためくだけしかできない。

「どうって、何かしましたか？」

疑問の声。どうやら気づいていないらしい。

「……………泣いてる」

「え……………うそ……………」

視線は上を向いたまま、涙を拭う。しかし、収まりを知らない涙は、徐々に顔全体を濡らしていく。

「すみません、なんだか・・・あれ?・・・あ・・・あ・・・」
「・・・大丈夫・・・泣いていいんだ。少しすつきりした方がいい」

額から頭にかけて、優しく、軽く、自身がいる事を示しながら撫でる。少しでも泣きやすい様に、遠くを向き、空いている手で耳を塞いだ。そんな事で聞こえなくなる訳はないが、気にしない素振りを見せる。

意思を汲み取ったのか、それとも自然に涙が流れたのか。顔を隠し、声を抑えながら泣いた。頬を伝う涙。泣いているのは、一人ではなく二人。

「はろう・・・みつともない所を見せてしまいましたね」

5分程泣いた八坂さんは、本当に申し訳なさそうに顔を見せてはくれない。

「いや、気にしてないよ」
「でも・・・」

そういつて、八坂さんは僅かに赤く腫れた顔を向ける。体勢は未だアズマが膝枕している状態で、それに気づいた彼女は謝りながら頭を上げる。

「えっと・・・やっぱり・・・わたしって・・・」

「・・・お化け屋敷で気絶した」

「はろう・・・」

また顔を隠し、本当に申し訳ない顔をしている。こちらは本当に気にしていない。もし気にしていたら、膝枕もしないし愚痴の一つもあるだろう。ないのだから、気にしていない事をわかって欲しい。

「・・・重く・・・なかつたですか？」

「?・・・何が？」

「・・・わたし」

「ああ、そうゆう事か。足は痺れたけど、二人だからね」

反対側で安眠している少女を指差し、気絶した人が一人ではない事を教える。まあ、ファルは恐怖だけじゃないが。

「それじゃ、落ち着いた所で行こうか」

「あの・・・聞かないんですか？」

「何を？」

「なんで・・・泣いたかを」

「聞かれないかな？」

「いえ!・・・その・・・」

「恥ずかしい事じゃないさ。泣くのに理由なんかいらぬ。それに、泣ける方がいいと思うよ」

「・・・?・・・」

「肝心な時に泣き方忘れるよりはよっぽどいい」

既に体験済みだし、簡単に泣くのもどうかと思うが泣けないよりはマシ。雲泥の差だ。

「・・・そう、ですね」

「それじゃ、行こうか」

「ファルさんはどうするんですか？」

「そうだな。仕方ない・・・か」

背負うか置いておくか迷ったが、一人でいる寂しさを彼女は知っている。喧騒やらで目が覚めるかも知れないが、それはそれで手間が省ける。目覚めた時に誰かいないとな。

「よっ・・・と・・・行こうか」

「はい」

廊下には賑わいと楽しさ、そして・・・

「ぎゃああああっ！！！！」

叫び声、か。一番最後がこの行事に一番似合わねえ。

「またのご来店をよろしくん」

「繁盛してんのな」

「おう、アズマちゃん」

また一人、死体（まだ死んでない）が運ばれていく。お化け屋敷より、処刑場って改名した方がいいんじゃないかな。明らかに十三階段作ってるよ。一季は首を切ったけど。

「どうなってんだ、それ？」

首が前後逆になっているのは、気になるを通り越して、どうにも恐ろしい。俺達が来てからずっとそうなのか、客が来る度に首を落としているのか。

「それは秘密だよん。知ったら面白くないからねん」

「・・・それもそうだな」

マジックのネタバレ程つまらないものはない。真実を知るという点ならいいが、面白いものを退屈なものに変化させるバカはいない。予想くらいで留めておくのが調度いい。

「もう一回入らないかん？」

「強烈過ぎだ。一回で十分脳裏に焼き付いてる」

「そうか。んじゃなん」

「ああ。緋色に会うからよろしく言っとくよ」

「ふーん・・・ま、激励するのはお節介かなん」

「何だよそれ」

意味のわからない言葉を受けて再び歩き始める。長蛇の列の横を過ぎ、向かう先は当初の予定地。お化け屋敷が開かれている教室から、三つか四つ程離れた場所。あの怖々しいのに比べたら比較の対象にもならないな。

「いらつしゃいませー！お求めの物がありましたら、こちらにおっしゃってください」

こちらは静かなものだ。うちはお金で食べ物、一季はスリルを、そしてここは物を。つまりは一般的な売買を目的とした、フリーマーケットみたいなものだ。

「んー・・・」

といっても、ここに来たのは物を買うのが目的ではない。そんな事を言ったら失礼だから、緋色を捜すついでにちょっと物色しよう。

「なになに、えーと・・・『カップと陶器のセット。お値段・・・』
た・・・高い」

今この場で数千円を持つてる人は少ないだろう。因みに財布の中には野口さんが四人程鎮座しているが、目の前の物は更に樋口さんが出てくる計算になる。こんな所に出てくる代物じゃねえよ、これ。

「これが欲しいんですか？」

「いや、ただ眺めてただけ。それに、うん。大丈夫だから」

本音を言っ飛ばせばこんな物は簡単に造れる。訂正、簡単ではないにしろ、想造すれば好きな時に造れる。下手に場所を取らないし、必要以上に買う意味もない。

それでも買うんだったら本当に欲しい物だけ。それが本とかDVDとか、そうゆう嗜好品だけ。経済的にも厳しいからそんなには買えないのも理由にある。

「なにかお探し物がありますか？」

困っている様には見えないだろうが　まあ実際値段で困ってるけど　これも営業とかいうやつかな。売らせないと成り立たないからな。

「あ・・・探してる物はないけど、捜してる人はいるかな。ここに来たのはそのついで」

「誰ですか？」

「炬 緋色」

その名前を言ったのを若干後悔した。口にした瞬間、嬉々として

目が輝き始めたから。この場合にはなんか嫌な感じしかなかった。

「もしかして、東君ですか？」

「もしかしてでもなく、東・・・です」

「やっぱり」

きゃー、とか言っつて頬を両手で挟みぶんぶん首を振るう。スイツチでも入れただろうか。ってかこの人誰。

「失礼、私は佐久山さくやま 小織さおり。炬ちゃんとは友達なんだ」

(自称)友達と言っているこの佐久山という人。アズマは知らないが嗜好きと評されていて、以前は緋色も翻弄された、というよりは自爆した。

「ぶんぶん、あなたが炬ちゃんと付き合ってる噂の東君か。高嶺の花を摘むなんて、にくいなー」

「何を言ってるかさっぱりだよ、佐久山さん」

「いやいや『さん』付けなんて物々しい。言うなら佐久山か小織にしてよ」

「それじゃ小織さん」

「流石に噂通り、一筋縄ではいかないかな」

「誰力助ケテー」

なんだろう、ついていけないな、この人。馬が合わないとかそんな事じゃなくて、根本的に噛み合わない。さっさと事を済ませよう。

「で、緋色はどー？」

「うん・・・知らない」

「・・・え」

「もう少し理解力があると思ったんだけど」

「理解してるよ。聞き返した訳じゃない」

「そう。元々接客だって炬ちゃん役割だったのに、準備の時はいたんだけど気づいたらいなくなつてて、それ以前に様子がおかしかったし」

昼休みまではいた。確かに、その後何か様子がおかしかった。もしかすると何かあったのかも知れない。

「八坂さん、ちょっと捜してくる。だから、ファルを・・・重かつたらベンチにでもおいてていいから」

乙女に重いかいっいたら死ぬが、ファルはまだ気にする年齢ではない。肉体の面ではなく精神の面で。ともかく先決なのは緋色を捜す事だ。

「噂以上に友達思いかな」

「違うと思いますよ。炬さんだからあんなに必死になれるんですよ」

「うーん・・・本当に花を摘むのが早い」

話の中心人物が去り、どこか閑散としている。やる事ができたのだ、足を引っ張るのは気が引ける。今は待つている事にしよう。

人で混雑する廊下を走り抜ける。心当たりはないし情報も皆無。体調が悪そうだった、という最後の見た感じを元に今は保健室に向かっている。

「すみませーん」

「こら！ちゃんとノックしなさい」

「すみません」

同じ言葉でも意味が違うな、と考えながらドアをノックして入る。日本語って難しい。

「はい、なんでしょう」

柔らかい物腰で話し掛ける先生。名前は覚えてないから 聞かされたと思うがどちらにしろ覚えてない。しかし、医者とか人を治す立場にいる人はロクな奴がいない・・・気がする。

自分の周りにはあんな奴 主にトウマ しかいないから、イメージがあれに固定されたのかも知れない。ここの保健室の先生とはあまり接点もないし、先入観はいけないかな。

「友達がここに来てませんか？」

「こんな日にこんな場所に訪れる生徒がいると思う？」

「いないんですか？」

「今日はいないわ。なんでここだと思ったの？」

「昼休みにいつもと様子が違かったから」

「そう、だとしても来てないわ。他にどこか当てがある場所を捜した方が賢明よ」

当てなどないからここに来た訳だが、情報も何もかもゼロだ。そんな事に苛立ちを覚える事はないが、焦りが募る。果たしてどこに行ったかな。

今更自分の教室に戻る意味もない。手当たり次第に、行き当たりばったりを狙うしかなさそうだ。本当に当てなどないし。一季にでも聞くかな。

「東広、何やってるの?」

肩におかれた手は柔らかく、その時点で不思議に思っていればよかった。そうしていれば振り向いた時に必要以上に驚きもしなかったし、羞恥を誘う声も出さなかっただろう。

「ぎゃわっ!!!!」

「うおっ、びっくりしたー」

「こっちがびっくりしたわ!誰だお前」

「ああ、これじゃ流石に判らないよね」

誰だつてびっくりするだろう。いきなりクマのぬいぐるみが肉薄しているのだから。

「……と……届かない」

「はいはい」

頭が異様にデカイ所為か、綿たつぶりの太い腕がチャックに届いていない。脱力の思いだが、手伝わないと先に進みそうにない。

「ぶはあ！・・・暑かった」

「・・・徴か」

「それで、なんでこんな所にいるの？」

それは自分も問い返したかったが、徴の手に持っている物を見て止めた。プレートには『着ぐるみ喫茶』と書かれている。つまりは宣伝役だろう。

「そんな簡単に夢を壊していいのか？」

「もうみんな大人になりかけてるから」

「で、用がないなら行くぞ。こっちは暇がないからな」

「暇があつたら来てよ」

目の前に出されるプレート。宣伝役なのだ、客を引っ張って来なきゃ話にならない。まあ、暇ができたら行ってみよう。

「・・・そうだな、目撃情報とかないか？」

「誰の？」

「緋色の」

「炬 緋色さんか・・・」

「じゃあな」

「あ、待った！うん、いた。確かいた」

「どこだ？」

「階段を上に登ってた・・・かな」

「・・・暇ができたら寄ってやるよ」

「ん？」
「着ぐるみ喫茶」

返事が来る前に階段を駆け登る。屈託なしの明るい声ももう届かない。頭にあるのは一縷の当ての確認。もし違っていたら、また聞き込みでもしよう。

横の移動と違い、縦に、しかも上に動くとなると、凄く疲労がのしかかる。それに加えて人海を押し退けるから、しかし上に行くにつれて人は少なくなる。

「いるかな、ホントに」

だんだんと怪しくなってきた。騙された訳ではない。上に向かっていた、と言っただけ。屋上にいるとは言っていない。でも、屋上にいると思うんだな。

「
!
! ! ! !」

いや・・・ホントにいたか。そんなにはつきりとは聞き取れないが、声としては緋色っぽい。何をそんなに騒いでいるのやら。

「
緋色？」

果たして緋色はいた。かけられた声に物凄い変な顔と格好をして。

s i d e | H i r o

昼休みの後、教室に戻ってみると準備の真っ最中だった。飾り付けにテーブル出し、各自が持ってきた物。各々が暇などありはしない、と言っかの様に忙しなかった。

私もそれに触発され、準備に取り掛かるが今ひとつ意識は別の方にある。クラスの人と話していても、振り払う様に手を動かしても、背後霊の如くその意識は付き纏う。

胸が痛い

昼ご飯時に感じた痛みが自然と胸に手を当てさせる。服にシワがつくぐらい握りながら痛みを漂わせる。

脳裏に映る意識。それが痛みの原因で、また、その情景すらも浮かんでしまう。

アズマの隣にいる彼女 名前を八坂 唯一と言った。彼にしてみれば単なるクラスメートだが、彼女が一体何を考えているのか、何を感じているのかは解らない。思い過ごしであればいいし、それに越したことはない。

自分でも思う。アズマは私を親友だと、幼なじみだと思っているが、特別女だとは思っていない。幼い頃から近くにいるからだが、親しくない人には遠慮しがちである。それは、相手を女だと意識しているから。

別にアズマが誰といっても面白くないし、楽しくない。元々、楽しい、などという感情は持ち合わせていない。こうゆうイベントに積極的なのも、取り戻した時に忘れない様にする為である。

アズマと一緒にいるのも、同じ理由とは言いが似た様なものである。楽しくはないが一緒にいて悪くない。でも、他の人というなら悪くなってしまう。

「……………つまらない」

テーブルを拭いていた手を止め、一人（独り）教室から出ていく。誰も気づきはしない。準備に忙しく、周りには構っていられない。数人が轟めき合う教室で一人だけ消えても誰も気づく筈もない。

廊下は更に多くの生徒で溢れ返っている。その九割九分九厘は大なり小なりにしろ、歓楽に満ちている。そして残りの一厘は私。格好だけなら楽しさは装える。が、格好だけなら苦痛でしかない。

絵の中に一部分だけが不釣り合いな色がついているかの様に、周りと見比べると違和感があるみたいな感じだ。

更に周りとは色が合わなくなる自分。どこに行こうとも思っていないが、何となく、ここにいたい気分ではない。一人（独り）になれる場所、意識を浮かべそうにない場所に行けたらいい。

いや、他人の笑う顔を見たくないだけだ。自分はこんなにも楽しくない。

「・・・寒い」

屋上に人はいなく自分でも望んだ場所だった。寒々しいが苦痛に勝る程でもない。風の当たらない場所に行き、そのまま横になった。

ほんの一時間前までは苦痛を感じなかった場所。その数分後にはそれが見事に崩れた場所。

再び脳裏に浮かび上がる。どうせ今も一緒にいるのだろう、という錯覚。思っているだけで苦痛になる。

「もう……なんなのよー！」

以前は江湮、次はファル、今は八坂 唯一。アズマに自覚はない。周りが集まる、というよりはアズマの優しさに惹かれているのだろう。かくいう自分もそれに惹かれたのだ。

「アズマの……馬鹿」

彼に対しての暴言。勿論、八つ当たり以外の何ものでもない。他人に優しすぎる彼、自然体でいる彼、何もかも背負う彼。いつも危なげに見えて仕方ない。

余裕なんてないいつも張り詰めている。自分を何者かわからないうでいて、江湮を助ける為に腸は煮え繰り返っているだろう。何故そんな状態で心が壊れないのか。やはり、突き動かす存在があるからだろう。

だから今、アズマは楽しんでいればいい。

その考えに辿り着くと、急に、再び腹が立ってきた。今頃楽しんでいるに違いない。まったく、嫉妬なのはとっくに気づいているし、

こっちだつて腸が煮え繰り返っているのだ。

「……あー……まったくー!!!!」

誰もいないのをいい事に声を荒げる。駄々をこねる子供の様に手足をばたつかせてコンクリートの地面を叩く。他人には見せられない姿。もし誰かが見ていたら、穴に入る前に屋上から飛び去るだろう。

そんな事は頭にも浮かべないで、叩いても痛いだけの地面にただただ八つ当たりするだけ。

「バカー! どうして気づかないのよー!!!!」

しかし、本当に誰もいなかったらよかった。もう少し自分を心配してくれる人がいると考えた方が、この醜態を曝す事はなかっただろう。

「
緋色？」

唐突にやってきた今の状況を理解するのに頭は追いつけていない。情報を処理する部分がショートした様だ。少しの時間をかければ治

るが、その間にずっと制止したままではどうかと思う。

「あの・・・な、緋色」

「・・・な・・・」

「言いづらんだけど・・・パンツ見えてる」

ハツとして今の体勢を再認する。あれだけ手足をばたつかせていたのだ。スカートがめくれている、これだと痴態を見せつけている様には見えない。そんな趣味など微塵もない。本人も恥ずかしく、見ている方も恥ずかしい。

「・・・で・・・何よ・・・何しに来たの？」

言葉だけだと平静を装っているが、顔は羞恥で耳まで真っ赤である。その火照りを気づいてない訳もなく、しかしどうしようもできない。とりあえずスカートを戻し、姿勢を正した。

「何って・・・捜しに来ただけど」

「ごもつともな返答である。でも、今の緋色にはどんな言葉だろうと不機嫌極まりない。」

「あらそう。私なんかを捜すより、八坂 唯一さんと一緒にいた方がいいんじゃないかしら」

「うわ、なんか意地悪な台詞。いやな奴とか思われそう、じゃなく本当にそう受け取られる様に言っているのだ。この状態で一緒に居て欲しくない。こんな姿を見て欲しくない。こんな嫌な自分を」

「バカだな。大事な時に一緒にいなくて何が親友なんだよ」

だというのに彼は横に座り、一緒にいるという。

「……どうしてよ……なんでいるのよ」

「今が大事な時の様に感じるから」

「なんで……そう思えるの」

「なんだかさ、見てて危なっかしくて。緋色が手綱役をやるなら、俺も、緋色が危ない時は引っ張ってやらないと」

そんな事も言った。手綱役がきちんとしないと意味がない。アズマの言いたい事は、今はその役を交換してやると、今だけは俺が支えてやると言っている。

「……どうしてよ」

「……仕方ねえな。それじゃ、理由をつける。緋色の気分が良くなさそうだから、気分がよくなるまで一緒にいるよ」

「……どう……して……うつ……うあ……」

「なっ!? やっぱりどっか具合悪いのか!??」

やっぱり涙が堪えきれなかった。だから居て欲しくないと言ったのだ。こんな時に優しくされたら アズマの優しさに触れたら泣いてしまうから。

「保健室行くか!??」

「うるさい、バカア!……だから……いやだったのよ……」

人前で泣くなんてみつともない。でも泣ける勇気があってもいい。そう思うから、堰を切った様に溢れてくる。

「どうして……一緒に……いるのよ」

「親友だからな」

「・・・それだけ・・・かしら・・・」

「・・・多分」

「本当・・・に？」

「信用ねえのな」

彼の胸に顔を埋め最低限は見せない。せめて今だけは彼の優しさに甘え胸を借りよう。

「はあ、すつきりしたわ」

「そりゃよかつたな」

泣けばすつきりする、というのはあなたがち間違いではなかった。まあ、理由としては泣いただけでもない。泣きながら愚痴ってたのもあるが、ともかく気が晴れたのは確かだ。

「その・・・私はもう大丈夫・・・よ」

「・・・だから？」

「八坂 唯一さんと一緒にいなくていいの？」

「ふー・・・緋色がどう思ってるかは知らないが、さっきから言ってる様に、ただのクラスメートだよ」

「・・・あらそう」

今はまだそうね、と暴言を吐くのは止めにしよう。それに、嫌な事は口にするとは現実になるといふ。不吉な発言は控えた方が賢明。

「さて、今更だけど帰るわ。みんなにも、アズマにも迷惑かけちゃったし」

「そうか、なら調度いいや」

「・・・何が？」

「今更なんだろ？だったら、いつ行ってもいいよな」

「何が言いたいの？」

「どっか寄らないか？」

何を言っているのかこの彼は。罪の意識を感じているなら一秒でも早く行った方がいい。だというのに・・・

「・・・いいわ。どこに連れてってくれるのかしら？」

せつかくの誘いを受けない手はない。ファルもない訳だから本当にこれは二人つきり。悪いけど邪魔者がいない。

「そうだな。ちょっと寄ってくれって言われた場所があつて・・・」

そういつてアズマは私の手を、何の抵抗もなく掴む。こつゆう事を誰彼構わずやったりしていないだろうか。されて悪い気はしないが、それを見るのは悪い気がする。だから私以外には止めて欲しい

と願ってしまう。

「着ぐるみ喫茶？」

「ああ、暇ができたら行くって言ったから」

「誰と？」

「徴……っていう自称親友」

成る程あの人か。覚えているのは特徴がない事、寧ろそれが記憶に残る要因な人。少なくとも顔を覚えるのに苦労しそうだ。

「……なんかな……」

「そうね、言いたい事はわかるわ」

連れて来られた教室は一言でならばわわわしてる。浮ついているより、長閑のどかとか穏やかとか、それらを表現する暖色が多い。

『いらっしやいませ、二名様ですか？』

いや……撤回。八頭身の栗鼠とか犬が歩いてたら不気味なだけだった。周りの背景とも合っていない。

『こちらへどうぞ。メニューが決まりましたらお申しつけください』

フリップに書かれた文字は丸みを帯びていて、中にいるのは女子だと思われる。それにしても蒸れて暑そうだ。同情はしないけど。

「何食べる？奢るから何頼んでもいいぞ」

「逆じゃないかしら普通。私が迷惑かけたんだし」

「そうでもないさ。理由はどうあれ俺は緋色を泣かせたからな。なんかお詫びという事で」

「・・・それじゃこうしましょ。アズマが私に奢って私がアズマに奢る」

「それって意味なくないか？」

「じゃないといつまで経っても決まらないでしょ。はい、もう口出ししない」

「・・・わかったよ」

彼は渋々了解してメニューを見入る。それに満足して私もメニューを見るが、正直お腹は空いていない。食べるにしても無理に食べる気分ではない。

「ん・・・徴か？」

アズマの声が聞こえる。前を向くとクマが彼の肩に手を置いている。

「客寄せ係は終わったのか？」

『まあね』

素早く、短い文を、会話に支障が出ない様に書いている。その所為か字が少し汚い。このルールに従っているから仕方ないのか。

「なんだよ、さっきしゃべっ・・・」

分厚い手にアズマの口は塞がれ、人差し指を立てて沈黙を表している。それだけの事なのに全部が理解できる。

「まったく……んじゃ、オススメとかあるか？」

『あります』と見せてから、また書き始める。被り物があるから視線がわからないが、なんだかちらちらこちらを見られている気がする。

『カップルで食べるクレープなどはいかがでしょう』
「喋って伝える」

からかわれて怒るのはわかるが自分には怒っていない。怒っている理由は私。アズマの認識だと私には好きな人がいて、いるのにそんな言い方は緋色に悪い、と思って怒っている。なんだか余計なお世話である。

『では普通にクレープは？』

「からかってないよな？」

『今度は真面目です』

「緋色もそれでいいか？」

「軽くしか食べられないからそれでいいわ」

「じゃあそれで」

お辞儀をして彼は引っ込んでいく。あとは待つだけだが、この時間には待つ時間というのは如何せん手持ち無沙汰である。率直に言えば暇だ。

「……フアルはよかったの？」

「お化け屋敷で気絶して、昨日も深夜まで起きてたから多分今も寝てんじゃないか」

「一季のお化け屋敷に行ったの？」

「すっげー怖かった」

言葉は軽いが顔は引き攣っている。よっぽど怖かったらしい。どんなものだから気になるが止めておこう。聞けば、じゃあ行くか、みたいな展開になる。

「八坂さんも気絶しちゃってさ」

「よし、行くわ！」

これさえ聞かなかつたら行かない気分だったが、それを聞いたら行くしかない。妙に敵対心があるのは黙認しよう。女の意地というやつは自分でも深く考えてはいけない。

「……ややこしい事になった」

彼の咳きは聞こえない。あわよくば、と若干歪な考えがあるのも黙認。結局は誰だってそんなものだろう。男も女もそんなものに関係はないみたいだ。とりあえずクレープを食べて万全の状態にしよう。

どうしてかな・・・なんでこうなるのかな。

何の因果かまたこの十三階段の列に並ぶ羽目になった。ああ、なんかやだな。内容を知っているだけに、先を知っているだけに不気味さが凄く漂う。

理由を追求するなら自分の発言を省みた方がいい。口は災いの元、とも言つしどこでどう繋がるかわからない。もう少し先を予想しないと自分の為にはならない。

「いやー・・・逃げたい」

今更ながらに聞こえる悲鳴。嘘偽りない、演技でもわざとでもない悲鳴。それに対して逃げたい心境の自分。そしてその隣で悲鳴が上がる度に反応する緋色。

「なんでこうなる」

「な・・・なに？」

「なんでもない」

そんなに怖いならやめた方がいい。つてかそっちの方が賢明だろう。無理するな、すると心臓麻痺になるぞ。死亡事故が起きたら洒落にならない。

そうこうしている間に入口の前に立つ（二回目）。

「・・・またあんたか」

「何も言うな」

「しかも今度は八坂さんじゃない人と・・・」
「逝ってきます！」

テキストに死亡事故でも願っててくれ。多分そんなに簡単には死
なないと思うが。

「ひとりずつおねがいしますねー」

とか言われたけど中に入るとすぐに緋色が来て俺の手を掴む。

「・・・暗いわ・・・」

うわー、なんだか懐かしい。またここに来てしまった感があるけど、そういえば二回目ってありなのか。ルール違反とか引つ掛かり
そうだ。

「・・・んー・・・まあいいや」

気にしてもしょうがないしそうならそうだったでいいや。さ
て、道は覚えてるからこっちだったかな。

今度はぶつかってくる人もいないし、緋色の手はちゃんと握って
いる。ちよつと反則くさいがこれって緋色的にはどうなのだろうか。

「・・・なあ緋色・・・」

目が暗闇に慣れた頃に緋色に振り向く。気分の確認とその後にと
うとでもない会話をして、恐怖を紛らわそうとした。その筈なんだ
けど・・・

「……誰ですか？」

手を握っているのは見知らぬ女性。顔面に紅い装飾を施したやっぱりな仕掛人である。

「どうも、二回目ですよね？」

一回目の様な無理矢理つくった声ではない。普通に、友達と話す様な声色である。それには少しだけ安心できる。

「……覚えてるん……ですか」

そんな会話をしている場合ではない。そうだ、緋色はどこに行った？どっか連れ去られたか？

「お連れの方はすぐに来るので。それじゃ」

歪な笑顔を見せつけ暗闇の奥へと消えていく。あれ、なんだか急に心細い。一人（独り）ってこんな寂しいものだったっけ。

「きゃあああああああああつ！！！！」

あーなんだかほつとした。緋色もやられたのか。暗がりからこつちに向かつてくる姿が、半分泣きそうな顔にはドンマイとしか言えない。

「う……腕を……腕ちようだいつて……腕が……」

「落ちて着け緋色。俺も怖いんだ」

あまりにも怖かったのか、俺に抱き着いて呼吸を乱している。気持ちはわかるけど序盤からこれじゃあ先が思いやられる。

それにしてもやっぱり後悔してしまう。今から引き返したいけど、それは流石に許しちゃくれないかな。

「どつする緋色？全部飛ばして行くか、一つずつ回るか」

「……いや、どうしよう……かしら」

俺はというとソツコーでここから出たい。一回目であんな思いしたのに二回目となるともういやだ。悪夢の種がもう一つ増えそうだ。

「……ともかく……次行きましょ」

「そうかい」

言葉は勇ましいのだが、その……ちょっと歩きづらいよ緋色さん。怖いのはわかったからさ、一人よりは二人ってのもわかるからさ、これじゃ上手く対処できないから。

「・・・出た」

これも二度目である。段ボール製の井戸だな。緋色は凄い怪訝そうな目で見ているが、ネタバレは控えよう。

「・・・なにあれ・・・？」

「コメントは控えておく」

「なにそれ！？いやよ、絶対いやよ！！」

「んじゃ、スルーしようぜ」

律儀なお化けには悪いが利他的な性格ではないんだ。この場合はやはり自分の命が惜しい。

横目で視線を、注視していると、案の定真つ赤な手が暗闇から這い出る。俺は流石に驚かなかったが、緋色の体が驚きで跳ねる。そして手が持っていたのは『ひどい』と書かれたホワイトボードだった。

「だって・・・さ・・・」

理由を話すのに口ごもっていると手は引っ込み、数秒後にまた出てきた。

『まあいいや、それより二回目の東君、どうする？』

「・・・どうする・・・って？」

『一気に一季の所に行くか、つまらない道に行くか』

確かにそうだ。このあとはあまり面白い覚えはない。実際言っちゃ悪いがどうでもいい。面倒だとも思える。それはこのお化け(?)

も実感しているのか。だから、あとは緋色に任せよう。

「俺は正直怖い。でも、このあとは一季まではつまんないからな。確かにそうなんだが、全部緋色に任せてるし」

『緋色さんはどうする?』

「……い……行くわよ、つまらない道を……」

緋色としてもさっさとおさらばしたい。でも、好いている人と一緒にいる状況を手放すのはできそうにない。少しでも長く、少しでも多くの時間を一緒にいたい。そんな一途な願望を、健気な思いを抱いている。

『そうですか、因みにぼくの名前は軌彦きひこ 須哉まじや、一季とはマブダチで陸上友達かな、それとまた招福に行く予定だから
では』

顔を見せてくれない自己紹介は終了。これまでに二回会った事はあるが、名前を聞いたのはこれが初。その二回も間が空いてしまったから、顔がぼんやりとしか思いだせない。

「無茶してないよな?」

「そういつて無茶してます、とか言うと思う?」

「思う……かな。心配してくれる人の事を考えるよ」

「そっくりそのままアズマに返すわ」

「………違うない」

結局はどちらかがまともでなければならぬ。俺は囚われてばかりだから心配をかけまくりだけど、心配をする立場になれば気持ちかわかる。ついつい言葉をかけるのはその所為だろう。

「・・・その・・・さつきから・・・歩きづらい・・・」
「そこはつつこまない」
「なんだよそれ」

さつきからこの体勢は厳しい。歩きづらいし何より気を遣う。それにしても緋色ってこんなに体柔らかかったかな。なんだか女の子みたいな・・・

「・・・うわった！」

「な、何！？何かいたの!？」

「いや・・・なんでもない」

不思議がる緋色はおいといて、先程より少しだけ間を空けて、意識が少し削がれる程度に離れる。

そうだ、そうだった。緋色って女の子だったな。あまりにも近くにいて気づかなかったけどそうだったな。うわ、思い返すと失礼な記憶しかない。風呂覗いたしってあれは事故だけど、抱き着いたり、抱き着かれたり（×2）、抱き着いた拳句に号泣したり、手を掴んだり、パンツ見たり。緋色に対して失礼な事ばかりだ。

「・・・どうかしたの？」

「なんでもない、ちよつと心の整理を」

脅かし役による不意の出現とたまに響く大音量。それらに身を震わせる緋色と、何の反応も示さないアズマ。素直に喜ぶべきか落ち込むべきか。精神的には向こうの方がダメージが多かった。

「・・・つまらない？」

「そうじゃない。ただ・・・改めて認識したというか・・・」

「何を？」

「・・・緋色って女の子なんだな」

「今更？」

「・・・ああ」

「・・・ふふ」

「なんだよ」

「なんでもないわ。そうね、今日はそれだけでも収穫かしらね」

「なんだか訳わかんない。収穫って何、何なの？俺収穫されちゃうの？ハーベスト？」

「　　なんだかんだ言っただけで気に入ったのかん、アズマちゃん」

「真にツッコミづらいけど、ずっと、待ってる時はその格好なのかな。うつ伏せのままいるって結構きついと思うんだけど。」

「別に気に入ってない。今回は緋色の付き添いだよ」

「ほーん・・・緋色、あわよくばなんて考えてないよなん？」

「な、ないわよ！」

「まあいいやん。どうやら収穫もあつたみたいだしん」

「緋色も言っただけどなんだよそれ」

「・・・微量ってどこかなん」

「そんなものよ」

「さっきからなんなんだか。二人しておかしいのは・・・いつもの事か。訳のわからない話が多いし。」

「二人はどうしたのかなん、アズマちゃん」

「緋色の教室で寝かしてる。誰かさんのがよっぼど衝撃的だったんだろ」

「それは光栄の極みだねん。もつと頑張ろうかなん」

「刺激が強すぎだつて言つてんだ」

「……もしかしてそのギロチン本物かしら？」

「豆腐ぐらいしか押し切れないナマクラだよん」

「流石にそうよね」

その割にはあの時やけに小気味よい音が聞こえたよつな。あれも音の演出だとしたら凄いな、音響スタッフ頑張ってる。

「それじゃ出口はあちらだよん」

来たか。多分ここら辺がギロチンの落ちる合言葉なのだろう。何も知らない緋色には悪いが、俺はもう緊張している。このあとの事については覚悟していてもシヨッキンゲなものだ。

「じゃあなん、二人とも」

前触れもなく落ちる刃に切り落とされる頭。読んで字の如くの動作を実行する。ころころと転がる頭は二回目だとしても慣れない。暗闇だから本物らしく見えるのか、神経が摩耗しているから本物らしく見えるのか。気の所為では片付けられそうにない。

「あ……わわわ……一季の……一季の首が……」
「しつかりしろーっ！気を確かに持て！」

予想するまでもなく緋色も大多数の中に紛れてしまった。向こうが殺されたのに生きてて、こっちは生きてるのに死んでるってのは訳がわからなくなる。

「ああ……一季が一季が」

「おいーっ！！！刺激強すぎだよ一季！緋色が壊れちゃったじゃん」

焦点が合っておらず、口にする言葉は呂律が回っていない。同じ事を連呼しては泡を吹いている。

これは真面目にやばい。急いでここを出て横にしないと。つてかやっぱりこのお化け屋敷危険だよ。絶対最高死人は出なくても最低廃人が出そうだ。

「じゃあな、一季」

「今度こそさいならん」

別れ言葉に反応するギロチン。さよなら、でもバイバイ、でもじやあな、でもそつゆう言葉に該当するなら反応するのか。とりあえず俺も明るい場所に出たい。

「……はい担架お願いしまーす」

「いやいやいらんいらんいらん」

背中に担がれた緋色を見てそんな事を言ったみたいだが、こうして無事な奴がいるのだからいららない。

「しかしさ、どうしてあんなに怖いのかな」

「お化け屋敷だからだよ」

男子生徒Aはつまらなそうな顔をしていて、決して顔を合わせてはくれない。無愛想な奴だ、と思わざるを得ない。

「一季の最後のギロチンとかヤバすぎる」

「……は？」

「……何？」

「いや、ないぞ」

「え……？」

「だから、ギロチンなんて物置いてないぞ」

じゃああれは何、と疑問を覚える前に意識が遠くなる。何か聞いてはいけない事を聞いたかの様なちぐはぐさ。すんでの所で仲間入りは防げたが、意識は遠いままに帰って行った。そのあとに一季の笑い声が聞こえたとか聞こえなかったとか。

暫く情緒不安定で心神が喪失していたが、緋色の教室に戻る頃にはどうにか落ち着いていた。背中に担がれている緋色の譚言うわごともなくなり、しかしまだ意識は帰って来ない。

「た……ただいま」

「アズ」

「おー……目が覚めたか」

「……随分と糞れたてるねー。それに炬ちゃんも気を失ってるし」

人数は変わらないが状況は変わっている。三人で談笑でもしていたのだろうか。椅子が三人で見合わせる様に置いてある。

「……お化け屋敷でも行ったんですか？」

「んー……まあ」

「二回も行くなんて物好きー」

「緋色に連れてかれたんだよ。もう勘弁だ、行きたくない」

実際30分程しか経ってないのに二時間以上経ってる気がする。お化け屋敷の中だと自分でも気づかないうちに走馬灯を見てるかも知れない。そうなると糞れたんじゃないやなくて老けたんじゃないかな。

「炬さんは大丈夫ですか？」

「大丈夫だろ、多分」

「炬ちゃんの胸、大きい？」

「……いきなりなんだよ」

「男としてどうなの？意識しちゃう？」

「今しないようにしてるのにあんたって人は」

「アズ、胸、大きい、好き？」

「えっ、そうなんですか東広君！？」

「違うっ！」

「なるほど、東君はボインがお好きと。男の子だね」

「何メモってんだよ！」

周りを取り巻く場に乗じてとんでもない会話が始まった。この手の話題は拭い去るのにどれ程弁明しても、話のネタとして担がれてしまう。担がれる方は冗談どころではない。

「みんな笑ってー！」

「は？」

いつの間にか一步退いた場所に　こちら四人が全部視界に入る場所に沙織さんがいる。そしてその手には芸能人にとって大変恐ろしい物がある。

「はいチーズ！」

所謂カメラだった。

「これで次の一面はもらったー。タイトルは『モテモテ男子の文化祭』かな」

「何やってんだよっ！！！！」

「言っただけでなかった？佐久山　沙織ことわたしは新聞部に所属しているのだー！」

「かーえーしーやーがーれーっ！！！！」

今の一瞬を捉えたカメラを掴み取るうとするが、難無く抗いの手を躲す。カメラの存在は一生徒としても十分に恐ろしい。新聞部だというなら尚更だ。どんな尾鰭が着くか、尾鰭がつきすぎて翼になりかねない。

「せつかくのスクープを逃すバカがいますかー！」
「自分の羞恥を散蒔くバカがどこにいるんだよ！」

開始される問答無用の鬼ごっこ。追いかけられ立場ばかりであったが、今回ばかりは追いかける立場に変わる。

「それはそうとなんで炬ちちゃんも連れて来たの？」
「あんたの所為でおいでくる暇がなかったただけだ！」

言い掛かりも甚だしいが緋色を寝かせる暇がなかったのも確かだ。おかげで注目集まりまくりだよ。女子を背負った男子が女子を追っかけてるんだ。注目集めない方がおかしい。

文化祭中の小さな騒動。誰が興味を示す訳もなく、誰が見ている訳でもない。小さな小さな、誰も気づく事はないパレード。楽しむだけならどんな事でも楽しめる。

時間は黙っていても勝手に流れていく。無情に、けれど常に、人の事情を考えてはくれない。では時間とは何か。日が昇り日が落ちるのを一日とするなら、それさえ基準にしていれば日中は時間など感じない。

時間を感じるのには時計という物があるから。時計は時間を認識させ、日ではなくそれを基準に日中は動く。日常生活にはかかせない時計。例えば一時間という縛りがあるとして、時計を見ながら数える一時間と見ない一時間なら、後者の方がよっぽど早く感じる。

時計を見なければ時は早く流れるが、十二分に楽しむ時間が与えられる。時計を見れば時は遅く流れ楽しむものも楽しみめられない。時間に縛られるから。今回の文化祭は正に前者を顕した。

皆は口々に言う。「もうこんな時間か」と。終わるのは切ないが楽しい時間を過ごせた事に異論はない。自分もそうだ。楽しんだといえは楽しんだ。時間も忘れ、久々に時に縛られない快感を思い出した。残念といえは写真を逃した事だ。

いや、取り返したには取り返したが今時コピーなんて操作は簡単。一枚の写真を増やす事に時間なんてかからない。

「どうしたんですか、東広くん？」

「写真がなー……あーあ……」

「あの写真ですか、わたしももらいました」

カバンから取り出された写真は見事である。俺はマヌケな顔をしている事と緋色が寝ている事を除けば歓楽という一瞬を捉えたものだ。

「せっかくだから楽しんだらどうですか？」

「……うーん……」

ノりに任せ、音程が所々飛んだ声が響く。お世辞にも上手いとは言えない。場所はとあるカラオケ店。急な団体の予約を快く受け入れてくれた。文化祭の余韻が冷めぬまま訪れたここ。留まる所を知らない火照りはいつ冷めるのやら。

「次、歌う」

マイクを搔つ攫い白熱の舞台へと踊り出る。入力された曲はやはり言うまでもない。ファルが歌うのはアニソンしかない。大炎上だ、こいつら半分意識ないんじゃないか。

「……はー……あー……」

「どこに行くんですか？」

「ちよつと外まで」

「わたしも行きます」

何故か温度差ができてしまう。しかし無理に合わせなくてもいいだろう。同じ温度になる時は勝手になるものだ。気にしなくてもいい

い。

「はー寒いすねーっ!!!」

「元気だな」

「せっかくですから、東君は？」

「俺は・・・病み上がりだから」

「その割には今日走ってましたね」

「あれは・・・な・・・」

元気一杯な姿を曝してしまつたからこの言い訳はもう無理。ついエキサイトしてしまつた、と言えはわかつてもらえなくもないと思う。それ以前にそこまで気にする内容でもない。

「炬さんと日高君も楽しんでますかね」

「・・・多分ね」

緋色はどうだかわかるが多分一季も楽しんでるだろう。緋色はファミレスで食事とお話、一季は少人数にグループ分けしてゲーセンで行脚しているらしい。

特に緋色は話の中心人物だ。100%俺の所為になるが、男子の背中に担がれたままだったから、見様によつては駆け落ちに見える。そこらへんも計算で噂になる様に仕向けられた気がする、沙織さんに。

かという俺も噂の中心人物である。はっきり言って乗り気ではなかった打ち上げに参加させられた。だからといって参加せざるを得ない。ファルを一人にはできないからだ。

感情に惹かれる有象無象のモノたち。最悪の場合それだけではないかも知れない。どちらにしる家で待つても不安に後押しされるだろう。

「・・・ファルさんは楽しそうですね」

それはそうだ。ファルは感情を、意思を、存在を、アイデンティティーさえも抑圧された場にいたのだ。少女の自我を司る前頭葉は最低限 ない。それがどうゆう事かはわからない。だからこそ全てが新鮮なのだ。慈しみなどではない。ファルには楽しんでもらいたい。

「東広君も楽しんでますか？」

「楽しんでるよ」

「本当ですか？」

「・・・なんでかな」

「少人数の方が楽しめますか？」

言われてみればそうかも知れない。まず目立つ事もしないから周りの交流少ない。基本腹のうちの語れる仲間じゃないと厳しい。勿論ファインダーとしての である。だから自然と少人数になり、自然と少人数の方が楽しめる様になる。

「ならどこか行って楽しみませんか？」

「どこって・・・どこに？」

「それは後で決めます」

「・・・誰と？」

「わたしとです」

「・・・は？」

まともな神経の人ならそれをデートと呼ぶ。つまりはデートのお誘い、それを意識してしまう。知り合ったばかりの彼女だからこそそう意識してしまう。これが緋色なら遊びに誘われた、との意味合

いになるが彼女だとその意味合いになる。

「ふふ」

その笑顔に裏表はない。本当に、ただ純粹に、楽しさを期待した
笑みである。

歌い終えたファルが二人を追って部屋から出たあと、唯一は入れ
代わり様に部屋へと戻る。残っているのは呆然としているアズマと
それを眺めるファル。部屋の中では少し戸惑いを隠せない彼女がい
た。

長かった、ただひたすらに長かった。自分でも初です、こんなに長く書いたのは。一つにまとめた意味なくね、とか自覚してます。ホントにバランスが悪い。

単行本のページ数が全部揃っているのに最終巻だけ異様に分厚いみたいな、そんなアンバランス感。グラグラタワーびっくりだよ。

ともかくまあ、なんとか書き終わりました。次回からはアズマ君の『ドキッ、初デートは危険な香り』を、つてのは嘘です。危険な香りはしません。あの娘は平和の象徴として使っていきます。危険なのは周りかも知れませんか。

52nd 「ファーストデート 幸か不幸か」 (前書き)

他人の不幸は蜜の味と言うが、なら親しい他人の不幸はどんな味か。質の差はあるとしても、他人も自分も苦虫の蜜を味わう事だろう。

52nd 「ファーストデート 幸か不幸か」

面倒な ではないが事情を考えるのは面倒な事だ。行為事態に面倒さはない。寧ろ楽しみでもある。遊びに行くのが楽しくないなら、それは罪を背負っているのだらう。

遊びに行くのは誘われてからなら明後日、今日から数えるなら明日がその日である。

「 は？遊びに行く？・・・デートじゃなくて？」

「 本人も言ってたし遊びなんだろ」

場所はアズマ宅、いるのは勝手知ったる二人と同居人一人、そして家長のアズマである。

「 文化祭でご飯作ったろ。それで何も返さないのは悪いから遊びに

行こう、だそうだ」

勿論そうゆう意味合いでない事は重々承知している。女子が男子を遊びに誘うのは間違いでもなくデートの誘いである。それは彼自身も気づかない点ではない。

「で、明日なの？」

「ああ」

明日は丁度振替休日である。二日続いた文化祭は金曜と土曜に跨がっていた為、日曜と月曜が休みとなっている。本来体を休めるべきではあるが、せつかくの休みを遊ばずに返上する馬鹿はいない。

「……どこ行くの？」

「……映画に行つてから遊園地、だそうだ」

明日は予定が山積み、そして今日は準備期間兼休憩だった。そうして一日の間を空けてから遊ぶ手筈になっている。

「という訳だ。明日は俺いないから」

「……じゃあファルと……一季と一緒にいるわね」

「そうしてくれると助かる」

テレビの前で陣取っている二人にはまだ話していない。二人して録画したアニメに夢中である。バイトの大枚をはたいて買ったブルーレイレコーダーだ、活躍してもらわなくては困るし使ってくれるなら嬉しい。

「一季、ファル、手伝ってくれ」

「ほーいほいん」

「了解」

流れていたアニメ内の会話は停止。一秒たりとも見逃すのは嫌らしい。あとはご飯を食べながら見るようだ。

「で、デートかん、癖頭ん」

「聞こえてんじゃねーか！」

「当たり前だろん、こんな面白い、じゃなくて親友の命日を聞き逃す筈がないん」

「なんで悪く言い直すんだよー！」

「悪い、つい本音がん」

「楽しんでだな!？」

知らん、と言いながらリモコンの再生ボタンを押す。因みに今日の晩御飯は、そろそろ鍋が恋しいとの声があったからほうれん草の鍋である。煮ている間はゆっくりアニメを見れるから、一季的には満足してそうだ。

「ん・・・この皿・・・」

「お、気づいたか」

「・・・私に？」

何の変哲もない手の平サイズの皿。蒼色が主体で、底には白塗りの鳥が描かれている。

「緋色の教室で買った物だ。こんな物ですまないけど、これが精一杯だな」

「・・・ありがとう」

「どういたしまして」

「僕、箸」

皿と比較すると質量的には貧相だがファルに不満げな顔はない。黒に白く光る線が入っている箸。気に入ってくれるならなによりだ。

「ありがとう、アズ」

「ああ。さて・・・食うか」

「?・・・あーれー・・・何か忘れてないん？」

「・・・そうだな・・・」

「そうだよねん、二人に渡して僕に何も無い訳ないよねん」

「一季の分は忘れてた」

意地悪、とか呟きテーブルに突っ伏す姿はわざとだとしてもしてやったりと思う。まあ・・・

「さて・・・」

やっぱりそんな事はできないから嘘なんだがな。

「一季は手袋だ」

「もつべきものは親友だよなん」

その感激もわざとらしいが、どうしても悪い気はしない。本心で喜んでいるのは変わりなさそうだから。

「ところで、その八坂さんだっけん・・・疑いはないのかん？」

「つまり・・・ファインダーかドリーマーかって聞きたいのか？」

無言の返答。テレビの画面は愉快で痛快なアニメが流れている。

幻想はそうだが果たして現実はどうか。どう感じても愉快さは伝わらない雰囲気である。

「それは知るべき事か？」

「アズマを心配して言ってるんだ」

「・・・勿論確認したさ。帰り際に見てたけど、ワンダーを避ける様には歩かなかつたし、ぶつかつても擦れ違っただけだった」

一般人　この場合感情が消失している人　がどう見えるかは別として、ワンダーにはわかるらしい。パスがあるかどうかを見破る　とも言えないが、どうにかしてわかるらしい。それこそ幽霊が靈感のある人となない人を判断できる様なものだろう。触れるか触れられないかは、雲を掴める術を知る人と掴める術を知らない人の違いの様なものだ。

「別にいないよな、触れないけどファインダーな人なんて」

「ああ、いないなん」

だとしたら疑いの種は枯れる。本当に心苦しかったが、最初から普通と決めつけていると油断に繋がる。掬羽の件でそれは散々だった。

「何時にどこ集合なんだよん？」

「9時に駅前に集合。そしてから近くの映画館で映画を見て、そのあと電車で揺られて遊園地前だよ」

話の内容はそれだけである。何の映画かも何時に解散かも知らされてない。知らされたのは今度腕を振るうのは八坂さんだという事。

「ちゃんとエスコートしてやれよん」

「俺にそんな知識はない。自然にやるさ」

「間違つても襲うなよん」
「ぶつとばされたいか？」

鍋に残ったほうれん草と豚肉を攫い、豚肉を投入する。やっぱり寒い日に鍋はいいものだ。一季なんかにくれてやらない。

「ち・・・ちくしょうめん」

「ハツハツハ！俺が鍋奉行だ」

声高らかに宣言してやる。いつもやられてる鬱憤を晴らさせてもらおう。昆布でも食ってやがれ。

「緋色達は明日どうすんだ？」

「そうね、暇があったら三人でどこか行くわ。休みなんだし」

「だよな」

「邪魔なんていう無粋なマネははしないから頑張つてね、初デート」

最後の部分だけ強調され、どこかトゲがありそうな感じがする。どうしてそうプレッシャーかける様な事をするかな。意識しないようにしてるのに。

「・・・一季はした事ないのか？」

「何をだん」

「デート・・・だよ」

「あー・・・あるよ」

「マジで!？」

「やりまくりだよん」

「へ・・・へー」

そんな事は初耳なのだがそれも当たり前か。今までそんな話しな

かったもんな。う・・・なんか屈辱感がある。

「手を繋ぐ時は自然にだぞん。間違っていきなり握るなん、指先に何回か触れてからOKかNOか判断するんだよん」

「何の話だよ」

「チューもタイミングを誤るなよん。目を見てから許可をもらうんだん」

「だから何の話だよ！ってか実体験を語るな！！」

「実体験じゃないからなん」

「は？でもデートはしたって・・・」

「ああ、したよん。・・・ゲームでねん」

「バーチャルじゃなくてリアルの事を話せよ！」

どうせそんな事だろうと思ったさ。一季のゲーム好きもどうにかしてくれよ。いきなり付き合わされても追いつけないし。

「豚肉もーらいん」

「あ、このやろっ！」

「ハッハッハ、僕に取れない豚肉はないん」

夜は更ける。時間がいつだろうと場所がどこだろうと他人がいれば楽しめる。悦楽がなかるうと歓楽がなかるうと、感じないとしても伝わるモノはあるだろう。これは楽しい雰囲気だ、と判断する事はできる筈だ。

だから今日はこのまま、楽しい雰囲気のまま明日へ持ち越したい。そうすればきつと、明日も楽しいままだ。

夢を見た。

未来への展望という意味ではなく、寝ている間に見る夢である。そしていつも流れる、毎日流れるマンネリ化した夢。その夢に慣れる事はなく、いつも心を壊していく。

遠い夢、遠い話、遠い意識。全ては自分の意思とは別に過ぎていく。始まる場面は血の海に漂う自分。見えるのはそこに反射する月

と陰に隠れる誰か。

頭を陶酔させる血の臭い。それは眠っている所為かはたまた夢がそんな情景を作っているのか。変わらない、変わらないのにどうやっても抗えない。ミサイルと拳銃が何度勝負しても拳銃の負けは自明の事柄。それ程に精神の崩壊は抗えない。

複数の感情の奔流。憤怒、慈、激痛・・・悲哀らしきモノが伝わる。最後の以外確実にわかるのはそれだけ。そもそもこの主観は誰だ。自分だとは到底思えない。周りに平伏す二人。そして誰かに抱えられた誰か、髪の毛長い抱えられた誰か。

「かかかかなししししみがななな・・・」

妙にエコーして聞こえる。やはり意識が遠い。という事はもうすぐ夢が覚める。それはどうなのか。これが単なる夢だとは思えない。だとすると過去のなだろうが確信はない。過去だとしたらこの先を知りたい。そんな探究心が夢の中にまで持ち込まれる。

夢を見たくない自分と夢の続きを知りたい自分。足を止めるのは精神を壊す鈍痛。それが前に出るのを躊躇わせる。知るべきではない、知ってはいけない事かのように場面は薄れていく。

崩壊する精神を具体化するかの様に舞台はホワイトアウトしていく。最後に見える口の動き。声は

「
」

聞こえない。

白い津波が夢心地の残骸を綺麗に洗い流していった。

「ッ ハア・・・ッ・・・」

視界がチカチカする。

何があった、何が起きた、何がどうした、何も無い、何でも無い、何も起きてない、どうしたどうしたどうしたどうしたどうしたどうしたどうしたどうしたどうした・・・

「・・・俺は・・・誰だ・・・」

津波の余波は記憶の混乱と錯乱を引き起こす。両手で頭を挟み万力の様に内側へと力を込める。肺にある空気を出せるだけ出し、漸く一呼吸が終わる。

「アズ……」

隣でこちらを見つめる双眸。心配とあと何か。気にかける事を放つその双眸。

「う……アアアッ!!!」

突如始動する腕は少女の首元まで伸び、そのまま……

「ツハ……ハア……」

埋める事はなかった。ただ歪に力が入り、前に動かしたいのか引きたいのか傍目からじゃわからない腕の形だった。肘を中心に捻りを繰り返し、力の波が目茶苦茶である。

「アズ」

そう、アズ。俺はアズマで東 東広である。で、今何をしようとしている、東 東広。その手を引け。

「ハア……すまない……ファル」

「気、しない。アズ、悪夢？」

「ふー……はー……」

額の汗を拭い、ゆっくり呼吸を整える。そこまでくれば冷静。入り込んだ悪夢を再認する。掠れる夢はいつもの事。細かい部分は既にごみ箱の中へ。それでも残る滓は大事なモノであった。

「・・・あれは・・・」

最も印象の根を張り付けた最後の一部分。それは今までになかった新たなシーンである。進んだ場面は一秒にも満たず、内容は一秒全部とは言えない。動作はあれど声は、音はない。が、進んだ事は確かだ。

「・・・なんだけどなあ・・・」

さっきは確実に囚われてた。一秒進んだだけでファルに手をかけようとしていた。夢といえど感情はある。恐怖もあれば喜びもある。これ以上先に進めば確実にファルを・・・

・・・どうしようとした？

何かとてつもなく取り返しのつかない事をしようとしたような。そうでなくても罪悪感に囚われそうなのに。

「だ、大丈夫！？今大声が聞こえたけど」

そういえば泊まってたな。明日休みだからー、とか言って泊まってたっけ。迷惑かけたかな。

「また・・・見たの？」

「ああ。でももう大丈夫だよ」

緋色は実際、被害者になったからどうなるか知っている。それを咎めないのはできないから。毎夜見るからそれは寝るなど言ってる様なものだ。

「なんだん、癖頭。寝起きがわりいなん」

眠たそうな目を擦りながらやっと来た一季。隣の部屋だから一番最初に来ていい人物が来ないなんて薄情にも程がある。迷惑かけといてなんだけど。

「んー・・・襲ったのかん？」

「な、何言ってるんだよ」

「この欲求不満少年」

「一季に言われたくねーよ」

ついでに貶すし。

「で、本当に大丈夫なの？」

「ん・・・あ、ああ」

「？・・・どうかしたの？」

「うん・・・なんでもない」

こないだの一件から緋色が女だと変に意識してしまう。こんな無防備でいいのだろうか、その女の子なんだから。幼なじみとか親友だから気にしないのか。だからってあんまり近づかないで欲しい。心配してくれるのはありがたいが今はちょっとヤバイ。

「この欲求不満少年」
「うるさい」

そんな心境を察したのか　いや察して欲しくない。もういいよ
一季、にやにやするな。仕舞いには本気で怒るからな。

「・・・さてと、今何時だー・・・っと」

背筋を伸ばし、ごくごく自然体で緋色から距離をおく。背中を向
けたままだが。

「え・・・？」

「どうかしたかなん、何時なのかな癡頭」
「・・・この」

全てを知った上での発言か。成る程、遅れたのはそうゆう事か。
時間の確認をして遅れたんだな。にやけた顔がカンに障るが構っ
てられない。ともかく・・・

「寝過ごしたっ！！」

ダッシュで部屋を飛び出し台所に立つ。米を研ぐ余裕はない。常
備していたパンをトーストしてコンソメスープを作るぐらいしかで
きそうにない。トーストしている間に顔を寝癖を直す。もう少し整
えたいがそれは厳しい。

ここから駅前まで走って凡そ20分。準備する時間はもう10分
ぐらいしかない。

「アズ」

「スマン、今日はこれで勘弁」

三人が降りてきたすぐ後に、トースト三枚と三つのコンソメスープをおく。まさかのこれだけである。あとはどうにかしてくれ。

「まさかのこれだけかん？」

「急いでるから先に謝る、あとは各自で頼んだ」

再度階段を駆け登り自室へと飛び込み、テキトーに服を見繕う。あくまで遊びなのだ。気合いを入れた服でなくラフな服装でいいだろう、という事にしよう。下手に意気込んで硬くなるよりはマシだ。

「んじゃ、言ってきます」

「いってらっしゃい」

「いってらん」

「いって、らっしゃい」

流石に何も食べないのはきついからパンを一枚銜えて外に出る。荷物は財布が入ったバッグと身一つ。パンを銜えたまま走っても嬉しい出会いなんてものはない。しかしそんな事は意識していない。楽しい出来事がもう約束されているから。

この家の主が忙しく飛び出したあと、家に残っている人数は三人である。それぞれの名前は炬 緋色、日高 一季、ファルである。一人は勝手知ったる家の台所で簡単に卵焼きを作り、テーブルまで持っていた。

「さて、さつさと食べようぜん」

さも自分が作ったかの様に一季が言う。それに関して反応する事もせず、少女に、テレビの前で録画していた昨夜の深夜アニメを見ていたファルに声をかける。

「いただきます」

アズマが残したトーストされたパンは冷めていたが、バターとジャムをつければ関係なかった。簡易な朝ご飯に不満はあれど親友の一生に何度あるかわからないデートを邪魔にはできない。

「駅前の映画館、だったなん」

そして親友の一大イベントを気にならない訳もなかった。

「後追いになるけど、先回りするのは無茶があるから尾行の方がいいわよね？」

「そうだなん、遊園地とは言ったけどどことは言っていないもんなん」

イチゴジャムたっぷりの彼のパン。砂糖たっぷりのそれにかぶり

つきながら口を動かす。彼もそうだったが彼らにも悠長にご飯を食べる暇はない。

「さてとなん」

コンソメスープで押し流し口を拭う。先に食事を終えた一季は三人分の準備を始める。といっても財布程度の物しか準備する物はない。

「ごちそうさま」

急ぎ食器を重ね、ファルが食べ終わる前に洗い物を進めていく。どんなに馴染んでいても他人の家だ。食べ散らかすのはよくない。

楽しんでいる者が一人、不安に思う者が一人、落ち着かない者が一人。それぞれの感情を満たす為に行動を開始する。

「ファル、皿を持ってきて」

「了解」

食べ終わりアニメ観賞に没頭していたファルを叱咤し、皿運びと着替えを要求する。目的が決まっている身ともなればできるだけ早くしたい。

「それじゃ行くわよ」

手早くエプロンを畳み一季から荷物を受け取る。彼女の内心は正直ノリ気ではない。でも確かめたいのも本音。どちらも本心である。

目を閉じた一瞬、自分自身の気持ちを再確認して家を出る。迷っ

ている、でも迷いながら進むしかないならそれでいい。

誰もいない家、そこに声が響く。それは人の声ではあるが実際のものではない。少女の消し忘れたテレビの電源が点いたままでいる。かといって省エネが合言葉のこの時代、無駄な電気代を加算させる事もなくオフタイマーが機能に付いている。流していたアニメが終わり、リアルタイムの番組に画面が変わる。

普段テレビを利用するのはファルだが、そのほとんどが録画機能だけである。チャンネルはあまり回さず、したがってニュース番組にしかチャンネルは固定されていない。

「続いてのニュースです」

聞き手のいない部屋。テレビという話し手に返す言葉など常識的にもありえないが、聞き手がないのはいただけない。日々の情報は生活する上で重要である。

「今朝未明、様々なマルチメディアに怪文書が送られました。内容は『ある場所に爆弾を仕掛けた』と書いてあり、送り届けられた直後に廃ビルが爆破されました。幸い怪我人は出ませんでした。警

察は犯人の捜索を開始すると・・・」

オフタイマーが作動し、テレビは電源を落とす。やはり日々の情報は生活する上で重要である。この情報を聞かなかったのは幸か不幸か、どっちは後々知る事になるだろう。

52nd 「ファーストデート 幸か不幸か」 (後書き)

アズマ君も男の子だったのです。それでえっと・・・何か指摘な
どあったら嬉しいです。以上。

53rd「ファーストデート 定刻か遅刻か」(前書き)

人の心は空気の入った風船の様に、萎み、膨らみ、膨張を繰り返す。繊細という膨らみは、悪意という針で簡単に穴を空けられてしまう。

空気の溜め込み過ぎにも注意すべきだろう。どちらにしても、派手に周りを巻き込む事に変わりはない。

53rd「ファーストデート 定刻か遅刻か」

天候は晴れ、気温は流石11月と思える寒さ。曜日は月曜で、普通なら学業に励む時間の中、駅前まで駆けていく少年が一人。空気はじつとしていれば寒い程のだが、これだけ運動していれば汗ぐらいもかくだろう。

何故そんなに必死なのかというと、単純に待ち合わせに遅れそうなだけだ。待ち合わせの前に『デート』の三文字がつくかは別として、今の彼には遅れない事が第一である。

自転車、という手段もあったがそれだと邪魔になる。どこへ行くにも横に自転車を置いておく事になるし、電車にも乗るのだ。駐輪場にわざわざ置きに行くのも面倒だ。

ならば行使による移動はどうか、という手段をとっても意味がない。確かに早く到着できるだろうが体力の消耗が激しい。目的地に着いたとしても休憩する時間が必要になる。普通に走って行っても差し引きはほぼゼロになる。

しかしそれはそうとして、人間その気になればどこまでも走れるものだ。かれこれ10分以上は走っているしペースも速い。下手すればマラソン選手よりも速い気がする。

でもやっぱりそれは駄目。冷静に鑑みれば囚われてるともとれる。焦燥に駆られるのもわかるが、完全に囚われる前に、必死になるのもいいがペースが速いのも事実だ。少し歩かないと。

速度を落としゆっくりと歩く。走っている間は気にしないのだが、存外走る事から歩く事に移行すると一気に疲労がのしかかる。汗も吹き出し、どうしようもなく暑くなってしまふ。

「・・・あつ」

バッグに常備させているハンカチを取り出し、額の汗を拭う。服が軽く張り付いて気持ち悪いが、水を被る事もできない。パタパタと服を上下させて空気を送る事しかできそうにない。

そんな動作もこの時季ならする人はいないだろう。発汗するのは人が生理的に行う温度調節で、あついからするのだがこの寒さだ。すぐに体から温度を奪っていく。

「やっぱり寒い」

体温低下の原因である汗を拭く為に、歩きながら服の下にまでハンカチを入れる。流石にもう走れない。一旦止まると気分的に走れなくなる。このまま駅前まで歩くとしても、多分間に合っただろう。だらし無い姿だけは見せない様にしよう。

いつ、どんな日だとしても駅前には賑わう空気を忘れない。ここから移動する人もいれば、ここに向かう人もいる。ここで時間をつぶしたり、ここで楽しむ人もいる。その場所が待ち合わせの場所になるのも頻繁で、現に待ちぼうけをしている人もいる。

彼女　八坂　唯一の内心は少々不安であった。一人でいる事ではなく、理由は様々である。何気なく誘った約束、の筈だったが取り付けた直後から何故か胸が高鳴った。

服装もいつも以上に丁寧な服であり、衿もきちんとしており皺一つない。大和撫子風の落ち着いた雰囲気は、男性ならば全員が全員見取れる程に、女性でも綺麗と認める程に整っている。

そんな彼女を放っておくのは、男として間違っていると考える愚かな思考の持ち主が出てくる。これが二人ならまた違っただろうが、一人であるからそういった状況になってしまう。

「あの一、お一人ですか？よかつたらお茶でも」

「すみません、待ち合わせているので」

何度やったかわからないやり取り。それでも丁寧に断るその物腰には彼女の礼儀正しさが表れている。

「おやつ、彼女ひとり。ならどっか俺達と行かない」

しかしそんな事で退散しない人も出てくるのは、やはり彼女を不安にさせる。

「待ち合わせていますから」

「いいじゃんそんなの、俺達といた方がきつと楽しいぜ」

話を聞かず強引に腕を引っ張る彼ら。一人に対して複数人。ここで彼女を助けて株を上げようと考える人もいないでもないが、数は一つの脅威で結果を予想させる。

「ごめん、待ったかな」

全員が焦点を合わせた顔は、全員見覚えがなかった。勿論唯一にもである。男性は唯一に一つアイコンタクトを示すと更に言葉を続けた。

「綺麗なのはわかるけど、もう予約が入ってるからすまないね」

そこで漸くだが理解する事ができた。少々強引だがここで合わせておいた方が無難と判断。自然体とわざとらしいがすれすれな声色で話を合わせる。

「お、おそかった、です。心配、しましたです」

かくも微妙な台詞だが、呆気に取られていた男の手を振り払い、男性の後ろに隠れる様にして逃げる。

「てめえよ」

「ここで暴力に発展してもいいが、もう少し状況を考えた方がいい」
「あアッ！！」

声を荒げる男に対して不安を隠せない唯一だが、庇っている男性は至って冷静である。

「君らの味方は最早君達だけだ。周りにいる人達は全員、君達を敵だと認識している。もしここで手を上げるなら、数に勝る暴力はない」

周りを見れば敵意の目が男達に集まっている。最初の出だしこそ迷う集団心理だが、最初以降なら集団というのは強い。

「・・・ちっ」

居づらい雰囲気になんて耐え兼ね、逃げる様にして去っていく。張り詰めた空気は萎んでいき、また元の賑わいに戻っていく。

「は・・・ありがとうございます」

「それはよかった。もしどうしても遣る瀬無いなら、待たせた人に不満を言うといい」

「あ、はい。その何かお礼を」

「そうなるとここにいた人みんなにしなくちゃいけない。そんな不公平は嫌いだからいいさ」

「え、あのじゃお名前を」

「・・・名乗る程の名もないのでな」

「あの、ちよつと」

立ち去ろうとする男性と擦れ違い様に、見覚えのある人がこちら

に向かってくる。

「あ、東君」

「すまん、遅れた」

時間的には約束の時間には遅れてなどいない。待たせた時間があるとなると遅れた、と言ってしまうのがなんだかバツを感じてしま
う。

「待った・・・かな」

息を切らして来た彼の姿は、本当に急いで来たのだと伝えてくれる。しかし慌てて後ろの方を見ても、助けてくれた男性はもういない。

「・・・あの、何かあった？」

「・・・はい、凄く大変でした。遅いですよ、東君」

「え・・・それは・・・ごめん」

困った顔をしたアズマに、唯一はクスリと笑う。軽い不満を口にしただけがここまで真剣になると何故だか笑ってしまう。そうして、やっと彼女は安堵する事ができた。

「冗談です、まだ時間前ですから。飲み物を買ってから映画館に行きますか」

アズマの目の前で笑いながら振り向く。その笑顔はただ純粹に、無垢できれいだった。

「そう・・・だな、行こうか」

一瞬恍惚となったがすぐに隣を歩く。二人にとって楽しい一日は今が始まったばかり。事前に起こった事は他愛のない事としておこ
う。

集合場所から一分もかからない場所にコンビニがあり、そのすぐ近くに映画館がある。最初の上映は集合時間の30分後。時間はまだ余裕といえる。

上映している間に喉が渴ぐといけないから、という八坂さんの提案により、そのコンビニで今は買い物中である。

「それ・・・持とうか？」

彼女の両手には手持ち鞆が下げられている。見るからにそれは重そうだ。誇大する訳でもないが、その細腕でずっと持ったままなのは見るに堪えない。

「大丈夫です」

「弁当？」

「そうですよ。頑張って作りました」

「なおさら俺が持つよ」

「強情ですね」

「八坂さんもね」

お互い様です、と茶目つ気に笑う。彼女の新たに知る一面。深く関わっていくのがわかる。

「・・・仕方ない、なら我が儘を言っ」

「なんですか？」

「こつゆう力仕事は男子がするものだから」

「女子だつてしますよ、力仕事」

「だったら、作る係が八坂さんなら運ぶ係は俺だよ」

「でも、わたしが持ちたいです」

「そうだとしても、作る作業と運ぶ作業を八坂さんが引き受けたら、俺は何の作業もしてない」

「・・・つまり・・・なんですか？」

「働かざる者喰うべからず、かな。その弁当を俺が運ばないと、俺にその弁当を食べる資格はない」

「・・・本当に強情ですね」

弁当箱を誰が持つか、でここまで話が発展するのはどうかと思う。両方引かなければ時間は過ぎていくばかりである。

「・・・わかりました、降参です」

守る様にして抱えていた弁当箱をアズマの前に差し出す。自分から言い出した事だ。ここで受け取らない訳にはいかないし、渋ったりしてもいけない。

「ありがとう、八坂さん」

「そのかわりわたしも我が儘を言います。八坂さん、ではなく唯一

と呼んでください。それが条件です」
「それならお安いご用だよ、唯一」

そうして片方が折れたかは知らない。なにしろ未練がましく「疲れたら持ちますから」というから、絶対溜息も吐かない様にしないで。これは必ず持ち続ける。

「責任持って運んでください」
「溜息も悪態もつかないから喜んで運ばせていただきます」

元々荷物は少ないし、学校ではいつもこのぐらいの量の荷物だ。本当になんて事はない。

「……………東君、もしかして今日寝坊しました？」
「ああ……………うん、ちよつと……………夢見が悪かったから。どうしてそう思う？」
「寝癖が……………」

成る程、流石に直しきれなかったか。元から癖つ毛なものだから、今朝の短い時間では整えようにも整えきれない。面倒な髪質を持った人間になってしまったな。

「最近髪を切る暇がなかったからかな、いつもより酷いかも」
「誰が髪を切っているんですか？」
「自分だったり、バイト先だったり、結構簡単にはばって切るかな。癖の所為で短く見えるけど、真っ直ぐにすると意外と長いんだなこれ」

以前一季の何気ない（悪意の籠った）一言「その髪の毛を真っ直ぐにしたらどうなるかなん」と言われた。あまり頓着しないものだ

から切る機会もなかったから、今後の目安としてワックスとかドライヤーで強引に伸ばしてみた。

これが思いの外長く、脇に纏めていた前髪は視界を完全に覆い、こめかみの部分は耳を隠したりといろいろと大変だった。最後に一季が漏らした言葉は「女みたいで気色わる」なんて言われたかな。

「どうか・・・しましたか？」

「いや・・・単なる感傷、あんまり思い出したくないかも」

口にするとはやはり記憶として脳裏に浮かび上がる。急に感傷的になっても仕方ない。こんな事もあったな、程度に収めて上映中の時に飲むジュースを買う。

「行こうか」

「はい」

コンビニから出ればすぐに映画館がある。なんて事はない距離。それでも両手にズシリとくる。考えてみれば結構な重さだ。相当作ってきたとみえる。これは全部食べなきゃだな。

「ところで何の映画を見るの？」

「確か・・・恋愛映画、だったと思います」

「え・・・」

「いやでしたか」

「そうじゃなくて、てっきりホラー映画かと」

いやとかそうゆう訳ではない。ただ恋愛映画だとしたら暇な時間になりそう。共感できるから楽しめるんだろが、共感できないから暇になる。俺に恋愛のイロハを問われても困るな。

「いつもは見てませんよ。本当は見たかったんですけど、上映しているものがなかったの。それに恋愛映画も好きですから」

「ホラーと恋愛じゃ、まるっきり逆だな」

「そうでもないですよ。ゾンビが人に恋する映画があったり、吸血鬼が人に恋する映画があったりと、まるっきり逆ではありません」

胸を反らして知識を披露する姿はなんともはにかむ。でも言われてみればそうゆうものもないとは言えない。吸血鬼がある人に殺されて、生き返ったらそのある人に責任を追及していくのだが、それが恋愛に発展していくものがあつたな。ってこれは一季がやってたゲームだ。映画じゃないし。

「結構映画を見てんだ」

「はい、一人だったり友達とですね。東君は行かないんですか、炬さんや日高君やファルさんと？」

「あー・・・行ったかなー・・・？」

「家族とは行かないんですか？」

「それはない」

思わず即答したのは間違つたと内心で舌打ちした。ここでもう少し記憶を探る様な行為でもすれば突っ込んだ質問はされなかったと思う。「どうしてですか？」と聞かれるのは当然だった。

「その・・・親がいないんだ」

「・・・え・・・あの・・・」

「謝らなくてもいいよ。今更コンプレックスにする事でもないし・・・親の記憶もある・・・かな。本当に・・・感傷する程じゃない」

「う・・・あう・・・」

「うっ・・・またやってしまった」

唯一の優しさなら泣いてしまう事も想定できた。他人の不幸に共

感して泣いてしまうのは、果たして嬉しい事かお節介だと思える事か。それでも深く関わっているのだとも思える。

「……以前の言葉を否定する事になるけど、泣かない方がいい」

「っ……みつとも……う……ないからですか？」

「涙を流せるなら自分の為に流した方が……ね」

先日やったの様に頭を撫で、全然気にしていない事を伝える。これしかできない、こうする事しか。もつと気の利いた事もあるかも知れないが、それは自分の役目ではない。こんな罪を背負った自分なんかではない。

「さ、泣くのは止めようか。せつかくのこんな日なんだ、泣いてるより笑ってた方がいい」

そうでなくても人目を引いているのだ。弁当の所為もありそうだが、それ以上に唯一は目立つ。お世辞でもなく可愛い。

「どうかしましたか？」

「うん、やっぱり笑顔が似合うなって」

「な、何言ってるんですか!?!」

泣いたり笑ったり怒ったり忙しい。でもそんな彼女だからこそこんなに可愛いのだろう。

仕入れた情報通りに映画館周辺までやってきた二人。行動全てが視認できる距離は保ちつつ、違和感を持たせない様になっている後ろの三人。

特に目立った格好はせず、擦れ違えば簡単にはれてしまいそうな服装である。しかしネックウオーマーやニット帽、マフラーだけでも十分に通行人に溶け込んでいる。雰囲気は楽しそうとは言えないが。

「ぬ・・・う・・・」

「落ち着けよん、緋色」

「まー」

「待て、暴走するなよん、ファル」

三人はバスという移動手段 文明の利器に頼り駅前に辿り着いている。走るアズマの姿を見たら啞然としてしまったのは言うまでもなく、アズマより早く到着して、八坂 唯一の顛末を全て見えた事も言うまでもない。

そうして全部、一分一秒の行動を見ているのだが、元々一季の計画としては楽しむだけだったが、こうも二人の手綱役になると思ってもみなかった。それ程までにあの二人 東 東広と八坂 唯一は仲睦まじい様子であった。

それを黙って見ているほど、恋心は廃れてはいない。無論、嫉妬の延長線上にある行為なのだが、今は尾行中だという事を忘れてはいけない。

「ちよつとここで待ってるよなん、こつからは僕が様子見してくるん」

「どうしてよ、全員で行けばいいじゃない」

「少し頭を冷やせよなん。それにどこに座ったか確認しないと駄目だろん」

無論口実である。嫉妬で熱くなっている二人を冷やすのと同時に、アズマ達二人の様子も見ようというものだ。だが、実際一季もアズマに嫉妬している。別に危ない性癖を持っている訳でもない。こんなに思われているなんて親友も羨ましい限りだ。それに対して一季自身は思われているのか。

「・・・少し二人で飲み物でも買ってきてくれよん。一回入って、大丈夫そうなら不自然なく出ていくからん」

確かにその点であれば適任である。不自然なく、いつもしれつとした態度であるから、余程の事でもなければ意識を表には出さないだろう。

「それじゃ、はい」

「・・・何かなん？」

「ジュース代150円」

「おつ、パトカー。何かあったのかなん、んじゃ遅れる訳にもいかないからもう行くねん」

本当にしれつとしている、と心中で思わざるを得ない緋色である。

結局貰い損ねた訳だが、一季が言っていた様に何かがあつたらしい。先程からサイレンを鳴らし続けているのはパトカーと救急車。どちらも人身事故があつた事を暗示している。

背の高い建物の更の上に上を仰ぎ見れば、乾燥した季節特有の空に混じり、黒々とした煙が細々と立ち上っている。火事でもあつたのだろうか、と思うが消防車が来る気配はない。

場所的には人気ひんげのなさそうな裏路地で、想像がつくものは傷害事件かその程度。だがそれで煙などが発生するのかが、疑問の糸に引っ掛かる。

例えばそう、小火の様に小さな火種が一時的に発火したり、少量の火薬の爆発等による発煙か。どちらにしても、そんな憶測は無駄に終わる。

「緋色、ファル、いいぞん」

「あ、ゴメン一季。まだジュース買ってなかつたわ」

「しれつとしてんなん」

「一季に言われたくないわよ」

急いで三人は飲み物を選び、早々と映画館の中に消えていく。事の成り行きを 二人のデートを楽しむ、もしくは決定的な場面を見逃さない為に。待つという行為は焦らせるだけなのだから。

53rd「ファーストデート 定刻か遅刻か」(後書き)

オあどつしよ。どつやってやりますかね。長引かせてもいいなら
いっそ壊れてしまってもいいのだろう、と考え中です。楽し・・・
めるかはどつかとして、とりあえず進みます。

54th「ファーストデート 相応か不相応か」(前書き)

喜びは大きければ大きい程いい。身を押し潰す事もなければ、少しの量でも喜びには違いない。しかし、変化しやすい事が唯一の欠点だろう。

54th「ファーストデート 相応か不相応か」

久々に見た映画。実写映画やアニメ映画は見た覚えがあるが、その中で恋愛というジャンルなら初の事ではある。が、やはり映画館で見ると迫力からして違う。無関心な話題だとしても、改めて映画館は心を引き付ける要素が山積している。

内容としても、ベタに病的な幼なじみがいて、とかそういうものだと思っていた。事実そうだったが、病的なのは幼なじみではなく少年の生まれながらの能力に引き合わされた人物だった。

軽くファンタジーの要素も取り込まれていて、少年は俗に言うアカイ線（唯一が買ったパンフレットにこう書かれてた）が見えるらしい。自分に好意を寄せている幼なじみがいるが、アカイ線が繋がっていない事と、自分とアカイ線が繋がっている人とのジレンマで悩む描写が多い。

運命を認めたくない自分と、知らず知らずに線の向こうへと惹き寄せられる自分。そして向こうも彼へと惹き寄せられていく。

そうして告白のシーン。最初は幼なじみで、それを病院の彼女に打ち明けた彼に彼女もまた告白。またジレンマになる事だが、やはり何とも感じない。色恋沙汰のときめきを理解はできない。

結局告白のシーンもキスシーンにも無関心で、興味を示したのは音響や雰囲気だけ。涙を誘うシーンも路傍の事のように過ぎていく。

それはわかりきっていた事で、しかし映画の感想を話題にされて何も答えられないのはやってはいけない。眠る事は初めから論外なので、最低限あらずじだけは覚えようと反芻している。

「ふー・・・」

「つまらなかつたですか？」

「んー・・・楽しかったには楽しかったけど、やっぱり恋愛事は理解できないかな」

率直に感想を口にしてみる。嘘の事を話しても意味はなく、本当の事を話すしか選択はない。それもジャンルの好き嫌いとしての感想と取ってもらえばいい。

「どんなジャンルのものなら好きですか？」

「そうだな、コメディものとかほのぼの系、とりあえず暗い気分にならないもの」

バイオレンスものに関して理解できない事がある。何故わざわざ自分を苛つかせたり、沈んだ気分させるのかわからない。暴力ものだったり、親しい人との死別を描いたり、好き好んで見る神経が理解できない。

だが、ヒーローが悪者を思いつきりぶん殴るシーンにはスカツとする。他人を痛めつけたら自分もその痛みを知れ、という訳だ。だからなのか一方的な暴力は嫌悪したい。

「つたあー・・・結構疲れたなー・・・っ！」

暗闇に長時間いると時間の感覚がわからなくなってしまふ。九時半から見始めて今はもう十一時半。二時間もいた事になる。無自覚

とはいえ二時間も座っていれば、自然と伸びの二つもしてしまふ。

「お腹は空きましたか？」

「いんや、まだかな」

「なら、先に遊園地に行きますか。着く頃には多分、丁度いい時間になつてると思いますから」

そう言う唯一の顔は小腹が空いている様にも見える。かといって小腹程度ではこの量の弁当は食べ切れない。何か買うにしても、そうすると今度は昼食の時間がずれてしまふ。だとすれば……

「飴あるけど……食べる？」

お菓子ぐらいしかないだろう。以前散策した時に入れておいたものだが、こんな時に役に立つとは。実際唯一の目には歡喜が彩られている。

「ありがとうございます！」

「ああ、喜んでもらえて何よりかな」

役不足も甚だしいと思つたが、肝心な事以外なら大丈夫そうだ。

悲しみと愛しさに関しては享受できない。それは本当に、他に相應しい人がいるだろう。

「……楽しみだな、遊園地」

「はい！」

しかしその笑顔は本当に綺麗だ、本当に、お世辞ではなく、本当に綺麗な微笑みだ。

映画が終わっても興奮が冷めやらなかった。アカイ線についてはない方がいいと考えるが、素敵な恋を愛にしたい。勢いで告白できればいいが、勢いではできればやりたくない。やるならきちんと、デートのクライマックスでするならベスト。

「んー・・・まあまあだったかなん」

「そうかしら、面白かったわよ」

「満足」

二人は心底堪能したらしいが、一人はどことなく退屈そうに見える。それもその筈。

「二人の様子を見たりしてたのに、映画を見てる暇もないだろん。何の為にここの席をとったんだかん」

「・・・あー・・・」

「忘れた」

「これだもんなん」

一季が先行して二人を観察する上でベストな席を確保していたが、尾行という行為も忘れて映画に見入るとはどうしようもない。追いかけても迷うところである。

アズマ達は既に席を立ち、外へと向かっている。今ここで映画の感想を語り合っている場合なのか。一季としてはもうどうでもよくなってきた。

「どーするん、追いかけるん？」

「行く！」

何に火がついたかは知らないが、比較してみるとやる気の差が激しい。やるからにはついていけない訳にはいかない。今更ひとりになるのも気が引ける。

「それにしてもさっきの映画は・・・」とまた口々にファルと内容を確認しあう。どれほど印象的だったかは一季には知り得ない。いや、緋色達に印象的なのは告白のシーンだろう。そのシーンに「きやー」とか小声で言いながら口を押さえていたのを見ると、緋色も勿論ファルも告白なんてした事はないと思える。かく言う日高一季自身にもその様な経験はない。

今は尾行中だという事を理解している人が一人いれば負かり通る。意識も無意識も全て背負えばこの尾行は成功に終わる。何事もなければだが。

「二人を発見したよん、ちよつち声のボリュームを落とせよん」

二人はすぐ近くにいた。その旨を伝えると熱されていた興奮は急激に下がり、意識が向こうへと向く。映画を見た所為か、以前以上

に自分の気持ちに気づいたらしい。

「ちょっと……ま、て……この……」

緋色は落ち着いたが、ファルは先程よりも猪突猛進に走り出す。元から口下手だからか、行動で示した方がわかりやすい。多分、今の気持ちを伝えたいのだろうしアズマと一緒にいたいのだろう。以前以上に面倒な事になった。

「ふーっ！」

「落ち着けよん」

羽交い締めにしないと今すぐにでもアズマに突進しそうである。言葉だけで制止できるなら、できる奴を捜してみたい。いや、アズマ本人がいれば制止は確実。問題は万事解決するが、かわりにいざこざが生まれる。

「この尾行はちょい無理があるなん」

「また頭を冷やすの？」

「そうだよん。どうせこの後は電車に乗って遊園地に行くんだろん。行った遊園地を確認したら、昼飯を買いに別行動しようん。少なくともファルには効果的だよん」

「……そうね」

今はまだ冷静さを保てる緋色。しかしそれは泥でできた盾の様なもの。軽い衝撃にだって耐えられはしない強度。少し二人の雰囲気という暴力を振るっただけでも結果は見える。

自慢げにそれを翳してみても、それは簡単に折れる自分を気丈に見せかけている様にしか見えない。

そうして簡単に、それは　その時は訪れる。

八坂　唯一という華が綺麗に開く。そんな光景が後ろで見ている三人に衝撃的だったかは定かではない。泥の盾には十分過ぎる威力だとはわかる。

彼に向ける笑み。それは果たしてどんな笑みか。年頃の女性に相応な、頬をあかく染めた控え目な微笑み。でも、控え目だとしても綺麗な事には変わらない。

「・・・一季・・・」

そしてそれはわかる人にはわかる顔だった。ここにいる三人、もしくは経験のある人、更にはあの映画を見た人にはわかる顔。

つまり、幸せな、恋をしている（・・・）顔であった。

本人が恋と気づく手前だとしてもいざれ気づく事だろう。緋色が、ファルがいつもアズマに向ける顔に酷似している。

「・・・あー・・・うん・・・」

「凄く苦い、甘さゼロのブラックコーヒーが飲みたいわ」

「奇遇だなん、僕もだよん」

暴れていたファルにも衝撃的だったらしい。すっかりおとなしくなっている。甘い恋と苦い嫉妬。カフェオレの様にでも混ぜり合えばいいのだが、それはない。牛乳とコーヒーではなく、対立する、しかも同じ性質の、磁石の同極を近づける様に反発しあう。

「……止めるかん？」

「……やる」「」

「意地張りすぎだよん」

初めからやるべきではなかったのだ。こんな尾行など割に合う筈もない。この事実を知れただけでも収穫。茶々を入れず、想像を挟まず、彼の今後を思うならそっとしておこう。

それが頂けないなら温かく見守ろう。『温かく』はないかも知れないが、友人が危ない道に進まない事を監視する分には構わないだろう。そうと考えるなければやってはいけない。

通勤ラッシュの時間帯はとつくに過ぎ、楽に目的の場所へと電車で運ばれる。時間が進むと共に、空腹も誘われる。

疎らな人波もこうなってしまうえばありがたい。唯一との話に専念できるのは何よりだ。

「いや、あんまり映画の事を聞かれても、そんなに見ないからなあ」

話題は様々な形に変わっていく。当たり障りのないものから、真剣なものまで。今は映画の話となっている。

「今度貸しましょうか？わたしが選んだ物ですけど、面白さなら約束できます」

「そう？見れる暇があるかわからないけど、それじゃあ借りてみようかな」

「暇がないって、バイトでもしているんですか？」

「そうだな、結構長い事してるし、よっぽどの事がない限り将来の就職先は決まってるかもな」

「何をしてるんですか？」

「『招福』っていうお好み焼き屋」

「あっ、聞いた事あります。今度の週末に家族で食べに行こうって話してました」

「それは・・・ちよつと恥ずかしいかな」

「どうしてですか？東君の働く姿を見てみたいです」

「それがなあ」

臆面もなく言われてしまうと怯んでしまう。へマをやらかしてしまつたら、と思つとなおさらに。

「着きましたね」

電車は止まり、時間程の長さも感じずに目的地へと着く。『遊園地前』と書かれた立て札。駅から出れば近くには公園があり、道路を一つ挟んで遊園地がある。

「た・・・楽しみです」

見れば両拳を胸の前で固めて、にやけそうな顔を必死で堪えている様にも見える。

「・・・あ・・・」

力を入れすぎはいいが、他の部分が疎かになってしまった。

「・・・ぶっ・・・」

「わ、わわ笑うのは・・・酷いです」

顔を真っ赤にして羞恥を感じているのか憤慨しているのかわからない顔色である。しかし女の子にとっては　男子にもそうだろうが　お腹が鳴った事は恥ずかしいだろう。

それを笑われたのならこうゆう顔にならないでもない。もう少しデリカシーのない笑いなら、もう少し偏った感情の顔をしていただろう。

「ごめんごめん」

「もう、意地悪です東君」

「だからごめんって。可愛かったからついね」

「・・・本当に意地悪です」

消え入りそうな細かい声。まだ顔は赤くなっていたが、そのまま

小さく笑う。これを笑ってしまえば、本当に意地悪だろう。

「・・・じゃ、まずはご飯でも食べるか。近くに公園があったからそこでいいよな？」

「はい！」

寒いのは仕方ないが、風が当たらない場所へ行けばある程度は凌げる。ベンチは多いのだし、探せばすぐに見つかる。

「へえー、美味しそうだな」

美味しそうだ。凄く美味しそうだが。美味しそうなのだが、如何せん量が多い。おにぎりにしても、ハンバーグにしても、アスパラのベーコン巻きにしても、ジャーマンポテトにしても、たまごやきにしても、種類もそうだがやはり量が多い。

「・・・多いね・・・」

「ちよつと・・・張り切り過ぎまして・・・」

別に責めてる訳ではない。聞きたいのは何時に起きてこれだけの弁当を作ったのか。同じく弁当を作っている身だから、大体は予想ができる。

「・・・作ってなんですか・・・食べ切れますか？」

「・・・ふ・・・」

「ですよ、やっぱり作り過ぎ・・・」

「はっはっ・・・食べ切れないとは言っていないさ、唯一」

「・・・大丈夫・・・なんですか？」

「・・・多分・・・」

最後の言葉は聞かせてはいけない。ただもう責任を持って全部食べると決めてしまったのだ。食後に動けなくなったとしても食べなければ。

「うんうん、美味しいよ」

「東君程じゃないとは思いますが喜んでもらえて嬉しいです」

「いや、美味いよこれ。俺のより美味い」

「いえ、東君の方が」

などといつまでも惚気合う二人。誰か第三者がいれば蹴り飛ばしたくなる様な、自分を保てなくなる様な、しかし二人にとってはそんな空気は斯程も漂ってはいない。

デート　そう意識しているかいないかは別として　には相応しい、安穩とした空気である。

「・・・ふうー・・・もう暫くは動けね」

箸を置く彼は言葉通りテーブルに倒れ、動けない事を全身で表現

している。今思えば作り過ぎた、なんて量ではなかった気がする。明らかに二人分ではない量だった。

それを見事に食べ尽くした彼には賛辞を送りたい。しかし賛辞よりも、心配そうにしているが美味しいと言ってもらった彼女の嬉しさを知る方が、彼も嬉しいだろう。

「ごちそう・・・さま」

「おそまつさま・・・でした・・・東君」

でもやはり食べ終えた後に倒れるのだから、心配せずにはいられない。単なる食べ過ぎだとしても、作った本人からしたらいろいろと考えてしまう。

「大丈夫ですよね？」

「だいじょうぶです、でもちょっと休ませて。・・・苦しい・・・から」

話す分には支障はないが、体は動かせない。この勢いだと夕飯はいや、暫くは食べ物の話題に関しては避けたい。

「隣・・・座ってもいいですか？」

「構わない・・・よ」

顔は下に向けているので唯一がどうしたのかわからない。だんだん声を出すのも苦しくなってきた。

「無茶してないですよね」

「ない」

言葉だけでは信用できない。本当に頭れるのは身体である。今の

アズマの見た目はかなり病的に見える。

「・・・な、何してんの？」

思わず声が裏返ってしまった。いきなり（でもないが）唯一の手が背中に触れる。事の原因としては彼女にあるのだが、そんなに思い詰める程でもない。勝手に彼が食べ過ぎて撃沈しただけ。それでも彼女は心配そうに触れる。おっかなびっくり、たどたどしく、もどかしげに背中を撫でる。

「お母さんにこんな事されたなあ、って思いました」

「・・・でも・・・な・・・」

正直びっくりしている。彼女の手は異様な程に柔らかく温かい。背中に触れるそれは優しく、何故だか安心する。

「わたしも怪我した時に痛くて、泣いて、蹲っていたんです。そしてたらお母さんに頭を撫でられて、そしたらなんだか安心して、痛みが和らいだんです」

見えなくても脳裏に浮かび上がる唯一の顔、満面の笑み。確かに痛み、というよりは苦痛が和らいできています。

「どうですか？」

「あー・・・楽になってきたかな」

嘘ではない。動かそうと思えば動けるし、今から遊園地に行こうと言われれば行けるし、行こうと思えば行ける。せつかくの休みだ、少しでも多く楽しまないと損だ。

「・・・行こうか？」

「はい？」

「遊園地」

なんとか顔を上げられる様になり、やっぱり唯一の顔は想像した通りだった。凄くきよとんとしている。

「はい？」

また問い返されてしまった。今の今までグロッキーだったのに、場違いな提案に顔が険しくなっていく。

「いや、だから・・・」

「いきなり何を言い出すんですか、東君！！！」

「だってさ、せつかくの休みなんだから楽しまないと・・・」

「それとこれとは話が別です。無理して楽しむ事もないんです」

唯一の剣幕に圧倒されてしどろもどろになるアズマ。先程の苦痛はどこへ行つたかわからない。やってしまった感、罪悪感にも似た様なものがある。

「それでも遊ぶと言うなら、あともう少し休みましょう」

「でも・・・」

「でもじゃないです。・・・わたしだって楽しみなんですから」

存外それで毒気が抜かれてしまった。そう言われてしまえば、自分が間違いだと思ってしまう。事実そうだ。

「それに、今も十分楽しいです」

「ん？」

顔を背けていてはつきりとは聞き取れなかった。言ったのかもわからないし、聞き返すのは止めましょう。今はただ休んでおこう。

「あ、そうです、膝枕しませんか？」

「・・・誰が？」

「わたしが」

「・・・誰に？」

「東君に」

アズマの耳がおかしくなっていないければ、唯一は自分がアズマに膝枕をすると提案している。それは耳の異常でもなければ聞き間違いでもない。おかしい箇所などありはしない。

「ナニヲオツシヤイマス」

「お母さんにしてもらったら・・・」

「またかい」

「それにおとといしてもらいましたから」

「それは弁当でご破算という事で・・・」

「ほら、いいですよ」

聞く耳持たずといった会話。既に向こうはする気が満々。膝を空け、手でぼんぼんと叩いている。

「・・・どうしてもするの？」

「どうしてもしたいです」

「強情だな」

「お互い様です」

その後、膝枕をするかしないかで揉める事となり、少年が渋々

かはわからない　折れたらしい。そんな姿があつたかさえも定かではない。

そこはとある公園の隅の方である。人目につく事は少なく、望んで行こうと思わなければ行こうとも思わない場所。そんな場所で四つの影があつた。

一つは上の空で座し、一人は背中に異様なモノをつけて目の前の一人に跪いている。最も異様なのは他の二つであつた。

二つは微動だにせずただただ地面へと、重力の逆らわずに動こうともしない。何しろ二つの内、一つは首から上がなく、もう一つは胴体だけが残っている。切断面は鋭利ではなく、四散した様な形でその表面は焦げ、周りには鼻に障る空気が充満している。

「やはりわかりきっていた事だが、どうしようもないな」

この中で一番まともな影は、この惨状がないかの様に無関心な口

調で話す。

「君達はそれ相応の痛みを与え、与えられた。これを平等とせずな
んとする・・・クズ虫」

目には恐怖の色。寒さでの震えで全身を震わせるのではなく、次
の瞬間には死ぬかも知れない恐怖に震えている。

対して男は未だに無関心。頬が微かに腫れているところ以外は、
何にも気にかけていない。懇願の瞳にも、恐怖に涙する顔にも、慈
悲をくれない冷たい声をかける。選択肢など与えはしない。

「徒に時間を浪費しただけ、方法は一つしかないか」

残念そうに呟き、重い腰をゆっくりと上げる。それに悲鳴を漏ら
す一つの影。しかし男性の想像に反し、男は背を向けて立ち去って
いく。

「さようなら、クズ虫」

それは別れの言葉であり、同時に解放された安堵感により、男性
は地面へと縛れる。押し殺していた感情を吐き出し、漸く呼吸らし
い呼吸を始める。

「さて、次はどうするか。・・・そうだなあれがいいかも知
れない。ああ、最初から目をつけていてよかった。となるとあれだ
な・・・」

男の言葉は一齐に飛び立つ鳥の鳴き声と羽音に掻き消された。後
ろの方では黒い煙と新たな死体が築かれている。安堵に包まれなが

ら倒れる男性の死体が。

「おえつらえむき、標的は遊園地か」

不敵に笑う男。視線の先には仲睦まじい二人の男女がいる。男が思い浮かべる二人の惨状。笑みを隠せず、気取られる前に影は引き、誰にも気づかれる事なく姿を晦ました。

54th「ファーストデート 相応か不相応か」(後書き)

不穏な空気を醸し出すのが苦手ですね。ちゃんと、楽しむだけではありません、っていうフラグは立てられたでしょうか。あと心配なのはデートシーンです。私自身未経験なので、偏見が多いです。だって知らないんだよー！！！！

因みに話の中で出た映画は、私が書いた小説です。詳細は同一者小説一覧から(さりげに宣伝)。

55th「ファーストデート 普通か特別か」(前書き)

千変万化する思いは人へと伝わる。それは人体表現としても、手にしても、顔にしても表れる。どんなにごまかそうとしても、いつかは伝わってしまうものだ。

55th「ファーストデート 普通か特別か」

「覚悟してくださいね、東君」

「いやいや、それって俺が言う言葉じゃないの？」

「だって東君久々なんですよね？だったら、慣れてるわたしがしっかりリードしますよ」

「それなら・・・」

「駄目です」

「だったら・・・」

「駄目です」

「ちよつと待っ・・・」

「もう待てません。行きますよ！」

「ぎゃああああああああっ！！！！！！」

視界が水平から真下へと、アングルががらりと変わった瞬間だった。

「おおーう・・・ふらふらする」

入った時の感動は言葉にしづらい。ただ子供に、童心に返り、目に映るもの全てが輝いて見えた。久々な所為もある。以前、中学時代の頃は今よりも暇があった。それでも行く回数は少ないが、江湮の家族に便乗したりして楽しんだ事を覚えている。

しかし実際、昔に乗った覚えのあるものに乗っても、イマイチ感覚が違う。恐ろしいものだ、技術の発達とは。以前行った遊園地はここより小規模で、子供向けの、それこそ絶叫マシーンなんて数える程しかなかった。

それに比べるとここは大人向け。規模こそ同じだが質に富んでいるものが多く、大人に焦点を絞ったと伺える。

「楽しかったですね」

唯一は案外肝が据わっている。ジェットコースターのあの浮遊感の説明しづらい。いきなり視界が下がったと思ったら、本能的に体を退くが意味がない。重力に引かれて落ち、方向を急転換し、危うく鞭打ちになるところだった。

これをつまらないと評する一季が少しわからない。多分気づいてしまったのだろう。危険に身をおく自分と100%安全な危険に身をおく自分とは、どちらがよりスリルを感じるかを。

「次はあれに乗りますよ！」

「また絶叫ものか・・・」

今度は上から下に急降下するやつ。しかし唯一は本当に心臓が強

い。当たり前のようにホラー映画を見ているからそんな強靱なのか。こっちはなんだか心肺停止しそう。

「顔色が悪いですよ」

悪戯っぽくくすくすと笑う。どうやらここは唯一の独壇場、逆らう事はできるが恥をかくだろう。今まで わざとではないが意地悪したお返し、そうゆう名目の上での言葉。ここは退く訳にはいかない。

「何でもない・・・行くぞ!」

最早意地だけである。勢いだけの空返事である。実質中身は伴われていない。前に進む程に、信号はGOサインを出しているのに自分の中では停止のサインな訳だ。だんだんと顔色も青くなっていく。座席に丁寧に座ると、青を通り越して血の気がない。白にも見えない。はたまた老けて見えるかも知れない。ゆっくりと上昇するマシーン。うつすらと笑みすら浮かべている。決して楽しいからではない。もう一度言う。最早意地だけだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・!」

声は何故か遠い。垂直落下をした所為で、ドップラー効果でも起こしているのか。意識は遠いし声も遠い。ともかく一秒でも早く終わって欲しい。

「きゃああああああつ!」

隣にいる唯一の叫び声も聞こえる。周りの人の声と混ざってなん

とも判断が厳しいが、他人のよりも1オクターブ程高い。楽しみが混じった絶叫だ。とてもじゃないがそんな風に声は出せそうにない。

切に願った事も時間がくれば簡単に終わってしまう。終わるのは簡単だが、終わるまでが難しい。どうしても長く感じてしまう。

「さあ、どんどん行きますよ」

彼女は元気だ。大人数だと温度差ができてあてられてしまう、とは本当の事らしい。彼女も十分熱が高いが、自分では周り程高くないと思っっているのだ。見た目通りに楽しそうで、テンション高めである。

「次は・・・これが」

目の前で左右に大きく揺れる海賊船。つまりは船に乗るらしい。行くのは大海原ではなく、空中を行ったり来たり、でも振幅は大きい。

「・・・たはあーああ」

近づく程に鈍く風を切る音と共に、叫声が聞こえる。いまさら気づく事だが、順番待ちらしい順番待ちは存在していない。持ってないのにフリーパスで乗り物に乗れるし、こんな平日だと人も少ない。休憩時間などないに等しい。流れ作業で、下手すればここにある乗り物が全部乗れてしまう。しかしそんな長時間ノンストップマシン

ン行脚はきつい。

そんな事はお構いなしに腕を引つ張られて海賊船に乗る。気分は海賊に攻め込まれた一般船。黒い旗ではなく降参を示す白旗を立てたい。

「わあー・・・視界が揺らいできた」

声は明るくなく、寧ろ暗く低い声である。もちろん揺らいでいるのは視界もそうだが、乗船しているもの自体揺らいでいる。

「おおー・・・おおー・・・」

船が前後する度、言いようもない不安、ないし恐怖に包まれる。掴めるものに掴まるどころか抱き着いて、とにかく全身を固定させたかった。

時間が経過する程に、振幅も大きくなっていく。さっき地上から見ていた光景がここにある。低速から高速に。顔に当たる風も、徐々に強くなっていく。

「うう・・・ぎいいい・・・」

声を出そうとしないのに、肺から押し出される様なみっともない声が出る。そうでなくてもみっともない姿は見せてばかりである。

「おおおおあああああっ！！！！！」

迫る地面や空に対して叫ばない事はできない。叫ばずにはいられ

ない。失うものなどないなら思いっきり叫んでしまえばいい。それでもやっぱり……

「あああああああつっ！！！！……あああああああ……」

怖いものは怖い。それは否定できない。

「無理に付き合わせちゃいましたか？」

「いやいや、楽しかったよ。ちゃんと、しっかり楽しんでるけど、次はゆっくり目のやつがいいかな」

本音を言えば絶叫マシン系は嫌いではない。寧ろ好きな部類に入るのだが、久々の感覚で体が驚いているのだと思う。でなければパニクる事もない。

「……つかぬ事を聞きますが、もしかして怖かったですか」
「う」

核心をど真ん中に突かれてしまった。動揺を隠せないし、隠す事もない。素直に肯定を示す為に首を縦に振る。

「どうして怖いって思った？」
「えーと……これです」

躊躇いがちに右手を上げる。頬は心なしか赤く染まり、何故か唯

一の右手に変なものが絡まっている。ただ、自分の手を変なものと思ってしまうのは、もう危険かも知れない。

船上で恐怖のあまり掴んだのは唯一の手だったらしい。それなら怖い、という感情が伝わらないでもない。核心をぴしゃりと言い当てる事も可能だろう。

「あ……つと……ごめん」

「あ、いえ、謝らなくていいです」

反射的にアズマは手を放そうとした。羞恥と申し訳なさが原因だが、唯一はそれを放してはくれなかった。放さないで欲しい、と懇願するかの様に、放す力より握る力が勝り結局手は掴んだままである。

「えっ……と……」

「……この方が……自然ですよね」

両手に放さない、放したくないかの如く力を入れる。それを振り払う事もできなさそうだし、嫌がる理由も見つからない。ついでアズマも、なんだか恥ずかしくて頬を赤くしたが、観念して放そうとする行為を止める。降参は逆に改めて手を握り返して伝えた。

「映画みたいですね」

「そんなシーンあったかな」

思い返したり、ひっくり返したりしてもそんな記憶はない。あつたかも知れない、という記憶もない。印象的なシーンはキスシーンと告白のシーンぐらい。他に見落としたシーンは多々あるだろうが、少なくともアズマの記憶にはない。

「そうゆう意味ではないです」
「??.?.?.?」

やはり話が理解できない。問い掛けようとしてもはぐらかされてしまふ。

「ちょっと」

「あっち行きますよ、東君」

あっちに引つ張られる。

「あのさ」

「こつちですよ」

こつちに引つ張られる。

明らかに触れて欲しくなさそうだ。

「あの...少し休憩しますか?あそこに売店がありますけど」

聞かれたくないからこつゆう反応なのだし、もう聞かない様によ。しつこいのも嫌だろうし。

「...そうだな...言われてみれば喉が渴いたかも」

流石にまだ食べ物を入れてる気にはなれない。良くて飲み物、もしくはヨーグルトの様な半流動食のものぐらいしか、胃は受け付けそうにない。

「それじゃ、東君は休んでいてください。わたし買ってきますから」

半ば強引に近くのベンチに座らせると、返事を待たずに行ってしまった。先程からリードばかり。男としてこれはどうなのよ、という感じである。しかし疲れたのも確かで、座ったら立つ気にはなれなかった。

待っている時間は長い。心配している訳でもないが、どことなく不安さが時間を長引かせる。長い時間は様々な思考の琴線を張らせてしまう。

今こうして楽しんでいる自分。こうして笑えるのも江湮がいたから、江湮が庇ったからこうしていれる。江湮がいなかったら病院で寝ているのは自分だっただろう。

江湮は寝ているのに、傷ついたのに、俺は無傷で楽しんでいる。はたしてそんな事が許されるのか。

流した涙の意味を考えるのは、悲哀、を忘れない為。でも戻らなかつたら、戻す気がないなら……。元々の目的は江湮を昏睡させているアイツを殺す為。目的はたったそれだけ。なら他は関係なく、いっそない方がいい。何も感じない江湮を知るには、釣り合わないかも知れないが一生、悲哀、は戻らない方がいい。若しくは江湮の為にできる何かを考えよう。

「……！東君！！！」

「……！あ……ああ、ゴメン、ぼーっとしてた」

今は危ない。多分、思い詰めた顔をしていた。こんな表情はいけない。せつかくの休日が薄れる。

平静を必死で探し、張り詰めた顔を和らげる。でも、行き着いてしまった考えは隠せない。線を結んでしまった点は簡単には切れない。それでもごまかす為に話を探す。

唯一は片手にジューズを持ち、膨れた顔で目の前にいた。それにも目を引くが、何故にジューズが一つしかない。そしてどうしてそのジューズにストローが二つある。なんだろうか、これは。

「・・・あれ・・・俺の分は？」

「ありません」

どうやらご立腹らしい。全然そんな雰囲気は伝わらないが、顔を合わせずに隣に座る。

「・・・もしかして・・・楽しく・・・なかったですか？」

「?・・・そんな事ないよ、それにいきなりどうして？」

「・・・今東君凄い顔をしてました。それで・・・つまらないのかなと思ひまして。結構引つ張り回しましたし、強引な事をしましたし・・・」

「それはないよ」

「でも、思い詰めてました。なんだが・・・なんとなくですけど怖い・・・様な・・・」

やはり見られていた。自己嫌悪に陥りそうだ。あんな事を、今考えるべきではなかった。

「・・・話したくないなら・・・いいですけど」

「・・・でも知りたい・・・か」

「いえ、そんなっ！・・・でも・・・」

「ふー・・・唯一からはいろいろ教えてもらったからな、俺も教えないと不公平だよな」

「そんなつもりではないです！！！」

「それじゃこれは唯一には話さない。独り言ついでに聞いちゃうのは仕方ないだろ」

意味不明な事を言っているのはわかる。でも言わないと多分、距離を保ったまま終わってしまうだろう。少し、自分もすっきりした方がいい。

「・・・俺の所為で意識不明の奴がいるんだよ」

「・・・はい」

「そいつはませたガキで、いつも、どこに行くにも付き纏ってた。煩わしかったけど、それほど嫌とも思わなかった。・・・でも、今はそいつは意識不明、病院で寝てる」

「・・・それが・・・東君が思い詰める理由・・・ですか」

わかっていた、深く突かれる事は。肝心な事は話せないまでも、掠る話は聞かせられる。それでも少しはすっきりする。

「ああ・・・そうだよ。俺の所為で・・・江湮は・・・」

どうなのだろう。ただ意識を失っているだけか、それとも死にそうなのか。トウマは意識が遮られている、と言っていたがどうなのか。本当は・・・。

「・・・前にもファルと一緒に見舞いに行つて、その時も考えた。でもやっぱり、思い返すと傷心しちゃうんだな」

「……………」

独り言、と言って始めた話したが、そんな前置きに意味はなかった。普通に、一方的に話した感じた。

「こんな雰囲気させるもんじゃなかったな……そのせつかくの……休日なんだし」

無理に笑い、本心を隠す。せつかくのデート、とは流石に言えない。本音は恥ずかしいから言えない、この初な少年は。

「……今度……お見舞いに行きましょうか」

「唯一も行くの!？」

「駄目ですか？」

「いや……いいけど……予定がテンコ盛りだな」

「ないよりはマシですよ」

何はともあれすつきりしたのは確かだ。結局、藪蛇だったかは知らないが話してよかったと思う。それでも、思いついた考えは溜め込んだままである。

「そういえば、さつきはなんでムスツとしてたんだ」

「それは……ですね」

言い淀みながら両手のコップを弄る。話しの原因はそれにあるようだ、再考してもアズマにはわからない。

「その……ジュース……かな？」

「……もう……緋色さんに同情したいです」

訳もわからず差し出されたジュース。不思議なのはストローが一つのコップに二つあるところだ。

「……………もしかして……………」

「これは東君の分じゃなくて……………東君とわたしの分です」

思い当たった自分が恨めしい。つまりはあれだろう、あれなんだからこれは本当に蕪蛇だ。何も言えないけど、それだはこの空気が厳しい。

「……………あのさ……………うん……………恥ずいから……………では止めよう」

やっと切り出した言葉だが、やけに逃避的な言葉である。そうしたいのも仕方ない。人波は少ない筈なのに、何かしようとするとな何故か人が多く見えてしまう。

「なら、別な場所ならいいですよね」

「え……………」

「あそこ、観覧車ならいいですよね」

「ちよつ……………待つ……………」

またこの展開。呆けているアズマを強引に引っ張っていく。不意に引っ張られバランスを崩すがお構いなし。観覧車はどんどん近づいてくる。

「二人ですか？」

「二人です」

「足元にお気をつけて」

係員の顔は言葉の割には険しかった。「こんな真つ昼間から・・・
」とか思っているのだろう。でもそれは誇れる事だ。

ざっと見回してみると乗客は数える程にしかない。客のいない
席が延々と回っている。埋まっている席より空席の方が多い。

「飲みますか」

向かいの席に座る彼女は上機嫌。対してアズマは必死で言葉を探
している、この場を打開（逃走）できる言葉を。

目の前にはストローが二つあるコップ。これはもう変わらない事
実。ならこれらを、ストローを一つずつ銜える人物は？

それは唯一と（考えたくないが）アズマ自身である。そしてその
役に相応しくないとはいわれない。何しろその役は、彼
氏がする様な事だ。

「ちよつと待った」

「なんですか？」

「・・・これって、二人で飲むんだよな？」

「わからなかつたんですか？」

「そうじゃなくて・・・その・・・」

「はい」

「こうゆうのって・・・カップルとか付き合ってる人がやるんじや
ない・・・かな？」

出してしまった言葉は戻せない。波を立てて、どうにも逃げ出し
たい気分である。このドアを蹴り開け、外に飛び出したかった。

「カップルも付き合ってる人も意味は一緒ですね」

第一声はそれ。なんとも反応できないから「そうだね」と愛想笑いをして濁す。空振ってしまった話題としてスルーしてくれればいい。

「でも・・・東君の事をそう思っちゃ駄目ですか？」

綺麗で鮮明なる一言。さきほどの詰まらせた声ではなく、明瞭な一波。あまりにもはつきりとした声なのに反応できない。

「な・・・え・・・と」

「東君には・・・好きな人・・・いますか？」

「好き・・・な・・・ね。多分・・・緋色に・・・ファルかな」
「多分、ですか？」

「よくわからないんだ、俺には。緋色とファルには普通な好きで、そうゆう線でいくと唯一も好きなんだろうな。でも・・・特別な好き・・・っていうのかな、それがわからない」

経験上、唯一がどうゆう好きを自分に向けているかはわからないでもない。それでもあやふや、怪しい伝達である。

時間の流れは遅く、長く感じた時も意味がない。観覧車は未だに

頂点には達しず、もしくは一周してしまったのか。どちらにしろまだ話す時間はある。

「・・・東君にはカノジヨはいますか？」

「好きかもあやふやなのに、そんな人はいないさ」

「なら立候補してもいいですか？」

「・・・唯一が・・・カノジヨに？」

「はい」

「それはやっぱり・・・」

「東君の言葉を借りるなら、特別な好き、だからです」

今度こそはつきりと伝わる言葉。でもそこに感情は乗ってこない。わかるのは声だけである。

「・・・言葉は嬉しいよ、でもさっき言ったように唯一の気持ちかわからない」

「それでもいいです。一緒にいてわからないままならわからないままでもいいです。でもわかる事も、知る事もできると思います」

「付き合う事で特別な好きがわかると」

「多分・・・ですけど」

静寂が漂う。唯一とアズマの間にあるのは微妙な沈黙。話そうと口をぱくぱくさせているが、それは空気を求める魚の様に見える。

「・・・へ・・・返事・・・聞かせてくれますか？」

「・・・付き合うか付き合わないかを？」

「今じゃなくても・・・いいですけど」

今ここにあるのは返事を待つ唯一と返事を出そうとしているアズマである。待つのはつらい。そして振り絞った勇気を後回しにする

のもやっつてはいけない。勢いで返事をしては駄目。だからこそ、これが一周する前には答えを出さなければ。伝える言葉は一言だけ。

「……………俺は……………」

重い口を僅かに開く。あとは声を一押しするだけ。それだけの事が、それだけではない重圧をかける。しかし時間はかけてもいい。まだ時間はある。

観覧車はまだ、頂点で制止しているのだから。

「な……………止まってる……………」

いつから気づいていたのか。時間が長く感じた訳ではない。観覧車は止まりかけていたんだ。その証拠に下を見ると、点の集まりの様に霞む人々は皆、この異常さを示しながら指を差している。

「きゃっ！！！」
「っう……」

不意に震える観覧車。同時に根元から黒煙が吹き出してくるのが見える。煙はその性質に従い、空へと上昇し遂には唯一の目にも見えるところまで来た。わかるのは、何か爆発物が取り付けられていたという事だ。

「何が……あつたんですか？」

「わからない……でも……」

この先は言わなくてもいい。逆に言わない方がいい。不安を煽るだけだ。それにそんな事を言うより打開策を考えなくては。

十中八九、これは倒れる。

直感でしかないが、これに爆発物を取り付けるといふなら、これを倒す意図があるとしたか考えられない。ここから地上まで十数メートル。普通にしていたら死は免れない。

では何故、どうして？

答えはなく、かわりに観覧車は更に震える。

「・・・これしかない・・・か」

考える暇はない。もう一度大きな揺れがきたらバランスを保てず倒れる。その前にここから脱出しないと。

「東君・・・何を・・・？」

「逃げる」

こんな一言なら特別な重みもなく口は動く。必要なのは意思だけ。あとは唯一の勇気を借りよう。

「おりゃっ!」

入口を蹴り飛ばせば、歪な抵抗を見せて簡単に剥がれ落ちる。周りに集まっていた野次馬には申し訳ないが、これで少しでもここから離れてくれればいい。

「飛び・・・降りるんですか？」

「まだしない。これが倒れるなら、その時は覚悟してくれ」

望み薄な事だろう、これが倒れずに済み救助されるなどという妄想は。今はただ考え、状況を判断するしかない。

俯瞰は他人を引っ張る。湾曲している視界に体を引き込まれそうになるが、その幻惑に堪える。見ている物は根元、煙を出している部分。

今でこそ警備員が数人取り囲んでいて、野次馬はもう引き払ったようだ。警察も消防隊もない。来る気配もない。いざとなれば飛び出すしか生き残る手段はない。

「・・・心配？」

「怖い・・・です」

「ジェットコースターに乗れる勇氣と告白できる勇氣があれば大丈夫さ。あとは任せてもらえればいい」

いつそ目を閉じてくれても構わない。そうすればあっという間に地上だ。

「手・・・握る？」

「・・・お願いします」

声にも増して体も震えている。怖いのが伝わる。それでもアズマに伝染する事はない。感情を押し殺すぐらいしないと簡単に囚われてしまうから。内心は怖い。でもやる、やるしかない。

「　　っ・・・」

「あ、ああ・・・あず・・・ま・・・くん・・・」

来たる第二波。一度目よりも大きい揺れ、しかも上下にだ。どうやら一気に根元を刈り取ったらしい。ならここから横に傾き始めるだろう。予想通りに地面に引かれる錯覚は横になっていく。タイム

リミットだ。

「行くぞ！」

「・・・はい」

小さな声には確かな肯定。震えも止まってははいない。恐怖も薄れてはいない。あるのは一握の勇気だけである。

唯一を抱き抱え、小さく、この場を打開できるたった一つの行為を口にする。始めから取れる手段などない。今はただ、これ以上親しい人が傷つくのは見たくない。

「dream out」

スムーズに、過不足なく、変わらずに作用する力。感じ方も無情なほどに変わらず、圧迫される様な解放される様な感覚も変わらない。

一息で飛び出し、中心に伸びるパイプに足をのせる。尚も傾くのは止まらない。100%安全なスリルなどではない。危険で命懸けのマシーンだ。

「・・・う」

「しっかり掴まって！」

恐怖のレベルを上げながら落ちる観覧車。左手で唯一を支え、右

手でバランスを整えながら移動する。できるだけ下へ、作用される力が遠い方へ。

片手が使えない以上足に頼る移動。素早く、傾くよりはやく、重力よりはやく。張り巡らされた足場を蹴り、下へ、腕の中にある唯一を必要以上に庇いながら下へ。

ともかく一刻でもはやく下へ。あらゆる行動を省き、唯一を安心させなくては。

「うおおおおおおおっ！！！」

出そうとして出る声でもないし、単なる意地による声でもない。恐怖を押し殺す為に、救いたいが為に出てくる声。

「ぐ……っ」

無事、かはわからないが漸く辿り着いた地面。それに感慨を浮かべる暇はない。両足の痺れにも頓着はしてられない。すぐさま駆け出し、観覧車から離れる。

「あ……東君」

「どうした、なんかあったのか!？」

「あ……あれ」
「つ……な……」

観覧車の倒れる真下、その延長線上を唯一は指差していた。その先にあるものを見て絶句する。あったのはベビーカーだった。耳を澄ませば微かに赤ん坊の泣き声まで聞こえる。

「つ……唯一、走れ!!!」

「東君、まさか!」

「だったら走ってくれ!!!」

唯一の行動は、人間として普通の行動は自分を恨まずにはいられなかった。何せ彼を危険に真っ只中に突っ込もうとしたのだから。

「ごん……ヤローが!!!」

上下から左右の運動。足の痺れは未だに残留。筋肉は攣る寸前である。叱咤してもそれは変わらない。

「つ……」

なんとか赤ん坊のところまで駆け寄り、はたしてベビーカーの中にいたそいつを抱える事はできた。が、あと数秒で測る事のできない重さが自身を押し潰す。

「東君!!!」

声のする方を見れば、今にもこちらに駆け出してきたような唯一の姿がある。必死で自分を押さえている、危険に対する反射に抗おうとしている。

それは駄目だ。ここに居続けてはいけない。このまま居続けたら、このまま地団駄していたら唯一がこちらに来てしまう。それだと自分だけではなく唯一までも殺してしまう。

「唯一ー！絶対来んなよ！！！」

引き攣った足を引きずり、不格好なまま走る。フィードバックと腕の中の命で足取りは重い。それでも走る。罪の力だと緋色は言った。世界を呪いたくなると一季は言った。でもこんなモノで人が救えるなら、この力に頼りたい。

「あああああああつ！！！」

背後からこの世のものとは思えない不協和音が響く。危険、それはもう実感済み。その場において駄目なら、せめて最後の悪あがき、体を投げ出してみよう。

頭からヘッドスライディングをするかの様に突っ込み、直後ド派手な大音量と共に風が体を攫っていく。ジェットコースターとは違う浮遊感。破片やら残骸やらも風に飛ばされ、周りでリズムのない合奏をしている。

「……………つ……………」

何度か転がりやつと止まる。今までの絶叫マシンよりも遙かに濃密な時間。老けただろっし、下手をすれば寿命が尽きた。でも背中を刺激する破片と腕の中で泣いている赤ん坊の声には、生きていけると実感できる。

「大丈夫・・・か？怪我はなさそうだな」

怖い思いをした赤ん坊は、留まる事を知らずに泣き続ける。この命は凄く重い、腕がもう動きそうにない程に。

「・・・それにしても重い」

タオルケットに包まれた赤ん坊は、なんだか普通ではないくらいに重い。心なしかごつごつしていて、でも確かに赤ん坊である。

「ん・・・ちよつと失礼」

失礼を承知でタオルを剥ぎ取る。動き、命をその内に宿しているのが見える。ゆとりのある服を着ていて可愛らしい。

首元に奇怪なモノがついていなければ。

「なんだよ・・・これ」

手の平サイズの小さな箱。取れそうになく、無理に取ろうとすれば赤ん坊を殺してしまいそうだ。そしてそれにはデジタル標識で数字が刻まれている。誰がどう見ても、それは爆弾にしか見えなかつ

た。

「東……君……」

か細い、そして震えた声がまだ聞こえる。どうしてだ、ちゃんと地上に下りられ、こうして俺も無事だというのに、なんでそんな恐怖に怯えた声なのか。

「なんだ、君も特別か」

顔を上げれば見知らぬ誰かが唯一の隣にいる。ただいるだけではなく、口元を押さえ、人質を取ったかの様にサディスティックな顔をしている。

「……お前……誰だ……」

「ふん……ファインダーだとは教えてやるぞ」

あまりにも今日は予定が盛り沢山すぎる。こんな事、予想できる

筈がない。

55th「ファーストデート 普通か特別か」(後書き)

なんとか書き上げました。しかし今回からあれですね、一波乱が予想されます。フラグとか露骨すぎやしませんでしたかね。バレバレでしたかね。

56th「ファーストデート 戦闘か論説か」(前書き)

隠し事、秘め事は物事を円滑に進めるにはいらぬ要素だ。思い
がけずにそれが漏れてしまうと、相手との信頼は崩れる。話せる勇
気があれば・・・ないからそうなるんだ。後悔する前に話さないか
ら・・・

56th「ファーストデート 戦闘か論説か」

公園での見るに堪えない行為から一転、最寄のコンビニでコーヒーを買いただけ買い、あまさとおさらばした。昼食はなんとも悲しいがそれで済ませ、今は遊園地に向かいながらも迷っている、このまま尾行を続けるか否かを。

「やつぱりよん、こんな尾行は傷つくだけだったんだよん」
「……………」

緋色とファルの二人は無言のまま歩く。ブラックコーヒーをがぶ飲みして苦しいから何も言わないのか、それとも別な事を考えているから何も言わないのか。どうせ後者だろう、と一季は思うが、むやみやたらに詮索はしない。無駄なだけであるから。

「……………ん……………」
「……………どうかしたの……………」
「……………ああ……………観覧車がないなん」
「え……………」

遊園地にならどこにでもある、逆にそれが目印となる物が消えている。それどころか立ち上っているのは黒煙であり、ついで胸中にも火種がまかれ、煙はどんどん立ち上る。

「何、ある？」

「わからないがなん、なんかあったのは確かだなん」

それは言わずとも知れている。わざわざ口にしたのは、走り出す合図を送る為。三人が願うのは親友が面倒事に巻き込まれていない事、もしくは進んで巻き込まれていない事を。どちらにしても、その可能性は極めて低い。

入口付近に見られる人波は皆慌ただしく、恐怖と混乱の色に染め上げられている。口々に言われる台詞が「テロなのか!？」という半ば叫びにも近い問い掛け。警備員はそのパニックになっている人波に揉まれ、どうにも話は聞けそうにない。

「・・・あの・・・何かあったんですか？」

側にいた、自分の子を宥めている冷静そうな母親に聞いた。喧騒を撒き散らす人に聞いても滅多な情報はないだろうし、火に油を注ぐ行為になる。

「・・・遠目だったんですけど・・・観覧車から煙が噴き出して、聞いた話だと観覧車に爆弾が仕掛けられていたんらしいんです・・・でもまさかホントの事だとは思えなくて・・・」

それは三人の心にも油を注ぐ言葉となった。不安の火種は大きく炎上する。

「ホントの事・・・って、なんですか・・・？」

「朝、ニュースでやっていたんです。今日の未明頃に爆弾を仕掛けた、っていうニュースが・・・」

「っ、アズマ・・・っ」

「待てよ、緋色！」

「どうして止めるのよ一季！アズマが・・・アズマが首を突っ込まない訳ないじゃない！！！！」

それは彼にもわかる。話しを聞いている間に周囲を見渡してもアズマの姿はない。あるいはまだ見つけていないだけかも知れないが、緋色の言う通りアズマが首を突っ込まない訳がない。やはり、願いは聞き届けられない。

誰に？

神様に。

本当にいると思ってる？

答えはNoだ。人の願いは人にしか届かない。だから願いは彼に送っている。それなのに彼は・・・。

「ともかく落ち着けよん。まさかこの人波を行使して抜けるつもりじゃないよなん？」

「う・・・」

「ここにいる人を全部吹っ飛ばして、閉められたシャッターをこじ開けたら、体力はないだろん」

「でもっ・・・！」

「一度深呼吸しろよん、まずはそれから。僕も本当は全部吹っ飛ばしたいんだからなん」

その言葉に渋々同意し、一度ではなく何度も深呼吸した。深呼吸と呼べる程、深くゆっくりとはなく、浅く早くだが。ともかく、冷静にはなってきた様だ、一季も含めて。

「じゃ、行くかなん。ファルはサーチを頼むよん。中にいるかを確

「認しなきゃなん」

「物、ない」

「大丈夫だん、前もって拝借してたからん」

バッグから取り出したのは、ごくごく一般家庭にあるタオルである。無論、アズマのタオルであれば意味は違ってくる。

「見失った時用の物だったんだけどなん・・・仕方ないかん」

「準備だけは万端ね」

「そんなもんだよん」

「dream out」

黒白の板はタオルを乗せると淡い光を集め始める。光が収束したと同時に一本の線が伸びる。当然の結果だが、ありえない願いはここで消えた。あと願うのは無事だけである。光が指し示す先は遊園地。行き先は決まった。

「飛び越えるのは厳しいなん。裏口を探すかん」

人が集まる出入口は最早機能をしていない。裏口を探して、手段を選べないなら強引に出る事も考えられる。もしもの時は強行突破も遣る瀬無い。

首元の歪な機械に気をつけながら、赤ん坊の頭を支える。泣き続ける声は耳に入らない。敵意は完全に、意識は彼に、唯一を拘束している奴に向いている。

「そう構えるな、何せ同じ特別なのだから」

「無理だな、それは唯一を放してから言ってくれ」

「そうか・・・唯一ね、ところで君の名前は、って東・・・だったな」

「それがなんだよ」

「それだと不公平だから教えてやるか。とりあえず嘉川義かがわぎとでも呼んでくれ」

「関係あるのか」

「不公平っていうのが嫌いだから」

親しげに見せる笑みは友好の証。しかし逆もまた・・・である。

この男の笑みは別の意味、何か深いものが見え隠れしている。

「・・・唯一とは知り合いなのか？」

「朝に少々邂逅を」

「・・・本当なのか・・・？」

口元を固定されたまま微かに頷いているのがわかる。

「何か喋りたさそうだな。いいさ喋ったって、凡人に耳を傾けるのは特別の役目だ」

さつきから癪に障る。ともかく一難去ってまた一難。疲労が冷静を連れて来たのは丁度いい。フィードバックがあるからまともに動けないのは厳しいが。

「・・・東君は・・・何者なんですか・・・？」

「それは・・・あとで話す」

「それには・・・わたしも、賛成です」

こんな状況でも笑える唯一は本当に肝が据わっている。その顔は何か怖いものを見る様な、訴える様な何かだとしても。

「それにしても予想外だった。が、嬉しい誤算だ。まさか目をつけていた彼女のツレが同類なのは思ってもみなかった」

二人の会話に入る嘉川義。アズマと唯一の会話は理解できるが、対象を変えるとそれは違う。アズマと嘉川義の会話を唯一は理解できない。

「東は何を消失したのか教えてくれないかな」

「言わねえよ」

「だろうな、弱点だからな」

本人としては教えてやる義理はないものもある。ただ弱点になる事は薄々だが感じていた。なにせ、ない感情は感じない。だったらどうなる。文字通り空虚で、胸に穴が空いた様な違和感がある。それに 皺寄せがくる。

どんなにその時の記憶が色褪せても、どんなに感情が薄れても、忘れる事はできない。今までだってそんな事はしょっちゅうだ。江湊の件を思い出す度に、悲哀はななくせにその周りに鎮座して

る感情が余計にざわめく。

後悔、罪悪感、憤怒、遣る瀬無さ、脱力感、痛み（身体的ではなく精神的な）。様々な感情が自身を締め上げ、不自由にさせる。穴を掘っても、掘った分の土が消える訳ではない。どこかに置いていくだけ。その穴を埋めるのに違うところから土を持ってきても変わりはない。それと同じで悲しみという大きな穴をどうしようもなく埋める為に、周りに伝播する。

つまり相手の消失した感情をちくちく突いてやれば、何も無いのにトラウマが周りに手下を引き連れて攻撃してくる。トラウマを思い出させるだけでもいい。そうゆう訳で教えてはやらない。今でこそ精一杯押し殺しているのだから。

「・・・消失・・・？」

「その様子だとなんにも聞いてないのか」

「話さなくていい」

「彼女だけのけ者にするのは不公平だろ」

「この・・・！」

「あとで話すなら今話しても変わらないだろうよ」

確かに話さなかったのは今までの時間的余裕がない事と、話す必要のある関係ではないと思ったからだ。そして今話してもあとで話しても変わらない。その通りで事実そうなのだが、変わるのは精神状態だ。今の唯一の精神は摩耗して擦り切る寸前である。

「特別な　つまり私たちは感情が一つ欠落している。あらゆる原

因、理由、状況により願ってしまつ。そして願いは聞き届けられ、消えていく、もしくは廃れていく」

淡々とした口調で、まるで教科書があるかの様に語りは止まらない。

「ある人は考えた、もしかしたらこれは罪なのだ」と

これには激しく頷ける。俺は緋色から、緋色はトウマから、そしてトウマは・・・誰か。

「また違つう人の考えは、これは与えられた特別な力だと」

「なつ・・・！そんな事あるかよ！」

「・・・さて、私は後者に同意だが東は違つうらしい。で、ありえないという可能性は捨てた方がいい。なにせ世界は常に公平にしたがる。賛成意見があれば反対意見があるのは世の常だ。東みたいに罪と捉える奴もいれば、私みたいに特別と考える奴もいる」

なんて事はない話だ。そうゆう考えの奴もいる。でもそうゆう奴に限って、自分に酔っている危ないのが多い。

「また別の話をしよう。先程聞き届けられると言つたが誰にかな。言うまでもなくそれは世界で、もしかしたら世界は私達人間を殺したくない、と思う輩が出てきた」

「殺したく・・・ない・・・？」

「なんだ、東も初耳か。そうかそうだな、今までここの地域一帯はあるファインダーが統率していた」

「・・・トウマ・・・」

何故か頭に浮かぶ無精髭の生えたあいつの顔。そことなく構い、助け、導いた奴。

「確かそんな名前だ。話は戻り、私たち人間を殺したくない、愛している人物はなんとこの世の全て、世界ときたものだ。だからこそつまらない感情の一波で死ぬのはやつてはいけない、とね。ま、神様と称する人もいるがこれにはお笑いぐさだ。しかし納得せずにはいられない。ところで二人は神様の存在は信じるか？」

「・・・そんなこと言われても・・・わかりません」

「東は？」

「いるとは思わない。人を愛するのは人だけで、殺すのも同じく人だ」

「・・・みたいだな・・・」

「それに・・・」

「それに？」

「救うのもまた、同じ人間だ」

長い雑談のおかげでそれなりには動ける様になった。長時間の行使は厳しいが、せめて唯一を助けるまでは動いていて欲しい。

「臨戦体勢、やる気は十分か。つまりあれか、東は唯一は救いたいけど、その赤ん坊は殺したいと」

「そんなバカな話があるかつ！」

「それがあるんだよ。二つの内一つを助けるなら、片方が助かるならもう片方は助からない。ほら、観覧車に乗ってた他の客もそうだ」
「そんなの・・・屁理屈だ！」

未だ倒れた余韻を残している観覧車。粉塵を巻き上げ、燻っている火すらある。その傍らに、乗車する部分から朱い何かが・・・手折られている白い茎が・・・

「・・・う・・・」

「見るなっ！！！！唯一！！！！」

人の死体など一生の内に何度見れるかわからない。逆に見ない人の方が多数であり、今の今まで動いていた、生命の余韻が残留している死体を見るのはトラウマものである。耐性がない人には辛い現実で、アズマもまだ慣れた訳ではない。

「当然、目を逸らすか」

「・・・dream out」

唯一の精神は摩耗して擦り切れた。こうなると恐れるべき事がある。無意識の下に願ってしまうかも知れない。唯一の中にある何か、消えてほしい（・・・）と願ってしまう感情があるかも知れない。それだけはいけない。

最早待つてはいられない。赤ん坊を下に置き、槍を構える。嘉川義は未だ唯一を支えながら悠長に構えている。まだまだ喋り足りない様子。

「ところで東に聞きたい」

「・・・黙れ、雑談は終わりだ」

友好的ではない声。およそ抑え切れない怒気が含まれている。声だけで相手を威圧できそうな、そんなアズマの声。

「想造つてなんだと思う」

「世界に訴える一番短い詠だよ」

「簡潔だな。そう詠、フィックスだな。dreamをつまり夢を、

o u tつまり形に顕す世界に語りかける詠

「何が言いたい」

「予想を立てた輩の話の続きがある。このdream outは、もしかしたら世界を作り替えるモノではないか、と」

頭の中でカチリと噛み合う音。パズルのピースだか歯車だかはわからない。ただ確かに、何かに気づいた。自分は想像して創造する自分がこうである世界をつくる。こうでありたい世界をつくる。例えば槍が今、手元にある世界をそうぞうすれば、槍は手元に顕れる。局所的に世界をかえる。そう思うと辻褃が合う。世界は人を愛していて、しかし一つ疑問がある。世界からは抑止力がかかる。これはなんなのか。

「・・・なら・・・世界からくる抑止力はなんなんだ」

「それも公平。表なら裏、正なら邪、そして愛なら・・・」

「・・・憎」

「世界も人を愛するなら憎む事もある。ワンダーにしる、抑止力にしる世界からの憎しみなのだろう」

わからなくなってしまうた。どれが真実でどれが間違いだか。そもそも間違いなんて考えるからしておかしい。世界は結局人を・・・どっちなのだろうか。

「とまあ、全部某ファインダーの推測な訳だが・・・思いの外堪えたか」

「・・・」

「なにしる今からそれを、世界の理を自分がやろうとしてるからな」

何がしたい。嘉川義の言う通り正解はわからないが、納得すれば疑問が解消されてしまう。ならなんだ。俺は結局、唯一を生かした

いから誰かを殺したいのか？

「　　ところでいいのか？私はとつくの昔に行使しているのだが」

行使の条件は dream out と詠を紡ぐだけ。あとは自分の意思で続けるか止めるか好きにできる。既に、この爆弾が想造のモノだとして、嘉川義は説明の中でフィックスと言った。大々的に、問題の中に答を堂々と曝していた。なのに気づかない。なんて・・・バカだ。

「ルールを定めよう。まず公平さを期すために勝ち負けしかない、もちろん引き分けはなし。負けた方は死んでもらう。爆弾のタイムーがゼロになったら爆発。解除する方法は一つあり、それで解除できる数も同じく一つ。範囲はこの遊園地。」

このゲームの最大のネック、解除の方法だ。方法は相手の爆弾に私たちが触れたら外れる。時間は一時間。ではジャストタイム（公平な最期の時を）・・・スタートだ」

詠は終わり、ゲームのルールが決まる。考えればわかる。ルールの説明が詠であり、わざわざ説明するのはそれを条件にしているのだろう。フィックス、と紡ぎ、ルールを教えよう、という嘉川義の決まり文句。それでおしまい。あとは定めるだけ。

鳴り響く電子音。それは赤ん坊の首元の機械から、それと唯一の右肩からもその音は聞こえた。ゲームスタート、悪戯開始、^{ゲーム}流れる

時間は止まらない。

ゲームが始まってても奴は動こうとしない。唯一を手放す事もせず、ただ歪な笑みを、隠しきれない深い喜びがそこにある。

「ほら、動かないのか？なんなら私が赤ん坊の爆弾に触ってもいいんだぞ？」

「……………どうしてだ……………」

「は……………」

「どうしてこんな事……………！……………するんだ」

下げた槍は今にも消えそうな程にぶれている。動揺の表れ、想造したモノに伝わる揺らぎ。言葉にすら力はない。

「テンションが下がる事を言わないでもらいたい。なんでやるか、だと。そんな事は私も聞きたいな。何も感じないからやってんだよ！この野郎があっ……………！！！」

空いている手で頭を掻き篦り、整っていた髪が乱れる。心なしか穏やかだった顔が歪み、揺らぐ。だとしても爆弾の存在は揺らぐ、それどころかより克明に存在感を出している。

「目的なんざ知るかよ！こいつらの存在価値なんて、心を揺らがせる事にしか価値がねえんだよ……………！！！」

何に激昂しているか謎である。ただこの状況は危険であり、唯一はとぼつちりを受ける可能性が高すぎる。人質とする事も捨て切れないし、何より迂闊に近づけない。迂闊に近寄って機械に触れたら赤ん坊は助けられない。

本当にそうか？

本当に助けたいのは唯一な筈だ。二つに一つ、取捨選択の人生。片方を切り捨てなければ・・・

そんな器用なマネはできない。見捨てる事なんて、できやしない。できるさ、簡単だ。見ず知らずの他人とこんな俺を好きだと言ってくれた彼女。天秤にかけるまでもない。今ならまだ赤ん坊。なんとも思わず、恨みも残さず、死んだ事もわからずに死ぬ。今なら殺せる。

こんな力でも人を救えるなら・・・

なんて浅はかだった。救えるものなんて、救うなんて傲慢な考えだ。嘉川義の言う通り、公平な判断を下して片方を見殺しにしたにすぎない。

「アアズマアアーツ！どうせ殺すなら抗ったあとに殺せえ！そつちの方が嬉しいぜー！」

放心状態の唯一を地面に投げつけ、更に拳を上げる。挑発行為なのか、扇動しているのか。真意はわからない。ただ、その挑発にのらずにはいられない。

「止める・・・」

拳が振り切れる前に槍の柄を唯一との間に挟む。嘉川義の顔はい

かにも嬉しそうだ。満面の笑み、しかし歪さは変わらない。楽しい事を予想する子供の様だが、予想しているのは抗いを踏みに行かせる為だ。

「くかか・・・で・・・どっちを見捨てんだ？」

「・・・唯一、ちょっとあっちに行つてくれるか」

まだ追いつけていないが、言葉は理解できたようだ。首を何度も縦に振り、四つん這いのまま、先程置いてきた赤ん坊の方まで離れる。

「おい、東・・・」

「・・・まだ考え中だよ。やっぱり・・・そうそう変える事はできないらしい」

「あ・・・？」

どちらかを切り捨てる事は厳しい。関わってしまったのなら、せめて一緒に、最後（助ける）まで関わろう。

「迷いながらも・・・進むしかない」

救えはしない。救う事はできない。だからこそ槍は心を通じて揺らいでいる。迷いはある。どうゆう結果になるかわからない。だからこそぶれる。その様子になんとも言えない、強引に判断するなら更なる喜びの表情を見せる。

「いいぜ・・・サイツコーだぜ！こんなにも不公平さがあっていいのかよ！！こんな楽しみを独り占めなんて・・・ハハハッ・・・殺してやるよ、目一杯生を謳歌したあとに殺してやる！！！！」

喜びは最高潮。そんな喜びは理解できない、理解したくもない。槍を構える表情は不安。どちらに転ぶかわからない結末。頭の中でぐるぐる回る算段は形にできない。迷いながらするほど器用でもないから。

形を成しているのはただ、傲慢な行為だけである。

56th「ファーストデート 戦闘か論説か」(後書き)

あれー・・・キャラを掴めない。先延ばしして訳ではないんですけど、戦闘は次回からです。どうやってまとめようか・・・凄くない安です。

57th「ファーストデート 生か死か」(前書き)

罪の意識の大きさはどう比較する。大勢の人を殺した？取り返しのつかない事を他人にしてみました？他人を傷つけてしまった？

全部違う。計るべきは他人ではなく自分である。その出来事に対して自分の内に許容できないから、罪としての意識が生まれる。

火花、というよりは小さな燃焼反応の様な、軽く目に焼き付く光と煙が出る。めくらましになるほど眩しくなく、火傷にするほど熱くはない。

しかし相手の武器は素手である。まるっきり素手という訳ではないが、ほとんど素手である。あるのはあかい、深紅の手袋の様なモノで、槍を防ぐのは甲に着けている籠手ぐらいなモノだ。

これのどこに爆発を発生させる要因があるかわからない。脅威と考える程に考慮しなくてもよさそうだ。今は詮索が先ではない。糸口を探す方が先決である。

最悪の結末は容易く想像できる。だが最善の結末だとしても結果は変わらない。どちらに転んでも結果は変わらない。それを変えたいからこうして神経を擦り減らしているのだ。

あと何分？

多分50分。まだ、ではない。もう50分しかない。見出させるか、いや、見出だすしかない。何としても・・・だ。

槍を突き出し、躲した方向に合わせて横に凧ぐ。籠手と衝突し爆発が起こる。煙に色がなければ、白い煙で身を隠す事もできない。そして先程から爆発が起こる度に何か当たる。

頭が下がり、視線を落とすと拳を構える姿が見える。理解したと同時にボディブローが飛ぶ。それを柄で防ぎ、再度爆発。そうして一区切りをつけたのか、後退し距離を離す。

「・・・ふう」

先程当たった何か。頬に付着したそれは、着いた瞬間に冷たさを感じた。体温を微かに持つて行く液状のモノ。指先で拭い、匂いを嗅いでも何もなし。恐る恐る舐めてみるが味もない。

「何もないさ、舐めたって。何せ水だからな」

ポケットから取り出した水を口に含み、一息ついている。今の少ない時間でそこまで疲労したとは思えない。肩で息をするほど動いた様子もなく、他に要因があると伺える。

「いや・・・違う・・・詮索は駄目だ」

素早く、迅速に、勝負を。それでも考えついた後の事である。先に攻める事はせず、こうゆう時間に考えなければ。でないと多分、囚われてしまう。戦闘だけに没頭してしまふ。そうしたら考えられなくなる。

「どうした・・・もっと足掻いてみせろよ・・・足掻いて抗って努力して生き延びてっ！！・・・そうして殺させろ」

そんなもんごめんだ。

もう46分。

時計を盗み見て焦燥を訴える心を押さえつける。まだ、糸口どころか糸すら見つけられない。

「くく……かかか……」

「ちっ……！」

舌打ちするしかない。戦鬪に快楽を覚える奴はロクな奴がない。自分の力に酔い、相手を傷つけるサディスティックな奴。嘉川義は更に先にある結果を思い描いて楽しんでいる。

足掻いて、抗って、努力して、生き延びて、そうして奴の望む結末になんてしてやらない。絶対に、無様に殺されるなんてしてやらない。

槍と拳を合わせる度に起こる小さな爆発。意識を逸らすのが目的だか知らないが、今はただ黙すのみだ。

「……っ……！」

不意に重心が崩れる。突き出した槍を掴まれ、後ろに退けない。お返しだと言わんばかりに右の拳が突き出される。咄嗟に左手を槍から放し、急所を防ごうと顔を庇う。多分大丈夫。覚悟さえすれば熱さは堪えられる筈だ。

その判断がまずかった。何故そんな事を不意に思ったか。何かに笑っている顔。僅かな間にそれを見てしまったから。何に笑っているかは、何かを策謀しているからに決まっている。

「ボン（爆破）」

殴打と同時に、心底楽しそうな顔でそんな事を呟いた。

「がつ!!!」

唐突に焼け付く感触と鋭い痛み。体中の水分が蒸発したかの様な錯覚。事実、左腕から先程の焼き直しが、白い煙、水蒸気と血が飛び散る。段違いの威力の差と肉を焼く厭な臭いだけは先程と違うが。

「ぐ……おおおおつ……!!!」

激痛と疑問で反撃など予期していなかったのか、腹に目掛けて放った蹴りは見事な手応えがあった。だからといって差し引きはゼロではない。こちらは継続的な痛みに対して向こうは瞬間的な鈍痛。今ので優劣は一気に傾いた。

あの程度の爆発だった（……）のに今のは下手すれば腕が吹き飛ぶ。この威力の段違いはなんだろうか。

「ハハハハハハ……どうしてなかなかタフだな」

「つ……ぐうう……」

「まだ死ぬなよ、もっと足掻いてみせろよ東!!!」

頭の中がきんきんする。痛みの所為もあるが、今朝も似た様な、以前にも体験した様な感覚。確か脱水症状……だった気がする。

「知らないのは不公平か。テンションも下がるしネタばらした。単

なる爆発だと思つなよ？水蒸気爆発だからな？答えだけは教える、あとは自分で考える」

なるほど、それなら合点がいく。頬に当たつた水はあの爆発でできたものか。ならその前はというと嘉川義の、自らの水分を蒸発させていた事になる。だからあんな小さな爆発しかなかった、できなかつた訳か。

今の爆発については俺の水分を使ったから。他人の水分なら関係ない。使いたい放題だ。ただ、他人の体から水分を引っ張るのなんて無理がある。まず初対面の人の体なんて知らない。

年齢、身長、体重、血液型、視力、聴力、体温、他にも諸々、様々な情報がないとノウンはできない。だからあんな威力はありえないだろうに。

「不思議そうだな？問いの答えは唯一の弁当さ。朝の邂逅で仕込んでおいた。だから東の情報は全部ノウンできてる」

あまりの弁当の美味さについつい平らげたが、あの中に嘉川義の想像物があるとは思わなかった。もう他人の体内だから手出しはできないだろうが、情報は伝わったままだろう。だからこそ、すんなり他人から水分を引き出せた訳か。かといってあの威力の爆発を至近距離で受けたら、向こうも無事では済まない。

「・・・つう・・・へ・・・へへ・・・」

気味が悪くなってきた。やはり器用なマネなんかできやしない。全力で糸口を探すか、全力で嘉川義を倒すか。どちらかに偏らないと結果は変えられない。いや・・・仮に後者だとして意識を奪うなんて生易しい事は考えない方がいい。本気で・・・殺す気でないと。

できるのか？刃を向ける事でさえも躊躇うのに。経験は一回きり、それも囚われた状態で。囚われていない状態でも避けているというのに。

答えは出てる。殺せば・・・殺してしまえば・・・意思は関係なく爆弾は消える。

答えに対して見て見ぬフリをしても意味がない。一度見てしまえば視線はそちらに向く。考えられる答えがそれしかないからだ。

「ふー・・・」

決心するまでの時間は少ない。公平な決断をするなら嘉川義にもある。他人を殺すなら自分が殺される事も考慮しろ、痛みを知れ、自分にも・・・言える事だ。

「・・・嘉川義・・・」

「なんだ？」

「お前を」

言ってしまう方がいい。あとは決心を下せ。そうしてしまえばほんの少しだけ・・・楽になる。

「 殺す」

体が冷えるのが感じる。頭の奥がぴりぴりする。呼吸が荒い、手が震える、視界が揺れる、槍はぶれる。決意を固めるまで、もう少し時間が欲しい。

「くくく・・・やってみるよ。だから東、お前を 殺してやるよ」

意識が遠退く。脱水症状だけが原因でもない。まだ決心しきれない自分がいる。非情にも、冷静にもなれない。勢いでやれたらどれだけいいか。いつそ囚われてしまえば・・・なんてできる筈がない。

ざわめき始める心の内。それでも守りたい人が、こんな自分でも助けられると思いたい。自問した後の、そんな気がする自答。結局迷っているのは今に始まった事じゃない。

残り32分。決断するまでの時間でもあるし、できなかった時の時間でもある。素直になつてしまえば、大事な方を選んでしまえば、天秤にかけてしまえば、そんな事は関係ないのに。やっぱり・・・そんな器用な性格じゃない。

「ん・・・さあ、リスタートだ!!!」

失った水分を摂取し、再度始動する。嘉川義の拳が眼前にまで迫る。とにかく殴られるのは危険と判断。極力触れさせず、弾き、リ

「チの勝る槍で牽制する。しかし使えない左腕だけで捌ききれぬ訳もない。」

「らあっ！！！！」

それを覚悟でのクロスカウンターである。相手の行動が読めるなら先に手をうたないとサンドバッグになる。槍をかい潜る嘉川義に對して、顔に蹴りを放つ。

「ぶっ……ぺっ……この……」

奴にしたってあの爆発を乱発したくはない筈だ。先程の爆発で自分自身もダメージを負っていた。両刃の剣で使い勝手が悪い。元々一対一に向いているものでもない。

だからこそ危険性もある。自分の損傷を省みず、相打ち覚悟で突っ込まれるのはきつい。手間が省けるのもあるが、結局は我慢比べだ。こちらは多大な不利を背負ってのだが。

「っ……ふー……」

動かすだけで変色した左腕は激痛の荒波を立てる。幸いにして流血は一瞬だけだったが、空気が触れるだけでも痛い。水でも、何かしら冷やしたいがそんな暇はない。

「へへ、痛いか？もう一発喰らうか？」

「ゴメン被る。そんなマゾじゃないからな」

時間は残り19分。冷静にしている暇はない。

フェンシングの様に槍で突き、間合いを潰す。しかしこれでは先延ばししているに過ぎない。力も伝わらず、嘉川義に当たる頃には簡単に躲される。拙い槍術では余計に時間を与える。

殺す気なら殺せ。そうじゃないなら諦めた方がいい。もう時間は残ってない。

「しまっ……」

焦る心が手元を鈍らせた。それはどうでもいい。へマをした事に変わりはない。

槍を掴まれ、次はどうする？また腕か？それとも急所か？右腕か？手はどこに動く。

右腕に拳を向く。予想していた通りに嘉川義は動き、反応は容易い。槍から手を放し、手から逃れる。

「くくく……」

それでもこいつの笑みは消えない。何を狙っている？この笑みの正体はなんだ？

答えはすぐにわかる。というかほとんど直感的である。

「っ……」

アズマの右足の上に嘉川義の足が乗る。乗るといっほど生易しくはない。碎く勢いで踏まれた足はそれだけでこそ激痛だが、それだけで終わりなどある筈ない。

「おい・・・まさか・・・」

「ボン（爆破）」

視界を奪う閃光と意識を揺らがす激痛。先程の焼き直し、ただし場所は違う。機動力の半分を奪われた。

「ぐ・・・あ ああっ！・・・へへ・・・手だけかと思ったか？残念だったな」

手だけだと思ったのは確かに早計だ。内心でばやくが、時間に縛られるというのがこつも煩わしい。

今ので足を動かすのに支障はないか。大した痛みでも、大した痛みでなくても我慢しよう。歯を食いしばって、痛みは全部奥歯に集めよう。でないとなやってられない。意識が飛ぶ前に、ケリをつけな

いと。

「つつ・・・あ・・・」

痛みがある。痛みがあるなら足はついてる。ついてるならまだ動ける。動けるなら・・・奴から目を逸らしてはいけない。

「おー・・・オツケーオツケー。しっかり足掻いてるな」

「・・・うるせえな」

爆破された部分は多分足首。あまりにも痛みが拡散していて細かな部分がわからない。嘉川義の足もいろいろと惨状になっているが、そうなるとアズマの足は目も当てられない。

「・・・どうせ・・・あと一発が限度なんだろ」

「もういらぬさ。機動力を奪えば、あとはこちらのペースだ」

言葉の通りあとは黜られるのが目に見えている。サドな表情を浮かべながら拳を掲げ、殴る事をひたすらに強調する。

「……ぐ……」

それはどちらの呻き声か。アズマのか？と聞かれればそれはノーである。痛みを食いしばった声と聞かれればイエスだ。

「なっ……正気か!？」

「至って……っ……正気だ。生憎、頑丈なんでな」

目も当てられない足で蹴るなんて正気の沙汰ではない。実際、嘉川義の顔面にヒットした瞬間、視界にブラインドが落ち、意識がシヤットダウンしかけた。なんとか再起動をしてくれたが、もう痛いのかなんなのかも判断できない。

吹っ飛ばしたついでに、足を引きずりながら転がっている槍を拾う。振り返ってもまだ嘉川義は転んだまま。チャンス、と頭の中で閃くが足は動いてくれない。

静まっていた荒波（痛み）が、あれよあれよと騒ぎ始める。不協和音の大合唱。今度こそ意識が途切れ、激痛に囚われてしまおうかと思った。

そのまま囚われてしまえば、手間が省けたのに。どうやら耐性、というか嫌悪感が生まれたいらしい。囚われてたまるか、という自分がある。他人の視線もある手前、意地を張りたくなる。それに見境なしに彼女まで巻き込むかも知れない。

痛みが逆に視界をクリアにしたのか、視線は時計に向く。残りは10分もない。カウントダウン、終わりが近づく。

「さて、残り10分もないな。どうする？いい加減、唯一か赤ん坊が公平な判断を下せよ」

「お前に下してやるよ」

声は力がない。こんな状況だろうと心が決しない。いざ決しようとするれば、脳裏に浮かび上がるのはあの場面。初体験のあの日、存在しない人を殺した日。

認めてしまえば全てが砂の城壁。過去に経験した記憶を思い出せば砂が鉄へと変化し、文字通り鉄壁の前になまぐらの決心は刃が立たない。いつまで迷走しても切れない刃（決心）では、立ちほだかる鉄壁は傷一つつけられない。

「そうだったな、今思えば参加者は一人じゃない、下すのは東だけじゃない。私も　下せるんだった」

最後だけ明瞭とした声で、殺人宣告をする。後ろに振り返って二人の姿を確認する。唯一は大事そうに赤ん坊を抱え、涙を堪えた表情のままこちらを見ている。

逃げる、なんて言えない。それこそ殺人宣告。逃げて、その合間に爆弾は作動、どちらも死ぬ。いや、引き分けはない。なら時間切れになったらどうなる？十中八九、その時は嘉川義が判断する。どちらが絶望を色濃く抽出できるかを秤にかけて。

「う……ああああああっ！！！」

痛みは忘れた。恐怖を覚えた。罪を思い出した。覚悟はある。失う恐怖がある。殺したくない罪悪感がある。三つあるなら、どれとどれを秤にかけて、どう公平に判断すればいい。

時間はない。いや……時間はある。決断は一瞬。切り捨てるのは一瞬。誰を？唯一を？赤ん坊を？嘉川義を？どれを……

間近に迫る彼。左右に揺れては出し抜くルートを探している。ただ如何せんスピードがない。当たり前か、足に火傷を負っていたらだから、簡単にその姿は捕える事ができる。

横っ飛びに、いつもと変わらない感覚で足に力を入れる。なんとか動いてくれたのは最初の一步だけ。そこで何も、宙に浮くのさえも感じなくなってしまった。それでも、なんとか押さえ付ける事ができた。

「っ……ハア……捕まえたぞ……」

「なかなか……危ない発言に絵だな」

「黙れ」

マウントポジションをして傍目からでも優劣は確実。なのに嘉川義の笑みは消えない。何がそんなにおかしい。まさか、本気で殺さないと思っっているのか。

「爆弾を解除しろ」

「……く……かかか。お笑いだな。まだそんな言葉がはけるな

「ら、こちらが優勢だな」
「っ……」

今の発言はいい。失言だった。殺せないと言っている様なものだ。あんな一言でこちらの心の内を見透かされる。

「解除……しろっ！」
「ぐ……かかか……怖い怖い」

厭な音がした。鼻の折れる、それと振り下ろした拳にも同じ音がした。痛みなど疾うに忘れた。それだからこそ殴る。ただ、この笑みを消したいが為に。

「ガフツ……ガツ……」
「時間がないんだ、じゃないと……」
「っ、へー……あと何分だ？」
「……」

「そうか、10分もなかったな。なら10分経てば解放してやるよ」
それはつまり、死んでくれと言っているもので……

「今すぐっ!!!今すぐ爆弾を外せ!!!」

激情させるには十分な起爆剤だった。

「ゲツ……ハツ……私にどうしろと」
「解除しろっ!!!」
「い……断るね」

「っ……どうして……どうしてだ!!!人を殺そうとして、人を殺してなんも感じない!!!」

「安っぽい台詞だ。いかにもガキ臭くて、でも特別だから少しは醜い所がわかるか」

「この、っ」

「くくく、何も感じないのか、ね。私が聞きたいな。どうすれば人を殺して何か感じる？」

「・・・何？」

「どうしたら、罪悪感を感じるのか、どうぞ伝授してくれ」

罪悪感がない。その予想は間違いなく当たっていて、ストーンと落ちる。

「なあ・・・教えてくれよ」

手の平で顔を覆う。泣いているのがみっともなくてそうしている様にも見える。やはり、感情を消失して、苦労しない人はいないらしい。

「嘉川義・・・解除・・・してくれないか？」

温度が下がる。高圧的でない静かな問い掛け。同情する訳ではない。ただ・・・嘉川義の苦労を思うと、時間がないのにも関わらず、どうしても強く言えない。

「くくく・・・やはり特別だな・・・」

「嘉川義・・・」

こんな状態でもなければ笑っていたかも知れない。それほど声は軽く、友好的な雰囲気がある。

「ああ　　嬉しい誤算だよ」

胸の上に手を添えられる。それがどうゆう事か。答えは最初から目に見えている。腕は確かに顔の前で自由になっていたのだから。

「　　ボン（爆破）」

三度目の正直。今度こそ体が動いてくれない。不意打ちな所為もあるが、まるつきりこれは騙し討ちである。

「罪も感じない奴は、嘘をついてもなにも感じない。なかなか楽しい邂逅だったよ、東。また今度、何かを天秤にかけよう」

騙された、と気づいた時にはさすがに腹が立った。仏の顔も三度まで、とも言うが、自分は仏なんかじゃない。寧ろ自分に仏が微笑

んで欲しい。

嘘だと言ってくれよ。あと何分だよ。これはきつと……間違いなんだと。間違いだよな？間違いだと言ってくれよ……嘘だと。

なあ……唯一。

57th「ファーストデート 生か死か」(後書き)

嘉川義に関してはちよつと曖昧だったかな？とは思いますが。罪を罪と思わない非情さを羽織った奴にしたかったんですけどね。前にジャンプでやってたPSYREN(なんで終了しちゃったのかな)、あれの遊坂みたいな性格にしたかったです。

「夜食にサルファマスタードはいかが？」

この台詞には今でも兄と爆笑してます(笑)

あ、もう少しだけ続きますので、すっかり空気の唯一に関して、です。

58th「ファーストデート 最初か最後か」(前書き)

人を助けられなかった時に感じる事は？

怒り？後悔？無力感？遣る瀬無さ？どれも当て嵌まるだろうが、実際には口に出せない。言葉にするなんて痴がましい。ただ、その時に立ち会ったのなら、立ち会ってしまったのなら、思わずにはいられないだろう。

58th「ファーストデート 最初か最後か」

胸を焦がしていた感触が闇の中でも残っている。何に憤慨していたのか、何に必死になっていたのか、一体何に……

目覚めれば思い出す。だから最初で最後のお願ひ。このままもう少し惰眠に包まれない。それに、何故かこれ以上思い出したくなかった。ただ、それは叶わない事で目が覚めれば思い出すなら……忘れたくない思いがここにある。

声が聞こえる。

安否を訴える、起こそうとする声が聞こえる。自分が誰とかはとうでもいい。一瞬の記憶喪失みたいなものだから、しかし本質は変わらない。このあまりにも心配の度合いが大きい声を、少しでも早く安心させてやりたかった。

「アズマツ!!!」

最初に目に映ったのが三人の顔。皆が皆張り詰めた顔をしていて、
なんだか申し訳ない。

「ヒ・・・イロ?それに一季・・・ファルも・・・」

ちゃんとした返事をした所為か、物凄く破顔している。一季のそ
んな顔とか激烈似合わない。一体何をそんなに慌て・・・て・・・
・

985

横にしていた体を持ち上げて縦にする。痛みを訴える、目も当て
られない左腕も、右足も、胸も、そんな些細な事さえも上書きする
惨事を思い出した。そう・・・思い出した、全部。

嘉川義に会い、爆弾を取り付けられた唯一を助けようとして、騙
し討ちをくらい意識を失った。

そのあと・・・そのあとはどうした、どうなった。そもそも今は、
あれからどのくらい経った。

途切れる前の記憶を頼りに、およそ唯一がいるであろう方に視線を動かす。聞こえるのは咽むせび泣く赤ん坊と・・・

「・・・唯一・・・？」

地に伏せる彼女の姿がいた。

それを事実とは思えず、

間違いなく事実だ。

嘘だと頭は思いたい。

間に合わなかった。

ただただ疑問を重ねても、

認めてしまえばいい。

あれは事実だと全身が認める。

あれは事実だと漸く解った。

「そんな・・・おい・・・こんなの・・・」

黒く変色した足は、例の回復力によりなんとか痛みを感じる程度にはなっている。その程度には回復しているが、歩き方は生まれたての馬の様に足元が覚束ない。

「……ゆ……い……」

血の海に漂いながら号泣する赤ん坊。それが何を物語るのか。

一つ目は、誤作動なく嘉川義の爆弾は作動したこと。唯一の肩、首に近い部分が一部、ごっそりなくなっている。

二つ目は、赤ん坊の爆弾は作動しなかったこと。首元に歪な機械はない。

三つ目は、この出血量では助からないということ。既に血の海、誰がどう見ても助かる方に手は挙げない。

血の海に膝をつけると、なんとも言えない　　ばしゃりとも、ぬちやりとも表現できない音が身を包む。唯一の肩にそつと手をかけ、俯せから仰向けの状態にする。彼女の体は……まだ仄かに熱があった。

「……あ……あずま………くん……?」

焦点の合わない瞳。生気のない声。血の気のない顔。死が足音を立てて、唯一の命を搔つ攫おうと近づくのがわかる。

それをどう遠ざけよう奮闘しても、群をなして唯一だけを攫う死を躲す事はできない。できない(……)、それは結末を受け入れてしまったと、理解してしまったという事になる。そんな直感が恨めしい。

「だ……駄目だ、死ぬな、死んじゃ……駄目だろ………
こんな……こんな……」

別れの悲しみなんてわからない。理解できる筈も、許容できる筈

「楽し・・・かった・・・ですよ・・・初デート・・・」
「ああ・・・」

「・・・また・・・行きたいです・・・」

「・・・そうだな・・・だから・・・」

「でも・・・最初で最後・・・でしたね・・・」

「さ・・・最後なんて言うなよ。最初で最後なんて、もう一回・・・だから・・・できない・・・よな・・・」

彼女はまた微笑む。穏やかで、温かみのある、まだそんな顔で笑ってくれる。

「まだ・・・キスも・・・してません・・・」

頬を赤くしながらそんな事を呟く。初めて言われたお願い。だが、恐らくでもなく最後のお願い。

「キス・・・する・・・?」

「・・・聞かないください」

赤くなつた頬は留まらず、耳まで赤くなる。そんな気がする。依然として彼女の顔は青い。それでも照れる様に、恥ずかしがる様に顔を背ける仕草がそう思わせる。

同情ではなく本心から、勢いではなく冷静な状態で、彼女の唇に近づいていく。彼女は目を閉じてその瞬間を待つ。

「・・・」

重ねた唇。ただ触れただけの、妙に緊張もせず、冷静なまま彼女の唇に触れた。初めてのキスはどうか、初めてのキスはこうだとかそうゆう感想は述べられない。そんな事は・・・話せない。

「・・・・・・・・唯一・・・・・・・・？」

短い時間だった気がする。唇に触れた時間は一瞬で、しかし鮮明に唇はその感触を覚えている。そんな短い、余韻さえも、互いの唾液でさえも唇の上で渴いていない。そんな・・・短い時間だったのに・・・

「・・・・・・・・なあ・・・・・・・・こうゆう時・・・・・・・・どうすれば・・・・・・・・いいかな？」

手の温もりは残っている。たった今までそこにあった温もりが残っている。唯一の目は閉じたままだ・・・幸せそうな顔をして。

「泣けない・・・・・・・・全然悲しく・・・・・・・・ない・・・・・・・・」

右手を背中に回して彼女の体を支えている。左手で手を握っていたが何を思ったか、未だ触れるだけで激痛が走る胸に爪を食い込ませている。

「アズマ・・・・・・・・やめろよん」

「泣けたら・・・・・・・・いいのかな・・・痛みの涙も、涙だよな」

「やめろ・・・・・・・・そんな事をしても違う涙だ」

「ぐ・・・・・・・・か・・・・・・・・はっ・・・・・・・・」

「やめろっ！！！！そんな事をしても八坂さんの為の涙じゃない、そんなの流しても意味がない！！！！」

痛みに作用された涙では彼女に流す涙ではない。涙に込められた

意味を理解しようとするならそれは意味がない。それは・・・そんな事はアズマ自身にもわかっていて。わかっている。心はどうしようもなくざわつく。

「アズマ・・・」

「・・・一季の言う通り・・・だな。意味がない」

どんなに強がった様に見せても顔は変わらない。張り詰めていて何かを堪えていて、自分に対する怒りで奮闘していて、覚悟のなかつた自分を責めていて。人を殺す事を是とするのを良しとは思われない。ただ、あの時だけ・・・他人の命を奪われるなら、守るなら、他人の命を奪う事を許したかった。

覚悟なんてあつてない様なもの。こんな力でも人を守れるのだと思いがつたツケ。教訓として、トラウマとして、次ある時に許せるよう。これは・・・戒めとして。

「・・・今日・・・思ったんだ」

「・・・何をだん？」

「悲哀は二の次にして、江湮を眠らせてるヤツだけを殺そうって、そう思ってた」

「それで・・・何を思ったの？」

「やっぱり、悲哀は取り返したい。そうして、全部取り戻してから、江湮の為に、唯一の為に泣きたい」

「アズ・・・」

「だから、これを忘れたくないから・・・この思いだけは誰にも言わない」

それはどんな思いか。感謝か、痛みか、普通な好きか、それとも虚無感か。どれを糧として忘れないかは、アズマにしか知らない。言うべき人さえもない。

「・・・お前だけでも・・・生きててよかった」

助けたとは言えない。不幸の下に巻き込まれ、不幸の下に死にかけ、不幸の下に助かった。悪運とも言つべきだろうが、名も知らぬ赤ん坊は勝手に助かったただけだ。

泣き声も掠れ、咳込みながらもまだ命を声に出して泣く。あまりにも泣きすぎて脱水症状になってないかが心配である。

「一季、頼んだ」

「別に・・・いいけどよん・・・」

「・・・なんかしたのか・・・？」

「大丈夫かなん・・・てなん」

「一季が心配するか、似合わねえな。でも大丈夫だ。囚われたりはしてないから」

そうかん、と返事をするもまだ納得のいかない顔である。それはそうだ。先の先まで動揺し、考えつく限りの言葉で全てを否定した。そんな人が今度はころつと心変わりし、全てを受け入れられるか。

ありえはしない、そんな事は。どうしても、心のどこかで腑に落ちない、自分を許せない部分があるに違いない。だから、一季はそれを懸念していて、だから一季は怖く感じている。しかし今は、様子を見ているしかできない。

「裏から出た方がいいわ、正面から出たら間違いなく犯人扱いよ」

「といつても唯一を担いだ状態じゃ、そんなもんは関係ないかもな」

「それは・・・・・・何か言い訳を考えるわよ」

「そうか」

先程からアズマの意識はここに在らず、だ。ざわつく心を押し殺す為の処世術、無関心を装う事で事実に堪えている。もしくはそうしなければとてもじゃないが耐え切れない。しかし、抱え込むだけが全てではない。でなければ破裂ししまうのがオチだ。そうだとしたらどうやって発散する？

緋色にも、一季にも、ファルにも、もちろんアズマ自身にも、吐き出せる行動があるなら既に試している。今はそれが無いから、今は誰も 何も言えない。

「・・・アズマ、疲れてない？背負うのかわる？」

「いい、疲れてるけど・・・これだけはかわってやれない。これは・・・俺の役目だ」

アズマの服は自分の血と唯一の血で派手に色づけされている。紅一色の派手さ。目を引くとなれば、そう思わずとも目を引く。染み付いた臭いは、染み付いたシミは取れる事はない。

後日、思い出のまま色褪せない唯一の笑顔を映した遺影が飾られた。午後に行われた告別式、本当に彼女は死んだ。死んだんだ。周りの環境は変わり、学校では彼女のいた机の上に花が置かれた。

溜息をつきたくなったその日。自分は認めなくても周りには認め、そのうち自分だけが取り残されてしまう。下手な強情は意味がない。一人にしか見えない幻覚は、どんなに言い触らしても認知されない。頭がいかにしているとしか世間は見ない。

取り巻く環境が嫌でも教えてくれた。だんだんと、受け入れられずにいた心の一部は観念していく。それで募るのは悲しみが消えた穴ではなく、やはり言葉にはできない感情である。

告別式の日に唯一の両親と話した。無論泣いていて、悲しみを顯わにしながら話した。自分は話した、淡々と、悲しみをおくびにも出せずに。

その内容は唯一の最期についてだった。「笑っていた」と伝えると、手にしていたハンカチを更に濡らしながら泣いた。

喪服は何故黒いのか、と疑問に思った事はない。こうして参列するなど今までにない経験だから。でも思わずにはいられなかった。何故黒いのかは 何となくわかった。

唯一の父親に握られているハンカチ。濡れて、色がどことなく暗い。布は水分を吸い取ると色合いが暗くなる。だからこんなにも喪服は黒い。涙で濡れたから、親族の涙で濡れたから、喪服はこんなにも暗く 黒い。

「・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・」

何度目の溜息だろうか。つきたくもなる、皆が同じ事を聞くのだ

から。口々に『泣いてあげないんだな』とか『本当に好きだったのか』とかそうゆう類いの事を聞いてくる。

その度に相手が想像しているであろう返事をする。何の感慨も浮かべずに、言葉だけの返事だ。それに納得するかしないかは別として、気落ちして納得する人が多い。気落ちしたいのはこちらだといふのに。

「ちよつといいかな？」

告別式が行われた敷地内の角で燻っていたら、警察手帳を突き出されながら話し掛けられた。まず思ったのが当たり前かという諦めと、感情的に面倒さが漂った。

「今日は友達はいないのかな？」

確かに緋色達は参列していない。アズマだけには権利がある、と背中を押された。そんな訳だが気になるのはそれじゃない。そこまですで、交友関係まで知っているこの男が気になった。

見た目はぱりつとしていて、だが下に着込んでいるシャツの袖が黄ばんでいる。大部分はきちんとしているが、細かい部分は疎からしい。髭の剃り残しがあったり、髪は少し寝癖がついている。こんな日だから大急ぎで身形だけは整えた、みたいな印象である。

顔はいかにもなベテラン刑事の雰囲気がある。事実そうなのだろう。あんな細かな情報まで調べ上げているのだ。多分、聞きたいのは遊園地の事件についてだろう。まだそんなに日は経っていないのに、結構込み入った事まで調べていそうだ。

「話は遊園地の事についてですか？」

「おや、それなら話が早い。立ち話もなんだし、きみの判断に任せ
るが暑まで来てくれないかな？」

「わかりました、おじさん」

「おじさんはよしてよ、おれの名前は篠山さひやま 勝志まさしだ」

「わかりました、篠山さん」

「・・・自己紹介はしてくれないのかな？」

「必要ありませんよね。もう既に調べてるんでしょう」

がっかりした様に顔を上げて、肺に溜まった空気を吐き出す。ど
んな思惑があつたか知らないが、行くなら早くして欲しい。

「ところで行くなら歩くのはよしてください。夜道が怖いんで」

「了解した、それじゃ乗ってくれ。特等席を用意するから」

側に駐車していた車に乗り込み、普段はない感覚に戸惑いかける。
滅多に車など乗らないから、そして助手席だとなおさらである。浮
かれているのかも知れない。とまあ、少し張り詰めていた感情を和
らげるにはいい機会だろう。

「・・・どうした？あんまり車に乗らないからちよつと興奮してる
の？童心はいやはや羨ましいね」

「そんな事まで調べてるんですね、さすがに大人心は子供心をいじ
めるのが好きなようで」

「そんな堅くならなくてもいいよ、いつもは他人行儀じゃなさそう
だし」

「初対面ですからね、一つの処世術ですよ。人間誰しも無害に思わ
れたいですから」

「思ったより元気なんだね。もしかしていつまでも悲しんでいられ
ないから、とか言う空元気かな」

「そんなもんですよ」

本当の事など言えない。話したところで幻覚、嘘として捉えるのが妥当だ。込み入った事まで調べても、そこまで知っていると限らない。

「それで、話つていうのは何ですか？」

「さつきも東広君が言った様に、遊園地の事についてだが、もう少し落ち着いた場所で話そう。これはきみのトラウマに触れる件だからね」

「・・・・・・・・」

車中で囚われたらさすがにまずい。トラウマとしては確実で、話を始めたら押し殺せるかどうか不明。それで暴れたら今度は交通事故で刑事さんに世話になりそうだ。

「篠山さんには家族がいるんですか？」

「息子と娘が一人ずつ、けどどうゆう仕事人間だからね、家の事は妻に任せつきり。これじゃ捨てられるのも時間の問題かもね」

「随分と気楽ですね」

「こうでもないと言っていけないから。日々の肉体労働は精神をも削るってね。余裕を持たないと」

「・・・・・・・・ふーん」

「ところで大丈夫なの、この話は？東広君には・・・・・・・・その・・・・今更いない事をどうとは言いませんよ。楽しい家ですから」

急に言い淀むと思えば、少しはプライバシーを気にするらしい。個人情報を調べ上げてるのに、変なところで謙虚だ。

「まあそれはともかく、着いたよ。時間の方は大丈夫かな？」

「本当に今更ですね。でもそれはお構いなく。今日は家に三人共居ますから、という訳でちよっと連絡いれます」

許可をもらい、携帯で緋色に連絡をいれる。驚いた様子だったが、心配はいらないと丸め込み夕飯を頼んだ。多分、本当に心配はいらない。

「それじゃいいですよ、どこからでもかかってきてください」
「じゃまずは腹拵えね。警察署で食べるカツ丼は美味しいよー」

笑いながら案内された部屋はそんなに堅苦しくはない。見張りもないし、一対一の話と誇張表現は不要。事情聴取でもないのだから。

「ほい、これはきみの分。沢庵もあるけどどう?」
「もらっておきます」

どうやら食べながらの話らしい。カツ丼と一緒にいろいろとレポートが机の上に乗せられる。

「遊園地の事、と言ってもきみを犯人と疑ってる訳じゃない。ましてや殺人犯ともね。使われたのは爆弾で、きみはそんな物騒なものは所持していなかった。巻き込まれたみたいだけど怪我の方は?」
「快調ですよ、知り合いにいい医者がいいますから」
「そう?ならいいけど、お疲れの样にも見えるからね」
「あんな事があって気に病むのは当たり前です。でも、大丈夫ですから、いい医者がいると言ったでしょう」

蓼さんの事である。爆破された部分を見せたら叩かれたが、医者としては不安なのだろう。お節介が過ぎる。

「その・・・遊園地でデートの途中、そこで爆破事件が起こり、唯
「さんも巻き込まれ 死亡。遺体は東広君が運んだらしいね」

「・・・・・・・・」

「やっぱり帰る？物凄く決ってからもなんだけど」

「気にしないでください。トラウマなのは認めますけど、そう簡単に
錯乱はしませんから」

「辛くなったら教えてね」

唯一を運んでたらやはり注目的となった。それから車で唯一は
家族の下に運ばれたらしい。らしいというのは別れたからだ。いく
ら強がってもどす黒く変色して手足や胸は隠せない。どうにも目立
ち病院へ。あそこで警察に連行されなかったのは奇跡、いや日頃の
行いとしておこつ。

「で、聞きたいのはこつからなんだけど・・・東広君、事件解明に
協力する気はある？」

「つまり、犯人を目撃してないか、つて言いたいんですか？」

「そうなんだけどね」

ここはと言えばいいだろうか。事実を話してしまえば見た、と
いうか話したし殺し合いもした訳だが、それこそ話しがややこしく
なる。見てないとハツタリをすればそれで済むのだが、この人に隠
し通せるかどうか。

眼光は鋭く、しかし思えば俺が隠すとも思わないだろう。犯人に
は怨恨がある。捕まえて欲しいと思っっている、と解釈しているだろ
う。話してもいいが、元を正すとややこしくなる。そうゆう事は避
けて、目撃した事だけを話せばややこしくはならないだろうか・・・。

「どうなのかな？」

「・・・自分も逃げるのに必死でして、それに誰が犯人だかもわからないんですよ」

「そう？こうなんか見るからにいかれている人とか、愉快犯みたいなのはいなかった？あの怪文書からして自分の姿を知らしめそうなんだけど」

「怪文書？」

それについては知らなかった。嘉川義の奴、事前にそんな事をしたたのか。なんだか墓穴を掘ってへマをしそうだ。

「確かにそんな人は見かけた気もしますが、爆発が起きて取り乱さないのは厳しいかと思えます。怪我もしてましたし」

「そうだよ、シヨックで必死。人の顔も詳細に見れるかどうかも怪しい。記憶に偏りが出ても困るし、けど名前ぐらいは知らない？」

「嘉川義、とか言ってみましたけど、今思えば偽名の可能性もなくはないですよ。本名を曝すとも思えないですし」

「まあそうだね、とりあえず、犯人については名前だけ、と。ともかく、何か思い出したら教えてよ。今日はこれ以上の事は聞かないから、きみの精神状態も考慮しないとね」

「力になれなくてすみません」

実際、精神状態を追求するとかかなりヤバイ。嘉川義の顔を思い出すだけで腸が煮え繰り返りそうだし、唯一の事を聞かれると鎮座している感情がざわめく。これ以上話をしないのはありがたい。

「あ、あともう一個。明日も来てもらうから」

「なんでですか？」

「きみが助けた赤ん坊の親がね、是非お礼をしたいらしいんでね。」

学校が終わったなら迎えに行くから」

「あれは助けたなんて言いませんよ。勝手に・・・助かっただけです」

「過程はどうあれ、助けたのは事実なんだ。その時立ち会ったのがきみなら、厚意は喜んで受け取るよ」

「・・・わかりました、また特等席をお願いします」

「カツ井は出さないよ」

話しながらもカツ井は無事に食べ終え、言われた通り美味かった。もう少しがちがちの取調べだったら美味しくなかっただろうが、そもそもカツ井が出るかさえも怪しい。とりあえず、明日も明日でここに来るのだ。言い得て妙だが、少しは感情が和らいだ気もする。

帰日も篠山さんの厚意で送ってもらったが、何かと口が軽い人だ。刑事としては口が軽いのはどうかと思うが、人としては好感が持てる。個人の感想だが、いろんなタイプの人が出ていいと思う。そんな堅物しかいないのはつまらないだろうし。

「　　ただいま」

「アズ！」

ドアを開けると腹に突っ込んでくるファル。相変わらずの威力で、かといって腹筋に力を入れるとファルが痛いだろうから慣れるしかないのは厳しい。

「っ、と緋色と一季は？」

「帰った」

「そっか」

多分ぎりぎりまでいたのだと思うが、それぞれの生活がある。明日も学校だし、最近は散策の話はしない。気遣ってもらっているのはわかる。二人はまだ、俺の事が心配でたまらない。そういう事だ。

「晩飯は何を食べたんだ？」

「鍋、豆腐」

「アズは？」と聞かれカツ丼と答えたが、イマイチわからないらしい。今度食べさせてやるとして、今夜はそれで幕を閉じる。歯を磨き、明日の準備をして就寝したが、眠りたくはなかった。それはいつもの事で、あれから毎日、一層眠りを拒否する様になった。もちろんちゃんと眠れた日は皆無と言っていい。

寝たら、眠りに落ちてしまったら、夢を見てしまう。とてもじゃないがまともな夢なんか見れはしない。

新たに加わった悪夢は古参のそれよりも鮮明で、強力で、簡単に精神を瓦解させ、簡単に眠りから目覚めさせる。

毎晩こんな事が続くとなると、疲れていないなんて事はありえない。気に病むとか言うレベルでもない。これは明らかに自分で自分を殺している。

「・・・これは・・・蓼さんに相談するしかないか・・・」

何度目の起床だったか、そんな事を呟く。あの人が心の病に関してセラピーを行っているかは別として、聞いて損はないと思う。叩かれるかも知れないが、その時はその時だ。友達に話してどうこうなるものでもなさそうだし。

しかし不覚にも、トウマならなんて導くかな、とってしまった。これではトウマに会いたがっているとしたか思えない。意味もわからず無性に腹が立ってきた。

ともかく明日また考えよう。

「アズマ・・・大丈夫？疲れている様に見えるけど・・・」

放課後、緋色達と別れる手前でそんな事を緋色に言われた。隠し通せるものでもないが、余計な心配もかけたくない。濃厚な疲労の色を見て、で三人が思い浮かべるのはあの件についてだろうから。

「本当に大丈夫なの？」

「多分。駄目なら今度・・・蓼さんの所でカウンセリングでも受けようかな」

「冗談を言ってる場合じゃないよん。本気で、大丈夫かと言ってるんだけどん」

「・・・それぐらいはわかる。でも、悩むか進むか、どっちかしかできない」

三人が心配しているのはわかる。つまらないプライドでどうこう言うつもりもない。わからないから、どうすればいいかパニックになっているから、どうしようもできない。その中で、一つだけは決めた事はある。

「ファルは先に家に帰るか、緋色達を待つか、どっちにする？」

「ヒイロ、イチ、待つ」

「わかった、とりあえず鍵は預けておく」

「了解」

「んじゃ、行ってくる。部活、頑張れよ」

どうやっても隠せはしない。不安な事も、囚われる寸前な事も、崖っぷちな事も。些細な動作に留めているがその些細な動作でばれしてしまう。俺が緋色達を見てわかる様に、緋色達も俺を見て悩みを抱えているのがわかる。関わった人が死んだ穴とは、途方もなく大きいモノだ。

「待たせましたか？」

「いや、大丈夫だよ。あの子達が東広君の親友かな？」

「そうですねよ、いい親友です。篠山さんにはいるんですか？」

「たくさんいるよ、両手じゃ数え切れないくらい」

「捕まえた人、とか言わないでくださいよ」

「ありや、ばれたかな」

無理な作り笑いならベスト。失うものが多過ぎるのは困りものだが、それでも傷心中なのを装おう。本当に、二度とあんな事は最後にしたい。そうして　泣いてやる。

58th「ファーストデート 最初か最後か」(後書き)

さてはてこうしてファーストデート編は幕を閉じます。それはそうと告別式やら警察の事情聴取やら知識が少ないので、ほとんど独自解釈です。不自然な点だと思ったり、間違いがあるなら教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3394m/>

虚な胸中

2012年1月9日00時49分発行